

金の尾遺跡
無名墳(きつね塚)

山梨県中央自動車道
埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書

1987. 3.

山梨県教育委員会
日本道路公団

金の尾遺跡 無名墳(きつね塚)

山梨県中央自動車道
埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書

1987. 3.

序

本報告書は、中央自動車道建設に先立ち発掘調査された一連の遺跡のうち、1978年度に実施した金の尾遺跡と無名墳（きつね塚）の2遺跡について、調査の結果をまとめたものであります。

金の尾遺跡は、中央自動車道西宮線の甲府昭和インターチェンジと韭崎インターチェンジの中間、甲府昭和寄りの山梨県中巨摩郡敷島町大下条にあって、秩父山地に源を発し甲府市西部を南流して笛吹川に合流する荒川の扇状地末端に位置しております。

調査面積はおよそ8,000㎡、発見された遺構は縄文時代前期終末の住居址1軒、同中期中葉の住居址6軒、中期終末の住居址2軒、弥生時代後期の住居址32軒、弥生時代の方形周溝墓、円形周溝墓17基、さらに縄文～弥生時代の土壌など多数に及び、またこれらの遺構やその周辺からは各時期の土器や石器など遺物も大量に出土いたしました。縄文時代の甲府盆地の遺跡としては出土品も豊富ですが、弥生時代の大規模な集落址が発掘されたことが、最も大きな成果でした。甲府盆地内部でこうした大規模な弥生時代の集落址が発見されたのはもちろん初めてで、しかも墓域と居住地とが分かれており、集落がV字溝によって上記2群に区切られている様子は、当時の集落の形態を推定する貴重な資料を提供するものであります。また、出土した土器には、長野県北部に分布の中心を持つ箱清水式土器の強い影響を受けたものが多く、一部に東海・駿河地方の土器が混じるなど、周辺地域からの文化の流入を如実に物語る好資料でもあります。

無名墳（きつね塚）は金の尾遺跡の北西、北巨摩郡双葉町の赤坂台地上にある後期古墳の一つです。かつて、台地上には多くの古墳群があったといわれますが、今は数えるほどしか残っておりません。本墳から出土した鉄鏃・玉・紡錘車などや横穴式石室の構造は、同台地上にあった二ツ塚古墳・竜王2号墳・同3号墳と類似しており、これら古墳群を築造した勢力を想定する上で貴重な資料を提供しております。特に近時、同じ調査者によって敷島町天狗沢窯址から白鳳時代の鎧瓦が発見され、これら古墳群の存在が再認識されるに至りました。

以上、2遺跡いずれも重要な意義を持ちますが、特に金の尾遺跡は本県の弥生時代を代表する遺跡として、発見当初から注目を受けて参りいただけに、このたび、本報告書の完成によって、その全容が明らかとなった意義は大きいと存じます。より多くの方が研究資料として本書をご利用下さいませよう念じてやみません。

末筆ながら、ご協力を賜った関係機関各位、並びに直接調査に当たられた方々に厚く御礼申し上げます。

1987年3月

山梨県埋蔵文化財センター

所長 磯貝正義

例 言

1. 本書は、山梨県中巨摩郡敷島町大下条字金の尾に所在する金の尾（かねのお）遺跡及び北巨摩郡双葉町下今井に所在する無名墳（きつね塚）の発掘調査報告書である。
2. 本事業は中央自動車道建設に先だって、日本道路公団より委託を受けて実施した発掘調査で、発掘調査は昭和52・53年度、整理報告書作成は57年度より61年度の間に実施した。
3. 本報告書の作成には、文化財主事末木健、新津健、米田明訓があたり、執筆及び編集は末木が行った。ただし、IV章第2節は長沢宏昌が執筆した。
4. 写真撮影は発掘作業中の遺構等を末木、新津が行ない、遺物は末木が行った。
5. 石器の材質は山梨文化財研究所第6研究室長河西学氏の鑑定による。
6. 本報告書にかかる出土品、記録図面、写真などは山梨県埋蔵文化財センターに保管してある。
7. 発掘調査及び報告書作成にあたって、下記の方々より御協力をいただいた。記して謝意を表します。

笹沢 浩、服部敬史、敷島町教育委員会、双葉町教育委員会、日本航空学園

凡 例

1. 挿図の遺構平面図中にPoを冠した数字は、各遺構より出土した土器Noであり、出土遺物挿図のNoと一致する。
2. 土器でスクリーン・トーンが貼って有るものは、赤色塗彩された部分である。
3. 石器で条線スクリーン・トーンが貼ってあるものは磨かれているものであり、ドットスクリーン・トーンの部分は擦られている部分である。
4. 遺構中の焼土はドットスクリーン・トーンで表示している。

かねの尾遺跡

目 次

第Ⅰ章 調査状況	1
第1節 調査に至る経過	1
第2節 調査組織	1
第Ⅱ章 遺跡概況	1
第1節 位置	1
第2節 地理的・歴史的環境	1
第Ⅲ章 遺構・遺物	5
第1節 住居址	5
第2節 周溝墓	143
第3節 柱列・溝	170
第4節 特殊遺構	184
第5節 土壌	191
第Ⅳ章 まとめ	279
第1節 縄文時代	279
第2節 底部圧痕	280
第3節 弥生時代	283
土器	283
第4節 16号住居出土炭化米について	291
第5節 弥生時代住居について	293
おわりに	297

挿 図 目 次

第1図 金の尾遺跡位置図…………… 2	第34図 12号住居址平面図…………… 29
第2図 金の尾遺跡全体図…………… 3～4	第35図 12号住居址出土土器…………… 30
第3図 1号住居址平面図…………… 5	第36図 13号住居址平面図…………… 31
第4図 2号住居址平面図…………… 5	第37図 13号住居址出土土器(1)…………… 32
第5図 1、2号住居址出土土器…………… 6	第38図 13号住居址出土土器(2)…………… 33
第6図 2号住居址出土土器…………… 6	第39図 13号住居址出土土器(3)…………… 34
第7図 3号住居址、1号溝平面図…………… 7	第40図 14号住居址平面図…………… 35
第8図 3号住居址出土土器(1)…………… 8	第41図 14号住居址出土土器…………… 36
第9図 3号住居址出土土器(2)…………… 9	第42図 15号住居址平面図…………… 36
第10図 4号住居址平面図…………… 10	第43図 15号住居址出土土器(1)…………… 37
第11図 4号住居址出土土器(1)…………… 11	第44図 15号住居址出土土器(2)…………… 37
第12図 4号住居址出土土器(2)…………… 12	第45図 16号住居址平面図(1)…………… 38
第13図 5号住居址平面図…………… 13	第46図 16号住居址平面図(2)…………… 39～40
第14図 6号住居址平面図…………… 13	第47図 16号住居址出土土器(1)…………… 41
第15図 6号住居址出土土器(1)…………… 15	第48図 16号住居址出土土器(2)…………… 42
第16図 6号住居址出土土器(2)…………… 16	第49図 17号住居址平面図…………… 43
第17図 6号住居址出土土器(3)…………… 16	第50図 17号住居址出土土器(1)…………… 44
第18図 6号住居址出土土器(4)…………… 17	第51図 17号住居址出土土器(2)…………… 44
第19図 6号住居址出土土器(5)…………… 18	第52図 17号住居址出土土器(3)…………… 45
第20図 7号住居址平面図…………… 19	第53図 18号住居址平面図…………… 46
第21図 7号住居址出土土器(1)…………… 20	第54図 18号住居址出土土器(1)…………… 47
第22図 7号住居址出土土器(2)…………… 20	第55図 18号住居址出土土器(2)…………… 48
第23図 7号住居址出土土器(3)…………… 21	第56図 19号住居址平面図…………… 49
第24図 8号住居址平面図…………… 22	第57図 19号住居址出土土器(1)…………… 50
第25図 8号住居址出土土器(1)…………… 23	第58図 19号住居址出土土器(2)…………… 50
第26図 8号住居址出土土器(2)…………… 24	第59図 20号住居址平面図…………… 51
第27図 9号住居址平面図…………… 25	第60図 20号住居址出土土器(1)…………… 52
第28図 9号住居址出土土器…………… 25	第61図 20号住居址出土土器(2)…………… 53
第29図 10号住居址平面図…………… 26	第62図 21号住居址平面図…………… 54
第30図 10号住居址出土土器(1)…………… 27	第63図 21号住居址出土土器(1)…………… 55
第31図 10号住居址出土土器(2)…………… 27	第64図 21号住居址出土土器(2)…………… 56
第32図 10号住居址出土土器(3)…………… 28	第65図 22号住居址平面図…………… 56
第33図 11号住居址平面図…………… 29	第66図 23号住居址平面図…………… 57

第67图	23号住居址出土土器(1)·····	58	第103图	34号住居址出土土器(2)·····	89
第68图	23号住居址出土土器(2)·····	58	第104图	35号住居址平面图·····	89
第69图	23号住居址出土土器(3)·····	59	第105图	35号住居址出土土器(1)·····	90
第70图	23号住居址出土土器(4)·····	60	第106图	35号住居址出土土器(2)·····	91
第71图	23号住居址出土土器(5)·····	61	第107图	36号住居址平面图·····	92
第72图	24号住居址平面图·····	62	第108图	36号住居址出土土器(1)·····	93
第73图	24号住居址出土土器(1)·····	63	第109图	36号住居址出土土器(2)·····	94
第74图	24号住居址出土土器(2)·····	64	第110图	36号住居址出土土器(3)·····	95
第75图	25号住居址平面图·····	65	第111图	37号住居址平面图·····	96
第76图	25号住居址出土土器(1)·····	66	第112图	38号住居址平面图·····	96
第77图	25号住居址出土土器(2)·····	67	第113图	38号住居址出土土器(1)·····	97
第78图	26号住居址平面图·····	68	第114图	38号住居址出土土器(2)·····	98
第79图	26号住居址出土土器(1)·····	68	第115图	39号住居址平面图·····	98
第80图	26号住居址出土土器(2)·····	69	第116图	39号住居址出土土器(1)·····	99
第81图	27号住居址平面图·····	69	第117图	39号住居址出土土器(2)·····	100
第82图	27号住居址出土土器·····	71	第118图	40号住居址平面图·····	101
第83图	28号住居址平面图·····	72	第119图	40号住居址出土土器(1)·····	102
第84图	28号住居址出土土器(1)·····	72	第120图	40号住居址出土土器(2)·····	103
第85图	28号住居址出土土器(2)·····	73	第121图	1号周溝墓平面图·····	144
第86图	29号住居址出土土器(1)·····	74	第122图	2号周溝墓平面图·····	145
第87图	29号住居址平面图·····	75~76	第123图	2号周溝墓壺出土状态·····	145
第88图	29号住居址出土土器(2)·····	77	第124图	1, 2, 3号周溝墓出土土器·····	146
第89图	30号住居址平面图·····	78	第125图	3号周溝墓平面图·····	147
第90图	30号住居址出土土器(1)·····	79	第126图	4号周溝墓平面图·····	148
第91图	30号住居址出土土器(2)·····	79	第127图	5号周溝墓平面图·····	149
第92图	31号住居址平面图·····	80	第128图	5号周溝墓壺出土状态·····	149
第93图	31号住居址出土土器(1)·····	80	第129图	4, 5号周溝墓出土土器·····	150
第94图	31号住居址出土土器(2)·····	81	第130图	6号周溝墓平面图·····	151
第95图	32号住居址平面图·····	81	第131图	7号周溝墓平面图·····	152
第96图	32号住居址出土土器(1)·····	82	第132图	7号周溝墓土器出土状态·····	153
第97图	32号住居址出土土器(2)·····	82	第133图	8号周溝墓平面图·····	153
第98图	33号住居址平面图·····	83~84	第134图	9号周溝墓平面图·····	154
第99图	33号住居址出土土器(1)·····	85	第135图	9号周溝墓土器出土状态·····	155
第100图	33号住居址出土土器(2)·····	86	第136图	7, 9, 11号周溝墓出土土器·····	156
第101图	34号住居址平面图·····	87	第137图	9号周溝墓出土土器·····	157
第102图	34号住居址出土土器(1)·····	88	第138图	10号周溝墓平面图·····	158

第139図	10号周溝墓土器出土状態……………	159	第175図	土壇出土土器(3)……………	205
第140図	11号周溝墓土器出土状態……………	159	第176図	土壇出土土器(4)……………	206
第141図	11号周溝墓平面図……………	160	第177図	土壇出土土器(5)……………	207
第142図	12号周溝墓平面図……………	161	第178図	土壇出土土器(6)……………	208
第143図	13号周溝墓平面図……………	162	第179図	土壇出土土器(7)……………	209
第144図	14号周溝墓土器出土状態……………	162	第180図	土壇出土土器(8)……………	210
第145図	14号周溝墓平面図……………	163	第181図	土壇出土土器(9)……………	211
第146図	15号周溝墓平面図……………	164	第182図	土壇出土土器(10)……………	212
第147図	16号周溝墓平面図……………	164	第183図	土壇出土土器(11)……………	213
第148図	13,14,16号周溝墓出土土器……………	165	第184図	土壇出土土器(12)……………	214
第149図	1,3,5号周溝墓出土土器……………	166	第185図	グリッド等出土土器1(縄文早・前期)	215
第150図	6,7,8,9号周溝墓 出土土器……………	167	第186図	グリッド等出土土器2(縄文中期1)	216
第151図	9,10,11,8号周溝墓 出土土器……………	168	第187図	グリッド等出土土器3(縄文中期2)	217
第152図	14,15,16号周溝墓出土土器……………	169	第188図	グリッド等出土土器4(縄文中期3)	218
第153図	17号周溝墓平面図……………	169	第189図	グリッド等出土土器5(縄文中期4)	219
第154図	1,2号柱列、13号溝平面図……………	176	第190図	グリッド等出土土器6(縄文中期5)	220
第155図	2,3,5,7号溝平面図……………	177	第191図	グリッド等出土土器7 (縄文中期6～後期)……………	221
第156図	6号溝実測図……………	179～180	第192図	グリッド等出土土器8(弥生中期) ……	222
第157図	12号溝実測図……………	179～180	第193図	グリッド等出土土器9 (弥生後期～土師)……………	223
第158図	14,15号溝実測図……………	181～182	第194図	グリッド等出土土器10……………	224
第159図	12溝出土土器……………	184	第195図	住居出土石器(1)……………	227
第160図	特殊遺構(1)……………	185	第196図	住居出土石器(2)……………	228
第161図	特殊遺構(2)……………	186	第197図	住居出土石器(3)……………	229
第162図	特殊遺構(3)……………	187	第198図	住居、その他、出土石器(4) ……	230
第163図	特殊遺構出土土器(1)……………	188	第199図	その他、出土石器(5)……………	231
第164図	特殊遺構出土土器(2)……………	189	第200図	その他、出土石器(6)……………	232
第165図	土壇実測図(1)……………	192	第201図	その他、出土石器(7)……………	233
第166図	土壇実測図(2)……………	193	第202図	その他、出土石器(8)……………	234
第167図	土壇実測図(3)……………	194	第203図	その他、出土石器(9)……………	235
第168図	土壇実測図(4)……………	195	第204図	その他、出土石器(10)……………	236
第169図	土壇実測図(5)……………	196	第205図	その他、出土石器(11)……………	237
第170図	土壇実測図(6)……………	197	第206図	その他、出土石器(12)……………	238
第171図	土壇実測図(7)……………	198	第207図	その他、出土石器(13)……………	239
第172図	土壇実測図(8)……………	199	第208図	その他、出土石器(14)……………	240
第173図	土壇出土土器(1)……………	203	第209図	その他、出土石器(15)……………	241
第174図	土壇出土土器(2)……………	204	第210図	その他、出土石器(16)……………	242

第211図	その他, 出土石器(17)……………	243	第227図	出土木製品(2)……………	272
第212図	その他, 出土石器(18)……………	244	第228図	出土木製品(3)……………	273
第213図	その他, 出土石器(19)……………	245	第229図	土器底部圧痕……………	282
第214図	その他, 出土石器(20)……………	246	第230図	弥生土器分類図(1)……………	284
第215図	その他, 出土石器(21)……………	247	第231図	弥生土器分類図(2)……………	285
第216図	その他, 出土石器(22)……………	248	第232図	弥生土器分類図(3)……………	286
第217図	その他, 出土石器(23)……………	249	第233図	弥生土器分類図(4)……………	287
第218図	その他, 出土石器(24)……………	250	第234図	弥生土器分類図(5)……………	288
第219図	磨製石斧, 砥石他(25)……………	251	第235図	弥生土器分類図(6)……………	289
第220図	石錘, 棒状石器(26)……………	252	第236図	金の尾遺跡, 16号住居址 出土炭化米粒長規模分布図……………	291
第221図	石鏃他(27)……………	253	第237図	土器底部モミ圧痕……………	292
第222図	石鏃他(28)……………	254	第238図	金の尾遺跡弥生時代住居址分類……………	294
第223図	石鏃他(29)……………	255	第239図	弥生時代住居入口方向……………	296
第224図	土偶他……………	256	第240図	磨製石鏃分布図……………	296
第225図	銅製品, ガラス玉……………	257	第241図	横刃型石器分布図……………	296
第226図	出土木製品(1)……………	271			

表 目 次

第1表	金の尾遺跡住居・周溝墓一覧……………	3~4
第2表	縄文時代住居址出土土器観察表……………	104
第3表	弥生時代住居址出土土器観察表……………	111
第4表	周溝墓出土土器観察表……………	171
第5表	12溝出土土器観察表……………	183
第6表	特殊遺構出土土器観察表……………	190
第7表	土壌一覧表……………	200
第8表	グリッド等出土土器出土位置一覧表……………	225
第9表	石器等一覧表……………	258
第10表	金の尾遺跡遺構出土遺物内訳……………	274

図 版 目 次

- 図版 1 ・金の尾遺跡発掘調査前全景
- 図版 2 ・全景
・全景
- 図版 3 ・全景
・全景
- 図版 4 ・全景
・全景
- 図版 5 ・1号住居址
・2号住居址
- 図版 6 ・2号住居址土器出土状態
・2号住居址
- 図版 7 ・3号住居址
・3号住居址土器出土状態
・3号住居址
- 図版 8 ・4号住居址
・4号住居址土器出土状態
・4号住居址炉
- 図版 9 ・5号住居址
・6号住居址
・6号住居址出土土器
- 図版 10 ・7号住居址
・7号住居址炉
・8号住居址
- 図版 11 ・8号住居址炉
・9号住居址遠景
・10号住居址
- 図版 12 ・11号住居址 1号集石
・12号住居址
・13号住居址
- 図版 13 ・13号住居址土器出土状態
・13号住居址炉
・14号住居址
- 図版 14 ・15号住居址
- ・16号住居址
・16号住居址
- 図版 15 ・16号住居址
・16号住居址炭化材出土状態
・16号住居址土器出土状態
- 図版 16 ・17号住居址
・17号住居址出土土偶
・17号住居址遺物出土状態
- 図版 17 ・18号住居址
・18号住居址出土土器
・18号住居址埋甕炉
・18号住居址作業風景
- 図版 18 ・19号住居址
・19号住居址炉
・20号住居址
- 図版 19 ・20号住居址
・20号住居址柱根遺存状態
- 図版 20 ・21号住居址
・21号住居址土器出土状態
・22号住居址
- 図版 21 ・23号住居址
・23号住居址出土土器
・24号住居址
・24号住居址出土土器
・24号住居址土器出土状態
- 図版 22 ・25号住居址
・25号住居址土器出土状態
・25号住居址紡錘車出土状態
・25号住居址出土土器
・25号住居址梯子材遺存状態
- 図版 23 ・26号住居址
・27号住居址
・27号住居址炉

- 図版24
 - 28号住居址
 - 28号住居址土器出土状態
 - 28号住居址
 - 29号住居址（上層）
- 図版25
 - 29号住居址（下層）
 - 29号住居址（床下）
 - 29号住居址土器出土状態
 - 29号住居址出土土器
- 図版26
 - 30号住居址
 - 31号住居址
- 図版27
 - 32号住居址
 - 33号住居址
 - 33号住居址土器出土状態
- 図版28
 - 34号住居址
 - 35号住居址
 - 35号住居址土器出土状態
- 図版29
 - 35号住居址（下層）
 - 36号住居址
 - 36号住居址土器出土状態
- 図版30
 - 37号住居址
 - 38号住居址
 - 39号住居址
- 図版31
 - 39号住居址土器出土状態
 - 40号住居址
 - 40号住居址土器出土状態
- 図版32
 - 1号周溝墓
 - 2号周溝墓
 - 2号周溝墓土器出土状態
- 図版33
 - 3号周溝墓
 - 4号周溝墓
 - 4号周溝墓土器出土状態
- 図版34
 - 5号周溝墓
 - 6号周溝墓
 - 7号周溝墓
- 図版35
 - 8号周溝墓
 - 9号周溝墓
- 図版36
 - 10号周溝墓
 - 11号周溝墓
 - 11号周溝墓土器出土状態
- 図版37
 - 12号周溝墓
 - 13、14号周溝墓
- 図版38
 - 14号周溝墓土器出土状態
 - 15号周溝墓
- 図版39
 - 特殊遺構1、土器出土状態
 - 特殊遺構2
 - 特殊遺構4
- 図版40
 - 特殊遺構5
 - 特殊遺構6、土器出土状態
 - 特殊遺構7
- 図版41
 - 特殊遺構8
 - 特殊遺構10、土器出土状態
 - 特殊遺構11
- 図版42
 - 特殊遺構12
 - 特殊遺構13、土器出土状態
 - 特殊遺構14
- 図版43
 - 土壌（1）
- 図版44
 - 土壌（2）
- 図版45
 - 土壌（3）
- 図版46
 - 土壌（4）
- 図版47
 - 土壌（5）
- 図版48
 - 住居址出土土器
- 図版49
 - 住居址出土土器
- 図版50
 - 住居址出土土器
- 図版51
 - 住居址他出土土器
- 図版52
 - 周溝墓他出土土器
- 図版53
 - 石鏡・土偶・ガラス玉他
- 図版54
 - 磨製石鏡・紡錘車・打製石包丁・砥石・環状石器
- 図版55
 - 底部圧痕とモデリング画像
- 図版56
 - 同拡大（部分2倍—上1b・下3b）

第 I 章 調査状況

第 1 節 調査に至る経過

1977. 12. 工事中に遺跡が発見された為、発掘調査について道路公団及び県教育委員会と協議。1978. 3. 遺跡範囲確認の為の調査を実施する。1978. 5. 10. 道路公団・県教育委員会で委託契約を締結する。1978. 5. 文化庁へ発掘届を提出する。1978. 5. 10. 発掘調査着手。1978. 7~9. 地下水の増加により発掘作業中断。1978. 10. 発掘調査再開。1979. 2. 10. 発掘調査終了。1979. 3. 文化庁へ遺物発見通知を提出。1979. 3. 16. 道路公団に精算報告書提出。

第 2 節 調査組織

- 発掘調査主体 山梨県教育委員会
- ・調査担当者 県教育庁文化課文化財主事 末木健・新津健
 - ・調査員 伊藤恒彦(日本大学文理学部卒)、米田明訓(明治大学大学院生)、長沢宏昌(広島大学卒)、小林義典(大正大学)、藤本(早稲田大学卒)、矢野貞一
 - ・調査協力者 松浦宥一郎、服部敬史、武藤雄六、小林公明、林幸彦、樋口昇一、笹沢浩
 - ・補助員・作業員・整理員(巻末に記載)

第 II 章 遺跡概要

第 1 節 位置

山梨県中巨摩郡敷島町大下条字金の尾地着に位置する。敷島町は甲府市の西側に接し、北側は奥秩父山地金峰山から、南は国鉄中央線あたりで区切られる。東西幅は狭く、甲府市と北巨摩郡双葉町にはさまれた、南北に長い町であるが、この町の最南端に金の尾遺跡は位置する。

第 2 節 地理的・歴史的環境

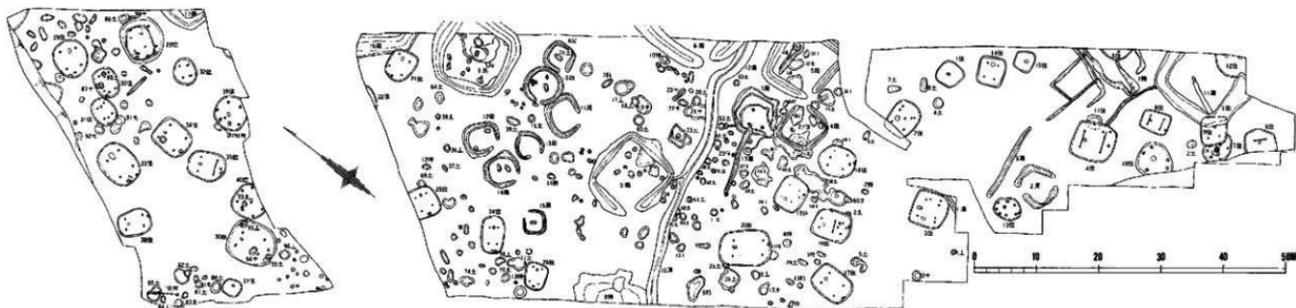
前述した位置にある金の尾遺跡は、中央線竜王駅の北方約 400 m にあり、標高 285 m の自然堤防上南端に立地する。西側は茅ヶ岳から突き出した赤坂台地が緩かに南へ伸び、赤坂台と金の尾遺跡の間には貫川が流れる。貫川の流れる範囲は低湿地状になっており、遺跡西側で約 500 m の巾がある。遺跡発見が工事中であった為に、この低湿地の試掘調査や発掘調査が不能であった。従って、最も水田が営まれたであろう地区が未調査のままである。しかし、本文でも述べるように、盆地内での自然堤防上末端の弥生時代遺跡を調査しえた事は、この時代を知る上で極めて貴重な資料を得たと言える。

敷島町内の遺跡分布は詳細に調査されたことはないが、縄文時代、弥生時代、古墳時代、奈良、平安時代の遺跡や遺物が各地から発見されているし、近年白鳳期瓦窯も発見されるなど、盆地西部では注目されている地域である。



金の尾遺跡
 縄文～平安時代集落
 古墳
 窯址

第1図 金の尾遺跡位置図



第2図 金の尾遺跡全体図

第1表 金の尾遺跡住居・周溝墓一覧表

No	時代	プラン		炉	柱穴	施設	その他	No	時代	プラン		炉	柱穴	施設	その他
		形	規模(m)							形	規模(m)				
1	弥生	隅丸方形	436×395	地床炉	不明			21	弥生	隅丸方形	531×446	地床炉	4	梯子受けpit 貯蔵穴	
2	弥生	隅丸方形	不明	地床炉	6			22	弥生	不明	不明	不明	不明	不明	ほとんど未掘
3	弥生	方形	555×564	地床炉	7			23	縄文	不明	不明	地床炉	不明		
4	弥生	隅丸方形	700×595	土器敷炉	4			24	弥生	楕円形	600×377	土器敷炉	不明		
5	弥生	隅丸方形	不明	不明	不明		ほとんど未掘	25	弥生	隅丸方形	不明	土器敷炉	4	梯子受けpit	梯子残存
6	弥生	隅丸方形	不明	石囲炉	4	間仕切溝	完掘せず	26	弥生	隅丸方形	429×381	埋埋炉	4	土器敷炉 梯子受けpit	土器敷炉 梯子受けpit
7	縄文	楕円形	不明	石囲炉 土器敷炉 石囲炉	不明		完掘せず	27	縄文	不明	不明	石囲炉	不明		入口付近に未掘
8	弥生	隅丸方形	480×353	土器敷炉	4	間仕切溝2本		28	弥生	楕円形	580×510	地床炉	4	梯子受けpit 貯蔵穴	
9	弥生	隅丸方形	不明	地床炉	4			29	弥生	隅丸方形	730×650	地床炉	4		拡張住居
10	縄文	楕円形	600×535	地床炉	不明		7号住居と重なり 部分未掘	30	弥生	楕円形	483×369	埋埋炉	4	梯子受けpit 貯蔵穴	
11	縄文	不整形	不明	石囲炉	不明		4号住居に つながる	31	弥生	楕円形	448×362	土器敷炉	2?	貯蔵穴	
12	弥生	不明	不明	不明	不明			32	弥生	楕円形	423×364	地床炉	4		
13	縄文	楕円形	455×365	石囲炉	8			33	弥生	楕円形	720×570	土器敷炉	4	梯子受けpit 貯蔵穴	拡張住居
14	弥生	隅丸方形	453×435	地床炉	4	南壁に粘土 南壁まわに平石		34	弥生	隅丸方形	590×510	地床炉	4	梯子受けpit 貯蔵穴	
15	弥生	不整形	325×311	地床炉	なし			35	弥生	楕円形	620×462	埋埋炉	4	梯子受けpit 貯蔵穴	
16	弥生	隅丸方形	610×488	石囲炉?	?	梯子受けpit 貯蔵穴	天草住居、柱天 から取材	36	弥生	隅丸方形	810×660	土器敷炉	4	梯子受けpit 貯蔵穴	拡張住居
17	弥生	隅丸方形	665×482	石囲炉	4	貯蔵穴		37	弥生	不整形	300×300	地床炉	なし		
18	弥生	隅丸方形	612×493	埋埋炉	4	梯子受けpit 貯蔵穴		38	弥生	隅丸方形	546×412	土器敷炉	4	貯蔵穴	
19	弥生	隅丸方形	595×448	埋埋炉	4	貯蔵穴		39	縄文	楕円形	560×515	地床炉	?		
20	弥生	隅丸方形	815×568	埋埋炉	4	貯蔵穴		40	縄文	円形	不明	土器敷炉 石囲炉	不明		完掘せず

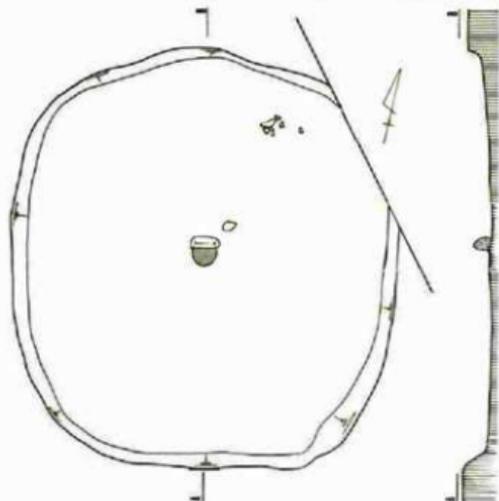
No	形状	ブリッジ	規模(m)	底面	出土遺物	主体部	備考
1	方形	1	13.8×13.0(推)	平坦	高杯1	無	1/4未発掘
2	方形	2	6.2×6.5	平坦	壺1	無	
3	方形	1	13.8×11.6	平坦		無	舟底状ピット有
4	方形	1	8.0×6.0	平坦	壺1	無	
5	方形	1	11.0×10.0	平坦	壺1、壺1 (兼玉)	無	舟底状ピット有
6	方形	最低1	一辺12.0以上	平坦	壺1	無	
7	方形	1	9.0×8.0	平坦		無	
8	方形	1	5.0×4.5	やや丸底		無	
9	方形	1	12.0×11.0	平坦	壺1、壺2	有?	舟底状ピット有
10	円形	1	直径6.0	平坦	壺	無	舟底状ピット有
11	方形	1	7.0×6.0	やや丸底	壺1	無	
12	方形	1	6.0×5.5	丸底		無	舟底状ピット有
13	方形	2	4.5×4.0	平坦	壺1	無	
14	円形?	1	直径5.5	平坦	壺1	無	舟底状ピット有
15	方形	1	3.5×3.5	丸底		有?	
16	方形	不明	不明	平坦	不明	不明	大部分未発掘
17	方形	不明	不明	平坦	壺1	不明	大部分未発掘

第三章 遺構・遺物

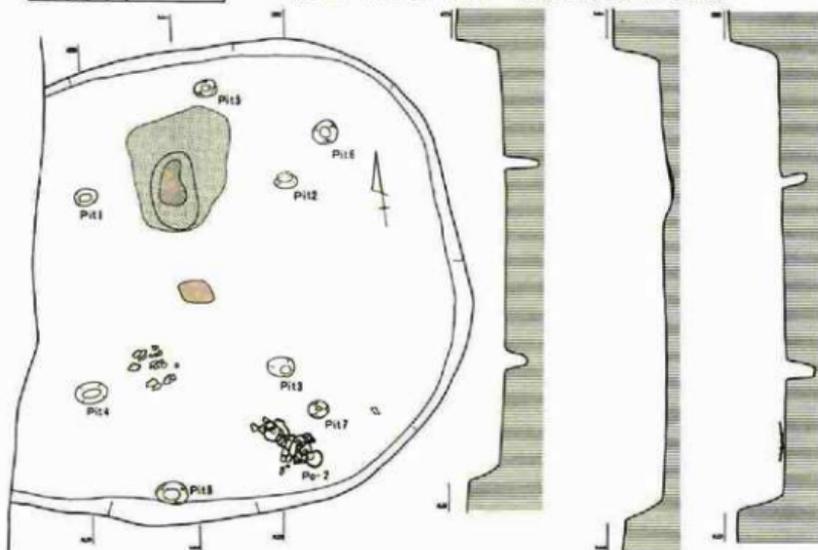
第1節 住居址

1号住居址(弥生)第3、5図

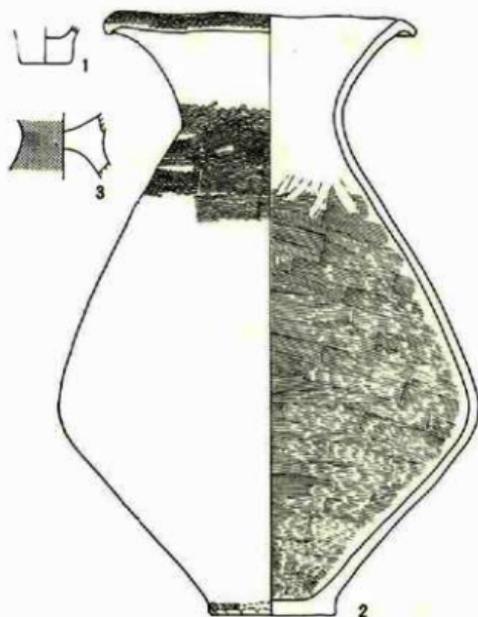
本遺跡の弥生時代集落は中央のV字溝をはさんで、南北2群に分けることができる。本住居は南集落中央東側に位置し、住居規模は長軸4.36m、短軸3.95mの隅丸方形を呈し、主軸は長軸方向のN-14°-Wである。壁高は東18cm、西16cm、南22cm、北14cmで、平均すると17.5cmの高さをもち、やや外傾している。床は軟弱で、住居中央に枕石を置いた炉があり、規模は東西25cm、南北31cmの浅い皿状を呈する。柱穴は検出できず、遺物も極めて少量である。



第3図 1号住居址平面図

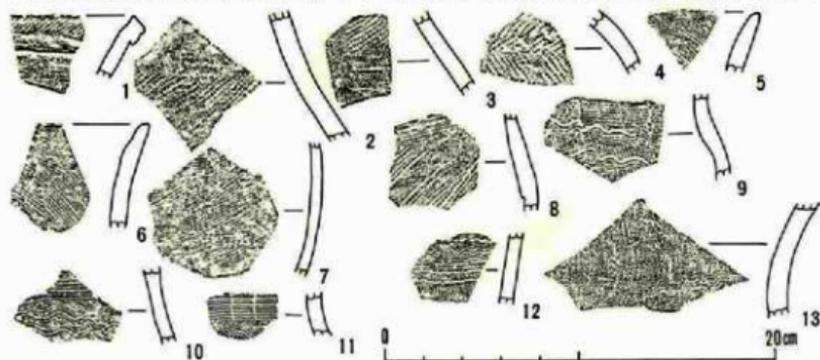


第4図 2号住居址平面図



第5図 1、2号住居址出土土器

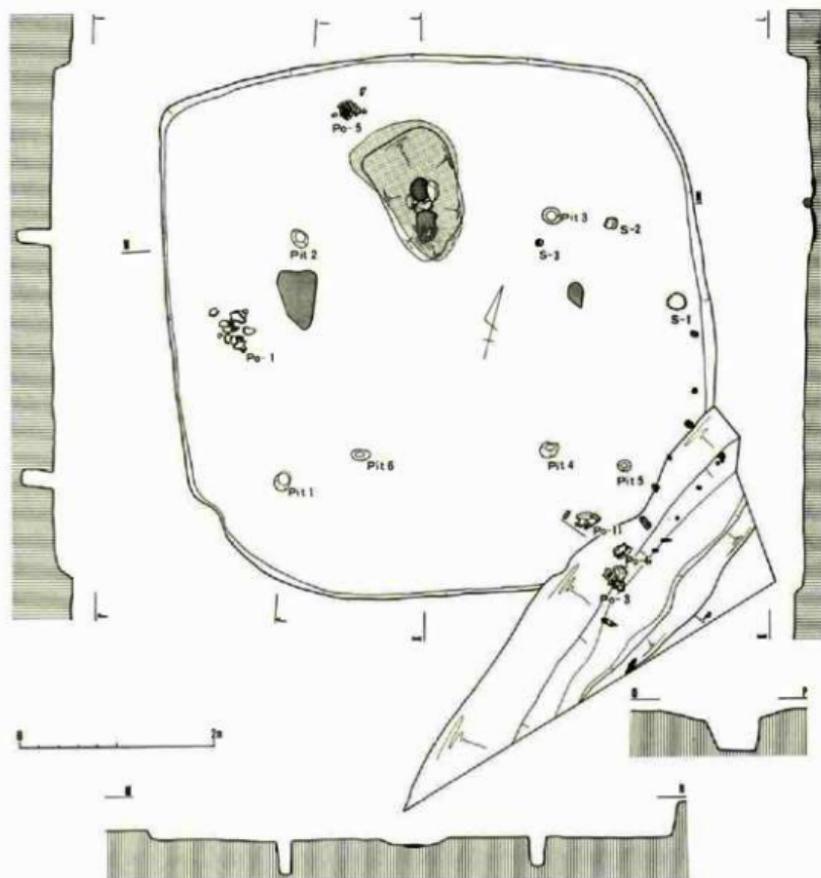
形で、ビット1は深さ36cm、短径17cm、長径24cm、ビット2は深さ28cm、短径11cm、長径23cm、ビット3は深さ30cm、短径20cm、長径29cm、ビット4は深さ23cm、短径21cm、長径33cm、ビット5は11.5cm、短径17cm、長径22cm、ビット6は深さ9.5cm、短径22cm、長径26cm、ビット7



第6図 2号住居址出土土器

2号住居址(弥生)第4～6図

南集落中央部に位置し、住居規模は南北4.91m、東西推定5.80mであるが、西側は攪乱を受けており正確な規模を測ることができない。平面形は東西に長い隅丸方形で、主軸がN-8°-Eではば北を向いている。壁高は東58cm、南37cm、北44cmと深い竪穴住居となっており、壁は外傾している。床は柱穴に囲まれた部分が堅くしまっており、周辺はやや軟弱である。地床炉は北柱穴の中間に位置し、東西45cm、南北83cm、深さ10cmの長円形皿形で、焼土は北側に広がっている。柱穴は6本検出されているが、ビット6と7は住居拡張時の柱穴である。主柱穴は5本で、各々の柱穴は主軸に対して直交する軸方向に長い長円

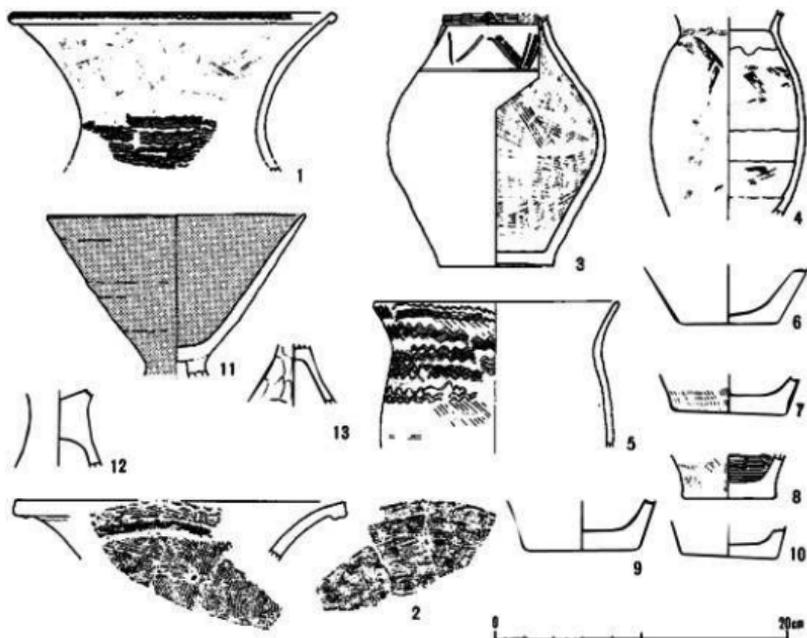


第7図 3号住居址、1号溝平面図

は深さ10.5cm、短径20cm、長径23cm、ピット8は深さ9cm、短径24cm、長径32cmである。主軸南の壁下には梯子受穴があり、東西32cm、南北24cm、深さ9cmである。遺物は床面直上に倒壊していた他はまとまった遺物が少ない。貯蔵穴は確認できない。なお、住居の拡張は、旧柱穴の対角線上に広げており、ピット5も拡張後に設置された柱かもしれない。

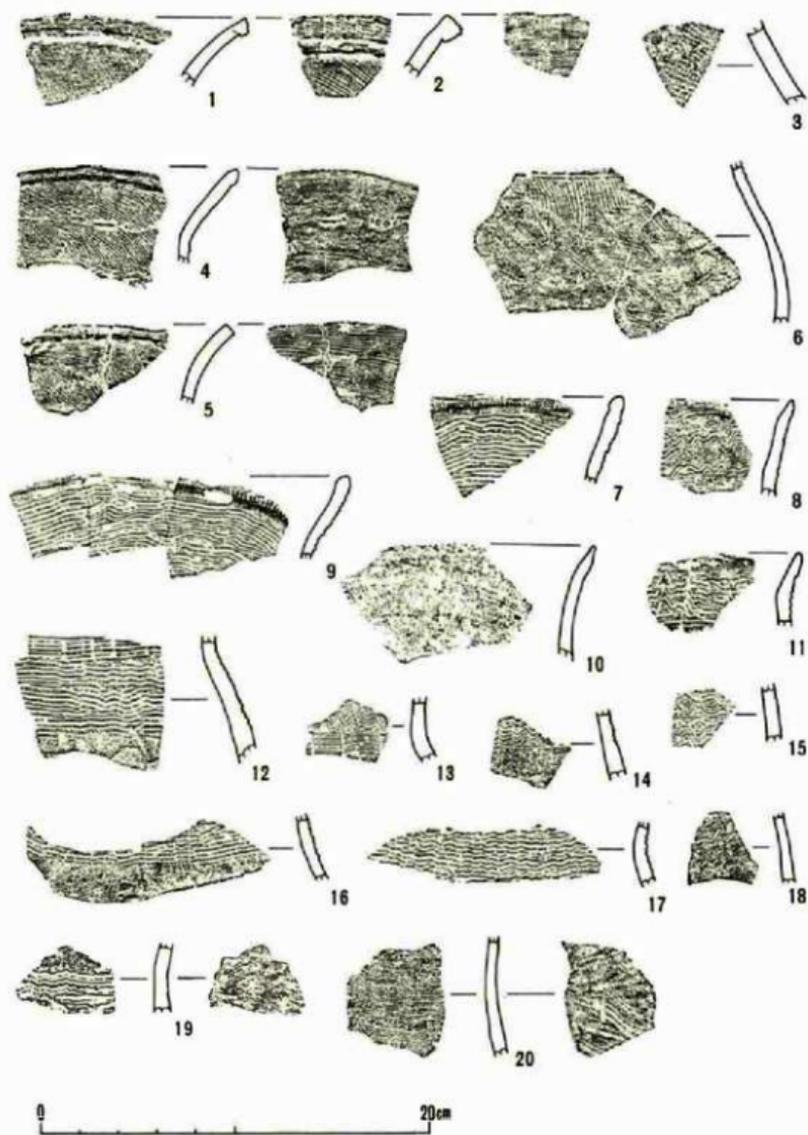
3号住居址（弥生）第7～9図

南集落中央部に位置し、住居規模は南北5.55m、東北5.64mのほぼ正方形に近い隅丸方形プランを呈する。東南のコーナーを1号溝に切られているが、遺構の遺存状況は良好である。主軸はN-16°-Wである。壁は東30cm、西8cm、南11cm、北20cmで、北東側が深く南西側に浅い

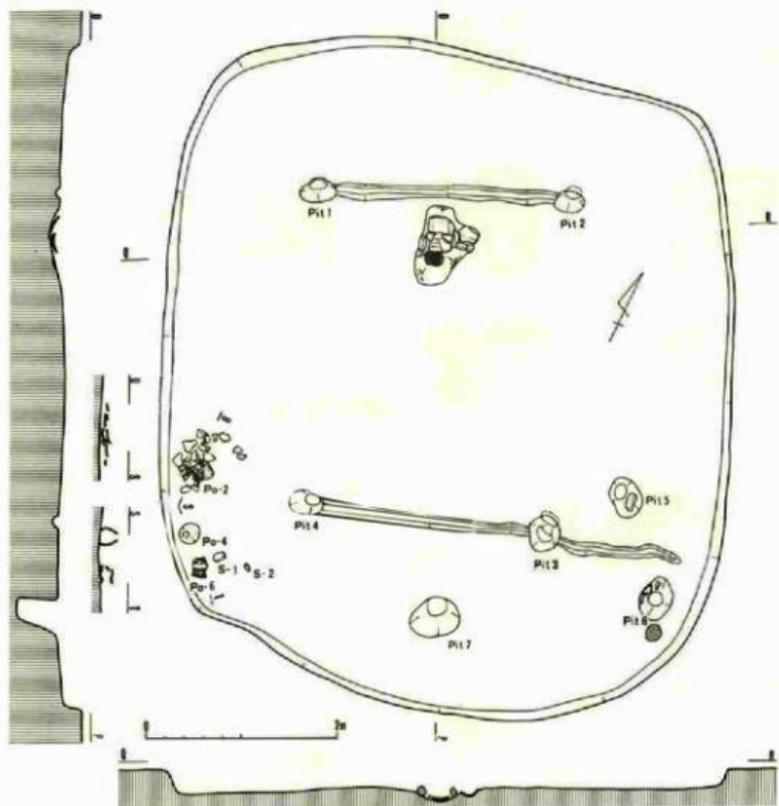


第8図 3号住居址出土土器(1)

状態で、壁面はやや外傾している。床は柱穴に囲まれた中央部が若干しまっているが、周囲は軟らかい。炉は北を除く三方を長方形障で囲んだ方形石囲炉と、その南に接した楕円形の地床炉が北側柱穴中央に位置する。石囲炉は内径15cm×25cm、地床炉は25cm×35cmの規模であるが、この2つの炉を含む浅い皿状のピットには焼土が広がっており、南北1.5m×東西80cmの範囲が最終的に炉として使用されたものであろう。柱穴は6本検出されているが、4本柱穴の建物が1回建て直しをされているので、数が多いのであろう。ただしピット5とピット6が新しいのか、ピット1とピット4が新しいのか判断はつかない。ピット1は深さ35cm、短径16cm、長径19cm、ピット2は深さ34cm、短径15cm、長径21cm、ピット3は深さ30cm、短径17cm、長径18cm、ピット4は深さ33.5cm、短径16cm、長径20cm、ピット5は深さ32cm、短径11cm、長径14cm、ピット6は深さ37.5cm、短径11cm、長径20cmで、ピット1～ピット4までは深さ、径ともそろっている。この住居には梯子受穴、貯蔵穴は認められなかった。出土遺物は、壺2、甕8、高杯2などである。なお、甕のうちPo3とPo4は1号溝中から出土したもので、この住居に含まれないかもしれないが、断面図でも観察できるように、住居から流れ込んだ物として取扱った。



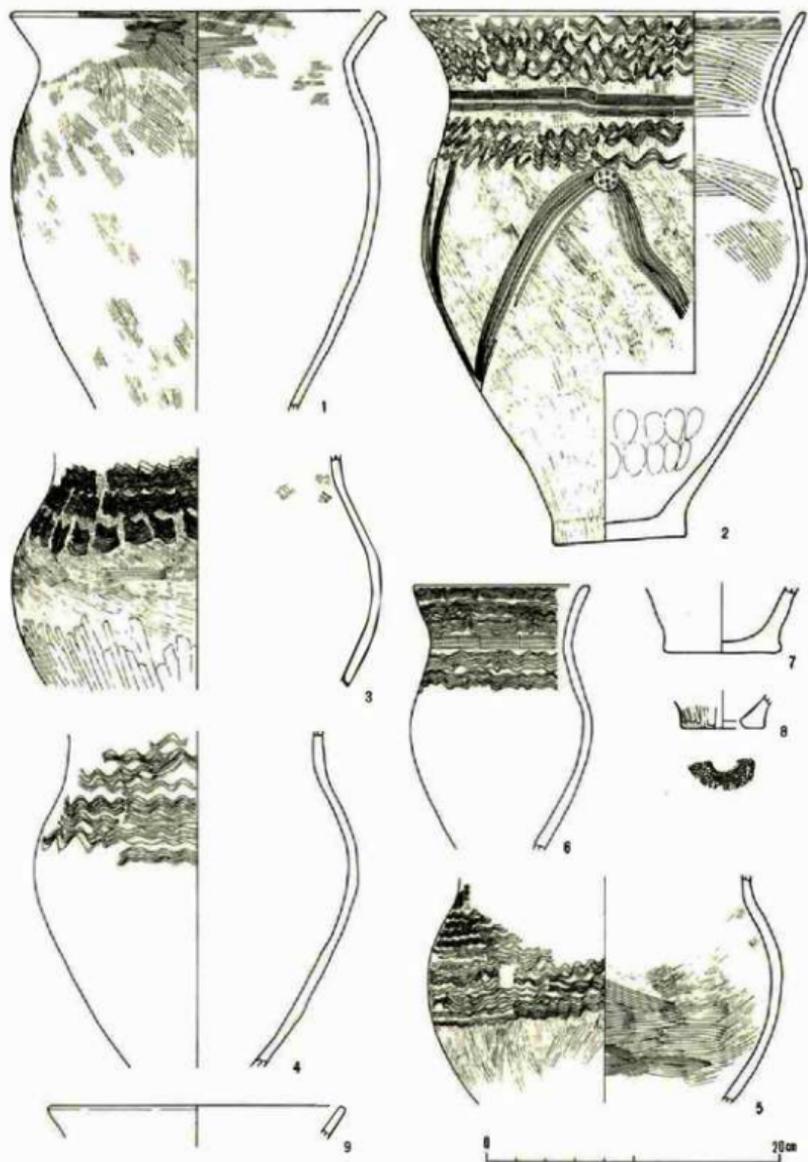
第9图 3号住居址出土土器(2)



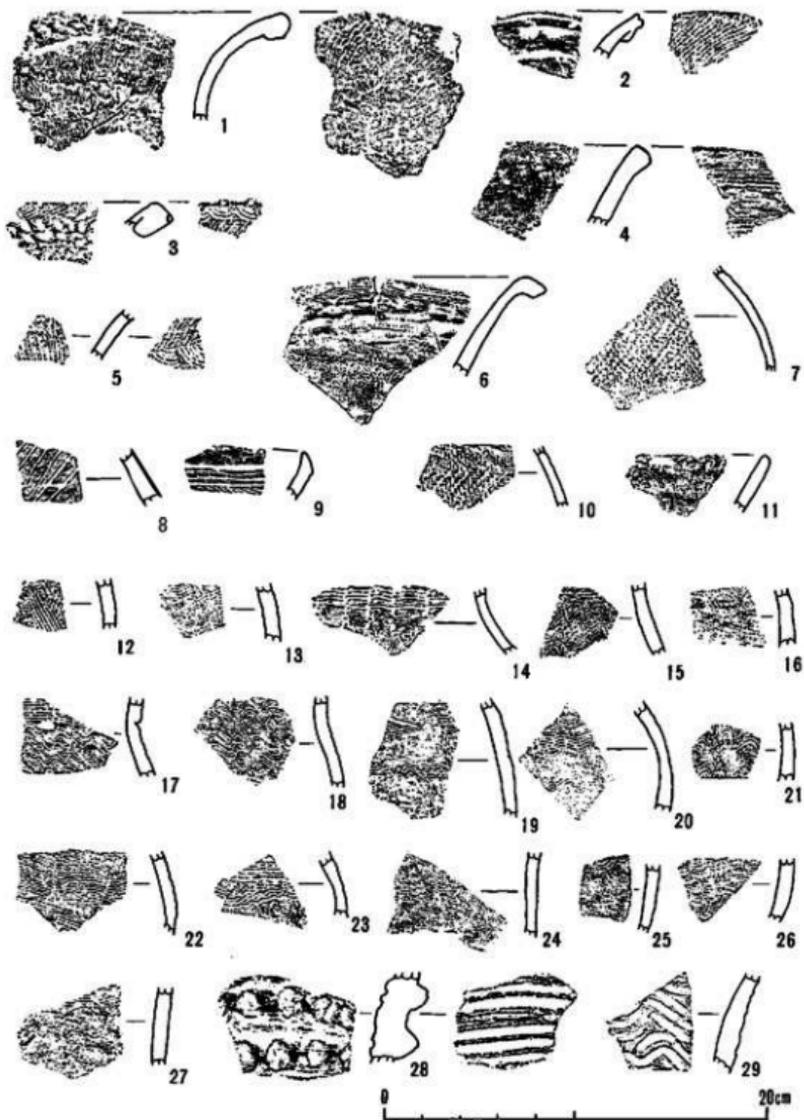
第10図 4号住居址平面図

4号住居址(弥生) 第10~12図

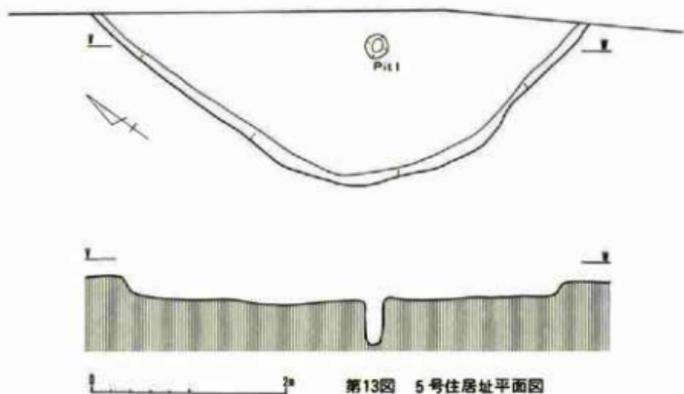
南集落南小群中の北に位置し、縄文時代の11号住居址を切って造られている。規模は長軸7m、短軸5.95m、主軸はN-27°-Wに振れている。住居のプランはやや菱形をした隅丸方形で、特に南側入口部が半円状に膨らんでいる。壁は東17cm、西21cm、南18cm、北11cmの高さをもち、やや外傾している。床面は柱穴に囲まれた部分は良好であるが、外側は若干軟弱である。炉は北側枕穴の間に造られるが、中央よりやや南に位置する。炉の構造は石囲土器敷炉で、東西56cm、南北85cmの規模である。柱は4本柱で、補助支柱がビット5(深さ41cm、短径41cm、長径52cm)と考えられる。主柱穴のビット1は深さ53cm、短径25cm、長径38cm、ビット2は深さ40cm、短径23cm、長径31cm、ビット3は深さ35cm、短径32cm、長径39cm、ビット4は深さ42cm、短径26cm、長径36cmである。各々の柱穴は主軸と直交する方向に長径を持ち、しかも柱穴底面が上面より北へずれている。これは柱を斜に立てたのではなく、柱穴の北面だけを垂直に造り、この面に添わせて柱を建てたものであろう。なお、ビット1とビット2、ビット3とビット4



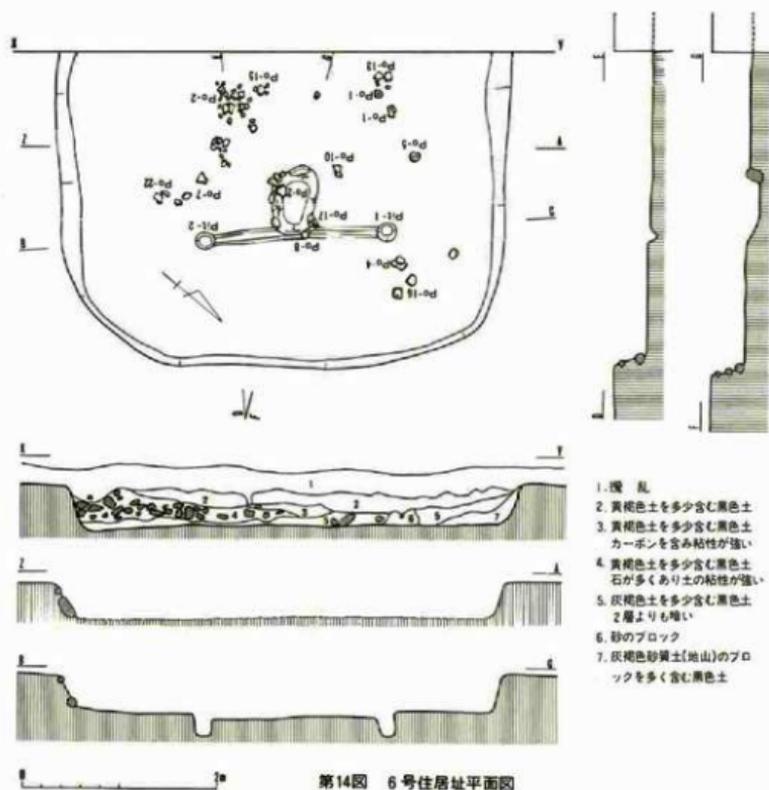
第11图 4号住居址出土土器(1)



第12图 4号住居址出土土器(2)



第13図 5号住居址平面図



第14図 6号住居址平面図

1. 擾乱
2. 黄褐色土を多少含む黒色土
3. 黄褐色土を多少含む黒色土
カーボンを含み粘性が高い
4. 黄褐色土を多少含む黒色土
石が多くあり土の粘性が高い
5. 灰褐色土を多少含む黒色土
2層よりも薄い
6. 砂のブロック
7. 灰褐色砂質土(地山)のブロックを多く含む黒色土

をそれぞれ連結する浅い溝が検出された。この用途については不明であるが、この溝中に細長い木が埋め込まれていた例(35住)もあるので、一応間仕切溝と呼称しておきたい。貯蔵穴は住居南東隅に近いビット6を想定している。規模は深さ29.5cm、短径23cm、長径46cmの長円形ロート状を呈している。中より土器片が若干出土している。梯子受穴は主軸上にあり、南壁からはば1m離れた所にある。規模は深さ41cm、長径52cmで、底面は北に偏している。穴の傾斜は27°あり、この延長線と壁の垂直線との交点が旧来の壁高を表示することができると考えられるが、その場合は壁高1m以上になる。南に張り出した壁を柱穴間仕切溝と並行に修正すると、壁ラインは梯子受穴南に接する部分となり竪穴の深さは50cm位に納まるので、住居プランを再検討する必要があるかもしれない。出土遺物は、住居の南西隅にかたまって遺存しており、甕7、高坏1、甕1、磨製石鏃1などが出土している。炉内に敷かれた土器は無文の大型甕の破片で、焼成を受けてボロボロとなっている。

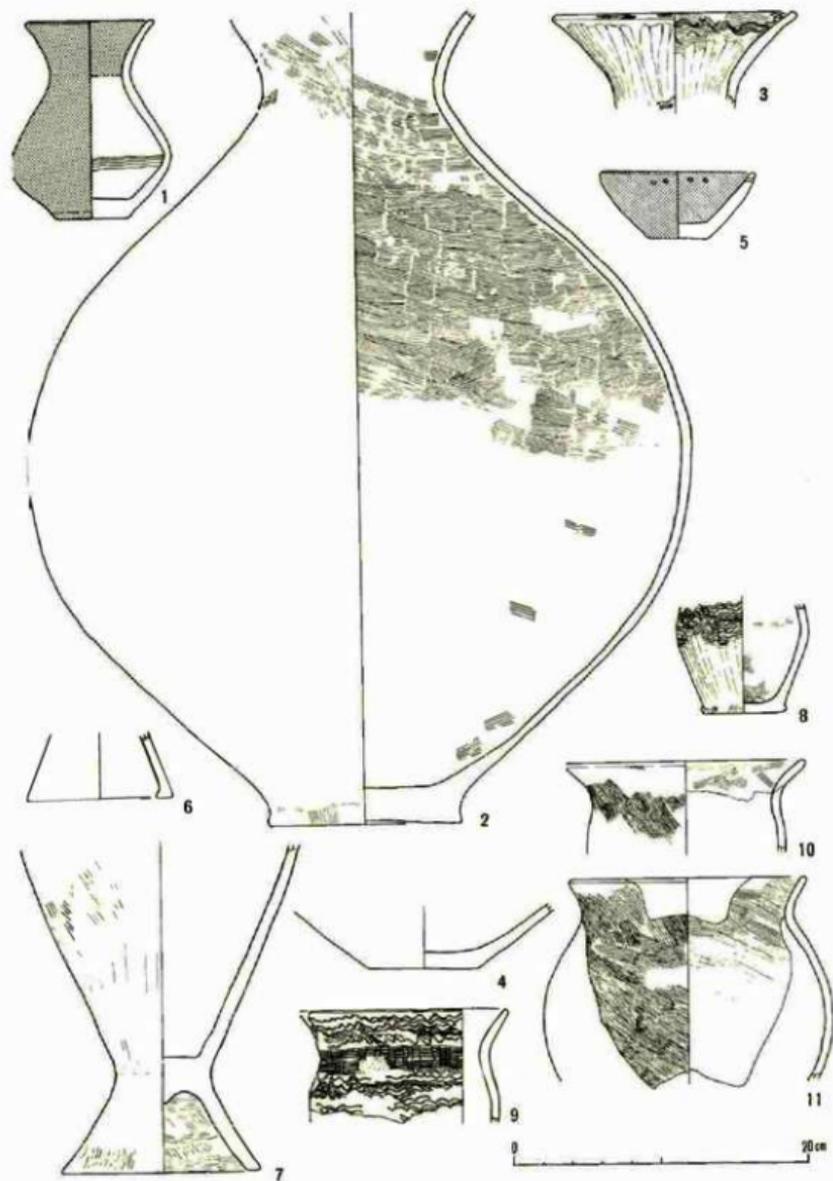
5号住居址(弥生)第13図

南集落南小群の東端に位置し、調査区域外に住居の大半が出ているので、詳細は不明である。周辺には2、3、5、7、8号溝が交錯しており、遺構にも一部かかっている。規模は不明であるが、主軸はほぼ北を向いており、確認できる壁長は、南壁3m、西壁3mで、隅は丸く造られている。壁高は南15cm、西16.5cmであり、やや外傾する。床面は軟弱で、あまり良好ではない。炉不明。柱穴は1本検出された。深さ47cm、短径12cm、長径12cmである。その他、梯子受穴、貯蔵穴などの施設は確認できず、遺物も見べきものは無い。

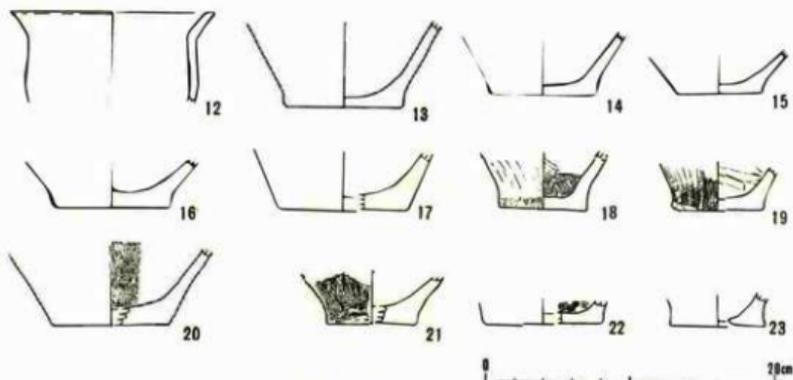
6号住居址(弥生)第14~19図

南集落南小群の最南に位置し、住居址の南西半分が河川によって流出している。住居の規模は主軸方向に残っているのが3.3m、直交する軸で4.6mである。住居のプランは隅丸方形で、主軸の方位はN-53°Eと大きく東にふれている。この南小群の住居は、南の住居ほど主軸が東に向く傾向が見られる。壁高は南東34cm、北西39cm、北東32cmで、やや外傾している。この住居の掘られた地層は、人頭大から拳大の河原礫が多く入った砂質土で、壁にも礫が顔を出している。床面も同様に礫が露出している部分が多く、良好ではない。炉は枕石を南に置いた楕円形掘込み炉で、北東柱穴の中央に位置し、掘込み周辺には土器片と小礫が若干並べられている。規模は60cm×50cmである。柱穴は2本検出され、ビット1は深さ25cm、直径19cm、ビット2は深さ22cm、直径18cmで、柱穴のプランはほぼ円形である。柱穴を連結する間仕切溝は巾10cmでV字形断面をもっている。

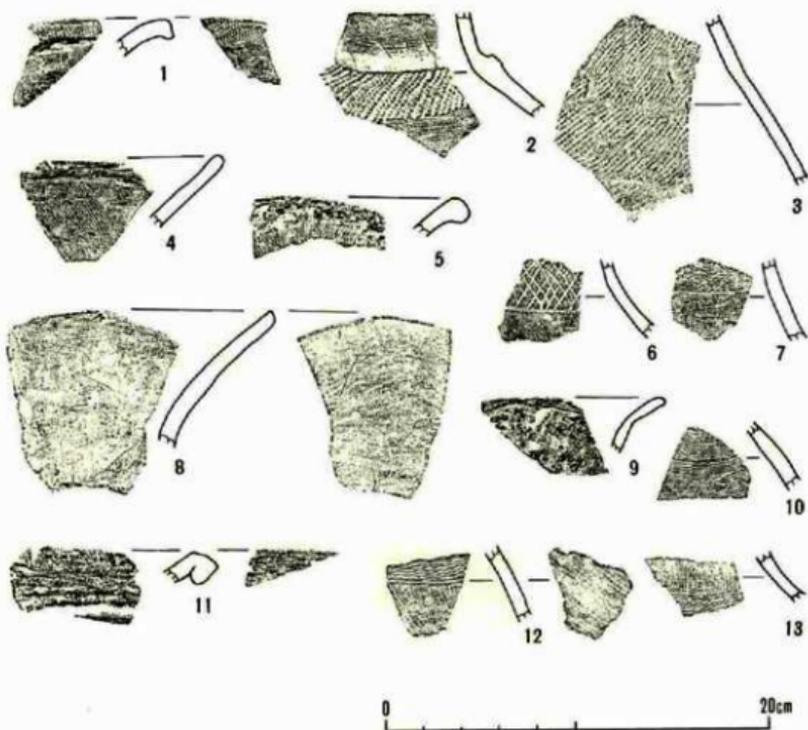
住居内の覆土は礫が多く含まれ、礫の間に土器が含まれている状態であった。礫は南東側で厚く堆積しており、投げ込まれた状態である。出土遺物は甕16、甕3、鉢1、磨製石鏃1などが出土している。特に赤彩された小型甕と口唇に小孔が2孔づつ対に穿たれた小型赤彩坏は良好なセットで、この住居の特殊性を暗示しているものと思われる。



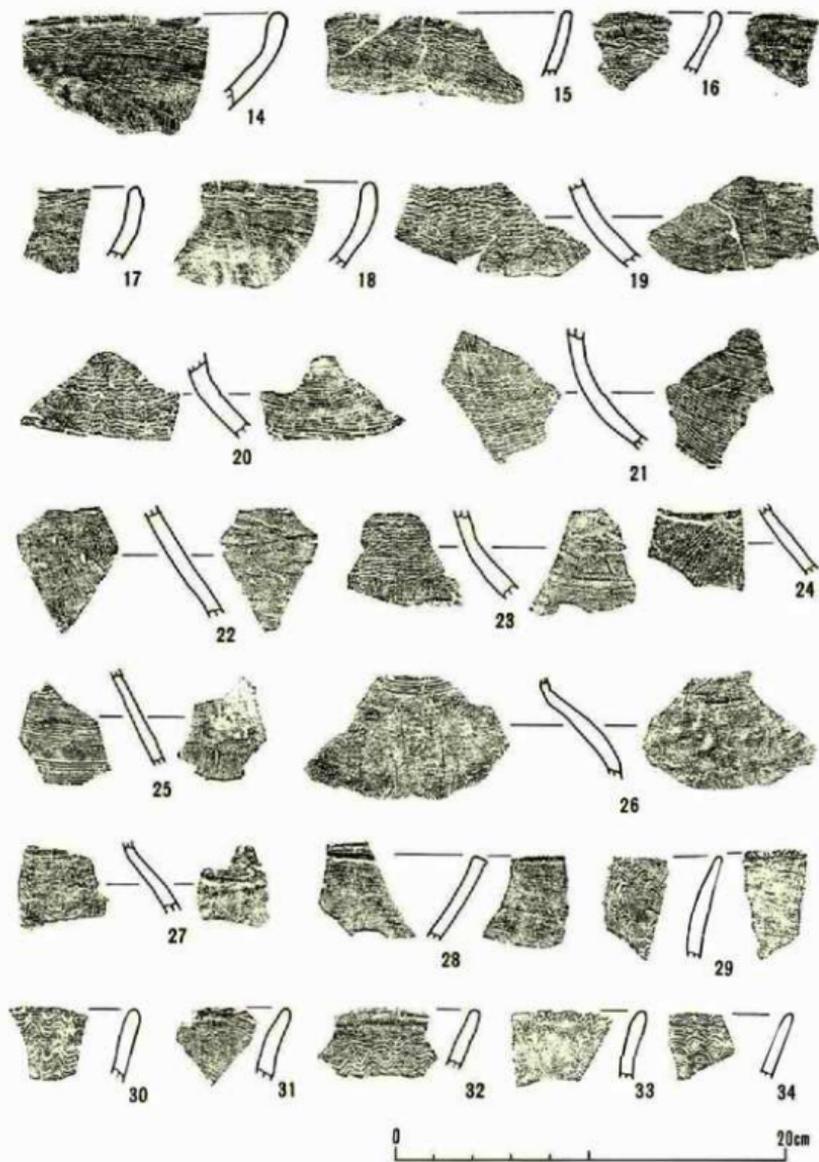
第16图 6号住居址出土土器(1)



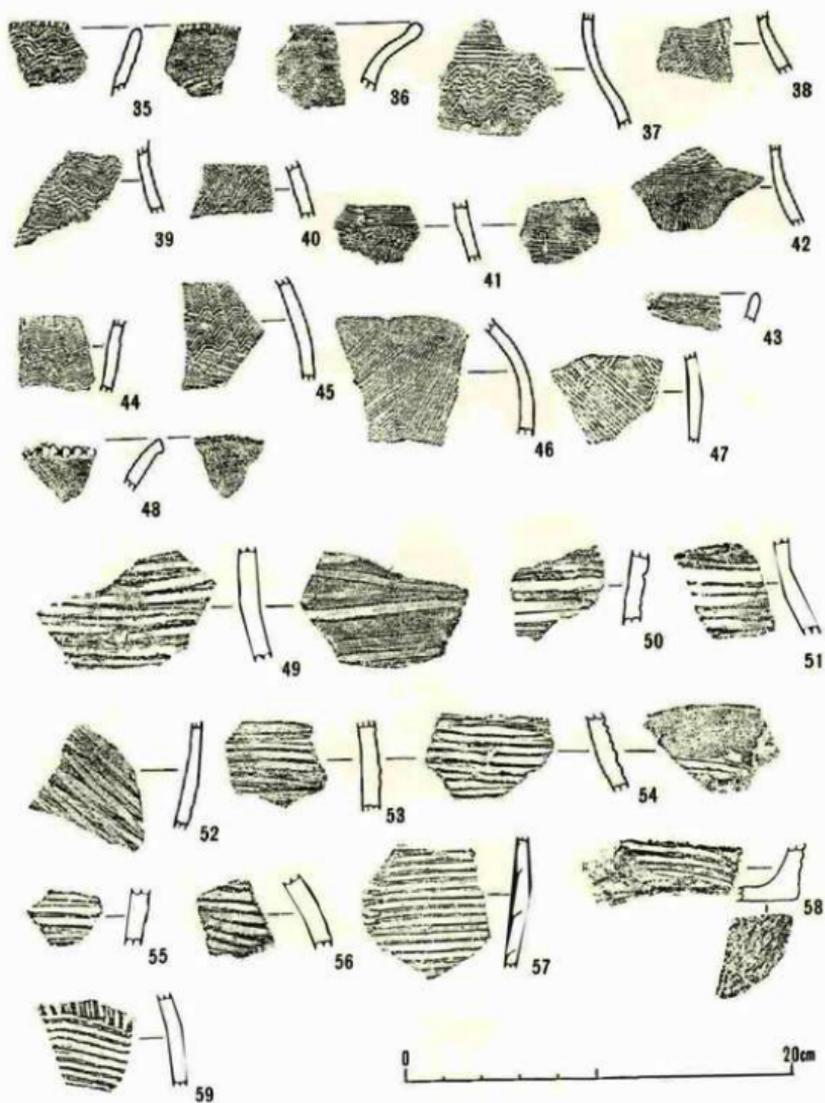
第16图 6号住居址出土土器(2)



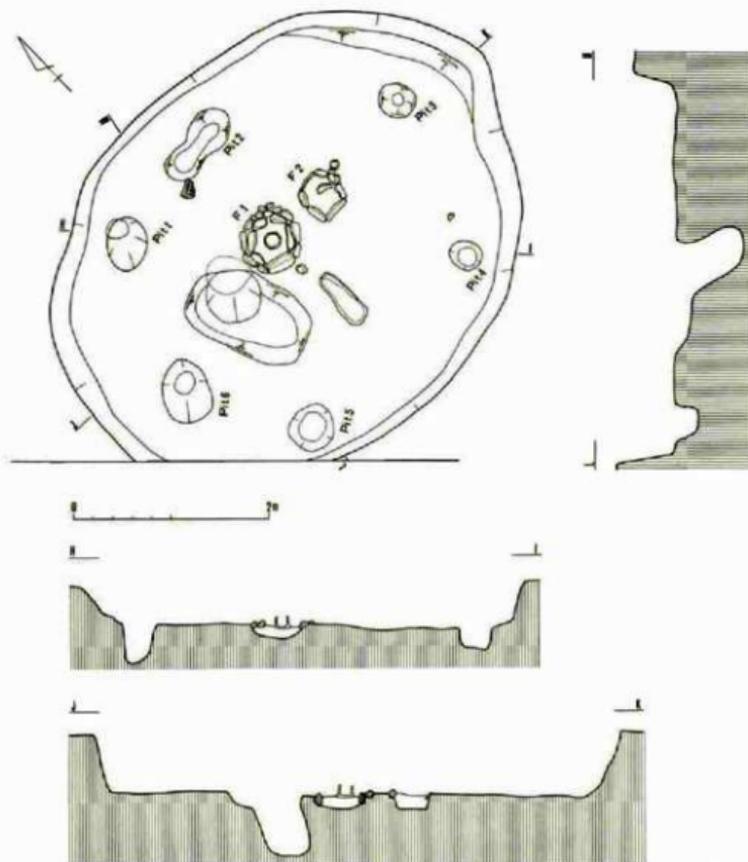
第17图 6号住居址出土土器(3)



第18圖 6号住居址出土土器(4)



第19图 6号住居址出土土器(5)

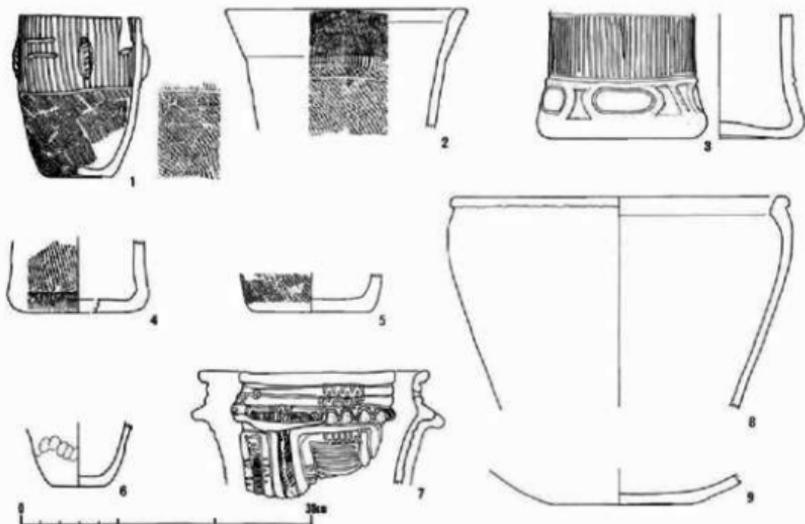


第20図 7号住居址平面図

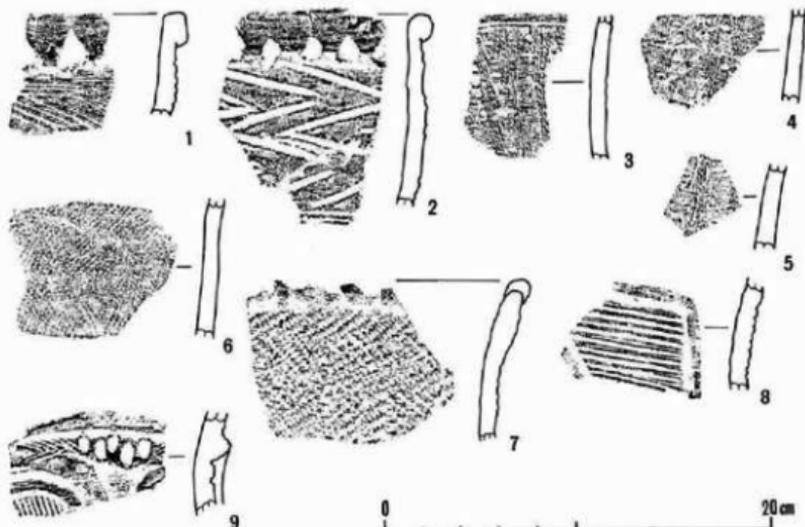
7号住居址（縄文）第20～23図

縄文時代の住居址群は、散村的分布を示し、同時期で重複しているものは無く、極めてまばらである。本住居址は縄文時代住居としては最南端に位置し、9号住居に東側を切られているが、床面までは達していないので、その全貌は残っている。住居は東西に長い楕円形を呈し、長軸5.48m、短軸4.2mの規模で、主軸は2基の炉の中の中心点を繋ぐ線とすれば、N-91°-Eとなる。壁は東69cm、西54cm、南44cm、北56cmの高さがあり、やや外傾しているものの垂直に近い状態である。炉は2基ある。どちらも石囲炉で、住居中心に位置するF1炉は中央に深鉢形土器胴部下半を置き、長方形の礎を2重に巡らした立派な円形石囲炉で、外径東西65cm、南北66cmの規模である。F2炉はF1炉の東にあって、F1炉との間は20cm弱である。この炉は長方形礎5個と1片の土器片で六角形の石囲炉となっており、東西45cm、南北47cmの大きさである。柱穴は6本あり、ピット1は深さ42cm、短径41cm、長径56cm、ピット2は深さ30cm、

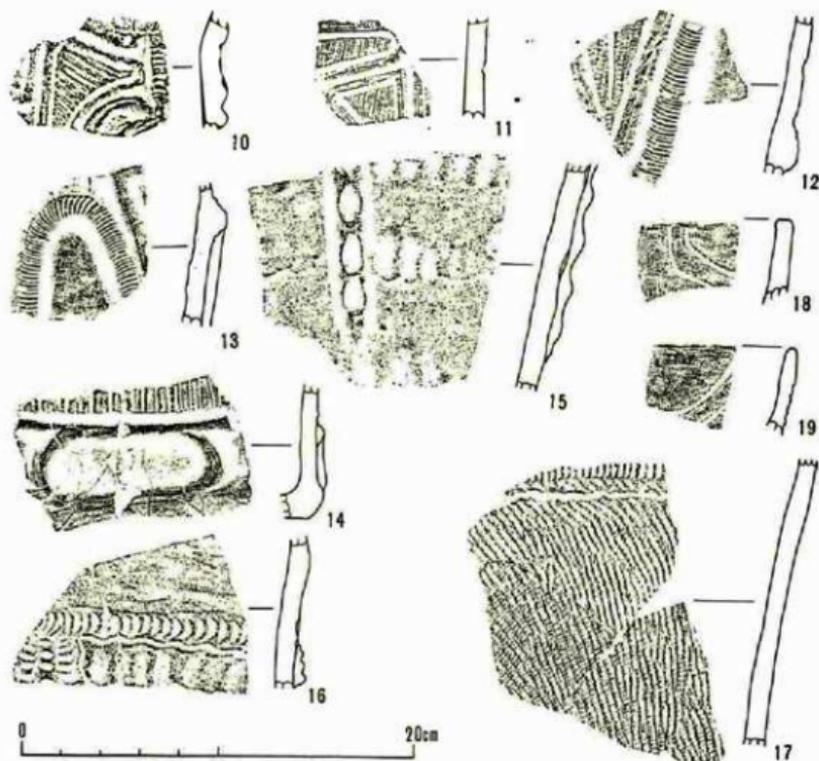
短径26cm、長径83cm、ビット3は深さ13cm、短径35cm、長径40cm、ビット4は深さ22cm、短径30cm、長径35cm、ビット5は深さ24cm、短径47cm、長径47cm、ビット6は深さ43cm、短径49cm、



第21図 7号住居址出土土器(1)



第22図 7号住居址出土土器(2)



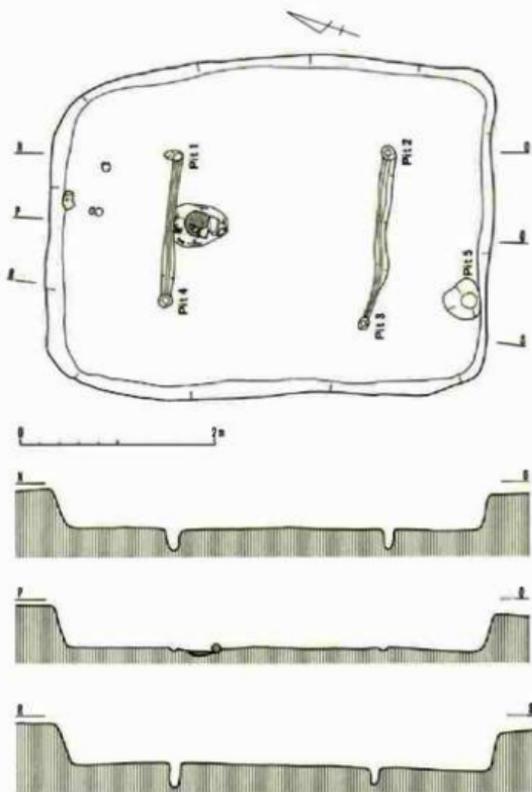
第23図 7号住居址出土土器(3)

長径66cmである。F1炉の西には深さ20cm、径80cm×130cmの土壇があり、その中央に直径60cm、深さ65cmのピットがあるが、住居とは関係の無いものと考えられる。

出土土器は縄文中期中葉のもので、深鉢形土器が多い。打製石斧4、土製円盤3個等が出土している。

8号住居址(弥生)第24~26図

南集落小群のはば中央に位置し、他の遺構とは重複しない。住居の規模は長軸4.8m、短軸3.53mの隅丸方形をしており、やや小型の住居である。主軸は長軸方向で、N-15°-Wである。各辺の長さは北辺2.7m、南辺3.2m、東辺4.3m、西辺4.5mで、北東隅を除く各コーナーは比較的直角である。壁高は東38cm、西37cm、南35cm、北42cmで、若干外傾斜している。床面は中央部がやや良好であるが、周辺部は軟弱である。炉は南側に枕石を置く皿状の掘り込み炉で、東西45cm、南北55cmの卵形をしている。炉位置は、北側柱穴間にあつて、間仕切溝より内側に造られている。柱穴は4本で対角線上に配され、ピット1は深さ22cm、短径10cm、長径18



第24図 8号住居址平面図

cm、ピット2は深さ20cm、短径15cm、長径18cm、ピット3は深さ25cm、短径14cm、長径14cmである。全体に柱穴は小さく浅い傾向をもつ。ピット1とピット4、ピット2とピット3の間にはそれぞれ間仕切溝が掘られている。巾は8cm~15cm、深さは5cm程で、断面は舟底形を呈する。貯蔵穴は南壁中央よりやや西側にずれて造られ、深さ24cm、東西42cm、南北39cmでロート状断面である。

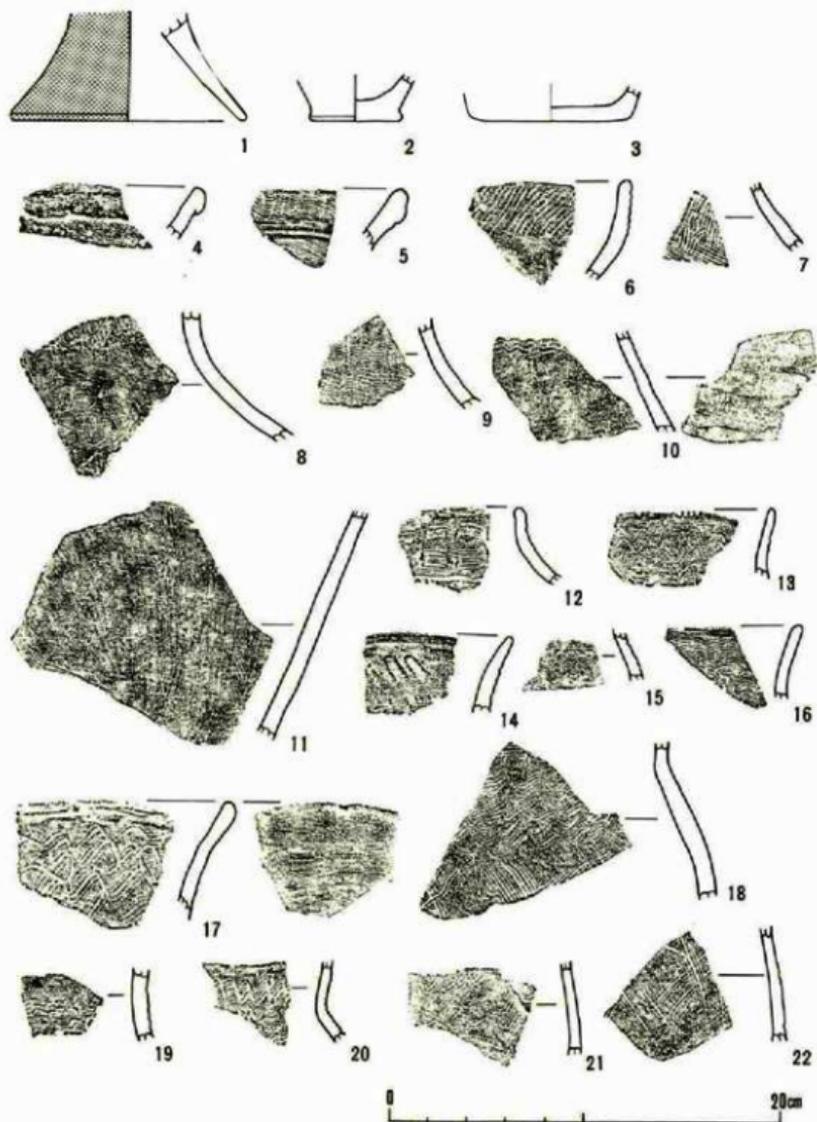
出土遺物でまとまった物は無く、いずれも破片である。高環脚、甕底部、同胴部破片などがあり、軽石が覆土中から出土している。なお、若干であるが、条痕文系の土器が混入している。

9号住居址(弥生)第27~28 図

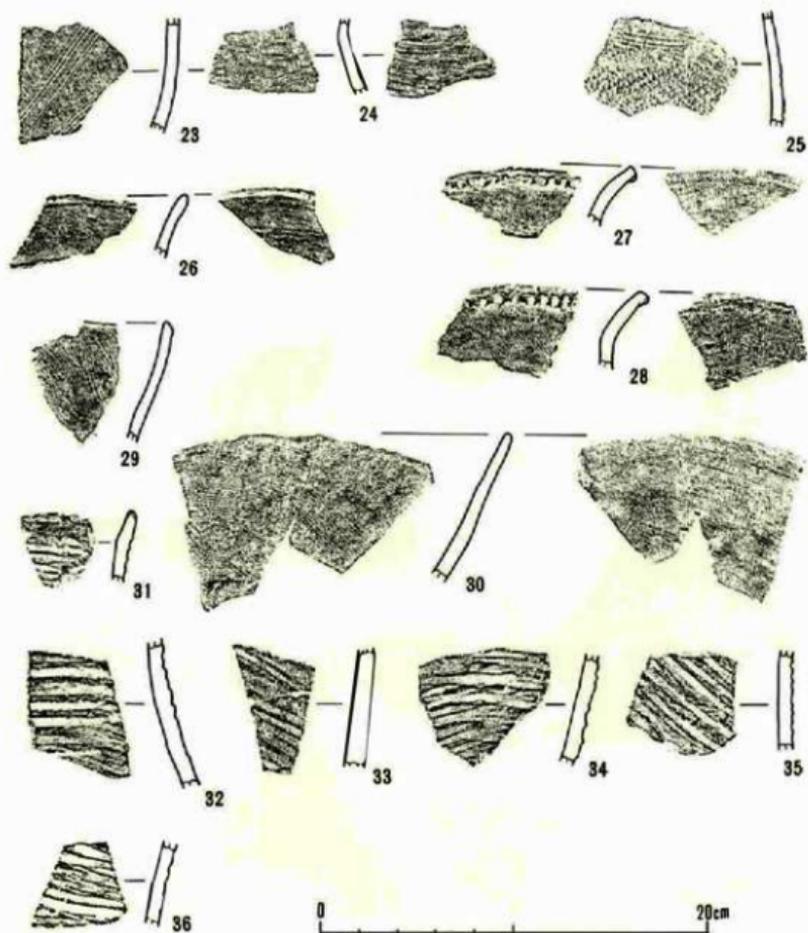
南集落南小群の南部分に位置し、縄文時代中期中葉の7号住居址の上に重なり、1号方形周

溝墓と11号溝に切られている。住居のプランは隅丸方形と推定され、N-47°-Eの主軸方向の長さはおよそ4.9m、これに直交する東西方向は4.15mである。壁は東20cm、西25cm、南20cm、北22cmの高さが残り、壁面はやや外傾している。床面は炉の南側だけが堅くしまって良好であるが、周囲は軟弱である。炉は北側柱穴の中央に位置し、間仕切溝の南に地床炉の中心がある。主軸方向で110cm、柱穴方向で80cmの楕円形に焼土が広がっている。柱穴は3本しか検出されていないが、4本柱の建物であったと考えられる。ピット1は深さ25cm、短径20cm、長径22cm、ピット2は深さ21cm、短径15cm、長径20cm、ピット3は深さ27cm、短径19cm、長径19cmである。各柱穴のプランはほぼ円形で、深さも20cm以上で一定している。ピット2とピット3の間には間仕切溝があるが、溝はピット3から炉に達しているだけでピット2には連絡していない。貯蔵穴、梯子受穴は無い。

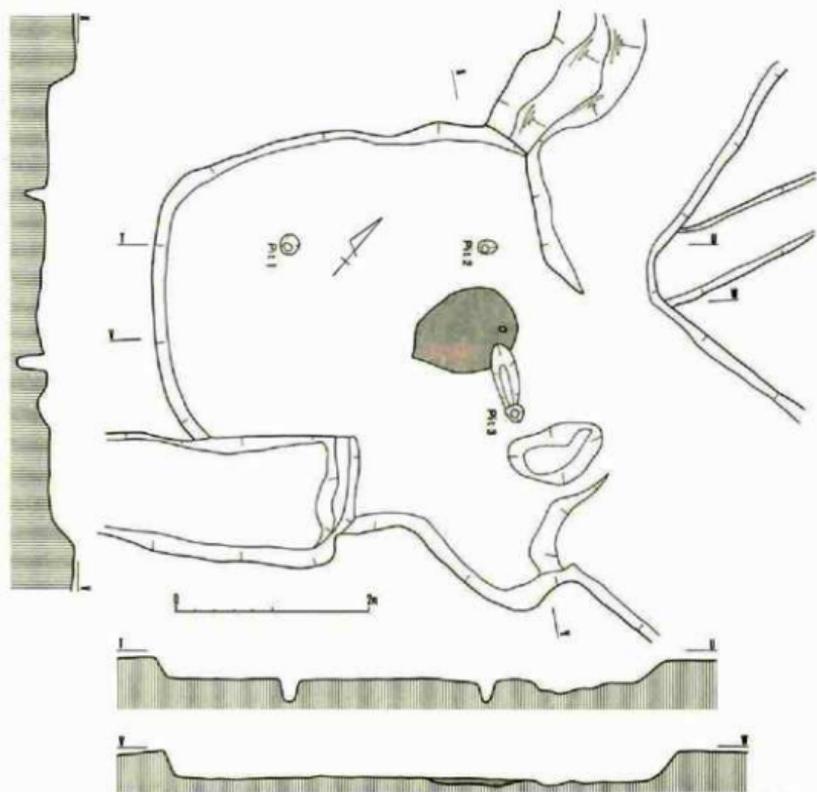
本住居の遺物は、ほとんどが覆土中のもので、甕2、壺1、甌などの破片が出土している。



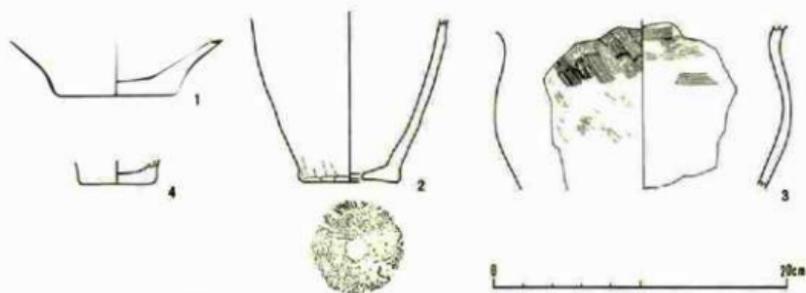
第25图 8号住居址出土土器(1)



第26图 8号住居址出土土器(2)



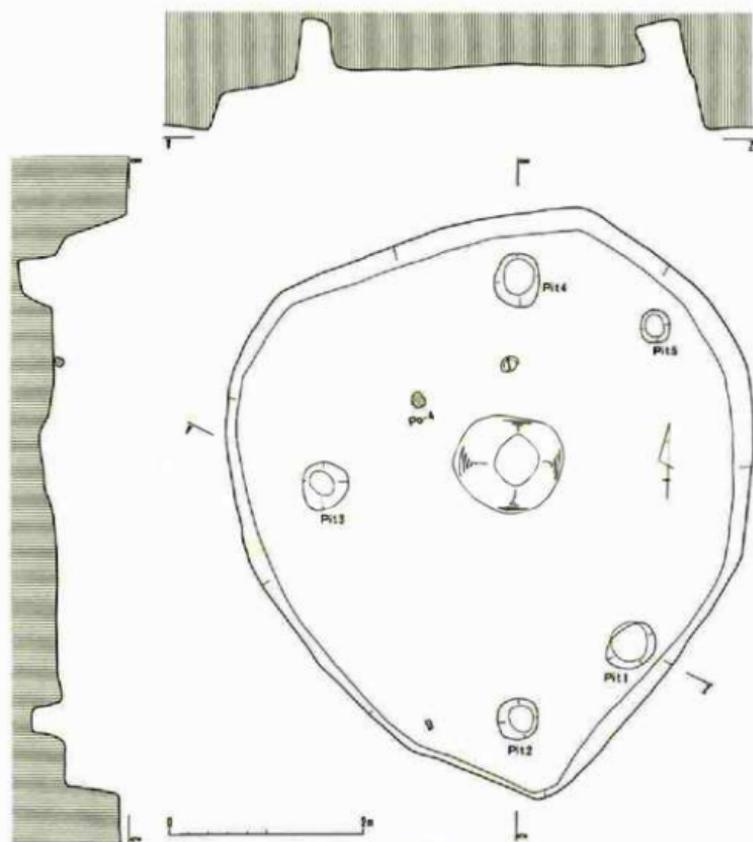
第27图 9号住居址平面图



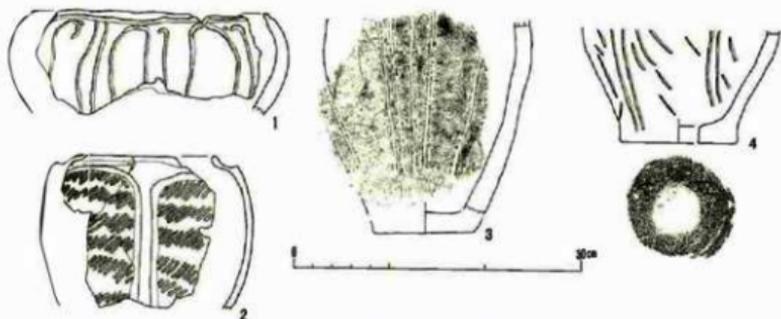
第28图 9号住居址出土土器

10号住居址（縄文）第29～32図

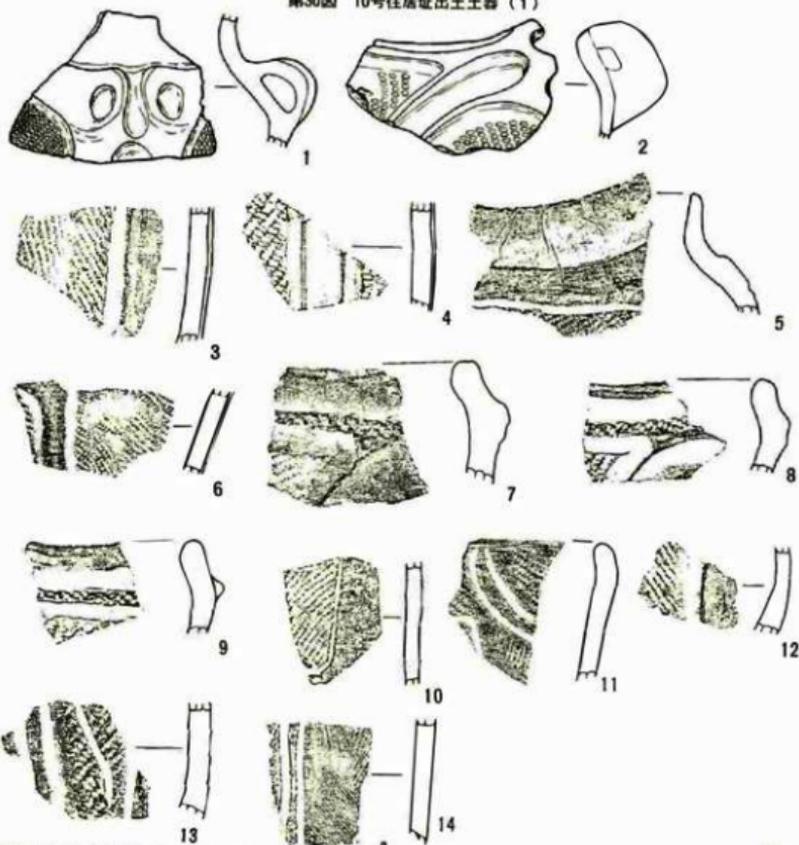
発掘調査区南側に位置し、一部南側を河川によって切り取られている。他の遺構との切り合い関係は無い。住居址は楕円形ないし卵形で、規模は南北6m、東西5.35m、主軸方位はN-2°-Wである。壁は東54cm、西37cm、南55cm、北62cmの高さがあり、壁面は若干外傾している。床面は軟弱であるが、砂質土によるものであろう。炉は住居址のほぼ中央に位置し、東西114cm、南北101cmの不整形円をした掘込炉である。深さは10cm程度である。柱穴は変則的な位置に5本が建てられている。ピット1は深さ50cm、直径48cm、ピット2は深さ33cm、直径41cm、ピット3は深さ61cm、短径40cm、長径49cm、ピット4は深さ36cm、短径47cm、長径55cm、ピット5は深さ22cm、直径31cmである。いずれも円形のピットで、ほぼ垂直に穿たれているが、ピット1はやや外傾している。遺物は炉内や覆土中から深鉢形土器片3、浅鉢1、打製石斧7、凹石3などが出土している。この住居出土遺物はおよそ中期終末期に属すると考えられよう。



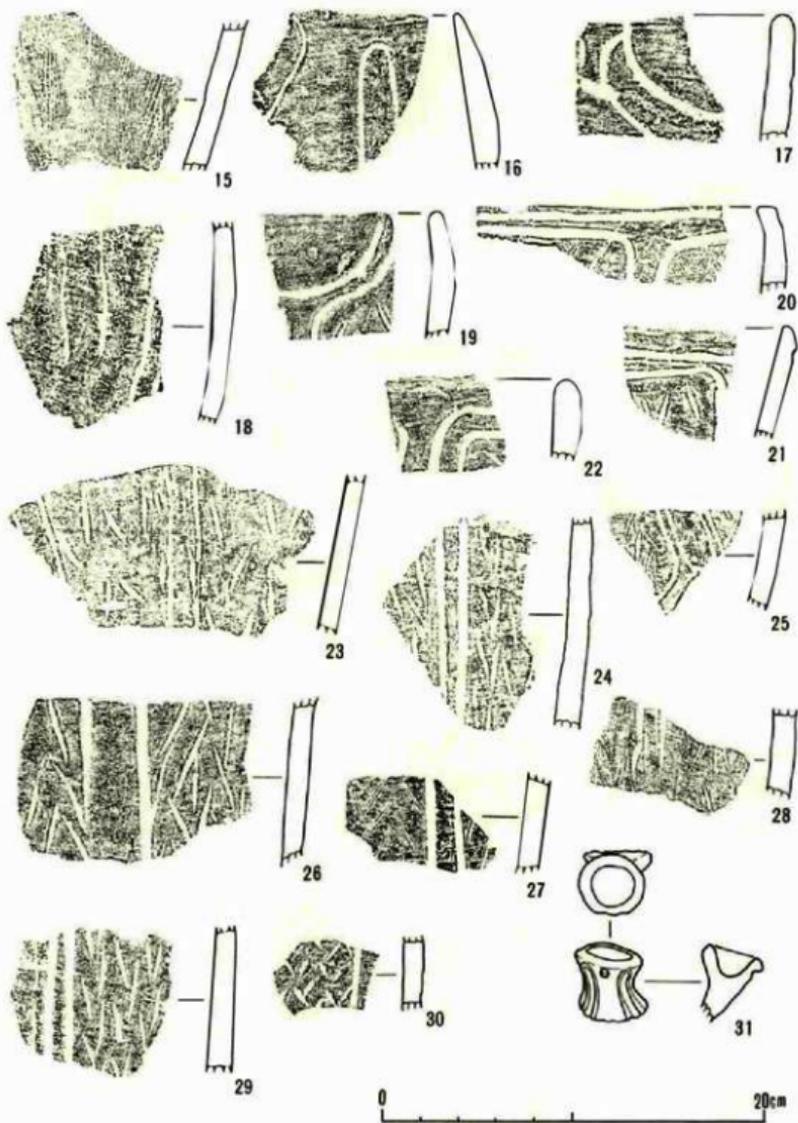
第29図 10号住居址平面図



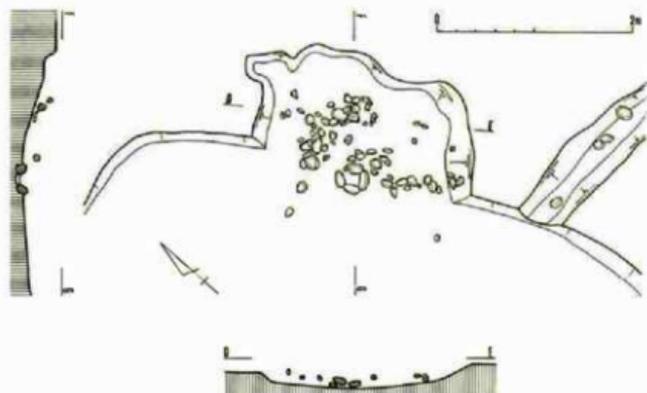
第30图 10号住居址出土土器 (1)



第31图 10号住居址出土土器 (2)



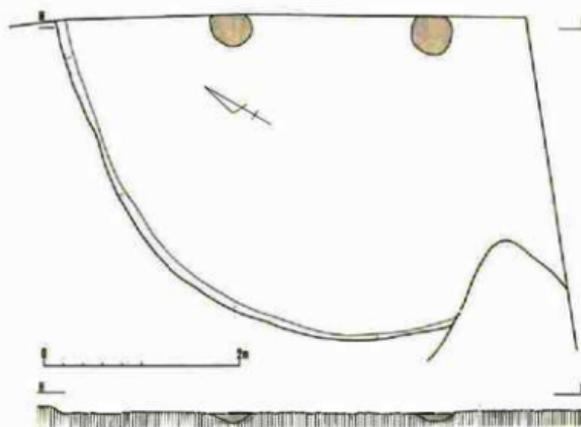
第32图 10号住居址出土土器(3)



第33図 11号住居址平面図

11号住居址（縄文）第33図

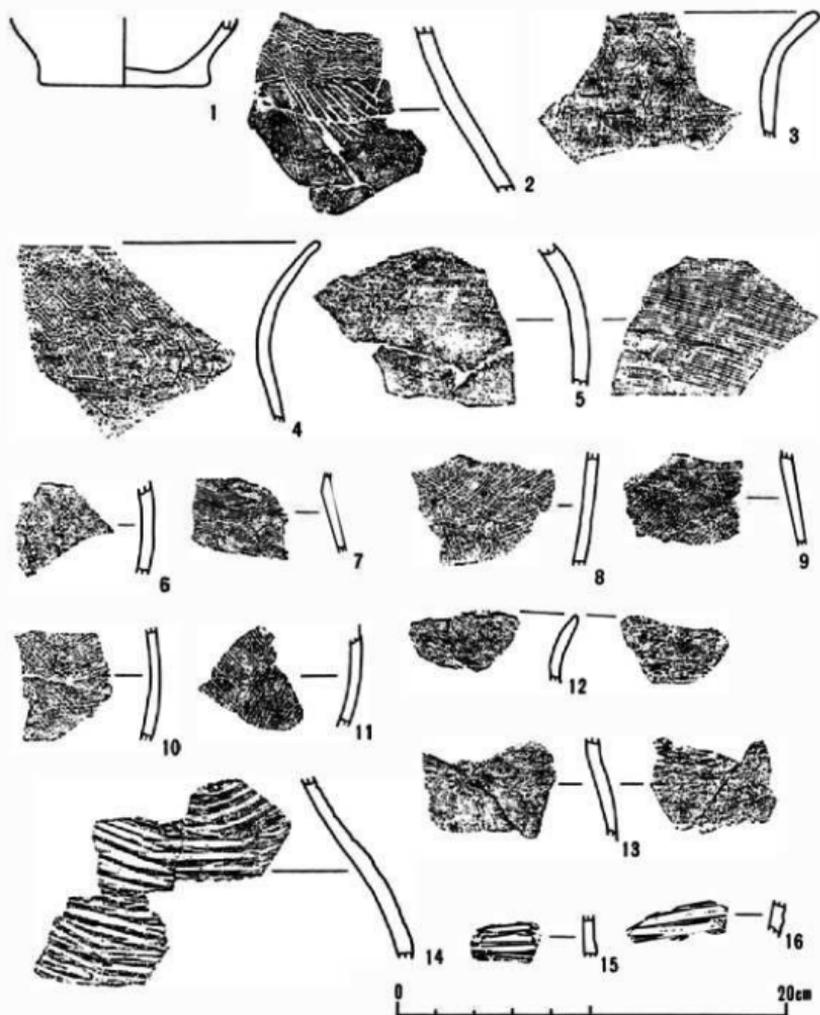
発掘区南側の住居址群中に位置し、4号住居址に住居西半を削られている。住居址のプランは不整形で規模も不明瞭であるが、4号住居に切られた部分で2.18mの径がある。主軸は炉の石組から判断してN-41°-Wとした。床は全体的に軟弱な砂礫層で造られており、壁も北東10cm、南東11cm、北西10cmの高さが認められるが、なだらかに遺構の外面に連続する。炉は遺構中央部に位置し、4号住居の竪穴造成よりかろうじて削除を免れた。炉は方形石組炉で、4個の長方形礫を組み合わせ造られ、31cm×35cm、深さ10cmの規模である。住居内からは河原礫が多数出土しているが、時期決定できる土器片は検出されなかった。しかし、炉の形態からは中期中葉頃と推定できよう。



第34図 12号住居址平面図

12号住居址（弥生）第34～35図

南集落の最南部に位置する。南小群に含まれるかどうかは判断ができない。住居址の大半が調査地区外で、西側一部を1号方形周溝墓に切られている。このため住居規模、主軸方位は全く不明である。壁は北から西の一部の約5.5mが検出されているが、壁高は約10cmである。住居床面は軟弱で、中央部付近に直径40～45cmの焼土が2箇所ある。こ



第35図 12号住居址出土土器

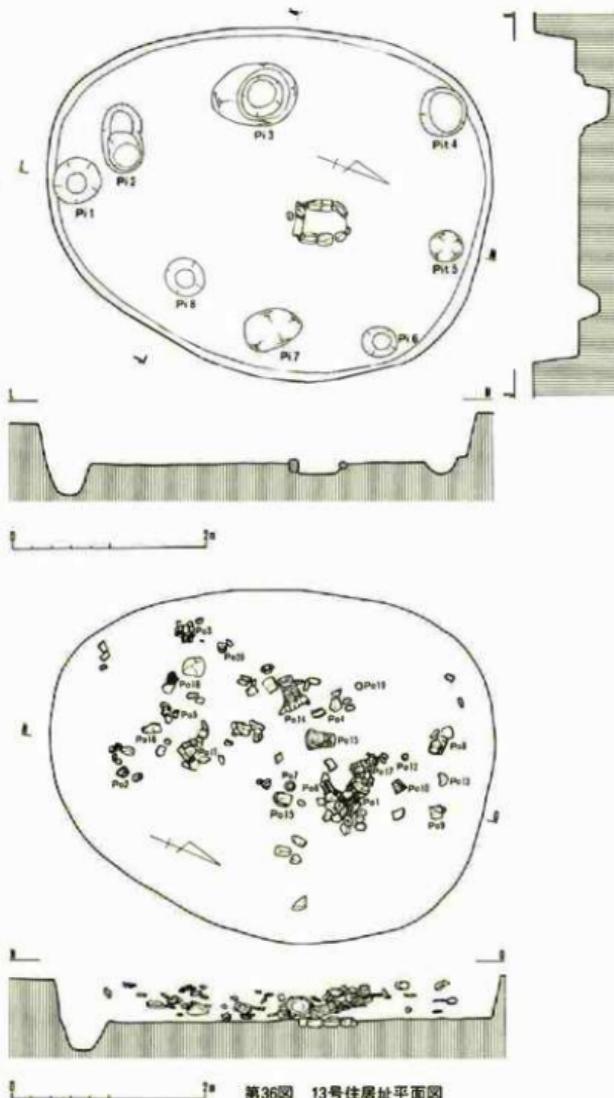
れが地床炉であるかは確定できない。なお、柱穴、貯蔵穴等の施設も不明である。

出土遺物はすべて覆土中で、弥生後期の壺や甕の破片を主体とし、若干の中期条痕文土器片を含む。

13号住居址（縄文）第36～39図

南側住居址群の北に位置し、他の遺構との重複関係は無い。住居規模は長軸4.55m、短軸3.65mの長円形を呈し、長軸と同一の主軸はN-12°-Wの方位を示す。壁の高さは東45cm、西40cm、南38cm、北45cmで、やや外傾した壁面になっている。遺構は砂層中に掘り込まれており、

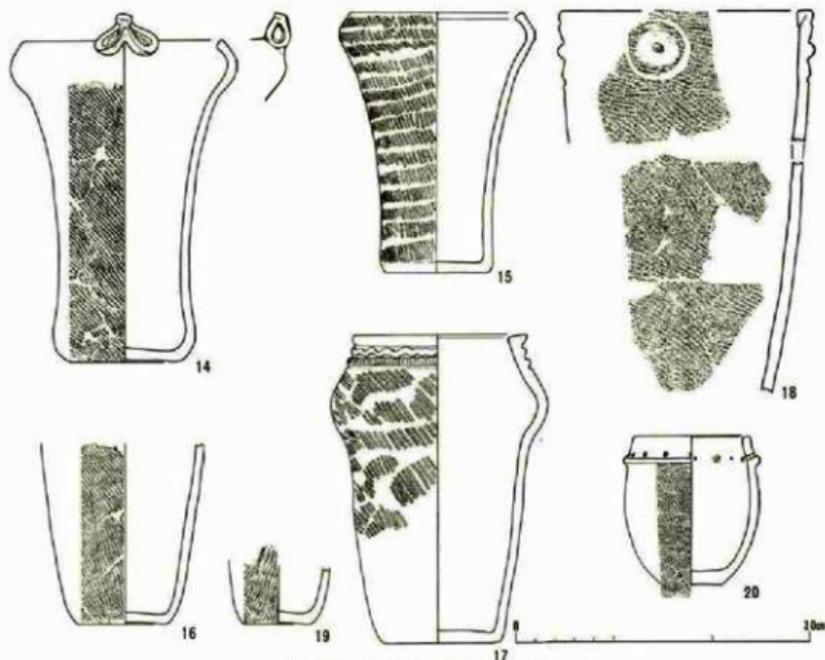
壁、床とも堅緻ではなく不明瞭で、特に床は凹凸が多く、北から南にかけて緩く傾斜している。覆土は下より白黄色砂層、黒褐色土層、黒色土層、黒味のある黒褐色土層、明るい黒褐色土層の順で堆積しており、特に最下層は地山の砂層と分離する作業が困難であった。遺物はレンズ状の堆積を示す黒色及び黒褐色土層中より出土している。従って、壁際の遺物は20～30cm程床面より浮いているのに、炉付近では床面直上に分布している。炉は住居の長軸上で北に偏って位置し、長方形の礫10箇を使用して長方形石囲炉としている。東西47cm、南北54cmで、内部は浅く掘り窪められているが、焼土はほとんど認められなかった。住居内のピットは8箇あり、壁に近く造られている。ピット3～ピット8の5



第36図 13号住居址平面図



第37图 13号住居址出土土器(1)

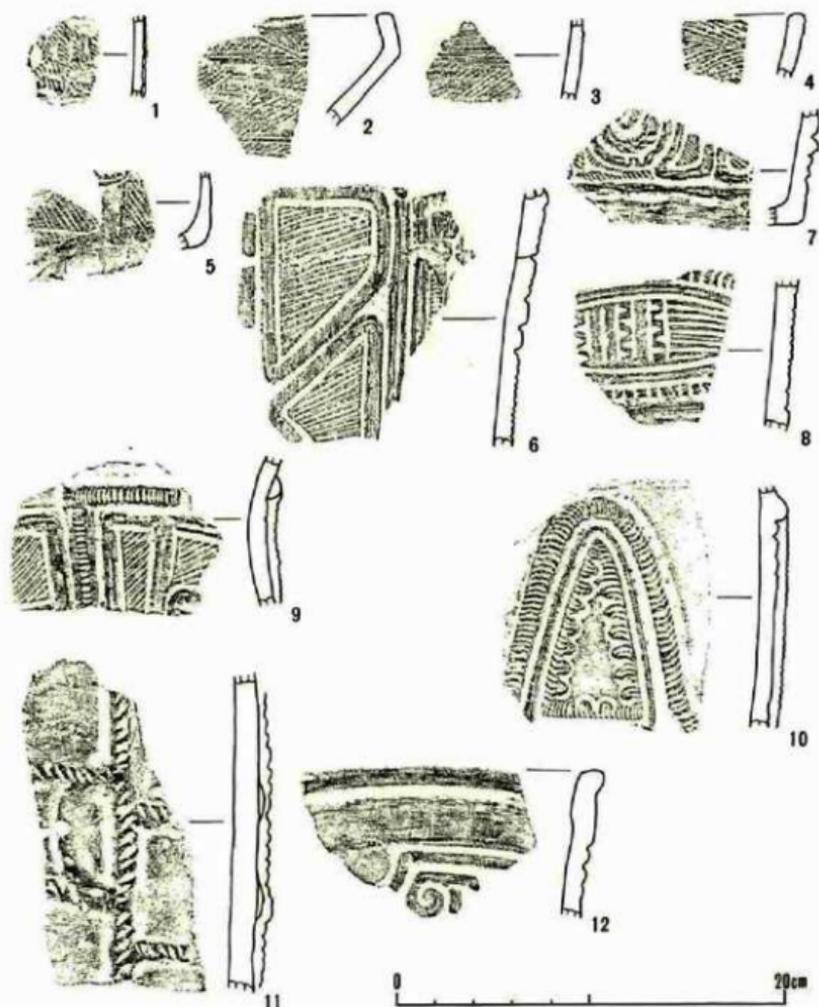


第38図 13号住居址出土土器(2)

本はほぼ規則的に並ぶが、ビット3とビット4の間は他より広い。ビット1は深さ32cm、直径50cm、ビット2は深さ47cm、直径41cm、3は深さ33cm、短径46cm、長径88cm、ビット4は深さ18cm、直径50cm、ビット5は深さ16cm、直径35cm、ビット6は深さ21cm、直径33cm、ビット7は深さ10cm、短径40cm、長径60cm、ビット8は深さ21cm、直径40cmである。支柱穴はビット1(2)、ビット3、ビット4、ビット5、ビット6、ビット8の6本ではなからうか。この他貯蔵穴、周溝などの施設は検出できなかった。

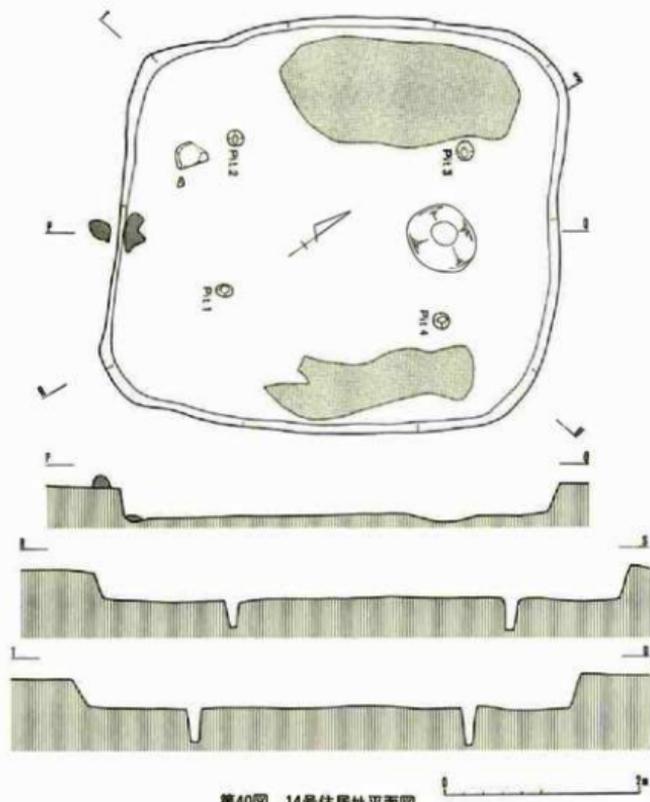
出土物は深鉢形土器17(破片も含む)、打製石斧17、横刃型石器3、凹石4、石鎌2などがある。土器のうち1~4は筒形の器形に縦区画文が施された土器で、6は素文の内湾した口縁に筒形胴の深鉢形土器で、頸部に横2条の連続爪形文を巡らし、粘土紐による逆S状貼付文で4分割し、貼付文の両側を連続爪形文、鋸歯状沈線で囲うものである。無文部には指頭痕が残っている。8も6に類似した手法で作られているが、貼付文は短い。10も2.5cmの粘土紐を上下2個4箇所配して、それぞれの周囲を連続爪形文で囲んでいる。地文は荒い縄文である。11は胴部に指頭痕の残る無文の深鉢形土器である。12、13は手捏ね土器で、どちらも指頭痕が顕著に残る。14~20は縄文地文の土器で、14は口唇に突起が1ヶ所付けられ、15は素緑、17は口縁部に波状粘土紐と刻みをもつ粘土紐が付けられる。18は円文が口縁に付けられるが、数は不明である。20は有孔罅付土器で、胴部には横位に縄文が施され、内面は良く研磨されている。

この他覆土中からは前期の北白川下層式、諸磯り式などの小片が出土しているが、本住居の時期は覆土中の大部分の土器と同じ縄文中期中葉と考えられよう。



第39図 13号住居址出土土器(3)

14号住居址（弥生）第40～41図

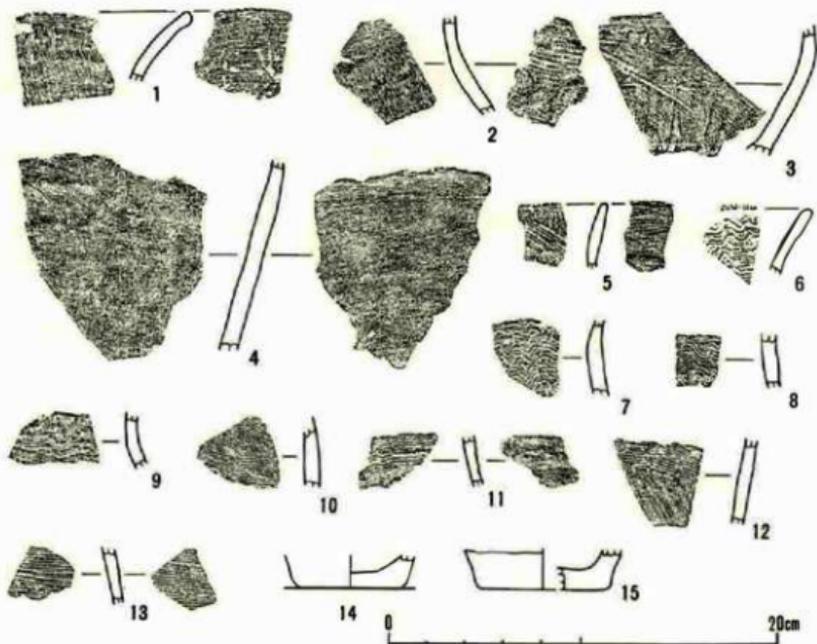


第40図 14号住居址平面図

南集落東小群の中央に位置し、他の住居址や遺構とは重複していない。住居は長軸で4.53m、短軸で4.35mの隅丸方形を呈している。主軸の方位はN-60°-Eで、環状集落の中央部を向くような入口方向をもっている。壁は北東30cm、南西30cm、南東30cm、北西30cmで、平均した壁高があり、壁面はやや外側へ傾斜している。床面は中央部分がやや良好であるが、柱穴より外側の東西両側には部分的

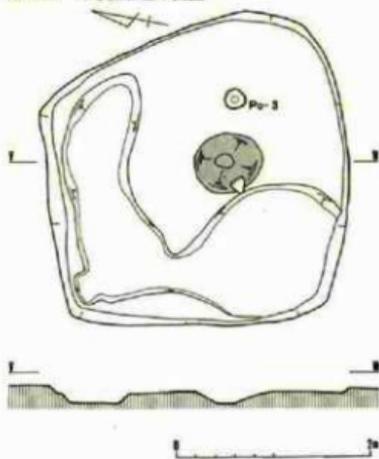
な貼床がある。東側では巾50cm、長さ2.3m、西側では巾約1m、長さ2.5mである。炉は北東側柱穴中央に位置し、直径約70cm、深さ8cmの皿状地床炉である。埴土は中央に直径25cmの範囲に残っている。柱は4本柱で、ピット1は深さ28cm、短径13cm、長径17cm、ピット2は深さ34cm、直径15cm、ピット3は深さ33cm、直径20cm、ピット4は深さ40cm、直径17cmであり、住居コーナー対角線上に造られている。この他の施設は、南壁入口部の上、下部には粘土塊が置かれている。梯子設置に伴うものであろうか。又、南東コーナーに近い所の床面直上に20cm×30cmの平石があり、調理用又はワラ等の加工用に使用されたものかもしれない。

遺物は覆土中より若干の弥生後期土器片が出土している。



第41図 14号住居址出土土器

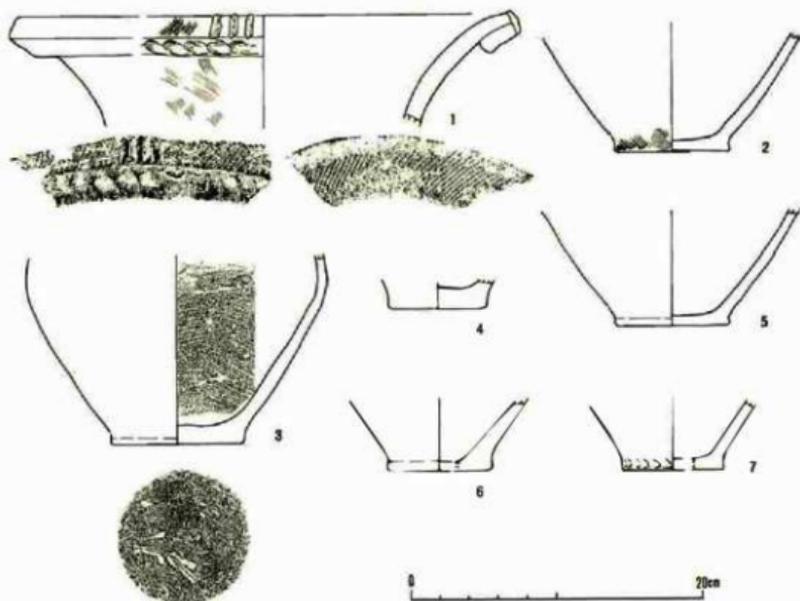
第42図 15号住居址平面図



15号住居址（弥生）第42～44図

南集落東群南端に位置し、他の遺構と重複はしていない。住居のプランは隅丸台形を呈し、長軸 3.25 m、短軸 3.11 m の規模は、本遺跡弥生時代住居最小である。壁は東 3 cm、西 8.5 cm、南 5 cm、北 18 cm で、外傾した壁面をもつ。床は炉周辺がやや残っているだけで、北から西側は床より 10 cm 程掘り下げられている。炉は住居のほぼ中央にあり、東西 62 cm、南北 70 cm、深さ約 12 cm の皿状に窪んだ地床炉である。

出土遺物では、炉の東に壺形土器が直立して置かれている。又、炉の縁に三角形の隙があるが、炉石ではない。



第43図 15号住居址出土土器（1）



第44図 15号住居址出土土器（2）

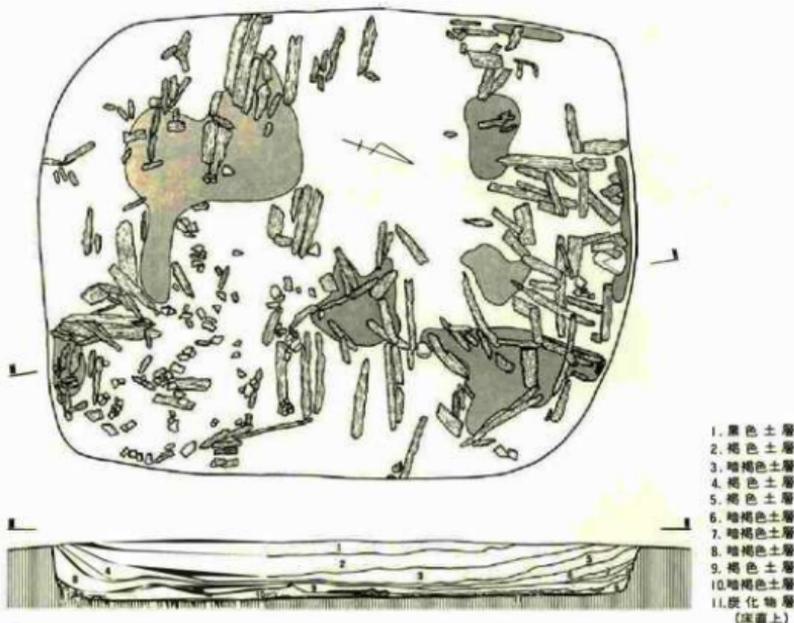
16号住居址（弥生）第45～48図

南集落北群の中央に位置し、12号土壌を切って造られている。住居の規模は長軸6.1m、短軸4.88mで隅丸の長方形を呈し、主軸はN-21°-Wの方位である。壁高は東55cm、西52cm、南55cm、北45cmと深く、壁面も垂直にちかい状態である。

本住居は1回の拡張が行なわれている為に、柱穴、梯子受穴、貯蔵穴等が2組ある。そこで、旧住居から説明する。

①旧住居

柱穴は4本で、ビット1は深さ33cm、短径19cm、長径24cm、ビット2は深さ43cm、短径15cm、



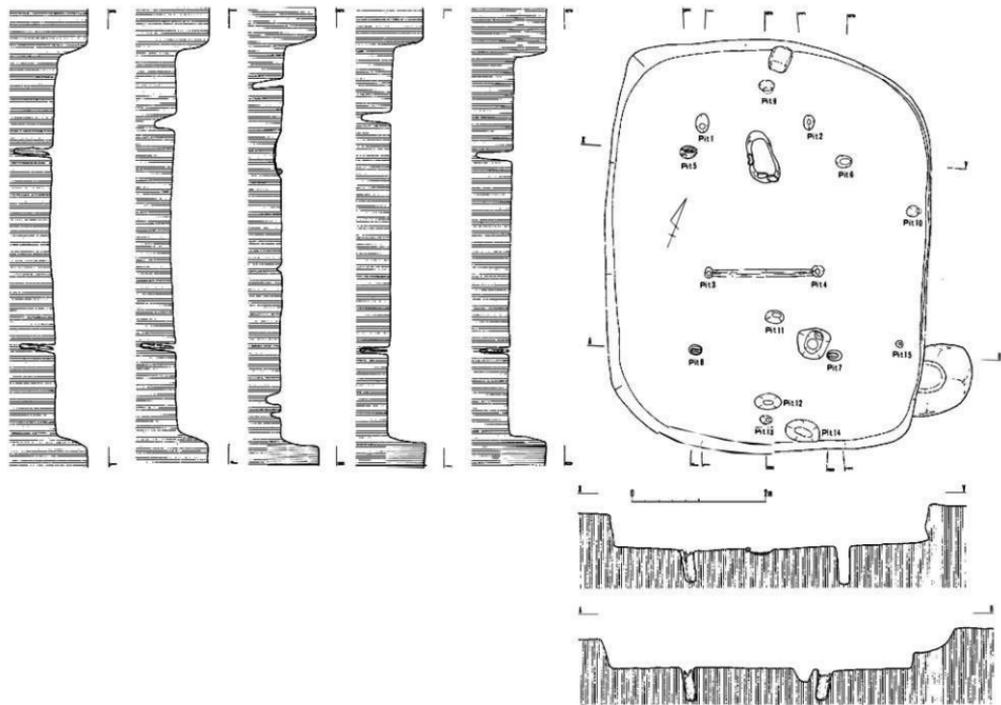
第45図 16号住居址平面図(1)

長径22cm、ビット3は深さ47cm、短径11cm、長径16cm、ビット4は深さ49cm、直径17cmである。柱根を残しているものは無い。梯子受穴のビット11は深さ32.5cm、短径20cm、長径27cmで若干南へ傾斜している。貯蔵穴は梯子受穴の東にあり、東西50cm、南北45cmの断面台形のビットである。ビット3とビット4の間には間仕切溝があり、巾12cmの断面V字形をしている。炉は北側柱穴間中央にあるが、新住居の炉と共用されている。地床炉であるが規模は不明。

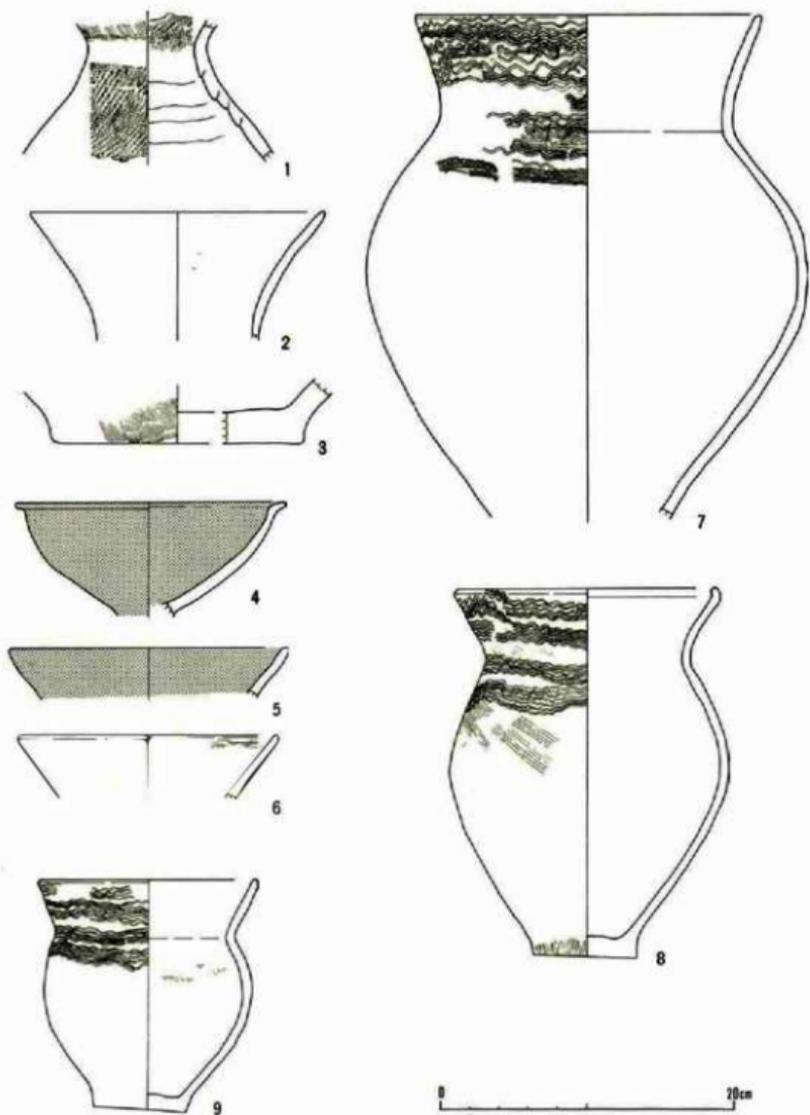
②新住居

主柱穴は5本、支柱穴2本で上屋を支えた住居で、ビット5は深さ57cm、短径18cm、長径24cmで、柱穴内に板状柱根が残っている。ビット6は深さ56cm、短径18cm、長径25cm、ビット7は深さ43cm、短径15cm、長径22cmで、中に板状柱根が残っている。ビット8は深さ52cm、短径14cm、長径20cmで、中に板状柱根が残っている。ビット9は深さ46cm、短径16cm、長径23cmである。柱穴のプランは主軸に対して直角方向に長径があり、板状柱根の残存方向と一致する。従って、柱穴プランが長円形のは、板状の材による柱で建物が建てられていたことが判る。貯蔵穴は南壁に接して東西52cm、南北32cmの大きさでロート状を呈する。梯子受穴はビット12であるが、深さ21cm、短径24cm、長径40cmである。梯子受穴の南に小穴がある。深さ16cm、短径12cm、長径18cm。その他支柱が東壁側に2本ある。

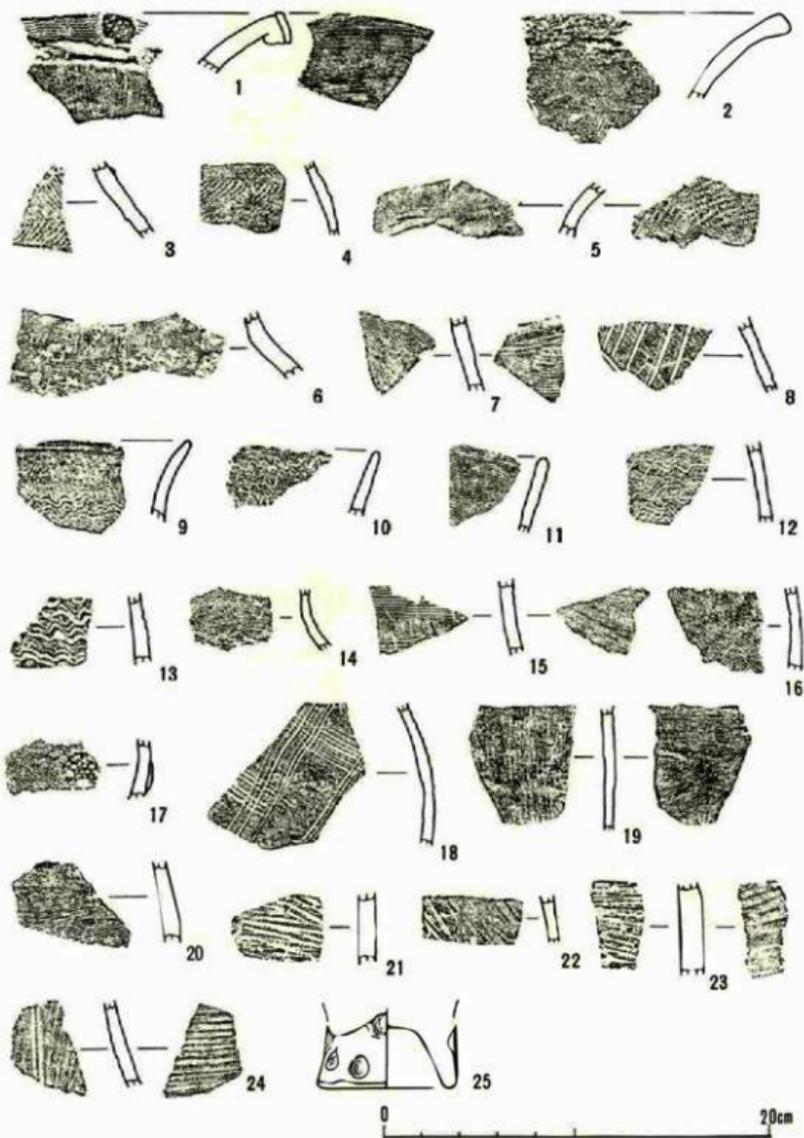
本住居は火災住居で、住居内は屋根、柱の炭化材が焼失のまま残っていた。この焼失面には、炭化した米粒をはじめ、壺、甕、高杯などの土器片等がある。



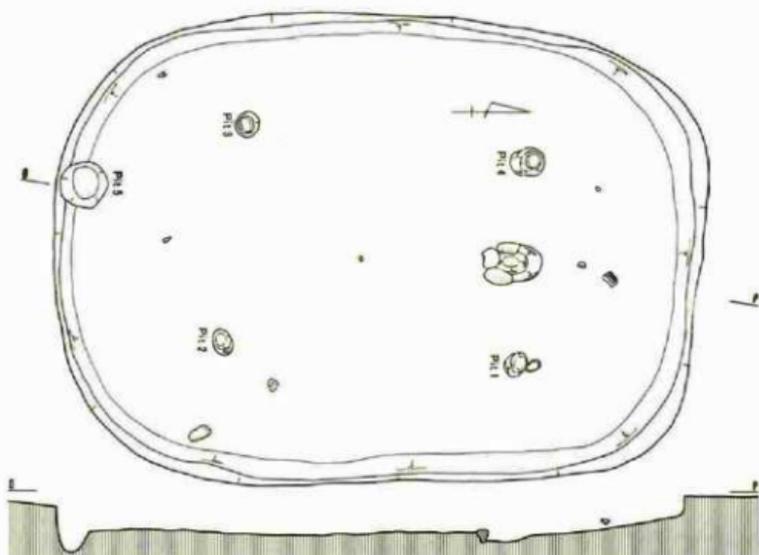
第46图 16号住居址平面图(2)



第47图 16号住居址出土土器(1)



第48图 16号住居址出土土器(2)

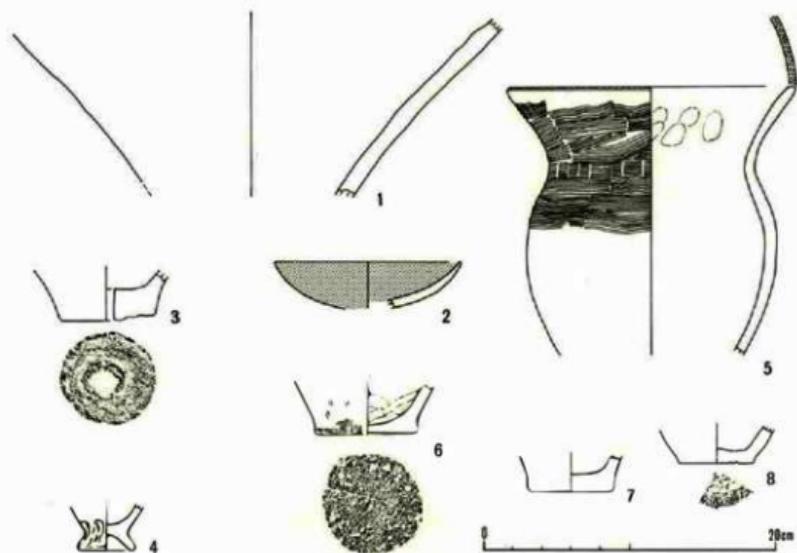


第49図 17号住居址平面図

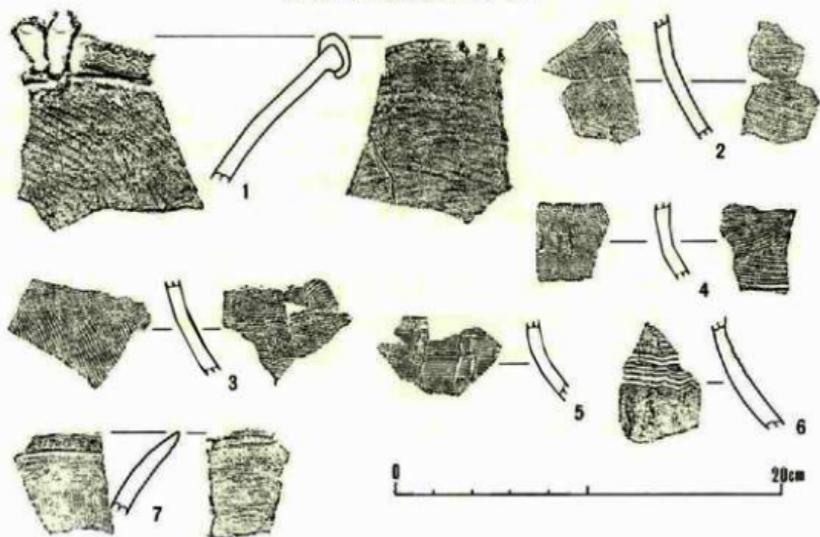
17号住居址（弥生）第49～52図

南集落北群の最西端に位置し、他の遺構とは重複しない。住居の規模は長軸 6.65 m、短軸 4.82 m で、長軸が主軸となっており、N-11°-E の方位をもつ。住居のプランは隅丸方形であるが、南壁部は半球状に膨らんでいる。壁は東 24 cm、西 29 cm、南 20.5 cm、北 23.5 cm で、壁面はほぼ垂直である。床面は柱穴間の中央部が良好で堅くしまっており、外側は軟弱である。炉は北側の柱穴間にあり、北を除く三方を長方形礎で囲った石囲炉である。炉の規模は東西 39 cm、南北 60 cm、深さ 10 cm で、炉中央部に焼土がある。柱穴は 4 本で、ピット 1 は深さ 60 cm、短径 22 cm、長径 25 cm、ピット 2 は深さ 65 cm、短径 20 cm、長径 28 cm、ピット 3 は深さ 61 cm、短径 24 cm、長径 27 cm、ピット 4 は深さ 63 cm、短径 29 cm、長径 34 cm である。4 本とも深く細い柱穴であり、各々の柱穴プランは主軸に対して直交する方向に巾がある。貯蔵穴は南壁に接して掘られ、主軸より西側に偏っている。東西 48 cm、南北 47 cm、深さ 49 cm で断面台形を呈する。

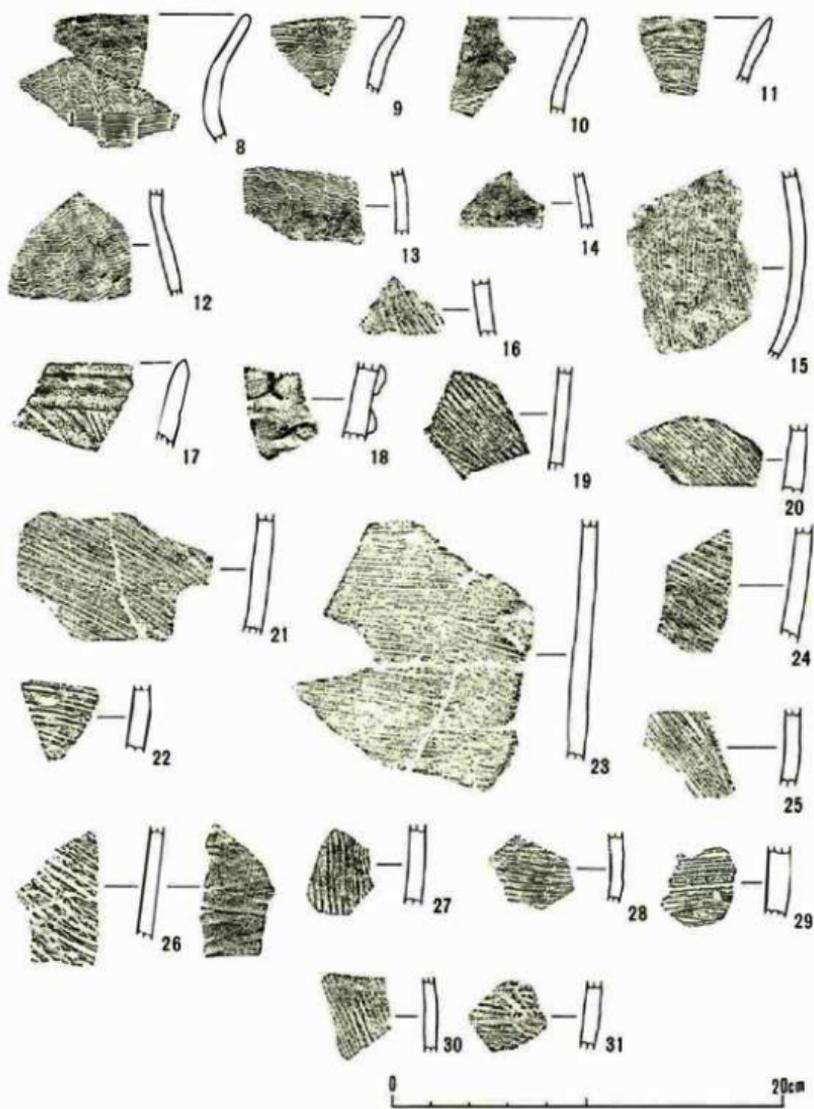
出土遺物はあまり多くはないが、壺、甕、高坏、甌などがある他、土偶、垂木状木製品などが特筆される。本土偶は正式発掘した弥生時代の土偶としては、本県初見のもので、頭部を欠損しているものの重要な資料である。



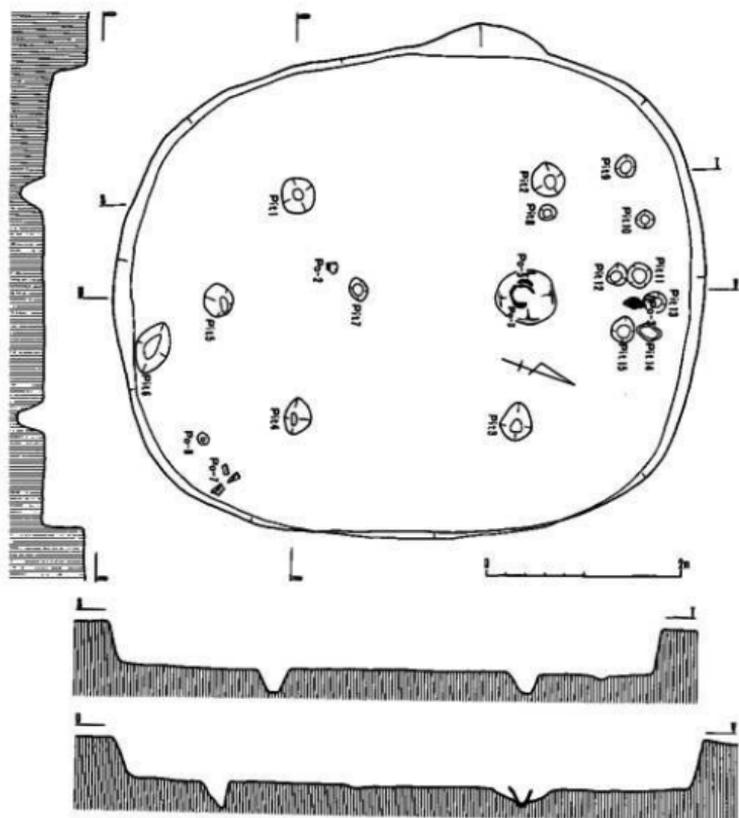
第50图 17号住居址出土土器 (1)



第51图 17号住居址出土土器 (2)



第52图 17号住居址出土土器(3)



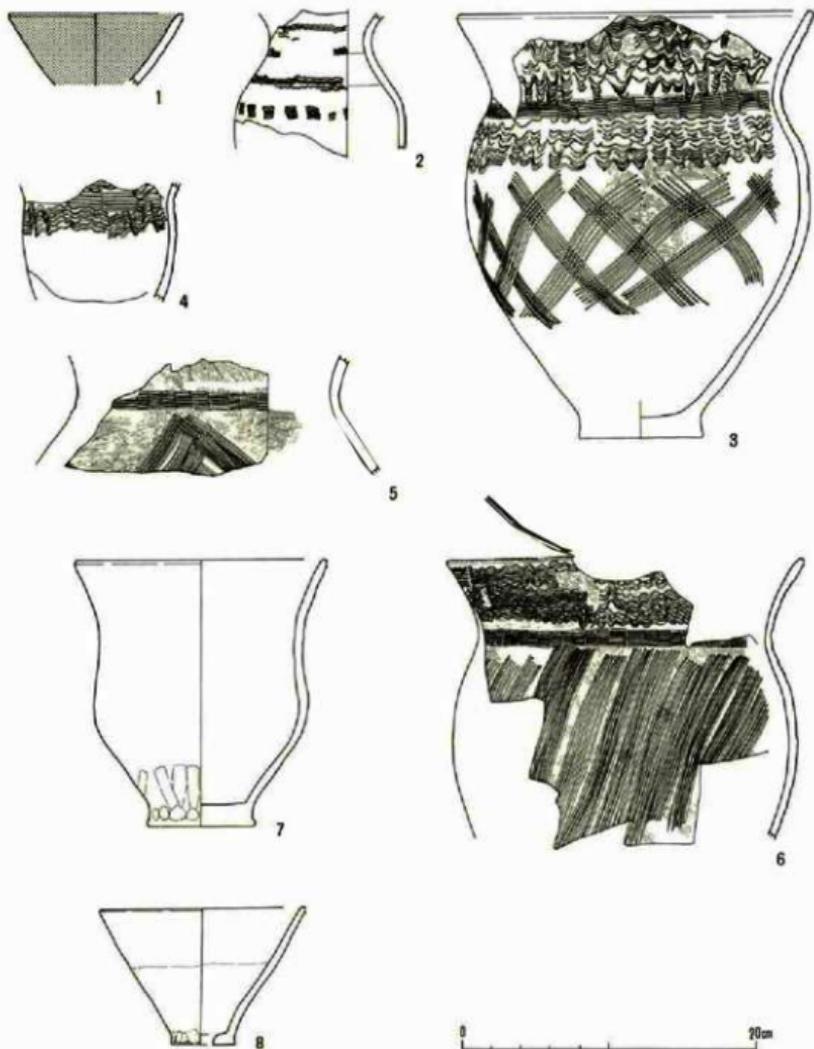
第53図 18号住居址平面図

18号住居址（弥生）第53～55図

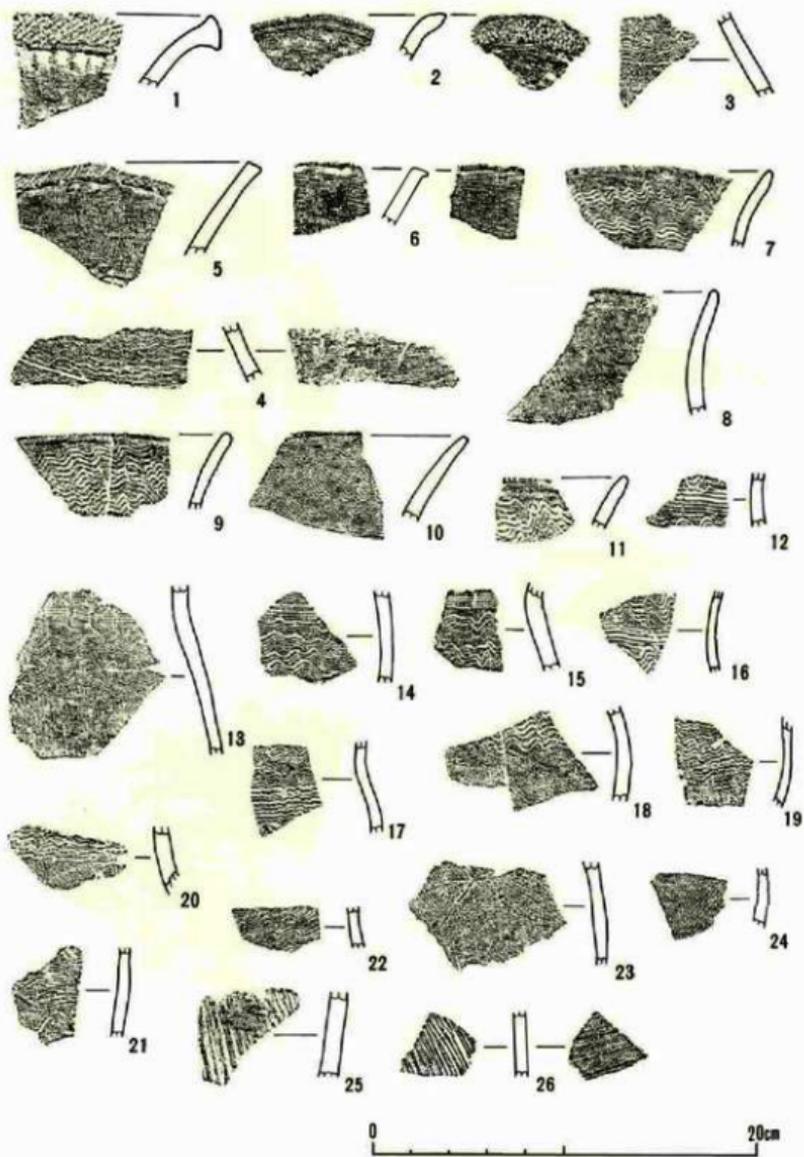
南集落北群の東部分に位置し、14号土壌を切って造られている。住居址のプランは楕円形に近い隅丸方形で、長軸 6.12 m、短軸 4.93 m である。主軸は $N-19^{\circ}-W$ の方向をもつ。壁は東 44 cm、西 44 cm、南 56 cm、北 42 cm の高さがあり、東壁は垂直であるが他は若干外傾している。床面は全面貼床で、黄褐色砂質土と暗褐色粘土質の混土でかたく踏みしめられている。炉は北側柱穴間中央に位置し、70 cm × 52.5 cm のロート状掘込中心に土器が直立して置かれる埋燬炉である。土器の土層は、上面に砂混り炭化物層があり、その下はサラサラした灰層と薄い黒色土層、最下には鳥の巣のような繊維が詰められていた。主柱穴は 4 本、支柱穴等が 9 本ある。主柱穴のピット 1 は深さ 25 cm、短径 33 cm、長径 38 cm、ピット 2 は深さ 24 cm、短径 34 cm、長径 36 cm、ピット 3 は深さ 18.5 cm、短径 32 cm、長径 40 cm、ピット 4 は深さ 26 cm、短径 28 cm、長径 38 cm である。炉北側に 5 本の小ピットがコの字状に配されている。特別な施設かもしれない。梯子受穴は南壁から 1 m 離れて主軸線上にあり、深さ 26 cm、短径 30 cm、長径 34 cm、底面プランは主軸に直交

する方向に細長い長円形である。貯蔵穴は南壁に接して造られ、深さ32cm、短径37cm、長径56cmである。

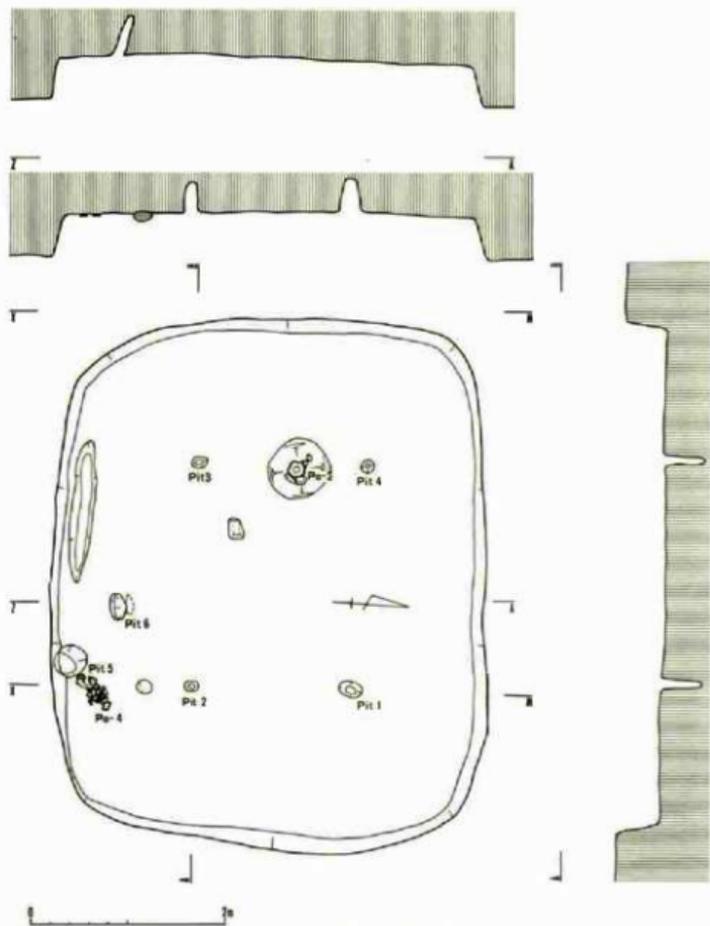
出土遺物は壺破片、甕、甌完形品、磨製石鏃などが出土している。磨製石鏃を本遺跡中最も多く保有していた住居である。



第54図 18号住居址出土土器(1)



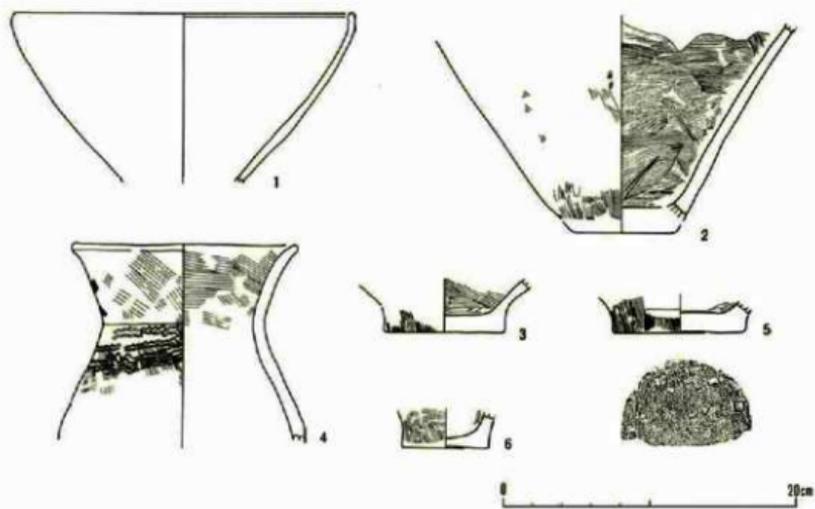
第55圖 18号住居址出土土器(2)



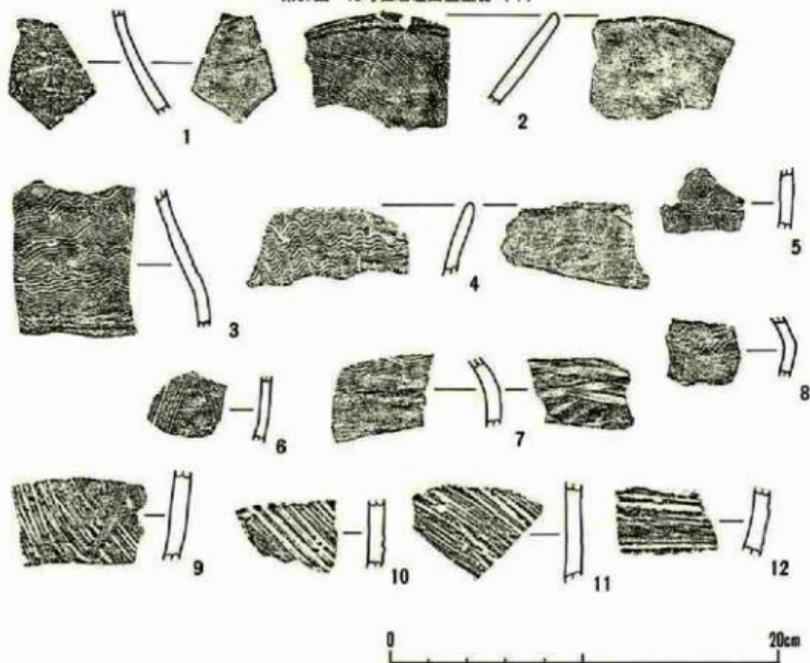
第56図 19号住居址平面図

19号住居址（弥生）第56～58図

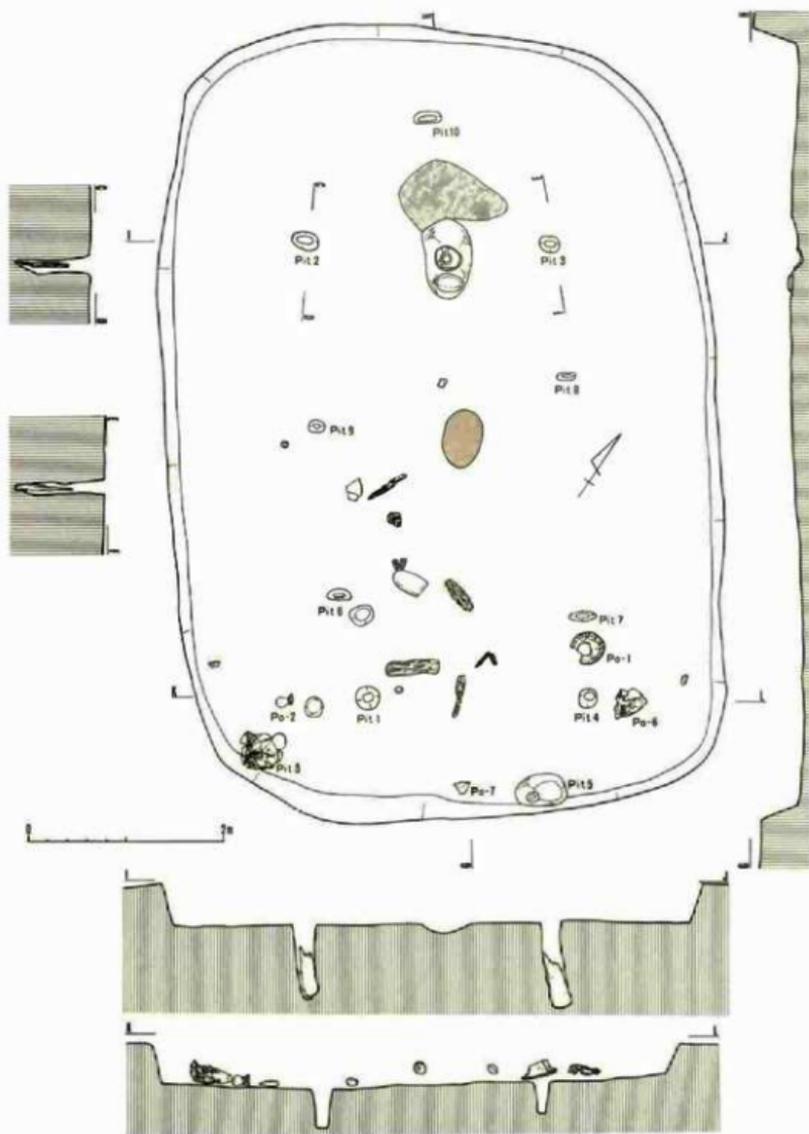
南集落北群のほぼ中央に位置し、57号土壌を切っている。住居は隅丸方形のプランを呈し、長軸5.96m、短軸4.48mの規模である。この住居は他の住居と梯子受穴の位置に対する炉位置が異なっており、通常主軸上にある両者が、ここでは、直交する軸に炉がある。従って、入口はN-0°-Eの主軸上にあり、炉はN-90°-Wの軸にある。壁は東45cm、西40cm、南44cm、北42cmの高さがあり、やや外傾した壁面である。床面は全体的に良くしまっており、貼床となっている。炉は西側柱穴間に位置し、皿状の窪み中央に土器底部を置き、小礫2個を南に添えている。支柱穴は4本で、ピット1は深さ32cm、短径16cm、長径25cm、ピット2は深さ41cm、短径11cm、長径15cm、ピット3は深さ41cm、短径11cm、長径16cm、ピット4は深さ48cm、短径14



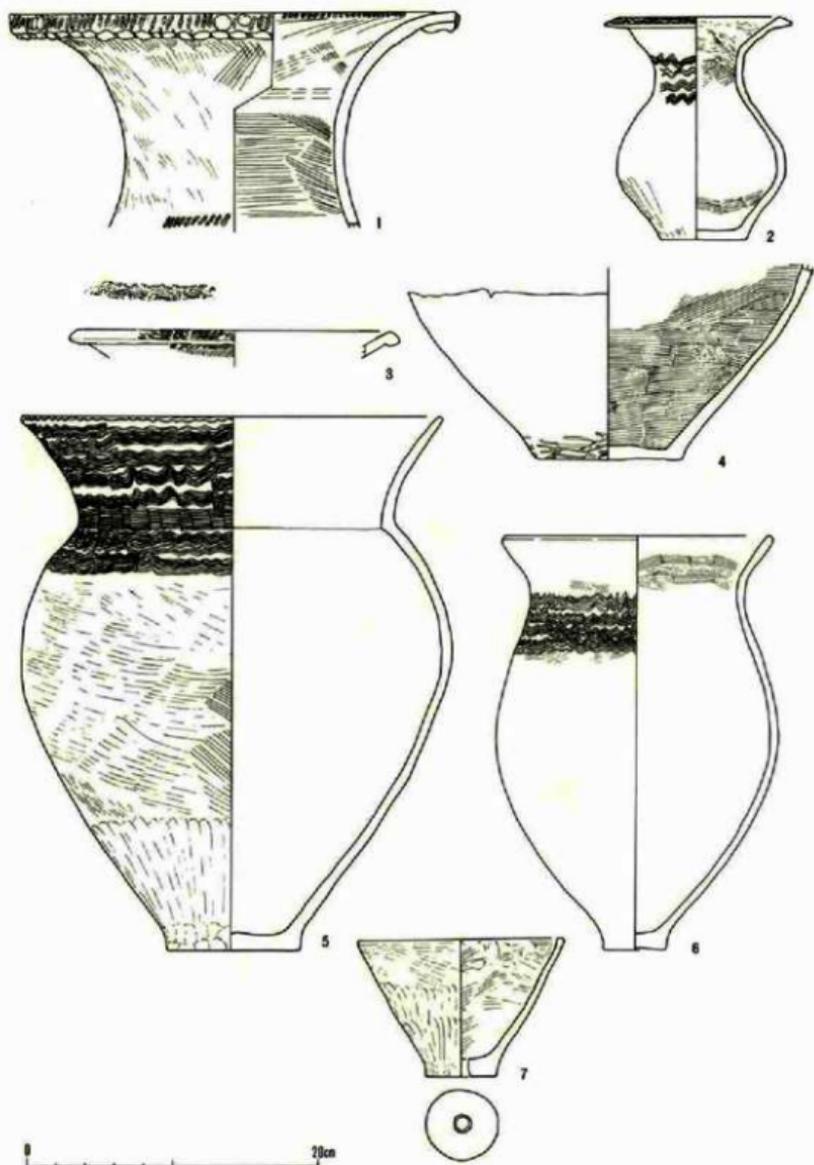
第57图 19号住居址出土土器 (1)



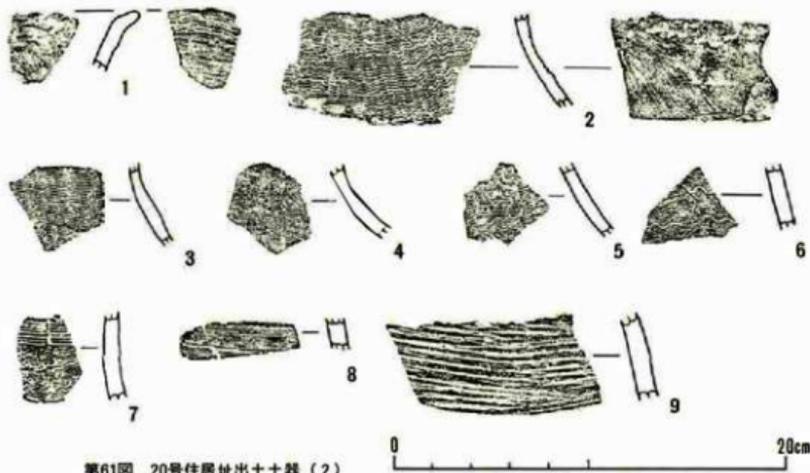
第58图 19号住居址出土土器 (2)



第59图 20号住居址平面图



第60图 20号住居址出土土器(1)



第61図 20号住居址出土土器(2)

cm、長径14cmである。梯子受穴は東西27cm、南北17cm、深さ42cmで、入口方向に27°傾斜して掘られている。貯蔵穴は南壁に接しているが、深さ18.5cmで直径30cmで、内側に傾斜して掘られている。出土遺物は少なく、高坏、壺、甕等の破片が主体である。

20号住居址(弥生)第59～61図

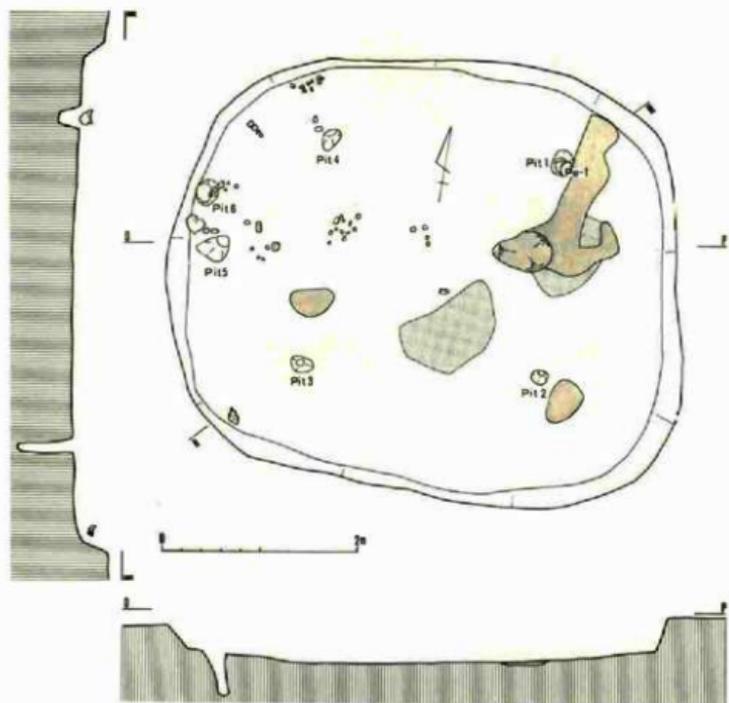
南集落北群の北端に位置し、25号土壌、11号特殊遺構を切って造られている。住居は隅丸長方形を呈し、長軸 \approx 15m、短軸5.68mの規模をもつ。主軸はN-39°-Wの方向である。壁は東30cm、西42cm、南36cm、北43cmの高さで、壁面は若干外傾している。床面は貼床で特に柱穴に囲まれた中央部が良好に堅くなっている。本住居は拡張住居で、新住居の床面を剥いだ段階で、炉と柱穴が下層より発見されている。そこで以下は新旧の住居に分けて説明する。

①新住居

主柱穴は5本で、ビット6は深さ62cm、短径12cm、長径25cm、ビット7は深さ59cm、短径10cm、長径24cm、ビット2は深さ79cm、短径19cm、長径27cm、ビット3は深さ90cm、短径17cm、長径21cm、ビット10は深さ48.5cm、短径12cm、長径27cmである。梯子受穴は無いが貯蔵穴は深さ29.5cm、短径33cm、長径52cmのロート状を呈する。炉は埋甕炉であるが、南側に楕円形の偏平な枕石を置いている。これらは東西49cm、南北82cmの皿状窪みの中にある。なお柱穴内に板状柱根が残る。

②旧住居

主柱穴は4本で、ビット1は深さ42cm、直径24cm、ビット4は深さ34cm、短径18cm、長径20cm、ビット9は深さ29cm、短径13cm、長径17cm、ビット8は深さ30.5cm、短径8cm、長径19cmである。柱根が残っているものは無い。炉は北側柱穴間に位置し、地床炉(40cm×60cm)である。梯子受穴や貯蔵穴はない。出土遺物は床面上より壺、甕、甑、炭化材などが出土している。



第62図 21号住居址平面図

21号住居址（弥生）第62～64図

北集落東端に位置し、16号周溝墓に重なる。北集落の住居址群は南集落に比べ密集しており、かつ、本遺跡発見の契機となったボックスカルバート掘削部分があるため、その南と北との関係や、住居の小群を把握するのは困難である。従って、ここでは便宜上ボックスより南を北集落南群と呼び、北側を北集落北群と呼んでいきたい。

住居は不整形に近い隅丸方形で、長軸5.31m、短軸4.46mの規模をもち主軸の方位はN-78°-Eを示す。壁は西壁約25cmでくずれが多くしまりが無い。東壁は35cmでやはりくずれが多く、南壁は30cm、北壁は25cmで、各辺の中央部は垂直に立ち上っているが、コーナでは傾斜が強くなる。床面は黄褐色砂質土で貼られ、ほぼ平坦であるが、北東部が5cm程高い。住居中央部と炉の周辺の床面直上にはカーボンが集中していた。炉は東側の柱穴間中央に位置し、40cm×60cmの皿状窪みをもつ地床炉である。炉内の焼土と炭の厚さは約5cmであった。柱穴は4本あり、ピット1は深さ26cm、短径21cm、長径27cm、ピット2は深さ63cm、短径15cm、長径18cm、ピット3は深さ57cm、短径18cm、長径21cm、ピット4は深さ20cm、短径18cm、長径24cmである。梯子受穴は西壁直下にあり、深さ46cm、短径23cm、長径32cmで壁外側に向けて20°位傾斜している。

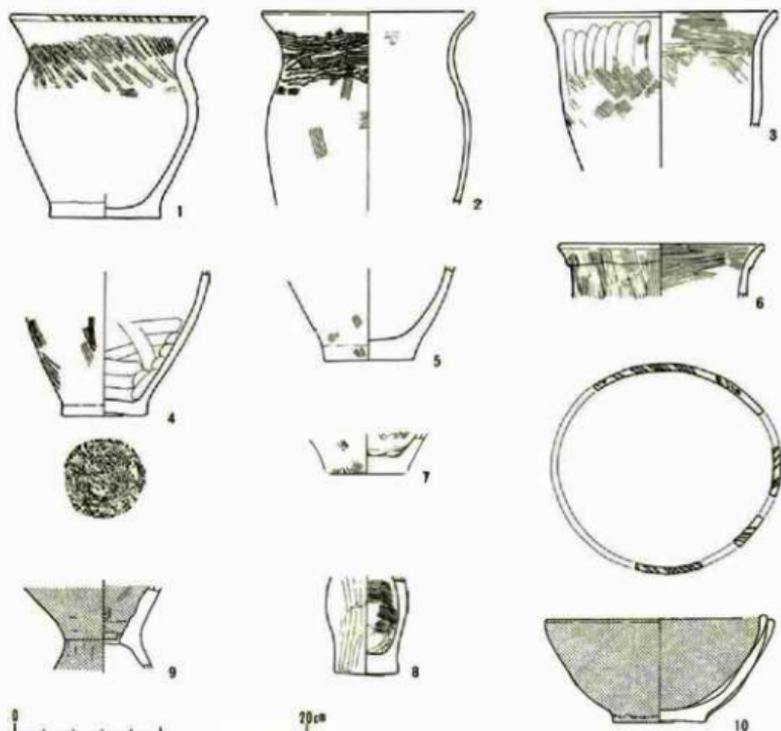
貯蔵穴は壁に接して位置し、深さ23cm、短径23cm、長径28cmで垂直に掘られている。

覆土はレンズ状の堆積をしており大きく2層に分けられる。上層は黒色粘質土で堅くしまっており、白色小砂粒を多く含んでいる。下層は数枚に分かれるが、暗灰褐色粘質土と黄褐色砂質土のブロックが混っている層が主体となっている。なお住居北東部には炭と焼土が床面より15cm程浮いて検出された。住居がある程度埋った時点で何か焼いたのではないか。

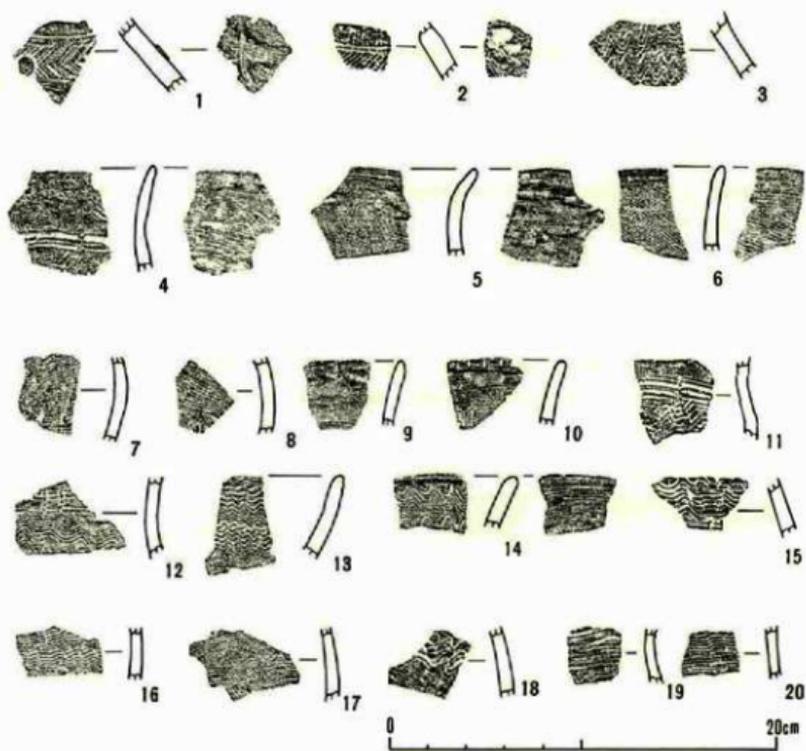
出土遺物は少ない。完形にちかい甕及び甕破片と、赤彩された碗、器台等の土器がある。

22号住居址（弥生）第65図

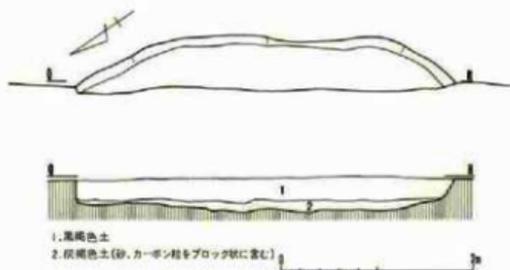
北集落南群に含まれるが、住居址の大部分をボックスカルバートの掘削工事によって削り取られてしまい、わずかに巾70cm、長さ4mの範囲が残って調査されたにすぎない。住居のプランは隅丸方形と考えられ、主軸はN-34°-Eである。壁の高さは東壁で20cmを測るが、壁面はやや外傾している。住居覆土は黒褐色土で、床面は灰褐色土を踏み固めているが、しまりは無い。柱穴その他の施設は不明である。出土遺物は覆土中や床面直上から土器片が若干出土している。



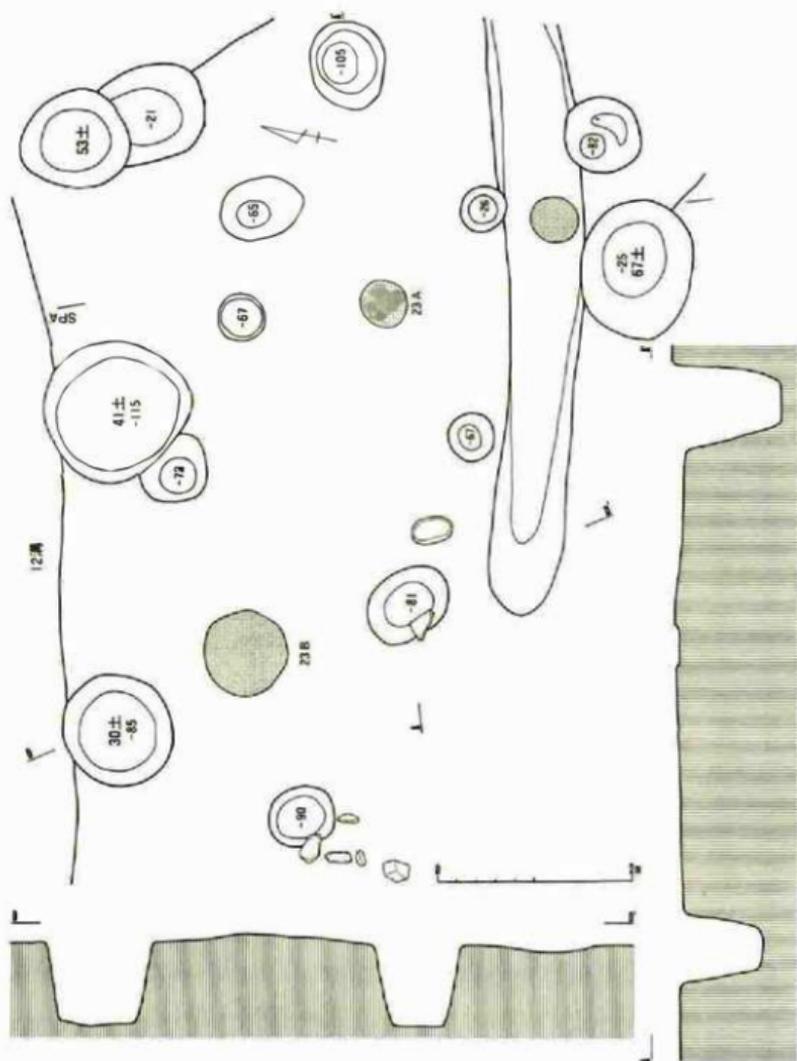
第63図 21号住居址出土土器（1）



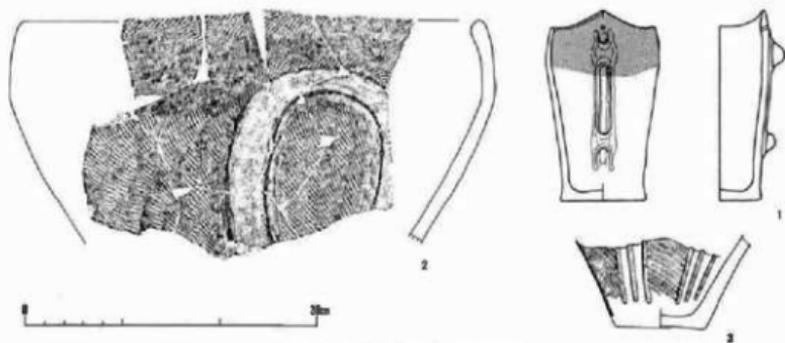
第64図 21号住居址出土土器（2）



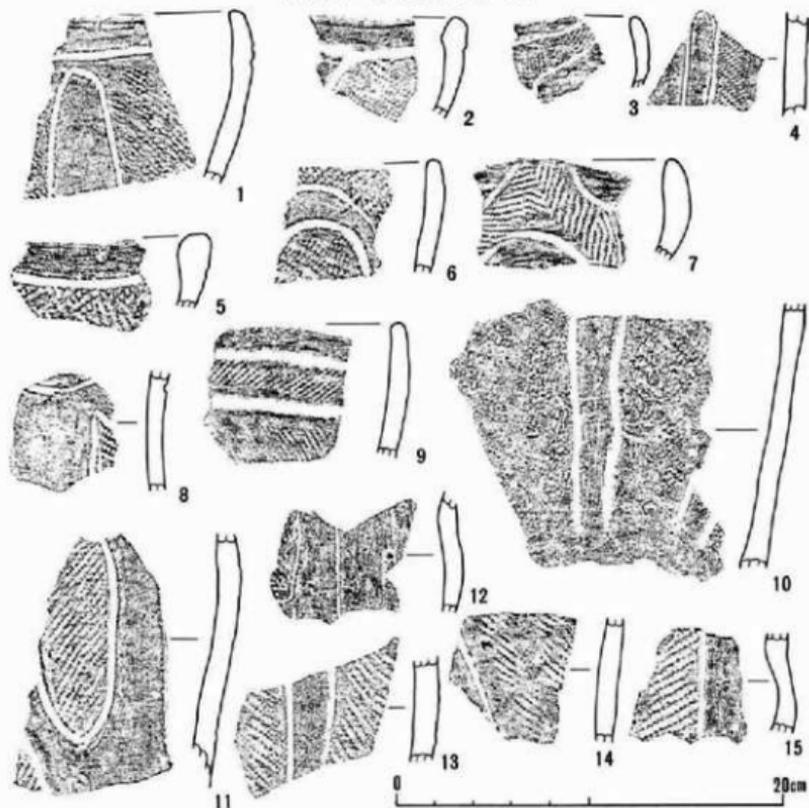
第65図 22号住居址平面図



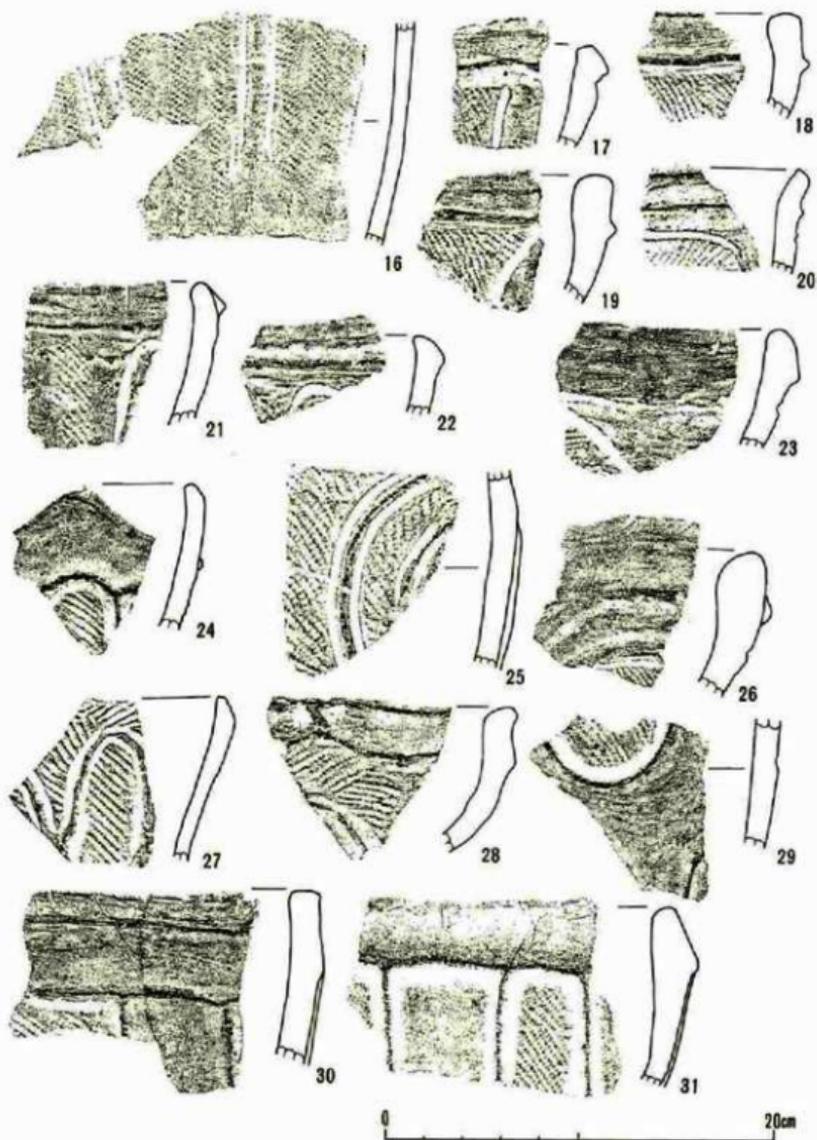
第668图 23号住居址平面图



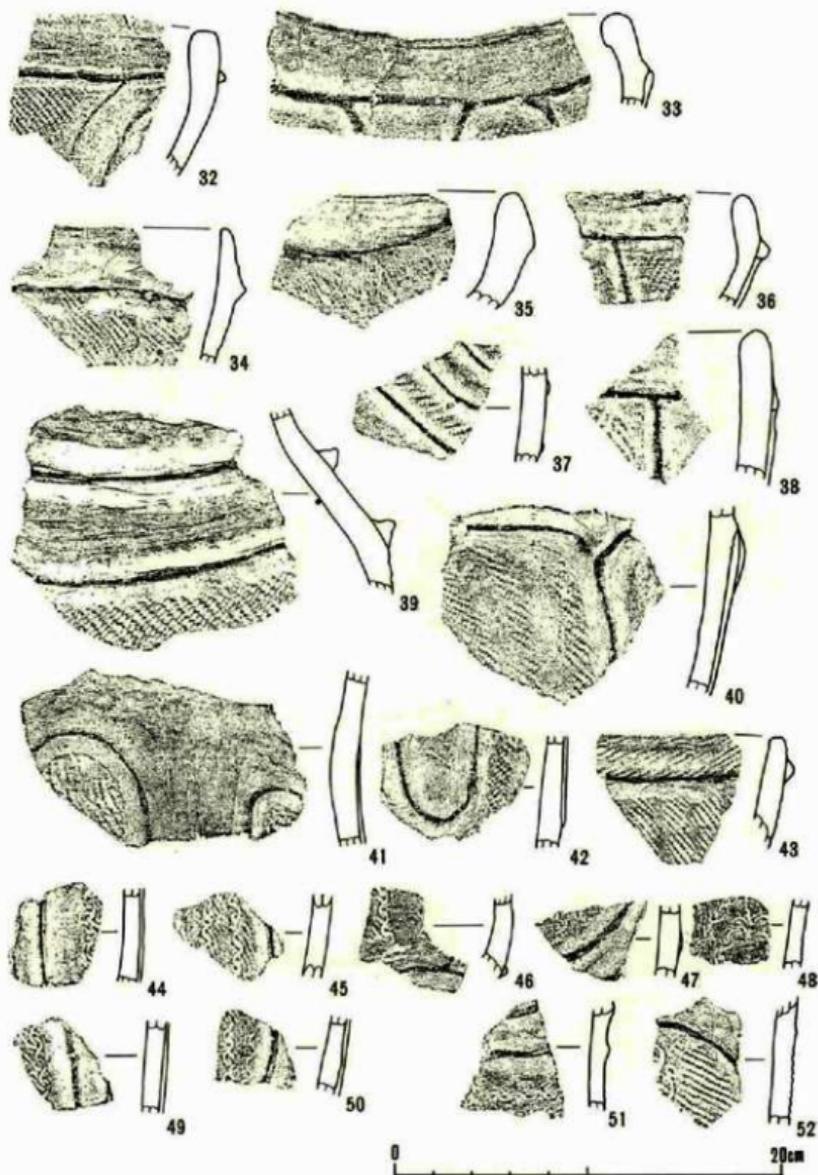
第67图 23号住居址出土土器 (1)



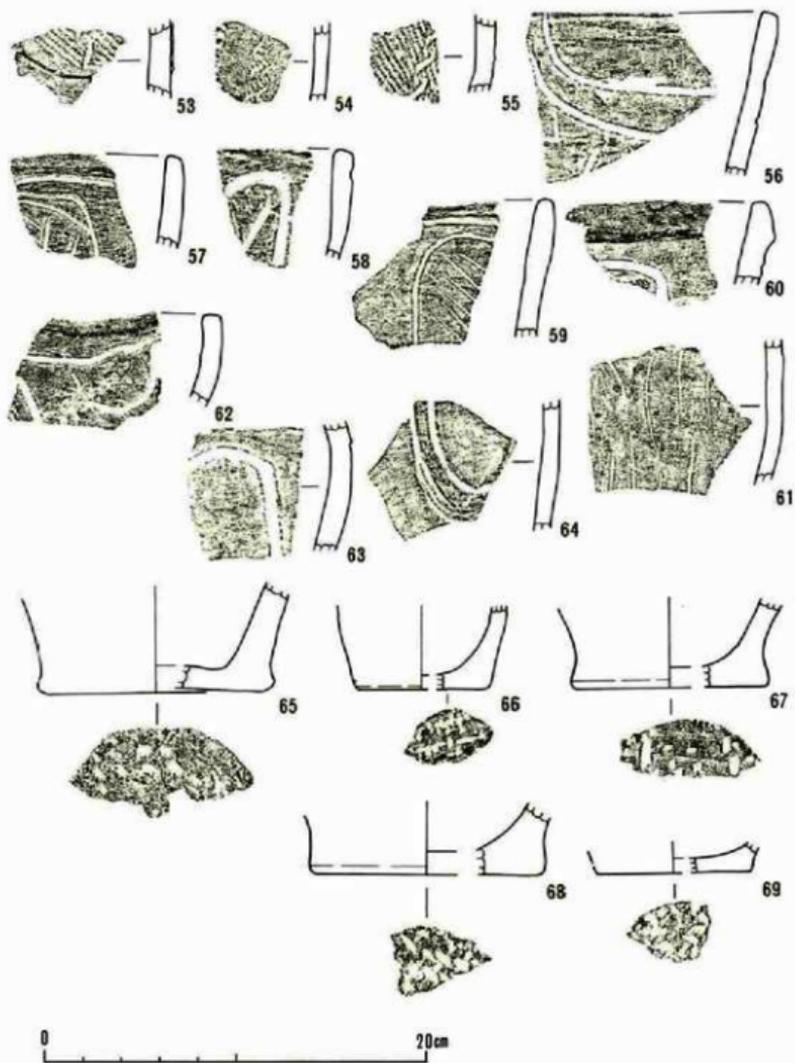
第68图 23号住居址出土土器 (2)



第69图 23号住居址出土土器(3)



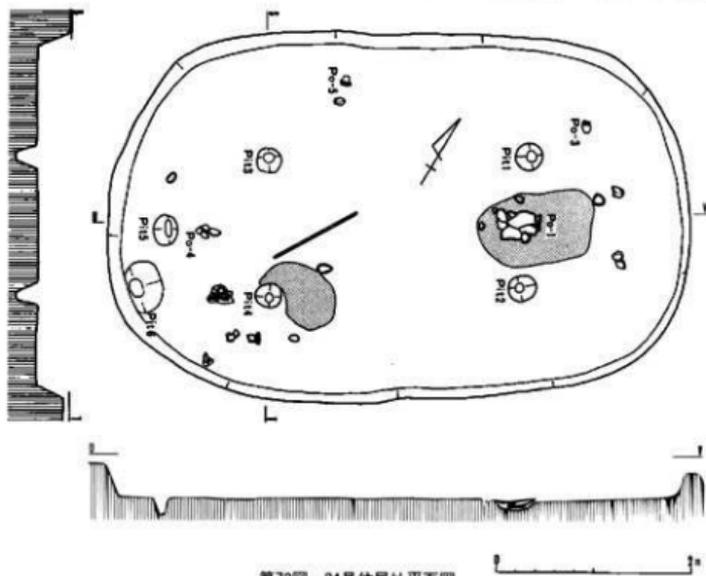
第70圖 23号住居址出土土器(4)



第71图 23号住居址出土土器(5)

23号住居址（縄文）第66～71図

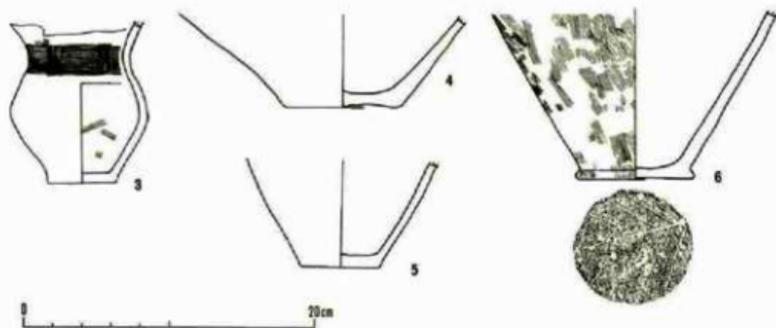
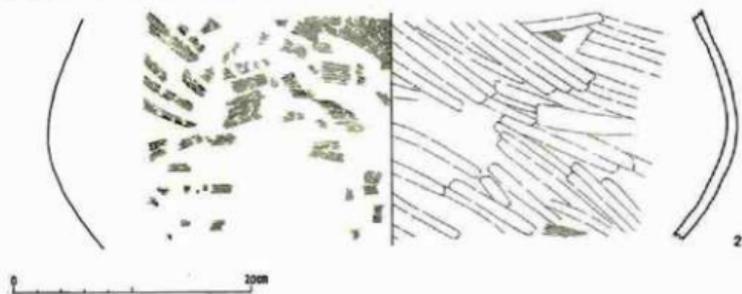
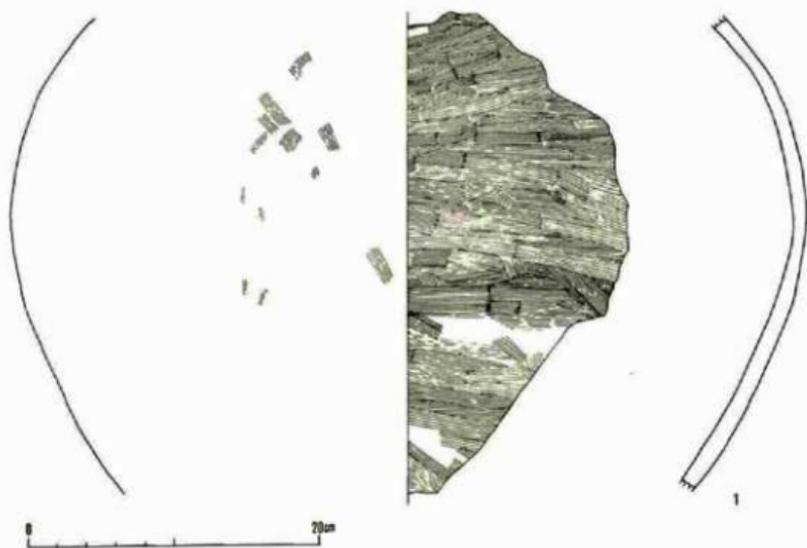
遺跡中央部のV字溝南に位置し、13溝をはじめ、30号土壌、41号土壌、67号土壌などと重複している。地床炉と思われる焼土が2ヶ所あり、これを23A、23Bとした。23Aの周囲には7～8本のピットがほぼ環状に分布している。これらが柱穴であるとすれば、直径5～6mの円形住居になるであろう。又、23Bの周囲には30号土壌を含めて4本のピットがある。これも5m位の円形住居になる可能性があるが確定はできない。23Aの焼土は直径50cm、23Bの焼土は直径90cmの円形である。出土土器で第67図1は23Aの炉南側より出土したものであるが、他は23号住居範囲の覆土中より出土した。これらの土器は縄文中期終末に属する土器群で、所謂曾利V式、又は加曾利EIV式土器である。特筆すべきは第70図44～52の破片で、伊那地方に分布する結節縄文土器と類似するものである。その他打製石斧、磨製石斧、磨石等が出土している。



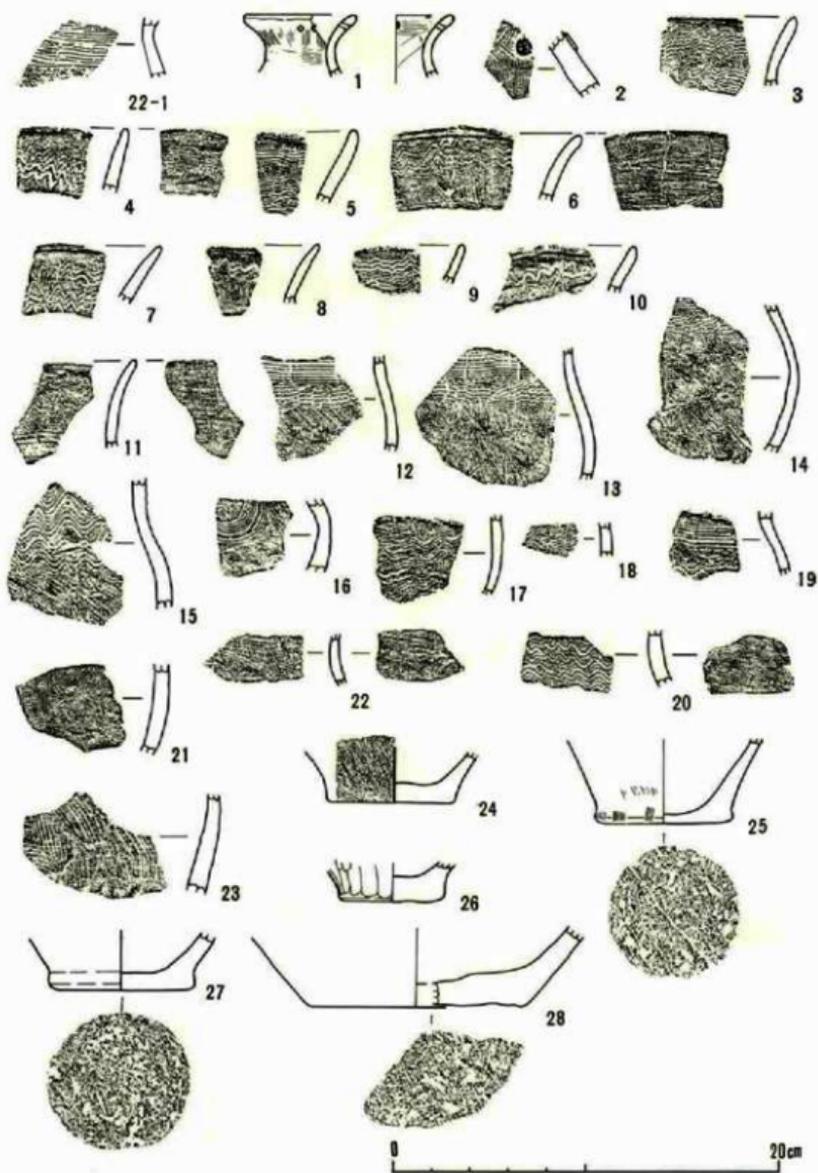
第72図 24号住居址平面図

24号住居址（弥生）第72～74図

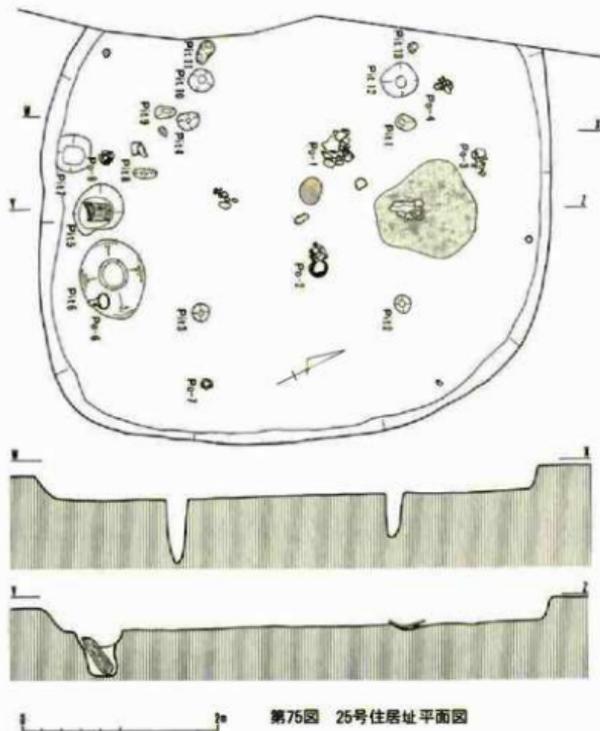
北系落南群の南に位置し、他の遺構とは重複しない。住居址プランは長円形を呈し、長軸6.0m、短軸3.77mである。主軸は長軸と一致し、N-56°-Eの方位をもつ。壁は南東24cm、北西34cm、南西34cm、北東26cmの高さがあり、やや外傾斜の壁面である。床面は地山を床とし、ほぼ水平に造られる。床面には炭化物を含む薄い層が1枚広がっていた。柱穴は4本で、ピット1は深さ20cm、直径28cm、ピット2は深さ24.7cm、直径27cm、ピット3は深さ21cm、直径25cm、ピット4は深さ22cm、直径26cmである。炉は北東側柱穴間中央に位置し、東西74cm、南北117cmの範囲に焼土が広がる。焼土の真中には土器片が敷かれ、その下には40cmの円形皿状ピ



第73图 24号住居址出土土器(1)



第74图 24号住居址出土土器(2)



第75図 25号住居址平面図

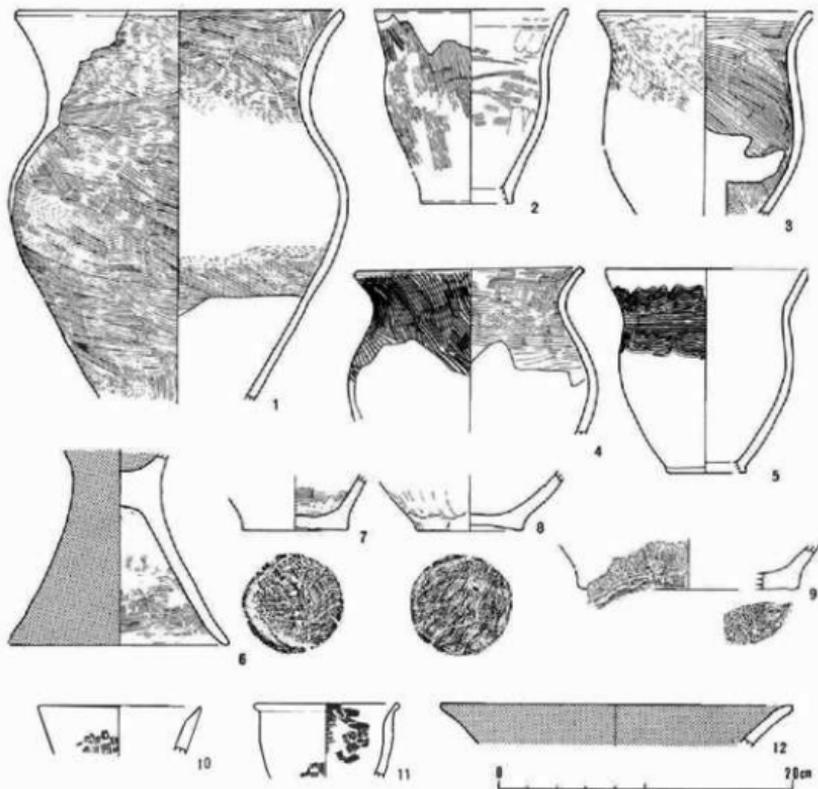
ットがある。貯蔵穴は南西の壁に接しており、深さ50cm、短径50cm。梯子受穴は深さ18cm、短径24cm、長径31cmである。出土遺物は炉に使用された壺破片をはじめ、小型甕、壺などがある。又、住居中央には棒状木製品が遺存していた。

25号住居址（弥生）第75～77図

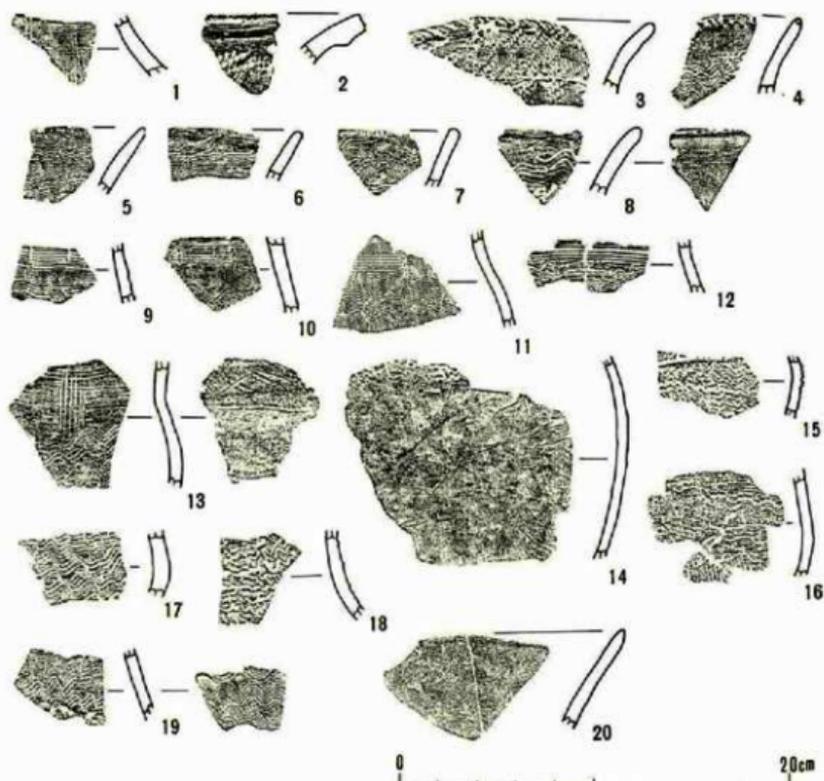
北集落南群にあり、ボックスカルバートによって北西辺の一部を削り取られている。又69号土壌を切っている。住居址の規模は長軸5.2m、短軸4.5m（現存部のみ）で、隅丸方形を呈している。主軸はN-27°-Eの方位である。壁は南20cm、東23cm、北25cmで、壁面はやや外へ傾斜している。床は北から南へゆるやかな勾配をもっているが、全体は平坦である。床は貼床され堅く良好なしまりをしている。炉は北側の柱穴間にあって、土器片を敷いた土器敷炉である。焼土は東西95cm、南北1.05mの範囲に広がっている。主柱穴は4本であるが、西へ1度あるいは2度拡張しているので、8～9本の柱穴がある。ピット1は深さ46cm、短径17cm、長径20cm、ピット2は深さ37cm、短径17cm、長径18cm、ピット3は深さ47cm、短径17cm、長径18cm、ピット4は深さ67cm、短径18cm、長径22cm、ピット8は深さ22cm、短径10cm、長径26cm、ピット9は深さ27cm、短径11cm、長径22cm、ピット10は深さ15.5cm、短径23cm、長径25cm、ピット11は深さ24.5cm、短径14cm、長径25cm、ピット12は深さ17cm、短径34cm、長径36cm、ピット13は深さ21.5cm、短径8cm、長径10cmである。当初ピット1～ピット4で建てられていた住

居が、次にピット2、ピット3、ピット10、ピット12の4本柱となり、次にピット2、ピット3、ピット11、ピット13と変化したのであろうか。ピット11とピット13は支柱とする見方もある。ピット6は貯蔵穴である。深さ47cm、短径66cm、長径84cmで、二段に掘られている。上部から高坏脚が出土している。ピット5は梯子受穴である。中から梯子の木材根が出土している。約20cm程の直径の丸太を半截し半截面を下にして斜めに埋め込まれていた。残存している長さは約50cmである。丸太面に刻みを入れて階段にしたものであろう。ちなみに、角度は垂直方向より22°住居外へ傾斜している。ピット7は南壁に接しており深さ24cm、短径36cm、長径40cmの方形ピットである。貯蔵穴とすべきであろうか。

出土遺物は、炉内の土器の他に、甕8、鉢2、高坏2等が床面上から出土し、覆土中からは破片が若干出土した。



第76図 25号住居址出土土器(1)

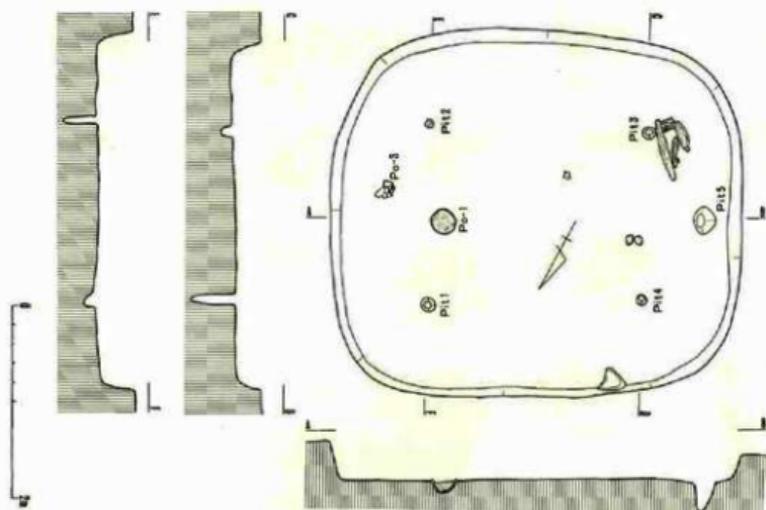


第77図 25号住居址出土土器(2)

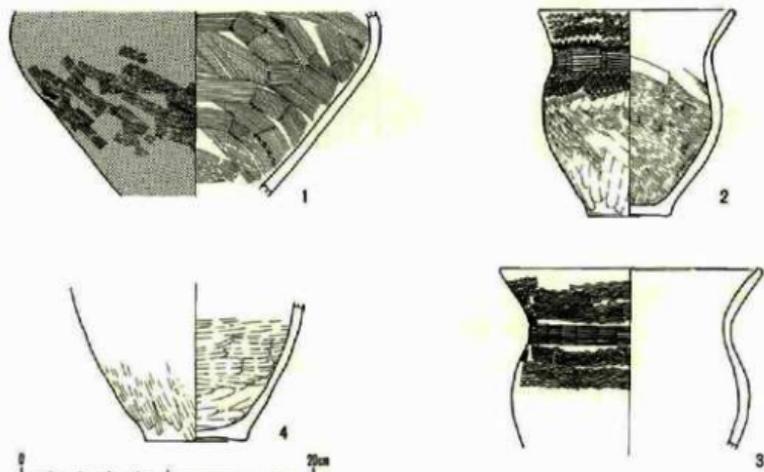
26号住居址(弥生)第78~80図

北集落南群の西端に位置し、他の遺構との切り合は無い。住居址は隅丸方形で長軸4.29m、短軸3.81mの規模をもち、主軸はN-62°-Eである。壁は南40cm、北27cm、西35cm、東32cmで、やや外傾している。床は地山を使って堅く良好。炉は北側住穴中央に位置し、埋燵炉である。使用された土器は甕ではなく壺で、直径27cmの胴部下半を使用し、上半は打ち欠かされている。底部は無く、土器上端は床面より若干高い位置に据え付けられている。柱穴は対角線に4本が配置され、ピット1は深さ12cm、短径14cm、長径15cm、ピット2は深さ36cm、短径8cm、長径9cm、ピット3は深さ13cm、短径13cm、長径15cm、ピット4は深さ47cm、短径11cm、長径12cmで、柱穴の平面形は円形にちかい。梯子受穴は主軸線上にあって、深さ59cm、短径24cm、長径29cmの楕円形プランをもち、23°の傾斜がある。

出土遺物は炉に使用された壺胴下半と甕である。ピット3の南西側には炭化材が数本重なって残っているが、性格は不明である。



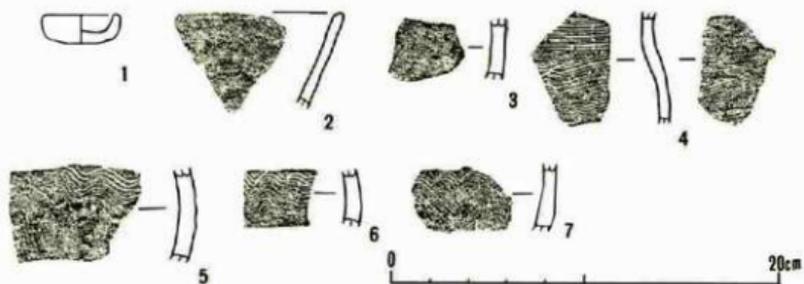
第78図 26号住居址平面図



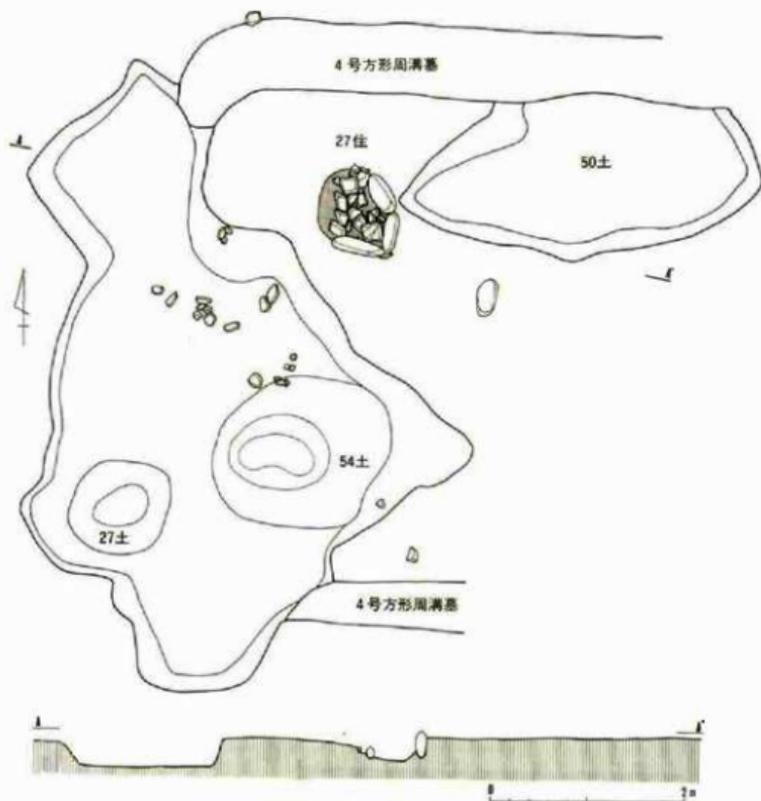
第79図 26号住居址出土土器（1）

27号住居址（縄文）第81～82図

遺跡調査区のはほぼ中央に位置し、4号方形周溝墓、27号土壇、50号土壇、54号土壇などと重複している。従って住居址のプラン及び主軸等については全く不明であり、唯一住居址として決定できたのは石囲炉の検出によってであった。石囲炉は北に頂点を有する五角形を呈し、東西80cm、南北90cmの規模で、南、東、北東の3個の炉石は板状長円礫が良好に残っているが、



第80图 26号住居址出土土器(2)



第81图 27号住居址平面图

北西、西側の炉石は破砕されて炉内に転入している。炉石は南では幅15cm、長さ55cm、厚さ28cmで、東は巾15cm、長さ45cm、厚さ25cm、北東では巾23cm、長さ45cm、厚さ30cmである。

出土遺物は炉中の出土破片を掲載した。いずれも縄文時代中期終末の土器で、曾利V式、加曾利EIV式に属するものである。

28号住居址（弥生）第83～85図

北集落北群のうち最北端に位置する住居で、攪乱による土壌などに接する他、重複等は見られない。住居址は円形に近い隅丸方形で、長軸5.8m、短軸5.1mの規模で、主軸はN-35°-Eの方位を示す。壁は南東で30cm、北西で27cm、南西25cm、北東28cmと比較的高さが残っており、壁面はやや外傾する。床面は貼床で軟弱となっており、貼られている土は木炭と地山ブロックを多量に含む暗褐色土である。炉は北側柱穴中央に位置し、東西56cm、南北82cmの卵形をした皿状ピットに焼土が残っている地床炉である。柱穴は4本で、住居の対角線上に位置し、ピット1は深さ40cm、直径20cm、ピット2は深さ49cm、直径20cm、ピット3は深さ63cm、直径22cm、ピット4は深さ57cm、直径24cmである。各柱穴の平面形はほぼ円形である。梯子受穴は主軸上にあって、南西壁より35cm内側に掘られている。深さ34cm、東西42cm、南北40cmの円形プランであるが、底面は長円形で、その位置も住居中心に寄っているため、約10°の傾斜をもつピットとなっている。貯蔵穴は南西壁中央西寄りにあり、東西42cm、南北42cm、深さ27cmである。なお、住居内西側の柱穴中央部に焼土、木炭の層が薄く広がっていたが、これは炉ではない。

出土遺物は少なく、赤彩された高坏、小型土器、その他が若干出土しているだけである。

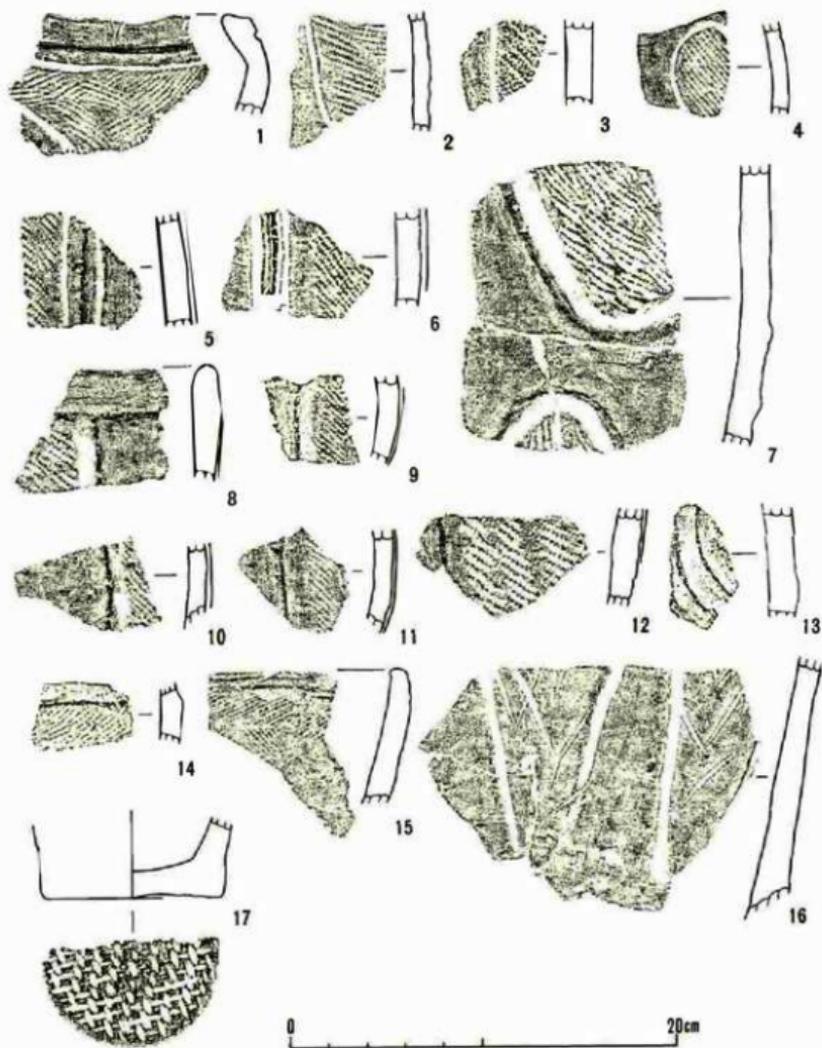
29号住居址（弥生）第86～88図

北集落北群の北東部に位置し、上層と下層の2軒の住居に分けられる。柱穴、炉位置などから判断すると、下層住居を拡張し上層住居が造られたものである。他の遺構との切り合いは、90号土壌を切って造られているだけで、同時期の遺構との重複関係は見られない。住居址は円形に近い隅丸方形で、下層の住居の方が方形に近いプランを持っている。上層、下層の住居を分けて説明する。

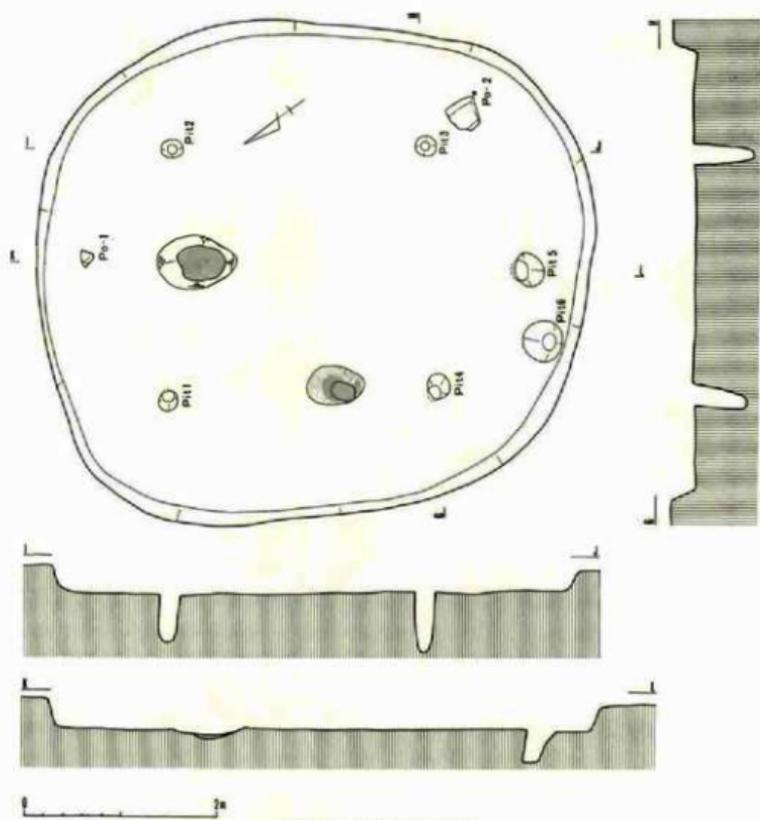
①上層住居

住居の規模は長軸7.3m、短軸6.5mで、主軸はN-32°-Eの方位を示す。壁は南東で40.5cm、北西43cm、南西41cm、北東32cmの高さがあり、壁面は外傾している。床面はほぼ全面に貼床され、黄褐色を呈する砂質土である。炉の周辺は部分的に堅いところもあるが、全体的には軟弱な床と言えよう。炉は住居北側の柱穴中央に位置し、東西1.2m、南北1.5mの焼土範囲があるが、その中心に35cm×50cmの皿状ピットがあって、地床炉の核と言えよう。柱は4本主柱で、ピット1は深さ22cm、短径27cm、長径30cm、ピット2は深さ38cm、短径15cm、長径20cm、ピット3は深さ64cm、短径21cm、長径35cm、ピット4は深さ56cm、短径18cm、長径21cm、である。貯蔵穴は住居南壁に接して掘られ、深さ35cm、東西42cm、南北46cmの規模である。梯子受穴は主軸上にあって、南壁より60cm住居内側に位置する。深さ20cm、短径28cm、長径34cm、床面との角度は35°である。

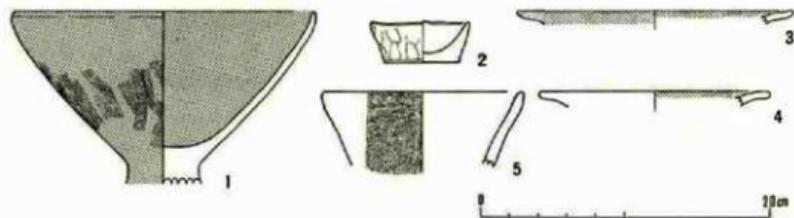
本住居の遺物は柱穴と壁の間に分布し、特に南東コーナーに集中している。



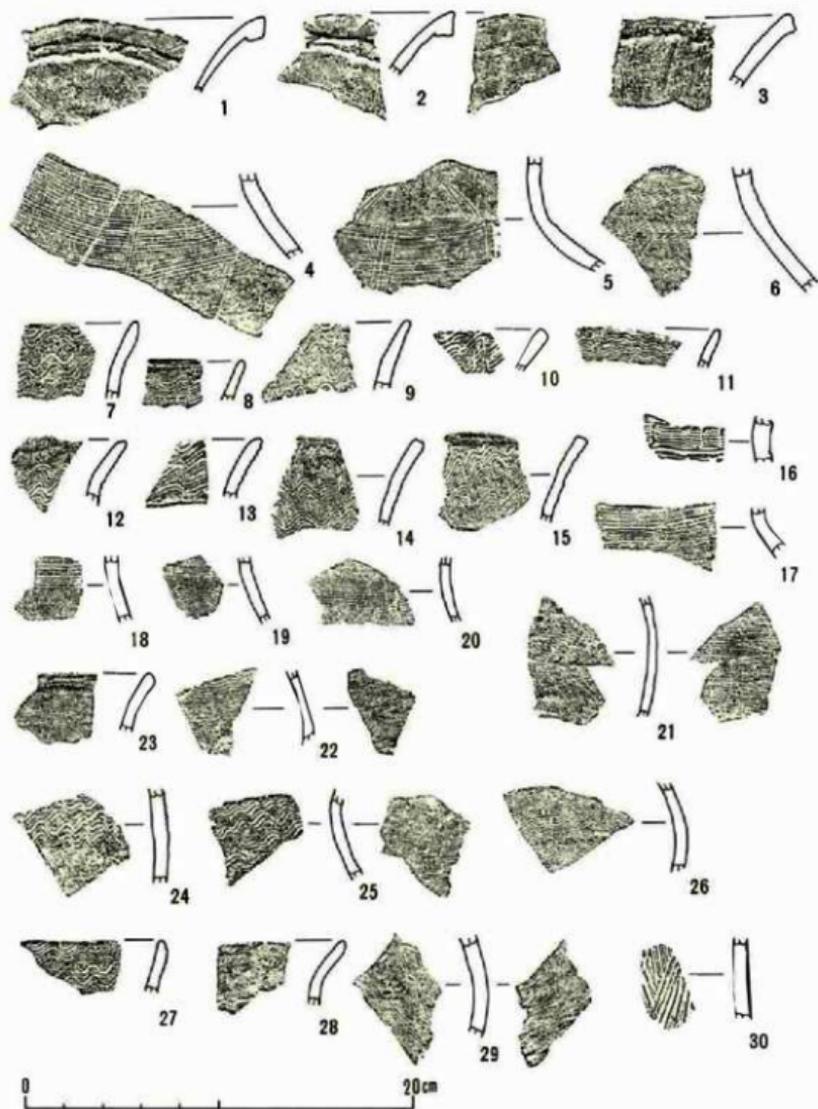
第82图 27号住居址出土土器



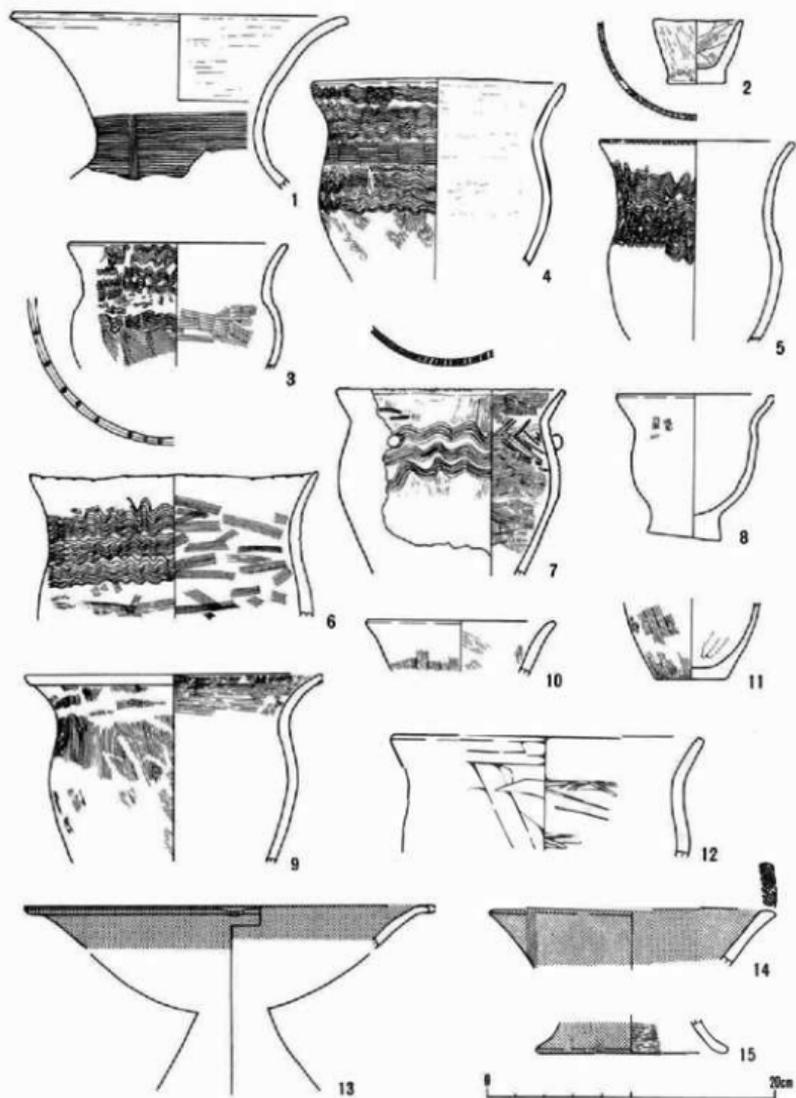
第83图 28号住居址平面图



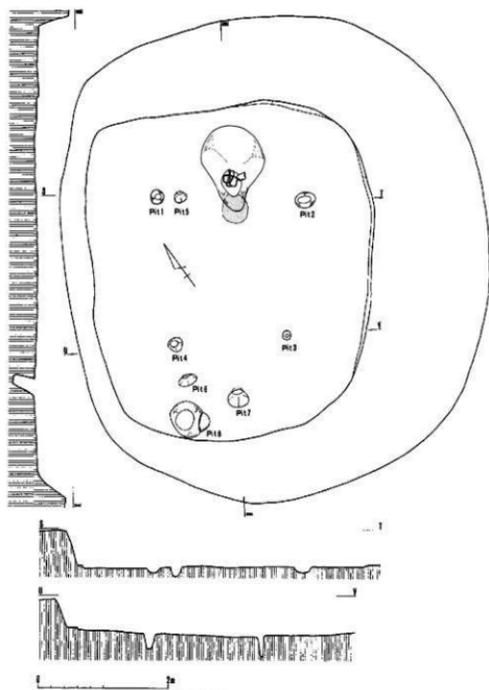
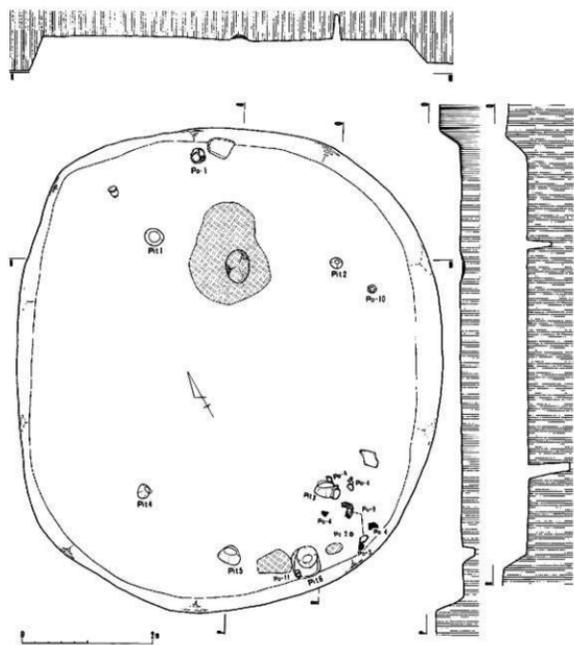
第84图 28号住居址出土土器(1)



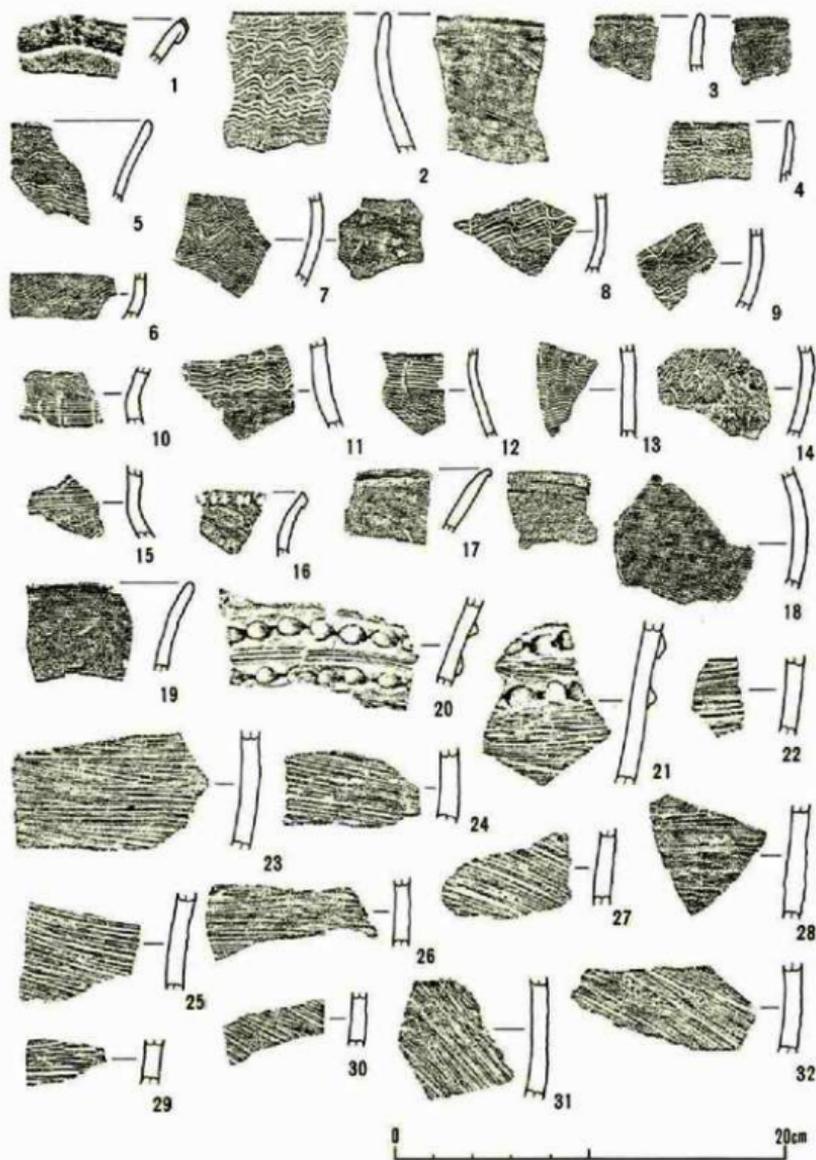
第85图 28号住居址出土土器(2)



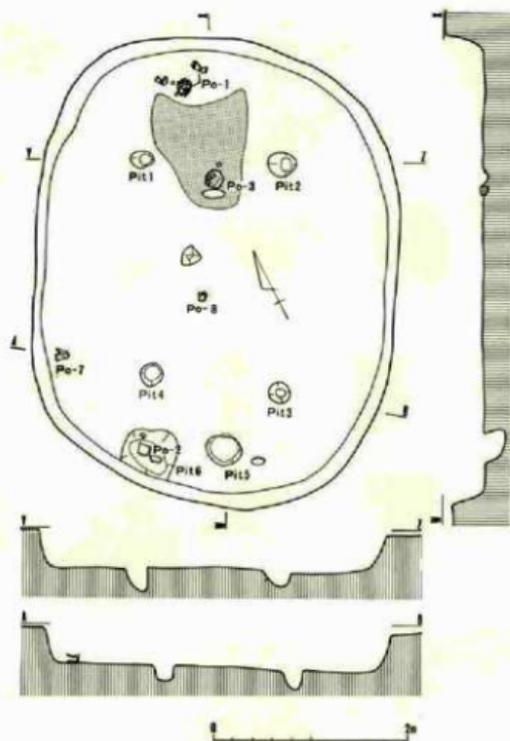
第86图 29号住居址出土土器(1)



第67图 29号住居址平面图



第88图 29号住居址出土土器(2)



第89図 30号住居址平面図

ある。床面は褐色砂質土の貼床で、炉のまわりが部分的に踏み固められている。炉は北側柱穴間に位置し、上層住居直下にある。土器破片を敷いた皿状の炉で、土器敷炉南側にも焼土が広がっている。柱穴は4本主柱構造をもっており、対角線上に位置する。しかし、北西柱穴は2本あるので、拡張又は建直しが考えられよう。ピット1は深さ6cm、直径20cm、ピット2は深さ8cm、短径24cm、長径32cm、ピット3は深さ33cm、直径12cm、ピット4は深さ23cm、直径22cm、ピット5は深さ48cm、直径18cmである。梯子受穴は主軸上に1箇所あり、西側柱穴線上に1箇所ある。前者は深さ30cm、短径27cm、長径31cmで、垂直方向から30°の角度で傾斜している。後者は深さ50cm、短径15cm、長径30cm、角度は前者とほぼ同角度位である。貯蔵穴は南壁主軸西にあって、深さ22cm、短径55cm、長径62cm、ロート状の掘り込みである。

本住居は、上下の住居との間に更に2枚の貼床が認められている。炉の位置や焼土の在り方などからして、1回の拡張だけではなく、数回の同一場所建直しも考えておかなければならぬであろう。

30号住居址(弥生)第89~91図

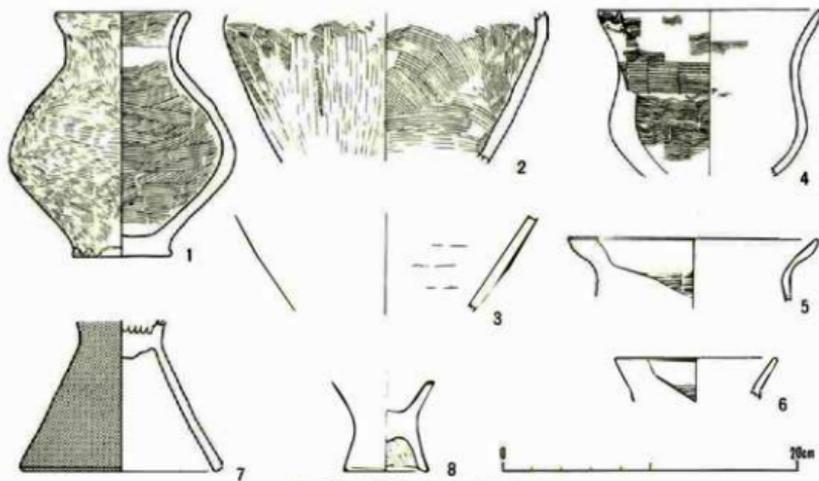
なお本住居の覆土であるが、レンズ状の堆積を示し、壁際では黒色土と壁の黄褐色砂質土が互層に堆積している。覆土は大きく3層に分かれ、上層は白色小砂粒を多く含む暗褐色粘質土でしまりが無い。中層は暗褐色又は灰褐色粘質土と黄褐色砂質ブロックの混土である。下層は灰褐色又は暗褐色粘質土の自然堆積土である。

②下層住居

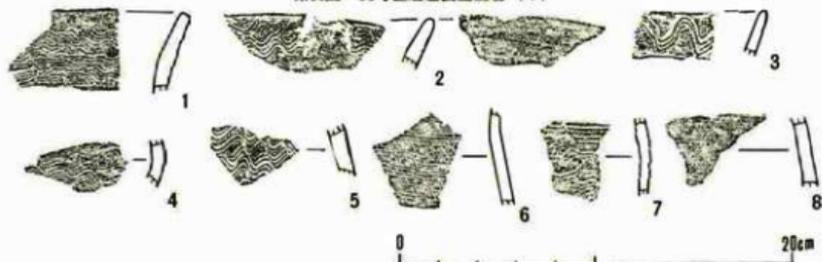
上層住居の内側に位置し、やや中心より西に偏している。住居の規模は短軸4.3m、長軸4.45mの隅丸方形で、主軸は上層住居と同じである。壁は3~5cm程度しか残っていないが、ほぼ垂直で

北集落北群に位置し、壁は31号住居址と接し、住居内には87号土壇、88号土壇がある。住居址は長円形に近い隅丸方形で、長径4.83m、短径3.69m、主軸はN-24°-Eの方向を示す。壁は南東35cm、北西39cm、南西34cm、北東39cmの高さをもち、壁面はやや外傾している。床面は貼床されており、中央部分を除いて軟弱である。炉は北側柱穴間にあり、南側に枕石を置いた埋甕炉である。枕石は巾10cm、長さ25cmの楕円形を呈し、埋甕は直径20cmである。甕は胴上半と底部が欠損したものを埋め込まれている。焼土、灰の範囲は炉よりも広く南北1.2m、東西90cmに分布している。柱穴は4本で、ビット1は深さ24cm、短径18cm、長径22cm、ビット2は深さ16cm、短径25cm、長径30cm、ビット3は深さ19cm、直径21cm、ビット4は深さ16cm、直径23cmである。主軸上にある梯子受穴は深さ22cm、短径30cm、長径35cmで、垂直より19°傾斜している。貯蔵穴は南壁に接し、主軸より西側にある。深さ33.5cm、短径46cm、長径56cmで断面は台形を呈す。内部より壺形土器の破片が出土している。

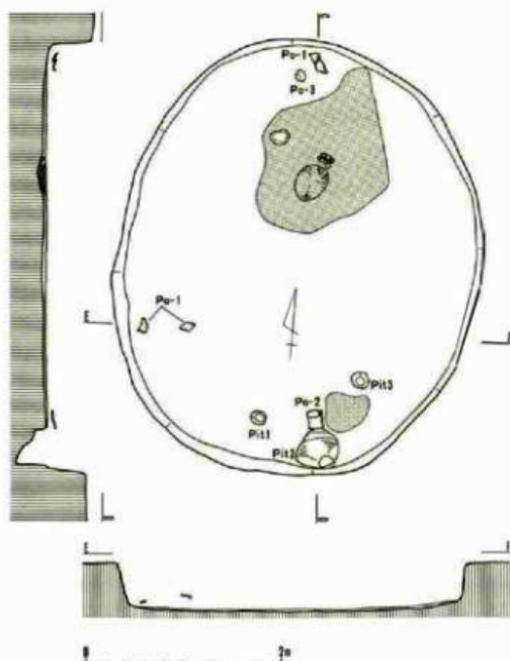
出土物はあまり多くなく、壺、甕、高坏破片等が住居内より若干出土する。



第90図 30号住居址出土土器(1)



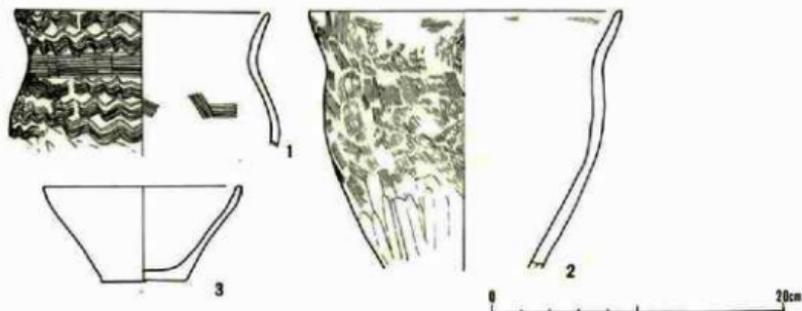
第91図 30号住居址出土土器(2)



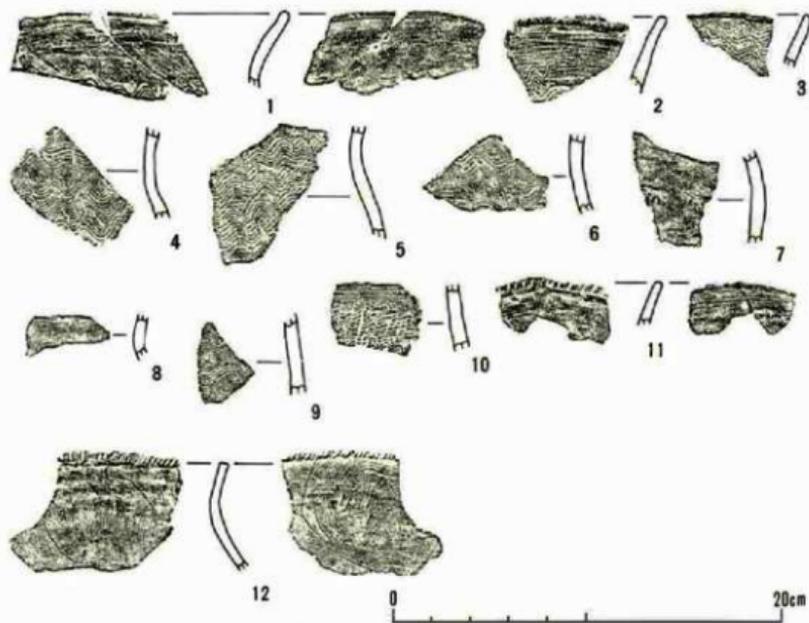
第92図 31号住居址平面図

31号住居址（弥生）第92～94図

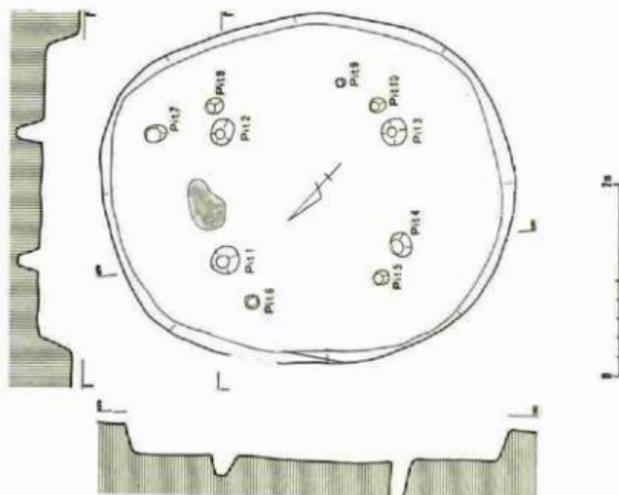
北集落北群に位置し、30号住居址と接し91号土壕、92号土壕を切っている。住居址は楕円形をし、長軸4.48m、短軸3.62mで主軸はN-15°-Wの方位を示す。壁は東37cm、西41cm、南39cm、北43cmの高さがあり、壁面はやや外傾している。床面はうすい貼床でしまりが無い。炉は北側柱穴間にあって、若干土器片が敷かれるが、炉の中心は南北50cm、東西35cmの範囲で焼土は南北1.8m、東西1.4mに広がっている。柱穴は主柱穴4本である。貯蔵穴は南壁中央にあり、東西44cm、南北42cmの円形プランであるが、断面はロート状を呈する。遺物は甕、鉢などが出土している。



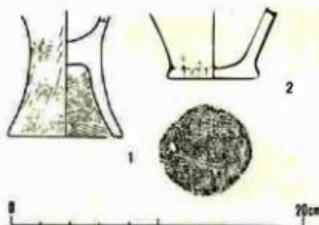
第93図 31号住居址出土土器（1）



第94图 31号住居址出土土器(2)



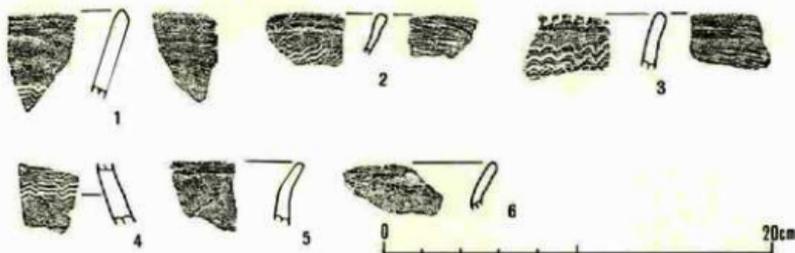
第95图 32号住居址平面图



第96図 32号住居址出土土器(1)

32号住居址(弥生)第95~97図

北集落北群に位置し、他の住居址とは重複していない。比較的小形で楕円形を呈し、長軸4.23m、短軸3.64mで、主軸は長軸と一致する。主軸はN-38°-Eを示す。壁は南東30.5cm、北西25cm、南西30.5cm、北東20cmの高さがあり、



第97図 32号住居址出土土器(2)

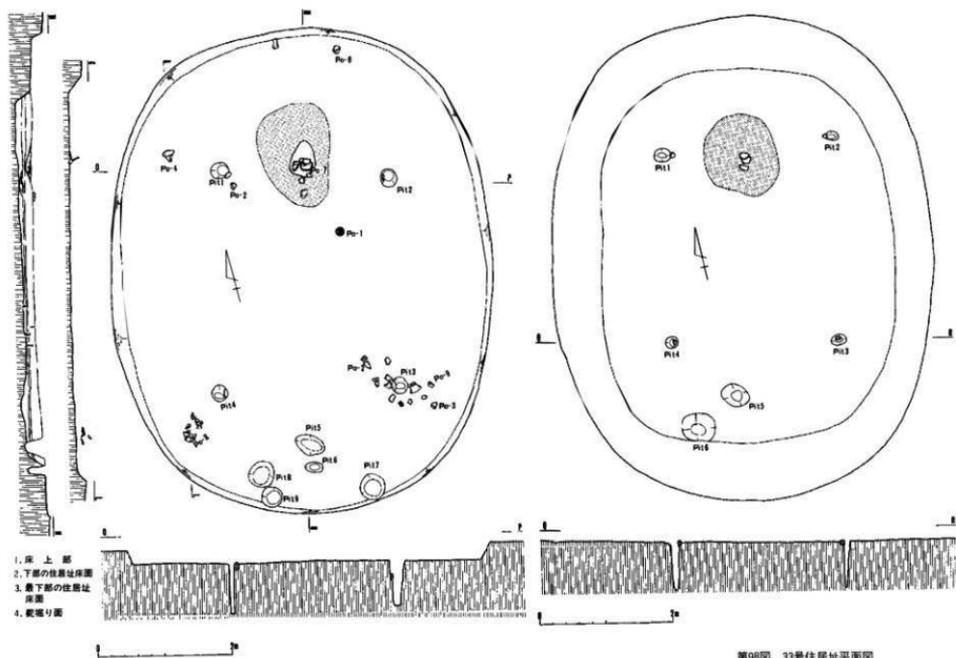
壁面はやや外傾する。床面は地山の黄褐色砂層を使用し、中央部はしまりがあるが、全体には、やや軟弱である。炉は北東側の柱穴間に位置し、地床炉で東西60cm、南北38cmの範囲に焼土が分布する。柱穴は全部で10本あるが、このうち8本が支柱穴で、1回建直しされている。残りの2本は支柱穴であろう。ビット1は深さ21cm、直径29cm、ビット2は深さ28cm、短径23cm、長径27cm、ビット3は深さ24cm、直径27cm、ビット4は深さ41cm、短径19cm、長径26cm、ビット5は深さ25cm、直径16cm、ビット6は深さ15cm、直径14cm、ビット8は深さ25cm、直径17cm、ビット10は深さ23cm、直径16cmである。このうち、ビット1~4が1組、ビット5、6、8、10が1組である。どちらが先かは明確ではないが、後者の組のビット5、6が床下より発見されているので、後者がまず建てられ、前者へと建直しがあったと言うことができよう。

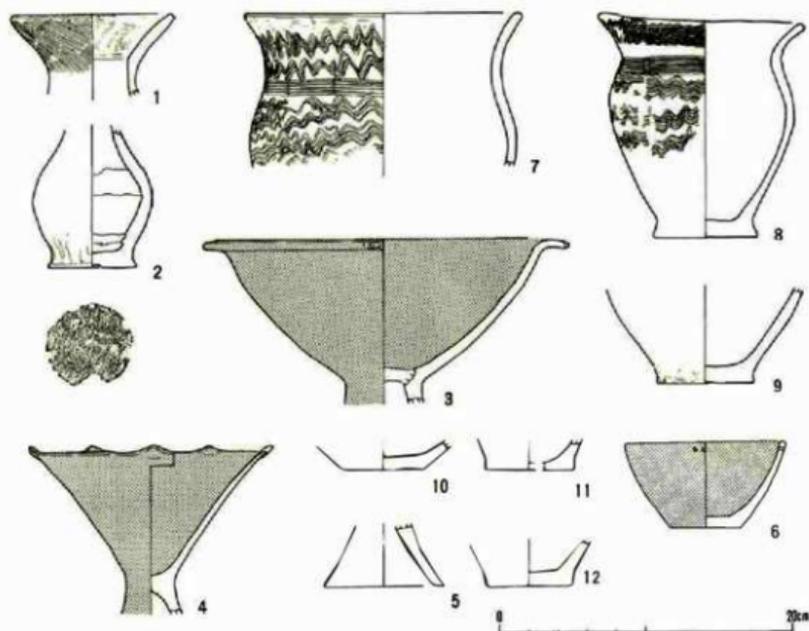
33号住居址(弥生)第98~100図

北集落北群中央に位置し、他の住居址や遺構との重複はない。住居は隅丸方形でも楕円形にちかい。住居は上下2層の新旧住居となっており、上層住居から説明する。

①上層住居

長軸7.2m、短軸5.7mで、主軸は長軸と一致し、N-13°-Eの方位を示す。壁高は東で14cm、西20cm、南4cm、北15cmで、壁面はやや外傾している。床は中央部が貼床で、黄褐色ブロック土で貼られている。貼床は薄いものが4枚ある。最上部は軟弱で、下層に行くにしたがってしまりが良い。炉は最上部では小礫を使った枕石がある土器敷炉で、それより3枚下の床で





第99図 33号住居址出土土器(1)

は地床炉が存在する。敷かれた土器の下には木炭が10cmの厚さで堆積している。柱穴は4本で、各々に礎が投げ込まれているが、これは柱を保持する為に使用されたものであろう。ピット1は深さ75cm、直径25cm、ピット2は深さ51cm、直径20cm、ピット3は深さ47cm、直径25cm、ピット4は深さ41cm、直径25cmである。入口部に梯子受穴がピット5と6の2本がある。このうち5は、下層住居の梯子受穴と同一である。上層住居の数回の改修時に利用されたものであろう。ピット5は東西45cm、南北29cmで25°の斜角度である。ピット6は東西28cm、南北16cmで7°の斜角度をもつ。貯蔵穴はピット8で、直径38cm、深さ34cmである。南壁に添ってピット7と9の柱穴がある。おそらく、入口部の屋根を支えた柱穴と考えられ、ピット7は深さ29cm、直径38cm、ピット9は、深さ34cm、直径31cmである。

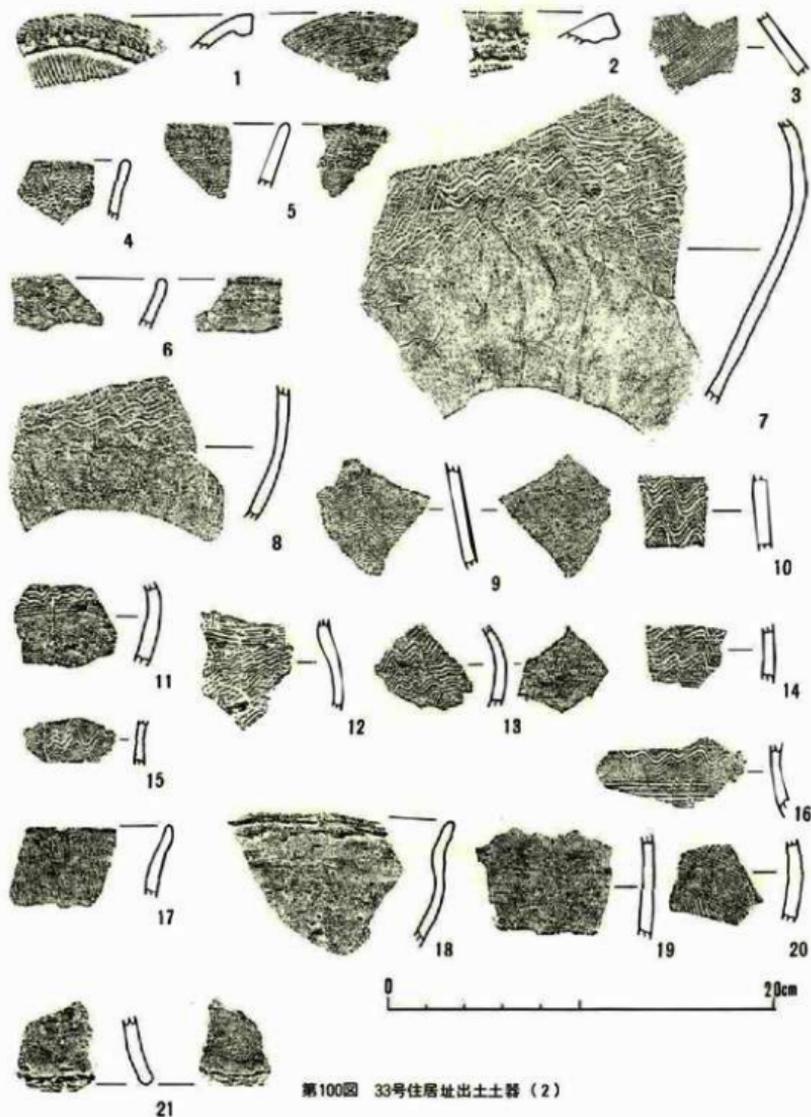
遺物は床面上に高坏、壺、甕、などの破片があった。特に南東柱穴付近に集中している。

②下層住居

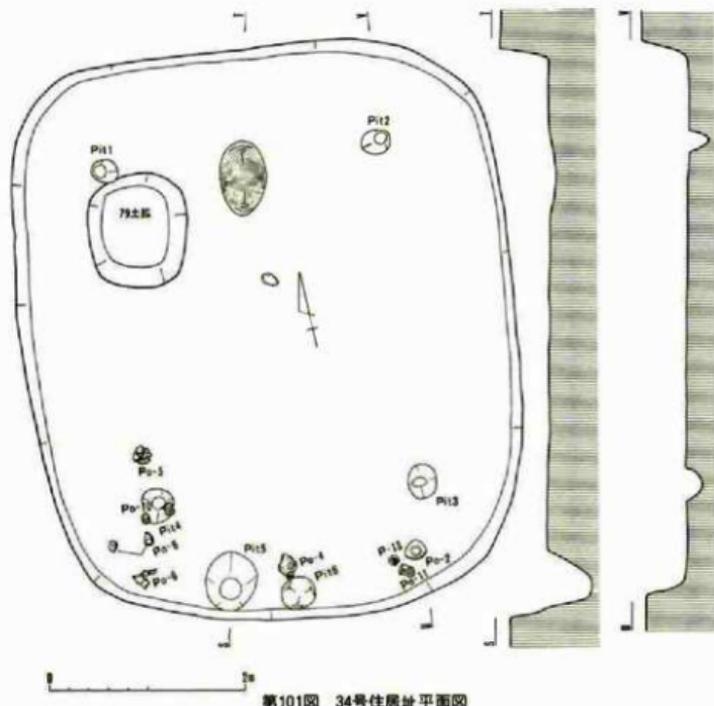
長軸5.5m、短軸4.4mの隅丸方形プランで、現存する壁高は東5cm、西7cm、南15cm、北9cmであるが、上層住居確認面からは各々上層住居の壁高を加えた数値となる。炉は北側柱穴間に位置し、東西1.1m、南北1.18mの範囲に焼土がある。小礎の枕石を南に置いた土器敷炉である。柱穴は上層住居と全く同位置であり、床面が下った分だけ深さ・径が変化している。梯子受穴も同様である。なお貯蔵穴が南壁主軸西側から検出されている。深さ25cm、東西45cm、

南北40cmである。

本住居は下層住居を埋め立てた後に拡張した住居で、床面の貼床枚数からも、相当長期に居住されたものと思われる。



第100図 33号住居址出土土器(2)



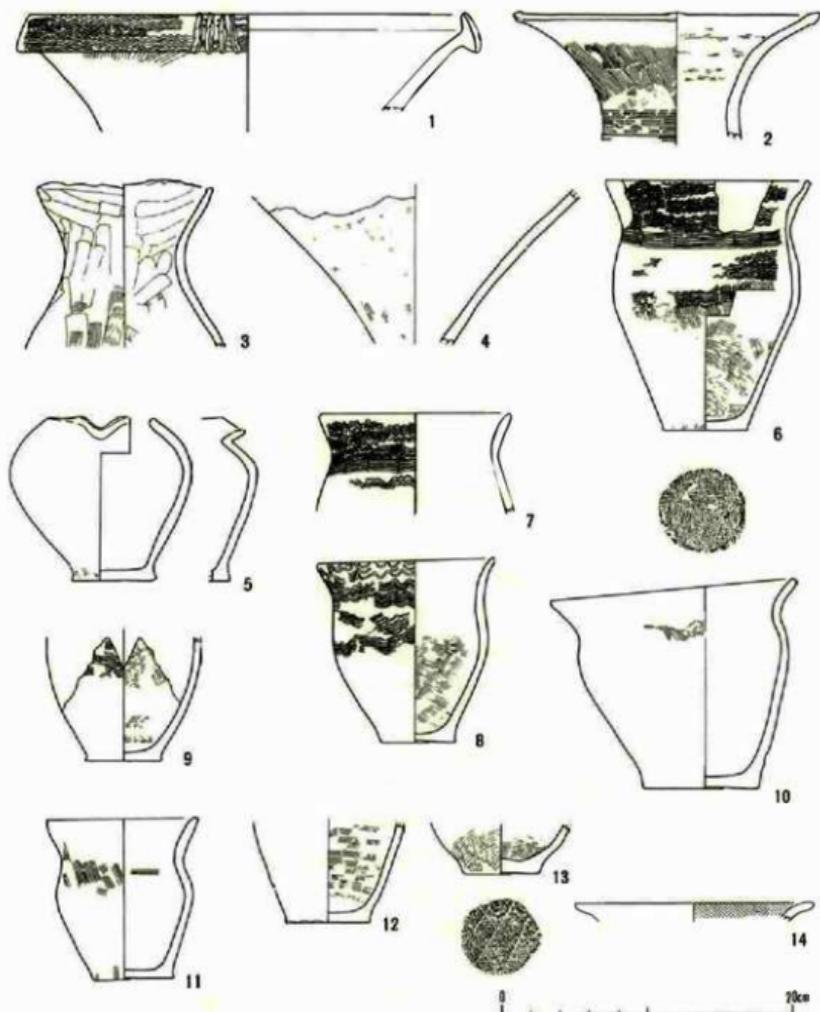
第101図 34号住居址平面図

34号住居址（弥生）第101～第103図

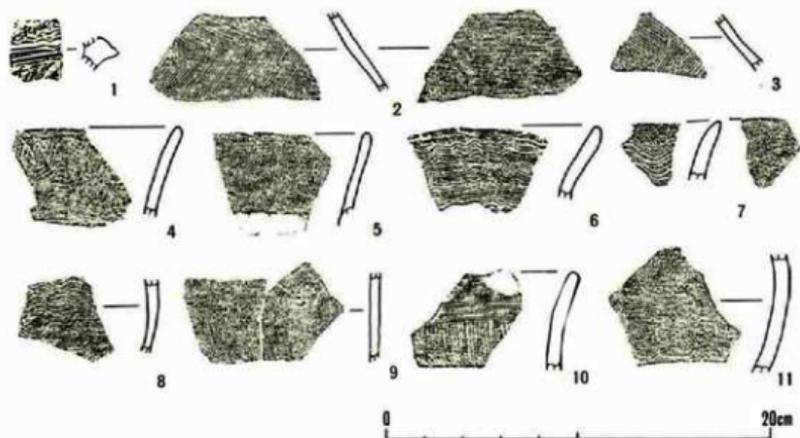
北集落北群中央に位置し、住居址内から79号土壌が検出された他は他の遺構と重複しない。住居址は長軸5.9m、短軸5.1mの規模で、主軸は長軸と等しく、N-13°-Eの方位を示す。住居平面形は隅丸方形である。壁は東44cm、西37cm、南35cm、北50cmの高さがあり、壁面はやや外傾している。床面は若干貼床されるが、地山面を基本的な床としており、中央柱間が堅く良好であるのに対し、柱の外側はやや軟弱である。炉は北側柱穴中央部に位置し、浅い皿状の窪みをもつ地床炉である。東西48cm、南北77cmの範囲が焼けている。柱は4本主柱で、ビット1は深さ20cm、短径24cm、長径38cm、ビット2は深さ20cm、短径25cm、長径30cm、ビット3は深さ18cm、短径32cm、長径36cm、ビット4は深さ23cm、短径32cm、長径36cmである。各柱穴は住居の対角線上に位置している。住居南壁に接してビット5とビット6がある。ビット5は深さ48cm、短径52cm、長径60cm、ビット6は深さ6cm、短径32cm、長径35cmである。ビット5が貯蔵穴、ビット6が梯子受穴であろうか。

本住居の遺物は、住居南側、柱穴と壁との間に集中している。出土遺物は壺、甕、片口土器などである。壺の口縁には2種類あって、口唇部がT字形を呈し、外面に櫛描波状文を横方向

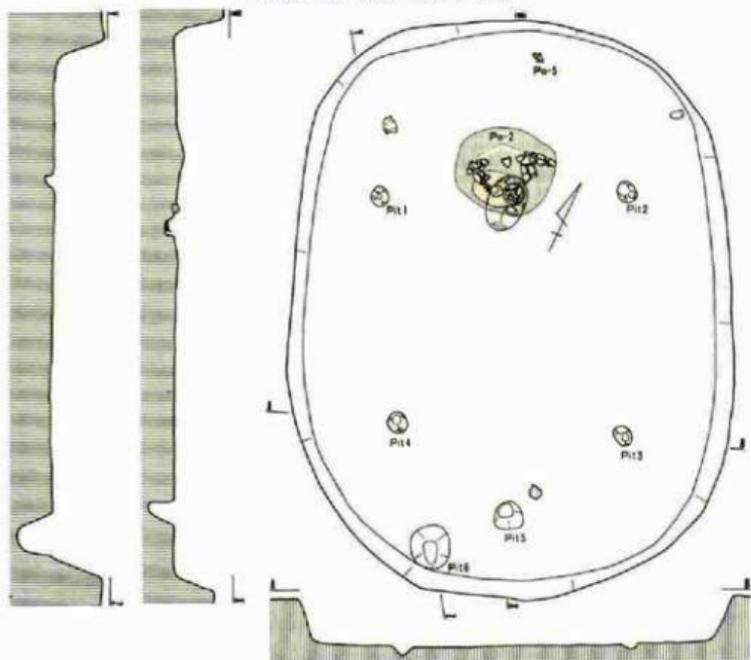
に施したあと、粘土紐を4本縦に貼付るものと、素緑で4ヶ所に小突起が付されるもので、内外面刷毛目整形後にヘラで磨いている。頸部は横に平行柳描文がある。甕は頸部に簾状文を一条施し、口縁部と胴上半に波状文を施すタイプと、胴より上に波状文を全面施すもの、刷毛整形後、ヘラやナデによって整形痕を消しているものなどがある。特殊な遺物として、片口土器がある。口径7.5 cm、器高11.3 cm、底径5.8 cmで、全面ヘラ磨きされている。



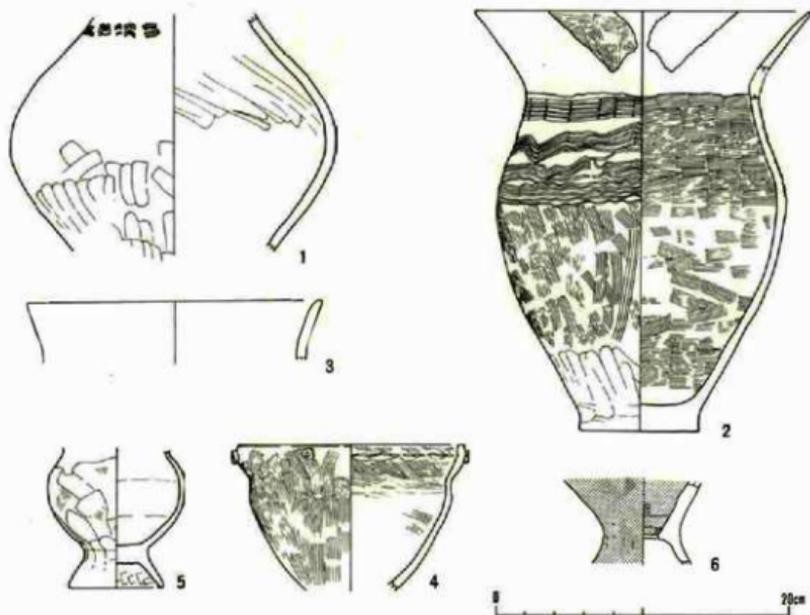
第102図 34号住居址出土土器(1)



第103图 34号住居址出土土器(2)



第104图 35号住居址平面图

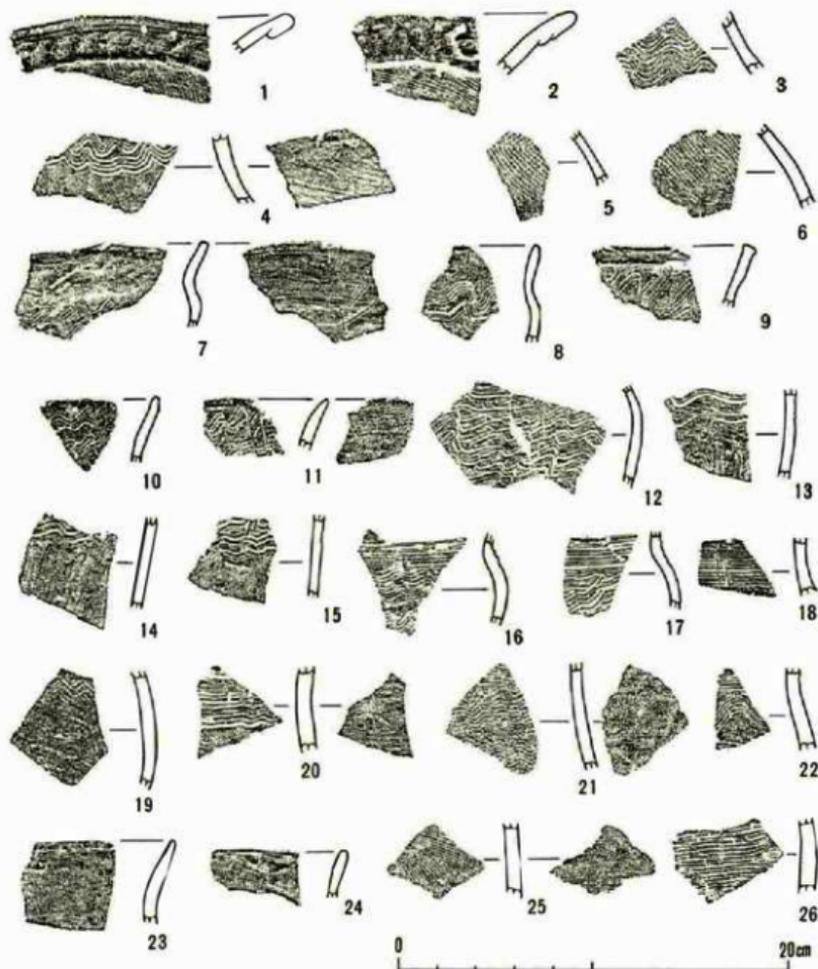


第105図 35号住居址出土土器(1)

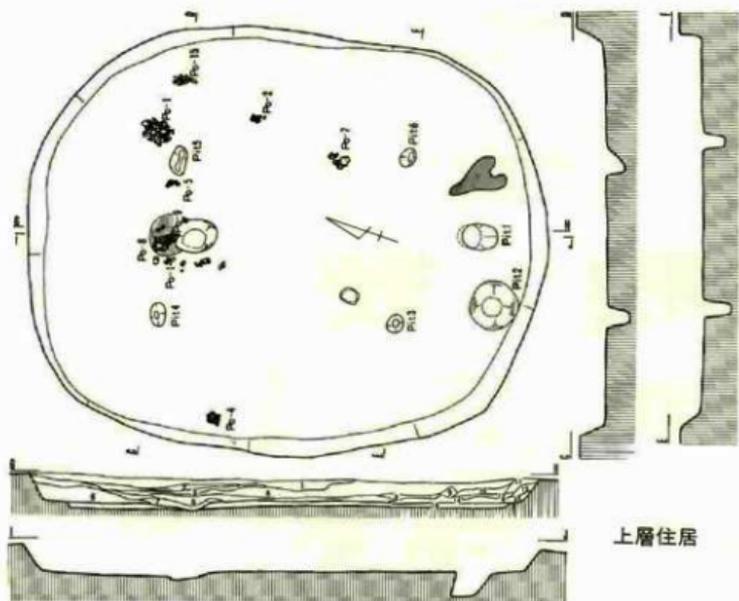
35号住居址(弥生)第104~106図

北集落北群中央に位置し、他の遺構との重複関係はない。住居址の平面形は長円形にちかい隅丸方形で、長軸6.2m、短軸4.62mの規模である。主軸は長軸方向にあって、N-23°-Wの方位を示す。壁は北東で46cm、南西で44cm、南東52cm、北西39cmの高さがあり、壁面はやや外傾している。床面は中央部がやや良好であるが、柱穴と壁の間軟弱である。炉は北西側柱穴中央に位置し、南に小さな枕石のある埋燵炉である。埋燵は破損しており、胴下半が埋められ、他は周辺に散在している。炉の掘り込みは南北60cm、東西40cmで、埋燵は10cm程埋め込まれている。焼土の範囲は東西1m、南北90cmの円形に広がっている。柱穴は4本で、ビット1は深さ9cm、短径17cm、長径22cm、ビット2は深さ9cm、短径18cm、長径23cm、ビット3は深さ5cm、短径17cm、長径22cm、ビット4は深さ11cm、短径20cm、長径23cmである。4本とも深さが5~11cmと浅い穴で、直径も小さいのが特徴であろう。貯蔵穴は南壁に接してあり、主軸より西側にある。東西41cm、深さ36cmで、穴の断面は台形をしている。梯子受穴は主軸上で南壁より約60cm内側に掘られている。東西29cm、南北30cmのおむすび形ビットは、深さ26cm、床面との垂直角度は26°である。出土遺物は少なく、炉内土器の他5点が実測可能な土器で、他は少破片である。1は球胴をした壺形土器で、頸部から上と底部を欠損している。肩部に櫛描波状文がわずかに残り、他はヘラによって整形されている。2は炉内出土の甕であるが、頸部に糜

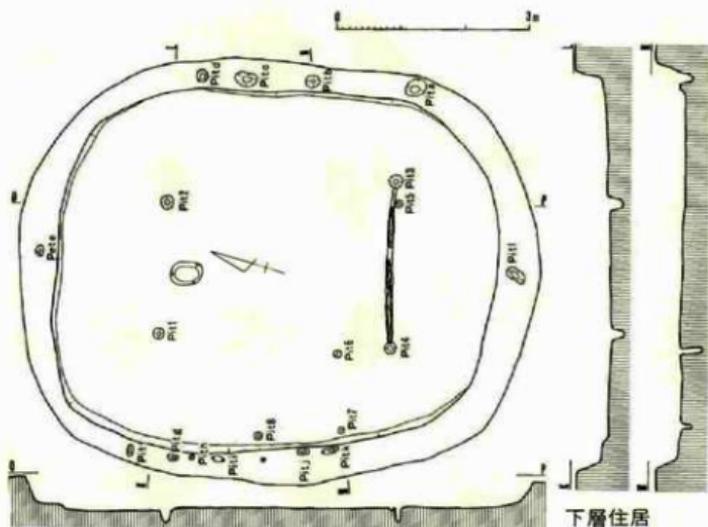
状文が一条通り、その下に櫛描波状文が三条施文される。胴下半は刷毛目で底部に近いところではヘラ整形がされている。口縁部は刷毛目で、内面も横方向の刷毛目である。5は台付甕である。本遺跡では比較的台付甕が少ないので貴重である。胴部は刷毛整形の後にナデ整形が行なわれ、台部はヘラで整形される。4は甕というより鉢に近い形態で、口唇直下にボタン状貼付文をもつ。内外面とも刷毛目整形される。台付鉢となるかもしれない。6は、器台であろうか。外面赤色、内面も上半分が赤色塗彩される特殊な土器である。



第106図 35号住居址出土土器(2)

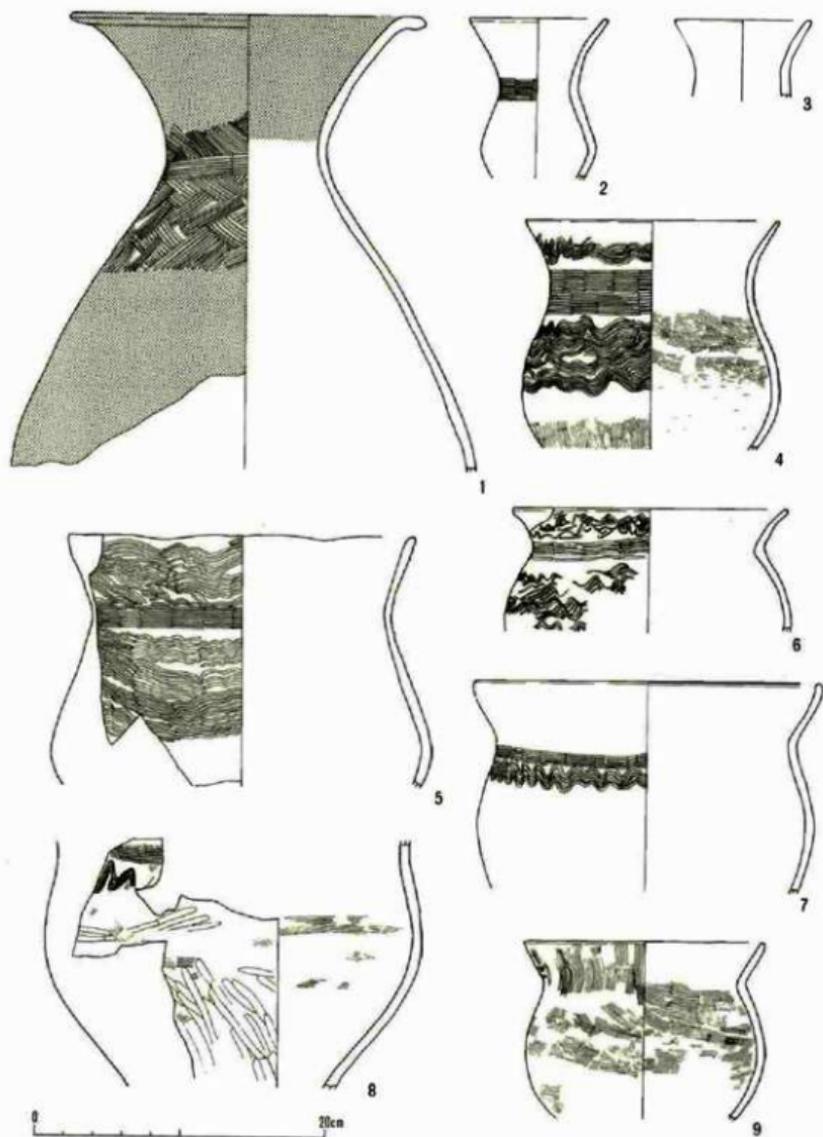


上層住居

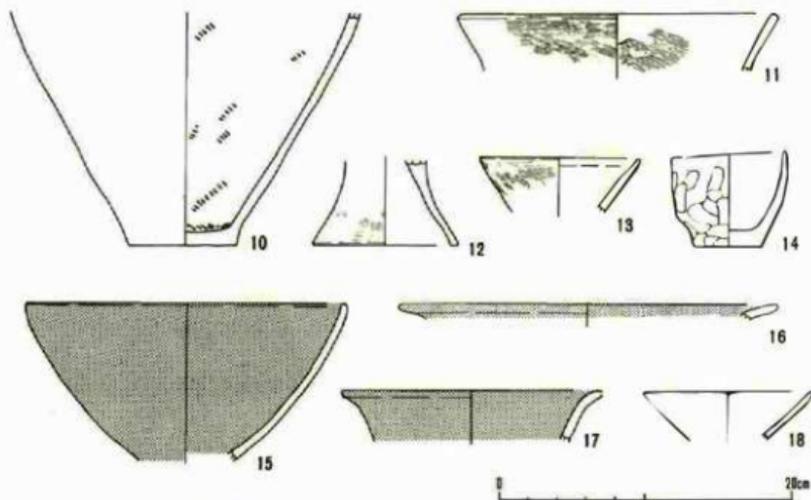


下層住居

第107図 36号住居址平面図



第108图 36号住居址出土土器(1)



第109図 36号住居址出土土器(2)

36号住居址(弥生)第107~110図

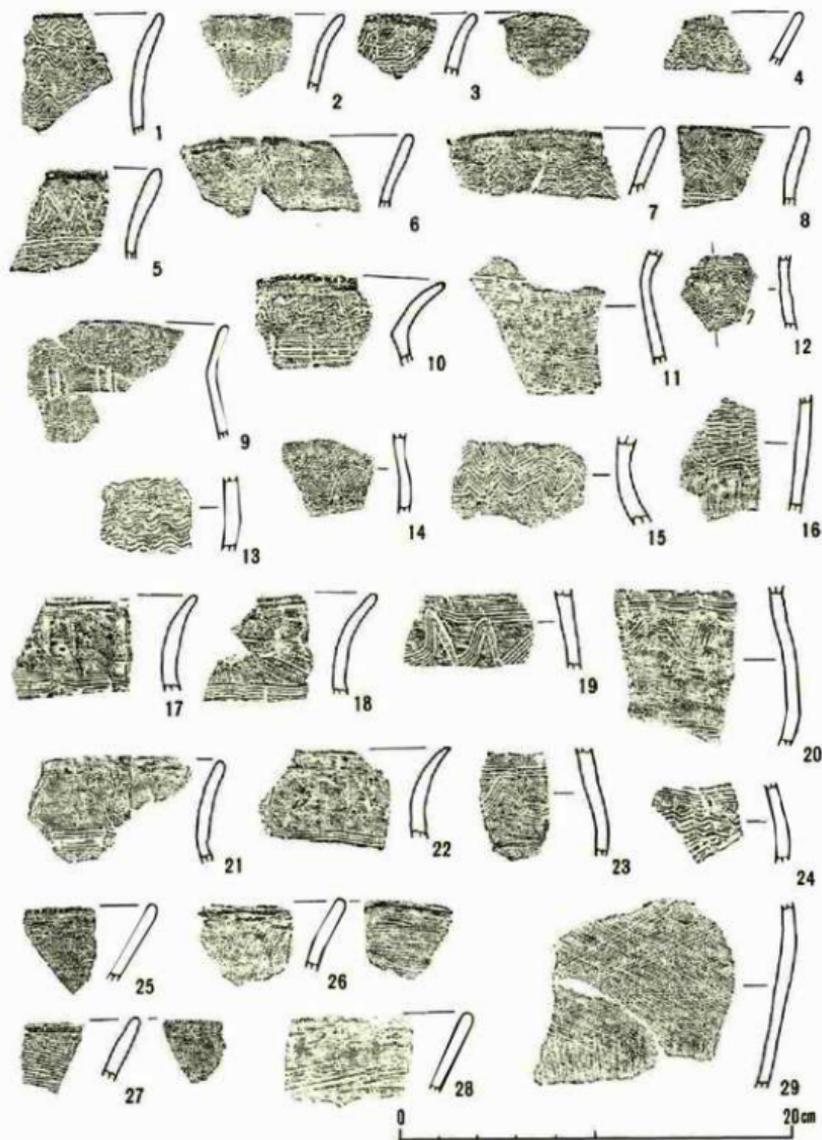
北集落北群中最も南に位置する住居址で、本遺跡中住居面積では最大で、長軸径は20号住居に次ぐ規模である。又、住居下層には古い住居の遺構があり、少なくとも二度の拡張工事が行なわれた住居である。上層住居と下層住居に分けて説明をする。

①上層住居

隅丸方形を呈し、長軸8.10m、短軸6.60m。主軸は長軸と同じで、N-19°-Wの方位を示す。壁は東34cm、西30.5cm、南34cm、北42cmで、壁面はやや外傾斜する。床面は暗褐色砂質土で軟弱である。炉は北側柱穴間にあつて、土器片が敷き並べられた土器敷炉である。なお、炉内南東部に12cm×7cmの枕石がある。炉の規模は50cm×30cmの横長楕円形であろう。柱は4本主柱で、ビット3は深さ43cm、短径22cm、長径30cm、ビット4は深さ36cm、短径20cm、長径36cm、ビット5は深さ28cm、短径24cm、長径44cm、ビット6は深さ32cm、短径24cm、長径32cmである。各柱穴は主軸と直交する方向に長径があり、板状柱が使用されたものと思われる。貯蔵穴はビット2で南壁に接して、深さ39cm、短径40cm、長径54cmで、断面は台形をしている。梯子受穴は主軸上で、南壁より50cm程内側に造られ、東西40cm、南北54cm、垂直より35°傾斜している。遺物は住居北半分より出土している。

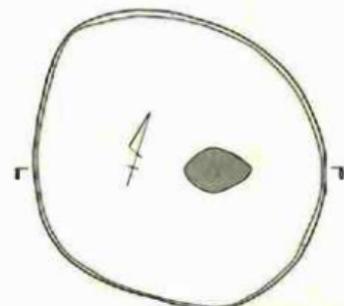
②下層住居

隅丸方形で、長軸6.86m、短軸5.62mの規模で、主軸はN-15°-Wである。壁はわずかしか残っておらず、東9cm、西3cm、南7.5cm、北7cmである。壁面は垂直が若干外傾している程度である。床面は暗褐色粘質土と黄褐色砂質土の混土で、全般的に軟弱である。炉は北側柱穴間に位置し、皿状ビットをもつ地床炉で、規模は34cm×48cmである。柱は4本主柱と考えられ、



第110图 36号住居址出土土器(3)

ピット1は深さ15.5cm、短径24cm、長径34cm、ピット2は深さ22cm、短径20cm、長径24cm、ピット3は深さ20cm、直径22cm、ピット4は深さ20cm、直径18cmである。この他、住居内や、住居周辺部に小柱穴が並んでいる。これらは下層住居に伴うものか、上層に伴うものか不明である。又、南側柱穴間には間仕切溝が検出され、その中より木材が横に埋め込まれてあった。溝の巾は10cm、深さは5cm程である。



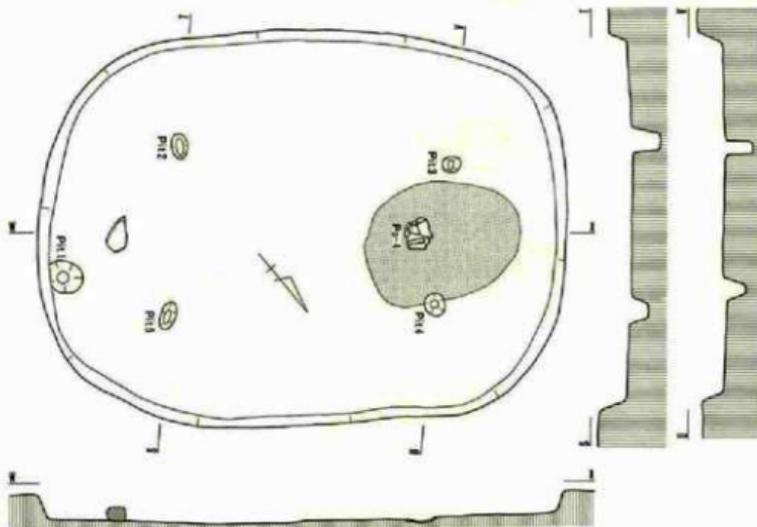
第111図 37号住居址平面図

37号住居址（弥生）第111図

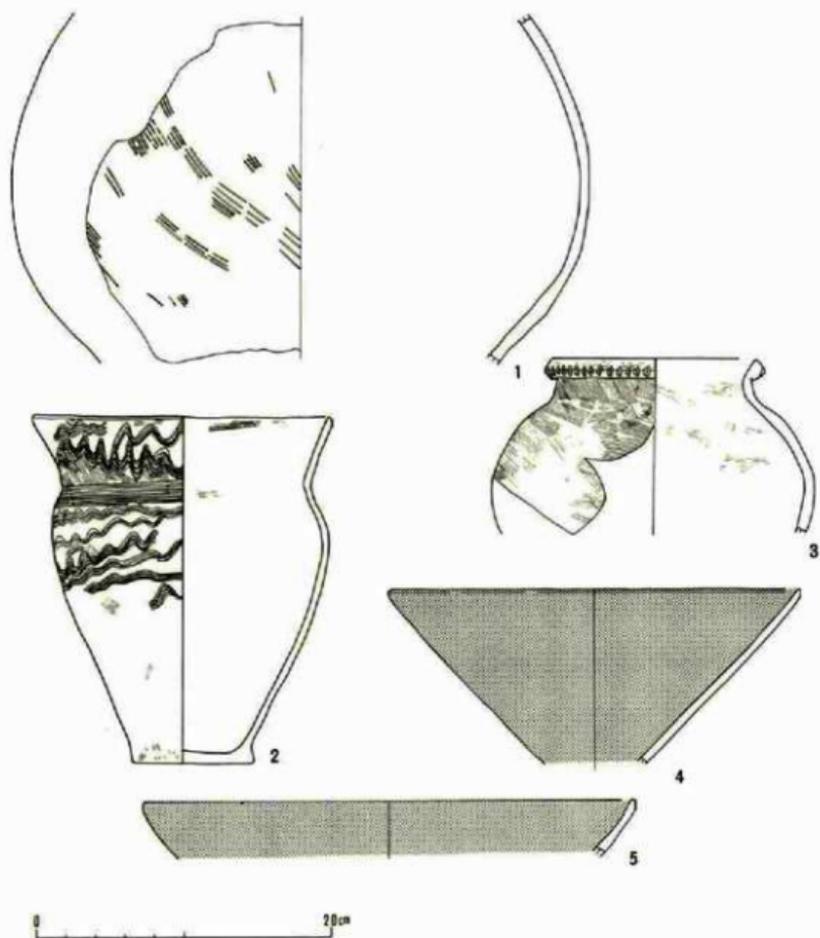
北集落北群のうち最も西に位置する住居址で、他の遺構との重複はない。住居址は円形に近いプランをもち、直径3mである。主軸をどちらにとるか問題であるが、炉が入口部と反対に位置する例が多いことから、N-72°-Eとした。壁は東10cm、西7cm、南4.5cm、北5cmで、壁面は外傾している。床面は全体に軟弱でしまりが無い。炉は、住居中央よりやや東側に偏しており、地床炉である。焼土範囲は東この他の施設は皆無で、遺物も覆土中から若干の少片が出土した

だけで図示できるものはない。

38号住居址（弥生）第112～114図

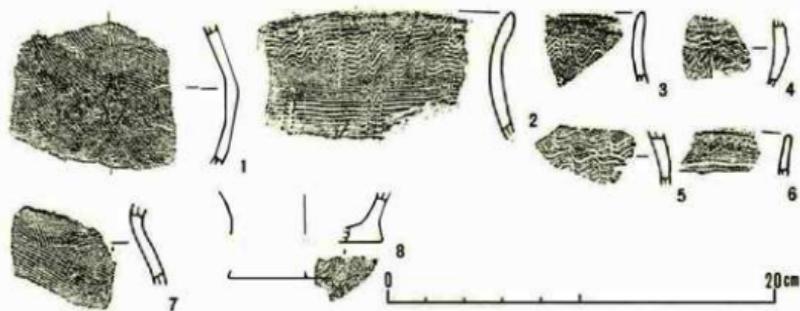


第112図 38号住居址平面図

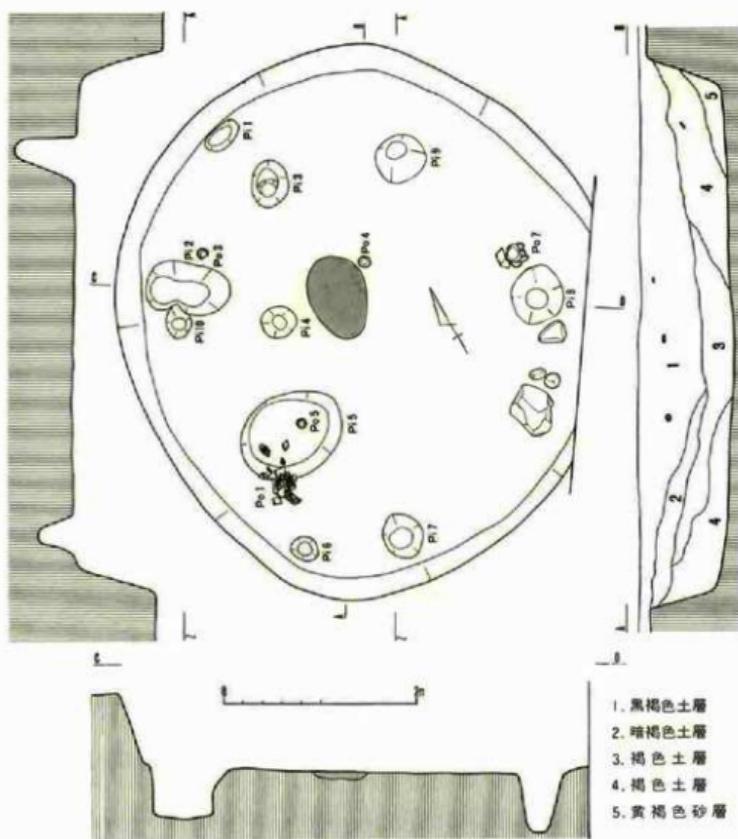


第113図 38号住居址出土土器（1）

北集落北群の西北端に位置し、他の遺構とは重複しない。住居址は長軸5.46m、短軸4.12mの隅丸方形を呈し、主軸は長軸と一致するN-50°-Wの方位を示す。壁は北東31cm、南西24cm、南東25cm、北西23cmの高さがあり、壁面はやや外傾する。床は全面貼床で、炉の周辺は堅く良好であるが、周辺は軟弱である。炉は北側の柱穴間において、焼土は南北1.6m、東西1.3mの範囲に広がっているが、中央に土器が敷かれている。土器は2層に重ねて敷かれ、その下は地床炉となっているので、3回の改修があったことになる。柱は4本主柱で、ビット2は深さ

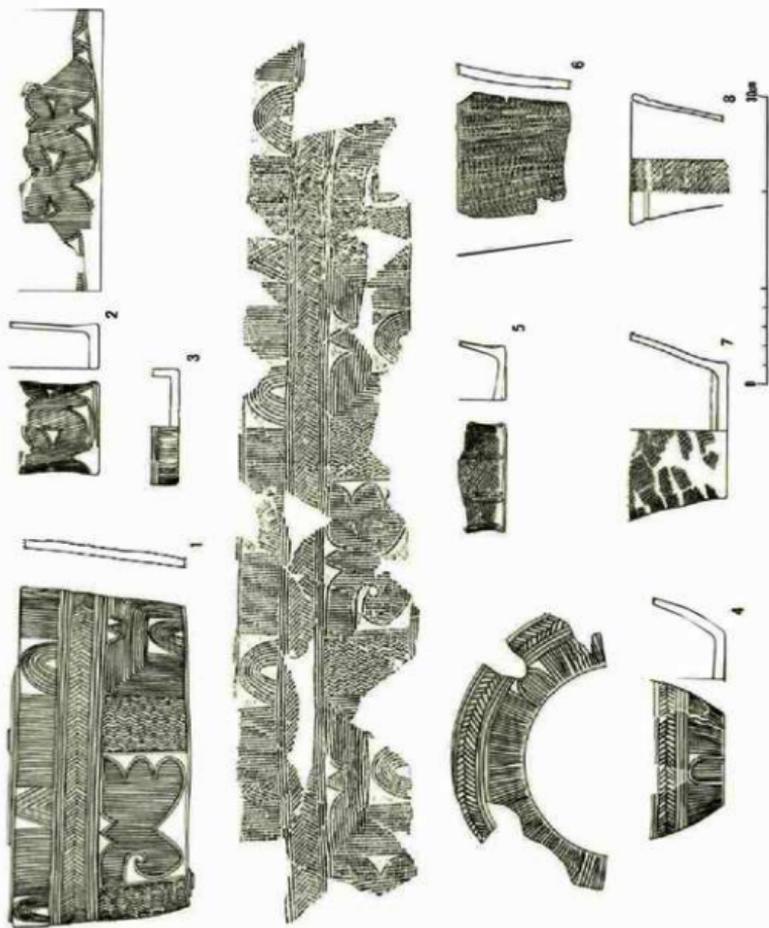


第114图 38号住居址出土土器(2)

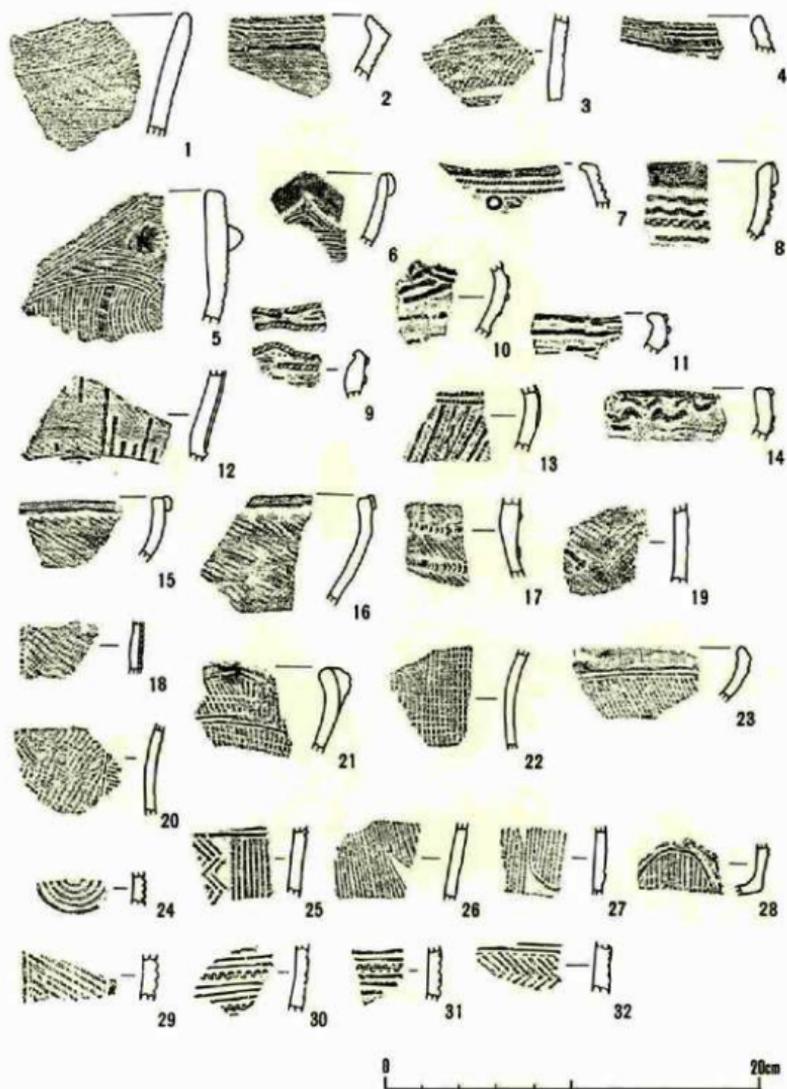


第115图 39号住居址平面图

1. 黑褐色土层
2. 暗褐色土层
3. 褐色土层
4. 褐色土层
5. 黄褐色砂层



第116图 39号住居址出土土器(1)



第117图 39号住居址出土土器(2)

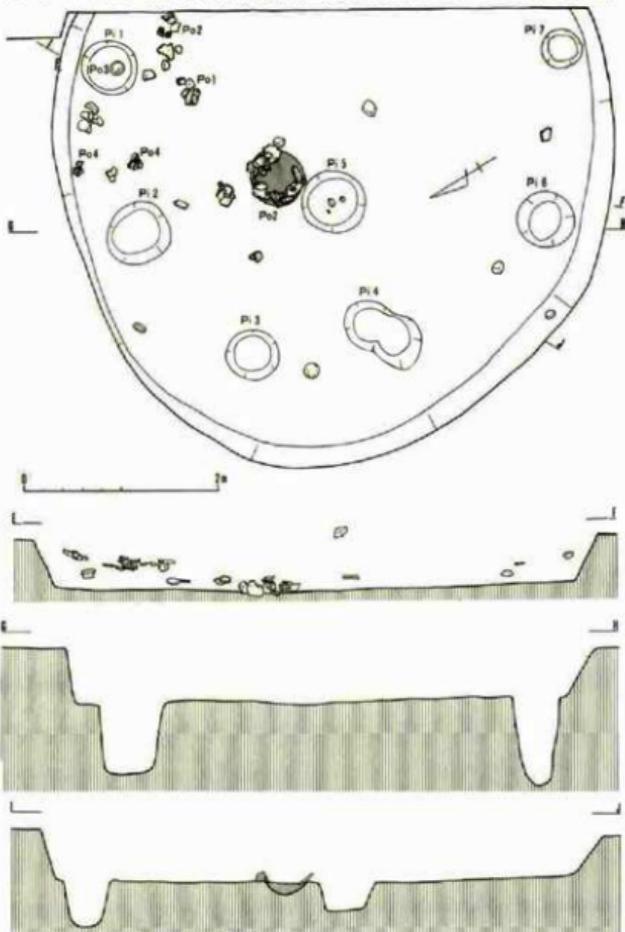
30cm、短径16cm、長径25cm、ピット3は深さ27cm、短径16cm、長径20cm、ピット4は深さ20cm、短径20cm、長径24cm、ピット5は深さ20cm、短径15cm、長径30cmである。貯蔵穴は南壁に接して深さ37cm、直径32cmの規模である。

39号住居址（縄文）第115～117図

縄文時代住居址としては遺跡の最北部に位置し、属する時代も前期終末～中期初頭である。

住居址はほぼ円形をしており、短径5.15m、長径5.6mで、主軸はN-19°-Wと思われる。壁は東で86cm、西80cm、南70cm、北83cmと最も深い住居で、壁面は若干傾斜している。炉は住居中央より北に偏在しており、東西60cm、南北90cmの範囲に薄く焼土が広がる地床炉である。柱穴は6本主柱で、その他に小ピットが4本あるが、支柱穴であろうか。ピット2は深さ48cm、

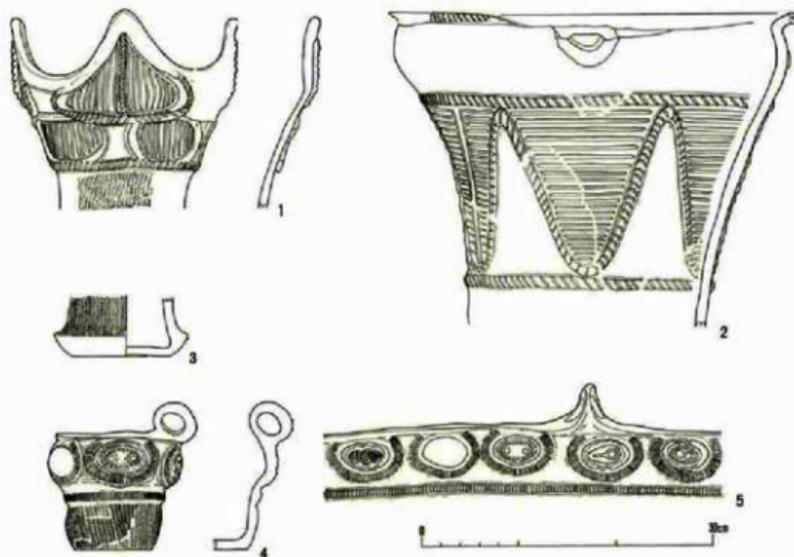
短径50cm、長径87cm、ピット3は深さ49cm、短径38cm、長径50cm、ピット5は深さ31cm、短径88cm、長径112cm、ピット7は深さ48cm、短径43cm、長径50cm、ピット8は深さ60cm、短径55cm、長径65cm、ピット9は深さ62cm、直径55cmが主柱穴で、深さ16cmのピット1、深さ44cmのピット4、深さ16cmのピット6、深さ50cmのピット10は支柱穴であろう。この他特別な施設は無く、遺物は床面にちかい部分から出土している。



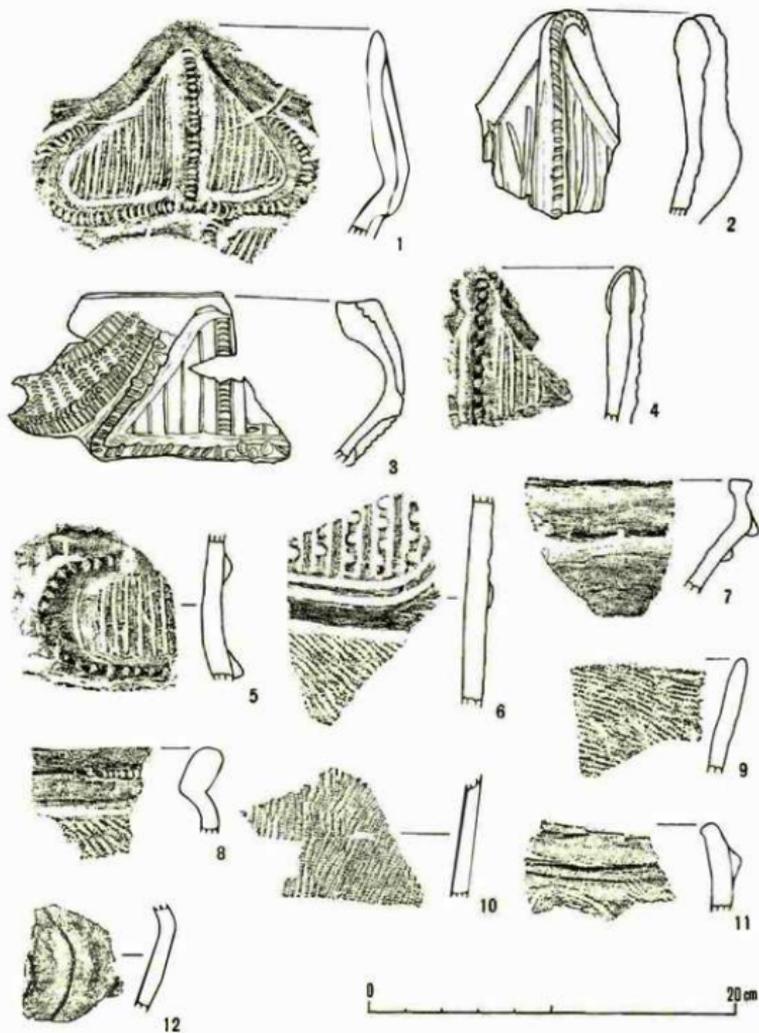
第118図
40号住居址平面図

40号住居址（縄文）第118～120図

39号住居址の南西に位置し、36号住居址と壁を接している。又、南東部は未調査部分があるので、住居址の全体は明らかではない。現存する規模は長径5.8m、短径5.78mで不整形である。壁は東側で51cm、西38cm、南43cm、北52cmの高さがあり、壁面は北側が垂直にちかいが、他は外傾斜している。炉は住居の中央より若干北に寄っており、土器片で囲った特異な土器囲炉である。柱穴は5本検出されている。ビット1は深さ51cm、直径56cm、ビット2は深さ72cm、直径66cm、ビット3は深さ63cm、直径53cm、ビット4は深さ60cm、短径45cm、長径90cm、ビット6は深さ90cm、直径60cm、ビット7は深さ67cm、直径40cmである。ビットはダルマ形プランをしているので長径が短径の倍である。又、ビット5は炉の南にあって深さ35cmと浅く、柱穴に加えることが困難であろう。本住居の出土遺物は、縄文中期中葉に属するもので、関東地方で言う勝坂式の新しい部分であろう。遺物は、住居北東部に集中しており、断面から観察すると、住居がレンズ状に埋没した時、住居北東側に住んでいた人々が不用となった土器片を投げ込んだように見える。このような現象を吹上パターンと呼んでいるが、この住居では大破片はあるものの、一括土器として復元されたものは少ない。



第119図 40号住居址出土土器（1）



第120图 40号住居址出土土器(2)

第2表 縄文時代住居址出土土器観察表

1)口径 2)器高 3)底径 4)胴径

番号	器形	法量	文様	技法	備考
7住(21図)					
1. 床直	深鉢	1) 12.4 2) 16.8 3) 6.7 4) 12.6			茶褐色 胎土やや粗め 焼成良好
2. フク土	深鉢	1) 25.0 2) 3) 4)	縄文文様	口縁部横ナデ	茶褐色 やや粗い 砂粒多く含む
3.	深鉢	1) 2) 3) 15.2 4)		内面、ヘラで調整。外面、胴部に半截竹管による縦位の平行沈線が一周され、その上下に横位の1本の太い沈線が施文。縦位の沈線は上一下へ工具を動かしたと思われる。沈線文帯の下には粘土紐を貼付した文様帯。楕円形を横位に5つ並べ一周。1ヶ所だけ楕円の間に楕円の上部を一周させた粘土紐の余った部分を斜めに貼付けてある。 底部ナデ	外面、赤褐色 外面、黒色 胎土、多量の砂 小石混入 焼成 良好
4. 床直	深鉢	1) 2) 3) 14.6 4)			茶褐色 胎土粗く砂粒多く含む 焼成 良
5.	深鉢	1) 2) 3) 12.0 4)			茶褐色 赤色粒子 金雲母、黒雲母 砂粒多く含む
6.	深鉢	1) 2) 3) 5.6		指圧痕	黒灰褐色、茶褐色 胎土 長石、石英、 黒雲母混入

番号	器形	法量	文様	技法	備考
7.	深鉢	4) 1) 23.6 2) 3) 4)		口縁部すぐ下に直径約1cm、 中心部直径約6mm位の穴あり。 部分的に煤付着	暗褐色 部分的に、白、茶、 明茶褐色
8.	浅鉢	1) 35.5 2) 3) 4)			色調、茶褐色 焼むらあり 胎土 粗い
9. 床	浅鉢	1) 2) 3) 13.8 4)			色調 褐色 胎土 やや粗い 焼成 良い
10住 (30図)					
1.	浅鉢	1) 24.2 2) 3) 4)			
2.	深鉢	1) 14.5 2) 3) 4)			色調 茶褐色 胎土 粗め 焼成 良
3.	深鉢	1) 10.4 2) 3)			色調 茶褐色 胎土 長石、石英、 赤色粒子含む
4.	深鉢	1) 2) 3) 12.0			色調 暗茶褐色 胎土 粗く砂粒、石 英、金雲母他多く含 む
13住 (37図)					
1.	深鉢	1) 27.2 2) 41.9 3) 14.8 4) 17.0		区画文、2単位。更に1単位 を渦巻文様で2単位に分別	色調 褐色 胎土 密、白色砂粒 含む 焼成 良好
2.	深鉢	1) 17.6		口縁部厚く、ヘラで丁寧な磨	色調 灰褐色

番号	器形	法量	文様	技法	備考
3.	深鉢	2) 3) 4) 1) 12.1 2) 3)		きが施行。外面、口縁部より2cm程下に突起物があり左に傾いて付けてある。	胎土 密 焼成 良 色調 赤褐色
4.	深鉢	1) 16.8 2) 3) 4)	円と楕円形の組合わせで出来ている回りに細かい刻みあり	口縁に把手あり、その下に3cm程下に小さめの円の突起物、その中心がくりぬいてある。内面丁寧なへら磨き	色調 暗褐色 胎土 砂粒を少量含む。 焼成 良 色調 暗褐色
5.	深鉢	1) 15.8 2) 3) 4)			胎土 やや粗く砂粒含む 焼成 良好 色調 暗褐色
6.	深鉢	1) 14.2 2) 21.5 3) 8.2 4)			胎土 石英、雲母多く含む 焼成 もろい感じ
7.	深鉢	1) 2) 3) 7.2 4)			外 茶褐色 内 黒褐色 胎土 やや粗い 焼成 良
8.	深鉢	1) 2) 3) 17.5 4)		指頭痕有。整形、粗雑。胴部中央毛虫状貼付文約10cm有す。文様の中央盛り上りに刻みあり	色調 赤褐色 胎土 粗く砂粒小石を含む 焼成 良
9.	深鉢	1) 2) 3) 15.6 4)			色調 茶褐色 内面 焼むら有り
10.	深鉢	1) 9.8 2) 14.0 3) 6.0 4)			暗褐色 胎土 雲母、砂粒多く含む
11.	深鉢	1) 17.3		胴下半は二次焼成	褐色

番号	器形	法量	文様	技法	備考
12.	手捏 小型坏	2) 31.4			胎土 砂粒(石英等) 多く含む
		3) 10.9			
13.	手捏	4)			褐色
		1) 5.6			
14. (38回)	深鉢	2) 4.0		口縁に把手1個付く。内面へう磨き。胴下半二次焼成を受けてもろくなっている。	胎土 雲母、石英、 粒多く含む 焼成 もろい
		1) 8.3			
		2) 3.5			
		3)			
15.	深鉢	4)		内面に炭化物付着	明褐色
		1) 20.4			
		2) 33.2			
		3) 11.2			
16.	深鉢	4)		縄文は、横方向に回転。土器の前と後では縄文の回転方向を逆にしている。	胎土 砂粒、石英、 雲母を含む
		1) 17.8			
		2) 27.0			
		3) 10.6			
17.	深鉢	4)		縄文は、横方向に回転。土器の前と後では縄文の回転方向を逆にしている。	茶褐色
		1)			
		2)			
		3) 9.2			
18.	深鉢	4)		縄文は、横方向に回転。土器の前と後では縄文の回転方向を逆にしている。	胎土 やや密、白色、 砂粒、雲母を多量に含む
		1) 12.7			
		2) 22.7			
		3) 8.4			
19.	小型深鉢	4) 15.8		外面 全面縄文	上半、黒褐色 下半 赤褐色
		1) 25.5			
		2)			
		3)			
19.	小型深鉢	4)		外面 全面縄文	胎土 石英、長石等 粒子多く含む
		1)			
		2)			焼成 ややもろい 暗褐色
		3)			胎土 砂粒含む
		4)			焼成 良
		1)			茶褐色
		2)			胎土 粗い。砂粒多

番号	器形	法量	文様	技法	備考
20.	有孔罇付 土器	3) 4.1	縄文	内外面研磨	く含む 表面に赤色顔料が若干残っている。
		4)			
23住(67図)		1) 16			
		2) 11.8			
		3) 7			
		4) 13			
1.	特殊土器	1) 10.7	※	縦に紐のようなものを通すと	黄褐色
住居址内		2) 19.6	口縁は2単位の波	思われる穿孔された瘤状の粘土貼付けを二単位もつ特殊な	胴上部から口縁にかけて朱のようなもので赤色に表裏共に彩色されている。
土壌出土		3) 8.6	状口縁から成り。	土器。この瘤状の粘土貼付けは、2単位共、口縁付近と胴	内面は黒色
		4)	波状口縁下はそれぞれ穿あり。底部はほぼ水平	下半部につけられそれぞれ縦に穿孔されており、紐のようなものを通すように作られており、この上下の孔を結ぶように土器表面自体も紐にけずられている ※	胎土 細かな石粒をやや含むが全体的に風化されており器面は弱くなっている。
2.	大(浅鉢)	1) 49.0			茶褐色
東土壌		2)			胎土 粗く砂粒含む
		3)			長石、石英他
		4)			
3.	深鉢	1)			外面 茶褐色
		2)			内面 黄褐色
		3) 9.4			胎土 粗め
		4)			
39住(116図)					
1.	深鉢	1)			
		2)			
		3)			
		4) 38.4			
2.	深鉢	1)	半截竹管による縦	円筒形に近い器形?	赤褐色
		2)	方向の並行沈線で		
		3) 9.2	器面全体を覆って		
		4) 9.4	おり、その中に通		

番号	器形	法量	文様	技法	備考
3.	深鉢	1) 2) 3) 11.4	続する弧線文、三角形をモチーフとした文様及び底部近くに連続する波状文が同じ工具で施行。		
4.	深鉢	1) 2) 3) 9.2		半截竹管による縦位の施文を行い、その後横位の沈線による施文	胎土 雲母片含む 焼成 良好
5.	深鉢	1) 2) 3) 4)		地文に原体LRの縄文を横位に施文。原体は2cm程の長さと思われる。	赤褐色 胎土 石英等含む
6.	深鉢片	1) 2) 3) 4)		外面 横位の沈線がありその直下より縦位の刺突文を有する沈線施行	外面 暗茶褐色 内面 暗赤褐色 胎土 砂粒含む
7.	深鉢	1) 2) 3) 14.1 4)	縄文は原体LRの単節縄文で、縄長は2cmほど、節の数7-8ヶ		胎土 石英など粒子混入 焼成 良いが風化されている
8.	深鉢	1) 13.6 2) 3)			
40住(1198)					
1.	深鉢	1) 22.9 2) 3) 4)	胴部は縄文によって施文	口縁部は波状で4単位。隆帯によって区画。中をへら状工具による施文	赤褐色
2.	深鉢	1) 40.6 2)		へら状工具により口縁部及び胴部の施文が行われる。文様	灰褐色 部々に煤付着

番号	器形	法量	文様	技法	備考
3.	深鉢	3) 4) 1) 2) 3) 9.8 4)		の単位は5単位で隆帯により区画される。把手状のものがいくつかついていたと思われる。	外 赤褐色 内 茶褐色 胎土 砂粒含む
4.	把手付土器	1) 14.1 2) 12.3 3) 7.8 4)	文様は5単位に区画される。 胴下半部に縄文が施されている。	施文はヘラ状工具による	胎土 良 焼成 良好

第3表 弥生時代住居址出土土器観察表

1)口径 2)器高 3)底径 4)胴径

番号	器形	法量	文様	技法	備考
1住(15図)					
1.	小型甕	1) 2) 3) 3.6 4)		ハケの後へら磨き	色 褐色 胎 粗い 焼 良好
2住(15図)					
2.	甕	1) 21.5 2) 41.4 3) 8.7 4) 28.9	口縁部 波状文 頸部 波状櫛目文 は8単位。部分的にすり消えている。	口縁 横へらみがき 頸部 横へら磨き 体部 上を縦のへら磨き 中 横のへら磨き 下半 縦のへら磨き 底部 折り返し、若干はけ目の痕跡 口縁部に折り返しの際の指圧痕が残っている。 整形の順 ハケ目→へら磨き→波状櫛目文(若干の磨き) 内面 頸部 横へら磨き 体部 ハケ目13単位	内面外面共にやや赤みを帯びた黄褐色 胎土 きめ細かく良好。細かい金雲母含む。 焼成 良好
3.	高 坏	1) 2) 3) 4)		外面は磨きを施してある	外面 赤色塗彩 脚内面 黄褐色 胎土は緻密
3住(8図)					
1.	甕	1) 22.4	口縁 波状文 頸部下半 波状文 4単位。右へ施文	外面 ハケで調整後櫛描波状文を施す 内面 ハケで調整後へらで更に調整	赤褐色 胎土 白色砂粒、金雲母がみられる 焼成 良好
2.	甕	1) 22.7 2) 3) 4)	口縁 櫛描波状文 頸部 ハケ目	横方向のハケ目の上を縦方向のハケ施こしている	赤褐色 胎土 やや粗め 焼成 良

番号	器形	法量	文様	技法	備考
3.	甕	1) 2) 3) 8. 4) 15.1	頸部上半上側の沈線を施文後簾状文を施している 頸部下半は2本の沈線の間に沈線で三角形の区画をつくり出している。	内面 ハケ調整 胴部 最大径以下ではハケ調整後ヘラで調整	外面 淡褐色 内面 黒色(付着物) 胎土 砂粒を多量に含む 焼成 良好
4.	甕	1) 2) 3) 4) 10.		外面 指頭→刷毛目→ヘラけ ざり→ヘラみがき 内面 輪積明瞭その上に粗いハケ目	明るい茶褐色、内面大半黒色 胎土 金雲母多量含む。石英若干 焼成 良好
5.	甕	1) 17.0 2) 3) 4) 16.1	柳描波状文、2本単位右→左、2本間に浅い線	上部 ハケ目→ヘラ整型→波状文 体部上半 波状文→ヘラみがき 体部下半 ハケ目→ヘラみがき	黒褐色 胎土 金雲母片多、石英若干 焼成 良好
6.	甕	1) 2) 3) 8.1 4)			外、暗褐色 内、薄茶褐色 底部、茶褐色 胎土 金雲母、黒雲母少量含む
7.	甕	1) 2) 3) 8 4)		底部 ハケ目	淡茶褐色 胎土 砂粒、金雲母少量含む 焼成 良好
8.	甕	1) 2) 3) 6.3 4)		外面 縦方向のハケ目 内面 横方向のハケ目	茶褐色 小石、金雲母含む 焼成 良好
9.	甕	1) 2) 3) 8.2 4)			外側 褐色 内側 暗褐色 砂粒、金雲母、石英含む

番号	器形	法量	文様	技法	備考
10.	甕	1) 2) 3) 6.6 4)			外側 暗褐色 内側 黒褐色 焼成 良
11.	高 坏	1) 17.8 2) 3) 4)		外 斜方向のハケ目→斜方向のへらけずり、へらみがき 内 横ハケ目の上を横へらけずり、へらみがき	内、外共に赤色塗彩 石英、長石、金雲母 多量に含む
12.	高 坏				茶褐色 石英、長石、砂粒、 赤色粒子含む 焼成 良好
4 住 (11図)					
1.	甕	1) 25.6 2) 3) 4)		外面 ハケ目→へらけずり 内面 へらで磨かれている為 口縁部だけハケ目あり	茶褐色 焼むらあり 胎土 粗い砂粒含む 焼成 良好
2.	甕	1) 27.1 2) 36.5 3) 26.4 4) 9.1	頸部上半 波状文 = 中 簾状文 = 下半 波状文 2~4 本単位 胴部 円形貼付け文	外面上部 ハケ目→波状文 頸部中 ハケ目→簾状文 = 下 ハケ目→波状文 胴部中 斜めハケ目 = 下 縦へらけずり、へらみがき 内面上部 横ハケ目→横へらみがき 内面中部 斜めハケ目→横へらみがき 内面下 横へらみがき。下部に指頭痕あり	外面上半 煤付着著しく黒色 外面下半 明褐色 内面 茶褐色 胎土 緻密良好、雲母、石英含む 焼成 良
3.	甕	1) 2) 3) 4) 24.8	胴上部 櫛描波状文 (12本単位) 胴中部 斜横のハケ目 胴下部 縦方向のへら磨	外面 ハケ調整後櫛描き波状文。波状文は12本単位で下から上へと施されている。	茶褐色 胎土 やや粗め 焼成 良

番号	器形	法量	文様	技法	備考
4.	甕	1) 2) 3) 4) 22.0	胴部上半 梯描き 波状文。単位、4 ~5本。下→上、 左→右へ施文	胴部下半(外面) 縦へら調 整 内面 横へら調整	胴上半 黒色 胴下半 明褐色 胎土 緻密、金雲母 多し。部分的に煤付 着
5.	甕	1) 2) 3) 4) 24.0	胴体上半 簾状文 " 中 波状文 6~7本単位 上→下、左→右へ 施文 胴体下半 ハケ目 ハケ→波状文	内面 ハケ、2種類の工具で ハケ調整 上部 7~8本単位、約2mm 中部 9~10本単位で巾が1 mmより細かい	茶褐色 胎土 やや粗い 焼成 良好
6.	甕	1) 12 2) 3) 4) 12.5	口縁、肩部、波状 文 頸部 簾状文	内、外面共にへら磨き。特に 内面は赤褐色を程し光沢あり	胴上半 褐色 " 下半 明褐色 内面 赤褐色 胎土 白色、砂粒含 む 焼成 ややあまい感 じ
7.	甕	1) 2) 3) 8 4)			淡褐色 胎土 金雲母、石英 黒雲母、砂粒含む 内側に煤付着
8.	瓶	1) 2) 3) 5.4 4)		表 へらけずり	灰褐色 胎土 やや粗い 焼成 良
9.	高 環	1) 20.0 2) 3) 4)			明茶褐色 胎土 密 焼成 良好
6住(15図)					
1.	甕	1) 8.8 2) 13.7 3) 5.2		外面及び口縁内面はへら磨き が丁寧。 内面は調整雑であるが胴屈曲	口頸部 赤色(顔料 塗布による) 胎土 小砂粒多く含

番号	器形	法 種	文 様	技 法	備 考
2.	大型 壺	4) 10.9 1) 2) 3) 13.2 4) 45.1		部には櫛状工具による調整が施行 外側 口頸と底部にハケあり。 内側 ハケ目あり	む 焼成 良好 茶褐色、部分的に焼 むらあり。下部に灰 化物付着 胎土 やや粗い。砂 粒多く含む
3.	壺	1) 16.0 2) 3) 4)		外側 口縁部は横ナデ、頸部へらみがき 内面 頸部上半 ハケ調整の上を波状文。頸部下半よりハケ目	外面 茶褐色 内面 黄褐色、口縁部に赤色塗彩
4.	甕	1) 2) 3) 7.7 4)		内面にハケあり	
5.	鉢	1) 10.5 2) 4.6 3) 4.2 4)		内外面共にへらみがき。 2孔1単位の小孔を1対有する	内外面共、赤色塗彩 (顔料塗布) 胎土 白色小砂粒含む 焼成 良好
6.	台付 甕	1) 2) 3) 10.0 4)			
7.	台付 甕	1) 2) 3) 13.7 4)		外面 はけあり 台付内面 はけあり	茶、暗褐色 胎土 長石、石英、砂粒含む
8.	甕	1) 2) 3) 5.2 4) 8.9	胴部上半 波状文	外側胴部下半 へら削り 底部 ハケあり 内側 ハケ調整のあと横へら磨きを施してある	茶褐色 胎土 やや粗め 焼成 良
9.	甕	1) 14.3 2)	口縁に刻み目あり 頸部上 波状文	口縁部に刻み目あり	暗褐色、白褐色部分有り

番号	器形	法量	文様	技法	備考
10.	甕	3) 4) 13 1) 16.0 2) 3) 4) 13.4	頸部中 簾状文 頸部下 波状文	外面 細かいハケ目 内面 斜横のハケ目	胎土 砂粒、金雲母 含む 茶褐色 胎土 やや粗め 焼成 良
11.	甕	1) 16.2 2) 3) 4) 14.6		外面 ハケ目 内面 ハケとヘラ磨き	やや赤い褐色、ター ル状の黒色 胎土 粗い 焼成 良
12. (16図)	甕	1) 14.1 2) 3) 4)			暗褐色 胎土 石英、金雲母 含む
13.	甕	1) 2) 3) 8.3 4)		外面 縦ヘラ磨き 内面 横ヘラ磨き	外面 暗茶褐色 内面 黒褐色 胎土 やや密、砂粒 含む
14.	甕	1) 2) 3) 7.4 4)			
15.	甕	1) 2) 3) 5.9 4)			外面 黄褐色 内面 黒褐色 胎土 砂粒多量に含 む
16.	壺 底部	1) 2) 3) 8.2 4)		外面 縦ヘラみがき 内面 横ヘラみがき	外面 暗褐色 内面 茶褐色 胎土 やや密、金雲 母、砂粒含む
17.	甕	1) 2) 3) 9.0 4)			
18.	甕	1)		外面 ヘラけずり、底部にハ	茶褐色

番号	器形	法 量	文 様	技 法	備 考
19.	壺 フク土	2)		ケ目あり	胎土 粗い
		3) 6.0		内面 ハケ調整	焼成 良好
		4)			
		1)		外面 ハケ調整後へら削りが 施されている。ハケは細かく	茶褐色 胎土 やや粗い
20.	壺	2)		磨耗	焼成 良
		3) 6.3		内面 へらけずり	
		4)		外面 へら磨き	褐色
		1)		内面 ハケ調整のあとへら磨 き	胎土 粗い 焼成 良好
21.	壺	2)			
		3) 8.0		外面 ハケ調整の後へら磨き	暗褐色 胎土 粗い
		4)			焼成 良好
		1)		内面 ハケ調整	
22.	壺	2)			
		3) 8.0			
		4)		外面 ハケ調整、底部指頭痕 あり	暗茶褐色 胎土 やや粗い、砂
		1)		内面 へらみがき	粒、長石他含む
23.	瓶	2)			
		3) 6.5			
		4)			
		1)		内外共にへらみがきが施して ある。 赤色塗布があるようだがほと んど剥がれている	外割 赤色塗彩 内割 黒褐色 胎土 やや密 焼成 良
8住(25岡)	高 環 フク土	2)			
		3) 12.0			
		4)			
		1)			
2.	壺	2)			
		3) 4.7			
		4)			
		1)			
3.	壺	2)			
		3) 8			
		1)			黒褐色 胎土 金雲母、石英、 長石含む

番号	器形	法量	文様	技法	備考
9住		4)			焼成 良好
1.	壺	1)			茶褐色
		2)			胎土 金雲母、長石
		3) 8.8			その他の粒子
		4)			
2.	瓶	1)		外側 縦方向のへらけずり、	外側 暗茶褐色
		2)		底部近くに指頭痕。	内側 黒褐色
		3) 6.9		底部孔は焼成後にあげられた	胎土 金雲母、砂粒
		4) 13.1		もの	含む
3.	壺	1)		外側 口縁部に近い所にハケ	茶褐色
床面直		2)		目	胎土 粗い砂粒多く
		3)		内側 横方向にハケ目	含む
		4) 20.1			焼成 良好
4.	壺	1)			
		2)			
		3) 5.2			
12住 (35図)					
1.	壺	1)			灰褐色
		2)			胎土 金、黒雲母、
		3) 8.7			砂粒、赤色粒子含む
		4)			
15住 (43図)					
1.	壺	1) 34.0	口縁部 縄文文様	口縁 折り返し部分に指頭痕	茶褐色
		2)	の上に3ヶの縦隆	頸部 ハケの上をへらみがき	胎土 粗い、砂粒多
		3)	帯あり	内面 口縁部縄文、頸部へら	く含む
		4)	内面 口縁部3.5	みがき	焼成 良好
			cm単位に带状に縄		
			文		
2.	壺	1)		裾の部分にハケ目、それより	外面 茶褐色
		2)		上は、へら磨き	内面 暗褐色
		3) 7.8		内面 へら磨き	胎土 やや粗い
		4)			焼成 良好
3.	壺	1)		内側 ハケ目	灰褐色
		2)			砂粒、金雲母、石英

番 号	器 形	法 量	文 様	技 法	備 考
4.	甕の底部	3) 9 4) 20.7			含む 灰褐色、暗褐色
5.	甕	1) 2) 3) 6.8 4)			胎土 金雲母、長石 赤色粒子含む 焼成 良好 暗褐色、黒褐色
6.	壺	1) 2) 3) 7.8 4)			長石、石英、金雲母 を含む 焼成 良好 灰褐色、黒褐色、金 雲母、石英、赤色粒 子含む
7.	甕	1) 2) 3) 7.0 4)		内外共にへらみがき。裾部分 に指頭痕	焼成 良 灰褐色 胎土 やや粗い 焼成 良好
16住(47図)					
1.	壺 床直	1) 2) 3) 4) 17.2	外面 胴部に縄文 文様 内面 口縁部3 cm 巾に縄文文様	外面 口縁部にハケ目、首部 がへらみがき。他全面縄を転 がしている 内面 口縁部3 cm位縄文。他 はナデ 輪積跡あり へらみがきあり	茶褐色 胎土 やや密 焼成 良 灰褐色、淡茶褐色 胎土 石英 焼成 良
2.	壺	1) 20.0 2) 3) 4)			茶褐色 胎土 やや粗い 焼成 良
3.	甕	1) 2) 3) 17.4 4)		外面 ハケ目、7本単位の櫛 目	茶褐色 胎土 やや粗い 焼成 良
4.	高 坏	1) 18.4 2)		丁寧な横へら磨き	内外共に赤色塗彩 胎土 緻密砂粒含む

番号	器形	法量	文様	技法	備考
5.	高 坏	3)			焼成 良
		4)			
		1) 19.0		横方向にへら磨き	内外共に赤色顔料
		2)			胎土 密
6.	甕	3)			焼成 良
		4)			
		1) 18.0		内面 口縁部ハケ目	外面 褐色
		2)		内外面共に横ナデ、横へら磨	内面 黒褐色
7.	甕	3)		あり	胎土 密
		4)			焼成 良好
		1) 23.8	上部 不揃いの波	胴体上部 縦方向のへらみが	暗褐色、下の部分灰
		2)	状文	き	褐色
8.	甕	3)		内面 横方向のへらみがき	胎土 やや密
		4) 30.3			焼成 良
		1) 17.8	頸部上半、下半に	口縁部、胴体上半 ハケ目調	
		2) 25.4	波状文あり	整後波状文	
9.	甕	3) 7.0		胴体下半 ハケ目調整、へら	
		4) 19.1		磨き(縦方向)裾部分上に向	
				ってハケ目あり	
				内面、口縁部 横方向のへら	
17住(50図)	甕			みがき	
				胴体 縦方向のへらみがき、	
				底部に煤付着	
		1)	口縁部、胴体上半	外面 波状文、胴体下半にか	白褐色、一部赤褐色
1.	甕	2)	に波状文	けて丁寧な縦へら磨き	胎土 密
		3)			焼成 良好
		4)			
		床 面			外面 へら磨き
2.	高 坏	1) 12.8			焼むらあり
		2)			胎土 粗い
		3)		内外共に横へらみがき	焼成 良
	床 直				内外共に赤色塗彩
					胎土 密
					焼成 良好

番号	器形	法量	文様	技法	備考
3.	甌	4) 1) 2) 3) 6.4 4)		へらみがき、底部裾部分に刻 みらしいものが見られる	黄褐色 胎土 粗め 焼成 良、焼むらあ り
4. 床	手 捏	1) 2) 3) 4.0 4)		外側 指頭痕あり	外側 赤褐色、焼む らあり 内側 茶褐色 脚部内側一部 暗褐 色 胎土 粗い
5.	甕	1) 19.8 2) 3) 17.1 4)	口縁 押圧文 頸部上半 櫛描波 状文4段(少しゆるやかな波) 頸部中 一連止め 簾状文 頸部下半 櫛描波 状文3段14mm巾6 本 胴部下半 丁寧な 縦へら磨き	口縁 棒状工具による浅い押 圧 胴体上半 波状文と簾状文 胴体下半 へら磨き 内側 頸部上半 指圧痕、全 体に丁寧な横へら磨き、下方 に一部縦へら磨き	外 暗褐色 内 明褐色 胎土 多量の白色粒 若干の雲母を含む 焼成 良好
6.	甕	1) 2) 3) 6.6 4)		外面 底部にはけ調整、へら 磨きも施されている 内面 へら調整	外面 灰褐色 内面 茶褐色 胎土 粗い 焼成 良好
7.	甕	1) 2) 3) 5.8 4)			白褐色 胎土 石英含む。内 側に煤が付着 焼成 良好
8.	甕	1) 2) 3) 5.1 4)			黒褐色 胎土 石英含む 焼成 良
18住(54図)					

番号	器形	法量	文様	技法	備考
1.	高 坏	1) 12.0 2) 3) 4)		外面上半 櫛状工具による調整 下半 ヘラ磨き 内面 櫛状工具による調整	内外共に赤色塗彩 胎土 金雲母多く含む 焼成 良好
2.	壺	1) 2) 3) 4)	櫛描き波状文見られるが不明瞭	内面 輪積痕が見られる	灰褐色 胎土 砂粒多く含む 焼成 良好 下半に一部煤付着
3.	甕 炉内土器	1) 24.2 2) 29.2 3) 8.4 4) 23.4	頸部上半 波状文 〃 中 簾状文 〃 下半 波状文 胴部 籠目櫛描文あり	外面下部 丁寧なヘラ磨き 〃 上部 ハケによる調整のあと施文 内面 丁寧なヘラ磨き	淡褐色 胎土 密、精選されている 焼成 良
4.	甕	1) 2) 3) 4) 10.7	櫛描き波状文、単位8本 簾状文 単位5本	内外面 雑なヘラ磨きあり	暗褐色 胎土 砂粒、金雲母多量に含む 焼成 良
5.	甕 炉内土器	1) 2) 3) 4)	簾状文 櫛描文 7本単位	外面 ハケ目調整後簾状文 内面 丁寧なヘラ磨き、わずかにハケが残る	黄褐色 胎土 やや密 焼成 良好
6.	甕 フク土	1) 24.2 2) 3) 4) 23.4	口唇に波状文1本 頸部上半 波状文 〃 中 簾状文 胴部 櫛描文共に7本単位	外面 ハケ調整後文様施文 内面 極めて丁寧なヘラ磨き	赤褐色 外面 煤付着 胎土 密 焼成 良好
7.	甕	1) 17.2 2) 18.6 3) 7.2 4) 14.6		底部唇は折り返してあり、指頭痕が部分的にみられる 外面 ヘラ磨き、ヘラけずりは不明瞭	灰褐色 外面上半部煤付着 胎土 密 焼成 良好
8.	甕	1) 14.0 2) 9.6 3) 4.4 4)		外面上半 横ナデ 〃 下半 縦のへら磨き 底部 指頭痕 内面上半 横ナデ 〃 下半 横のへら磨き	外面上半 赤褐色 〃 下半 黄褐色 内面上半 黄褐色 内外面下半 煤付着 胎土 砂粒含む

番号	器形	法量	文様	技法	備考
19住 (57図)					焼成 良好
1.	高 坏	1) 22.8 2) 3) 4)			内外面共灰褐色 胎土 やや密 内面下 一部焼むら
2.	甗 炉 内	1) 2) 3) 4)		外面 ハケ目 内面 横方向のハケ目あり	外面 茶褐色 内面 灰褐色一部黒褐色 胎土 粗い 焼成 良好
3.	甗	1) 2) 3) 8.2 4)		外面 縦ハケ調整後ヘラ磨き 内面 横ハケ調整後ヘラ磨き	外面 明茶褐色 内面上部 茶褐色 * 底部 灰褐色一部黒変 胎土 粗い
4.	甗	1) 15.4 2) 3) 4)	胴部上半 櫛描波 状文	外面 ハケ調整→波状文→縦 方向のヘラ磨き 内面 ハケ調整→横ヘラ磨き	茶褐色 胎土 粗い砂粒含む 焼成 良好
5.	甗 床 面	1) 2) 3) 8.8 4)		外面 縦ハケ調整後ヘラ磨き 内面 横ハケ調整後ヘラ磨き モミ痕あり	外面 茶褐色 内面 灰褐色一部黒変 胎土 やや粗め 焼成 良
6.	甗	1) 2) 3) 6.0 4)		外面 ハケ調整 内面 ハケ調整の後横ヘラ磨 き 底部 ヘラ調整	茶褐色 胎土 やや粗い 焼成 良好
20住 (60図)					
1.	甗		口唇、口縁、内面 共縄文 口唇円形貼付文は 5 単位 頸部下半 縄文	丁字口縁部 ハケ調整の上を 縄文、指頭痕 頸部上 ハケ目→縦ヘラけず り、ヘラ磨き 頸部下半 ハケ目→縄文	外面 明褐色 内面 赤褐色共に斑 状黒色有り 内面 頸部口縁部に 煤。周回する頸部に

番号	器形	法量	文様	技法	備考
2.	壺	1) 11 2) 15.5 3) 5.9 4) 11.5	口唇部(丁字口縁) 櫛描波状文4本 頸部 櫛描波状文 単位、4本	口唇下面 指頭痕 頸部上半 指頭痕→ヘラけずり 頸部下半 波状 胴部全体 縦ヘラけずり、ヘラ磨き 胴部下端 指頭痕→ハケ目→ヘラ磨き 内面 口縁、ハケ目→横ヘラけずり→ヘラ磨き 頸部 ハケ目 胴部 輪積の跡あり 下半 ハケ目	て受け二次焼熱 胎土 緻密、長石、 金雲母多く含む 焼成 良 黄褐色、胴部黒色、 赤色の部分あり 胎土 緻密、金雲母 片若干 焼成 良好
3.	壺	1) 22 2) 3) 4)	口縁部 波状文	丁字口縁 口縁部 波状、口縁下にハケ目あり	茶褐色 胎土 やや粗い 焼成 良好
4.	甕	1) 2) 3) 10.0 4)		外面 全体にヘラ磨き、底部に棒状工具による調整 内面 はけ調整	茶褐色 胎土 やや粗い、砂粒含む 焼成 良好
5.	甕	1) 29.1 2) 37 3) 9.2 4) 29.2	口縁部 波状文2本 頸部上半 波状文6本 頸部中 簾状文 下半 波状文8本 簾状文→上下の波状文 波状文 右→左	胴部上半 ハケ目→櫛描文 胴部中 ハケ目 胴部下半 縦ヘラけずり→ヘラ磨き 底部 指頭痕あり 内面頸部 斜横ヘラ磨き 内面胴部 横ヘラ磨き	明褐色、黒色斑点あり 胎土 緻密、小石、 石英、長石、金雲母 若干含む 焼成 良好

番号	器形	法量	文様	技法	備考
6.	甕	1) 18.5 2) 28.8 3) 4.3 4) 19.1	下→上 頸部 櫛描波状文 4本単位で左→右 へ、上→下へ	外面胴部上半 ハケ目の上を 波状文 外面胴部下半 縦へらみがき 内面頸部上半 ハケ目 内面胴部 へら磨き	暗褐色 内外面共、黒色炭化 物が見られる 胴下半 一部黄褐色 胎土 白色砂粒多量 金雲母少々含む 焼成 良好
7.	瓶	1) 14.3 2) 9.7 3) 4.9 4)		外面口縁 横ハケ目 * 胴上部 斜横ハケ目 * 胴下半 縦へらけずり、 縦へら磨き 外面底部 ハケ目 内面口縁部 指頭痕→ハケ目 →へら磨き 内面胴部 ハケ目→粗くへら 仕上げ。内面に2条の炭化帯 あり	明茶褐色 一部二次焼熱うける 胎土 良好、細石英 長石若干含む 焼成 良好
21住(63図)					
1.	小形甕	1) 13.5 2) 14.0 3) 7.6 4) 12.5	ハケ目 櫛描波状文	口縁部 へらによる刻み、横 方向のへら磨き、上をヨコナ デ 頸部 無節縄文あり 胴部 ハケ目あり、不鮮明	茶褐色 粗い、砂粒含む 焼成 好
2.	甕	1) 14.6 2) 3) 4) 14.1	櫛描波状文 ハケ目	口縁部 ヨコナデ 頸部 ハケ目の上を櫛描波状 文 胴部 ハケの上をへら削り	暗褐色 やや粗い 焼成 良好
3.	甕	1) 15.8 2) 3) 4) 13.6	へら削り ハケ目	内、外共に、へら調整後ハケ 目が施されている	茶褐色 やや粗い 焼成 良好
4.	甕	1) 2) 3) 5.8	ハケ目 へら削り	外 ハケ調整 内 へら削り 底部 不定形なハケ目あり	黄褐色 やや密 焼成 良好

番号	器形	法量	文様	技法	備考
5.	甕	4) 1) 2) 3) 6.2 4)	ハケ目	不鮮明だがハケ目あり	茶褐色 やや粗い 焼成 良好
6.	甕	1) 14.0 2) 3) 4)	ハケ目	内外ともハケ目整形	内 茶褐色 外 黒褐色 やや粗い 焼成 良好
7.	小形甕	1) 2) 3) 5.9 4)	ハケ目	内、外ともハケ調整、不鮮明である。	内 黒褐色 外 灰褐色 やや粗い 焼成 良好
8.	小形甕	1) 2) 3) 4.4 4) 5.6	ヘラ削り ハケ目	内 ハケ調整 外 ヘラ削り	内 赤褐色 外 灰褐色(焼むらあり) やや密 焼成 良好
9.	器台	1) 2) 3) 4)	ヘラ磨き ハケ目	内 ヘラ調整、ハケ目あり 外 上部、横方向ヘラ磨き 下部、縦方向ヘラ磨き	外 赤色塗彩 内 一部赤色塗彩、 他褐色 粗い 焼成 良好 破片 35住より出土
10.	碗	1) 15.0 2) 7.2 3) 6.0 4)	ヘラみがき	口縁部にヘラで斜線状に刻み 模様あり 他部横ナデ、ヘラ磨き	赤色塗彩 緻密(金雲母含む) 焼成 良好
24住(73図)					
1.	大壺	1) 2) 3) 4) 54.4	ハケ目	内外ともハケ調整 外 ハケ目の上をヘラ磨き	茶褐色 粗い(砂粒含む) 焼成 良好
2.	大壺	1) 2)	ヘラ削り ハケ目	内 ヘラ削り 外 ハケ目調整	茶褐色 粗い(砂粒含む)

番号	器形	法量	文様	技法	備考
3.	小形甕	3)			焼成 良好
		4) 58.0			
		1)	櫛描T字文	頸部 横方向15本単位、縦方向8本単位の櫛描T字文。他	茶褐色(焼むら)
		2)	ヘラ磨き	部はハケ整形の上をヘラ磨き	やや粗い
4.	甕	3) 4.6	ハケ目		焼成 良好
		4) 9.4			
		1)	ヘラ磨き	縦方向のヘラ磨き	茶褐色(外)
		2)		底部荒削りの跡あり	暗褐色(内)
5.	甕	3) 7.7			粗い(砂粒含む)
		4)			焼成 良好
		1)	ヘラ磨き	外 縦方向のヘラ磨き	茶褐色(一部焼むらあり)
		2)		内 横方向のヘラ磨き	やや粗い
6.	甕	3) 5.4			焼成 良好
		4)			
		1)	ハケ目	ハケ目、調整	茶褐色
		2)		底部に木葉痕あり	粗(砂粒含む)
25住(76図)	1.	3) 7.8			焼成 良好
		4)			
		1) 22.4	ハケ目	内、外とも横方向のハケ目調整	茶褐色(一部焼むらあり)
		2)			やや粗い
2.	甕	4) 23.0			焼成 良好
		1) 13.2	ハケ目	外、細いハケが縦方向、内、	暗褐色(焼むら)
		2) 13.4	ヘラ磨き	ハケが横方向に施され、その	やや粗い
		3)		上を磨きが施されている	焼成 良好
3.	小形甕	4) 11.2			
		1) 14.4	ハケ目	内、外ともハケ調整	外 茶褐色
		2)			内 暗褐色
		3)			やや粗い
4.	甕	4) 13.5			焼成良好
		1) 16.6	ハケ目	外、頸部を境に上部は8本単位のハケ目、左上→右下に。	茶褐色
		2)		下部はより大きなハケ目が施	やや粗い
		3)		されている	焼成 良好
		4) 17.2			

番号	器形	法量	文様	技法	備考
5.	小形壺	1) 13.8 2) 14.1 3) 5.5 4) 11.9	櫛描波状文 簾状文 へら磨き	内 2種の工具からなっており、横方向にハケ目が施されている 口縁部及び胴部に櫛描波状文 右→左、8~9本単位 頸部 簾状文右→左、8~9本単位 内、横方向に磨きが施されている	暗褐色 やや粗い 焼成 良好
6.	高坏(脚部)	1) 2) 3) 15.0 4)	へらみがき ハケ目	外 へら磨きの上を赤色塗彩 内 全面ハケで調整、その上を若干へらで磨いている 脚と坏の接合部は手でなでてある	外 赤色塗彩 内 薄茶褐色 やや密(細い砂、鉄さび色粒子含む) 焼成 良好
7.	壺	1) 2) 3) 7.2 4)	へら磨き ハケ目	外 へら磨き 内 横方向にハケ調整、底部に指頭痕あり	茶褐色 やや粗い 焼成 良好
8.	壺	1) 2) 3) 7.4 4)	へらけずり へら磨き	外 縦方向へらけずり 内 へら磨き	黄褐色 やや密 焼成 良好
9.	壺	1) 2) 3) 7.0 4)	へら磨き ハケ目	外 縦方向に細いハケ調整 内 へら磨き、底部に粉跡あり	灰褐色 粗い 焼成 良好
10.	鉢	1) 11.0 2) 3) 4)	へらけずり ハケ目	外 部分的にハケ目があり、その上をへら調整	外 灰褐色 内 濃褐色 やや密(細い砂粒含む) 焼成 良好
11.	鉢	1) 10.0 2) 3)	へらけずり ハケ目	外 一部分ハケ目があり他はへらけずり 内 横方向のハケ目調整	茶褐色 やや密(砂粒含む) 焼成 良好

番号	器形	法量	文様	技法	備考
12.	高 環 (口縁部)	4) 9.1 1) 24.0 2) 3) 4)	へらみがき	内、外面共へら磨き。その上を赤色塗彩	赤色塗彩 やや密(砂粒含む) 焼成 良好
26住(79図)					
1.	壺	1) 2) 3) 4) 25.4	へらみがき ハケ目	外 斜位にハケをかけた後へら整形 内 横、斜方向へのハケ目外面に比較して工具の巾が広い	外 上部、赤色塗彩 下部は赤褐色 内 部分的に炭化物付着 やや粗い、砂粒含む 焼成 良好
2.	小形 甕	1) 13.4 2) 14.25 3) 5.7 4) 12.3	櫛描波状文 簾状文 ハケ目 へら削り	口縁部 波状文、頸部 簾状文、胴部上を波状文、中をハケ目調整した上からへらで調整 内 ハケ目調整 文様の単位7本	
3.	甕	1) 18.0 2) 3) 4)	櫛描波状文 簾状文 へら磨き	口縁部 波状文、頸部 簾状文、胴部上を波状文、下部はへら磨き。9本の単位で文様を施しているが、波状文は6~8本単位しか残っていない	茶褐色、焼むらあり やや粗い 焼成 良好
4.	甕	1) 2) 3) 7.0 4)	へら削り	内、外面共細い へら削り	外 茶褐色 内 暗褐色 やや粗い 焼成 良好
28住(84図)					
1.	高 環 (現存部1/2)	1) 20.9 2) 3) 4)	へらみがき ハケ目	外 縦方向のハケ目の後横方向にへらみがき 内 全面横方向のへらみがき 内、外面共 赤色塗彩、部分的にカーボン付着	
2.	手づくね	1) 7.0 2) 2.9	指頭痕 へら整形	小形手づくね土器 底部 へら整形	赤褐色 やや粗い

番号	器形	法量	文様	技法	備考
3.	高 坏 (口縁部)	3)	へら磨き	内面 へら整形 へら磨きの上を赤色塗彩されている。内、外面とも	焼成 良好 赤色塗彩 密 焼成 良好
		4)			
		1) 19.0			
		2)			
4.	高 坏 (口縁部)	3)	へら磨き	内 へら磨きの上を赤色塗彩 外 へら磨き	内 赤色塗彩 外 暗褐色 やや密 焼成 良好
		4)			
		1) 16.0			
		2)			
5.	鉢	3)	へら磨き	内、外ともへら磨き	内 白茶褐色 外 暗褐色
		4)			
		1) 14.0			
		2)			
29住(86図)	壺	3)	T字文 へら磨き ハケ目	縦方向にハケ目、その上をへら磨き、頸部に横方向に10本単位、縦方向に3本の櫛描T字文	赤褐色 やや粗い 焼成 良好
		4)			
		1) 23.6			
		2)			
2.	手づくね	3)	へら磨き	内、外ともへら磨き 内面 ハケ目一部あり 口縁部 横ハケ整形 底部 へら磨きの為寄せ土有り	茶褐色 粗い 焼成 良好
		4)			
		1) 6.2			
		2) 4.6			
3.	甕	3)	櫛描波状文 ハケ目 へら磨き	外 ハケ整形、10本単位 口縁部→胴張出部、櫛描波状文、左廻り方向の7本単位 内 へら磨き、胴部に一部ハケ整形されている。14本単位	薄茶褐色 やや粗い(砂粒含む) 焼成 良好
		4) 14.6			
		1) 15.2			
		2)			
4.	甕	3)	櫛描波状文 簾状文 ハケ目 へら磨き	外 ハケ整形の上を口縁部→胴張出部 波状→簾状→波状の順で文様が施されている 内 へら整形	赤褐色すず付着 やや粗い(砂粒含む) 焼成 良好
		4) 16.3			
		1) 17.8			
		2)			
5. 炉下	甕	1) 13.6	櫛描波状文	口唇部 ハケらしき工具で刻	薄茶褐色(すず付着)

番号	器形	法量	文様	技法	備考
6.	甗	2)	ヘラ削り	み	やや粗い
		3)	口唇刻み文	頸部 6 cm巾、櫛描波状文	焼成 良好
		4) 12.0		下部はヘラ削り、すず付着 内はヘラ整形	
		1) 20.0	ハケ目	外 口唇部にハケによる刻み、	薄茶褐色（一部焼むらあり）
7.	炉内甗	2)	櫛描波状文	ハケ整形の上を頸部だけ5本	やや密
		3)	口唇刻み文	単位の左→右方向に櫛描波状文	焼成 良好
		4) 19.0		内 ハケ整形の上をヘラ磨き、	
		1) 16.0	ハケ目	口唇部にハケによる刻み	外 黒褐色
8.	甗	2)	櫛描波状文	外 ハケ整形の上をヘラ磨き、	内 黄褐色
		3)	口唇刻み文	胴突出部に櫛描波状文、左→	やや密
		4) 15.5		右方向に4本単位 頸部にボタン状の貼付文あり	焼成 良好
		1) 10.9	ハケ目	4個と思う 内 ハケ整形、7～8本単位	
9.	甗	2)	ヘラ磨き	頸部にヘラ状工具でくの字状	
		3)	5.1	の沈線がみられる	内 赤茶褐色
		4)	8.5	外 頸部にハケの痕がみられ	外 すず付着、黒褐色
		1) 20.6	ハケ目	るが、上をヘラ磨きが施されている。	やや粗い(砂粒含む)
10.	甗	2)	ヘラ磨き	内 ヘラ削り、ヘラ磨き	焼成 良好
		3)	ヘラ磨き	外 全面ハケ整形の後、頸部	赤褐色
		4) 17.2		より上と胴部をヘラ磨き	やや粗い(砂粒含む)
		1) 13.4	ハケ目	内 ヘラ磨きをした後ハケ目	焼成 良好
2)	ヘラ磨き	を施し、頸部を再度、ヘラで			
		ハケ目を消している			
		口縁は内から外へ折返し、ふ			
		くらみあり			
		ハケ単位、外、不明、内面、			
		18本位			
		1) 13.4	ハケ目	ハケ整形の後ヘラ磨き	赤色塗彩（但し内面剥離）
		2)	ヘラ磨き		

番号	器形	法量	文様	技法	備考
11.	壺	3)			密
		4)			焼成 良好
		1)	ハケ目	外 ハケ整形の後へら磨き	内 赤褐色
		2)	へら磨き	内 へら磨き	外 褐色
		3) 5.0	へら削り	底部 へら削り	粗い
12. 炉下	壺	4)			焼成 良好
		1) 21.8	へらけずり	外 へら削り	黄褐色
		2)		内 棒状の削り跡が何本かある	外 焼むらあり
		3)			やや密
13.	高坏(坏部)	4)			焼成 良好
		1) 28.5	へら磨き	口縁部に受口があり破片にて数が確認できない	赤色塗彩
		2)		内外面 へら磨き、その上を赤色塗彩されている	やや密(雲母含む)
		3)			焼成 良好
14.	壺(口縁)	4)			焼成 良好
		1) 19.8	へら磨き	内外面 へら磨きの上を赤色塗彩	赤色塗彩
		2)			密
		3)			焼成 良好
15.	高坏(坏部)	4)			焼成 良好
		1)	へら磨き	外 へら磨きの上を赤色塗彩	外 赤色塗彩
		2)	ハケ目	内 粗雑な整形、ハケ目が施されている	内 黄褐色
		3) 13.3			やや粗い
30住(90図)					
1.	壺	1) 9.2	ハケ目	外 口縁部から頸部にかけて縦方向のハケ整形。胴部から底部は斜め方向のハケ整形。胴張出部は指頭ナデの様である。	褐色、一部暗褐色
		2) 16.9		内 全体ハケ整形	粗い(5~8mm大の小礫含む)
		3) 15.2			焼成 良好
		4) 6.8			
2.	壺	1)	ハケ目	外 斜め方向ハケ整形の上をへら磨き	外 暗褐色
		2)	へら磨き	内 ハケ整形	内 灰褐色
		3)			粗い(小礫、雲母含)
		4) 22.0			焼成 良好
3.	壺	1)	へら磨き	外は丁寧なへら磨き	褐色
		2)		内は整形、粗雑輪積痕が見える	粗い(砂粒含む)

番号	器形	法量	文様	技法	備考
4.	小形甕	3)	櫛描波状文 簾状文 へら磨き ハケ目	外 口縁部 櫛描波状文 " 頸部 簾状文 " 胴部 櫛描波状文 内 ハケ目の上を横ナデのへら磨きが施されている 外 文様11本単位	焼成 良好
		1) 15.2			茶褐色、焼むら有
		2)			やや粗い
		4)			焼成 良好
5.	甕(壺)	1) 17.0	へら磨き	へら整形で頸部に簾状文有。	黄褐色
		2)	簾状文	但し小片にて不明	粗い(砂粒含む)
		3)			焼成 良好
		4)			
6.	甕	1) 11.0	ハケ目	ハケ目整形で頸部に簾状文あり	暗褐色
		2)	簾状文		密(砂粒含む)
		3)		但し小片にて不鮮明	焼成 良好
		4)			
7.	高坏(脚部)	1)	へら磨き	外 縦方向へら磨きの上を赤色塗彩	外 赤色塗彩
		2)			内 黄褐色
		3) 13.8		内 横方向へら磨き整形	密(石英粒子含む)
		4)			焼成 良好
8.	高坏	1)	へら削り	外 縦方向のへらけずり	薄赤茶褐色
		2)	ハケ目	内 脚内は粗雑な整形でへら整形。杯内面はへら削り。ハケを利用した痕も若干あり	粗い(砂粒含む)
		3)			焼成 良好
		4)			
31住(93図)	1. 甕	1) 17.4	櫛描波状文	外 へら磨きをした上に頸部に簾状文を施し、その後口縁部と胴部に櫛描波状文を施している。7本単位 内 ハケ整形の上をへらみがき	外 黄褐色(焼むら有)
		2)	簾状文		内 白灰褐色
		3)	へらみがき		やや粗い
		4) 18.5	ハケ目		焼成 良好
	2. 甕	1) 21.6	ハケ目	外 上部をハケ整形 下部をへら削り 内 へらで磨かれている	茶褐色(焼むらあり)
		2)	へら削り		粗い
		3)	へら磨き		焼成 良好
		4) 19.2			

番号	器形	法量	文様	技法	備考
3.	鉢	1) 13.7 2) 6.6 3) 5.8 4)	ヘラ磨き	内、外面共ヘラ磨き	灰褐色 やや粗い 焼成 良好
32住 (96四)					
1.	高 坏	1) 2) 3) 7.8 4)	ハケ目	外面、脚部内面にハケ目整形	暗茶褐色 やや粗い 焼成 良好
2.	甕	1) 2) 3) 6.3 4)	ヘラ磨き	内、外面ともヘラ整形	黒褐色 (外) 薄茶褐色 (内) やや粗い 焼成 良好
33住 (99四)					
1.	壺	1) 11.2 2) 3) 4)	ハケ目	内 外面ともハケ目整形 口唇部にもハケ目整形有	薄茶褐色 粗い (砂粒含む) 焼成 良好
2.	小形 甕	1) 2) 3) 6.0 4) 8.2	ヘラ磨き	外 横方向にヘラ磨き 内 粗雑な整形、輪積の痕跡が見られる。 底部 備けずり跡あり	灰褐色 やや粗い 焼成 良好
3.	高坏(坏部)	1) 25.3 2) 3) 4)	ヘラ磨き	内、外とも横方向のヘラ磨き、 その上に赤色塗彩。口唇部に ボタン状の突起有り。現存部 では3個であるが、位置から して5個かもしれない	内、外、赤色塗彩 やや密 焼成 良好
4.	高坏(坏部)	1) 16.7 2) 3) 4)	ヘラ磨き	外 縦方向のヘラ整形 内 横方向のヘラ整形、その 上に内外とも赤色塗彩 口唇部に5単位の小突起がつけられている	赤色塗彩 やや密(金雲母含む) 焼成 良好
5.	高坏(脚部)	1) 2) 3) 8.4	ハケ目 ヘラ磨き	内、外面ともハケ目整形のあ と、ヘラ磨きが施されている。 脚部内面ハケ目が残っている	茶褐色 焼成 良好

番号	器形	法量	文様	技法	備考
6.	鉢	4) 1) 11.0 2) 5.8 3) 4.8 4)	へら磨き	全面・底部までもが丁寧なへら磨き。底部外面以外は全面赤色塗彩がしてある 口唇直下に2つの小孔がある。対称したもう一方は欠損している	赤色塗彩 密(細かい砂粒含む) 底部、赤褐色 焼成 良好
7. 炉	甕	1) 19.2 2) 3) 4) 18.4	ハケ目 櫛描波状文 糜状文 へら磨き	外 ハケ整形の後頸部に糜状文その上下口縁部、胴中部まで櫛描波状文、5本単位 内 横方向へら磨き2mm巾位	茶褐色 やや粗い 焼成 良好
8.	甕	1) 14.2 2) 15.0 3) 7.2 4) 12.6	へら磨き 櫛描波状文 糜状文	外 縦方向のへら磨きの後頸部に糜状文、更に口縁部と胴上部に櫛描波状文が施してある 櫛の単位、糜状文8、波状文6で施文は時計廻りである	外 赤褐色 内 上部 暗茶褐色 下部 黒褐色 焼成 良好
9.	甕	1) 2) 3) 6.6 4)	ハケ目 へら磨き	外 ハケ目の上を縦方向にへら磨き 内 斜め方向にへら磨き	赤茶褐色 やや粗い 焼成 良好
10.	甕(底部)	1) 2) 3) 5.6 4)			
11.	甕(底部)	1) 2) 3) 4)			暗褐色
12. 下層 フク土	甕(底部)	1) 2) 3) 6.0 4)			外 暗褐色 内 茶褐色 やや粗い 焼成 良好
34住(102図)					
1.	壺(口縁部)	1) 30.2	ハケ目	外 T字口縁でその口唇部に	茶褐色

番号	器形	法量	文様	技法	備考	
2.	壺(口縁部)	2)	波状文	不揃いな波状文が施してある。	やや密	
		3)	ヘラ磨き	4本の縦状隆帯付着	焼成 良好	
		4)		他 口縁部、ハケ整形 但し剝離して不鮮明		
		1) 21.0	ハケ目	内 ヘラ磨き 口唇部に四方に4つの突起が	外 赤褐色 内 茶褐色	
3.	壺	2)	ヘラ磨き	つく	頸部黒いすす有	
		3)	櫛描文	外 ハケ整形されているが、	やや粗い(砂粒含む)	
		4)		口縁と頸部以外は、後ヘラ磨きを施している。頸部に横方向の櫛描文が9本単位である。ハケの単位15本	焼成 良好	
		1)	ヘラ削り	内 ハケ整形の後ヘラ磨き 口縁部 横ヘラ削り		
4.	壺	2)	ハケ目	胴部 縦ヘラ削りの後下部ハケ整形		
		3)		内面 ハケ整形後ヘラ削り		
		4)		全体的に粗雑な整形		
		1)	ハケ目	外 ハケ目の後をヘラ磨き整形	黄褐色(薄茶)	
5.	注口土器 (片口)	2)	ヘラ磨き	内 ヘラ磨き	やや密	
		1)	7.3	ヘラ磨き	上部 横方向ヘラ磨き	茶褐色(焼むらあり)
		2)	11.3	ハケ目	下部 縦方向ヘラ磨き	やや密
		3)	5.9		底部付近に少々ハケ目有り	焼成 良好
6.	壺	4)	12.4		内 ヘラ磨き	
		1)	13.8	ハケ目	全体ハケ整形後、頸部に縞状	暗褐色
		2)	17.3	櫛描波状文	文右一左へ、前後口縁部と胴	やや粗め
		3)	7.8	縞状文	上部へ櫛描波状文、胴下部は	焼成 良好
7.	壺	4)	12.8	ヘラ磨き	ヘラ磨きが施されている	
		1)	13.3	ヘラ磨き	内 ハケ整形の上をヘラ磨き	暗褐色
		2)		櫛描波状文	ヘラ整形の上を頸部縞状文、	
		3)		縞状文	口縁部、胴上部、櫛描波状文	やや粗い
4)				焼成 良好		

番号	器形	法量	文様	技法	備考
8.	小形甕	1) 12.4 2) 12.6 3) 5.2 4) 10.8	ハケ目 ヘラ磨き 波状文	外 ヘラ整形の後、口縁部から胴上部まで乱れた櫛描波状文 内 左→右へハケ整形、その上をヘラ磨き	外 暗褐色 内 茶褐色 やや粗い 焼成 良好
9.	甕	1) 2) 3) 5.2 4) 10.5		外 ヘラ整形の後、胴部に櫛描波状文、6本単位 内 全面ハケ整形した後ヘラで磨いている ハケ単位8本	外 黒褐色 すず付着 内 赤褐色 やや粗い 焼成 良好
10.	小形甕	1) 2) 3) 4)	ハケ目 ヘラ磨き	外 ハケ整形したあとヘラ磨き整形 内 ヘラ磨き整形、器形、粗雑(歪)	茶褐色 やや密 焼成 良好
11.	小形甕	1) 10.4 2) 11.2 3) 5.5 4) 9.4	ハケ目 ヘラ磨き	内外面ともハケ整形の後ヘラ磨きがされている。ハケ目若干残っている	暗褐色 やや粗い 焼成 良好
12.	甕	1) 2) 3) 5.9 4)	ヘラ磨き ハケ目	外 ヘラにより縦方向に磨かれている 内 ハケによる整形後ヘラ磨きを行っている ハケ目は部分的に消えている	黒褐色 やや密 焼成 良好
13.	甕	1) 2) 3) 5.4 4)	ヘラ磨き ハケ目	外 4本単位くらいの短いハケ目整形 内 ヘラ整形の後、ハケ目が横方向に施されている	外 薄茶褐色 内 黄褐色 やや粗い 焼成 良好
14.	高環(口縁)	1) 16.4 2) 3) 4)	ヘラ磨き	内外面ともヘラ磨き 内面のみ赤色塗彩	外 黄褐色 内 赤色塗彩 やや密 焼成 良好
35住(105図)					
1.	壺	1) 2)	ヘラ削り ヘラ磨き	外 頸部にわずかに波状文、胴部ヘラ削りにヘラ磨き	灰褐色(焼むら有) やや粗い(砂粒多含)

番号	器形	法量	文様	技法	備考
2.	炉内壺	3)	柳描波状文	内 胴上部にへら削り、下部へら磨き	焼成 良好
		4) 22.0			
		1) 23.0	ハケ目	外 全面ハケ整形の後胴下部はへら削り。頸部は廉状文	赤褐色 やや粗い
		2) 29.0	へら削り	の下胴張出部まで柳描波状文	焼成 良好
3.	壺	3)	柳描波状文	5 本単位で三段右→左へ	
		4) 19.7	廉状文	底部 やや厚くへら整形	
		1) 20.0	へら磨き	内、外面ともへら磨き	黒褐色 粗い
		2)			焼成 良好
4.	壺	3)			
		4)			
		1) 15.0	へら磨き	外 縦方向、ハケ整形	暗褐色、一部黒褐色
		2)	ハケ目	頸部は下からハケ目	やや粗い(砂粒含)
5.	台付壺	3)	柳描波状文	内 横斜め方向へハケ整形の後へら磨き	焼成 良好
		4) 14.0		口縁部 折返しがり出ている	
		1)	ハケ目	外 口唇部にボタン状突起が7~8ヶ約1cmのものがついている。真中がへこんでいる	白褐色
		2)	へら磨き	外 ハケ整形の後ナデ、一部へら磨き	やや粗い(砂粒含)
6.	器台	3) 6.7		底部のくびれ部に指頭痕あり	焼成 良好
		4) 9.3		内 横へらナデ、輪積痕が残っている。脚部へらナデ痕あり	
		1)	へら磨き	全体的に薄く粗雑な作りである	
		2)	ハケ目	外 上部は横へら磨き	赤色塗彩
36住(108図)	壺	3)		内 横へら磨き	粗い
		4)		内 ハケ目の上をへら整形	焼成 良好
		1)	へら磨き	内、外、全面へら磨き、頸部	赤色塗彩
		2)	廉状文	7 本単位の廉状文。その上下	やや密(金雲母含)

番号	器形	法量	文様	技法	備考
2.	壺	3)	龍目櫛描文	に龍目状に櫛描文が施されている 外面全体及び内面頸部に赤色 塗彩されている 全体がへらで整形 頸部に簾状文10本単位で左廻 りで施文されている	焼成 良好
		4) 32.5			外 薄茶褐色
		1) 9.5	へら磨き		内 赤褐色
		2)	簾状文		内縁口縁部すす付着 やや粗い(砂粒含む)
3.	壺	3)		内、外面とも縦方向のへら磨 き	焼成 良好
		4) 8.0			茶褐色
		1) 9.4	へら磨き		やや粗い
		2)			焼成 良好
4.	壺	3)		外 ハケ整形の上を頸部、簾 状文7本単位で2段、右→左 その上下に櫛描波状文、外下 部にハケ目痕が残っている 内 ハケ整形の上へらで整形	黄褐色
		4) 17.6	へら磨き		やや粗い
		1) 17.4	簾状文		焼成 良好
		2)	櫛描波状文		
5.	壺	3)	ハケ目	外 ハケ目の上をへらで磨き 頸部8本単位の簾状文を右か ら左方向、口縁部と胴中部ま で櫛描波状文5～6本単位 内 へら磨きで上部が横方向、 下部、縦方向になっている	暗褐色
		4) 26.4	簾状文		やや粗い
		1) 24.0	ハケ目		焼成 良好
		2)	へら磨き		
6.	壺	3)	櫛描波状文	外 へら整形の上を頸部に簾 状文、その上下に櫛描波状文、 但し文様が乱雑である 内 へら磨き	暗褐色
		4) 19.8	簾状文		やや粗い(砂粒含む)
		1) 19.0	へら磨き		焼成 良好
		2)	櫛描波状文		
7.	壺	3)	櫛描波状文	外 へら整形の後頸部に簾状 文、5本単位で右→左方向に 施文。そのすぐ下に一段5本 単位の櫛描波状文が左→右方 向に施文 外面雑	黄褐色。内面一部黒 色となっている
		4) 23.2	簾状文		粗い(石の粒子含む)
		1) 23.6	へら磨き		焼成 良好
		2)	簾状文		
8.	壺	1)	ハケ目	外 ハケ目の上をへら磨き、	褐色

番号	器形	法量	文様	技法	備考
9.	壺	2)	ヘラ磨き	頸部に簾状文、すぐ下に梯描	やや粗い(砂粒含む)
		3)	簾状文	波状文が一段施文	焼成 良好
		4) 26.0	梯描波状文	内 ハケ整形の上をヘラ磨き	
		1) 16.6	ハケ目	内、外面ともハケ目が施されている	部分的、赤褐色と灰茶褐色、一部すす付着
10. (109図)	壺	2)	ヘラ磨き	部分的にハケ目の上からヘラで磨いている	やや粗い(砂粒含む)
		3)		ハケで単位9本	焼成 良好
		4) 16.4		外 縦方向、ヘラ磨き	灰褐色
		1)	ヘラ磨き	内 ヘラ磨き、4~5単位の櫛目が所々に残存する	やや粗い 焼成 良好
11.	壺	4)			
		1) 22.0	ハケ目	内、外面ともに細かいハケ目	茶褐色、焼むらあり
		2)			やや粗い(砂粒含む)
		3)			焼成 良好
12.	高坏(脚部)	4)			
		1)	ハケ目	外 ハケ整形の上をヘラ磨き	茶褐色
		2)	ヘラ磨き	内 ヘラで横ナデ	やや粗い(砂粒含む)
		3) 10.0			焼成 良好
13.	壺(口縁部)	4)			
		1) 11.0	ハケ目	内、外ともハケ整形の上をヘラ磨き	外 茶褐色、一部焼むら
		2)	ヘラ磨き	内 ほとんどハケ目みえず	内 暗褐色
		3)			やや粗い 焼成 良好
14.	手づくね	4)			
		1) 7.9	ハケ整形	外 ハケ整形の上を指頭でな	暗褐色
		2) 6.4	ヘラ磨き	であげ	粗い(砂粒含む)
		3) 4.8	指頭痕	内 ハケ整形の上をヘラ磨き	焼成 良好
15.	高坏(坏部)	4)			
		1) 21.8	ヘラ磨き	内外面ともヘラ磨きしたあと	赤色塗彩
		2)		を赤色塗彩	やや密
		3)		横方向	焼成 良好
16.	高坏(坏部)	4)			
		1) 26.0	ヘラ磨き	内、外ともにヘラ整形のあと	赤色塗彩
		2)		赤色塗彩	密

番号	器形	法量	文様	技法	備考
17.	高環(坏部)	3)	へら磨き	内、外ともにへら磨きのあと 赤色塗彩	焼成 良好
		4)			赤色塗彩
		1) 18.0			赤色塗彩
		2)			焼成 良好
18.	高環(脚)	3)	へら磨き	外 縦方向のへら磨き 内 横方向のへら磨き	焼成 良好
		4)			黄褐色
		1) 11.4			やや粗い(砂粒含)
		2)			焼成 良好
38住(113図)	壺	3)	ハケ目 へら磨き	外 ハケ目の上をへら磨き、 巾広のハケ目 内 へら磨き	茶褐色
		4) 39.4			粗い(砂粒多含)
		1)			焼成 良好
		2)			
2.	壺	1) 20.4	櫛描波状文	外 ハケ整形のあとへら磨き	外 暗褐色
		2) 24.0	簾状文	頸部、簾状文、右→左へ7本	内 茶褐色
		3) 8.4	ハケ目	単位。口縁部と胴上部櫛描波	やや粗い
		4) 18.8	へら磨き	状文5本単位、かなり乱線である 内 ハケ目の上をへら磨き、 横方向である	焼成 良好
3.	壺	1) 13.8	ハケ目	外 ハケ整形のあとへら磨き	茶褐色
		2)	T字口縁部、刻み	ハケ目かなり残存	やや粗い
		3)	目	T字口縁でハケによる刻み目	焼成 良好
		4) 21.8	へら磨き	が一円にある 内面 ハケ整形のあとへら磨き。 剝離が激しく単位不明	
4. 炉内	高環(坏部)	1) 28.0	へら磨き	外は縦方向へら磨き	赤色塗彩
		2)		内は横方向へら磨き	密
		3)		その上に内外面とも赤色塗彩	焼成 良好
		4)		されている	
5. 炉下	高環 (坏部口縁)	1) 33.6	へら磨き	内外面ともにへら磨き、その	赤色塗彩
		2)		上を赤色塗彩されている	密

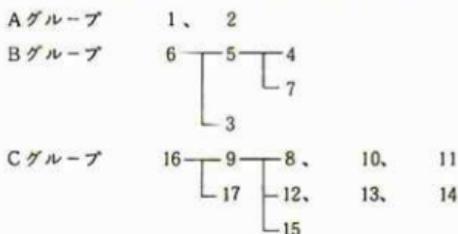
番 号	器 形	法 量	文 様	技 法	備 考
		3) 4)			焼成 良好

第2節 周溝墓

この遺跡を特徴づける遺構として方形・円形周溝墓群がある。県下で弥生時代後期の周溝墓群がこれだけまとまって検出された例は無く、甲府盆地低部の集落と墓域の関係を知る上で重要な遺跡と考えられている。

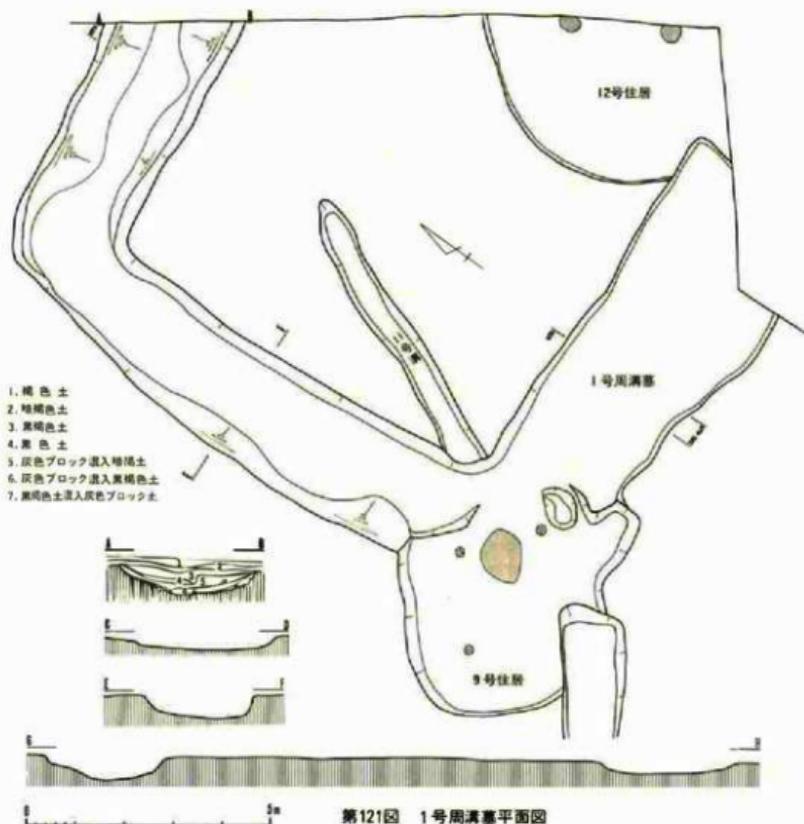
前述したように周溝墓の大部分は、弥生時代集落の南集落と北集落の中間に位置し、2つの集落の間に楔を打ち込んだような状態を呈している。即ち、墓域をはさんで集落が対立することになろう。南集落中には、1号と2号方形周溝墓が住居と切りあいながら存在する。しかも、1号も2号周溝墓も他の周溝墓と重複したり近接することなく、極て独立性が高い。このことは、最初に方形周溝墓が造られ始めたが、集落全体の人口増に伴って、墓域と決めた部分を縮少し、居住地へと振り向けた可能性がある。南北の集落は東西に走行するV字溝で区切られているが、このV字溝が掘られる前に、方形周溝墓群のうちいくつかはすでに築造されていた可能性のあることが想定できる。それは、6号周溝墓とV字溝は切り合うものの、3号周溝、7号周溝墓を避けて造られているようである。

中央の周溝墓群の在り方は、6号周溝墓、16号周溝墓という幅広い溝をもつ大型周溝墓を核として、その周囲に、6号周溝墓には3号と5号周溝墓という中クラスの周溝墓があり、16号周溝墓には9号・17号周溝墓が近接しており、更にその周辺に7m前後の周溝墓が集合している様子がうかがえる。これを図示すると、次のようになる。



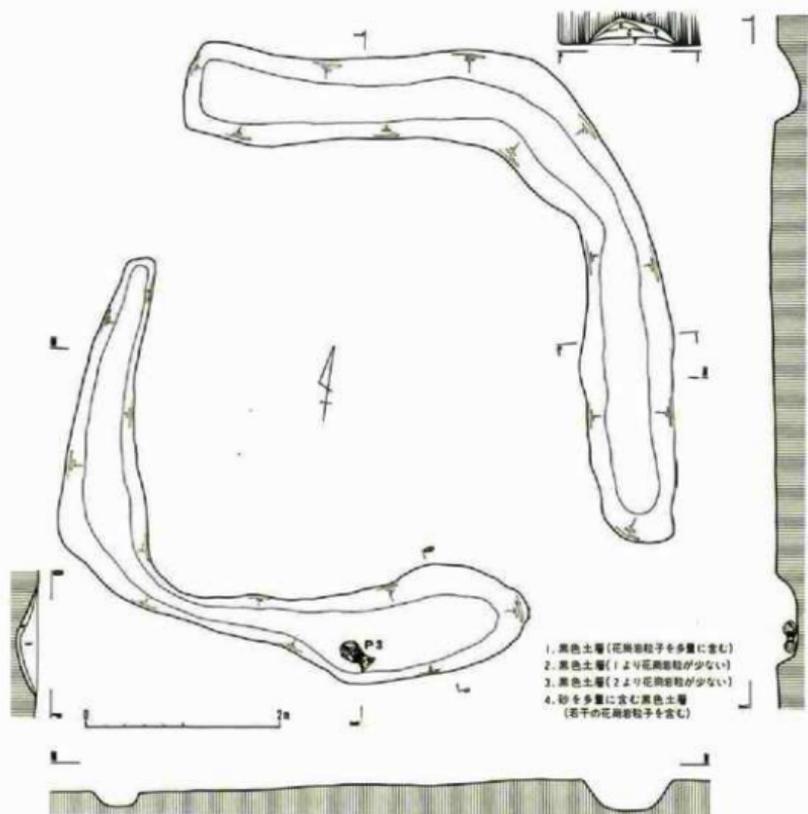
特にCグループの10、13、14は円形周溝墓又はそれに類似した形であって、グループ内の特別な位置を示すものであろう。

周溝墓の主体部はほとんどが検出されていない。しかし、9号方形周溝墓は、台状部の掘り下げを行っている途中、黒褐色土中に50cm×1mの土塊状のものが検出されている。8号周溝、15号周溝も主体部と思われるものが存在するが遺物の出土はない。



1号周溝墓 第121・124図

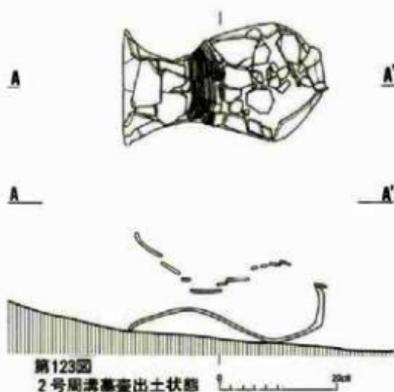
本遺跡最南部に位置し、規模が判明している方形周溝墓では最大のものである。周辺に周溝墓は存在せず、独立していると思われる。9号住居、12号住居と重複しているが、12号住居を切り、9号住居に切られる関係である。西辺の方位はほぼ北を向く（N—W）で、各溝の規模は、西辺長13.8m、最大巾2.4m、深さ45cm、南辺長推定10m、最大巾3.2m、深さ20cm、北辺現存長7m、巾2.6m、深さ50cmである。土橋は南東隅に1ヶ所と思われる。主体部は検出されなかった。なお、出土遺物は溝覆土中より高坏等が出土している。本周溝は南辺が最も幅広く、北辺は狭く、溝の立ち上りも、台状部側が直立にちかく、外側は緩く傾斜している。溝の覆土もレンズ状の堆積によって、自然に埋め立てられている。



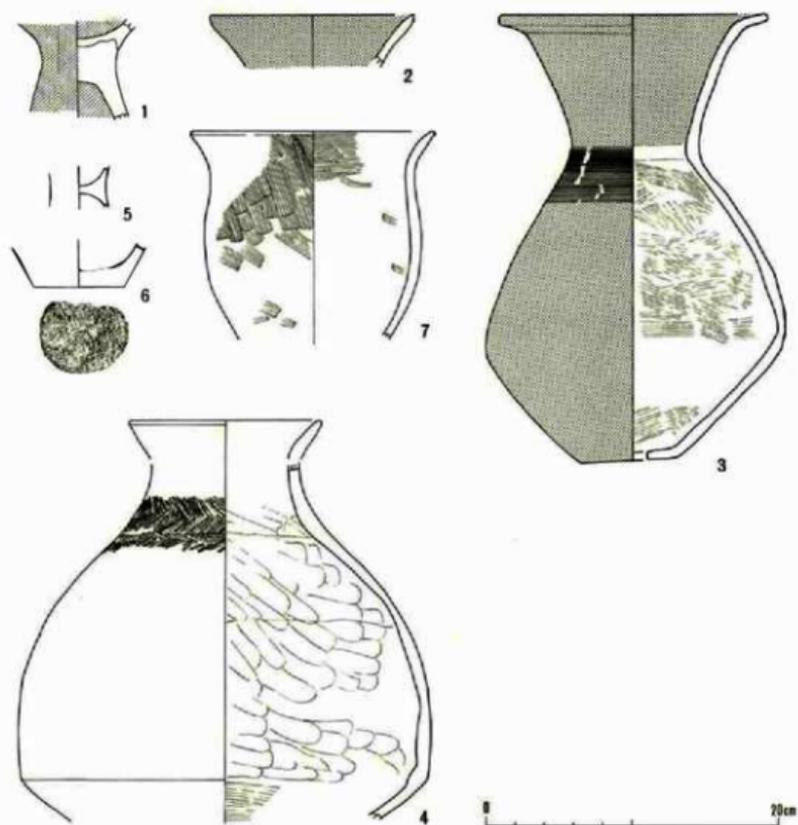
第122図 2号周溝墓平面図

2号周溝墓 第122・124図

南集落が弧状に並ぶ中心に位置し、L形溝が2つ組み合った方形周溝墓である。他の遺構と重複せず独立している。規模は東西6.2m、南北6.5mで、溝の幅及び深さは東で95cm、35cm、西90cm、15cm、南1.35m、北1.30mである。土橋は東南と北西に1ヶ所づつあり、主体部は検出されなかったが、南側溝の最大幅部分より壺形土器1点が出土している。本周溝墓に伴うものである。



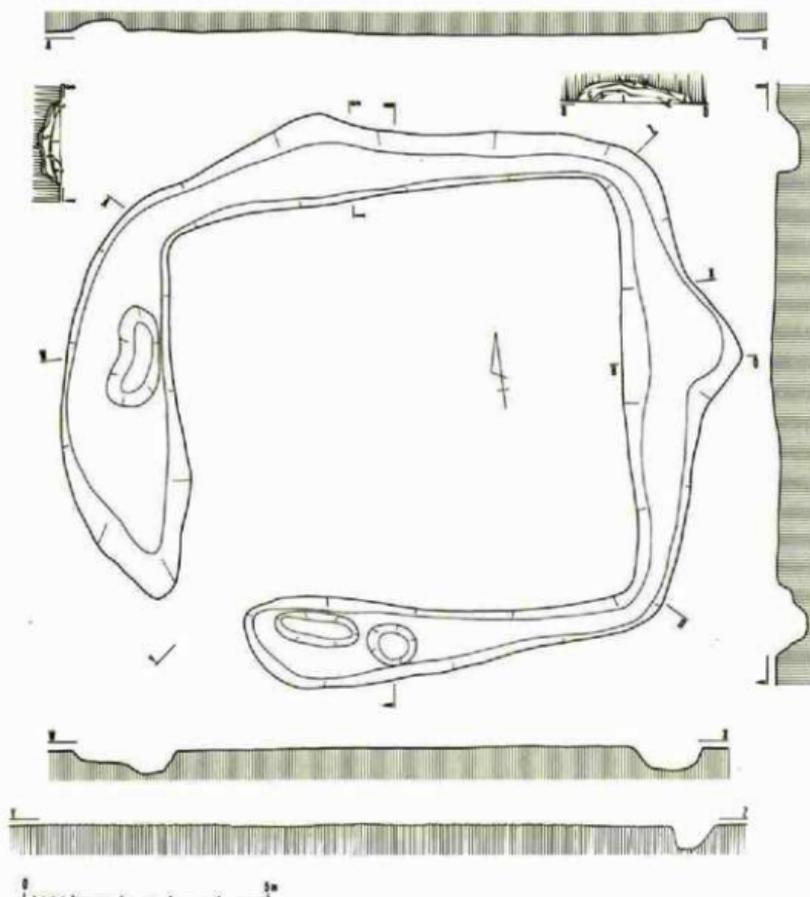
第123図 2号周溝墓壺出土状態



第124図 1、2、3号周溝墓出土土器

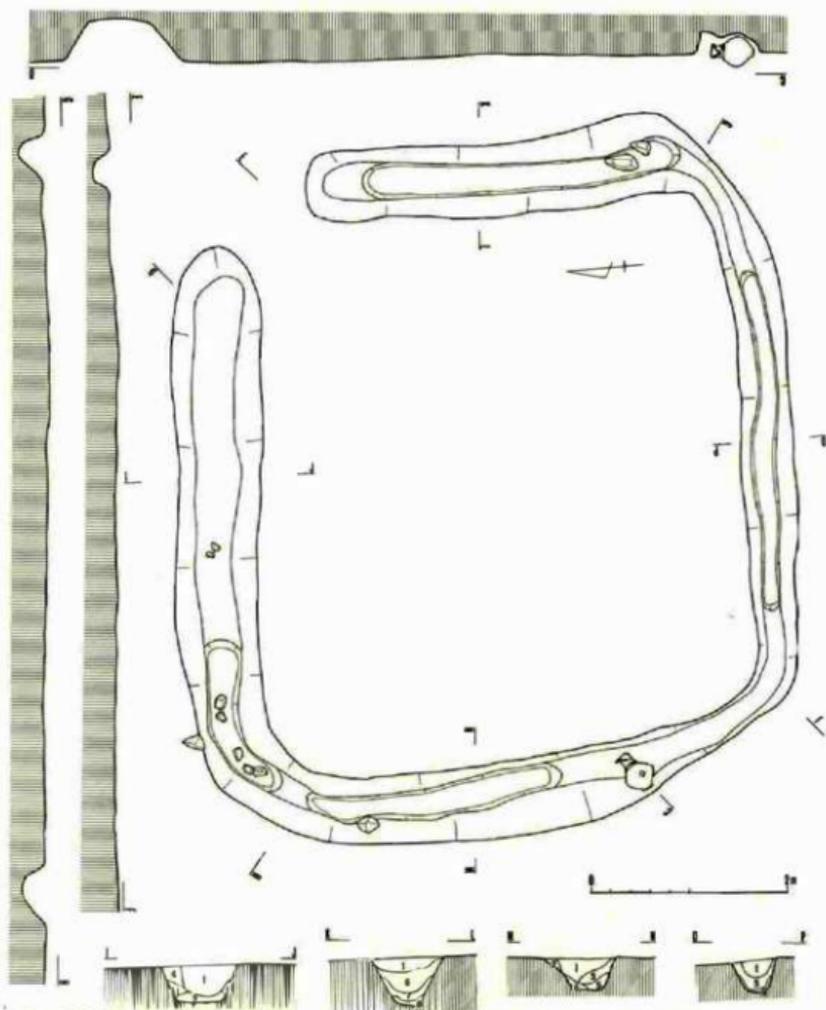
3号周溝墓 第124・125図

遺跡のはば中央に位置し、周溝墓群最南にある。南側はV字溝である12溝が走り、12溝の支溝が3号周溝墓南東コーナーに接して止まる。台状部の方位は $N-5^{\circ}-E$ で、規模は東西13.8m、南北11.8mである。各辺の溝の長さは東10m、西8.4m、南8.6m、北10.6mで、各溝の最大幅及び深さは、東2.5m、50cm、西2.6m、50cm、南1.9m、64cm、北1.9m、45cmで、西辺中央には巾80cm、長さ2mの土壌があり、南辺にも巾70cm、長さ1.8mと直径1mの土壌がある。どちらも遺構に伴うものであろう。土橋は南西隅に造られている。主体部は検出されておらず、台状部は9m×8.7mのはば正方形を呈し、溝の立ち上りも内側が垂直にちかい掘り方となっている。出土遺物は、西側溝中央部より壺形土器の大破片が出土している。



1. 暗褐色粘質土（粘性が非常に強い、白色小砂粒を多量に含む）
2. 暗褐色土混入黄褐色土（白色小砂粒は1層よりかなり少ない、3層より若干暗い）
3. 黄褐色土層（固くしまって粘性は1程ではないが強い）
4. 黄褐色土混入黒褐色土層（5層より若干明るいが粘性などほとんど変わらない）
5. 黒褐色土層（灰褐色土をブロック状に含む、粘性は非常に強い）
6. 黒褐色土混入灰褐色土層（灰褐色土を多量に含む晩山形層）
7. 黒褐色土混入灰褐色土層（6層と比較すると黒褐色土の量は非常に少ない、一見盛りすぎのようにも思われる）

第125図 3号周溝墓平面図



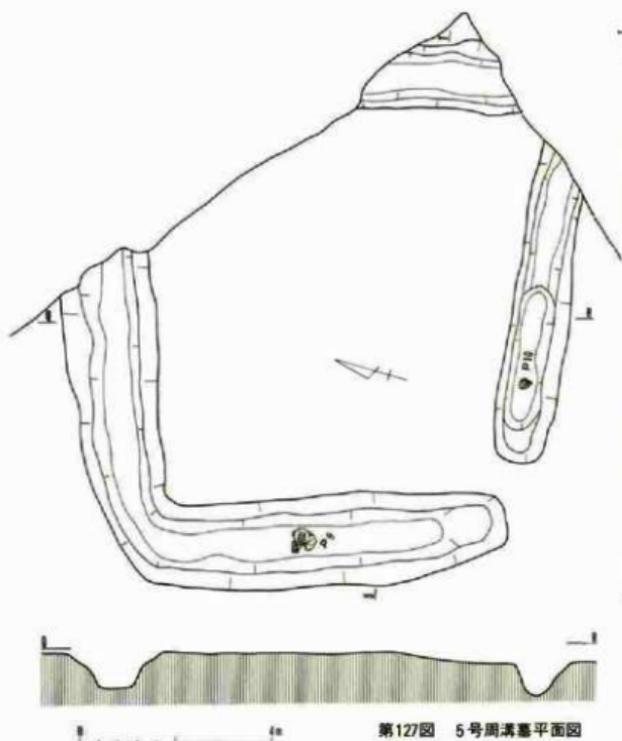
1. 黒褐色土 (細砂粒多量混入跡のある土層、湿らつく粘性ややあり)
2. 黒褐色土層 (柔らかく、褐色土多く混入)
3. 黒色土層 (黒色土ベースに酸化した褐色土ブロック形状に混入、白色砂粒多量混入)
4. 緑褐色土層 (褐色土多量混入、しりりあり)
5. 黒色土層 (黒褐色で白色砂ブロック多量混入、粘性つよし)
6. 黒褐色土層 (緑褐色黒褐色土ベースに褐色土砂ブロック、酸化土ブロック多し)
7. 暗褐色土層 (黒褐色土ベースに白色砂ブロック多量混入)
8. 黒色土層 (黒味つよく粘性あり、酸化土ブロック多し)→遺体層
9. 暗褐色土層 (黒褐色土ベースに、白色砂ブロック多量混入、粘性つよし)
10. 褐色土層 (緑褐色でしりりのある土層、この部分の壁は全てこの土層で古い遺体の埋土であろう)
11. 褐色土層 (砂質土層で黒褐色土混入、しりり、粘性つよし)

第126図 4号周溝墓平面図

4号周溝墓

第126・129図

中央の周溝墓群南端に位置した方形周溝墓で7号周溝墓と一部接している。縄文時代の27号住居や数多くの土壌群と重複して造られているが、周溝を埋めている土が黒褐色土であるため、検出は容易であった。台状部の方位は $N-4^{\circ}-W$ で、ほぼ北を向いている。東辺の溝は、長さ4.2m、巾80cmで、更にその内部に巾30cm、長さ3.25mの



第127図 5号周溝墓平面図

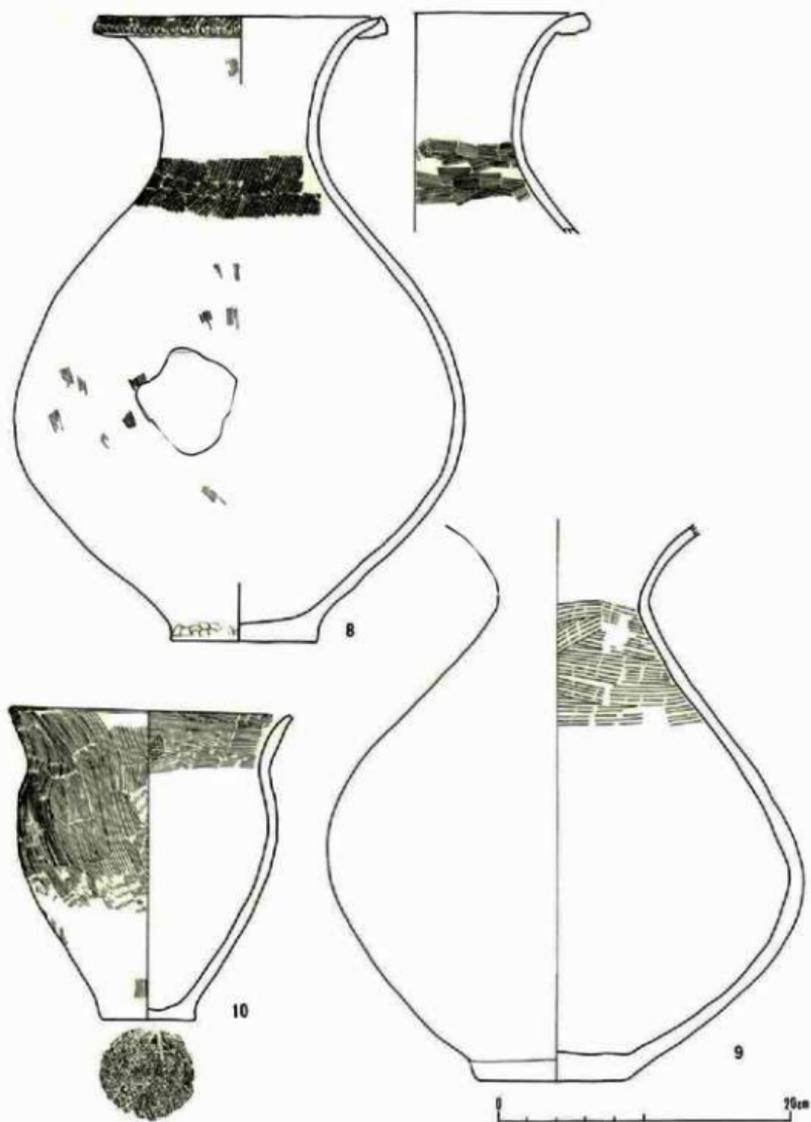
溝がある。西辺溝は長さ5.5m、巾80cmで、溝中央部に巾35cm、長さ2.65mの浅い溝がある。南辺の溝は、長さ約6m、巾50cmで、溝中央に巾25cm、長さ3.5mの細長い溝をもつ。北辺溝は、長さ5.8m、巾85cmで、北西隅には巾35cm、長さ1.7mの細い溝がある。この周溝墓には、主体部が確認されていないが、西辺溝中より胴部を穿孔した壺が出土している。

5号周溝墓 第127～129図

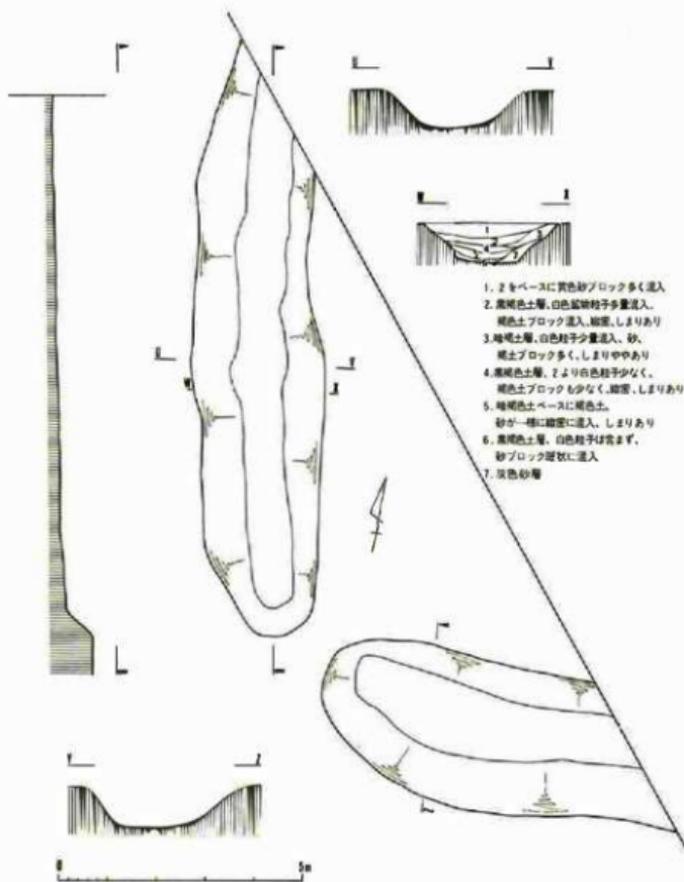
周溝墓群南西部に位置し、17号溝、15号土壌、32、33号土壌と重複する。西辺溝の方位は $N-30^{\circ}-W$ を示す。東西10.7m、南北10.4mの規模で、各辺の現存する長さは、東溝7m、西溝7m、南溝8m、北3.6mである。北東、南東コーナーが攪乱を受けているので正確な辺長は不明である。方台部の規模は、南北8m、東西7.4mで、台上に主



第128図 5号周溝墓壺出土状態



第129图 4、5号周满墓出土土器



第130図 6号周溝墓平面図

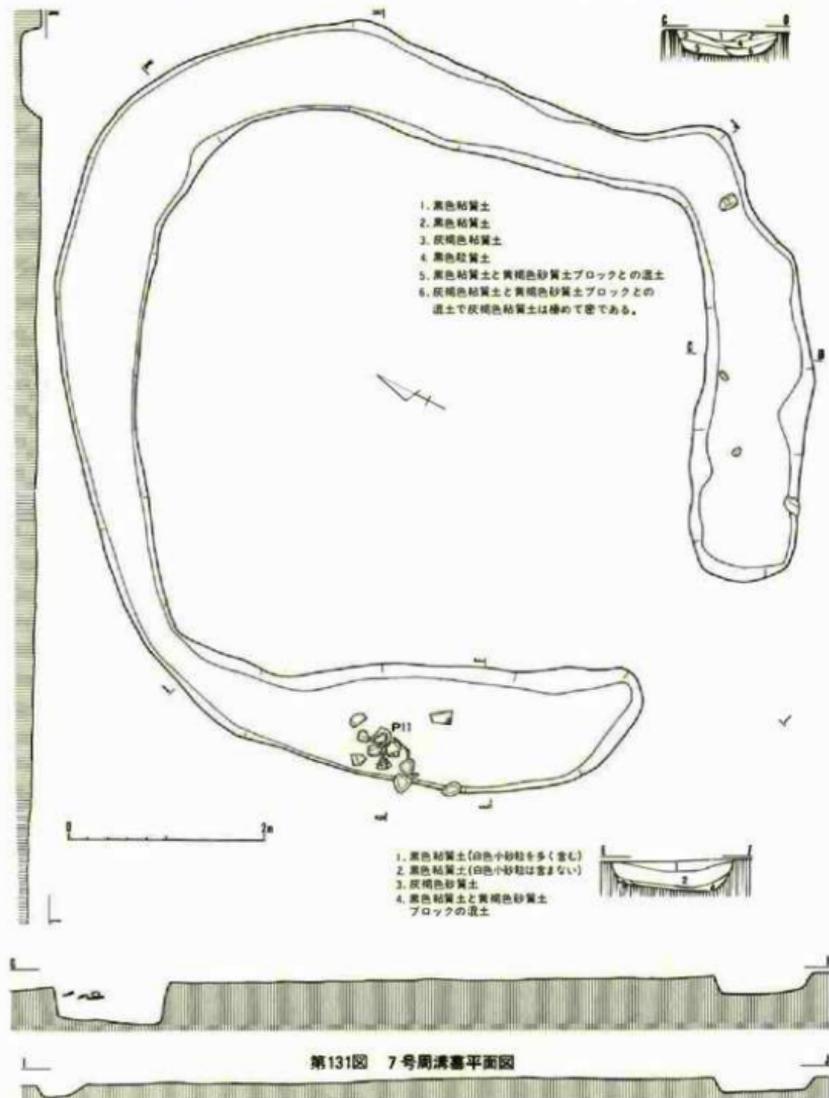
体部は確認されていない。各辺の溝の幅及び深さは、東で1.2 m、深さ70cm、西で1.95 m、深さ66cm、南で1.25 m、深さ73cm、北1.95 m、深さ73cmである。土橋は南西隅に1ヶ所である。出土遺物は西溝中より壺1個、南溝中より甕1個が、底面に接して出土した。なお、溝中の舟底状ビットは、南溝土橋近くにおいて、長さ3.6 m、巾70cm、深さ20cmで、甕はこの底より出土した。

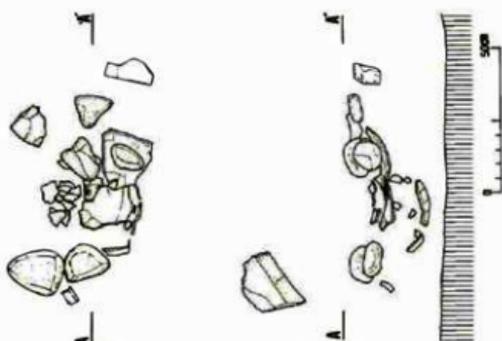
6号周溝墓 第130図

周溝墓群の東部に位置し、大部分が調査区域外にある。12号溝（V字溝）と重複し、断面から12号溝が古く、6号周溝墓が新しい。6号周溝墓は検出された溝から方形を呈すると考えられ、残存する西辺溝の方位はN-9°-W、土橋は南西に1箇所である。西溝の現存長さ及び幅、深さは12 m、2.8 m、79 cm、南溝は6.2 m、3.05 m、89 cmである。

7号周溝墓 第131・132・136図

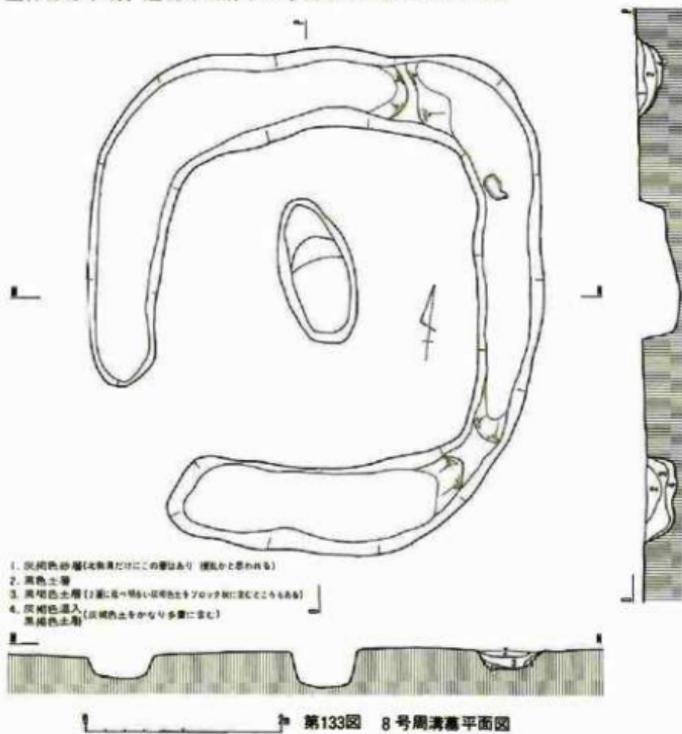
12溝V字溝の東に位置し、4号周溝墓に接して造られ、13溝に切られる。方形周溝墓であるが、形は台状部がほぼ方形を呈するものの、溝の幅に変化があって凹凸が激しい。規模は、東西8m、南北7.7mで、台状部は、東西5.5m、南北5.7mである。西辺溝の方位はN-23-

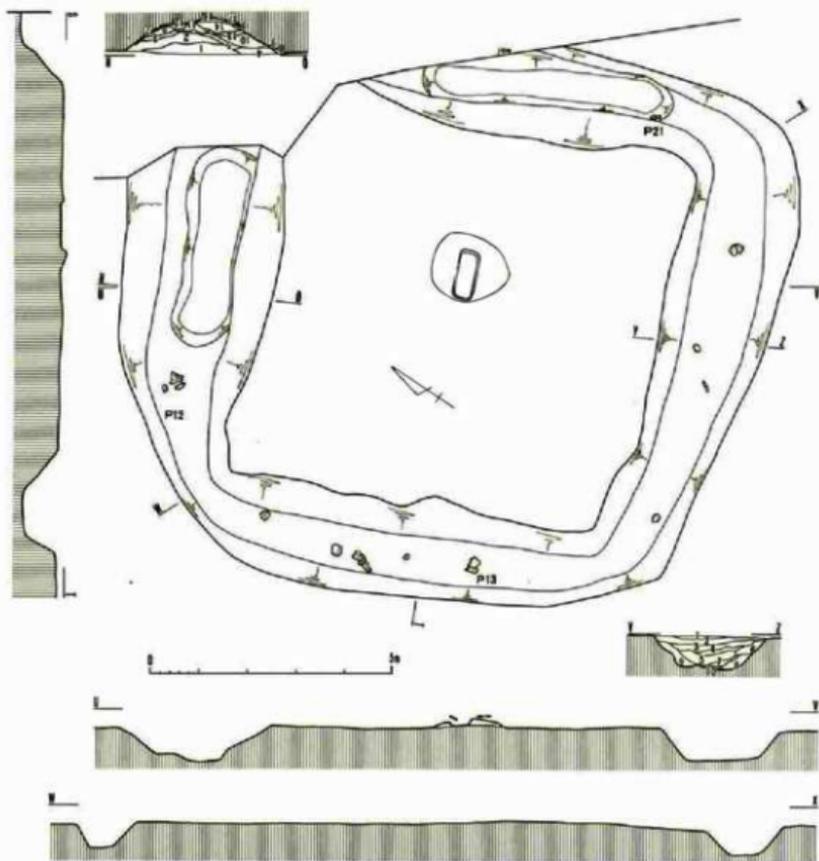




第132図 7号周溝墓土器出土状態

Wを示している。各辺の長さは東6.5m、巾95cm、深さ20cm、西5m、巾1.3m、深さ34cm、南4.7m、巾1.15m、深さ30cm、北6m、巾90cm、深さ25cmである。橋は南西隅に1箇所、主体部は不明、遺物は西溝中より燹破片が出土している。





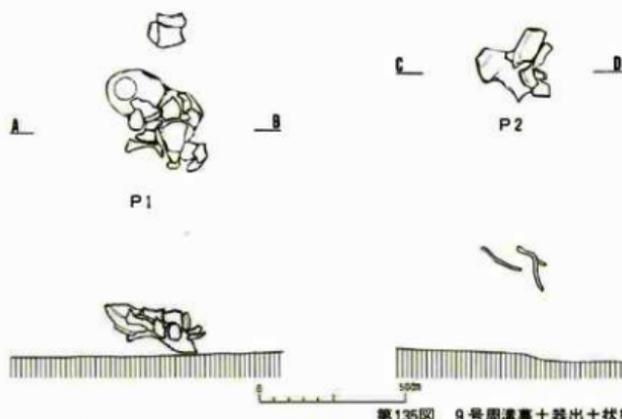
Q-R土層

- | | | |
|----------|----------|----------|
| 1. 黒色土層 | 7. 黒褐色土 | 13. 褐色土 |
| 2. 黒褐色土層 | 8. 黒褐色土 | 14. 灰色砂層 |
| 3. 褐色土 | 9. 灰色砂層 | 15. 白色砂層 |
| 4. 白色砂層 | 10. 黒色土層 | 16. 黒色土層 |
| 5. 褐色土 | 11. 黒褐色土 | 17. 白色砂層 |
| 6. 黒褐色土 | 12. 白色砂層 | |

Y-Z土層

- | |
|--------------------|
| 1. 黒褐色土層 |
| 2. 黒色土層 |
| 3. 褐色土 |
| 4. 黒褐色土層 |
| 5. 黒褐色土層 |
| 6. 褐色土 |
| 7. 黒色土層 |
| 8. 灰色砂層 |
| 9. 褐色土 |
| 10. 黒褐色土+砂のまじりあう土層 |

第134図 9号周溝墓平面図



第135図 9号周溝墓土器出土状態

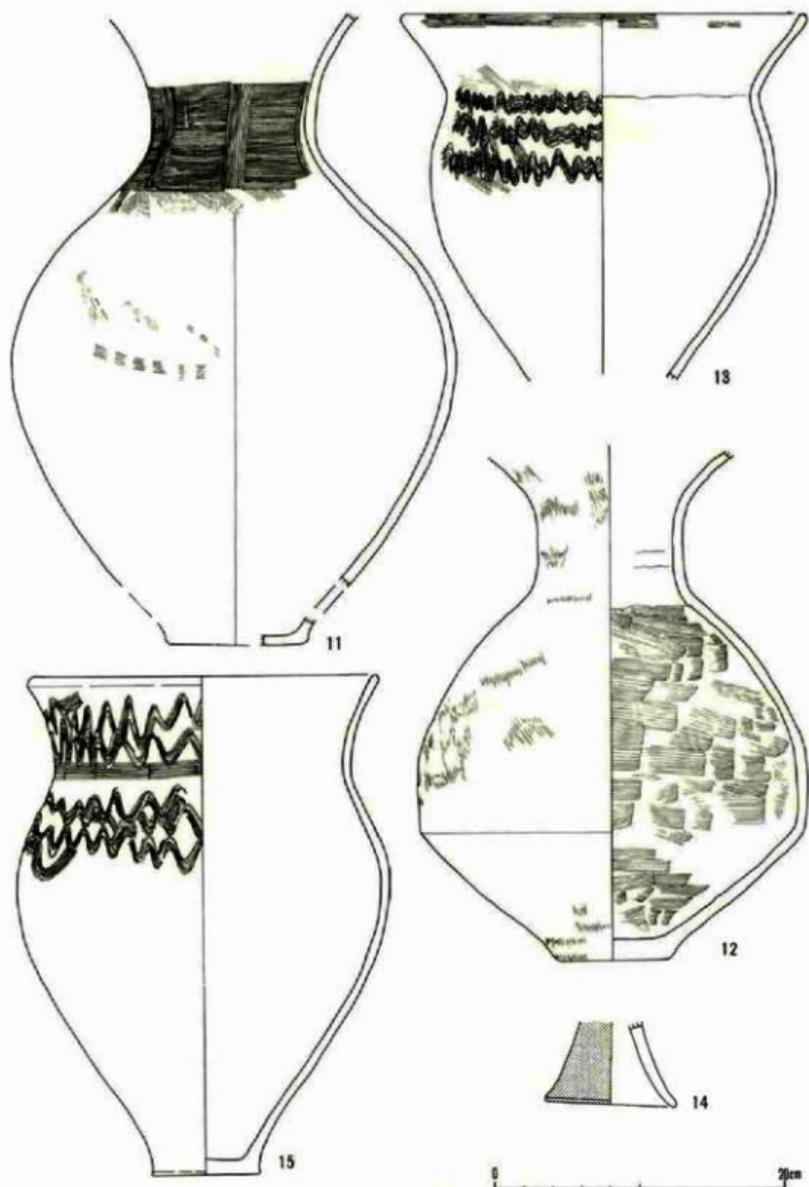
8号周溝墓 第133図

周溝墓群北東側に位置し、10号周溝墓と接している。方形周溝墓で、方位はN-5°-Wを示し、東西4.7m、南北5.2mの規模である。方台部は、東西3.3m、南北3.5mのほぼ正方形を呈し、土橋は南西隅に1箇所ある。各辺の溝の長さ、幅、深さは次の通りである。東4.5m、70cm、20cm、西3.3m、80cm、25cm、南3.1m、90cm、25cmで、東南隅及び北東部に溝が浅い部分がある。出土遺物で一括品はない。主体部は長さ1.5m、巾75cm、深さ35cmで、内部から遺物は出土しなかった。

9号周溝墓 第134～137図

周溝墓群北東部に位置し、北東隅が地区外のため未調査となっている。本周溝墓は、東西13.4m、南北11.8mの規模をもつ方形周溝墓で、方台部は、南北8m、東西8mのほぼ正方形を呈する。各辺の現存する長さは及び幅、深さは東で10.6m、2.4m、70cm、西で8m、3.2m、78cm、南10.2m、1.9m、60cm、北で9.6m、2m、80cmである。西辺溝の方位がN-28°-Wで、方台部中央より発見された主体部は、主軸と直交する方向に長軸を持つ。主体部は東西1m、南北50cmの長方形で、深さ30cm程である。内部より出土遺物は無い。土橋は未調査地区に存在すると思われ、北東隅に位置するであろう。溝中に舟底形ビットが2箇所に見られ、北溝中のビットは長さ4.2m、巾1.1m、深さ10cm、東溝中のビットは長さ5.2m、巾1m、深さ20cmで東溝からは第137図21が出土している。なお溝中からは壺2個、甕1個体の一括土器が出土している。

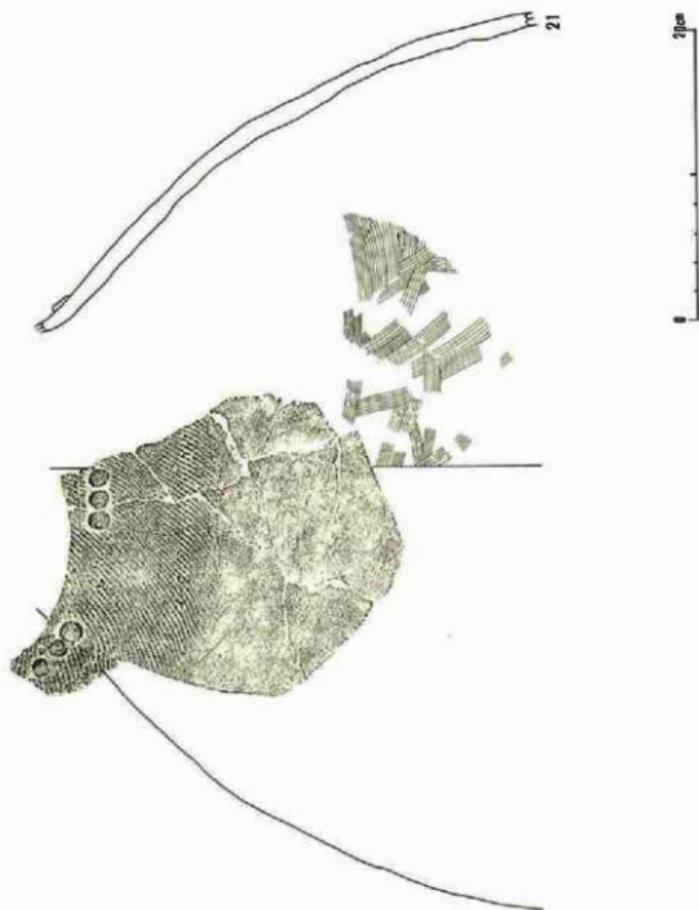
本周溝墓は、発掘作業中に確認するのに手間取った。それは、土層に黒色土層が厚く堆積しており、周溝部のプランがなかなか把握できなかった。ところが、掘り下げがすすむと黒色土中に黄灰色の島状に変色する区域が現われ、更に広がっていった。最上部の黄灰色砂質土を取り除くと、黒色土中に長方形の黄灰色砂質土が残る部分があり、同時に周溝外縁部も検出された。従って、方形周溝墓であると断定し、中央の長方形黄灰色部を主体部と考えることにした。



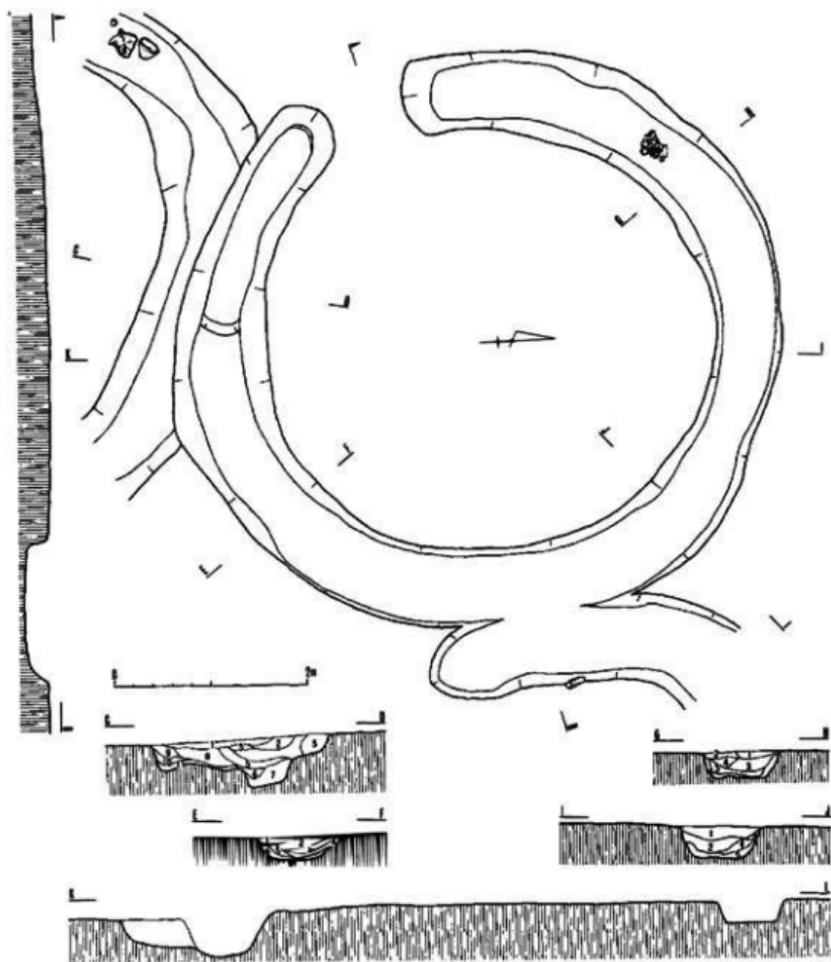
第136图 7、9、11号周潭墓出土土器

周溝内の土層も、黄灰色、黒色土、褐色土などが互層となり、断面観察でも、台状部から流れ出た土砂が溝を埋めたことが分る。

本周溝墓はマウンドを持ち、マウンドを一定程度盛り上げた後に主体部の土壌を掘って遺体を埋葬し、更に盛土したものであろう。主体部の無い周溝墓も、こうした構築方法によつたものと推定され、後世に盛土が削平されてしまったものであろう。



第137図 9号周溝墓出土土器



E-F 土層説明

1. 黒色土層
2. 黒褐色土層
3. 堆灰褐色土層
4. 黄褐色土 (地山)
5. 堆黒褐色土層
6. 黒褐色土層

C-D 土層説明

1. 黒色土層
2. 砂質黒褐色土層
3. 灰褐色土層
4. 堆灰褐色土層
5. 黒褐色土層
6. 堆黒褐色土層
7. 黒褐色土層
8. 黒褐色土層
9. 黄褐色土層
10. 黒褐色土層
11. 黒褐色土層

I-J 土層説明

1. 黒色土層
2. 堆黒褐色土層
3. 堆黒褐色土層
4. 黒褐色土層
5. 黒褐色土層

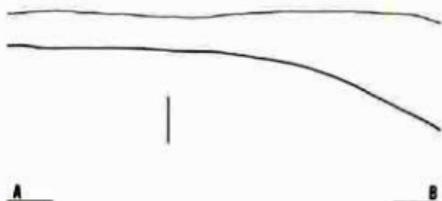
G-H 土層説明

1. 黒色土層
2. 1層より褐色がかった色調を呈す
3. 黒褐色土層
4. 3層より濃い色調を呈す
5. 黒褐色土層
6. 黒褐色土層

第138図 10号周溝墓平面図



第139図 10号周溝墓土器出土状態



第140図 11号周溝墓土器出土状態

10号周溝墓 第138・139図

9号方形周溝墓の南に位置する円形周溝墓で、美しい円を抜き、土橋は南西方向に設けられる。東西径6.1m、南北径6.3m、台状部の東西径4.35m、南北径4.65mで、土橋の幅は80cmである。溝の幅と深さは、東で80cm、27cm、西80cm、35cm、南1m、1m、北70cm、22cmで、土橋南の溝に舟底形ピットがある。ピットの長さは2.2m、巾35cm、深さ15cmである。主体部は不明。11号周溝墓と8号周溝墓の溝が本遺構の溝と重複する。出土遺物は、溝内北西部より甕が出土しているが、覆土中である。

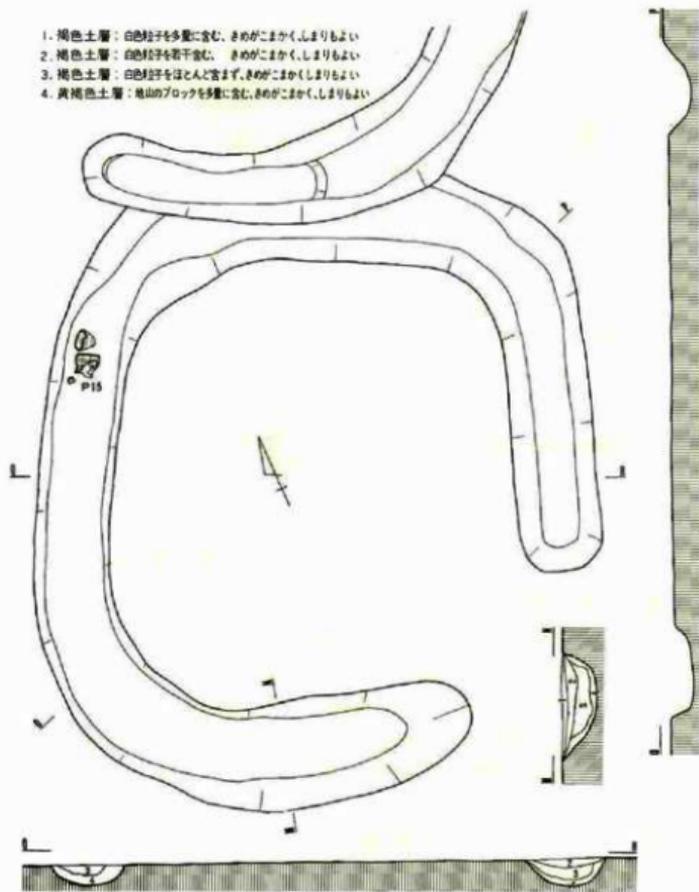
11号周溝墓 第136・140・141図

周溝墓群中央部に位置し、10号周溝墓と重複している。方形を呈し、東西5.8m、南北6.9mの規模をもち、台状部は東西4.2m、南北4.65mの隅丸方形で、西辺溝の方位は、N-17°-Eを示す。各辺の長さ、幅、深さは次のとおりである。東3.8m、90cm、30m、西5.6m、75cm、22cm、南4.1m、1.14m、20cm、北5.1m、1m、25cm。溝の断面は舟底状で、台状部側の方が直立に近い角度で立ち上っている。覆土は褐色土で、溝北西部から甕が1個出土している。土橋は南東隅に1箇所あり、幅は1.5mである。主体部は検出できず、盛土状態も不明であった。

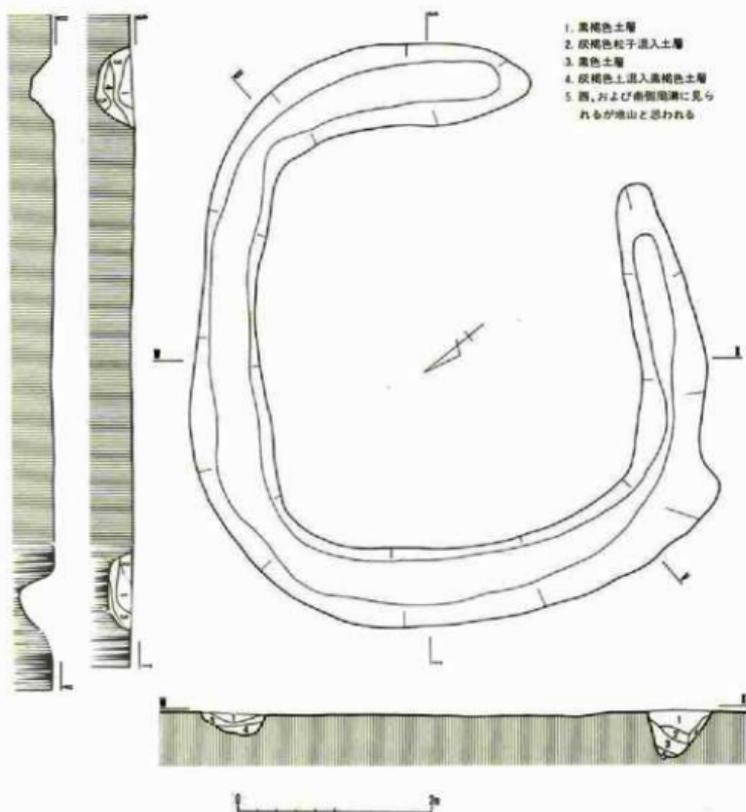
12号周溝墓 第142図

周溝墓群北側に位置し、13号周溝墓及び14号周溝墓と1つのグループを形成している。若干長方形の周溝墓で、東西6m、南北5.2mで、台状部は東西4.4m、南北3.8mの規模である。溝の太さはほぼ一定しているが、西南の隅で外側に若干広がっている。各辺の溝・長さ、巾、

1. 褐色土層：白色粒子を多数に含む、まめがこまかく、しまりもよい
2. 褐色土層：白色粒子を若干含む、まめがこまかく、しまりもよい
3. 褐色土層：白色粒子をほとんど含まず、まめがこまかく、しまりもよい
4. 黄褐色土層：地山のブロックを多数に含む、まめがこまかく、しまりもよい



第141図 11号周溝墓平面図



第142図 12号周溝墓平面図

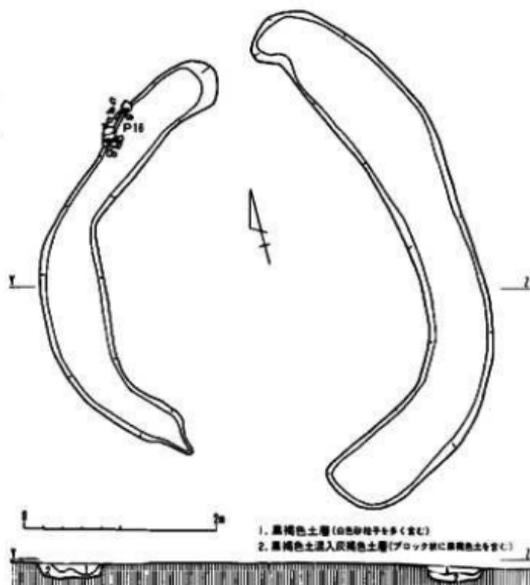
深さは次のとおりである。東溝は3 m、8.5 m、深さ35cm、西溝は4.5 m、80cm、35cm、南溝は3.7 m、70cm、50cm、北溝は5.2 m、巾75cm、20cmである。西辺溝の方位はN-33°-Eを示している。土橋は南隅にあって、幅は1.4 mである。主体部は無く、台状部の盛土も確認されていない。各溝はレンズ状に土が堆積しており、長時間かかって埋没したことがうかがわれる。出土品は少なく、覆土中から土器片などが出土している。

13号周溝墓 第143・148図

周溝墓のはぼ中央に位置し、12号周溝墓、14号周溝墓と近接し、同一グループを形成する。L字形の溝を向い合せに組み合わせた方形周溝墓で、土橋が2箇所存在する。周溝は相当に歪ん

であり、一見すると円形周溝墓のような様相もあるが、各溝はL字形を意識して造られており、方形周溝墓としてよいであろう。土橋は南と北の隅に1箇所ずつあり、北は45cm、南は1.4mの幅がある。東の溝の長さは全長で約6.3m、西溝は49mで、各々の幅、深さは、東で65~85cm、15cm、西で40cm~70cm、15cmである。台状部には主体部が無く、溝中にも舟底型ピットはない。西溝の北側に壘一括が出土している。土橋と土橋を結ぶ線の方位はN-6°-Wである。

壘は底部を欠き、土器の歪みが激しいもので口縁は波うっている。内外面共にナデ整形され、文様は付けられていない。

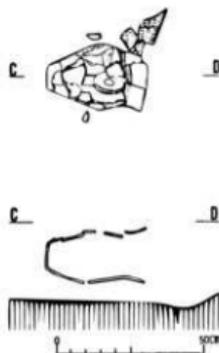


第143図 13号周溝墓平面図

14号周溝墓 第144・145・148図

周溝墓群中北側に位置し、12号周溝墓、13号周溝墓と同一グループに属する。プランは不整形で、溝は巾約70cmで、深さ10~20cmであるが、東側には2箇所の溝内土壌があり、1箇所には壘が横位に置かれた状態で出土している。この部分の溝は幅が広く、土器出土部分で巾1.3m、もう一箇所の舟底形ピット部分で巾1m、深さ30cmである。台状部は卵形をしており、主体部は検出されていないが、不整形土壌が台状部に2基ある。おそらく本遺構とは別の時期であろう。

土橋は南東部に1ヶ所あり、巾1.2mの間隔がある。溝中より出土した壘は、ほぼ完形に復元できたもので、頸部には簾状文、胴部には刷毛目が籠目状に施されたものである。又この壘は、溝底面より若干浮いている。

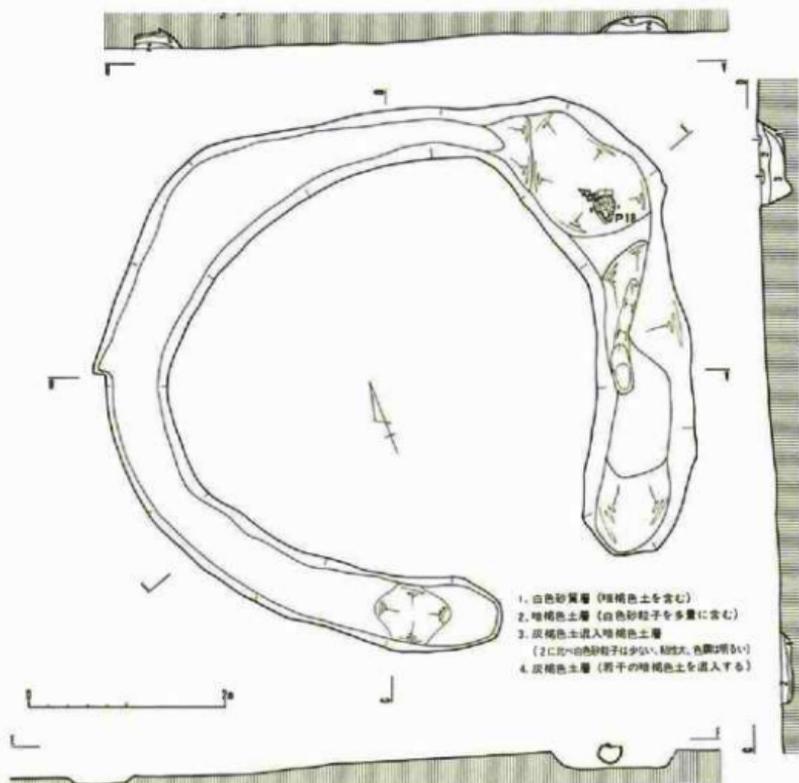


第144図 14号周溝墓土器出土状態

15号周溝墓 第146図

周溝墓群中最も西の低い箇所であり、他の周溝墓と離れている。又、最も小型のものとして注目してよいであろう。

西辺溝の方向を主軸とすればN-39°-Wの方位を示す方形周溝墓で、規模は東西3.7m、南



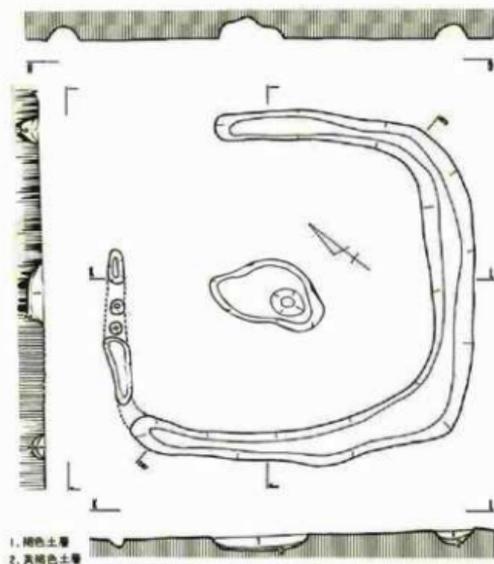
第145図 14号周溝墓平面図

北3.8 mのはほぼ正方形で、台状部は東西3 m、南北3.1 mである。各辺の溝の長さ、巾、深さは、東辺で2.3 m、巾30cm、深さ20cm、西辺で3.4 m、巾30cm、深さ15cm、南辺で3.2 m、巾45cm、深さ16cm、北辺で2 m、巾25cm、深さ10cmである。ただし、北辺溝は極めて浅く、点列状に小ピットが連続し、かろうじて溝とみなすことができる。

土橋は北側の隈に1箇所あって、溝と溝との巾は1.6 mの間隔がある。主体部は台状部中央に位置し、長軸は110 cm、短軸66cm、深さ16cmであるが、遺物は無い。又、土壕内に小ピット(直径25cm)がある。出土遺物は小破片が若干あるのみである。

16号周溝墓 第147・148図

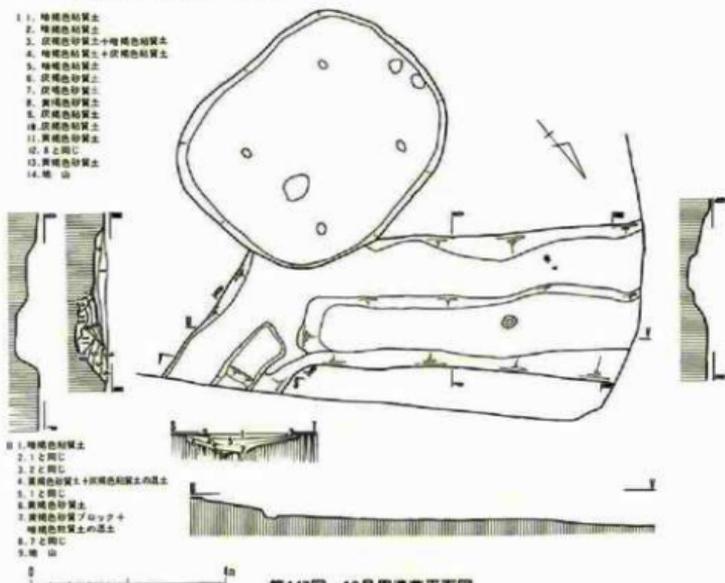
周溝墓群北西部に位置し、21号住居と重複する。21号住居が埋没した16号周溝墓の溝を切って構築されているようである。又、この周溝の大部分は調査地区外にあって、その詳細は不明であるが方形周溝墓であろう。現存する溝はし字に曲っており、発掘区に沿った方向で8 m



東側へ曲って3mが確認された。溝の巾は北側で3.5m、深さ70cm、東側で2.6m、深さ40cmである。溝の巾で3mを超えるものは本周溝だけで、6号周溝より規模が大きいと考えられる。又、溝は2段及至3段に掘り込まれ、西側溝中には、巾1.2m、深さ10cmの溝が台状部側にあり南側の溝中にも巾70cm、深さ10cmの溝が台状部に沿って掘られている。溝は北側に深くなっており、屈曲部が最も浅く20cmである。溝中の覆土はレンズ状の堆積をしているが、完全に埋った時点で1回掘り直しをしたと考えられ、下層溝より立ち上る面が上層にまで達している。覆土中の出土遺物は高坏、壺破片がある。

第146図 15号周溝基平面図

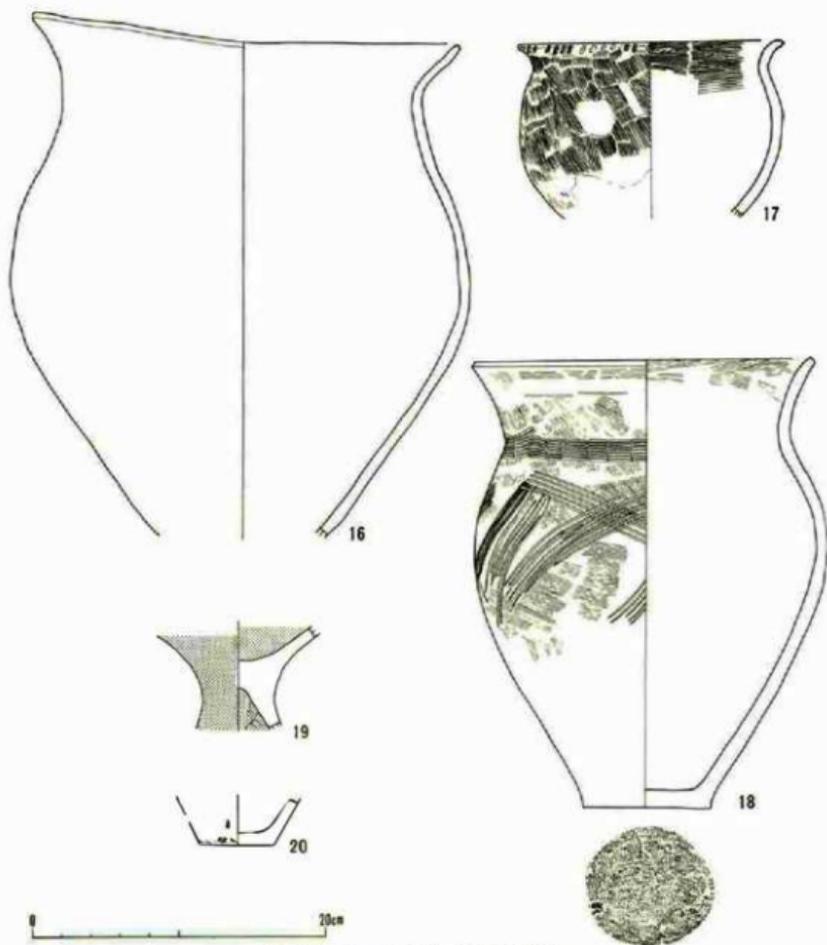
1. 堆積色粘質土
2. 堆積色粘質土
3. 灰褐色砂質土+堆積色粘質土
4. 堆積色粘質土+灰褐色粘質土
5. 堆積色粘質土
6. 灰褐色砂質土
7. 灰褐色砂質土
8. 灰褐色砂質土
9. 灰褐色粘質土
10. 灰褐色粘質土
11. 灰褐色粘質土
12. 土間
13. 灰褐色粘質土
14. 溝底



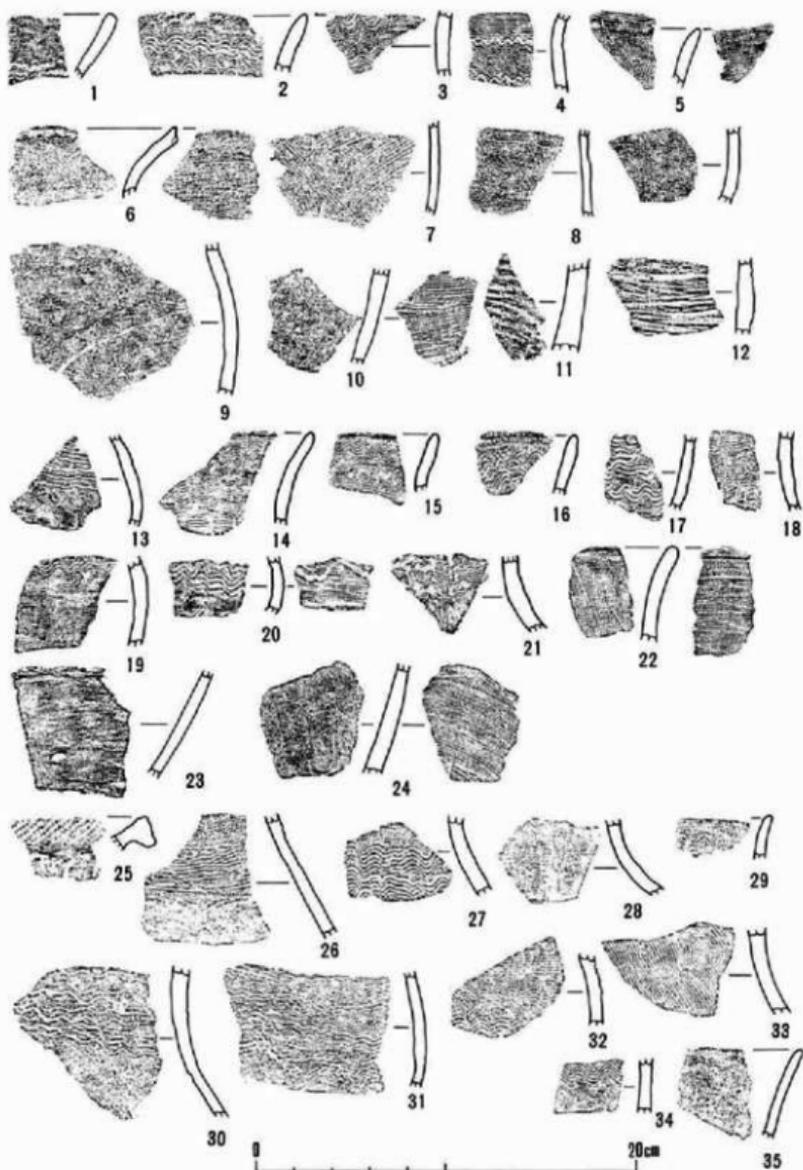
第147図 16号周溝基平面図

17号周溝墓 第153図

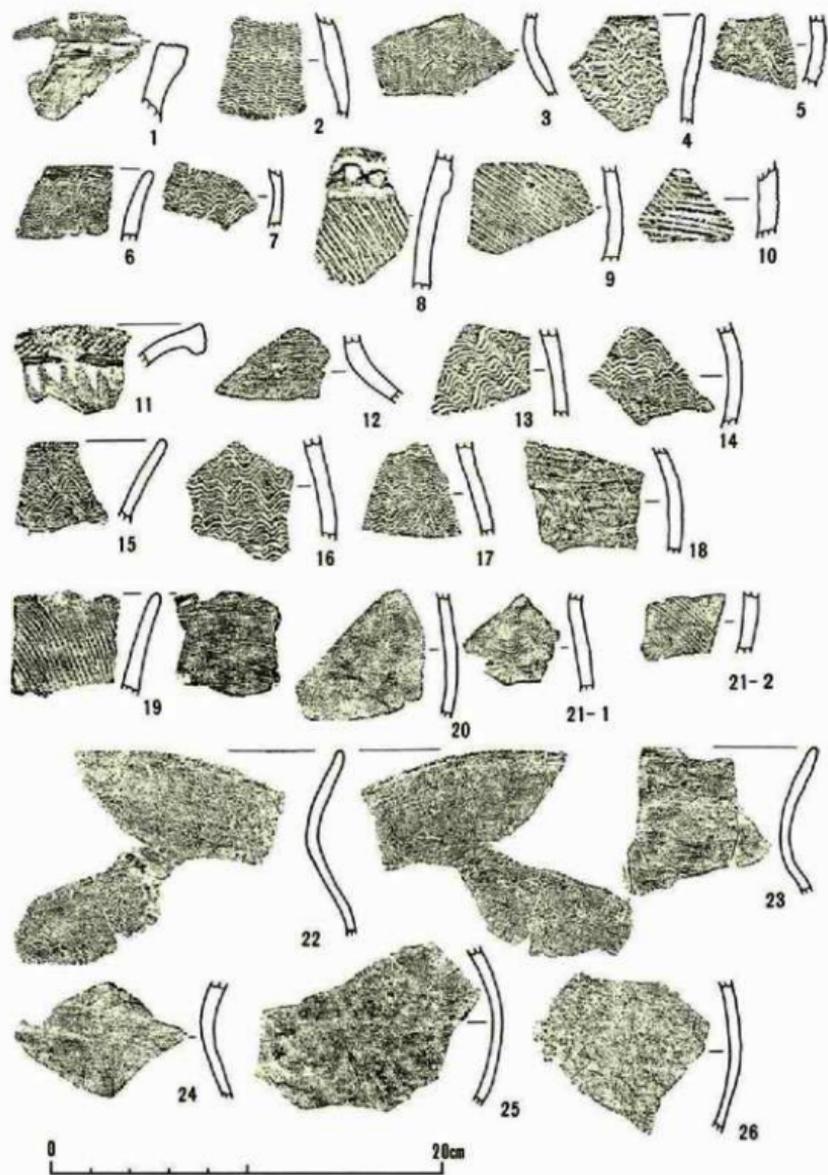
周溝墓群最北部に位置し、その大部分が調査地区外に存在している。調査区内にはし字形の溝が検出されただけであり、方形周溝墓として確定できるかどうか分らないが、周溝墓群が分布する範囲から見ると、この遺構も周溝墓区域に含まれるであろう。溝の巾と深さは、北側で3m、深さ30cm、東側で1.4m、深さ1.5mである。溝は台状部側が立っており、外側は緩傾斜である。出土遺物は覆土中からもほとんど採集されていない。



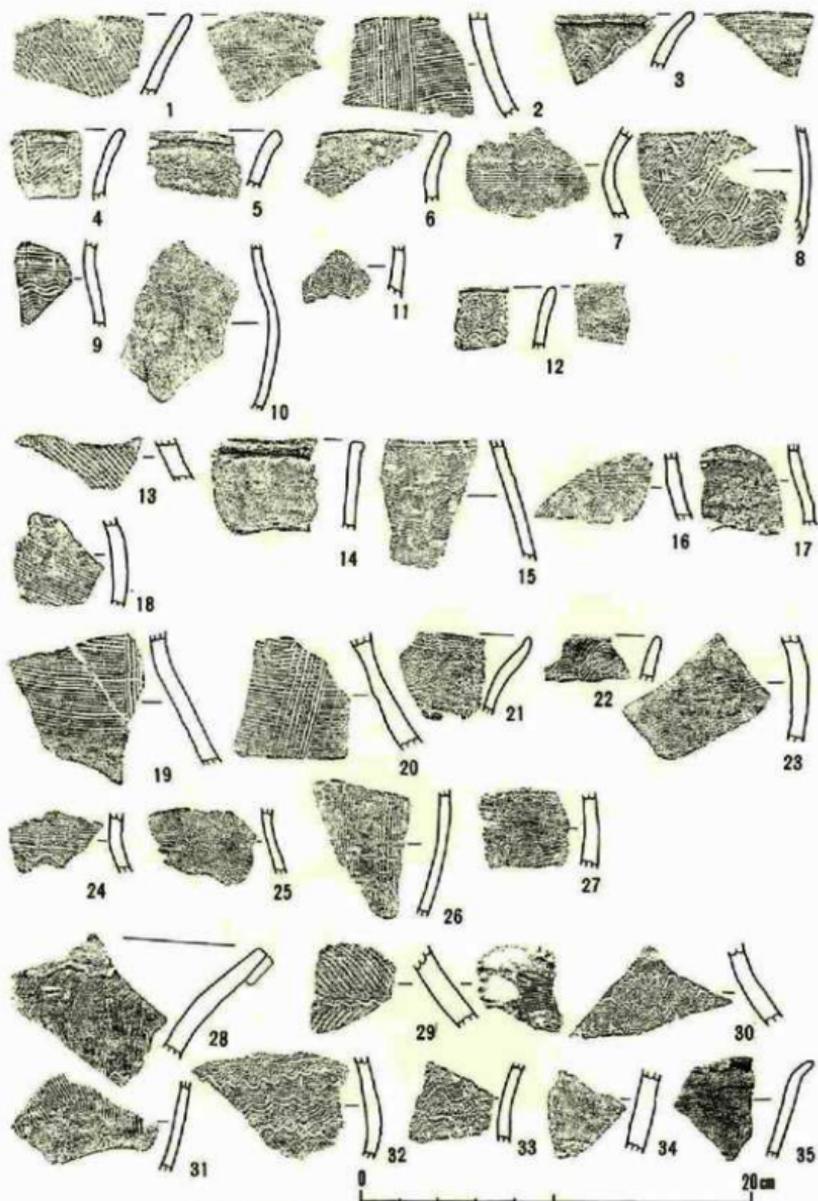
第148図 13、14、16号周溝墓出土土器



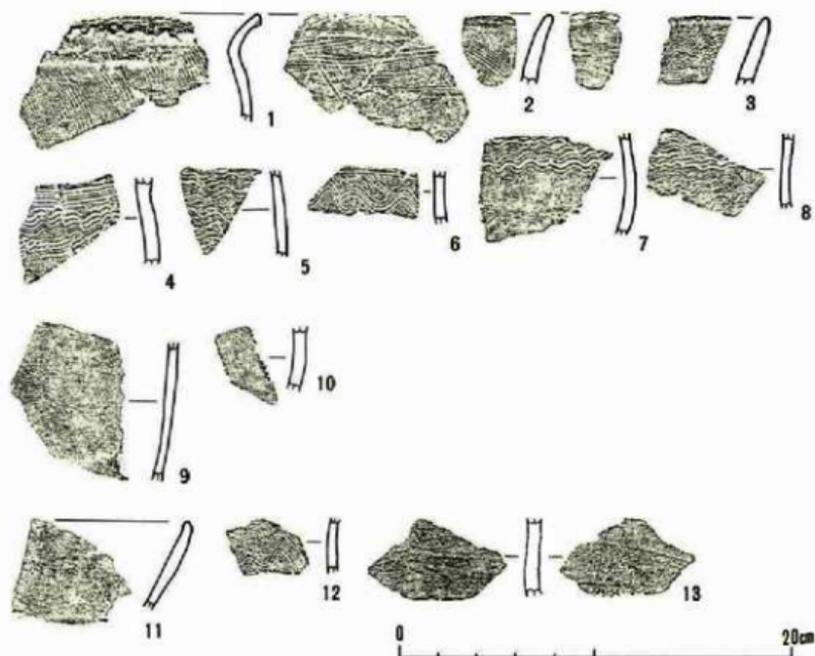
第149图 1(1~12)、3(13~24)、5(25~35)号周溝墓出土土器



第150图 6 (1~10)、7 (11~18)、8 (19~21)、9 (22~26)号周原基出土土器



第151图 9(1~12)、10(10~15)、11(16~24)、13(25~32)号周满墓出土土器



第152图 14(1~8)、15(9~10)、16(11~13)号周满墓出土土器



第153图 17号周满墓平面图

周溝墓出土遺物について

各周溝墓から土器が出土するものと、出土しないものがあり、溝底面に接して出土する場合と、覆土中に存在するものがある。

これは次のように分けられる。

- 溝底面出土 - 2、5、9、11、13、14
- 覆土中出土 - 1、3、4、7、9、10

なお、出土遺物の内容は次の第4表のとおりである。

第3節 柱列・溝（第154～164図）

本遺跡から検出された柱列は2基で、掘立柱建物址は発見されていない。溝は15本検出されている。このうち12溝は弥生時代のV字溝で、集落を区画する為の溝であるが、6溝、13溝は弥生時代の遺構でありながら性格は不明である。

その他の溝は時期も近世に掘られたものもあるようで、弥生時代水田址に伴う溝はないようである。

挿図として掲載したものについて、順次説明する。

柱列

1号柱列（第154図）

発掘区の最も北西部に位置し、85号土壌と重複する。柱列は南北に並び、北から6本の柱が、1.15m、0.4m、0.95m、1.2mの間隔で並んでいる。6本のうち中央の4本が2本ずつの組合せになっており、柱列の南には長径1.1m、短径0.9m、深さ20cmの土壌がある。

2号柱列は39号住居址西側に位置し、2本の柱穴がほぼ南北に並ぶ。柱穴の直径は30cm～35cmで、深さは50cmである。この2本の柱穴底部には柱根が残っており、どちらも南東方向に傾斜して柱根が検出されている。

溝

13号溝（第154図）

12号溝の南側に位置し、4号方形周溝墓の西側の溝を切っている。長さ5.5m、巾55cm～45cm、深さは40cmを最深とし、西側は浅くなる。出土遺物は弥生時代の土器片及び縄文時代の中期末葉の土器片等が多量に出土している。

2、3、5、7号溝（第155図）

1号方形周溝墓の北側に集中してあり、2号、3号溝は平行して掘られ、5号は2本と直交する。2号溝はU字形になって、5号住居と重複し、3号住居は西側へ先端が曲る。2号溝は巾60cm、3号溝は40cm、5号溝は25cmである。7号溝は5号住居の南側から逆L字形に伸びた溝で、長さ4m、深さ40cmを測る。これらの溝の性格は不明、時代も明らかではなく、中世以降と考えられる。

第4表 周溝墓出土土器観察表

No	遺構	器形	法量	文様	技法	備考
1	1周溝 (124図)	高 坏	1)	へら磨き	外面、へら磨きの後赤色塗彩	外面、杯部、内面が
			2)		杯部、内面、へら磨きの後を	赤色塗彩
			3)		赤色塗彩。	脚部、内面黄褐色密
			4)		脚部、内面、へら磨き。	焼成良好
2	1周溝	高坏(坏部)	1) 14.2	へら磨き	内、外面ともへら磨き。その	赤色塗彩
			2)		後、赤色塗彩。	密(砂粒少々含む)
			3)			焼成良好
			4)			
3	2周溝 (124図)	壺	1) 18.2	へら磨き	外、頸部に7本単位3段の横、	赤色塗彩
			2) 30.8	ハケ目	ハケ目、その他の部分へら磨	やや密
			3) 6.5		きの後を赤色塗彩。	焼成良好
			4) 20.2		内、口縁部へら磨き。その後、	
					赤色塗彩。	
					頸部より下部はハケ目、底部	
					穿孔跡あり。	
4	3周溝 (124図)	壺	1)	へら磨き	外、頸部、綾杉状の刺穴文が	茶褐色
			2)	綾杉状の刺穴文	施されている。その他の部分	やや粗い
			3)	ハケ目	へら磨き。内輪積跡あり、整	焼成良好
			4) 28.2		形は指でなでである。	
5	3周溝	高 坏	1)	へら磨き	内、外面ともへら磨き	茶褐色
			2)			粗い
			3)			焼成良好
			4)			
6	3周溝	甕	1)	へら磨き	外面、ハケ整形の後をへら磨	外、暗灰褐色
			2)	ハケ目	き。	内、黄褐色
			3) 6.2		内面へら磨き。	やや粗い
			4)			焼成良好
7	3周溝	甕	1) 16.9	へら磨き	外、上部は縦方向に、下部は	外、赤褐色
			2)	ハケ目	斜め方向にハケ目が施されて	内、暗褐色
			3)		いる。	やや粗い
			4) 15.1		内、頸部を境にして、上部は	焼成良好
					横方向のハケ目が、胴部はへ	
					ら磨きが施されている。	

No	遺構	器形	法量	文様	技法	備考
8	4周溝 (129図)	壺	1) 19.5 2) 43.1 3) 10.0 4) 21.1	縄文 口唇折返し部刻み 文 ハケ目 ヘラ磨き	外、丁字口縁であり、口縁の折返し部分に縄文、刻み目があり、刻み内にハケ目あり、頸部に単位2cm巾のものが3段にわたり施文。他は全体に縦方向にハケ目、その後ヘラで磨いている。 内面は、頸部に横方向のハケ目が見られる。他はヘラ磨き。底部近くは指頭痕らしきあとあり。	赤褐色 やや密 焼成良好
9	5周溝 (129図)	壺	1) 2) 3) 10.7 4) 32.8	ハケ目 ヘラ磨き	外、内ともハケ整形のあとヘラ磨きと思われる。 外は、その後赤色塗彩跡あり。但し剥離の為不明。 内、頸部にハケ目跡あり。	赤色塗彩(剥離)が ひどく部分的のみ密。 焼成良好
10	5周溝	甕	1) 19.4 2) 21.4 3) 6.6 4) 17.8	ハケ目 ヘラ磨き	外面、胴中部まで上から縦方向にハケ目整形、下部は縦方向のヘラ磨きが施されている。 内面、口縁部、横方向にハケ目整形、頸部は横方向のヘラ磨き、胴部は縦方向のヘラ磨きが施されている。 底部、木葉痕	黄褐色 上部黒変 やや粗い 焼成良好
11	7周溝 (136図)	甕	1) 2) 3) 4) 30.8	櫛描T字文 ハケ目 ヘラ磨き	外面、頸部に櫛描T字文8本単位と思われる。施文されている。その他の部分はハケ整形の上をヘラ磨き。 内面は全体の表面が剥離していて不鮮明。	茶褐色 やや密 焼成良好
12	9周溝 (136図)	壺	1) 2) 3) 8.3 4) 27.0	ハケ目 ヘラ磨き	外、全体にハケ整形の上をヘラ磨き。 内、輪積痕が頸部にみられる。 口縁部ハケ整形の上をヘラ磨き、胴部ハケ目整形、	茶褐色 粗い(砂粒含む) 焼成良好

No	遺構	器形	法量	文様	技法	備考
13	9周溝	甕	1) 28.2 2) 3) 4) 24.0	ハケ目 ヘラ磨き 楕描波状文 ヘラ削り	全体的に磨耗と破損にて不鮮明。 外、口唇部にまでハケ目あり 全面、ハケ整形の上をヘラ磨き、頸部張部迄波状文、6本単位の3段。	黄褐色 やや密 焼成良好
14	9周溝	高坏(脚部)	1) 2) 3) 9.0 4)	ヘラ磨き	内、口唇部に少々ハケ目あり、他部は横方向ヘラ削り整形 外面、ヘラ磨きの後を赤色塗彩、脚部内面、ヘラ磨き。	外、赤色塗彩 内、黄褐色 やや密 焼成良好
15	11周溝 (136図)	甕	1) 23.8 2) 34.9 3) 7.5 4) 25.5	ヘラ磨き 楕描波状文 簾状文	外、全体ヘラ磨きの後頸部に簾状文5本単位、その上下(口縁部と胴上部)に楕描波状文4~5本単位、右から左方向に移動、振幅は大きく重複しあっている。 内、ヘラ磨き、上部横方向、下部斜位方向。	黒褐色 やや粗い 焼成良好
16	13周溝 (148図)	甕	1) 26.2 2) 3) 4) 30.8	ヘラ磨き ハケ目	口唇部にハケ目少々あり、 外、口縁部、ハケ整形の上をヘラ磨き横方向に。胴上部、横斜方向にヘラ磨き。下部、縦方向にヘラ磨き。 内、全面横方向のヘラ磨き。	薄茶褐色(一部すす付着) 粗い 焼成良好
17	14周溝 (148図)	甕	1) 16.0 2) 3) 4) 17.8	口唇部刻み文 ハケ目 ヘラ磨き	外、口唇部に楕による刻み目が施されている。他は全体ハケ目整形。 内、口縁部、ハケ整形。胴部、ハケ目の上をヘラ磨きされている。	茶褐色(すす付着) やや粗い 焼成良好
18	14周溝	甕	1) 23.5 2) 30.8 3) 8.7 4) 24.0	ハケ目 簾状文 籠目楕描文	外、頸部に7本単位の簾状文胴部に太い籠目楕描文らしきあり。その他はハケ整形、下部はヘラ磨き。 内、口縁部ハケ目、その他へ	茶褐色(焼むら) やや粗い 焼成良好

No	遺構	器型	法量	文様	技法	備考
19	16周溝 (148図)	高 坏	1)	ヘラ磨き	ラ磨き。 内、外面ともヘラ磨き、その	赤色塗彩
			2)	ヘラ削り	上を赤色塗彩 脚部、内部に	やや粗い
			3)		ヘラ削り跡少々あり。	焼成良好
			4)			
20	16周溝	壺	1)	ヘラ磨き	外、ハケ目整形の後ヘラ磨き	茶褐色
			2)	ハケ目	内、ヘラ磨き	粗い
			3) 5.0			焼成良好
			4)			
21	9周溝 (137図)	壺	1)	ハケ目	外、頸部、縄文施文した上に	茶褐色
			2)	縄文	ボタン状貼付 (直径1.2cm)	焼むらあり
			3)	ヘラ磨き	数個、下部はヘラ磨き。	粗い
			4) 60.4		内、ハケ目あり、剥離が多く 不鮮明	焼成良好

6号溝（第156図）

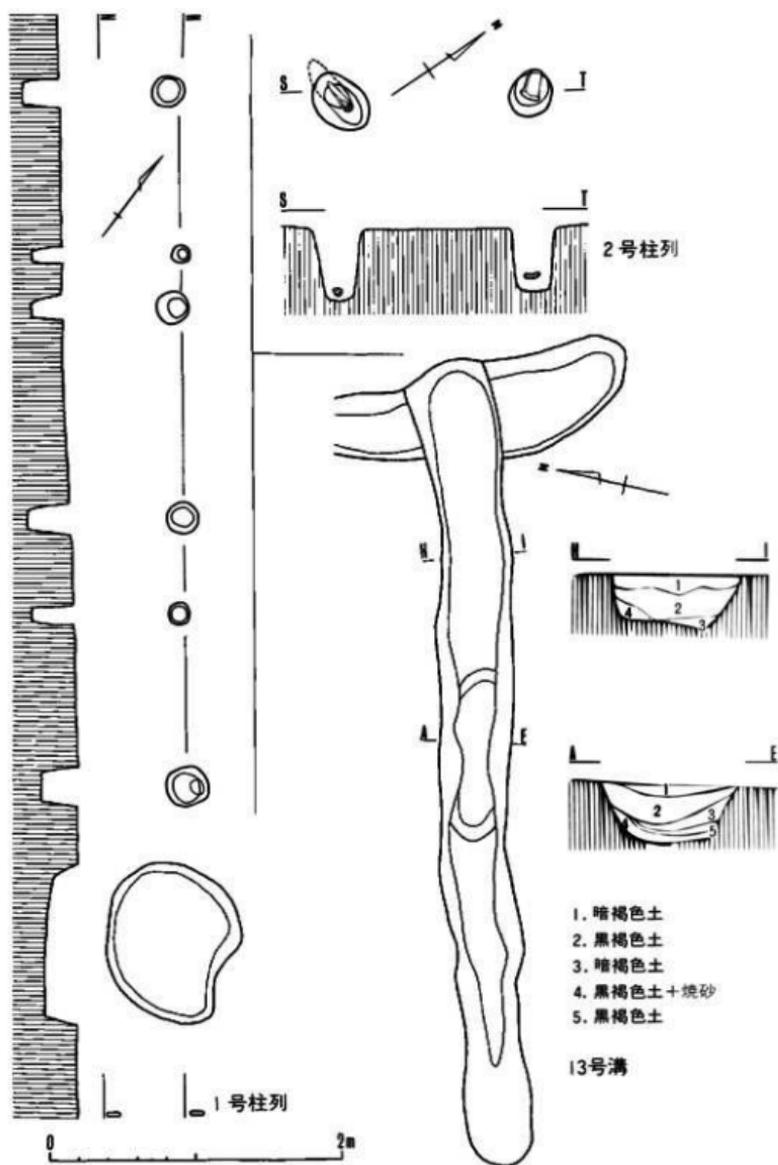
2号方形周溝基北東側に位置し、東西に伸びている。長さ13.4m、巾45cm、深さは東が浅く西側が深い。中央部で45cmの深さがあり、断面は逆台形を呈する。覆土中より縄文中期、弥生時代の土器片が出土している。

12号溝（第157図）

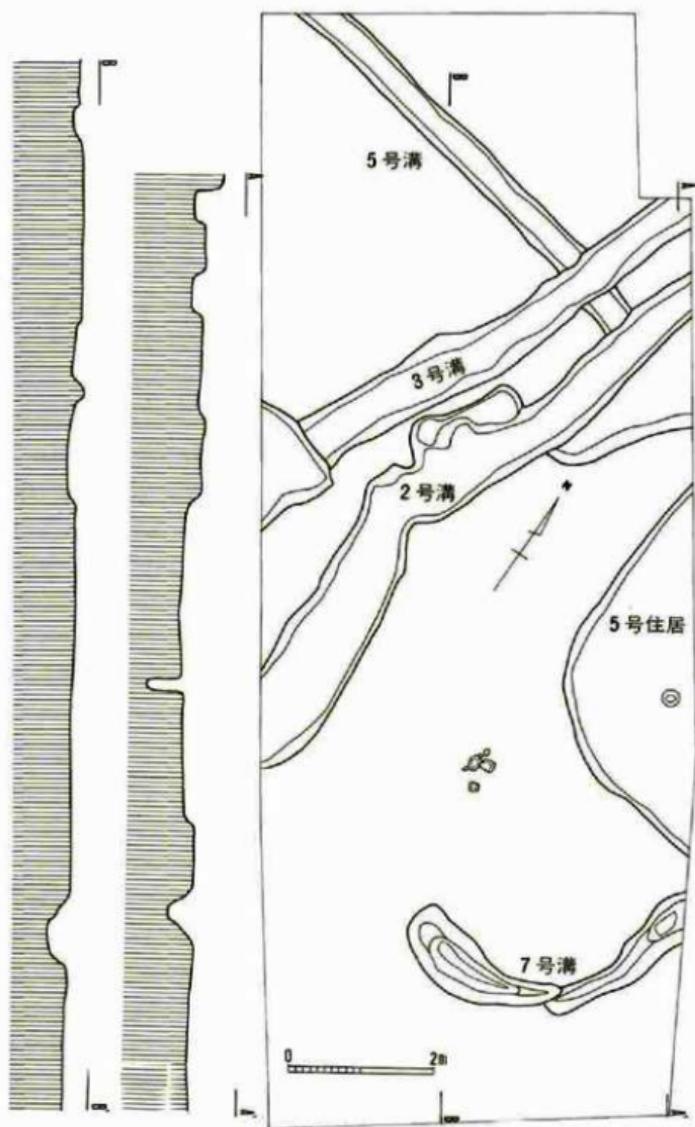
所謂V字溝で、弥生時代の南集落と北集落を分割している溝である。溝の巾は東側で、2.1m、中央付近で2m、西端で2mである。中央部よりやや西側が二又に分かれているが、3号周溝墓に接して止まっている。又、このすぐ西側では巾1mと最も狭くなっている。溝は直線ではなく、7号周溝墓の北側で、これを避けるように曲っている。溝中からは炭化木材、腐敗木、土器、焼土、灰、礫などが出土しており、住居群とはほぼ同時期に埋没したことが想定できる。

14・15号溝（第158図）

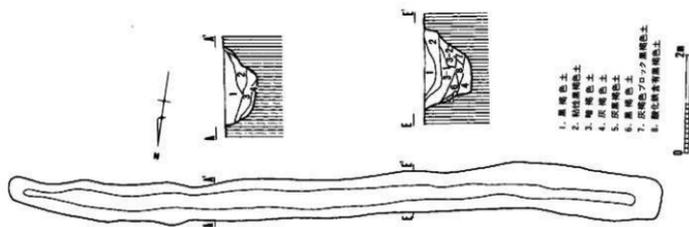
5号方形周溝基台状部北側にあつて、東西に2本並行して走る。15号土壇と重複している。断面土層から4号溝が古く、5号溝が新しい。14号溝の長さ5.3m、巾80cm、深さ50cm、15号溝の長さ6.4m、巾1.1m、深さ30cmである。



第154图 1、2号柱列、13号沟平面图



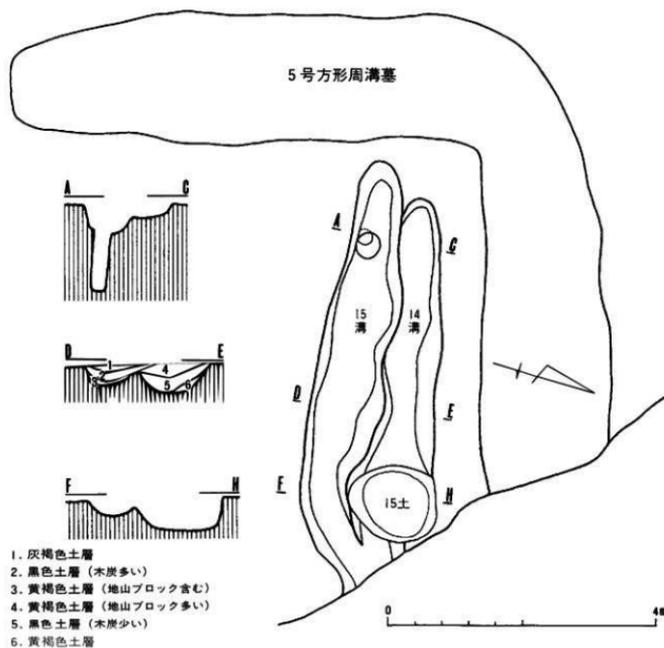
第155图 2、3、6、7号沟平面图



第156图 6号溝渠测图



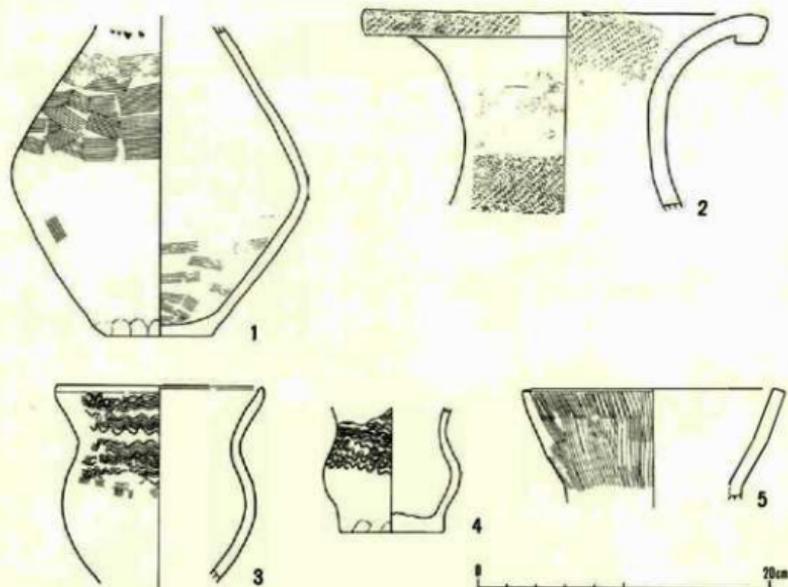
第157图 12号溝渠测图



第158図 14、15号溝実測図

第5表 12溝出土土器観察表
1)口径 2)器高 3)底径 4)胴径

番号	器形	法量	文様	技法	備考
1.	甑	1) 2) 3) 7.5 4) 20.0	櫛描波状文 ハケ目 ヘラ磨き	外 頸部に若干波状が残っている。胴上部がハケ目、下部はヘラ整形 内 ハケ目の上をヘラ整形	褐色
2.	壺(口縁部)	1) 27.7 2) 3) 4)	ヘラ磨き 縄文	口唇、口縁共に丁寧な縄文の 外の頸部も同様縄文。他はヘラ磨き	褐色 やや粗い(砂粒含む) 焼成 良好
3.	甕	1) 14.0 2) 3) 4)	ヘラ磨き ハケ目 櫛描波状文	外 ハケ整形した上を口縁部から胴上部まで櫛描波状文、3本単位であるが不揃い 下部は、縦方向のへらみがき	灰褐色 やや密 焼成 良好
4.	甕	1) 2) 3) 7.0 4) 9.5	ヘラ磨き 櫛描波状文	外 全面をヘラ磨き 頸部から胴上部まで櫛描波状文。底部に近い。下部に指頭痕あり 内 全面ヘラ磨き	暗褐色 粗い(砂粒含む) 焼成 良好
5.	壺(口縁部)	1) 18.0 2) 3) 4)	ハケ目 ヘラ磨き	外 ハケ目整形 内 ヘラ磨き 両面 縦方向に	茶褐色 やや粗い 焼成 良好



第159図 12溝出土土器

第4節 特殊遺構 (第160～164図)

特殊遺構と命名したものは、発掘調査中に単独埋篋が出土したり、集石遺構を伴う土壌であったり、土器を多く含む土壌、又は多量の遺物が出土するが、遺構が不定形であり、住居と考えられないものなどであって、調査中に随時命名した為に不統一である。従って土壌の中にも特殊な遺物を出土させる例もある。ここでは、現地で特殊遺構としたものを取り上げて説明する。

特殊1号遺構 (第160図)

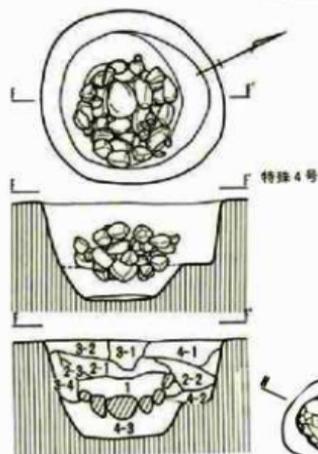
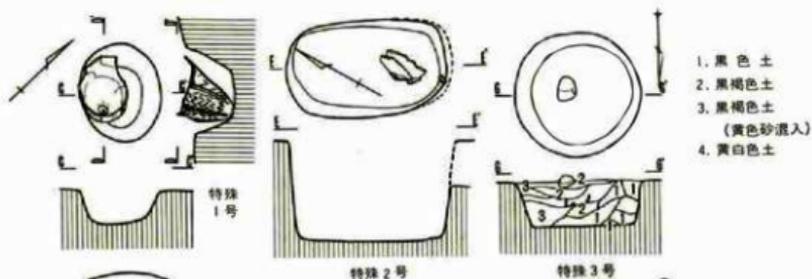
縄文中期後半の曾利V式土器が、小土壌内から正位で出土したもので、底部穿孔されている。胴部上半は耕作か、弥生時代の擾乱によって破損している。1号方形周溝墓の北側に位置する。

特殊2号遺構 (第160図)

18号住居の南側に位置し、長径1.1m、短径65cm、深さ70cmの土壌内より縄文中期後半の曾利V式土器及び加曾利E4式土器が重なりあって出土している。曾利式と加曾利E式の終末期の土器の伴出関係を示す良好な遺構である。

特殊3号遺構 (第160図)

17号住居北側に位置する円形土壌で、土壌確認面中央に小礫が置かれている。土層は、レン

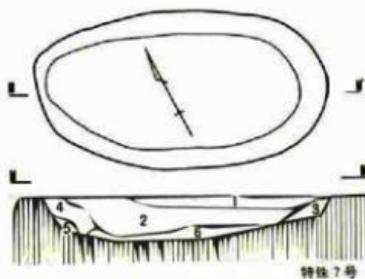


1. 黒色土
2. 黒褐色土
3. 黄色砂層+黒褐色土
4. 黄色砂層



特殊5号

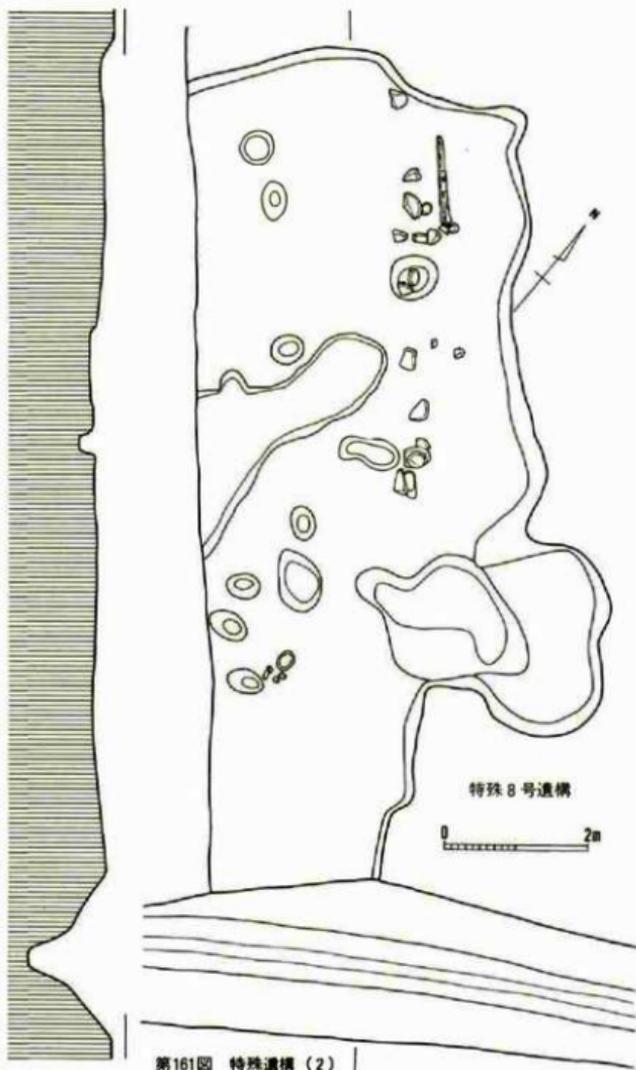
1. 黒色土 4. 灰褐色砂質土
2. 灰褐色土 5. 灰褐色土質土
3. 暗褐色土



1. 暗褐色、黄褐色砂質ブロック土
2. 暗褐色粘質土
3. 黄褐色砂質土と2の混土
4. 1と同じ
5. 4と同じ
6. 3と同じ



第160回 特殊遺構(1)



第161図 特殊遺構(2)

ズ状堆積をしており、ブロック状に土が投げ込まれた状態を呈する。

**特殊4号遺構
(第160図)**

直径1.25mの円形土壌中央に、礫が鍋底状に並べられている。礫の範囲は直径70cm、厚さ40cmで、礫層より上は漆黒色の土層で埋められている。土壌は2段に掘り込まれているので、礫群は上層土壌に伴うものであろう。

**特殊5号遺構
(第160図)**

12号溝西端の南に位置し、不整形をした皿状の土壌である。土壌中央より弥生時代の甕が出土している他、覆土中には焼土

やカーボン等が含まれている。長径4.5m、短径2.3mの規模である。

特殊6号遺構(第160図)

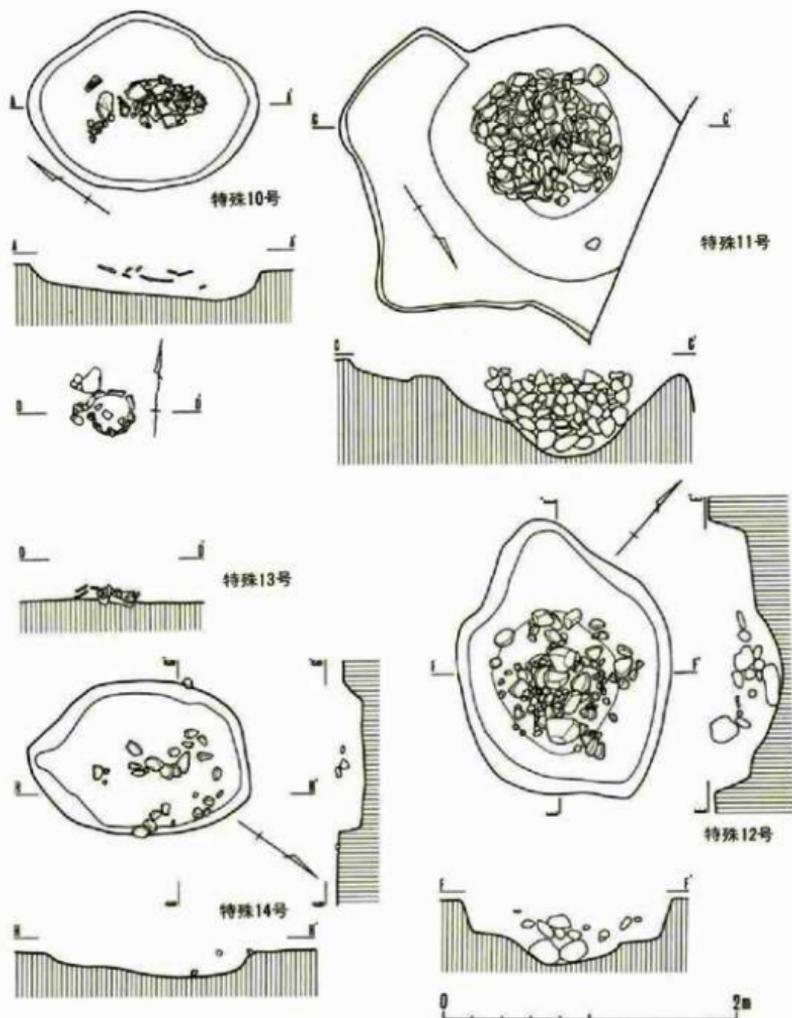
4、5、7号周溝墓の間に位置し、長径80cm、短径60cm、深さ20cmの土壌中央に、弥生時代壺形土器が正位で埋められていた。

特殊7号遺構 (第160図)

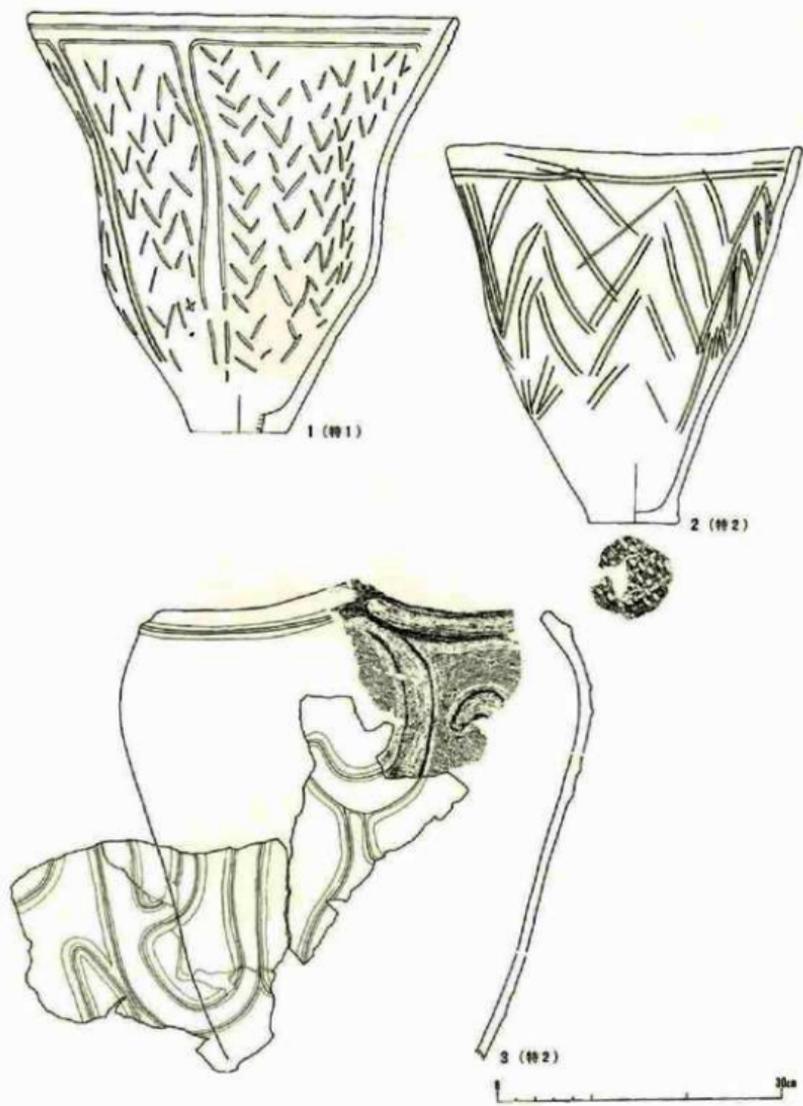
8号周溝墓の南にある長径2m、短径1.1mの長円形土塚で、深さは30cmの皿状底面をもつ、この中より、ガラス玉7、環状銅製品が出土している。

特殊8号遺構 (第161図)

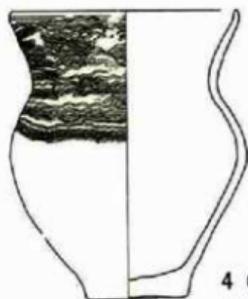
12号溝西端北側の不整形遺構で、半分は未調査区に含まれる。長径10m、巾5mで、西側に



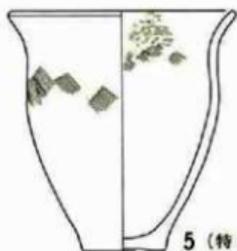
第162図 特殊遺構 (3)



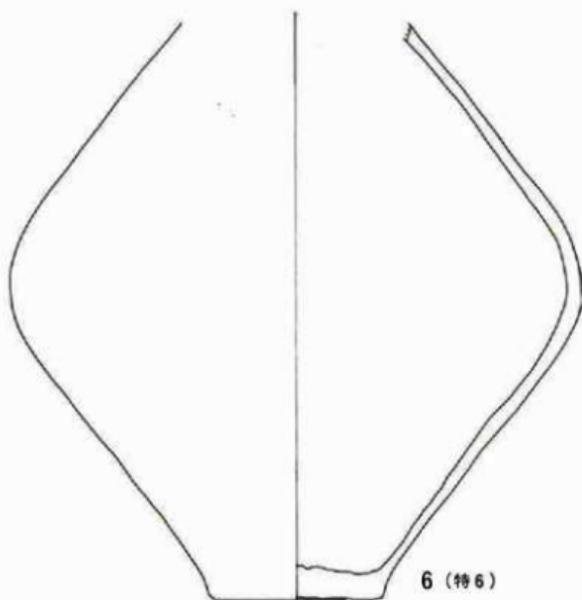
第163圖 特殊遺構出土土器 (1)



4 (特5)



5 (特5)



6 (特6)



7 (特7)



第164回 特殊遺構出土土器 (2)

第6表 特殊遺構出土土器 (第163・164・184図)

1)口径 2)器高 3)底径 4)胴径

番号	器形	法量	文様	技法	備考
1. 特1	甕	1) 44.5 2) 50.0 3) 10.0 4) —	ヘラ磨き 逆ハの字文 沈線	内外全面をヘラ整形した上を 外、口唇直下に一周沈線1本 全体を5区画に区分し、区画 内に逆ハの字文を施す ハの字の工具は上→下に動か す。底部穿孔の可能性もある	赤褐色 やや粗い(細い砂粒 含む)
2. 特2	甕	1) 37.4 2) 39.5 3) 9.6 4)	綾杉文	外 胴部全体に大きな綾杉状 に沈線文様 底部、網代文様	
3. 特2	甕	1) 42.0 2) 3) 4)	縄目文		
4. 特5P1	甕	1) 15.5 2) 19.8 3) 7.0 4) 16.3	櫛描波状文 ヘラ磨き	口唇部 ヘラ工具で整形した 時の細い沈線痕がある 口縁部から胴上部まで櫛描波 状文が施されている。中部→ 下部はヘラ整形されている 内 ヘラ整形	黄褐色 密 焼成 良好
5. 特5P2	甕	1) 15.8 2) 16.7 3) 5.8 4) 13.3	ハケ目 ヘラ磨き	内、外面ともハケ目の上をヘ ラ磨き整形	茶褐色、焼むらあり やや粗い 焼成 良好
6. 特6	大型 壺	1) 2) 3) 12.0 4) 39.2	ヘラ磨き	内、外面ともにヘラ磨き 内面 剥離多い	灰褐色、焼むらあり やや粗い 焼成 良好
7. 特8	小 鉢	1) 6.0 2) 3) 4)			薄茶褐色 焼成 良好
324.特13	深 鉢	1) 32	粘土紐貼付・条線		薄茶褐色・焼成良

向って段々深くなるような皿状遺構である。この中には、礫、腐敗木、土器、石器などが投げ込まれたように出土し、特に小型手捏土器等も出土することから、祭祀的遺構とも考えられる。

特殊10号遺構（第162図）

6号周溝墓西側に位置し、長径1.5m、短径1mの楕円形土壇中より縄文中期後半の土器片が一括出土した。

特殊11号遺構（第162図）

20号住居南壁に接して発見された集礫土壇である。土壇直径1.3m、集礫は約1mの直径、深さ50cmの半球状に固まり、ほぼ土壇を埋めている。中から縄文前期、中期の土器片が出土している。

特殊12号遺構（第162図）

25号住居東側にあつて、長径1.8m、短径1.5mの皿状土壇内より、礫がまとめて出土している。

特殊13号遺構（第162図）

20号住居北側にある縄文中期単独埋葬で、土壇規模は不明。

特殊14号遺構（第162図）

3号周溝墓と14号周溝墓の中間に位置し、長径1.5m、短径1mの円形土壇である。覆土中に小礫、土器片等を含む。

第5節 土壇（第165～184図）

土壇数は、ナンバーを付したもので95基ある。このうち4基が欠番となっているので実数91基であるが、この他にナンバーを付けなかった掘り込みもあつて、実数は100基をこえるであろう。なお、土壇群は遺跡中央部に最も集中しており、特に縄文中期後半の遺構が多い。弥生時代のものは墓壇・蔵骨壺などが主で、周溝墓群に接した地域に多い。このうち特筆すべき土壇を取り上げて説明し、他は第7表の一覧表を参考にしてもらいたい。

4号土壇

直径1.7m、深さ90cmの円形土壇で、底面は更に直径80cm、深さ5cmの掘り込みがある。土層断面を見ると、レンズ状堆積をしているが、壁寄と中央部の堆積状態が大きく異なり、特に下の掘り込みは二次的に掘られたように見える。おそらく、この遺構は井戸址であろう。

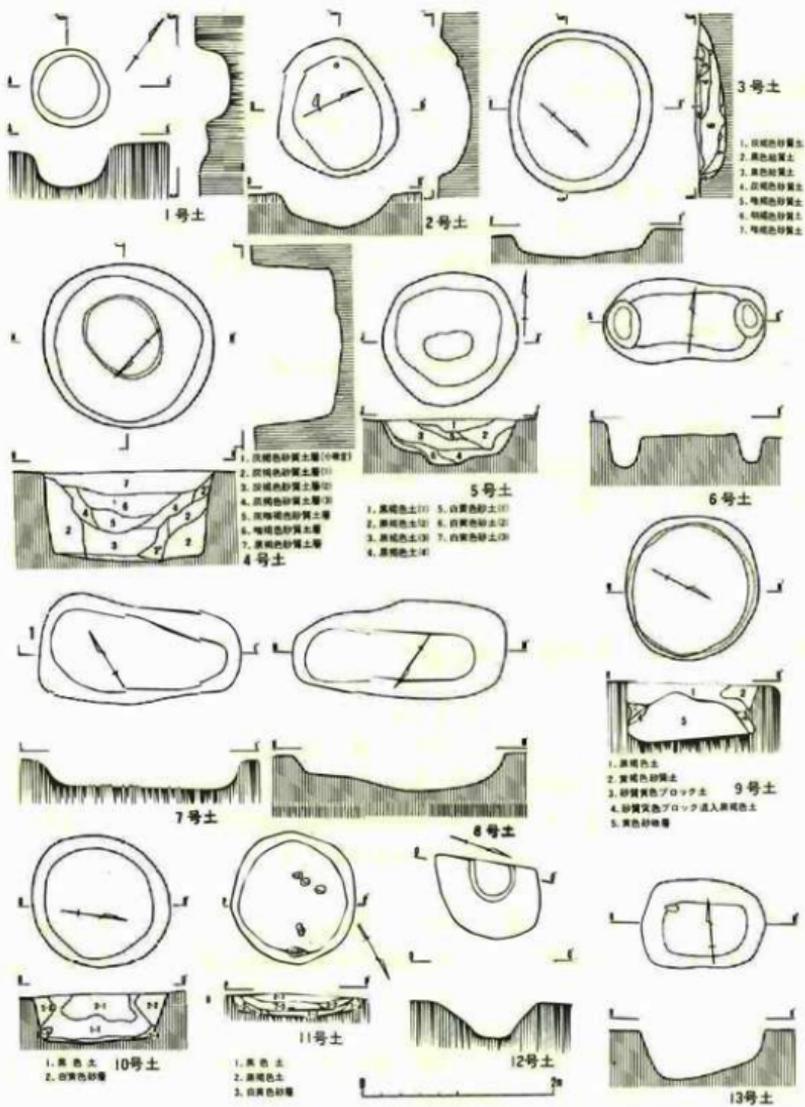
9号土壇

直径1.4mの円形土壇で、深さ60cm。土壇内の底面を覆う土は、黄色砂礫層であるが、一時に埋められたような状態である。

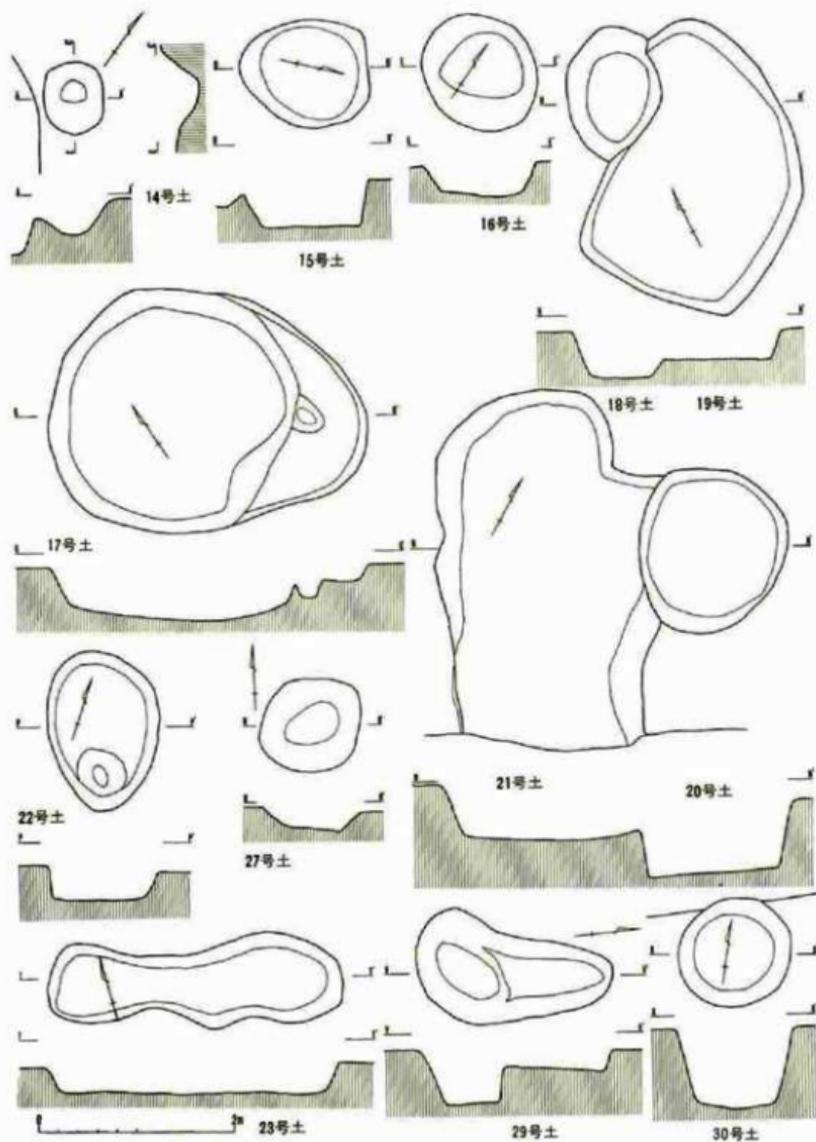
10号土壇

直径1.4mの円形土壇で、深さ50cm。上層覆土中央に白黄色砂質土があり、下層は黒色土である。何か埋めて、凹地になったところに砂質土が入れられたものであろう。

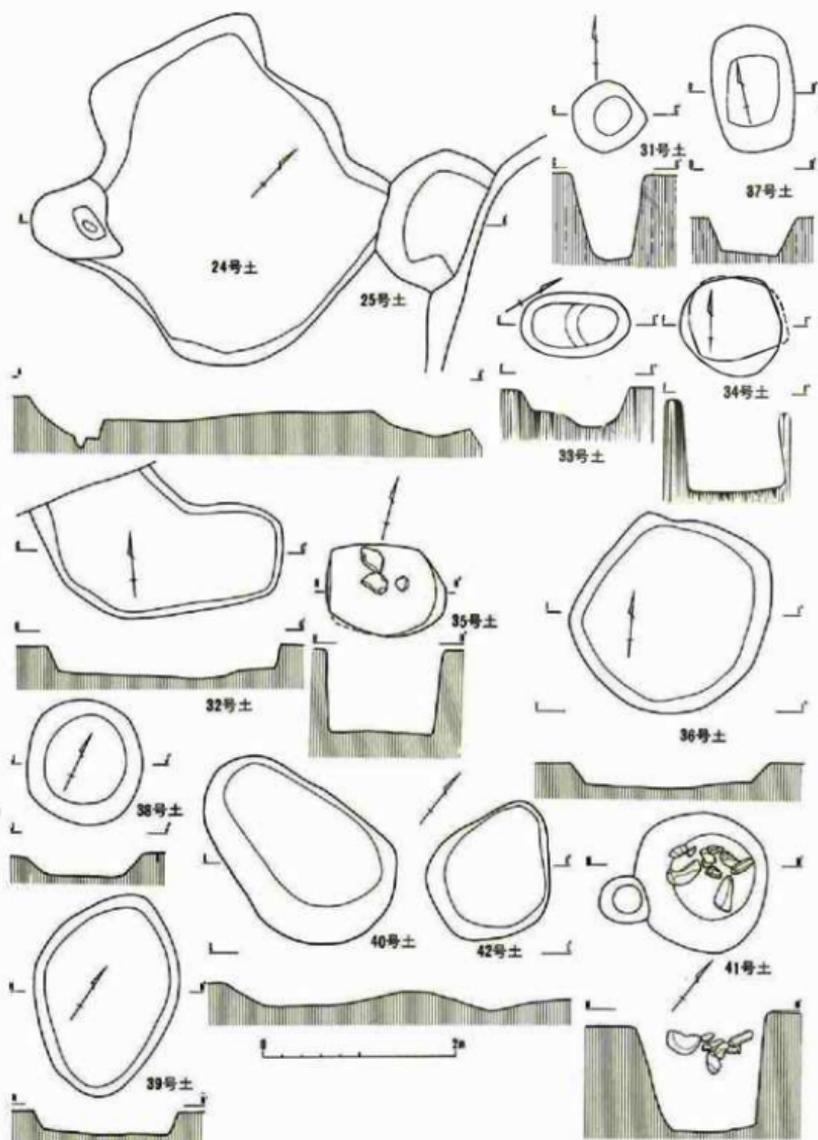
17号土壇



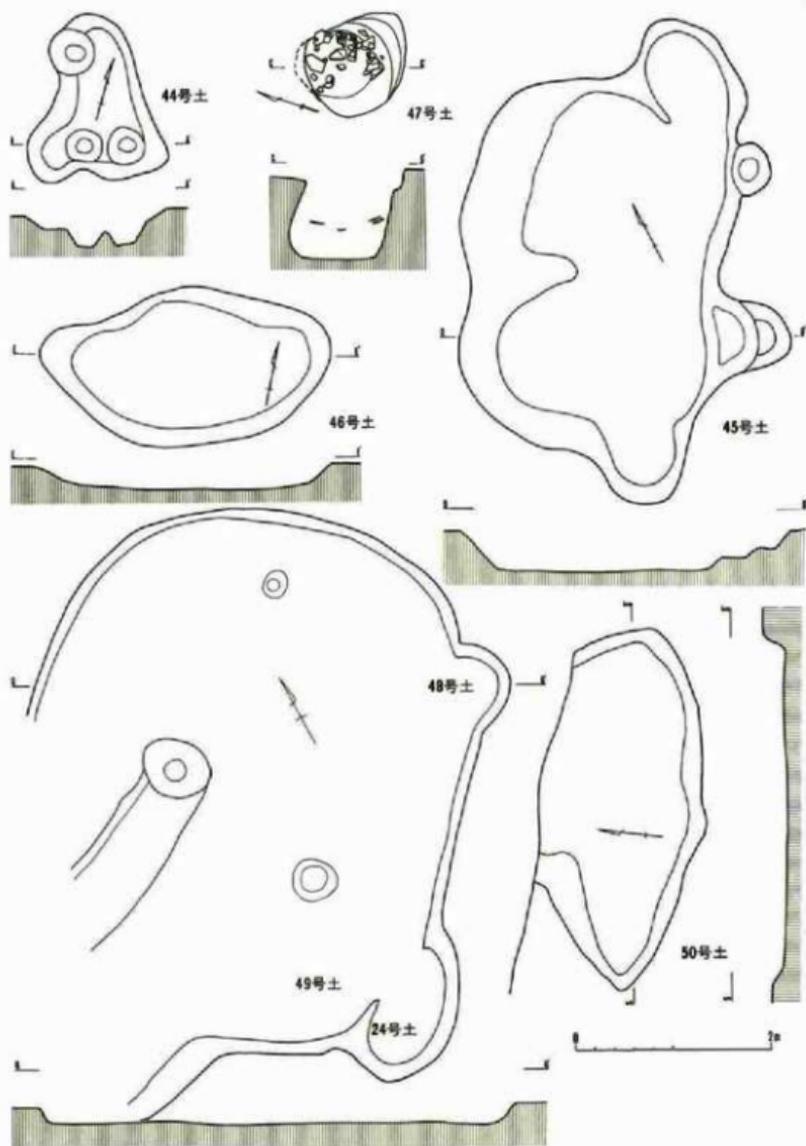
第165回 土壤実測図(1)



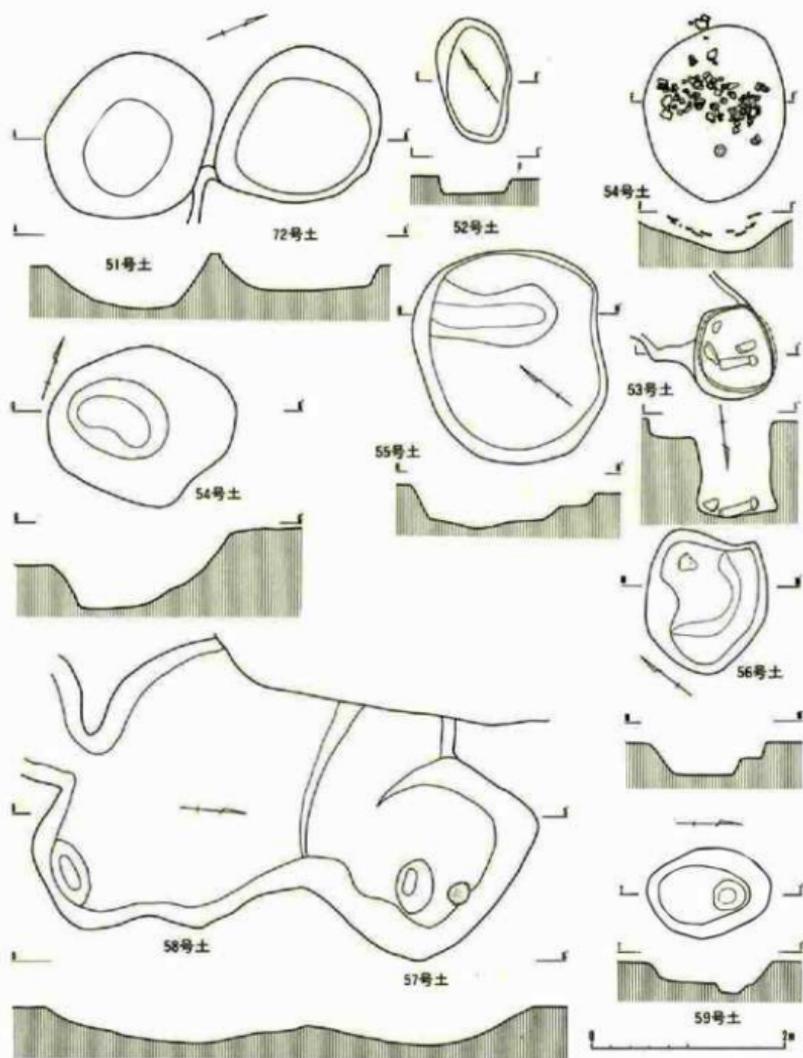
第166图 土壤实测图(2)



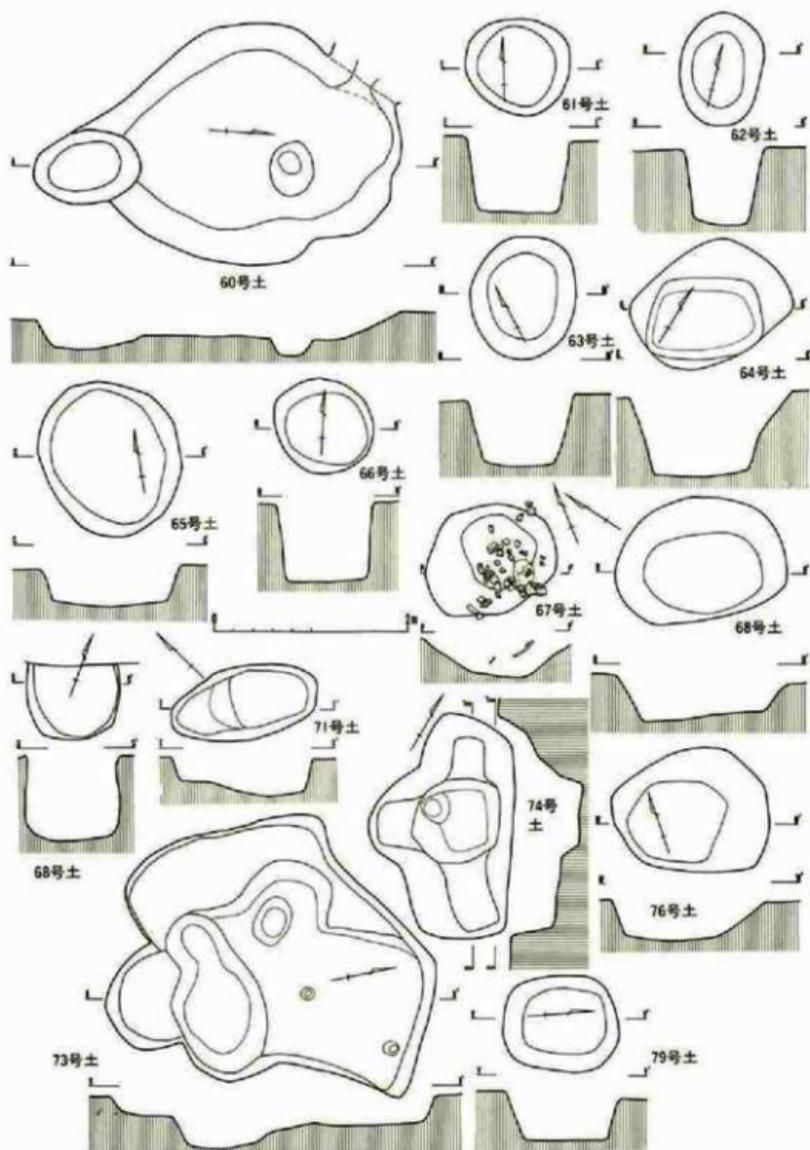
第167图 土壤实测图(3)



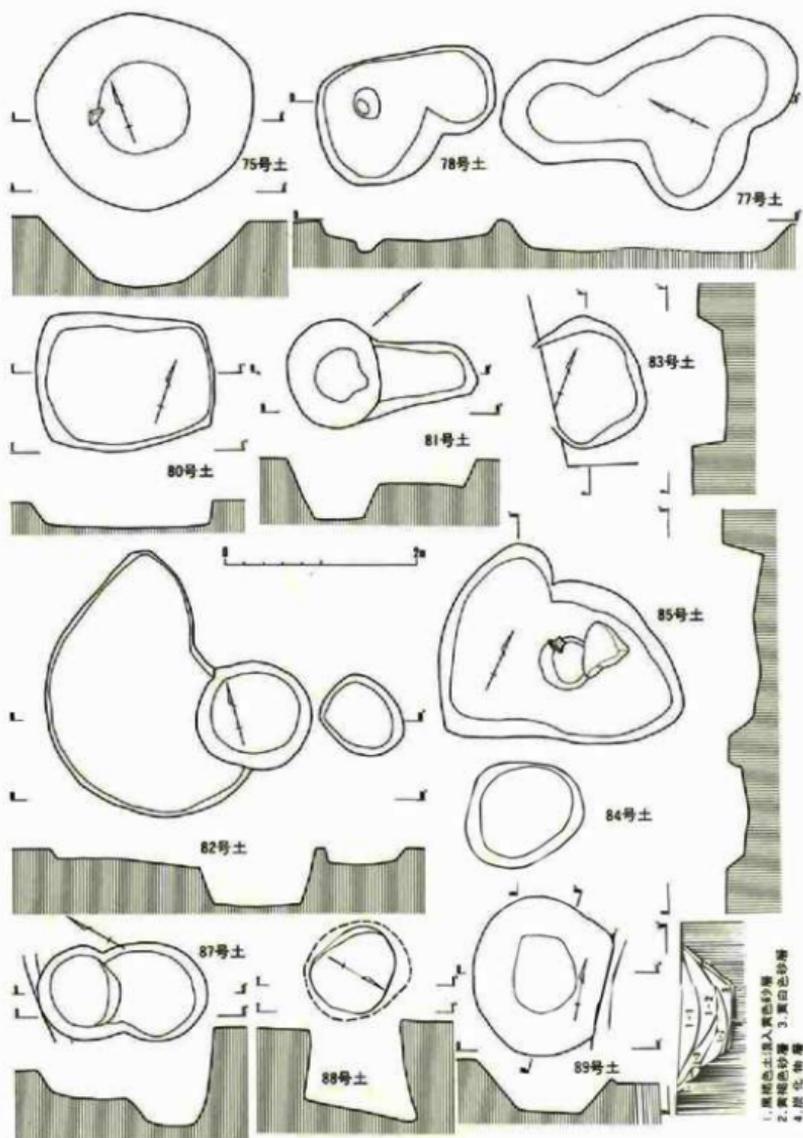
第168图 土坑实测图(4)



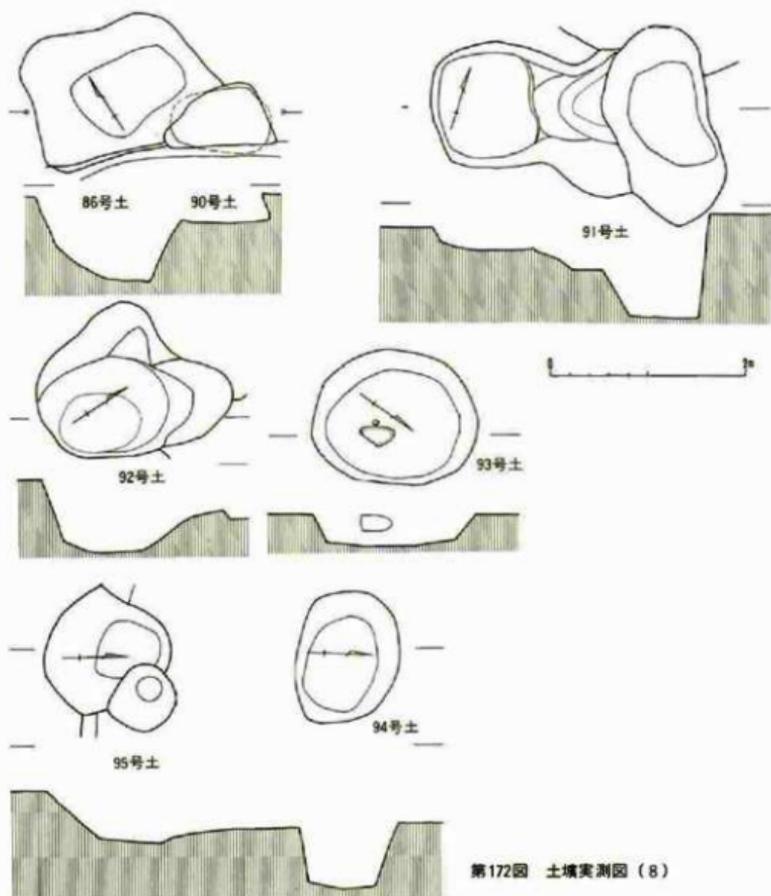
第109图 土壤实测图(5)



第170图 土壤实测图(6)



第171图 土壤实测图(7)



第172図 土坑実測図(8)

長径3.3m、短径2.5mの卵形で、2段に落ち込み、深さは55cmある。底面は皿状に窪んでいる。

20号土坑

12号溝の北側で、21号土坑と切り合っている。直径1.7m、深さ75cmの円形土坑である。

35号土坑

長径1.2m、短径95cmの土坑で、深さは90cm程あり、断面は方形を呈する。覆土中に礫が3個投入されている。

41号土坑

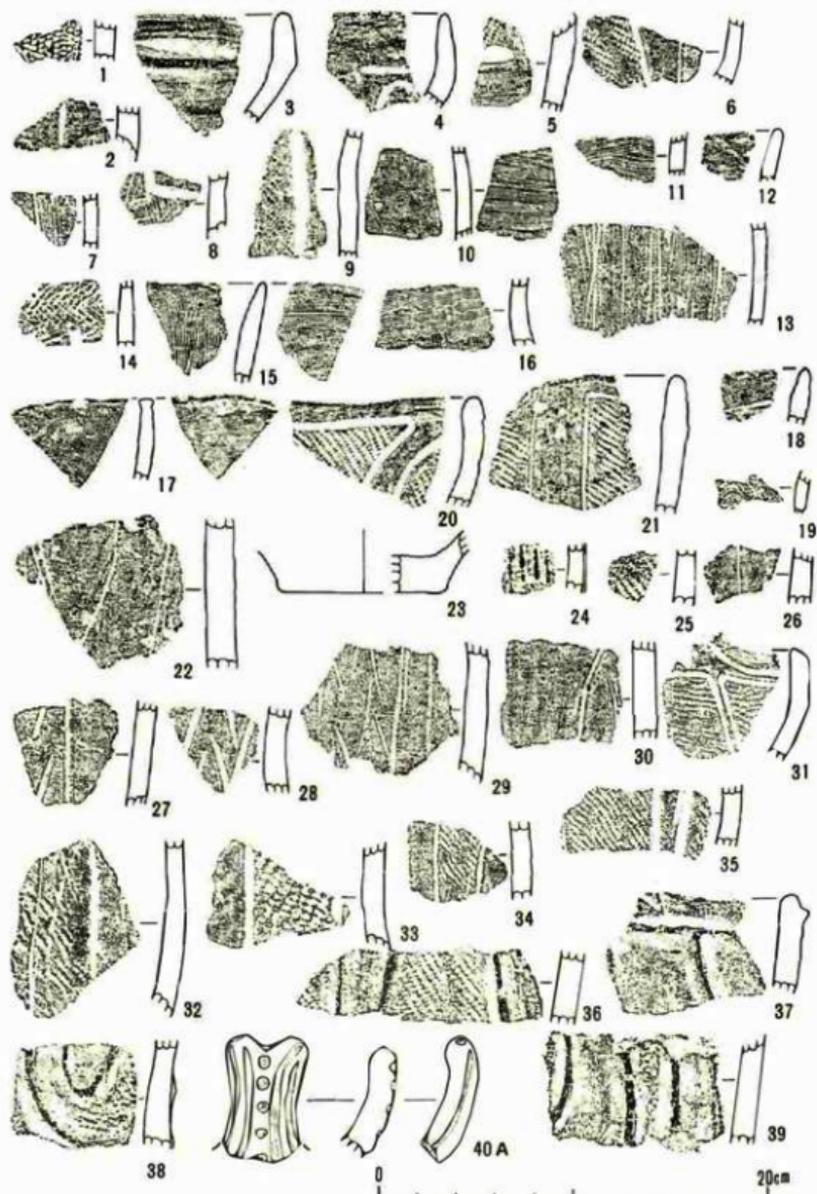
直径1.4m、底径85cmの円形土坑で、深さは1.2m程ある。土坑上面に石皿、磨石等が10個

第7表 金の尾道跡土橋一覽表

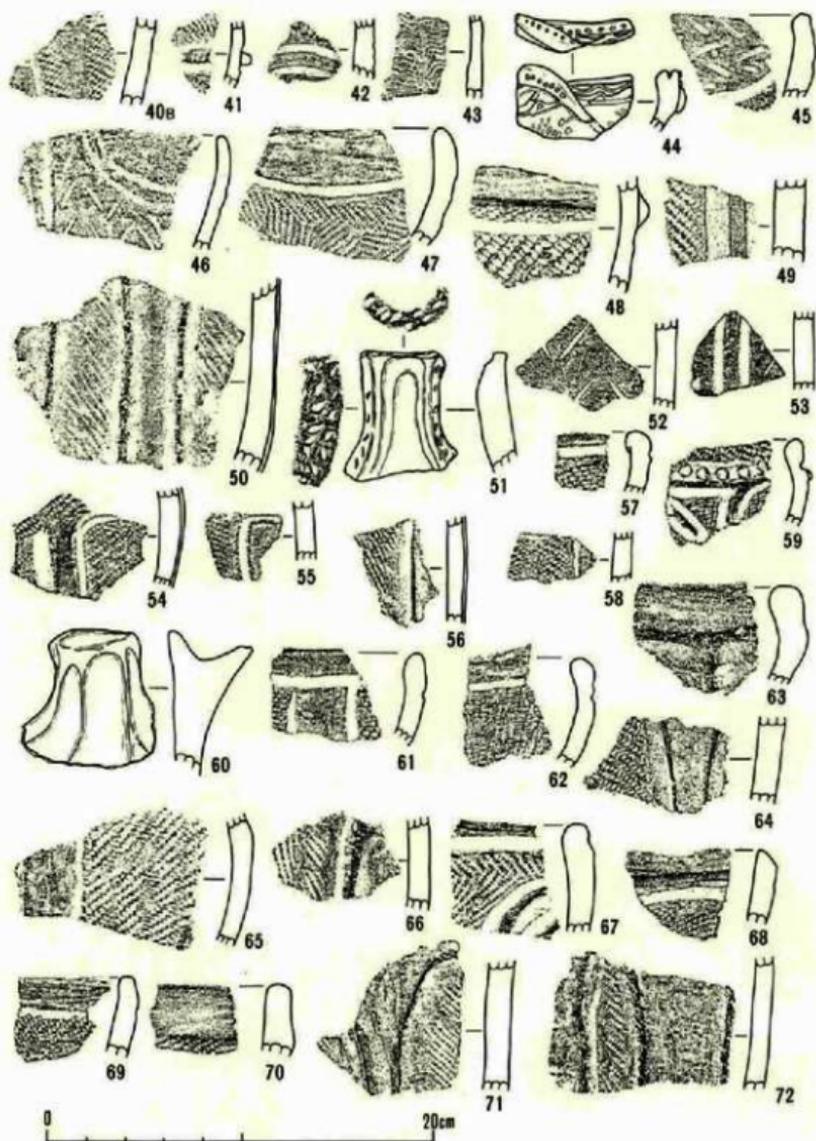
No	形	規模(長径×短径×深さ)	時 期	遺 物	
				土器片	石 器
1	円 形	80 × 79 × 42	縄中後半	3	
2	楕 円 形	142 × 124 × 32			
3	隅 丸 方 形	167 × 147 × 28			
4	円 形	174 × 169 × 93			
5	円 形	142 × 137 × 46		2	1
6	楕 円 形	167 × 85 × 15	縄中後半		
7	楕 円 形	207 × 101 × 27	縄中後半		
8	楕 円 形	221 × 101 × 36			
9	円 形	149 × 135 × 59	縄中後半・弥	6	
10	円 形	145 × 127 × 50	弥中	1	
11	円 形	129 × 136 × 24	縄中後半・弥後	6	
12	長 円 形	104 × 79 × 39			
13	楕 円 形	128 × 90 × 50			
14	隅 丸 方 形	76 × 62 × 38	縄中後半	3	
15	隅 丸 方 形	131 × 112 × 51			
16	円 形	120 × 117 × 34		4	
17	楕 円 形	325 × 247 × 57	縄中後半	14	
18	楕 円 形	138 × 97 × 48	縄中後半	4	
19	不 整 形	287 × 197 × 31	縄中後半	7	
20	隅 丸 方 形	170 × 152 × 73	縄中後半	9	
21	不 整 形	368 × 206 × 56	縄中後半～後初	5	
22	楕 円 形	167 × 116 × 36	縄中後半	2	1
23	不 整 形	301 × 86 × 31	縄中後半	6	
24	楕 円 形	157 × 84 × 24			
25	隅 丸 方 形	142 × 102 × 38	縄中後半	3	
26					
27	隅 丸 方 形	112 × 99 × 22	縄前未・中後	3	1
28			縄前未・中後	2	
29	不 整 形	203 × 94 × 58	縄前未・中後	6	
30	円 形	108 × 112 × 89	縄中後半	7	
31	円 形	74 × 76 × 90	縄中後半	7	
32	不 整 形	256 × 139 × 30	縄中後半	3	
33	楕 円 形	112 × 68 × 40	縄中中頃	5	

No	形	規模 (長径 × 短径 × 深さ)	時 期	遺 物	
				土器片	石 器
34	円 形	103 × 102 × 96		1	
35	楕 円 形	124 × 94 × 86	縄中後半		
36	隅 丸 方 形	208 × 188 × 27			
37	楕 円 形	132 × 83 × 27			
38	円 形	130 × 117 × 22			
39	楕 円 形	219 × 148 × 25			
40	楕 円 形	227 × 144 × 25	縄中後半	6	
41	隅 丸 方 形	145 × 129 × 118	縄中後半	13	5
42	不 整 形	129 × 155 × 21	縄中後半	4	
43			縄中後半	3	
44	不 整 形	155 × 98 × 40	縄中後半	8	
45	不 整 形	504 × 273 × 40	縄中後半	5	2
46	不 整 形	298 × 163 × 27	縄中後半・後初	4	
47	不 整 形	120 × 104 × 93	縄中後半	20	1
48	不 整 形	92 × 50 × 20	縄中後半	6	
49	不 整 形	565 × 458 × 20	縄中後半	20	
50	不 整 形	373 × 169 × 25	縄中後半	3	
51	隅 丸 方 形	182 × 157 × 46	縄中後半	5	
52	楕 円 形	130 × 74 × 18	縄中後半	6	1
53	隅 丸 方 形	96 × 85 × 97	縄中後半	14	1
54	不 整 形	188 × 161 × 78			
55	隅 丸 方 形	221 × 189 × 43	縄中後半	4	
56	不 整 形	153 × 134 × 34	縄中後半	4	
57	不 整 形	228 × 207 × 34	縄後初頭	4	1
58	不 整 形	246 × 247 × 38	縄中後半	3	
59	楕 円 形	127 × 94 × 31	縄前未・中後	2	
60	不 整 形	327 × 250 × 46	縄中後半	6	
61	円 形	108 × 100 × 78			
62	隅 丸 方 形	117 × 83 × 73			
63	円 形	127 × 108 × 73	縄中後半	3	
64	隅 丸 方 形	151 × 116 × 81			
65	円 形	141 × 161 × 43			
66	円 形	98 × 96 × 84	縄前未	2	
67	円 形	132 × 112 × 40			
68	楕 円 形	91 × 77 × 86	縄中中頃	1	

No.	形	規模 (長径×短径×深さ)	時 期	遺 物	
				土器片	石 器
69	精 円 形	175 × 128 × 47			
70			縄中後半・後前	7	
71	精 円 形	154 × 77 × 37	縄中後半	5	
72	隅 丸 方 形	183 × 153 × 35			
73	不 整 形	340 × 288 × 54	縄中後半	8	
74	不 整 形	237 × 146 × 86	縄中後半	5	
75	円 形	217 × 203 × 73	縄中後半	16	1
76	隅 丸 方 形	162 × 141 × 42	縄後初頭	5	
77	不 整 形	298 × 162 × 33	縄後初頭	7	
78	不 整 形	187 × 123 × 21			
79	隅 丸 方 形	117 × 101 × 50			
80	精 円 形	181 × 141 × 28	縄後	1	
81	不 整 形	197 × 97 × 59		2	
82	不 整 形	272 × 271 × 60			
83	隅 丸 方 形	135 × 95 × 35			
84	隅 丸 方 形	123 × 104 × 23			
85	不 整 形	258 × 199 × 46	縄前後半	2	
86	不 整 形	182 × 132 × 79	縄中中頃・中後半	3	
87	不 整 形	174 × 93 × 102			
88	円 形	90 × 84 × 100			
89	円 形	166 × 140 × 56			
90	不 整 形	113 × 62 × 31			
91	不 整 形	283 × 154 × 92			
92	不 整 形	200 × 159 × 80	縄中中頃	5	
93	隅 丸 方 形	171 × 139 × 35	縄中後半・後初	4	
94	隅 丸 方 形	137 × 105 × 69			
95	不 整 形	126 × 124 × 56			

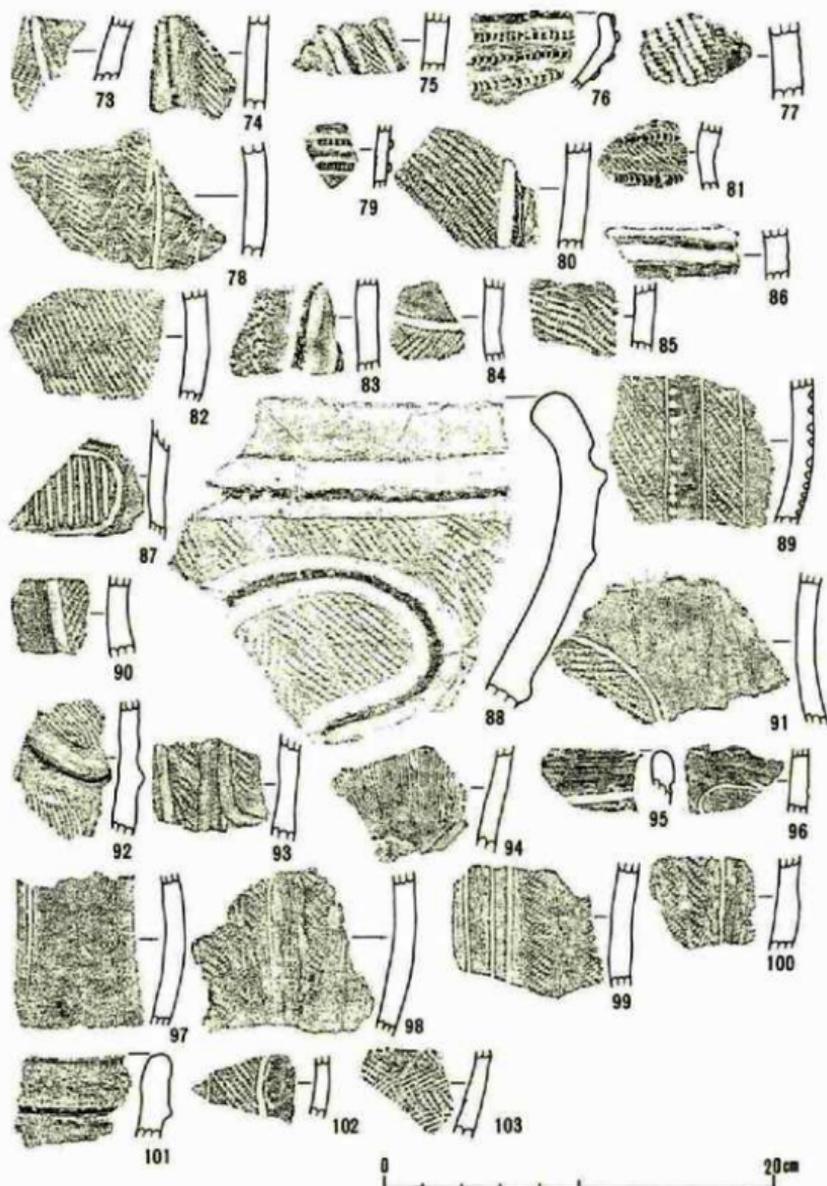


第173图 土壤出土土器(1) 1(1~3)、5(4~5)、6(6)、9(7~12)、10(13)、11(14~19)、14(20~22)、16(23~26)、17(27~40A)号土壤

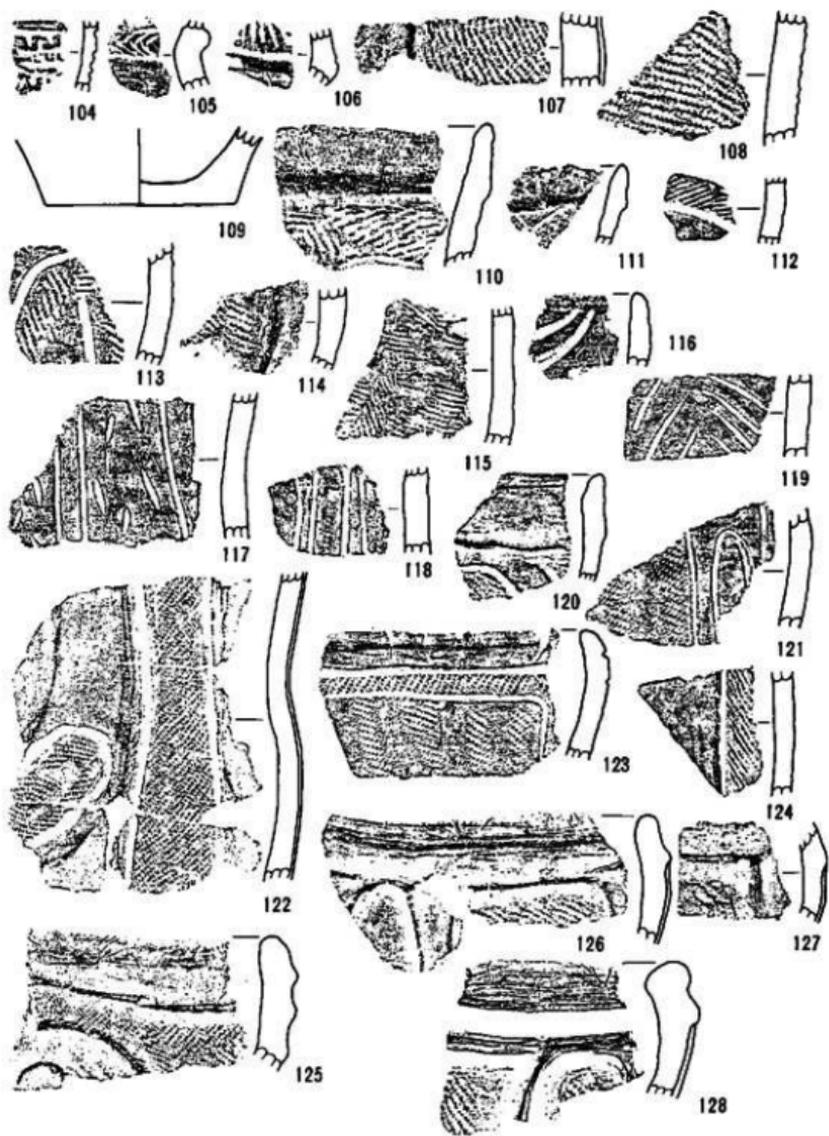


第174图 土壤出土土器(2)

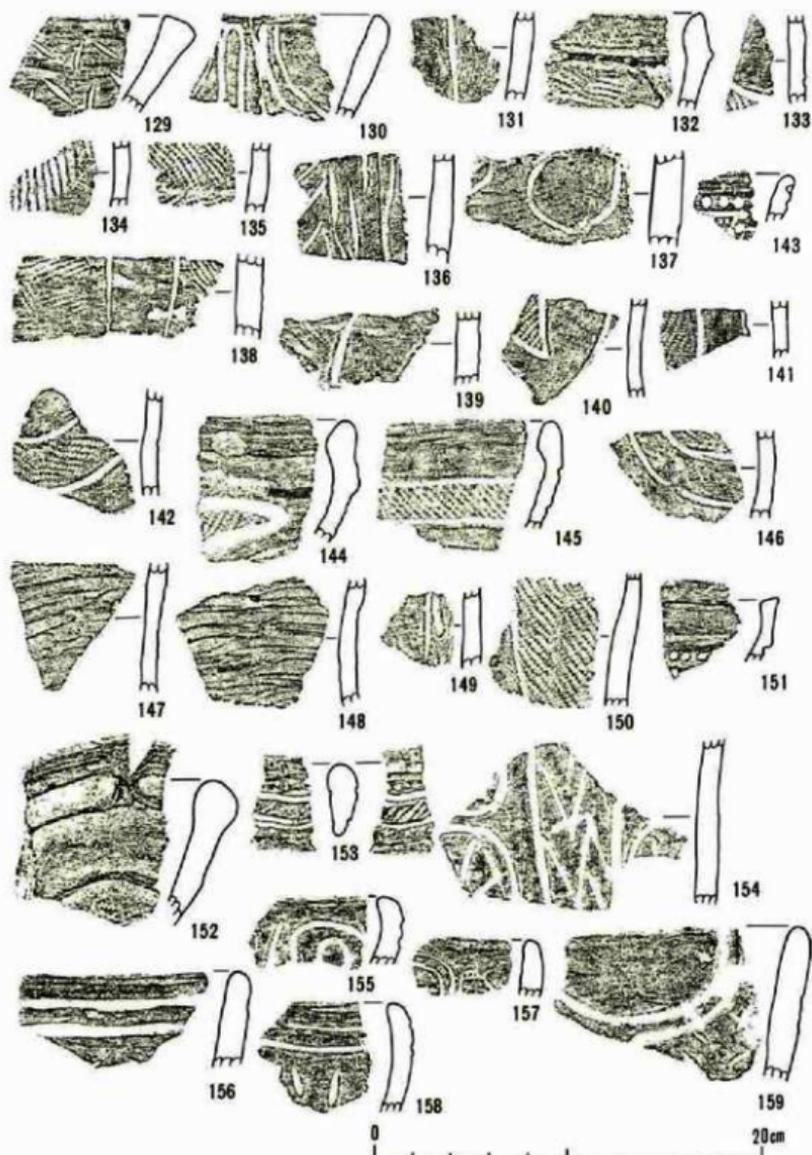
18(40B~43)、19(44~50)、20(51~59)、
21(60~64)、22(65·66)、23(67~72)土壤



第176圖 土壤出土土器(3) 25(73~75)、27(76~78)、28(79、80)、29(81~86)、
30(87~93)、31(94~100)、32(101~103)号土器

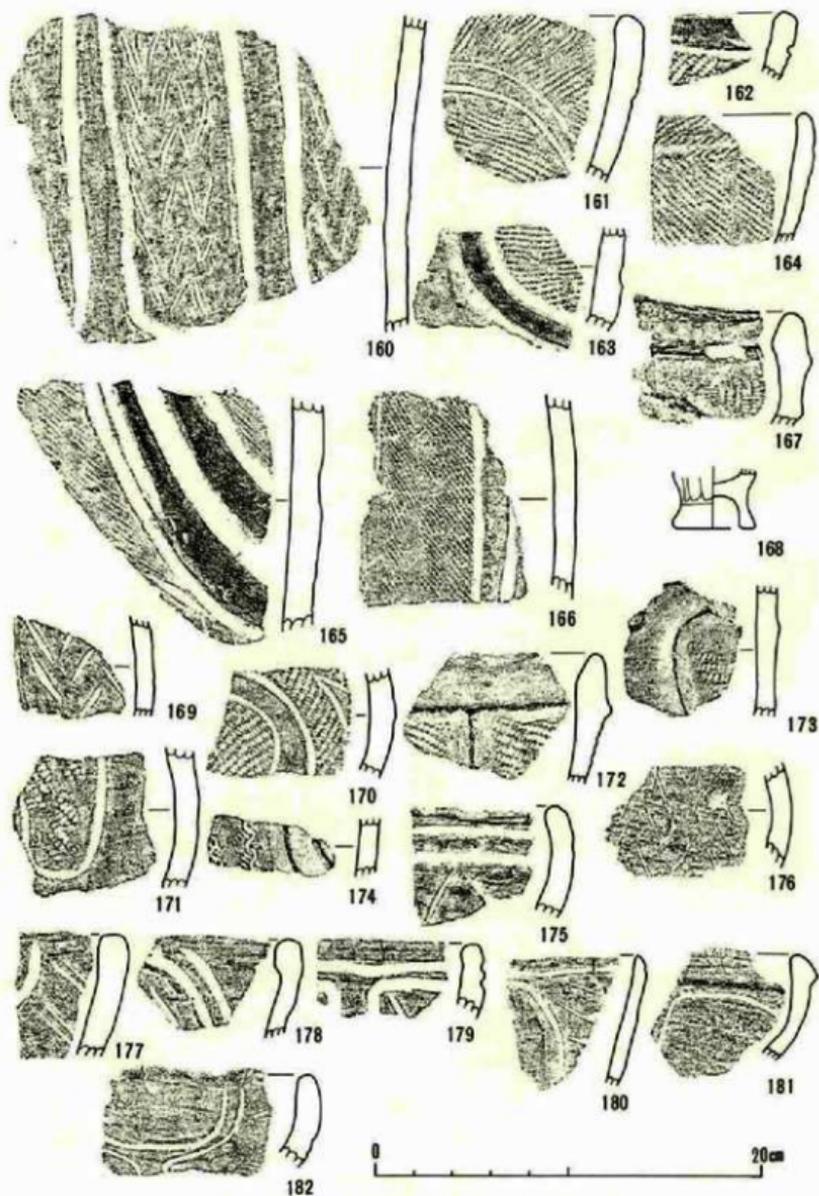


第176图 土壤出土土器(4) 33(104~108)、34(109)、40(110~115)、41(116~128)号土壤

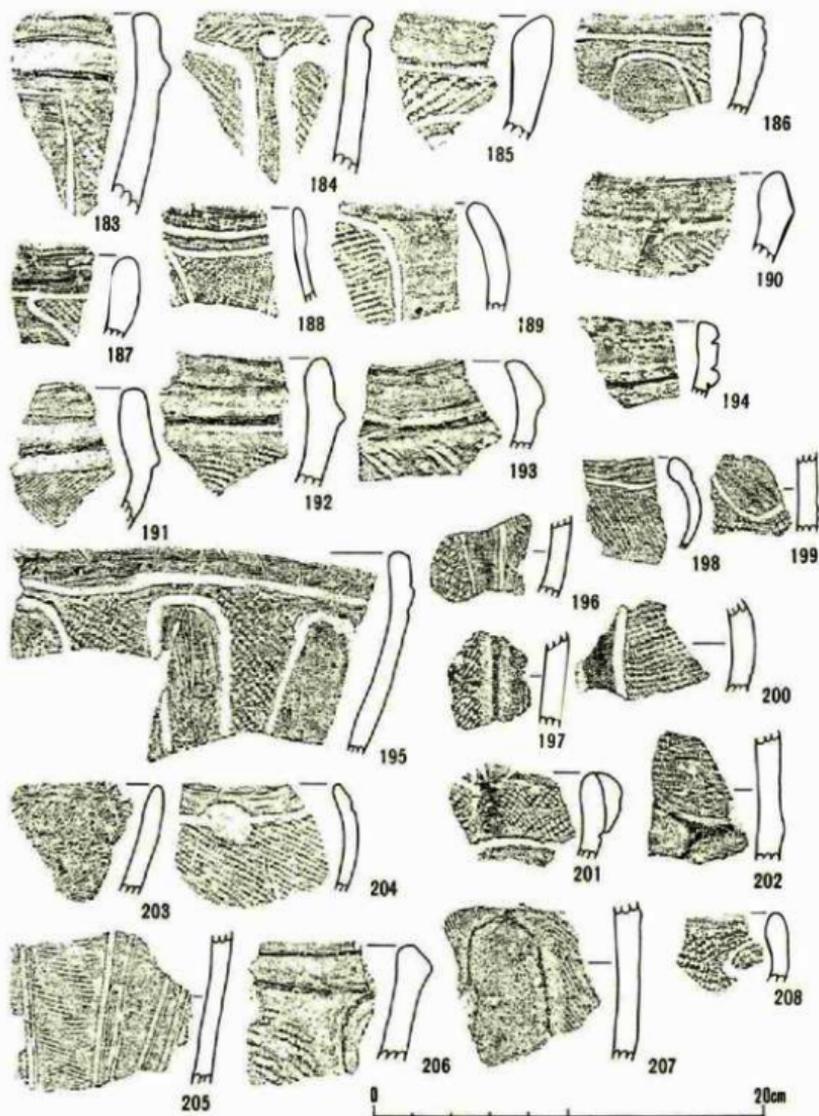


第177图 土壤出土土器(5)

42(129~132)、43(133~135)、44(136~143)、45(144~148)、
46(149~152)、47(153~159)号土壤

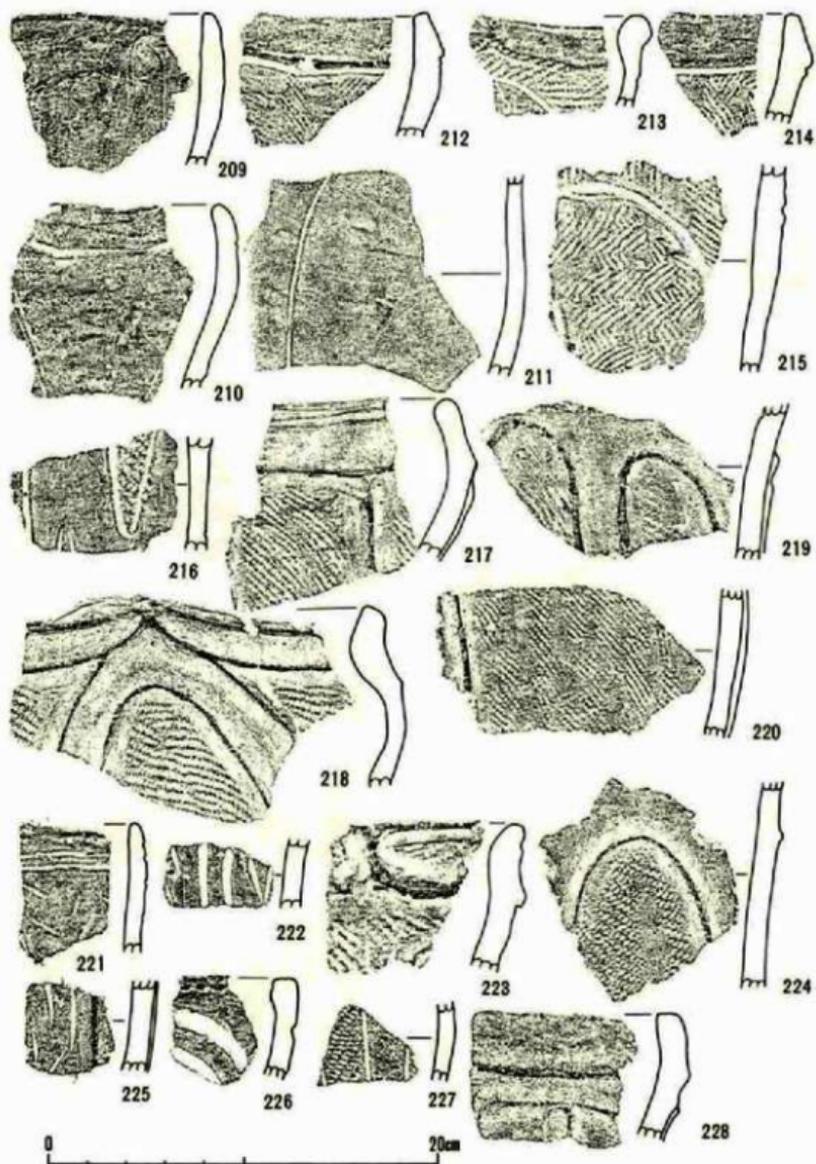


第178图 土壤出土土器(6) 47(160~168)、48(169~174)、49(175~182)号土壤



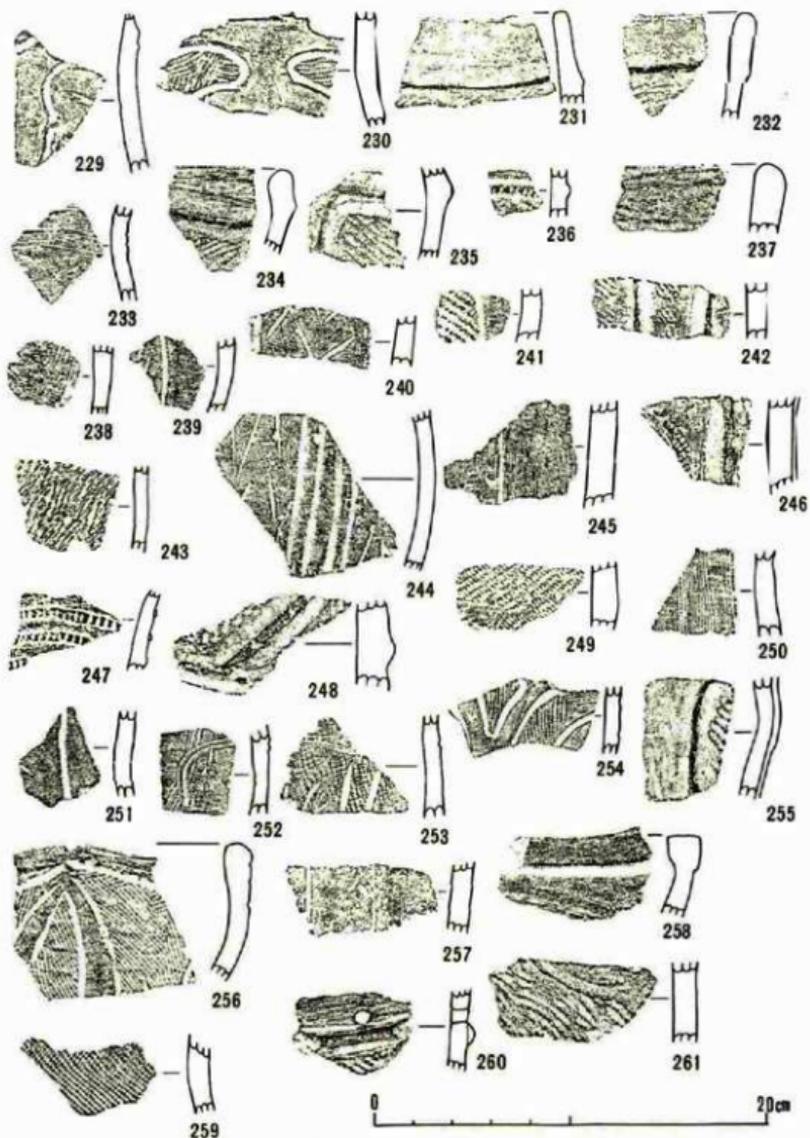
第179圖 土壙出土土器(7)

49(183~194)、50(195~197)、51(198~202)、52(203~208)号土壙



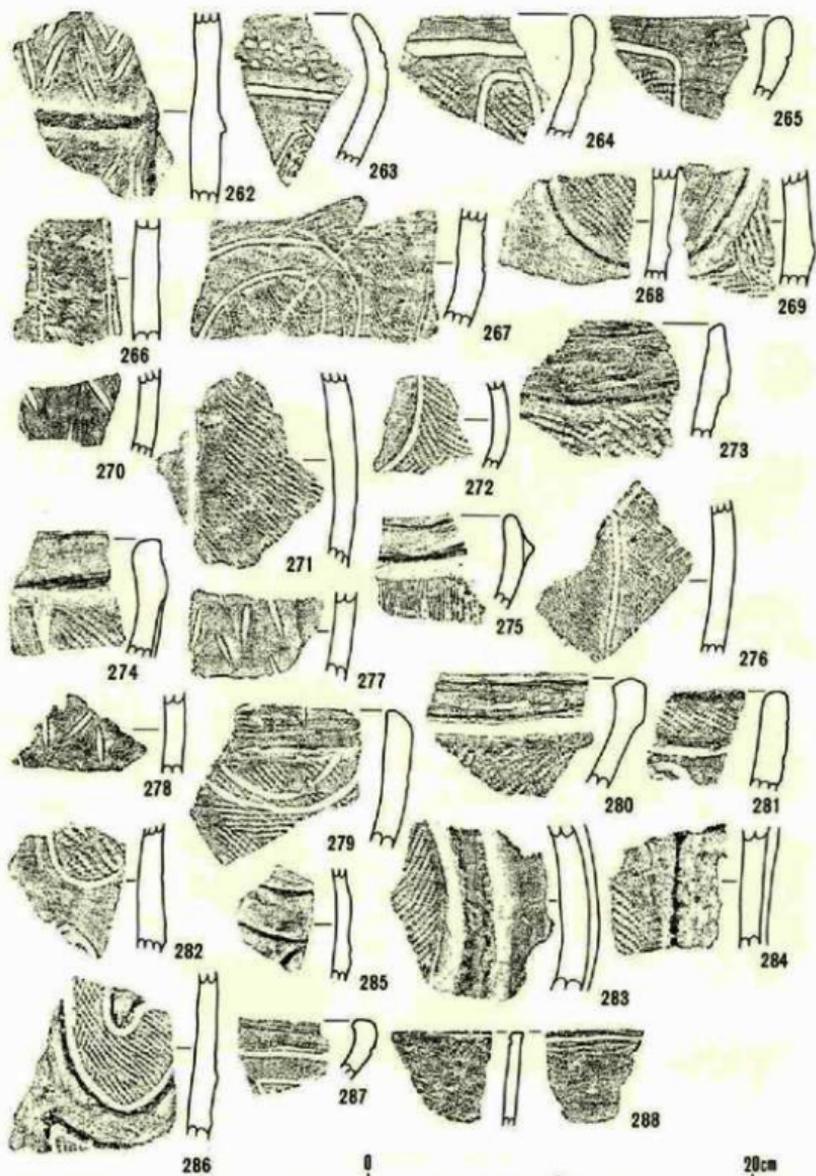
第180图 土壤出土土器(8)

53(209~220)、55(221~224)、56(225~228)号土壤

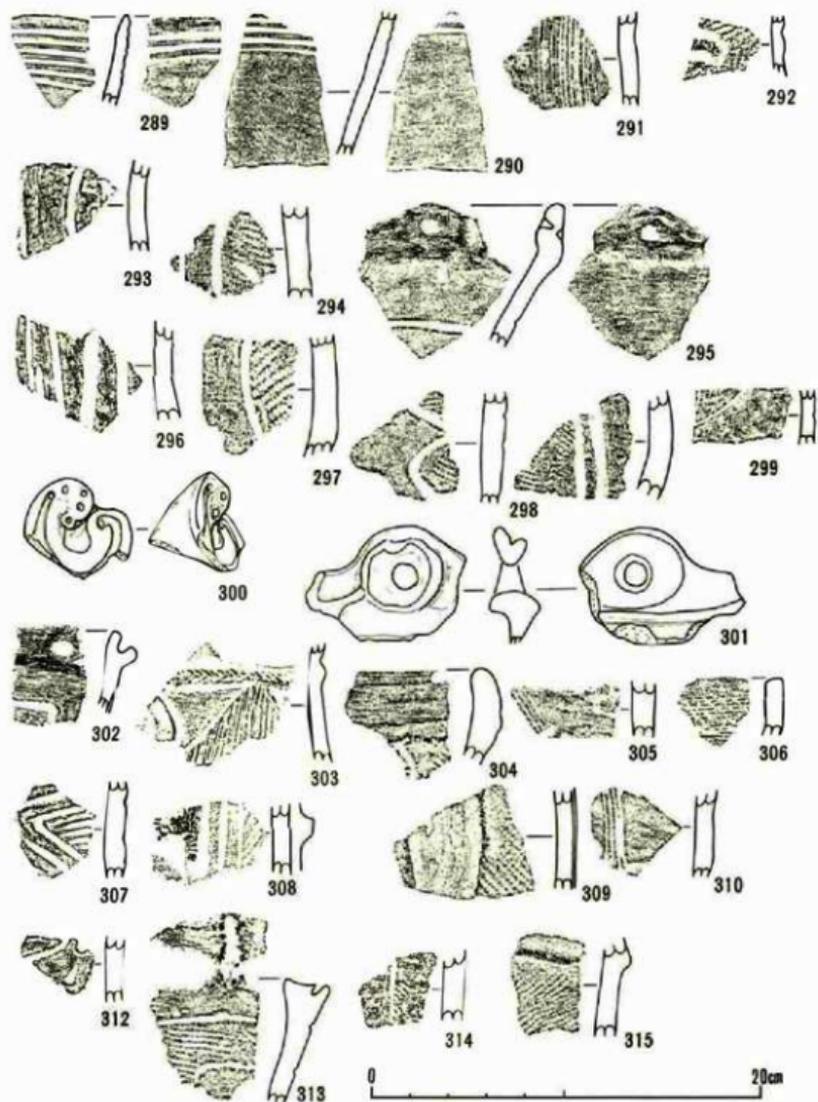


第181图 土壙出土土器(9)

57(229~232)、58(233~235)、59(236~237)、60(238~243)、
63(244~246)、66(247~248)、68(249)、70(250~256)、
71(257~261)号土器

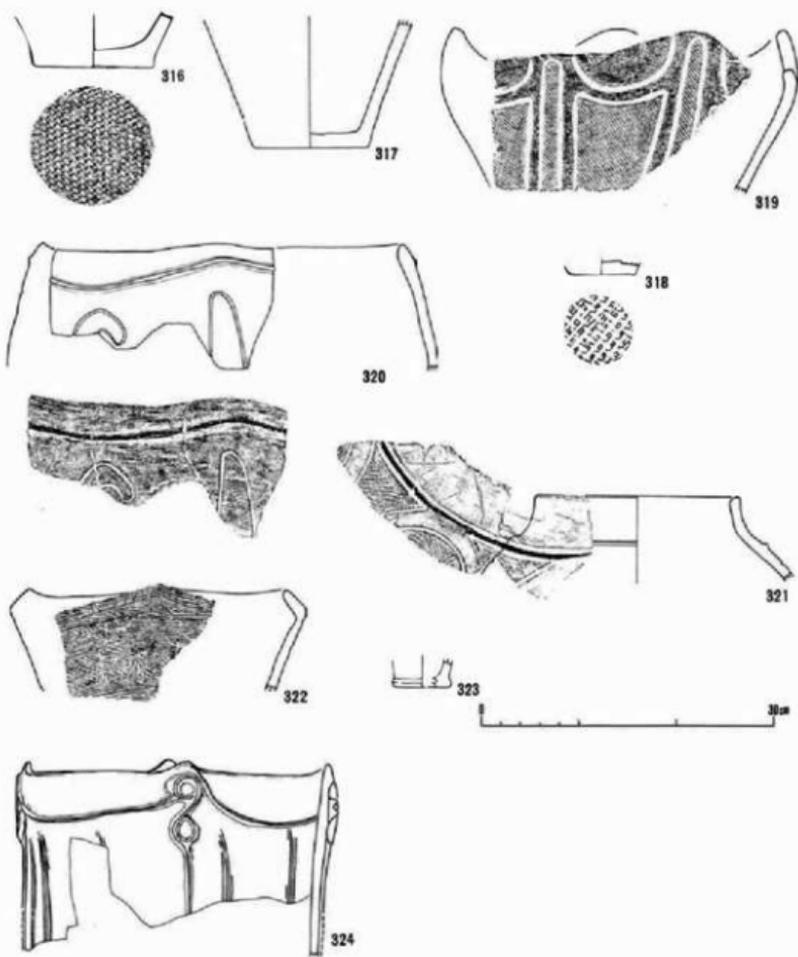


第182图 土墙出土土器 (10) 73(262~269)、74(270~274)、75(275~288)号土器



75(289, 290) 76(291-295) 77(296-302) 80(303)
 86(304-306) 92(307-310) 93(312-315)号土罐

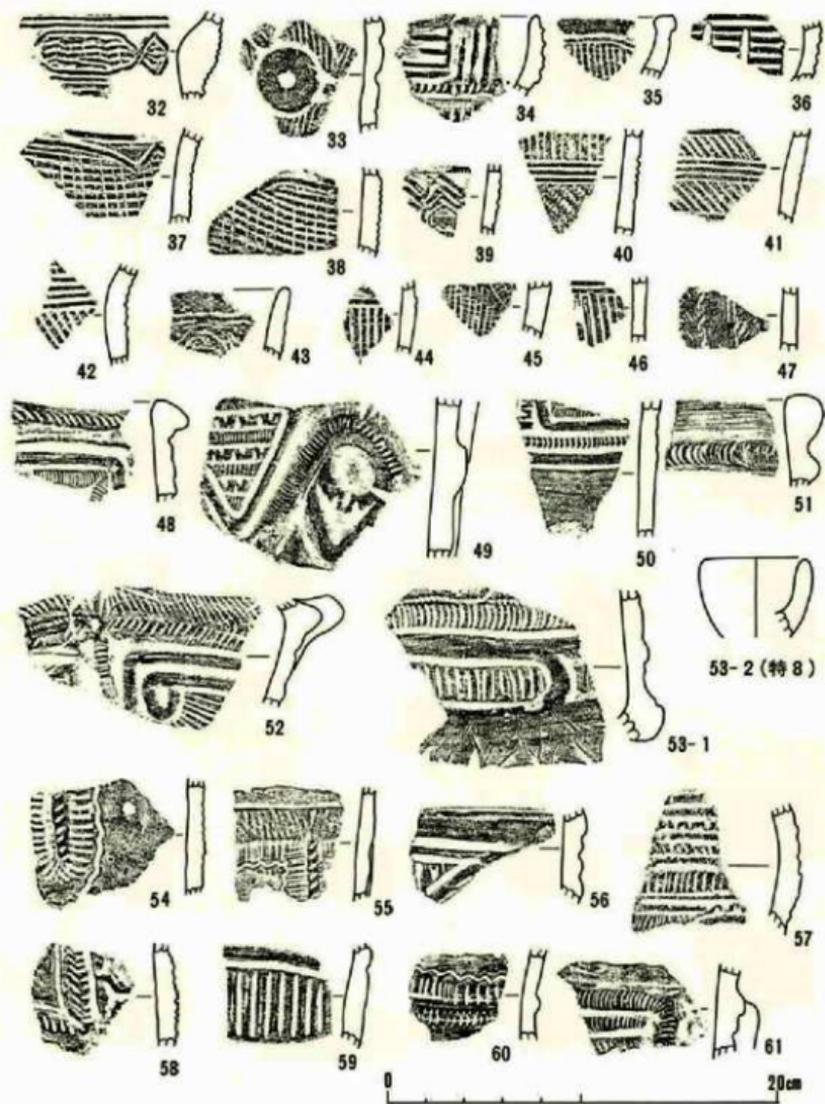
第183图 土壤出土土器(11)



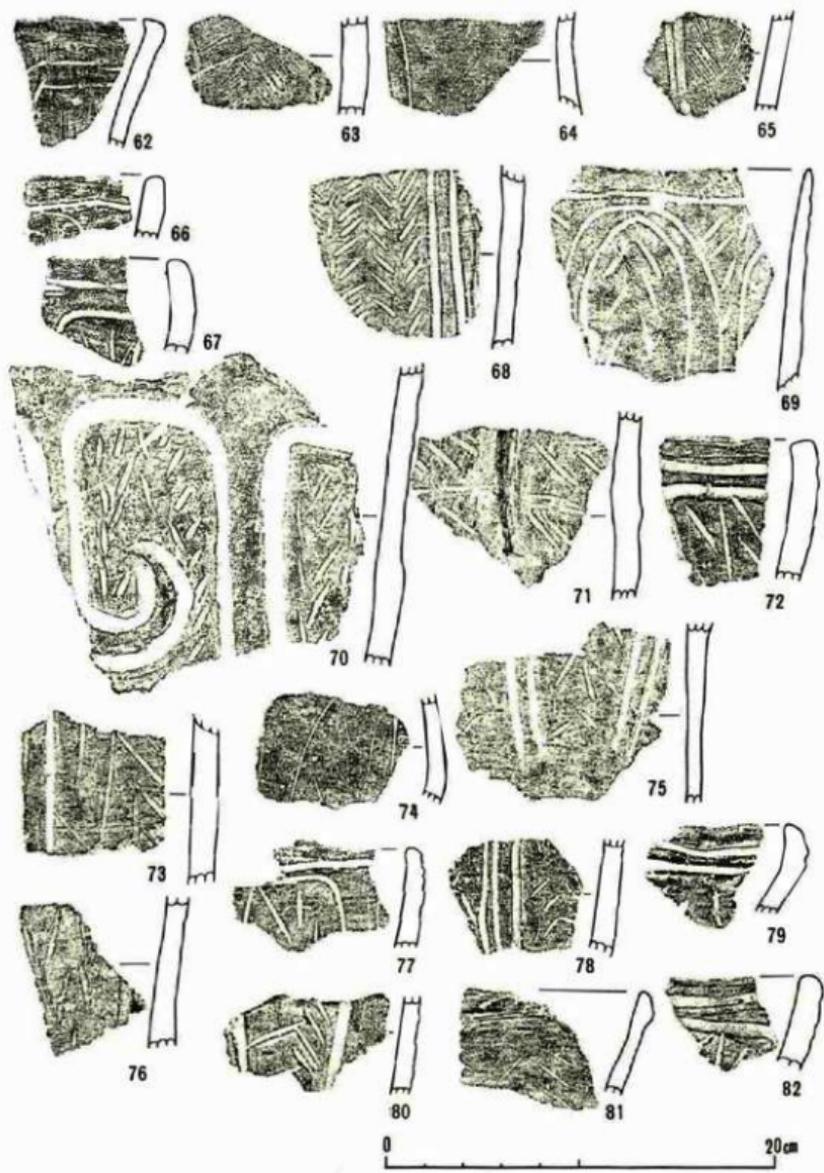
第184図 土壙出土土器 (12) 47(316~319)、53(320)、85(322・323)土壙
特13(324)



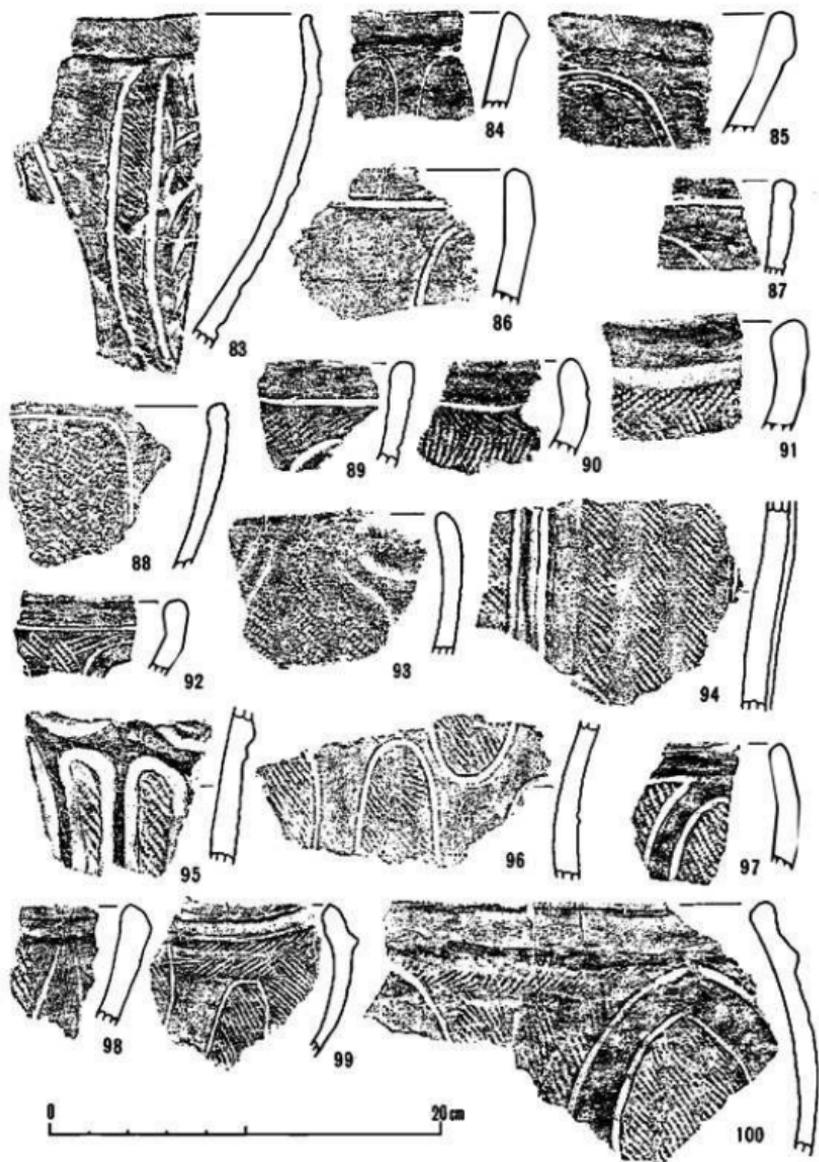
第185図 グリッド等出土土器1 (縄文早前期)



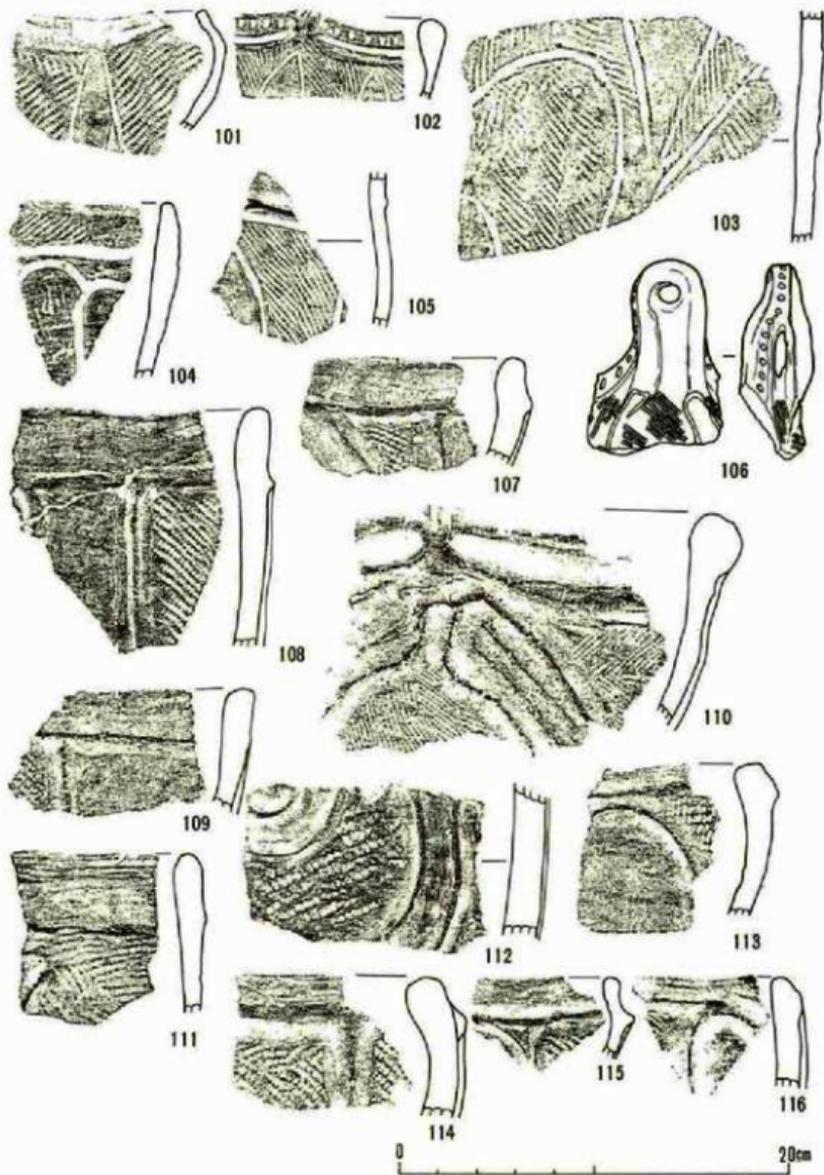
第186図 グリッド等出土土器2 (縄文中期1)



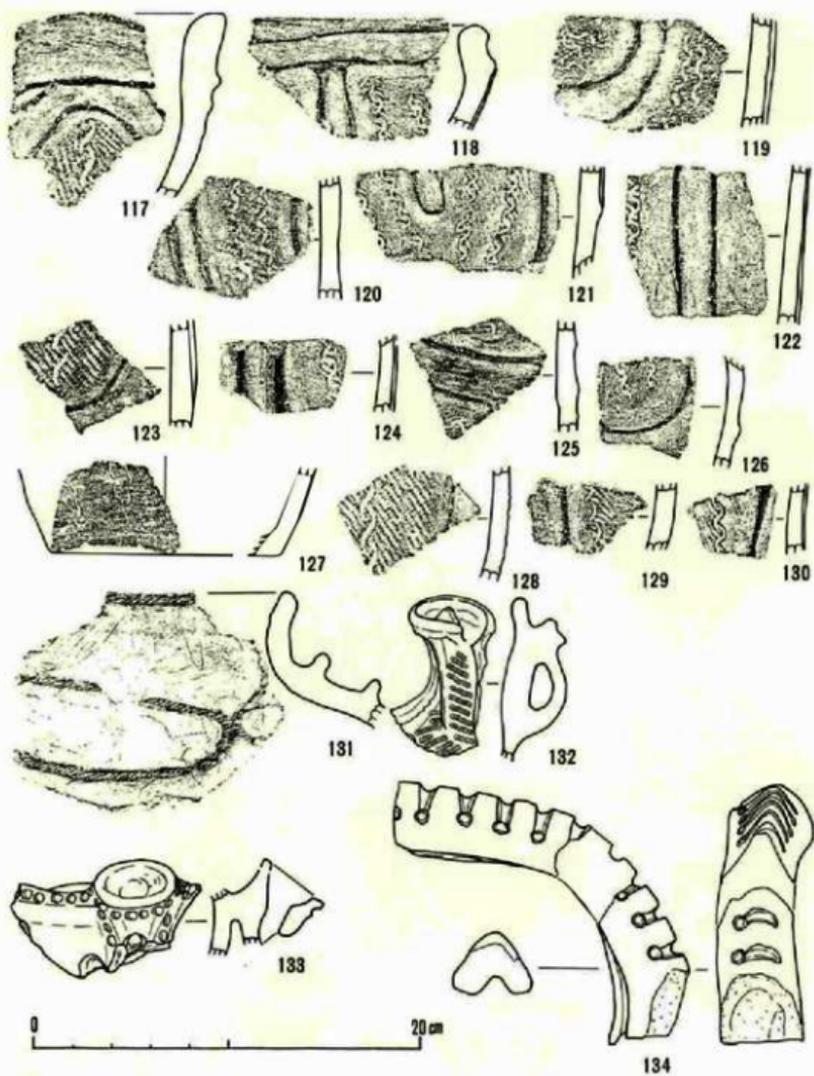
第187図 グリッド等出土土器3 (縄文中期2)



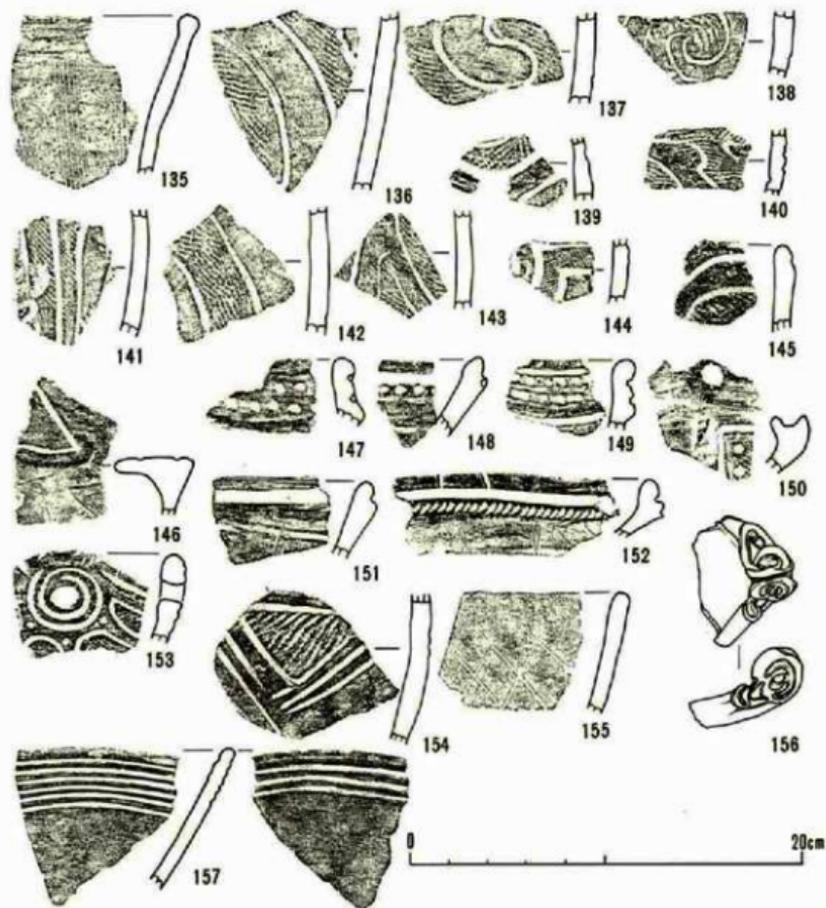
第188図 グリッド等出土土器4 (縄文中期3)



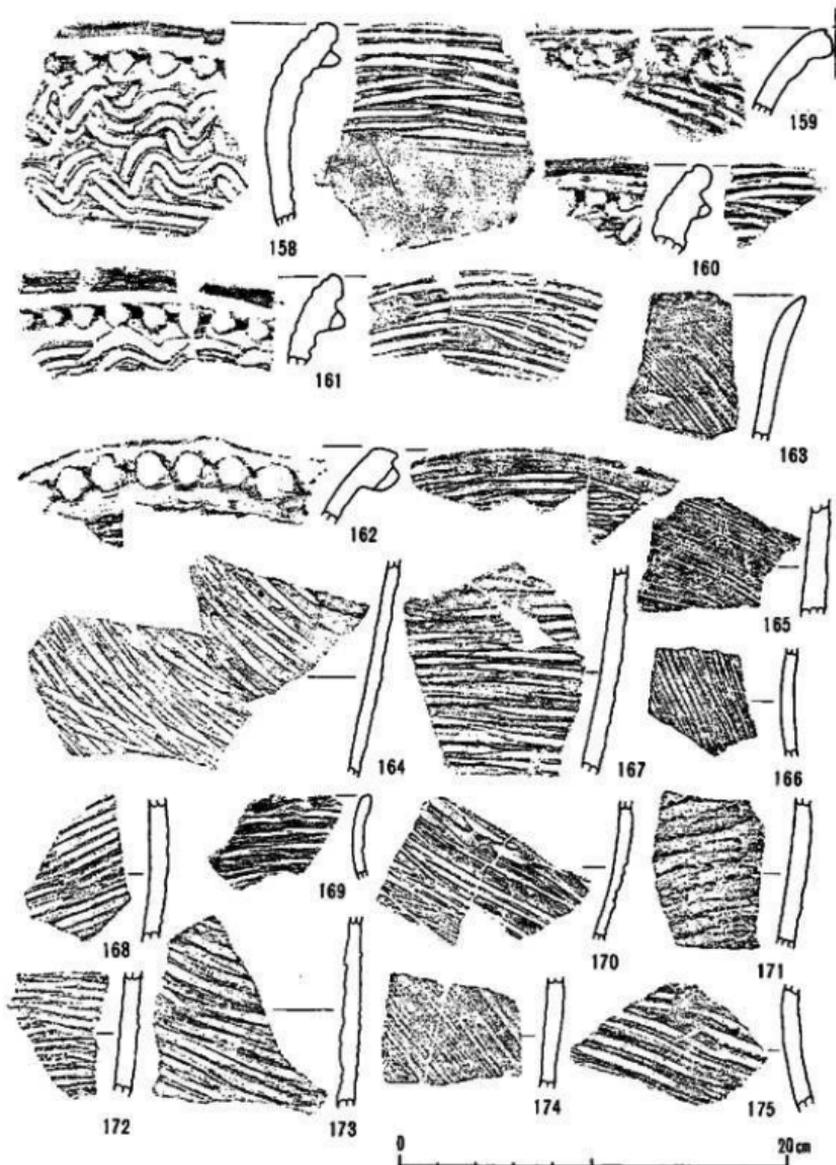
第189図 グリッド等出土土器5 (縄文中期4)



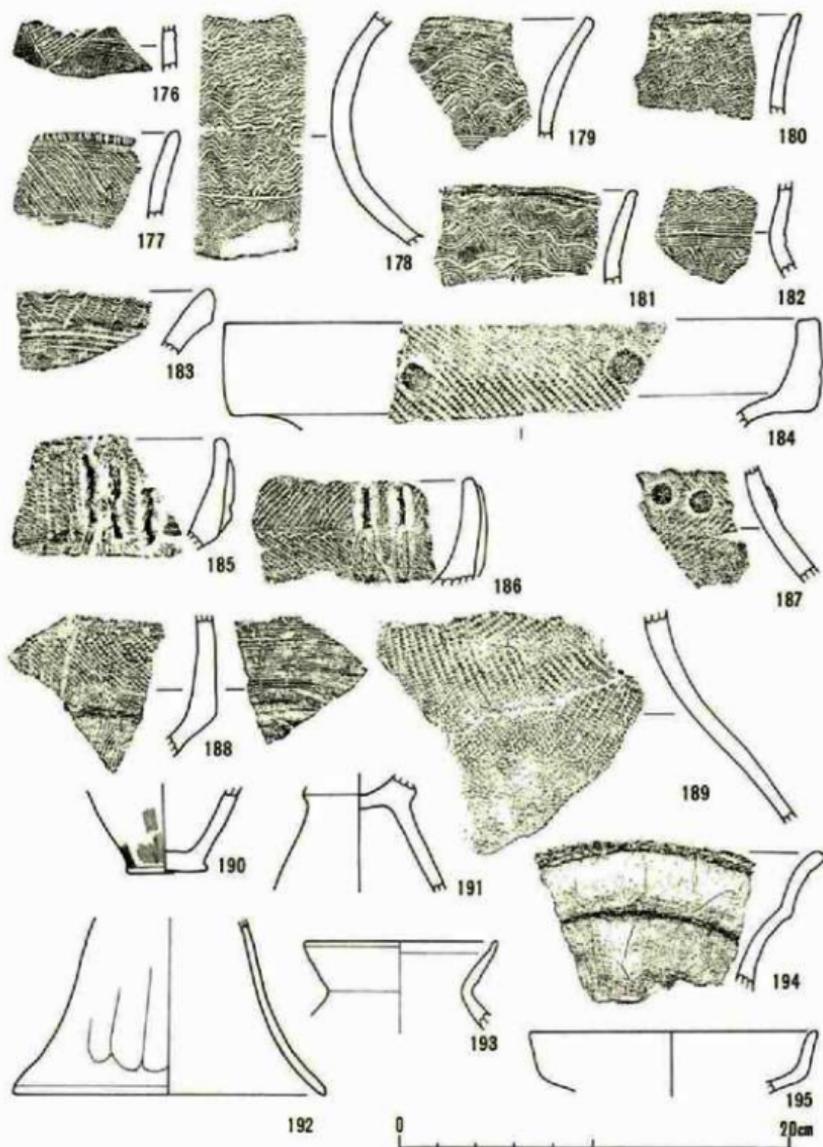
第190 図 グリッド等出土土器 6 (縄文中期 5)



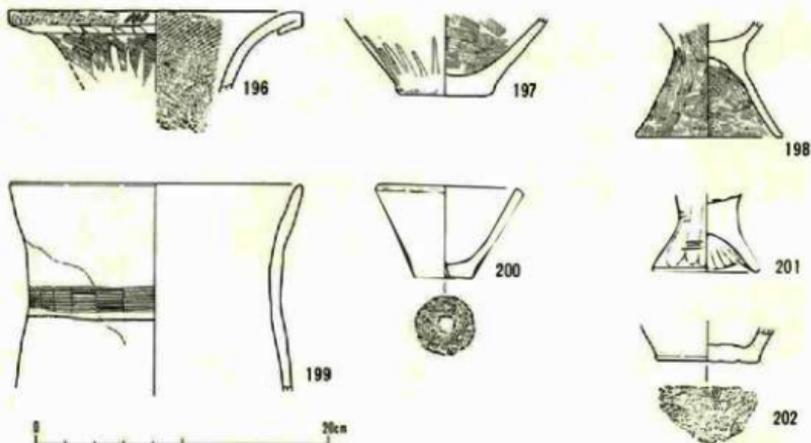
第191図 グリッド等出土土器7（縄文中期6～後期）



第192図 グリッド等出土土器8 (弥生中期)



第193図 グリッド等出土土器9 (弥生後期～土師)



第194図 グリッド等出土土器10

投げ込まれていた。

47号土壌

直径1 m、深さ95cmの土壌で、土壌覆土中に縄文中期の土器片が堆積している。

53号土壌

直径80cm、深さ95cmの土壌で、底面より石棒完形品、石皿破片等が出土した。祭祀的な遺構であろうか。

54号土壌

縄文中期終末の土器が土壌覆土にレンズ状堆積をしている。下層も若干土器は含まれるが、中層部に最も多いことから、埋設途中で土器が投げこまれたものであろう。

67号土壌

直径1.3 mの皿状土壌で、深さ40cm程である。縄文中期の土器片が南縁から中央にかけてレンズ状に堆積している。

74号土壌

特異な形をした土壌で、一辺80cmの方形土壌の北・南・西方向に方形突出部をもっている。全体の規模は南北2.3 m、東西1.5 mである。

85号土壌

不整形な土壌で、中央に板状の石と縄文土器片がある。

88号土壌

口径95cm、底径1.1 mのフラスコ状土壌で、底面は傾斜している。

89号土壌

28号住居に接して検出された土壌で、土はレンズ状の堆積をしている。土壌は直径1.6 m、

第8表 グリッド等出土土器出土位置一覧表

図面 番号	No	出土遺構	図面 番号	No	出土遺構	図面 番号	No	出土遺構	図面 番号	No	出土遺構	
185 グリッド 出土土器 (縄文早 前期)	1	29 住	(縄文中 期1)	34	12 溝		67	330+10W-1	189 グリッド 出土土器 (縄文中 期4)	100	54 土壌	
	2	14 溝		35	328+84E-5		68	12 溝E-6		101	54 土壌	
	3	330+36E-4		36	12 溝		69	表採		102	54 土壌	
	4	329+84E-6		37	12 溝		70	47 土壌		103	53 土壌	
	5	表採		38	12 溝		71	49 土壌		104	3 周溝	
	6	329+4E-6		39	特10		72	12 溝		105	54 土壌	
	7	329+68E-4		40	8 溝		73	53 土壌		106	表採	
	8	12 溝W-5		41	330+48E-1		74	329+84E-1		107	12 溝	
	9	329+44W-2		42	330+48E-4		75	53 土壌		108	特8	
	10	329+86W-3		43	表採		76	グリッド		109	330W溝	
	11	329+32E-370		44	330+48E-3		77	329+84E-1		110	330+8E-2	
	12	表採		45	12 溝		78	330+28W-1		111	特8	
	13	329+86W-3		46	12 溝		79			112	特8	
	14	3 方形		47	329+48W-3		80	329+80E-4		113	329+80E-4	
	15	12 溝		48	330+56E-2		81	グリッド		114	15 溝	
	16	329+80E-470		49	330+60E-2		82	329+80E-4		115	8 溝	
	17	表採		50	330+60E-3		188	83		330+16W-1	116	329+84E-6
	18	12 溝W4		51	329+00W-3		グリッド 出土土器 (縄文中 期3)	84		330+24W-2	189	330+24W-2
19	329+68E-4	52	330+60E-2	85	3 周溝	グリッド 出土土器 (縄文中 期5)	118	5 周溝				
20	321+68E-6	53	330+60E-1	86	3 周溝	119	12 溝E-6					
21	特8	54	329+00W-3	87	特2	120	49 土壌					
22	330+52	55	330+64E-2	88	表採	121	21 土壌					
23	12 溝	56	329+00W-3	89	12 溝	122	49 土壌					
24	12 溝	57	329+44W-2	90	13 溝	123	329+84E-1					
25	330+80E-1	58	329+96W-2	91	3 周溝	124	49 土壌					
26	12 溝	59	329+48W-3	92	63 土壌	125	グリッド					
27	330+60E-1	60	8 溝	93	表採	126	329+76					
28	329+60 クロ	61	1 隼石	94	329+92E-2	127	12 溝					
29	329+40W-3	187	62	12 溝W-5	95	グリッド	128	48 土壌				
30	329+48E-1	グリッド 出土土器 (縄文中 期2)	63	表採	96	23 住B	129	49 土壌				
31	表採	64	〃	97	329+68E	130	49 土壌					
186	32	3 溝	65	12 溝W-2	98	3 周溝	131	329+64W-3				
グリッド 出土土器	33	336+46E-2	66	12 溝	99	329+80E-4	132	53 土壌				

図面 番号	No	出土遺構	図面 番号	No	出土遺構	図面 番号	No	出土遺構	図面 番号	No	出土遺構
191 グリッド 出土土器 (縄文中 ~後期)	133	47 土壌	192 グリッド 出土土器 (弥生中 期)	150	329+40 E-6	193 グリッド 出土土器 (弥生後 ~土師)	168	330+80E	194	185	329+60 E-5
	134	330+24W-2		151	特8		169	330+60E-2		186	329+56E-370
	135	表採		152	特8		170	330+80		187	329+48 E-4
	136	12 溝		153	15 溝		171	12 溝		188	表採
	137	12 溝		154	表採		172	表採		189	12 溝
	138	12 溝		155	・		173	330+80E		190	グリッド
	139	329+96W-5		156	329+40W-3		174	特3		191	12 溝
	140	表採		157	329+44W-3		175	330+60E-2		192	12 溝
	141	328+84 E-5		158	グリッド		176	330+20W-4		193	329+96W-2
	142	12 溝		159	330+60 E-2		177	3 周溝		194	グリッド
	143	328+92W-1		160	330+80		178	12 溝W-1		195	329+60
	144	13 溝		161	グリッド		179	10 溝		196	320+8E
	145	表採		162	グリッド		180	12 溝		197	329+44W2
	146	329+40W-3		163	特3		181	10 溝		198	表採
	147	329+80 E-4		164	330+80E		182	330+80		199	370+16W
	148	329+68 E-1		165	表採		183	11 溝		200	329+52W4
	149	329+80		166	12 溝		184	329+56W-20		201	330+80
				167	330+80E					202	表採

深さ50cm、底径80cmの皿状土壌である。

90号土壌

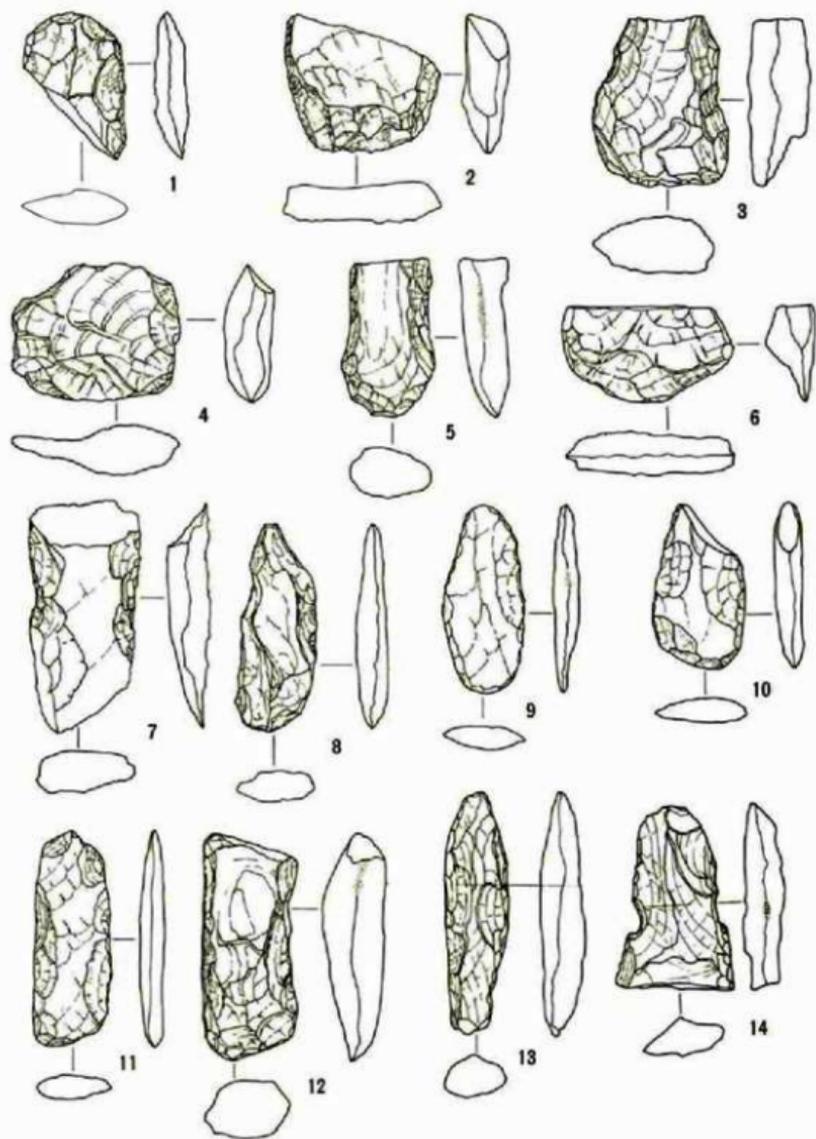
86号土壌と切り合うもので、29号住居の北側に位置する。口径より底径の方が広く、浅いフラスコ状を呈する。

91号土壌

3基の土壌を含めたものである。浅い部分は、一辺1.6mの方形プランであり、最も深い部分は、長径2.5m、短径1.3m、深さ1.4mの長円形土壌である。

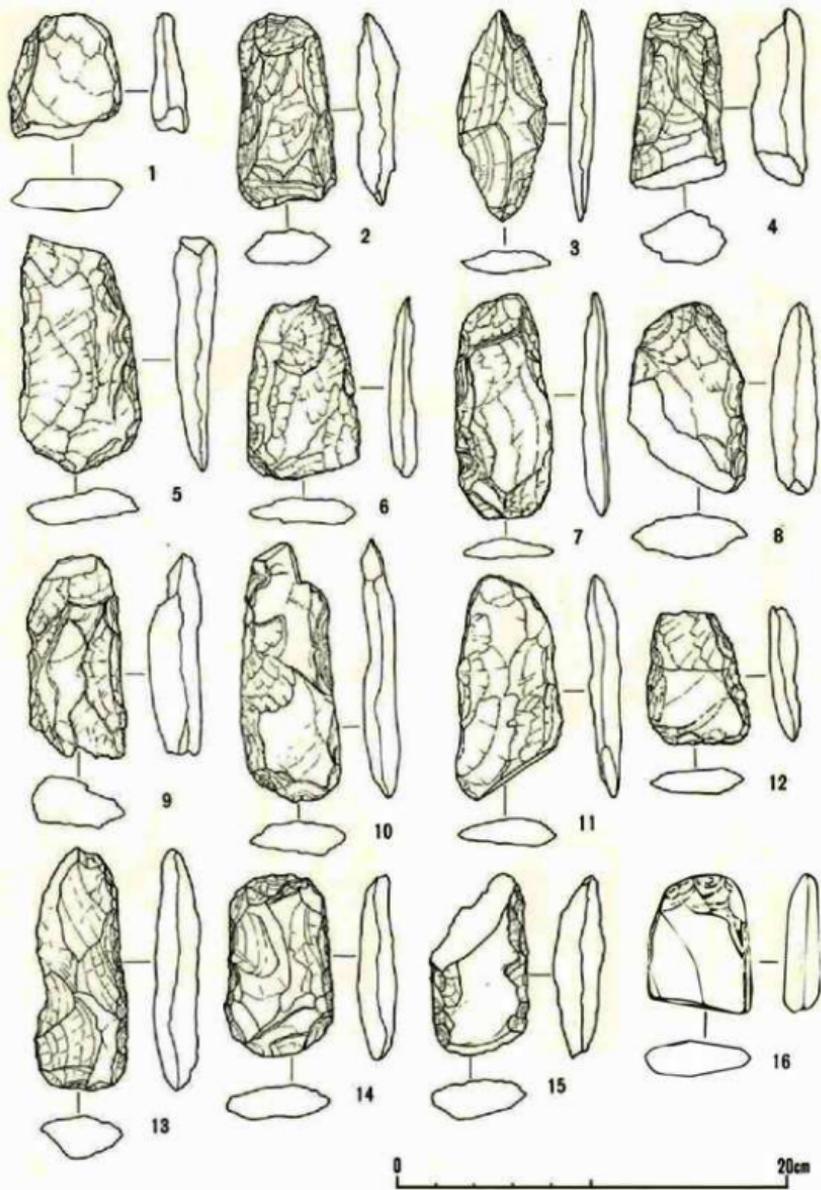
93号土壌

長径2.2m、短径1.75mのクライ状土壌で、中央覆土中に40cm程の礫がある。

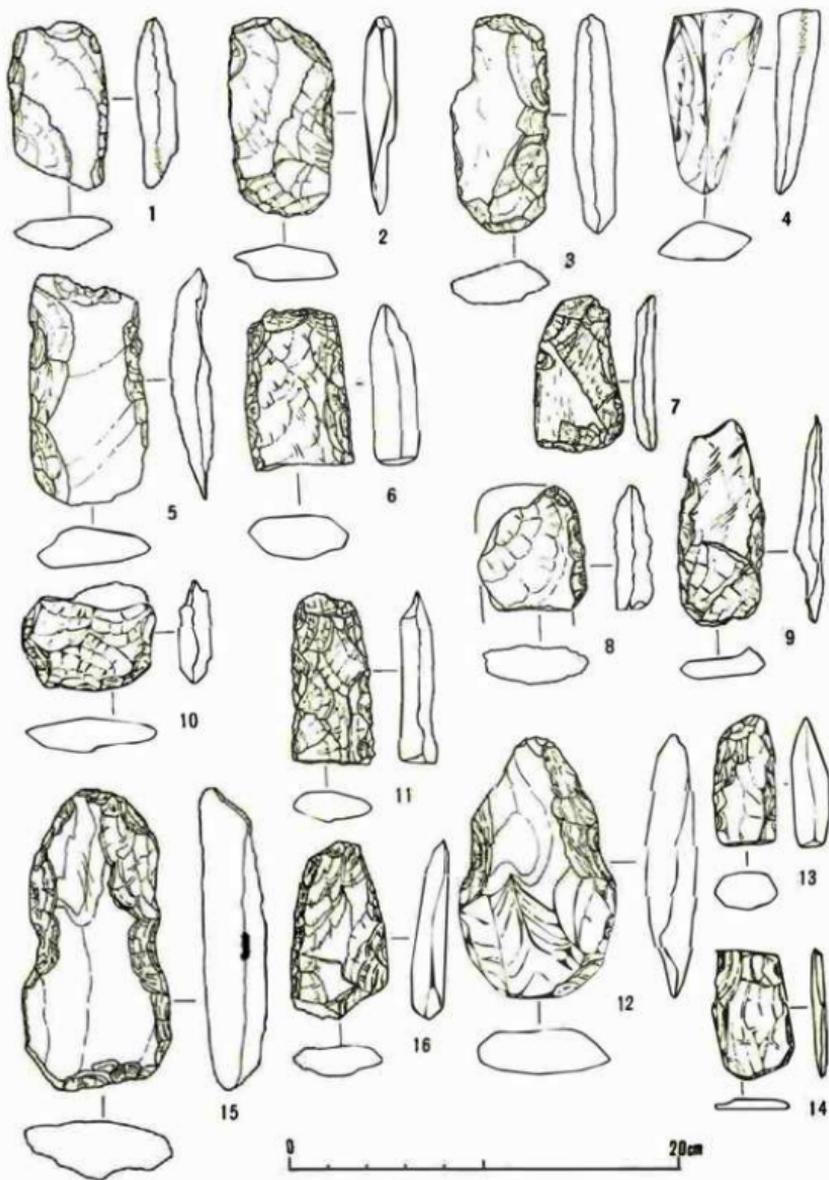


0 20cm

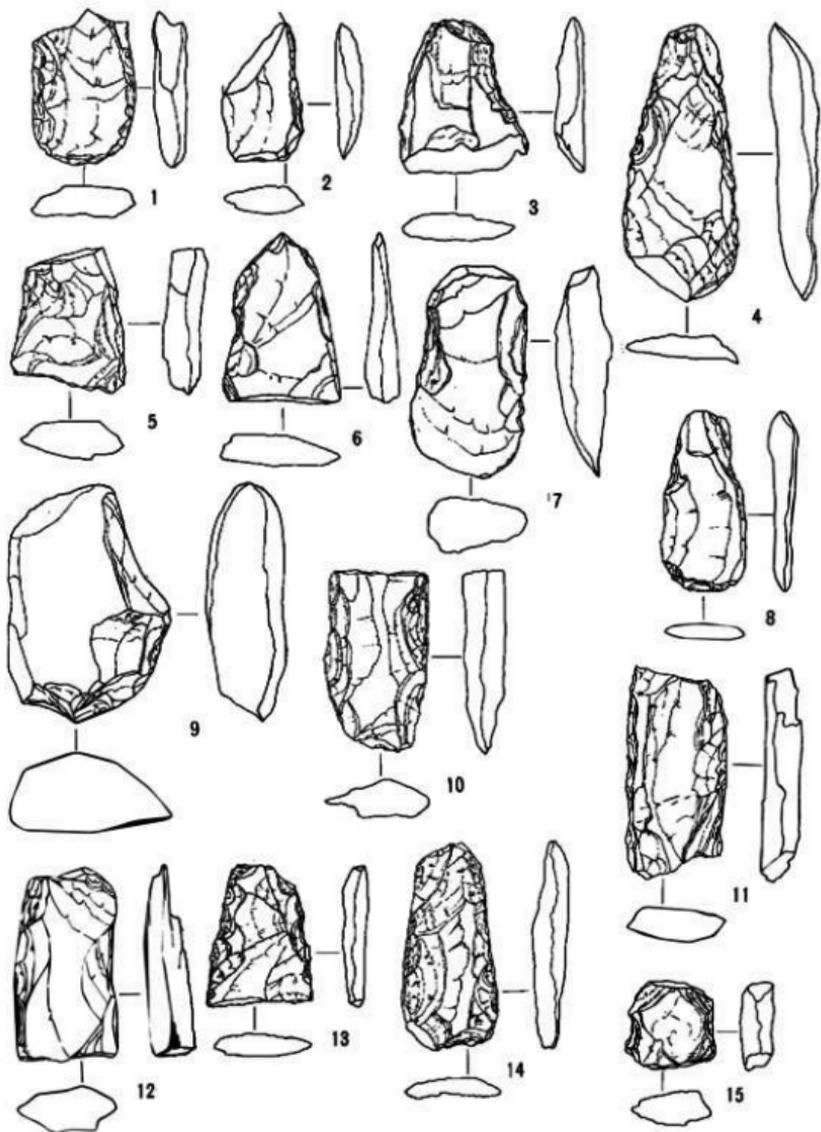
第195圖 住居出土石器(1)



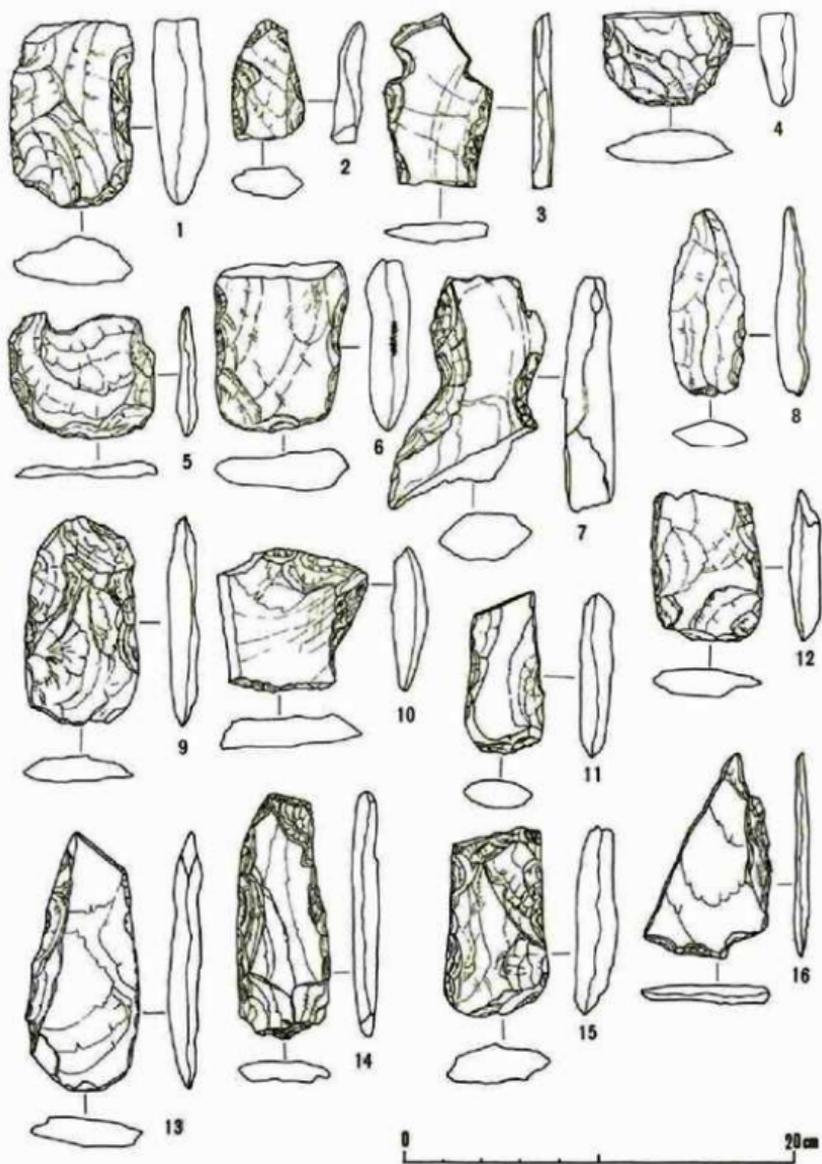
第196图 住居出土石器(2)



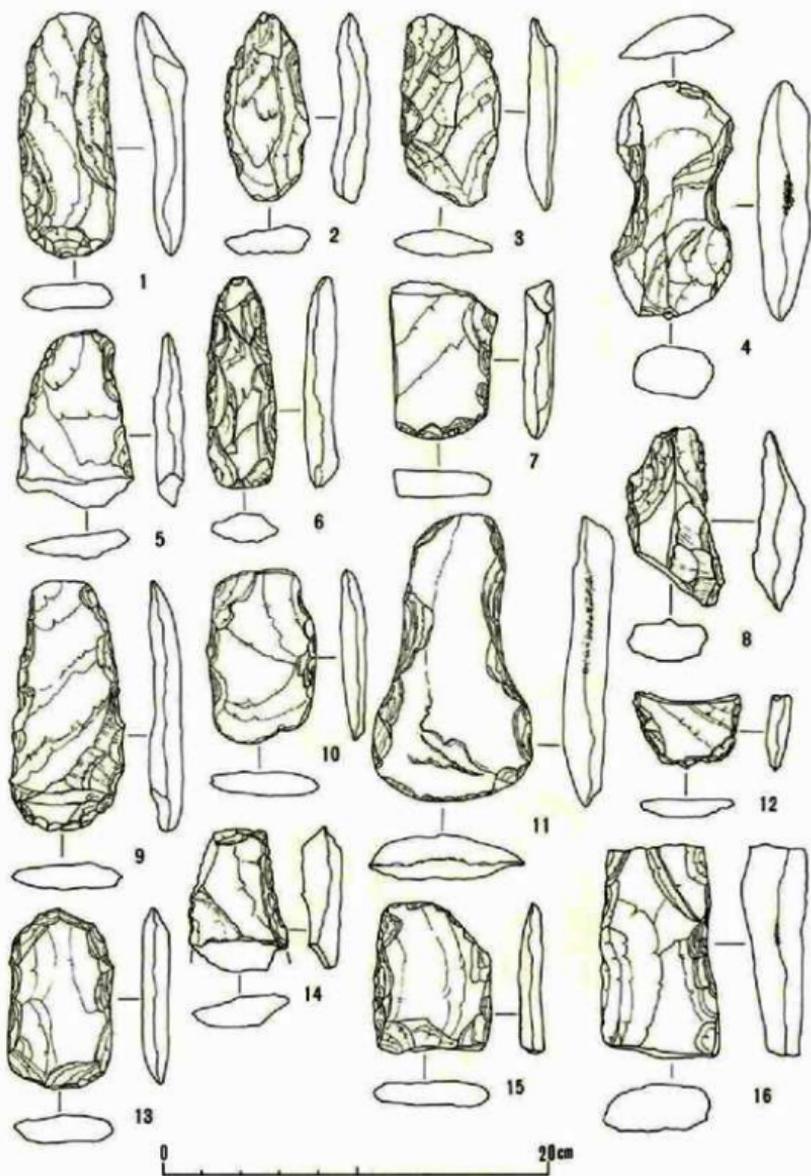
第197圖 住居出土石器（3）



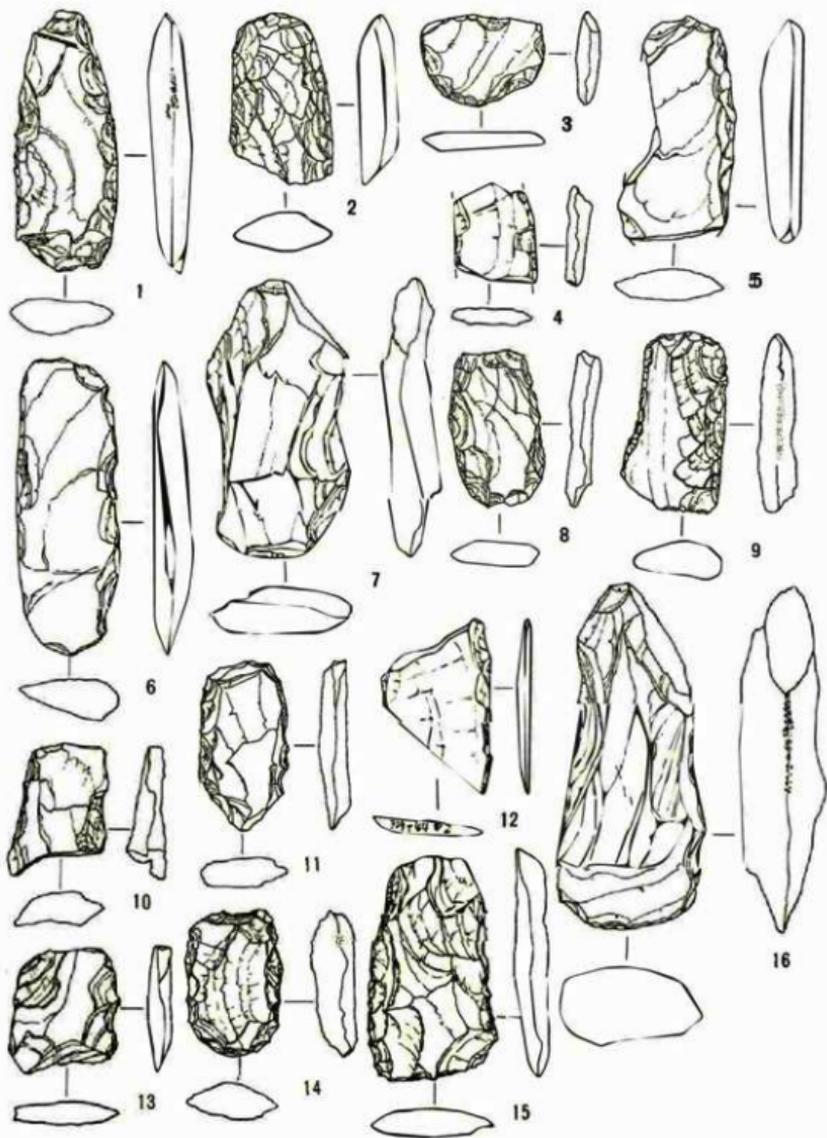
第198図 住居、その他、出土石器(4)



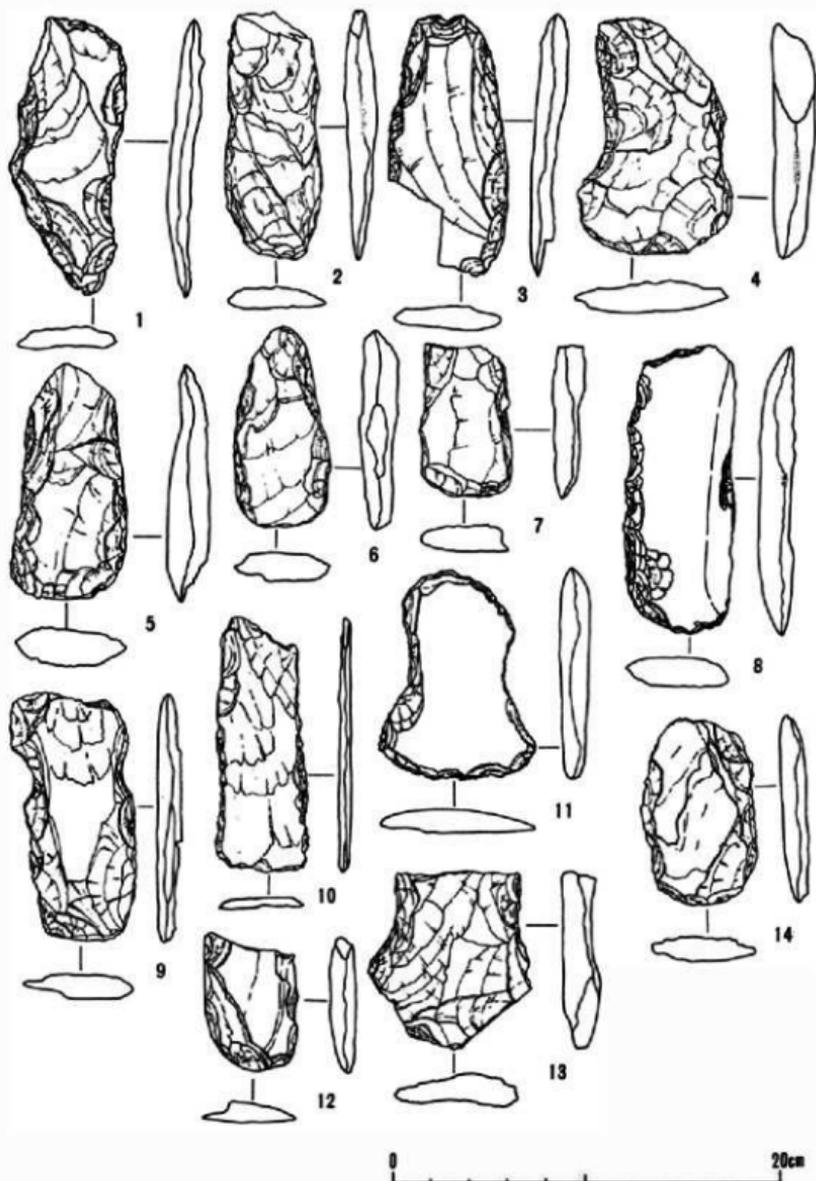
第199図 その他、出土石器（5）



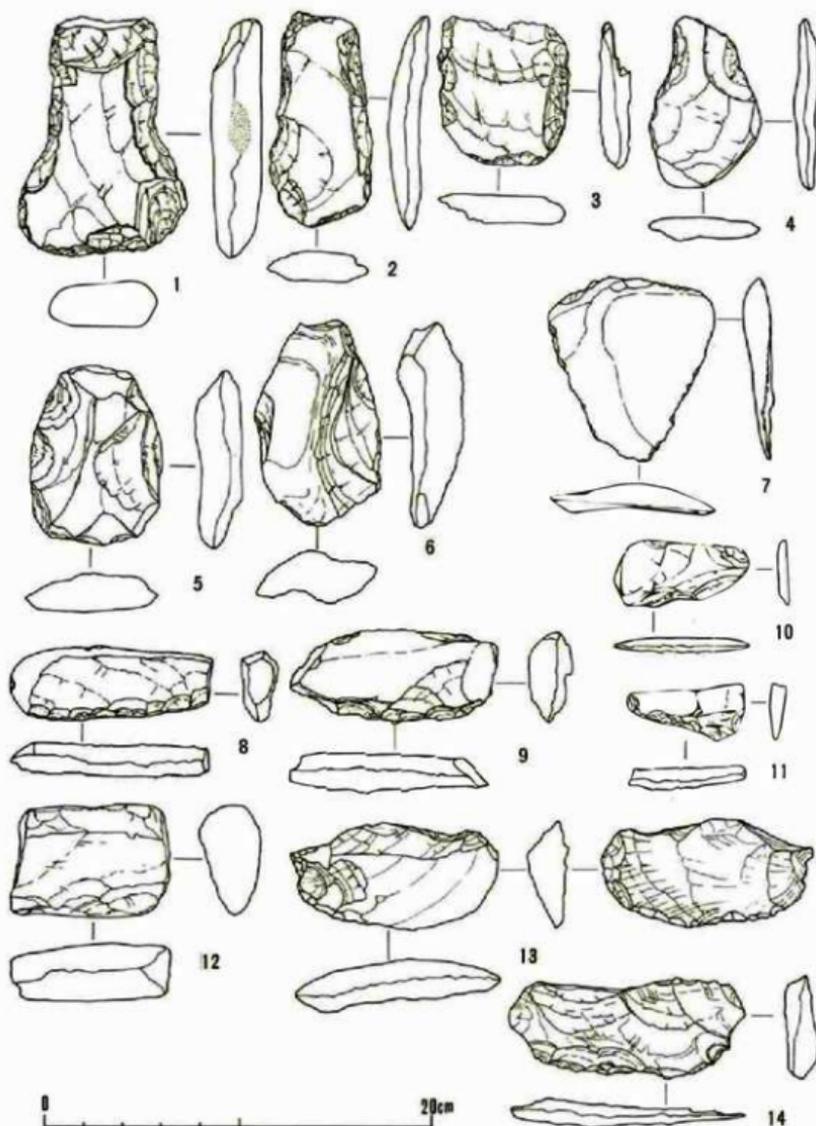
第2008図 その他、出土石器(6)



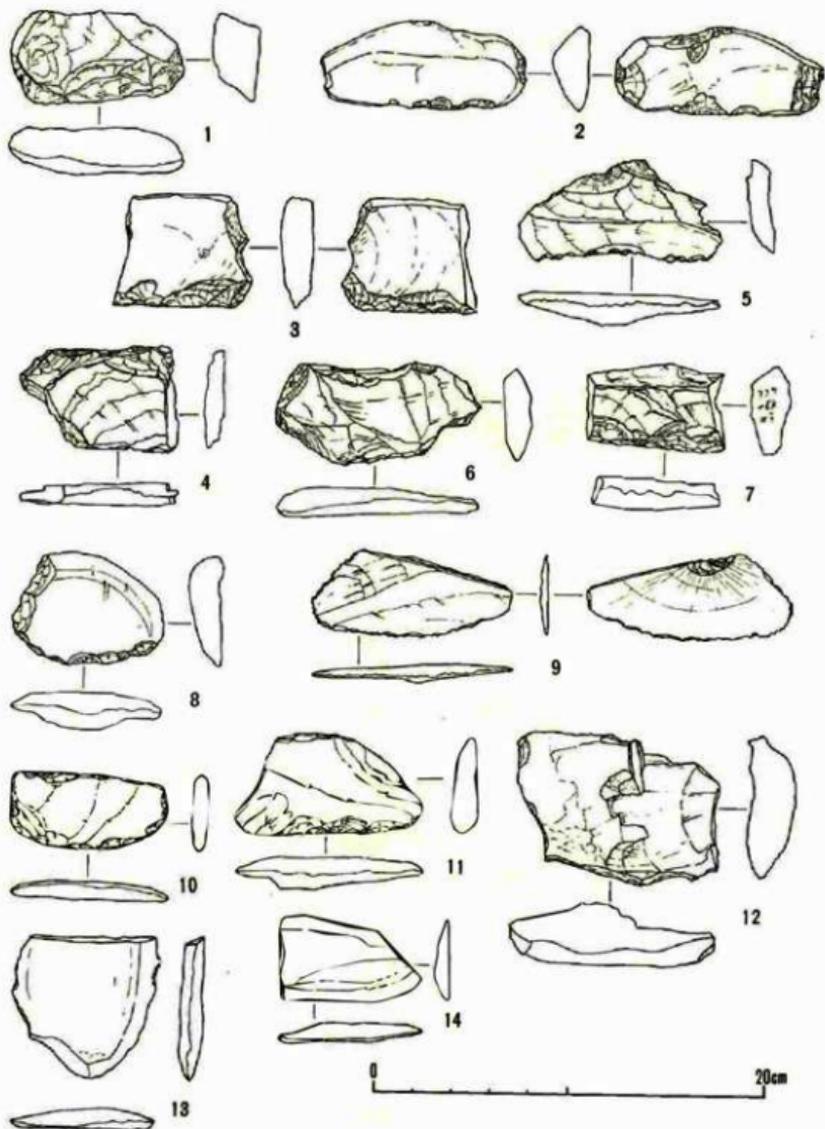
第201図 その他、出土石器（7）



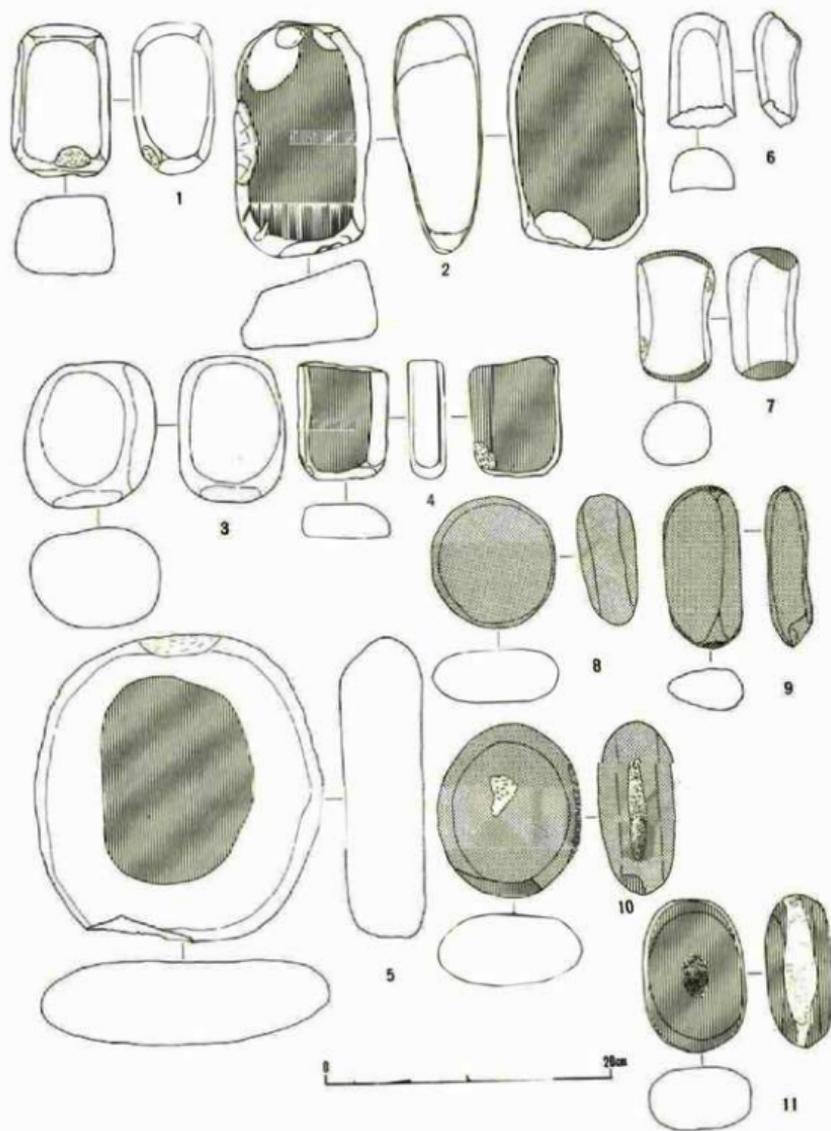
第202図 その他、出土石器(8)



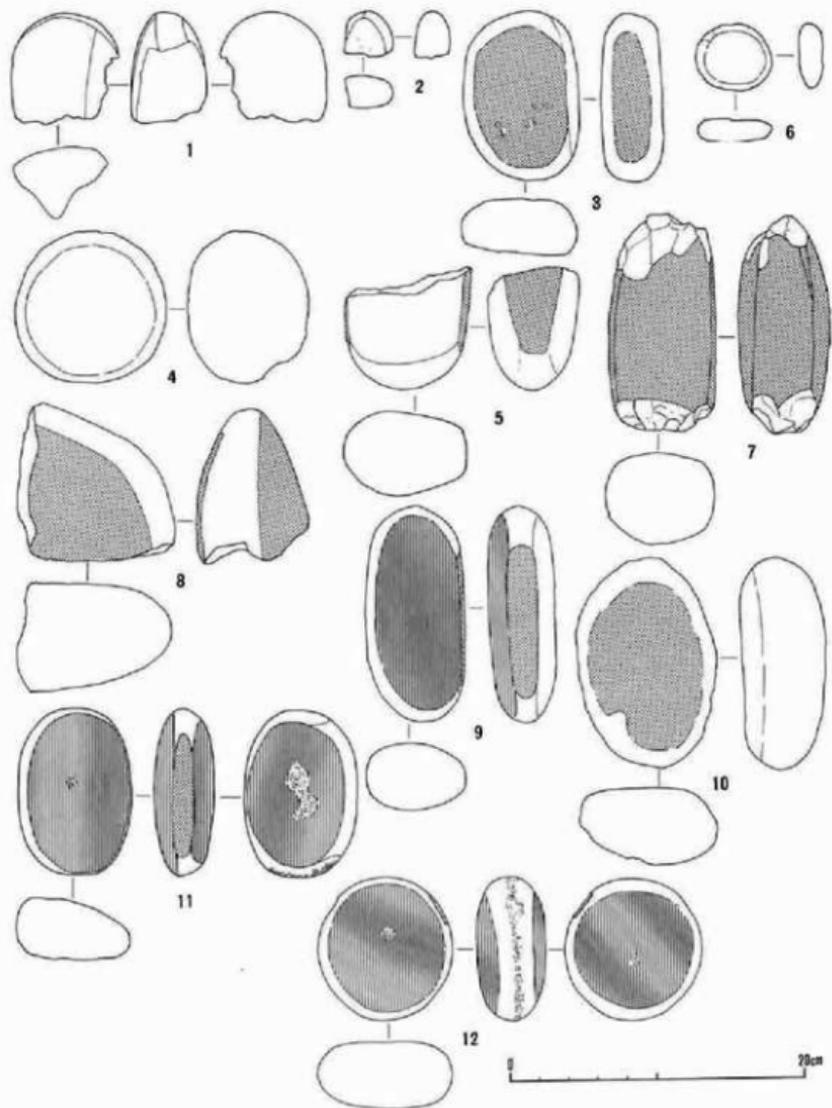
第203図 その他、出土石器(9)



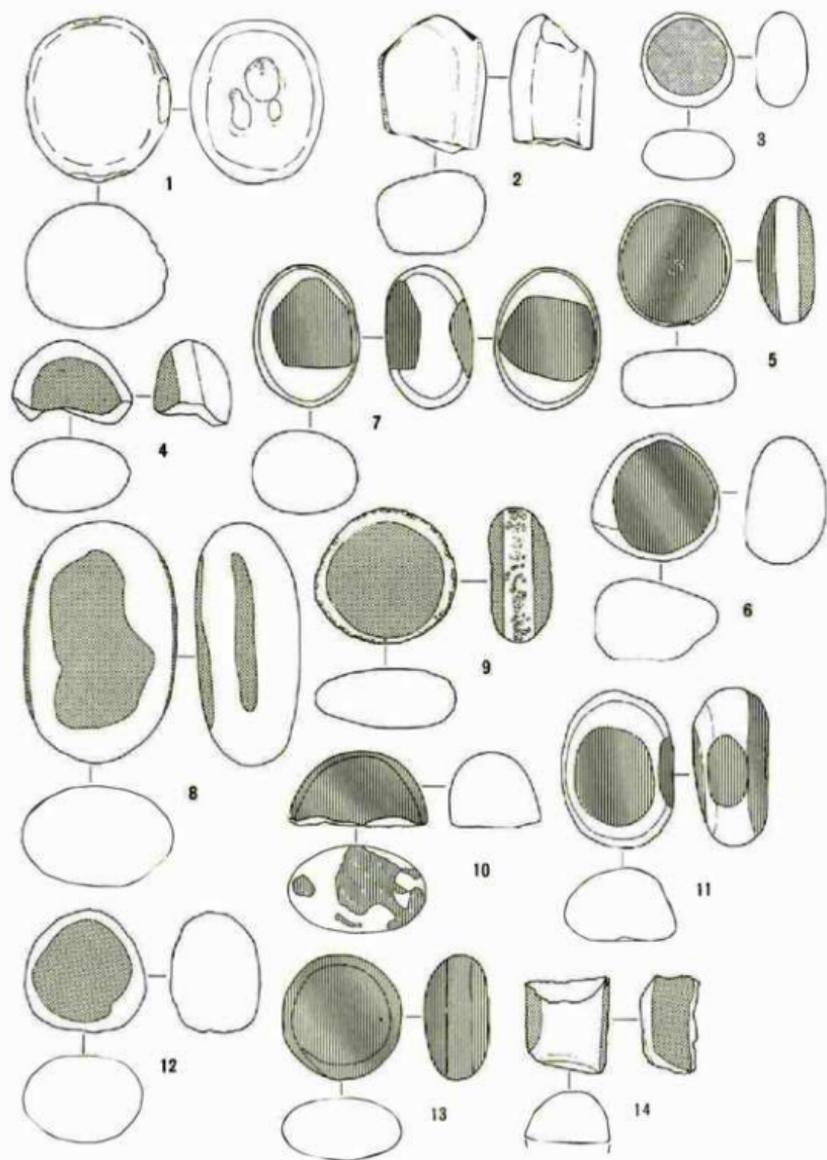
第204図 その他、出土石器 (10)



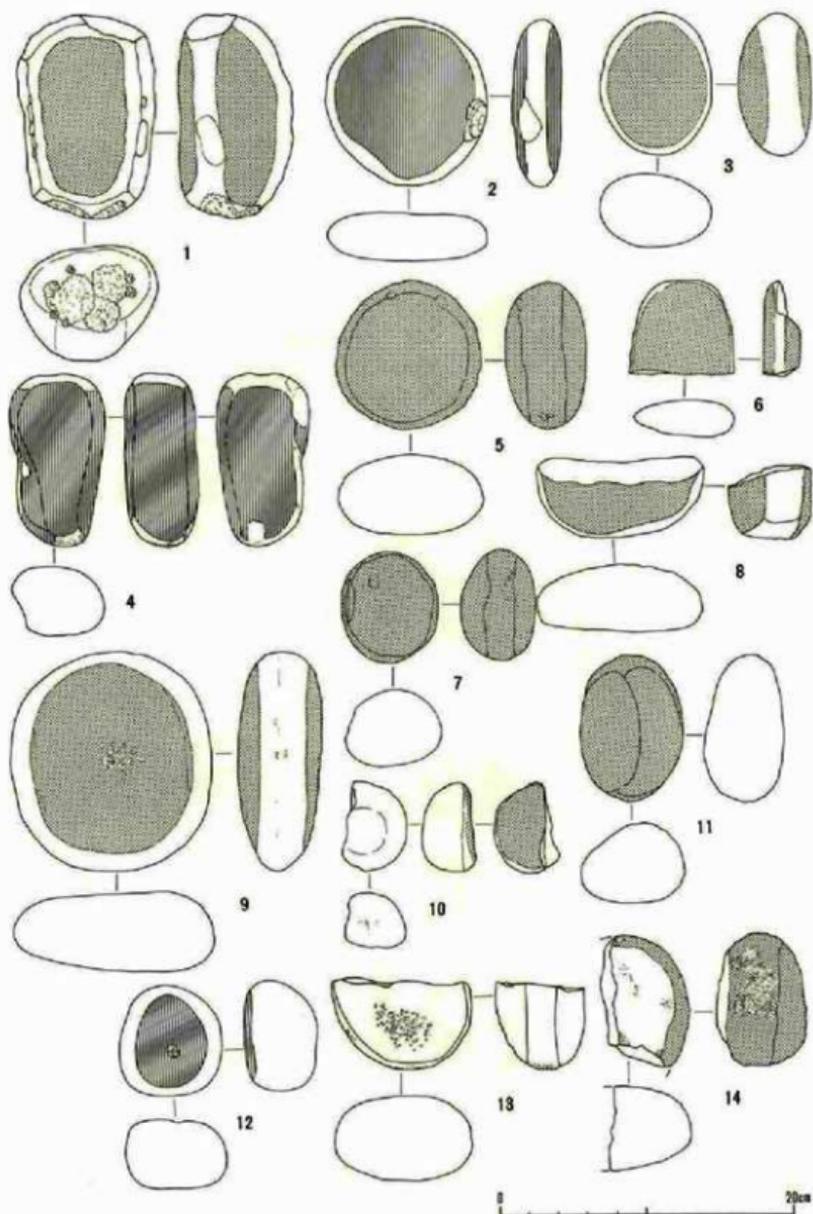
第205図 その他、出土石器 (11)



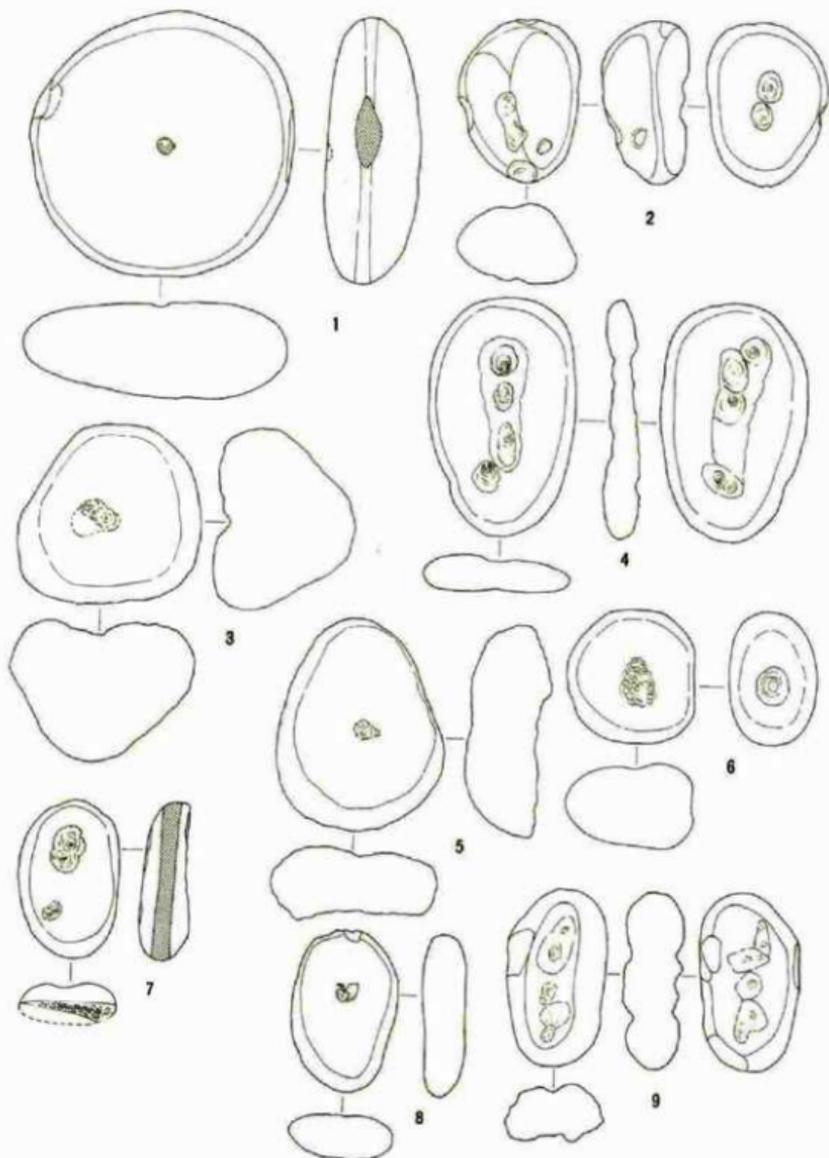
第208図 その他、出土石器 (12)



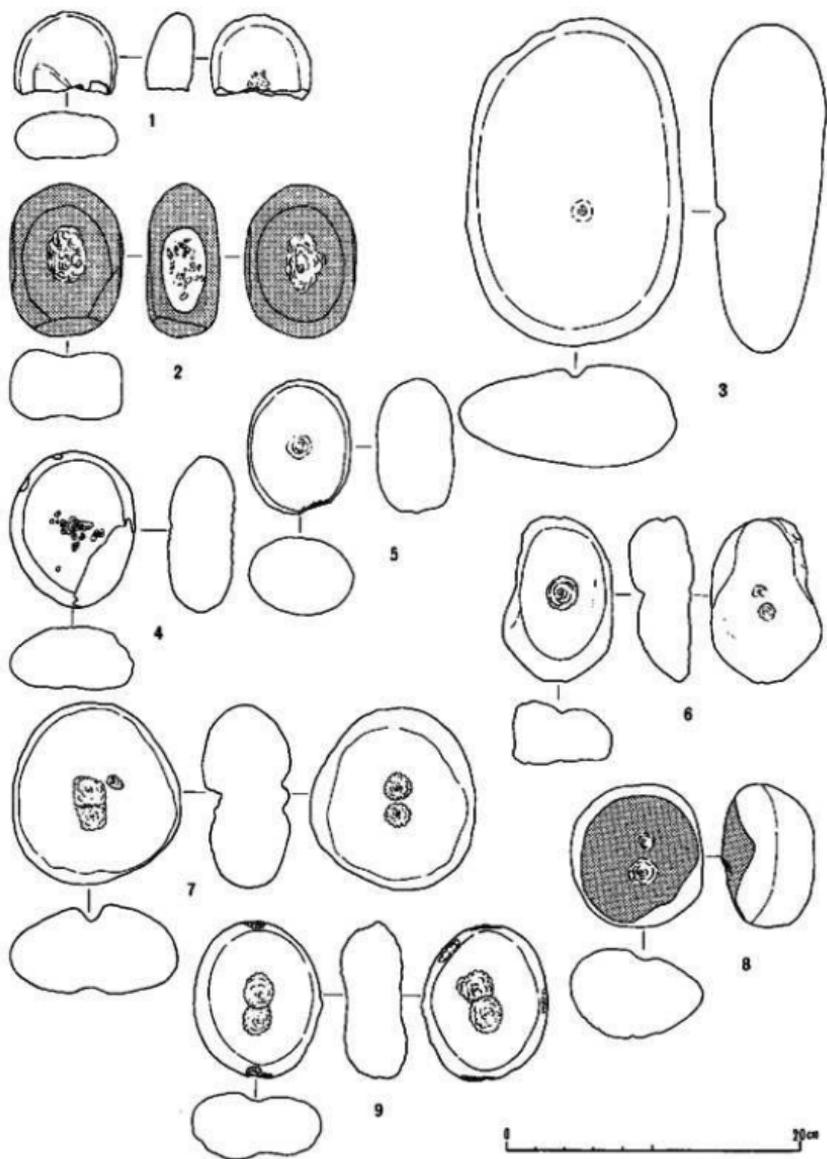
第207図 その他、出土石器 (13)



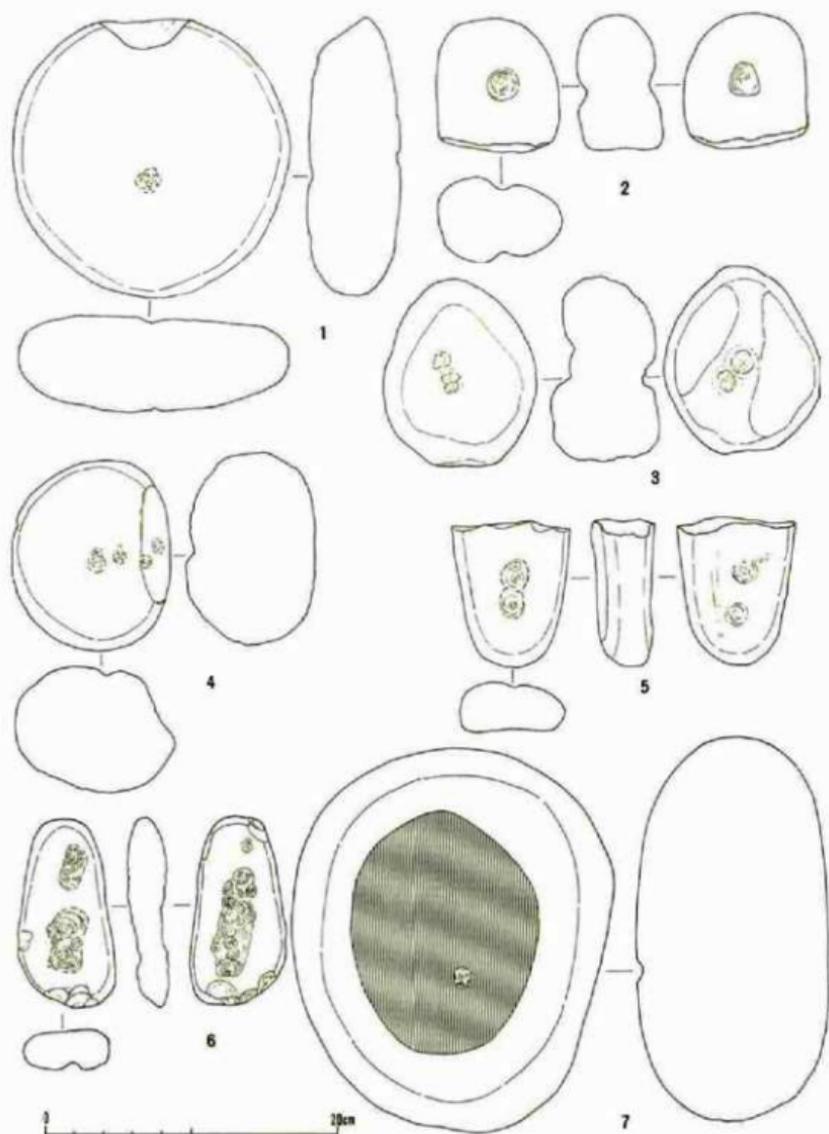
第208図 その他、出土石器 (14)



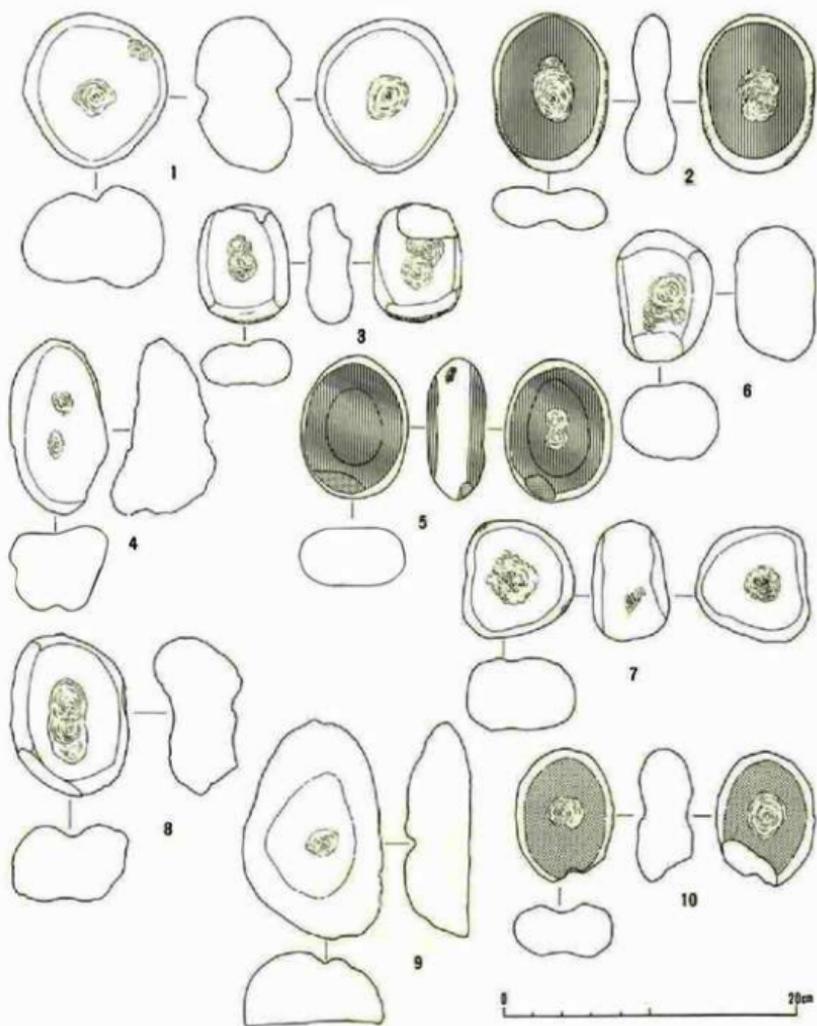
第209図 その他、出土石器 (15)



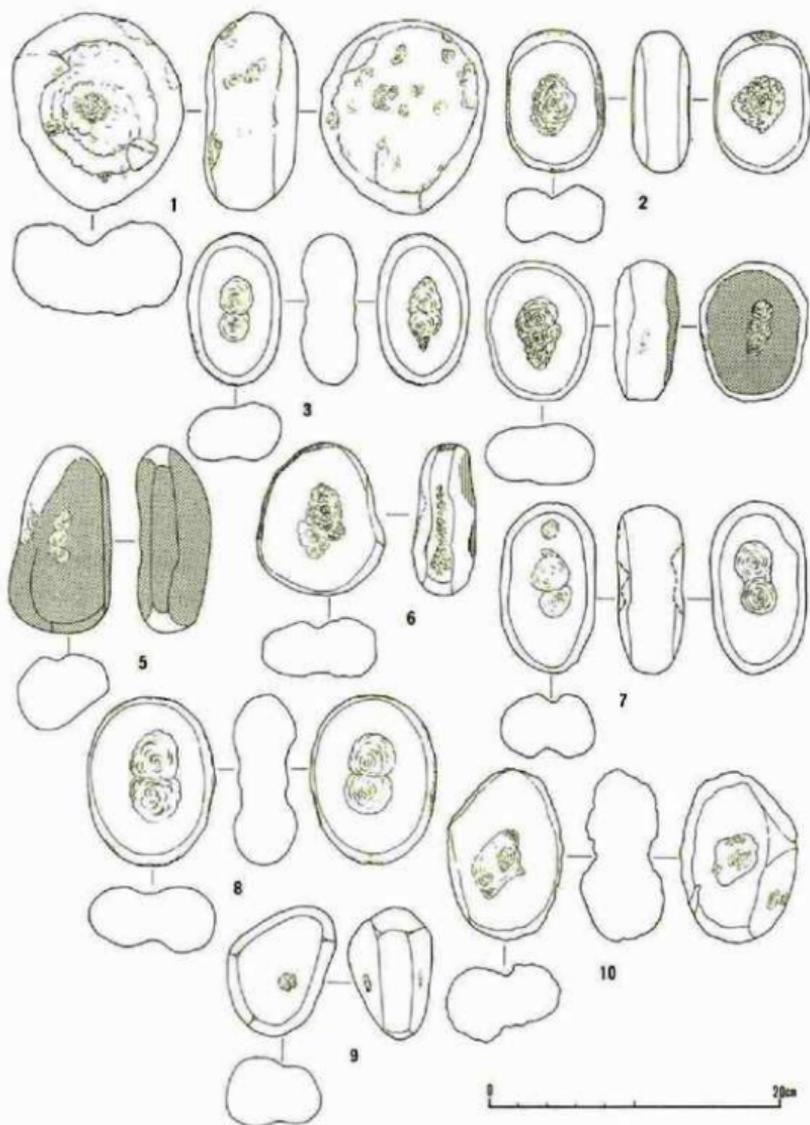
第210図 その他、出土石器 (16)



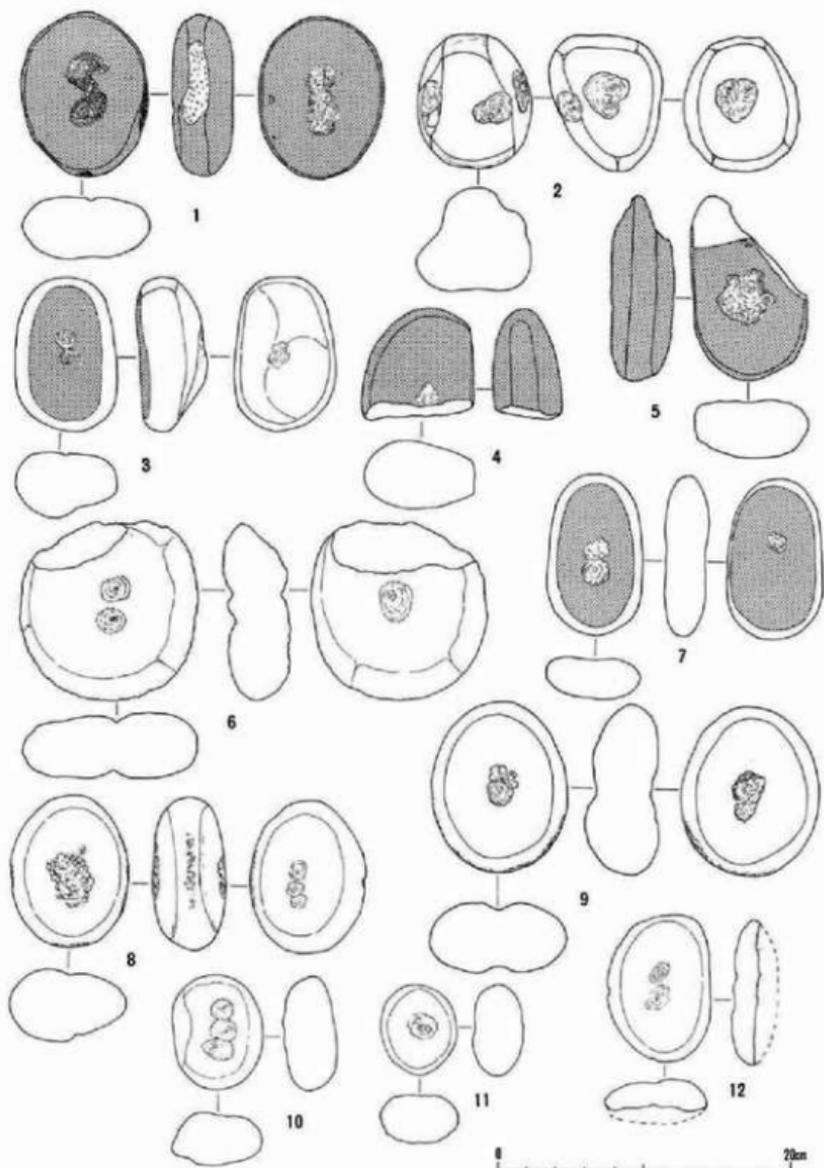
第211図 その他、出土石器 (17)



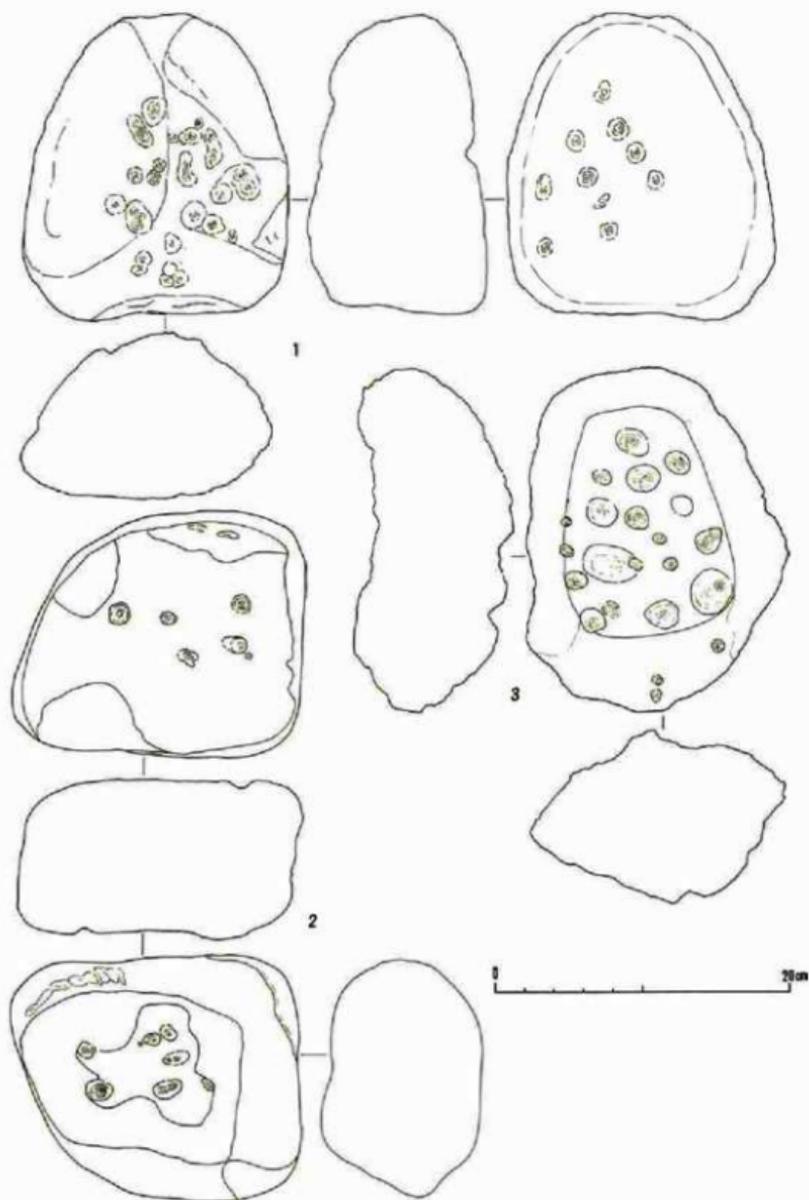
第212図 その他、出土石器 (18)



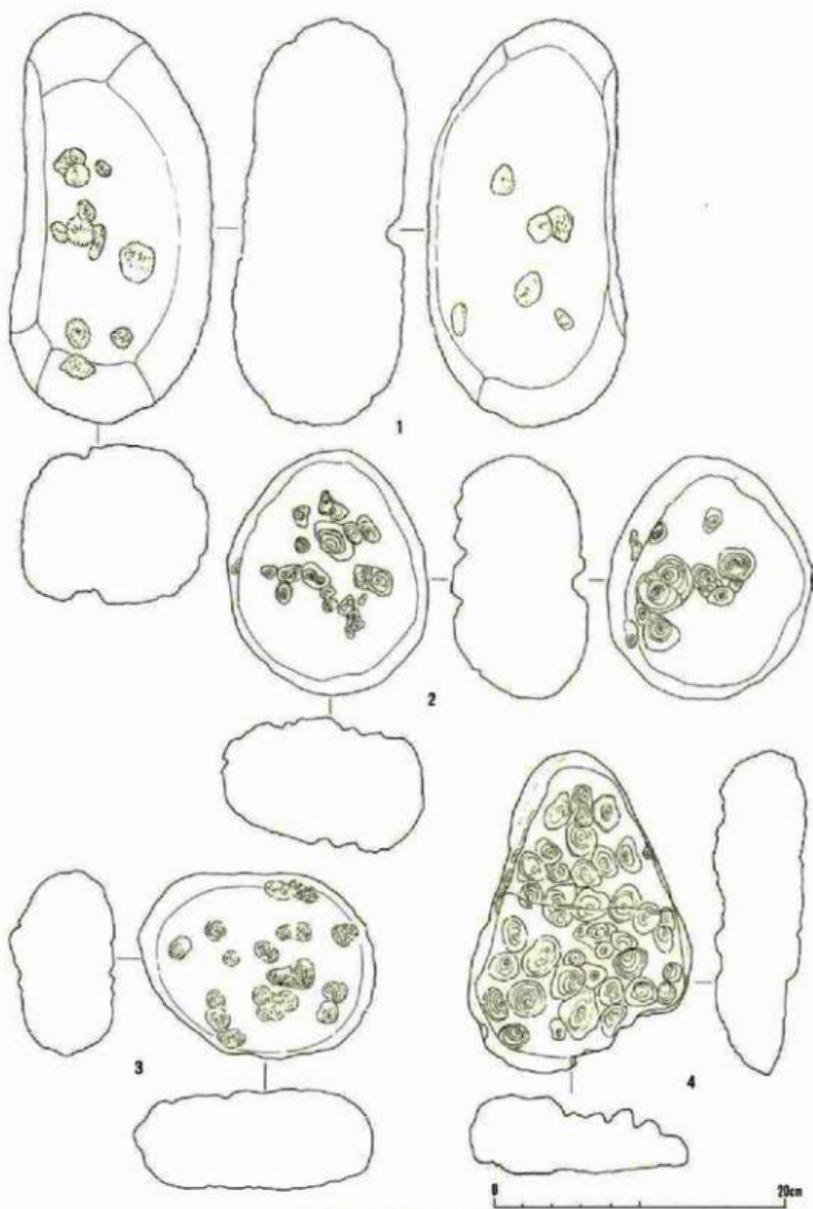
第213回 その他、出土石器 (19)



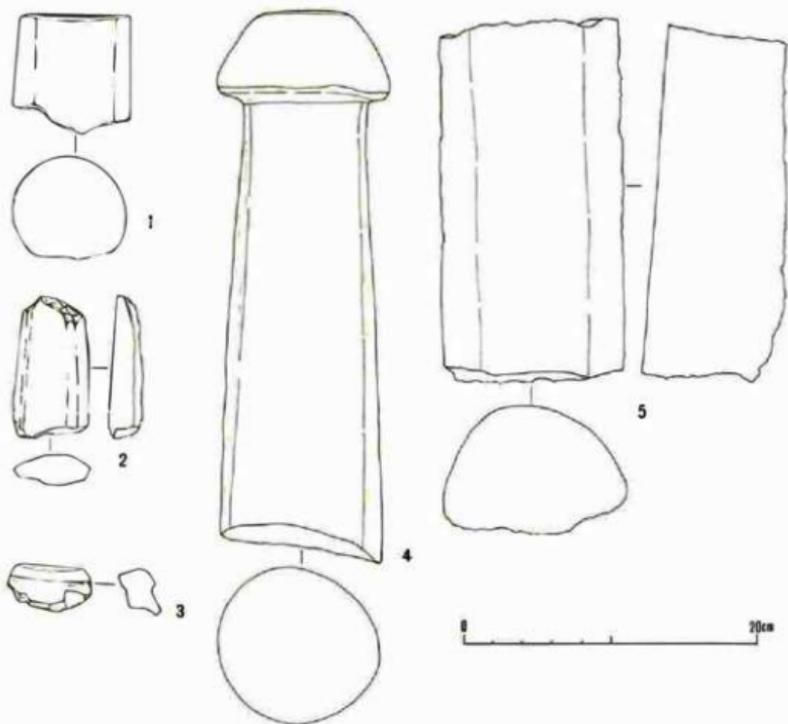
第214図 その他、出土石器 (20)



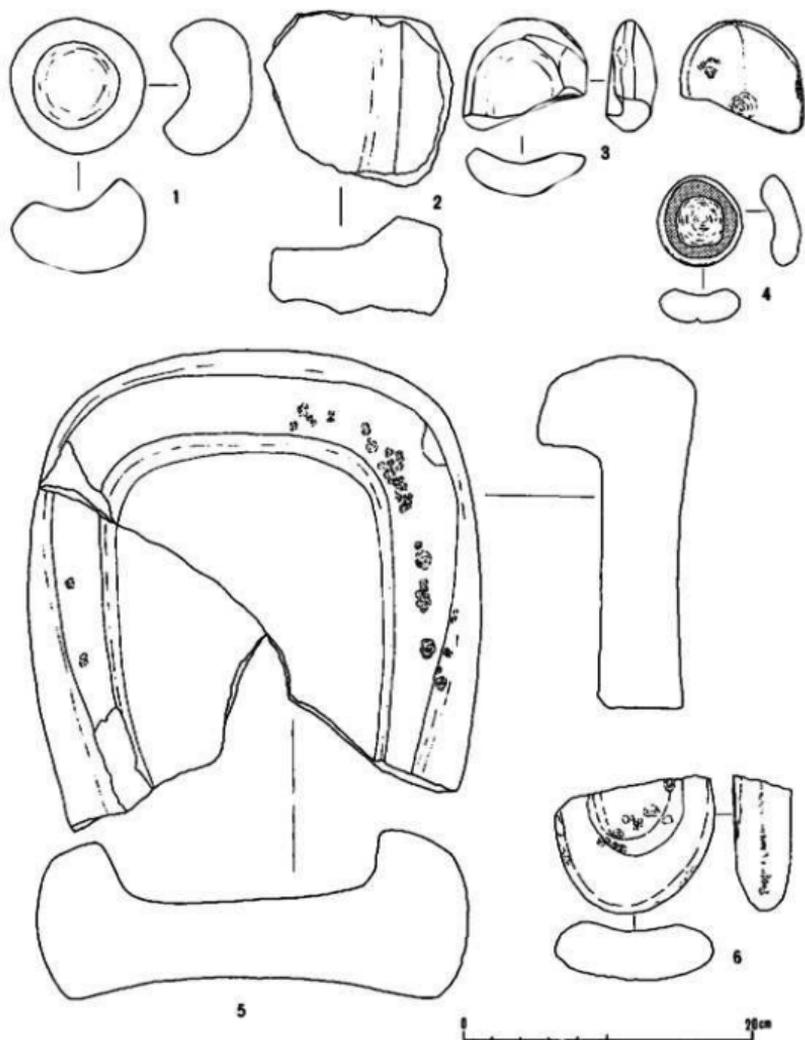
第215図 その他、出土石器 (21)



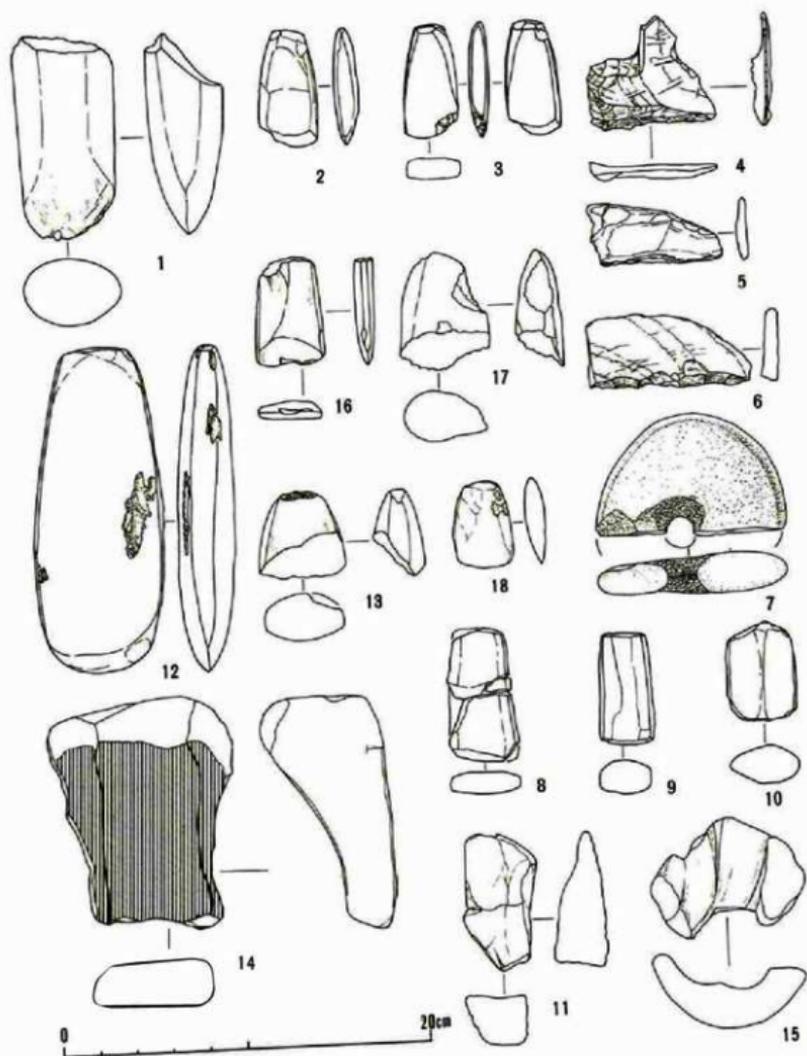
第216図 その他、出土石器 (22)



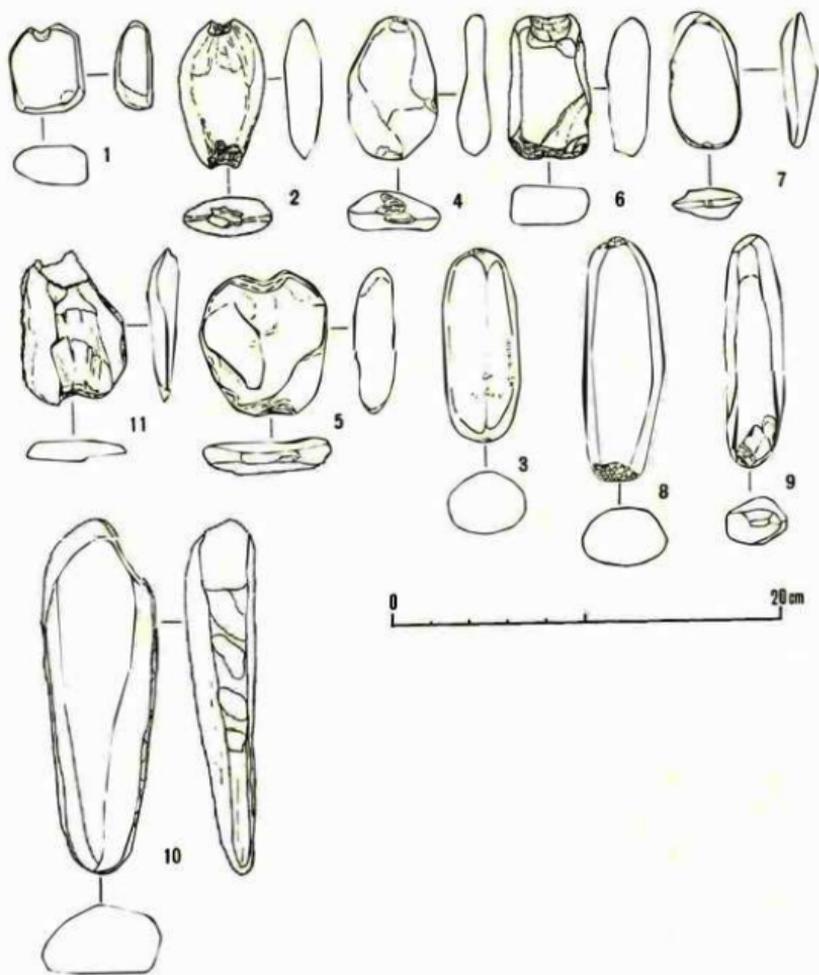
第217図 その他、出土石器 (23)



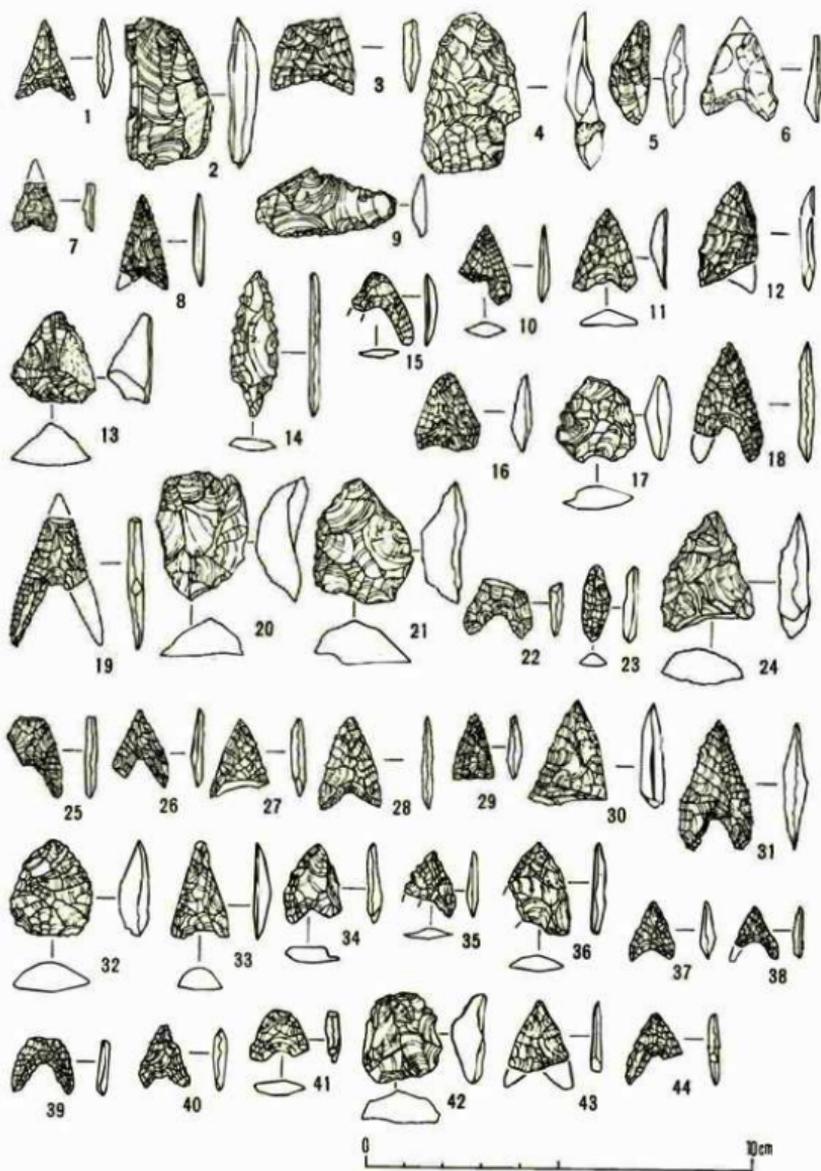
第218図 その他、出土土器 (24)



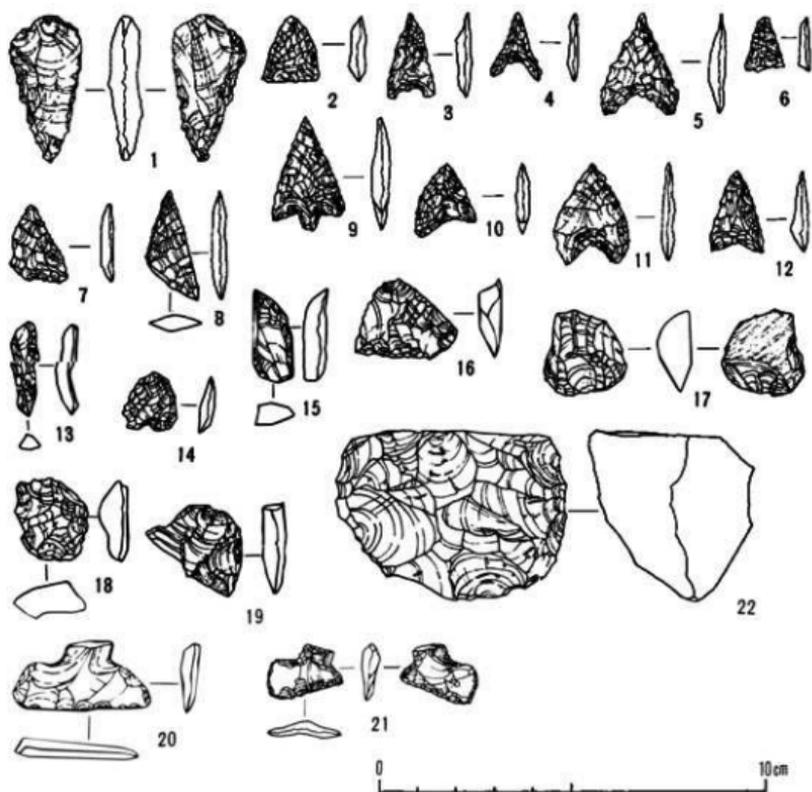
第219图 磨製石斧、砾石轴 (25)



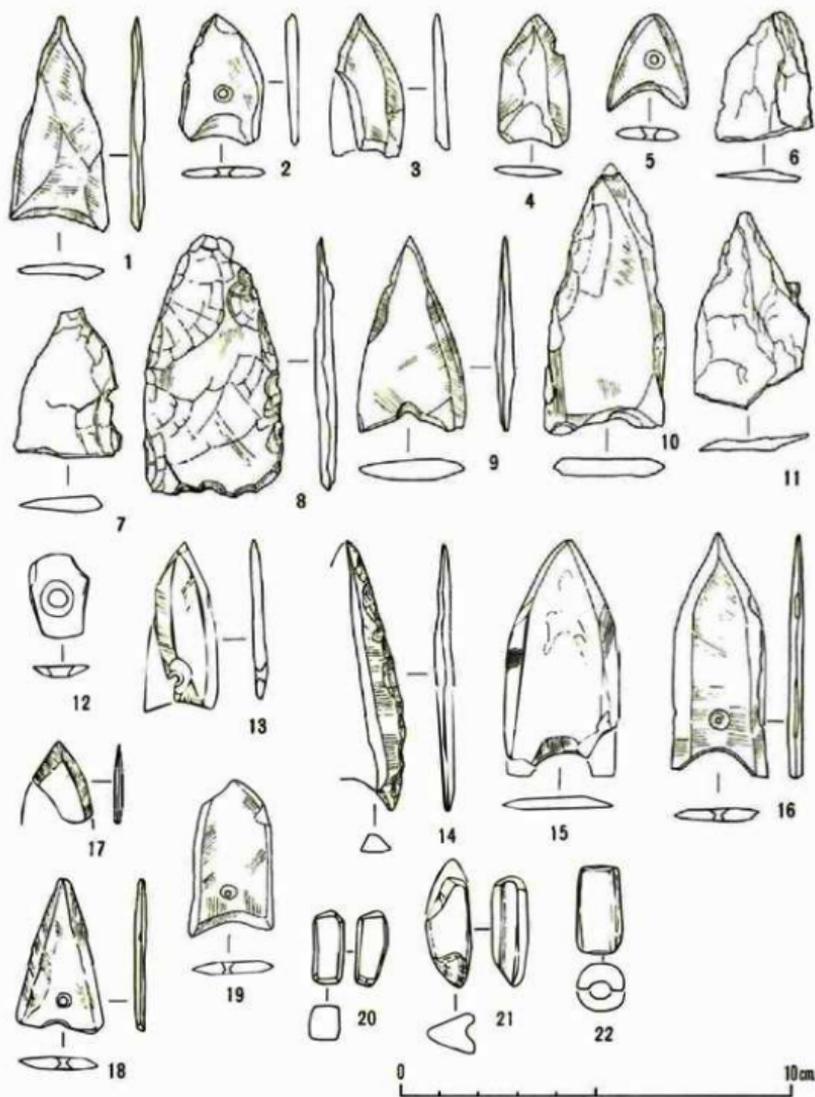
第220图 石鏃、棒状石器 (26)



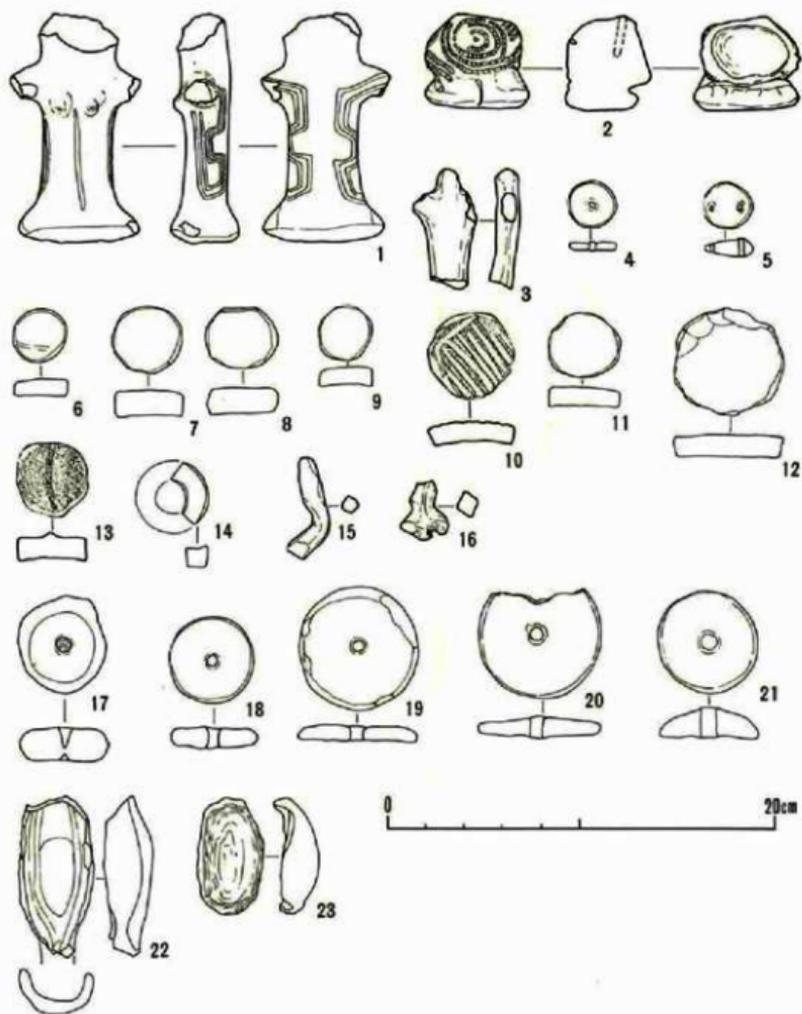
第221圖 石礮他 (27)



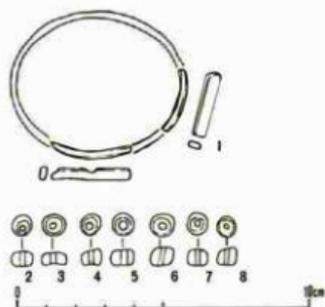
第222回 石器他 (28)



第223図 石鏃他 (29)



第224图 土偶他



第225図 銅製品、ガラス玉

第9表 石器等一覧表

※材質記号の註は表末に記載してある。

番号	遺構	No	器種	法量 ca			材質	備考
				長	巾	厚		
195	1 1住	S-2	打製石斧	7.7	5.3	1.5	S	短冊形
	2 2住		打製石斧	6.4	8.2	2.3	SST	短冊形
	3 3住	床面下	打製石斧	8.8	6.8	3.2	mH	短冊形
	4 3住	床面下	打製石斧	7.1	8.5	2.5	S	換形
	5 4住		打製石斧	8.2	4.8	2.6	mH	短冊形
	6 6住	フク土	打製石斧	4.9	8.5	1.9	砂質粘板岩	短冊形
	7 7住		打製石斧	11.8	5.0	2.1	SST	短冊形
	8 7住	クロ	打製石斧	10.8	4.0	1.6	mH	短冊形
	9 7住	フク土	打製石斧	9.7	4.2	1.3	mH	短冊形
	10 8住		打製石斧	8.6	4.6	1.5	mH	短冊形
	11 8住		打製石斧	11.2	4.1	1.2	mH	短冊形
	12 10住		打製石斧	11.8	4.9	3.1	mH	短冊形
	13 10住		打製石斧	12.5	3.3	2.3	mH	短冊形
	14 10住	2 pit	打製石斧	11.2	6.1	2.1	SST	分銅形
196	1 10住		打製石斧	5.8	5.7	1.8	mH	短冊形、下部欠
	2 10住		打製石斧	9.9	4.9	2.2	S	短冊形、下部欠
	3 10住		打製石斧	10.9	4.5	1.3	mH	尖頭形、完形
	4 10住	S-2	打製石斧	9.0	4.9	2.6	S	短冊形、下部欠
	5 13住	S-37	打製石斧	12.2	6.2	2.2	mH	短冊形、頭部欠
	6 13住	S-30	打製石斧	9.5	5.8	1.4	S	短冊形
	7 13住	S-64	打製石斧	11.7	5.0	1.4	mH	短冊形、完形
	8 13住	S-35	打製石斧	9.8	6.0	2.3	mH	短冊形、下部欠
	9 13住	S-51	打製石斧	10.5	5.0	2.7	S	短冊形、頭部欠
	10 13住	S-44	打製石斧	13.4	5.0	1.8	mH	短冊形
	11 13住	S-47	打製石斧	11.7	5.5	1.8	mH	短冊形
	12 13住	床	打製石斧	6.9	5.1	2.4	S	換形
	13 13住	S-38	打製石斧	12.5	4.6	2.5	SST	短冊形、完形
	14 13住	S-65	打製石斧	9.4	5.6	1.9	mH	短冊形、完形
15 13住	S-26	打製石斧	9.4	5.1	2.6	mH	短冊形、上部欠	
16 13住	S-24	打製石斧	7.2	5.4	1.9	mH	短冊形、下部欠	
197	1 13住	S-55	打製石斧	8.7	5.0	2.0	SST	短冊形、下部欠
	2 13住	S-49	打製石斧	10.3	5.3	1.7	S	短冊形、完形
	3 13住	床	打製石斧	11.3	4.9	2.2	S	短冊形

番号 図面	遺構	No	器種	法量 cm			材質	備考		
				長	巾	厚				
197	4	13住	S-2	打製石斧	9.5	4.6	2.2	mH	換形	
	5	13住	S-58	打製石斧	11.9	5.8	2.1	SST	短冊形、完形	
	6	16住	S-87	打製石斧	8.3	5.4	2.5	S	短冊形、下部欠	
	7	21住	S-11	打製石斧	8.0	4.5	1.2	砂質粘板岩	短冊形	
	8	23住		打製石斧	6.5	5.4	1.9	D	短冊形	
	9	23住		打製石斧	10.7	4.3	1.5	mH	短冊形	
	10	23住		打製石斧	5.4	6.6	1.7	S	短冊形	
	11	24住		S-1	打製石斧	8.9	4.1	1.9	S	短冊形
	12	30住		S-1	打製石斧	13.4	8.0	2.6	mH	尖頭形
	13	33住	最下位	打製石斧	6.8	3.3	1.9	H	短冊形	
	14	34住	S-2	打製石斧	6.6	4.0	0.6	S	短冊形、頭部欠	
	15	35住	S-4	打製石斧	15.5	7.7	3.3	mH	分胴形	
	16	35住	S-5	打製石斧	9.1	5.0	1.9	mH	換形	
	198	1	40住	炉内	打製石斧	8.0	5.3	1.8	mH	短冊形、頭部欠
		2	1号方形		打製石斧	7.2	4.1	1.4	H	短冊形、頭部欠
		3	3号方形		打製石斧	8.1	6.8	1.6	SST	短冊形、下部欠
4		3号方形	打製石斧		14.4	5.9	2.5	SST	短冊形	
5		6号方形	打製石斧		7.6	5.9	2.4	mH	換形、頭部欠	
6		9号方形	打製石斧		8.8	6.1	1.8	S	換形	
7		9号方形	打製石斧		10.0	5.7	2.8	H	短冊形	
8		9号方形	打製石斧		9.4	4.4	1.6	mH	短冊形	
9		16号方形	打製石斧		12.3	8.4	4.0	泥岩	換形	
10		16号方形	打製石斧		9.5	5.5	2.4	H	短冊形、頭部欠	
11		16号方形	打製石斧		11.0	5.2	2.1	H	短冊形	
12		16号方形	打製石斧		10.0	5.2	2.3	H	短冊形、頭部欠	
13		16号方形	打製石斧		7.3	5.5	1.4	S	短冊形、下部欠	
14		7号溝	打製石斧		10.8	5.0	2.0	mH	短冊形	
15	10号溝	打製石斧	4.0	4.7	1.7	S	分胴型、上下部欠			
199	1	10号溝	E-6 E-3.4 フク土	打製石斧	9.6	6.5	2.8	SST	短冊形	
	2	10号溝		打製石斧	6.2	4.3	1.0	S	換形	
	3	12号溝		打製石斧	9.0	5.0	7.0	S	分胴型(石きじ)	
	4	12号溝		打製石斧	5.0	6.6	1.9	S	短冊形	
	5	5号土壌		打製石斧	6.8	7.5	1.1	S	短冊形	
	6	22土農		打製石斧	8.9	6.9	2.3	mH	短冊形	
	7	45土農		打製石斧	12.2	7.9	2.7	mH	分胴形	

番号	遺構	No	器種	法量 cm			材質	備考		
				長	巾	厚				
199	8	52 土壌		打製石斧	9.8	3.9	1.7	mH	短冊形	
	9	53 土壌		打製石斧	10.8	5.8	1.6	mH	短冊形	
	10	75 土壌		打製石斧	7.4	7.1	1.7	mH	揆形	
	11	329+36	E-1	打製石斧	8.5	4.1	1.7	mH	短冊形、頭部欠	
	12	特8	フク土	打製石斧	7.8	5.7	1.6	SST	短冊形	
	13	330+80E	南証張部	打製石斧	13.4	5.8	1.6	H	短冊形	
	14	329+72	W3	打製石斧	12.8	4.8	1.9	S	短冊形	
	15	330+66	E-2	打製石斧	5.5	2.1	9.8	S	短冊形、頭部欠	
	16	329+48	E-1	打製石斧	5.6	10.7	1.0	S	横刃形	
	200	1	330+32	E-2	打製石斧	12.6	5.0	2.5	SST	短冊形
		2	330+60	E-2	打製石斧	9.8	4.4	2.0	mH	短冊形
		3	329+32	E-3	打製石斧	9.8	5.3	1.5	S	短冊形
		4	329+48	W5	打製石斧	12.4	6.1	2.8	S	分銅形
		5	329+72	E4	打製石斧	9.1	5.9	1.5	mH	短冊形、刃部欠
		6	329+60	W4	打製石斧	10.9	3.5	1.6	SST	短冊形
		7	329+60	E3	打製石斧	8.1	5.6	1.6	SST	短冊形、頭部欠
8		330+44	E3	打製石斧	9.3	5.2	2.6	mH	短冊形、刃部欠	
9		328+92	W6	打製石斧	12.9	5.9	1.8	SST	短冊形	
10		329+96	W1	打製石斧	9.0	5.6	1.3	S	短冊形	
11		329+96	E3	打製石斧	14.9	8.3	2.5	mH	銅形	
12		329+60	E1	打製石斧	3.9	5.5	1.3	S	短冊形、頭部欠	
13		329+88	E3	打製石斧	9.3	5.5	1.3	mH	短冊形	
14		329+00	W3	打製石斧	7.3	5.0	2.1	SST	短冊形、刃部欠	
15		329+88	E3	打製石斧	7.9	6.0	1.4	S	短冊形	
201		16	329+64	E3	打製石斧	11.0	5.9	3.4	mH	短冊形 頭部刃部欠
	1	330+56	E3	打製石斧	13.5	5.3	2.0	SST	短冊形	
	2	330+40	W-1	打製石斧	8.8	5.2	2.2	SST	短冊形、刃部欠	
	3	330+68	E-4	打製石斧	4.2	6.4	1.2	SST	短冊形、頭部欠	
	4	329+44	E-3	打製石斧	5.0	4.4	1.3	SST	短冊形、頭部・刃部欠	
	5	329+68	E-6	打製石斧	11.6	5.8	2.4	H	短冊形、刃部欠	
	6	329+04	W4	打製石斧	15.3	5.1	2.2	mH	短冊形	
	7	329+96	W-2	打製石斧	15.4	7.1	2.7	H	短冊形	
	8	330+24	W-3	打製石斧	8.0	4.8	1.6	S	短冊形	
	9	330+60	E-2	打製石斧	9.2	5.1	2.0	SST	短冊形、刃部欠	
10	330+60	E-2	打製石斧	6.9	5.0	2.0	H	短冊形、刃部欠		

番 号	図面	遺 構	No.	器 種	法 量 cm			材 質	備 考	
					長	巾	厚			
201	11	330+68	E-4	打製石斧	8.8	4.5	1.6	S	短冊形	
	12	329+44	W-2	打製石斧	8.8	6.4	1.0	S	短冊形、頭部・刃部欠	
	13	330+8	W-3	打製石斧	6.8	5.6	1.2	S	短冊形、頭部・刃部欠	
	14	330+8	E-1	打製石斧	7.7	4.9	2.3	H	短冊形	
	15	330+8	W-1	打製石斧	11.8	6.7	1.8	mH	短冊形	
	16	329+52	E-4	打製石斧	17.8	7.5	4.4	mH	短冊形	
202	1	330+16	W-1	打製石斧	14.4	5.8	1.8	S	短冊形	
	2	330+20	E-3	打製石斧	12.8	5.0	1.6	mH	短冊形	
	3	330+16	W-2	打製石斧	13.5	6.2	1.9	SST	短冊形、刃部欠	
	4	330+36	W-1	打製石斧	12.3	8.0	2.4	T	分銅形	
	5	330+56	E-4	打製石斧	12.1	6.0	2.0	S	短冊形	
	6	330+56	E-3	打製石斧	10.5	4.7	1.9	H	短冊形	
	7	330+52	E-4	打製石斧	7.9	4.7	1.7	mH	短冊形、頭部欠	
	8	330+04	E-6	打製石斧	9.9	5.6	1.9	SST	短冊形	
	9	329+76	W-3	打製石斧	12.8	6.5	1.2	S	分銅形	
	10	328+96	W-4	打製石斧	13.1	4.8	0.5	S	短冊形	
	11	329+96	W-2	打製石斧	10.9	8.7	1.6	S	分銅形	
	12	表採		打製石斧	7.1	4.9	1.1	mH	短冊形、頭部欠	
203	13	330+64	E-2	打製石斧	9.3	8.3	2.4	T	分銅形、頭部・刃部欠	
	14	330+4	W-5	打製石斧	9.7	5.9	0.8	S	短冊形	
	1	330+04		打製石斧	12.4	8.7	2.7	H	分銅形	
	2	329+64	E.L	打製石斧	11.2	5.3	2.1	S	短冊形	
	3	G		打製石斧	7.6	6.8	1.7	T	短冊形、頭部欠	
	4	329+16	W-4	打製石斧	8.8	5.6	1.2	S	短冊形	
	5	表採		打製石斧	9.3	6.7	2.5	mH	短冊形	
	6	329+16	W-5	打製石斧	10.7	6.6	3.4	mH	短冊形	
	7	7住	フク土	打製石斧	9.5	8.4	1.2	SST	捺形	
	8	7住		打製石斧	3.9	10.2	1.5	mH	横刃形	
	9	7住	フク土	打製石斧	4.9	10.5	1.8	mH	横刃形	
	10	36住	S-7	打製石斧	3.4	6.9	0.5	mH	横刃形	
	11	36住	498	打製石斧	3.0	6.0	0.9	mH	横刃形	
	12	13住		打製石斧	5.8	8.3	3.1	H	横刃形	
	13	13住	S-23	打製石斧	5.6	10.7	2.1	S	横刃形	
	14	32住	S-2	打製石斧	5.3	12.0	1.8	S	横刃形	
	204	1	13住	S-34	打製石斧	4.9	8.9	2.4	SST	横刃形

番号 図面	遺構	No	器種	法量 cm			材質	備考
				長	巾	厚		
204	2 21住		打製石斧	4.4	10.5	1.85	砂岩	横刃形
	3 35住		打製石斧	5.8	7.0	1.7	H	横刃形
	4 45土壇		打製石斧	5.5	8.1	1.2	S	横刃形
	5 330+44	E-3	打製石斧	5.2	10.4	1.8	SST	横刃形
	6 329+04	E-5	打製石斧	5.3	10.4	1.5	H	横刃形
	7 329+68	W-3	打製石斧	4.5	7.0	2.0	mH	横刃形
	8 10溝		打製石斧	5.7	7.7	1.9	H	横刃形
	9 329+76	W-3	打製石斧	4.5	10.4	1.0	S	横刃形
	10 329+86	W-3	打製石斧	4.1	8.0	0.9	S	横刃形
	11 329+52	W-2	打製石斧	5.2	9.6	1.5	mH	横刃形
	12 330+44	E-1	打製石斧	7.9	10.4	2.4	mH	横刃形
	13 特5		打製石斧	7.4	7.5	1.4	mH	横刃形
	14 特11		打製石斧	4.6	7.4	1.0		横刃形
	205	1 1住	S-1	すり石	10.75	6.8	5.6	カコウ岩質
2 4住			すり石	16.7	9.5	6.0	An	
3 8住			すり石	10.2	9.2	7.4	An	
4 9住			磨製石器	8.2	6.4	2.7	An	床面直
5 20住		S-10	すり石	21.9	20.1	5.5	An	
6 21住			すり石	8.2	4.8	3.4	S	
7 21住		S-2	すり石	9.4	5.4	5.0	An	
8 23住			すり石	9.3	8.6	4.0	An	全面みがき
9 23住		B	すり石	11.5	5.3	3.0	mH	
10 23住			すり石	12.4	10.0	5.3	An	
11 23住			磨製石器	11.0	7.0	4.5	An	全体は磨石、磨縁はスリ、断面は打痕がみられる
206	1 29住		すり石	7.8	7.2	5.1	An	
	2 29住	S-6	すり石	3.2	3.4	2.4	泥岩	
	3 33住	S-5	すり石	11.8	8.0	4.4	D	
	4 36住		すり石	10.5	10.2	8.2	D	
	5 38住	63	すり石	8.5	8.7	6.3	An	
	6 57土壇		すり石	4.5	5.1	1.5	D	
	7 12溝	E-3.4	すり石	15.0	7.4	6.1	An	
	8 12溝	E-3.4	すり石	10.8	10.5	7.5	An	
	9 特8		すり石	14.3	6.9	4.8	An	フク土
	10 12溝	E-5.6	すり石	14.6	9.55	6.0	D	
	11 41土壇		すり石、凹石	11.4	7.7	4.0	An	

番号	遺構	No	器種	法量 cm			材質	備考
				長	巾	厚		
206	12 27土壌		すり石	10.0	9.5	4.8	An	
207	1 12溝	S-2	丸石	14.5	9.7	9.05	An	
	2 49土壌		すり石	9.6	7.4	5.7	An	
	3 12溝		丸石	6.5	6.2	3.5	D	フク土
	4 12溝		すり石	5.0	8.0	5.2	D	
	5 12溝	E-1	すり石	8.7	7.7	3.9	An	
	6 12溝		すり石	8.8	8.2	8.7	An	
	7 329+16	W-	すり石	9.8	7.2	6.0	An	
	8 330+00	E-6	すり石	16.7	10.4	7.3	An	
	9 330+60	W-4	すり石	9.3	9.6	4.1	An	
	10 329+60	E-1	すり石	5.2	9.5	6.3	カコウ岩類	
	11 329+04	E-5	すり石、凹石	10.8	7.7	5.1	An	裏面に凹1ヶ所
	12 329+60	E-1	すり石	8.6	8.0	6.0	D	クロ土
	13 329+84	E-1	すり石	8.7	8.2	4.4	SST	
	14 329+80	E-2	すり石	6.8	5.8	3.9	An	
208	1 329+44	E-3	すり石、凹石	14.1	9.3	7.7	D	クロ土
	2 329+04	W-5	すり石	11.5	11.1	3.3	An	
	3 6方形		すり石	9.9	7.7	5.1	An	
	4 329+80	E-2	すり石	12.0	6.5	4.9	An	
	5 9方形		すり石	10.3	10.0	5.6	An	
	6 7方形		すり石	6.5	7.0	2.5	An	
	7 9方形		すり石	7.5	6.6	5.3	カコウ岩類	
	8 329+08	W-3	すり石	5.3	11.4	4.6	An	
	9 329+88	W-1	すり石	16.1	13.6	5.7	An	クロ土
	10 特5		すり石	6.15	4.5	3.8	D	
	11 329+64	E-6	すり石	10.2	7.0	5.5	D	クロ土
	12 15溝		凹石	7.7	7.0	5.0	アブライト?	
	13 329+08	W-3	すり石	6.1	9.6	6.0	An	
	14 7方形		すり石	9.2	7.0	5.9	An	
209	1 3住	S-1	凹石	18.4	18.1	6.6	An	
	2 4住		凹石	11.2	8.3	6.0	An	
	3 10住		凹石	12.5	12.5	9.7	D	
	4 24住	S-2	多孔石	16.5	10.1	2.6	An	
	5 10住		凹石	14.7	11.7	5.8	D	
	6 13住		凹石	9.3	8.7	6.0	An	

番号	図面	遺構	No	器種	法量 cm			材質	備考
					長	巾	厚		
209	7	25住	S-2	多孔石	10.9	6.9	3.4	安山岩質 凝灰角礫岩	
	8	29住	S-9	すり石	11.2	7.5	3.2	An	
	9	29住	S-8	凹石	12.5	6.8	4.1	D	
210	1	47土壇		凹石	5.8	6.7	3.2	An	
	2	特8		すり石、凹石	10.5	7.7	5.1	An	全面にすり跡
	3	特8		凹石	22.6	15.0	7.9	An	
	4	7住		凹石	10.8	8.4	4.5	An	クロ土
	5	12溝		凹石	9.2	7.0	5.3	An	
	6	329+64	E-4	凹石	11.3	7.5	4.3	D	
	7	15溝		凹石	12.6	11.4	6.0	An	
	8	特8		凹石	9.8	9.1	6.2	An	フク土
211	9	329+64	E-6	凹石	10.9	8.7	4.6	An	クロ土
	1	20住	S-9	凹石	19.1	19.0	6.5	An	裏面凹部1ヶ所
	2	13住		凹石	9.4	8.5	5.8	D	
	3	13住	S-23	凹石	12.9	10.7	7.3	D	
	4	13住		凹石	13.2	10.9	8.8	D	床直
	5	35住	S-3	凹石	10.1	8.2	4.4	SST	
	6	35住	S-5	凹石	13.0	6.8	2.8	An	
	7	36住	S-23	凹石	26.7	22.3	13.3	カコウ岩類	
212	1	329+00	W-3	凹石	10.7	9.8	6.5	An	クロ土
	2	329+72	W-3	凹石	10.9	7.8	3.4	An	クロ土
	3	328+96	W-5	凹石	8.3	6.2	3.2	An	ベルト
	4	329+48	E-1	凹石	12.2	6.6	7.2	D	
	5	329+80	E-3	すり石	9.9	7.3	4.0	An	
	6	329+80	E-1	凹石	9.0	6.6	6.4	An	
	7	329+80	E-1	凹石	9.2	7.4	5.1	An	
	8	330+60		凹石	11.1	8.0	6.0	D	
	9	12溝		凹石	15.2	9.7	4.5	D	
	10	329+84	W-3	凹石	9.2	6.8	3.8	D	
213	1	329+52	E-6	凹石、多孔石	13.5	11.2	6.5	D	
	2	330+88	E-4	凹石	9.8	6.6	3.9	An	
	3	329+12	E-1	凹石	10.5	6.4	4.0	An	
	4	329+92	E-3	凹石	9.7	7.4	4.4	An	
	5	329+80	E-4	すり石、凹石	12.9	7.2	5.2	An	クロ土
	6	329+96	E-5	凹石	10.5	8.8	4.3	An	

番 号	図面	造 構	No	器 種	法 量 cm			材 質	備 考
					長	巾	厚		
213	7	329+04	W-4	凹 石	12.8	6.6	4.5	An	クロ土
	8	329+48	E-2	凹 石	11.8	8.8	4.3	An	
	9	330+8	E-3	凹 石	9.05	7.5	5.9	D	
	10	12溝		凹 石	11.8	7.9	5.8	D	
214	1	329+92	E-1	凹 石	11.2	8.7	4.3	An	クロ土
	2	330+8	E-3	凹 石	9.4	7.7	7.7	An	
	3	328+88	E-6	凹 石	10.6	7.0	4.9	An	
	4	329+48	E-2	す り 石	7.8	7.7	4.8	An	
	5	329+36	E-2	凹 石	12.8	7.9	4.	D	
	6	329+60	E-1	凹 石	12.4	12.2	4.7	An	
	7	329+48	E-2	す り 石	11.1	6.6	3.0	An	
	8	328+80	E-4	凹 石	10.4	8.0	5.0	An	
	9	330+44	E-1	凹 石	11.7	9.3	5.1	An	
	10	329+76	E-4	凹 石	8.0	6.3	3.7	D	
	11	329+00	W-3	す り 石	6.4	5.3	3.4	An	
	12	329+92	E-6	凹 石	10.3	7.0	1.8	An	
215	1	10住		多 孔 石	21.1	18.2	12.3	D	クロ土
	2	10住		凹 石	19.5	17.0	11.0	An	
	3	41土壌		多 孔 石	17.5	23.5	12.0	D	
216	1	41土壌		多 孔 石	28.2	13.8	11.9	D	クロ土
	2	329+92	E L	多 孔 石	17.8	14.0	9.3	D	
	3	6 方形		多 孔 石	16.3	12.9	7.3	D	
	4	329+96	W-2	多 孔 石	22.4	15.4	6.2	D	
217	1	8 住		石 棒	8.2	8.0	8.0	An	クロ土
	2	329+68	W-3	石 棒 破 片	9.8	5.2	2.4		
	3	329+60	E-2	石 棒 頭 部	3.1	5.7	3.0	An	
	4	53土壌		石 棒	38.0	11.0	11.0	D	
	5	36住		石 棒	25.1	12.6	9.8	An	
218	1	3 住	S-3	凹 石	9.5	9.2	6.1	D	裏面も石皿として使用
	2	3 住	S-2	石 皿	12.0	13.2	6.8	An	
	3	329+80	E-3	す り 石	7.8	8.5	3.4	An	
	4	330+8	E-3	凹 石	6.5	5.8	1.8	D	
	5	41土壌		石 皿	33.6	31.6	10.9	An	
	6	330+36	E-1						
	20住		石 皿	8.8	10.9	3.9	An		

番号 図面	遺構	No	器種	法量 cm			材質	備考	
				長	巾	厚			
219	1	13住	S-42	磨製石斧	11.4	5.6	4.1	SST	頭部欠
	2	20住	S-1	磨製石斧	6.4	3.1	1.4	塩基性岩(?)	刃部欠
	3	20住	S-1	磨製石斧	6.4	3.0	1.2	~	刃部欠
	4	20住		打製横刃形石斧	6.2	6.8	1.1	H	
	5	17住		打製横刃形石斧	3.5	7.2	0.7	S	石包丁
	6	17住		打製横刃形石斧	4.0	8.8	1.0	H	石包丁
	7	17住		環状石斧	6.9	10.2	2.2	An	
	8	18住	S-4	砥石	7.3	3.8	1.2	SST	
	9	20住	S-2	砥石	6.2	3.0	1.9	カコウ岩	
	10	20住	S-3	砥石	5.5	3.7	2.0	SST	
	11	8住		軽石	7.7	4.0	3.0	An	
	12	330+00	E-8 S-1	磨製石斧	18.1	7.0	3.1	緑色岩	ハマグリ刃
	13	23住		磨製石斧	4.8	4.8	2.7	Gs	刃部欠
	14	33住	S-7	砥石	12.1	10.1	7.3	カコウ岩類	
	15	25住	S-3	砥石	6.5	8.3	2.3	D	
	16	23住		磨製石斧	6.0	3.7	1.0	S	頭部欠
	17	330+20	E-2	磨製石斧	6.5	4.9	2.7	Gs	刃部欠
	18	グリット	北西側	磨製石斧	4.8	3.2	1.1	塩基性岩(?)	
220	1	13住	S-93	石 錘	4.6	3.7	1.9	An	
	2	33住	S-1	石 錘	7.7	4.4	2.0	細粒砂岩	
	3	3方形		棒状石器	10.1	4.1	3.2	An	
	4	53土壇		石 錘	7.4	4.8	2.0	S	
	5	80土壇		石 錘	7.5	6.6	2.2	S	
	6	329+16	W-4	石 錘	7.5	4.2	2.2	S	
	7	329+80	E-2	お も り	7.0	3.7	1.9	S	46 g
	8	329+48	W-5	棒状石器	12.7	4.2	3.0	H	
	9	329+92	S-3	棒状石器	12.0	3.0	2.5	SST	
	10	329+88	W-1	たたき石	18.3	5.6	3.5	H	
	11	330+4	W-3	石 錘	7.9	5.4	1.5	S	
221	1	2住	S-6	石 鎌	2.2	1.9	0.4	チャート	
	2	6住		石 鎌	4.0	2.3	0.8	黒曜石	ピエスエスキューエ
	3	9住	S-7	石 鎌	2.0	2.2	0.4	黒曜石	
	4	13住	S-63	石 鎌	4.2	2.6	1.0	黒曜石	
	5	13住	S-61	石 鎌	2.7	1.0	0.5	黒曜石	
	6	14住	1220	石 鎌	2.7	1.9	0.4	An	

番号 図面	遺構	No	器種	法量 cm			材質	備考		
				長	巾	厚				
221	7	16住下層	69	石	鍍	1.3	1.1	0.3	黒曜石	
	8	16住		石	鍍	2.5	1.2	0.3	黒曜石	
	9	25住		石	鍍	1.8	3.6	0.4	黒曜石	
	10	25住		石	鍍	2.1	1.4	0.3	黒曜石	
	11	26住	フク土	石	鍍	2.1	1.7	0.4	黒曜石	
	12	26住		石	鍍	2.7	1.5	0.3	黒曜石	
	13	26住	フク土	石	鍍	2.4	2.2	1.1	黒曜石	
	14	32住	S-3	石	鍍	3.8	1.2	0.3	チャート(?)	
	15	33住	S-3	石	鍍	1.9	1.6	0.3	黒曜石	
	16	35住	S-2	石	鍍	2.0	1.7	0.5	黒曜石	
	17	36住		石	鍍	2.2	2.0	0.7	黒曜石	
	18	39住	S-3	石	鍍	3.1	1.8	0.3	黒曜石	
	19	39住	S-3	石	鍍	3.4	2.1	0.5	黒曜石	
	20	39住		石	鍍	3.4	2.4	1.3	黒曜石	裏剥離なし・ピエス
	21	39住		石	鍍	3.2	2.5	1.2	黒曜石	裏剥離石鍍末製品
	22	39住	フク土	石	鍍	1.4	1.8	0.3	黒曜石	
	23	39住	S-11	石	鍍	2.0	0.7	0.4	黒曜石	
	24	40住		石	鍍	3.2	2.4	0.9	黒曜石	裏剥離有り
	25	4周溝		石	鍍	2.1	1.4	0.3	黒曜石	
	26	4周溝		石	鍍	2.1	1.4	0.3	黒曜石	
	27	5周溝		石	鍍	2.0	1.8	0.4	黒曜石	
	28	5周溝		石	鍍	2.5	1.6	0.3	黒曜石	
	29	5周溝		石	鍍	1.7	1.1	0.4	黒曜石	
	30	9周溝		石	鍍	2.3	2.0	0.7	黒曜石	
	31	2土壇		石	鍍	3.4	1.9	0.6	黒曜石	
	32	74土壇		石	鍍	2.5	2.1	0.8	黒曜石	
	33	特8		石	鍍	2.6	1.5	0.4	黒曜石	
	34	特8		石	鍍	2.1	1.4	0.3	黒曜石	
	35	特8		石	鍍	1.7	1.3	0.3	黒曜石	
	36	特8		石	鍍	2.4	1.6	0.3	黒曜石	
	37	特8		石	鍍	1.6	1.3	0.3	黒曜石	
	38	特8		石	鍍	11.4	5.6	4.1	SST	頭部欠
	39	特8		石	鍍	6.5	3.1	1.4	珪質岩	刃部欠
	40	特8		石	鍍	6.7	3.0	1.2	蛇紋岩	刃部欠
	41	特8		石	鍍	6.4	6.8	1.1	H	

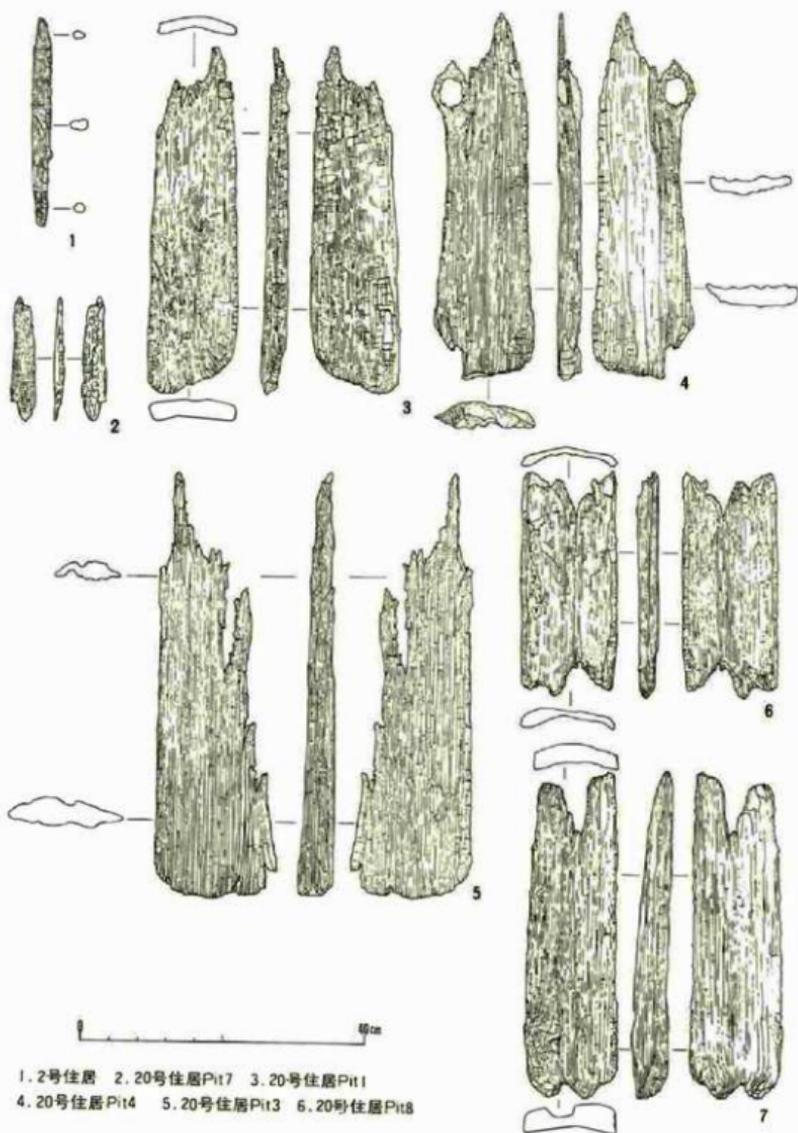
番号	遺構	No	器種	法量 cm			材質	備考
				長	巾	厚		
221	42 特8		石 鉄	2.4	2.1	0.8	黒曜石	ピエスエスキューユ
	43 特8		石 鉄	1.9	1.6	0.3	黒曜石	
	44 特8		石 鉄	1.8	1.4	0.3	黒曜石	
222	1 10溝		石 鉄	3.9	1.9	0.8	黒曜石	裏面剥離あり・ピエス
	2 12溝 329+80	W-2	石 鉄	1.7	1.5	0.4	黒曜石	
	3 320+20	W-4	石 鉄	2.3	1.3	0.4	黒曜石	
	4 330+68	E-5	石 鉄	1.8	1.3	0.3	黒曜石	
	5 329+68	W-5	石 鉄	2.7	2.0	0.4	黒曜石	
	6 329+68	W-4	石 鉄	1.5	1.0	0.3	黒曜石	
	7 330+60	E-2	石 鉄	2.0	1.5	0.3	黒曜石	
	8 329+16	W-4	石 鉄	2.8	1.3	0.4	黒曜石	
	9 329+70	W-5	石 鉄	2.9	1.9	0.5	黒曜石	
	10 329+80	W-3	石 鉄	1.9	1.6	0.4	黒曜石	
	11 329+84	E-1	石 鉄	2.7	1.9	0.3	黒曜石	
	12 330+16	W-4	石 鉄	2.1	1.4	0.5	チャート	
	13 329+68	W-2	石 鉄	2.4	0.7	0.5	黒曜石	
	14 329+64	W-3	石 鉄	1.5	1.5	0.4	黒曜石	
	15 G		石 鉄	2.4	1.0	0.6		
	16 330+00	E-5	石 鉄	2.0	2.7	0.6	黒曜石	
	17 329+64	W-3	石 鉄	2.2	2.2	0.9	黒曜石	
	18 329+60	W-4	石 鉄	2.2	1.9	0.8	黒曜石	
	19 329+64	W-3	石 鉄	2.4	2.5	0.6	黒曜石	
	20 7住	CP中	石 鉄	3.6	7.0	0.8	S	
	21 20住		石 鉄	2.9	3.8	0.9	チャート	
	22 特7		打製横刃形石斧	4.4	6.0	4.2	黒曜石	
223	1 4住	S-11	磨製石鉄	5.6	2.5	0.4	S	横刃形
	2 6住	S-2	磨製石鉄	3.4	2.2	0.3	S	
	3 8住	床	磨製石鉄	3.7	1.8	0.3	雲母片岩	
	4 8住	7-S-1	磨製石鉄	3.3	1.9	0.2	S	
	5 16住	S-1	磨製石鉄	2.6	2.1	0.3	S-1	
	6 17住	床	石鉄未製品	3.5	2.5	0.3	床	
	7 17住	床	石鉄未製品	3.9	2.7	0.4	床	
	8 17住	床	磨製石鉄	6.8	3.6	0.5	床	
	9 18住	S-1	磨製石鉄	5.0	2.7	0.6	S-1	
	10 18住	S-2	磨製石鉄	6.8	3.1	4.0	S-2	

番 号 図面	遺 構	No.	器 種	法 量 cm			材 質	備 考			
				長	巾	厚					
223	11	18住	S-3	石 織 未 製 品	5.0	3.0	5.0	雲母片岩	左脇欠 刃部のみ		
	12	18住	S-6	玉	2.1	1.5	3.0	"			
	13	38住	7S-4	磨 製 石 織	4.4	1.6	3.0	S			
	14	19住	床	磨 製 石 織	7.1	1.0	0.5	S			
	15	1号溝	S-1	磨 製 石 織	5.9	2.9	0.3	雲母片岩			
	16	特 8		磨 製 石 織	6.3	2.5	0.3	S			
	17	18	S-6	磨 製 石 織	2.1	1.6	0.2	S			
	18	10溝		磨 製 石 織	4.0	2.2	0.3	S			
	19	10溝		磨 製 石 織	4.0	2.2	0.3	S			
	20	3住		石 製 品	1.9	0.9	0.9	滑石			
	21	13住	27		2.8	1.2	1.0	コハク			
	22	5周溝			2.2	1.1	1.2	滑石			
	224	1	17住		土 偶	11.9	6.7	3.6			頭部及腕部欠
		2	13土壇		? 土 偶	4.9	5.4	4.3			
		3	5周溝		?	6.2	3.4	1.6			
		4	1住	P-15	土製有孔円盤	2.4	2.4	0.5			
		5	3周溝		土製有孔円盤	2.4	2.5	0.9			
		6	表採		縄文土製円盤	2.7	2.8	0.9			
		7	28土		土 製 円 盤	3.4	3.6	1.4			
		8	7住		縄文土器口縁 土製円盤	3.1	3.6	1.4			
		9	7住		土 製 円 盤	2.8	2.8	1.0			
		10	7住	フク土	土 製 円 盤	4.3	4.4	1.2			
11		13住	P 14	土 製 円 盤	3.4	3.7	1.1				
12	20住	86	縄 文 土 器 片	5.5	5.6	1.2					
13	329+72	W-2	土 製 円 盤	3.8	3.6	1.5					
14	9住	フク土	耳 飾	3.3	1.9	1.1		黒色表面に赤彩痕有り			
15	18住	P-5	用 途 不 明	5.2	2.0	0.8		黄褐色土製粘土紐			
16	24住		瓶 底 部 ?	2.9	1.8	1.2		不明土製品			
17	10住	SI	石 製 紡 錘 車	5.0	1.5	1.8	安山岩				
18	16住	88	土 製 紡 錘 車	4.5	1.4	1.2					
19	25住	P-13	土 製 紡 錘 車	6.4	1.2	0.8					
20	25住	P-12	土 製 紡 錘 車	5.7	2.2	1.2					
21	33住	P-262	土 製 紡 錘 車	5.2	1.1	1.6					
22	12溝	E-1	土製スプーン	8.3	1.8	2.5					
23	330+00	Eミゾ	土製スプーン	6.0	1.4	2.3					

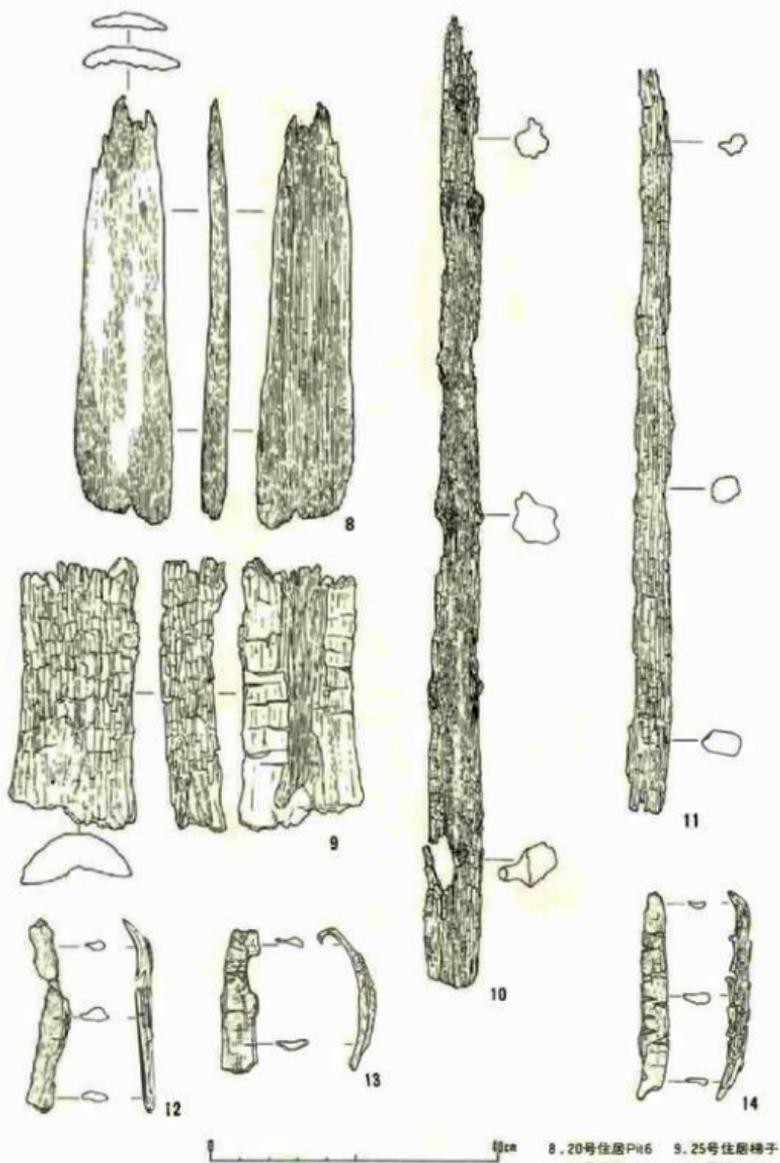
番号 図面	遺構	No.	器種	法量 cm			材質	備考
				長	巾	厚		
225	1	特7	銅製品				銅	
	2	不明	ガラス玉	0.8	0.7	0.5	ガラス	
	3	不明	ガラス玉	0.8	0.8	0.5	ガラス	
	4	不明	ガラス玉	0.7	0.7	0.6	ガラス	
	5	不明	ガラス玉	0.7	0.8	0.5	ガラス	
	6	不明	ガラス玉	0.8	0.8	0.6	ガラス	
	7	不明	ガラス玉	0.8	0.7	0.5	ガラス	
	8	不明	ガラス玉	0.7	0.7	0.6	ガラス	

〔註〕石材の材質略記号は次のとおりである。

mH	}	点紋粘板岩
eH		
H		ホルンヘルス
An		安山岩
D		デイサイト
DT		デイサイト質凝灰岩
S		粘板岩
SST		砂岩
GS		緑色岩
T		凝灰岩

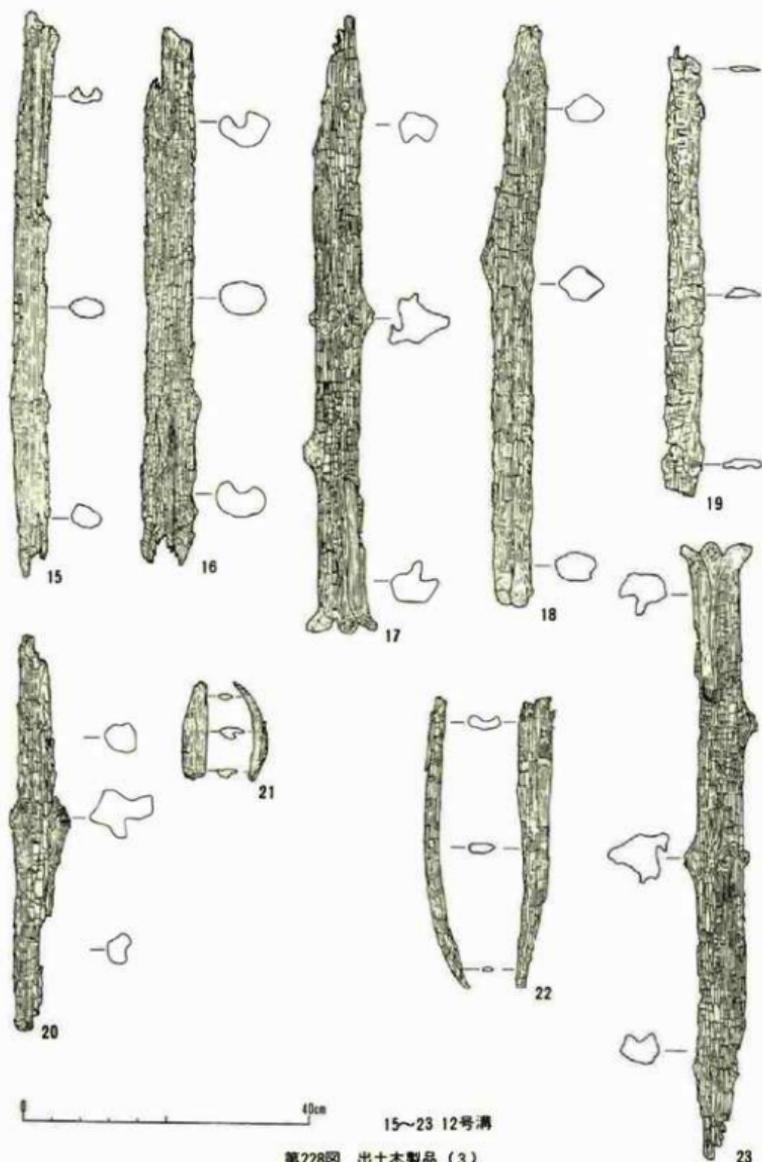


第226图 出土木製品(1)



8. 20号住居Pit6 9. 25号住居梯子
10. 21号住居 11-14. 12号溝

第227图 出土木製品(2)



第228图 出土木製品 (3)

第10表 金の尾遺跡遺構出土遺物内訳

遺構	土器 (弥生)							(縄文)			石器							特殊遺物															
	住居	壺	甕	鉢	坏	高坏	台付壺	碗	器台	瓶	手捏	その他	深鉢	浅鉢	その他	打製斧	横刃	磨製斧	すり石	凹石	多孔石	石皿	磨製鎌	打製鎌	石棒	その他	土偶	正刷製車	具飾り	メシコ	土有孔内蓋	製玉	
1 住	1														1			1														1	
2 住		1				1									1									1									
3 住	8	2				2									2				2			1											
4 住	7					1				1					1					1			1										
5 住																																	
6 住	16	3	1				2			1					1								1	1								3	
7 住												8	1		4	2				1						1							
8 住	1	1				1									2				1					2									
9 住	2	1								1							1							1									
10 住												3	1		7					3	1												
11 住																																	
12 住			1																														1
13 住												17		手捏	2	17	3	1		4					2								
14 住	2																							1									
15 住	5	2																															
16 住	5	2				2									1								1	2									
17 住	4	1				1				1	1					2							2	1									
18 住	5	1				1				1													4	1									
19 住	4	1				1																	1										
20 住	3	3								1						1	2	1	1				1										
21 住	8														1	1			2														

遺構	土器 (弥生)									(縄文)			石 器										特 殊 遺 物															
	住居	埴土	壺	鉢	坏	高坏	台付甕	甗	器台	瓶	手捏	その他	深鉢	浅鉢	その他	打製斧	横刃	磨製斧	すり石	凹石	多孔石	石皿	磨製鎌	打製鎌	石棒	その他	土偶	土紡錘	土製車	耳飾り	メソコ	土存孔	製内盤	玉				
22 住																																						
23 住												2		1	3		3	3																				
24 住	6	5													1						1																	
25 住	8		2			2																	2			砥 ₁			2									
26 住	3	1																					3															
27 住																																						
28 住				1		3					1																											
29 住	9	3				2					1								2	1	1																	
30 住	5	1				2									1																							
31 住	2		1																																			
32 住	1					1										1							1															
33 住	7	1	1			3									1			1					1			砥 ₁	鏡 ₁		1									
34 住	9	3				1					1				1																							
35 住	3	1					1								2	1				2			1															
36 住	7	5				5					1								1	1			1	1														
37 住																																						
38 住	1	2				2													1				1															
39 住												8																										
40 住												4			1									1														
計	132	41	6			31	3	1	2	6	4	1	42	2	3	48	13	7	14	16	4	2	13	26			1	4	2	4	4	1		1				

第10表 特殊遺構遺物点数

遺構	土器(弥生)										(縄文)			石器										特殊遺物								
	壺	甕	鉢	坏	高坏	台付甕	碗	器台	甌	手捏	その他	深鉢	浅鉢	その他	打製斧	横刃	磨製斧	すり石	凹石	多孔石	石皿	磨製鎌	打製鎌	石棒	その他	銅製品						
特 1											1																					
特 2											2																					
特 3																																
特 4																																
特 5																1		1														
特 6																																
特 7																1												1				
特 8																		1	3				1	12								
特 9																																
特 10																																
特 11																1																
特 12																																
特 13													1																			
計											4					3		2	3				1	12			1					

第10表 方形周溝墓遺物点数

遺構	土器 (弥生)									(縄文)			石器							特殊遺物												
	甕	鉢	鉢	坏	高坏	台付甕	碗	器台	瓶	手捏	その他	深鉢	浅鉢	その他	打製斧	横刃	磨製斧	すり石	凹石	多孔石	石皿	磨製鏃	打製鏃	石棒	その他	土製有孔円盤						
1 周					2									1																		
2 周		1																														
3 周	2	1			1									2										1							1	
4 周		1																				2										
5 周	1	1																				3										
6 周														1			1															
7 周		1															2															
8 周																																
9 周	1	2			1									3			2					1										
10 周																																
11 周		1																														
12 周																																
13 周		1																														
14 周		2																														
15 周																																
16 周	1				1									5																		
計	10	6			5									12			5		1			6		1								1

第10表 清出土遺物点数

遺構	土器 (弥生)										(縄文)			石 器										特殊遺物						
	甕	壺	鉢	坏	高坏	台付甕	碗	器台	甌	手捏	その他	深鉢	浅鉢	その他	打製品	横刃	磨製斧	すり石	凹石	多孔石	石皿	磨製鉄	打製鉄	石棒	その他	土製スプーン				
1																						1								
2																														
3																														
4																														
5																														
6																														
7														1																
8																														
9																														
10														3	1							2	1							
11																														
12		2	3											2			6	3					1	丸石 2		1				
13																														
14																														
15																		2												
計	2	3												6	1		6	5				2	2	2		1				

第 IV 章 ま と め

第 1 節 縄文時代

1. 本遺跡から出土した縄文時代の遺物で、最も古いものは、押型文土器である。第 185 図 1 に示したもので、口唇部に斜方向の刻みがあり、口縁部の下には無文部 1cm をあけて山形押型文が横方向に施文されている。1 片のみであり、破片周囲は磨滅していることから、調査区域外からの流入品とも考えられよう。

縄文前期では、諸磯 b・c 式、十三善提式の土器が見られ、このうち遺構に伴うのは、十三善提式である。39 号住居址出土土器は、半截竹管により集合沈線が施される一群と、縄文地文だけの一群、縄文地文に結節浮線文が貼付けられるもの、細粘土紐が平行状又は波状に貼付けられるものなどがある。これらの一群のうち集合沈線文は、十三善提式土器群中でも比較的新しい時期に属するものであろうか。この時期の一括資料は、東八代郡境川村の小黑坂南遺跡群で発見され報告されている。

なお第 229 図 1、2 の底部には特殊な敷物の圧痕が見られる。この点については第 2 節で詳述する。

五領ヶ台式土器はその大部分が破片であり、器形の明確なものは無いが、集合沈線文が施されたものを主体とし、古手に属している。

中期中葉の遺物は豊富で、7 号、13 号、40 号住居である。この 3 軒の住居は藤内Ⅱ式に属し、1 モメントの集落の一部と思われる。7 号住と 13 号住居が 2 軒で 1 単位となり、40 号住居は、1 軒のみか、あるいは未調査区の住居と 1 単位になっていたと思われる。自然堤防末端の両側に広場をはさんで占地していることが分る。

23、27 号住居は縄文中期終末の曾利 V 式土器が出土する。23 号住居は住居のプランが不明であるが、完形筒形土器出土、地床炉などから住居址としたものであるが、方形石囲炉をもつ 27 号住居とは炉の形態が大きく異なるという相違を見せる。しかし、この周辺には数多くの土壌が造られ、覆土中からも多量の土器が出土するなど、中期終末の遺跡として特徴的な傾向を示す。

土器で特筆すべき例がある。第 70 図 44~52、第 190 図 117~130 の結節縄文が施された土器である。この土器の時期は中期終末であり、本県では初見であろう。このような文様は、長野県伊那谷で発達するものであり、彼我の関係を示しているのであろうか。だとすれば、八ヶ岳山麓のルート进行を想定するより、南アルプス横断ルートを考えなければならない。

なお、曾利 V 式と加曾利 EⅣ式の関係であるが、この点について、最近米田明訓氏が本県八ヶ岳山麓の柳坪遺跡で述べている。曾利式土器終末が加曾利 E 終末との時点まで併行するの議論になったこともあるが、少なくとも中部では称名寺式直前まで曾利式は継続するものと思つてよかろう。第 188 図 83 は曾利 E 式の折衷形式と言うべきもので、八の字文と縄文が沈線間に交互に施文されている。しかし、このような例は多いわけではない。第 164 図 2、3 の特 2

号土壌出土土器2個は、両型式伴出の最も良好なセットと言える。

後期の称名寺式・堀の内式土器等は極めてわずかであるが出土している。

2. 石器は、縄文～弥生時代のをあわせて図にしたが、第196図12は偏平蛤刃磨製石斧の未成品である。製作工程を知る上で貴重な資料と言えよう。本遺跡では打製石斧の量が多く、磨石、凹石、多孔石なども多い。これに対して石皿、石棒等が少ないが、こうした傾向は、八ヶ岳山麓の縄文中期の遺跡の特徴をもっており、諏訪湖盆地、伊那谷等とは異なった生産活動によって生計を営んでいたものと思われる。即ち金の尾遺跡は八ヶ岳タイプの縄文時代中期集落と言うことができよう。

第2節 底部圧痕

底部圧痕（第229図、図版48、49）

39号住居跡出土土器のうち2点に、以下に示す特殊な底部圧痕が認められたので記しておく。いずれも条が同心円状を呈する圧痕であり、中期後葉以降に多くみられる網代痕とは明らかに別のものである。同心円状を呈し、かつ非常に密に編まれているところから、カゴ底圧痕と考えられる。

第229図中の1.2は本住居跡出土で、3は釈迦堂遺跡群S-1区23号住居跡（五領ヶ台式期）から出土したものを参考のため載せることとした。以下に個々の資料について記すことにする。なお、文中のタテ・ヨコは、カゴの形態を考慮し、中央から放射状に広がる条をタテ条、それに同心円状に絡む条をヨコ条とする。

1. 底部は完存している。底径9.0cmを計る。底部は中央が約2.5mm凹んでいるが、周縁部を12.3mmの幅で調整した痕跡があり、製作時にはこの凹みはさらに深いものであったと考えられる。

圧痕は拓本ではほとんど判らないが、モデリング陽像では詳細な部分まで観察することができる。図版49の1-b'（図版中の番号は第229図中の番号に対応し、aは実物、b・b'はモデリング陽像を示す。以下、図版を略す。）では部分的ではあるがタテ条、ヨコ条ともに認められる。同心円の中心から20mm前後の部分によく残っており、その部分でのタテ条は2mmほどの間隔、ヨコ条は1～1.5mmの幅のものがほとんど隙間なく詰まっているようにみられる。また、別の部分ではタテ条は全くみられないが、ヨコ条のみが1cmの間に5本確認できる。つまり、ここでのヨコ条の間隔は約2mmということになる。しかし、北陸地方でのカゴ底圧痕例をみてもこのような目の細かいつくりのものは存在しない。渡辺誠氏によれば、石川県野々市町御経塚遺跡の編布圧痕は目の細かいものであるが、タテ糸、ヨコ糸ともに2mm前後の太さのものが存在するということである。本資料はカゴと編布の違いはあるものの、それと同様か、あるいはさらに細かいつくりと考えられる。

本資料は、モデリング陽像からもタテ条に対しヨコ条が同心円状に絡んでいることは明らかであり、カゴ底圧痕と考えられるが、その編み方については後述する。ただ、このように目の細かいつくりであれば、条に使用される材も繊維以外には考えられず、カゴというより、袋の

ような柔軟な編物を想定すべきであるかもしれない。

2. 底部は一部欠損している。底径 11.5cm を計る。底面は 1mm 凹んでいる。1 と同様の調整が周縁部になされており、その幅は約 20mm である。従って、圧痕は中央部にのみ残っているが極めて不鮮明である。タテ条およびカゴ底中央は全く残っていないが、ヨコ条の間隔は 2～2.5mm 程度と推定される。また、ヨコ条のうち一目一目が明らかな部分が一部残存しており、タテ条は 2mm 程度の太さとなろう。なお、ヨコ条は 4 周以上存在する。

3. 底部はほぼ完存。底径 14.4cm を計る。カゴ底中央は残存していないが、一部にタテ条らしき圧痕があり、約 1mm の太さである。ヨコ条はかなり密に詰まっており、1cm の間に 4 条存在し、太さは 2mm 程度と推定される。

カゴ底中央部らしき部分を中心とした直径約 6cm には圧痕がほとんどなく、そこから外側に急に条間の詰まった同心円状圧痕がみられるようになる。その境の部分には、一部ではあるが、放射状ではなく明らかに縦横の条が直交した圧痕（3-b'）が確認される。網代痕である。同心円状の圧痕はこの部分より外側となる。この同心円部分も一目一目の状況を見ると、ヨコ条に対するタテ条の角度がほぼ直交するもので、少なくともモジリ編みとは考えられない。これも網代編みの可能性が強い。従って、本資料は中央部の直径 6cm 部分を網代編みにしたのちその外側で材を割るか、新たに加えるかして、それらをタテ条として同心円状の網代編みにしたものと思われる。6cm の部分を境として急に条間の詰まった圧痕がみられるのは上記の編み方によるものであろう。本資料もまたタテ条の太さは 1 と同様であり、小型の丁寧なつくりのものであろう。なお、ヨコ条は 16 周以上存在する。

以上のように 3 点の資料の概要を記したが、いずれも中央部には同心円状の圧痕がみられない。これは、3 で示したように、ある程度中央部を網代編みにしたのち、それぞれの材を割るか、新たに加えるかしてタテ条とし、そこにヨコ条を新たに同心円状に絡ませる。あるいはタテ条の一本をヨコ条としてスタートさせるなどの方法でカゴが編まれたと考えられる。その編み方も、既報告のカゴ底圧痕にみられる、2 本 1 単位でヨコ条をなすモジリ編みではなく、同心円部分も 1 本超え・1 本潜りの網代編みと考えられる。

タテ条、ヨコ条ともにその材は非常に細いものであり、竹や藁などは考えにくい。おそらく繊維であろう。また、繊維のような柔軟な材であればこそ、このような緻密なカゴを作ることが可能であったと考えられる。

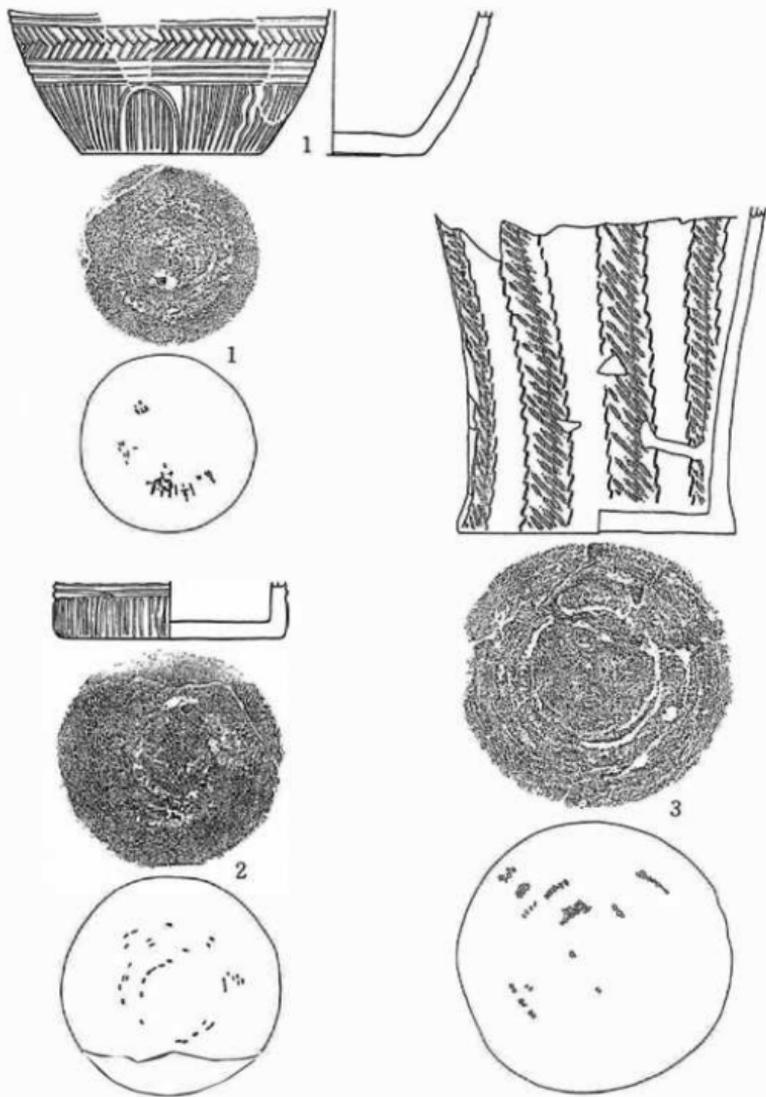
なお、山梨県内では前期末～中期初頭の類例が本資料を含めて 8 点確認されているが、これについては別稿にまとめてある。また、最近では福井県浜貝塚で該期の編物実物が出土しているのに加え、石川県真脇遺跡から該期のカゴの実物が出土したことを記しておく。

（長沢宏昌）

参考文献

長沢宏昌 1987 「縄文時代前期末～中期初頭の土器底部みられる編物痕について」

『研究紀要』3号 P1～P14 山梨県立考古博物館・山梨県埋蔵文化財センター 山梨県中道町



0 20cm

第229圖 土器底部印痕

- 森川昌和 1979 「縄と編物」「鳥浜貝塚」 p 143 ~ p 145 福井県教育委員会 福井
- 山本直人 1986 「底部丘痕・編物・縄」「真脇遺跡」 p 248 ~ p 260 能都町教育委員
会 石川県能都町
- 渡辺 誠 1983 「編布およびカゴ底丘痕について」「野々市町御経塚遺跡」 p 339 ~
p 346 野々市町教育委員会 石川県野々市町

第3節 弥生時代（第230～235図）

土器

住居址及び周溝墓中より出土した一括土器を、文様構成、器形から分類すると次のように分けることができよう。

壺形土器

1類：頸部に櫛状工具によってT字文、又は平行直線文、格子目文が施行されるもので、1、2は外面全部と内面は頸部より上に赤色の塗彩が行なわれる。胴部は算盤玉形を呈し、胴最大径は中央よりやや下に位置する。頸部はくの字に屈曲し、斜め上方に広がって口縁を形成するが、口唇は水平に外反する。3～5はT字文が頸部に施されるが、赤彩はない。頸部も弧状を描いて外反口縁となる。6は口唇に4ヶ所の突起が見られる。

2類 a：7、9は頸部と口唇部に櫛描波状文が施されるもので、8、10とは口縁部の形態が異なる。

b：8はT字形の口縁をもち、口縁部には波状文の上に4本の粘状文の上に4本の粘土紐が、恐らく4単位で貼付けられる。

c：10は口唇部が折り返し口縁となっているもので、頸部、口唇部に波状文が施される。

d：11は素縁の口唇部と、口縁内側に波状文が施される。

この他に、波状文の下に沈線による三角区画を連続させ、その中を斜線、格子目で充填させるものが破片等で出ている。

3類：頸部に簾状文が施される壺で、その他の文様を有するものと無いものの2種類に分けられる。

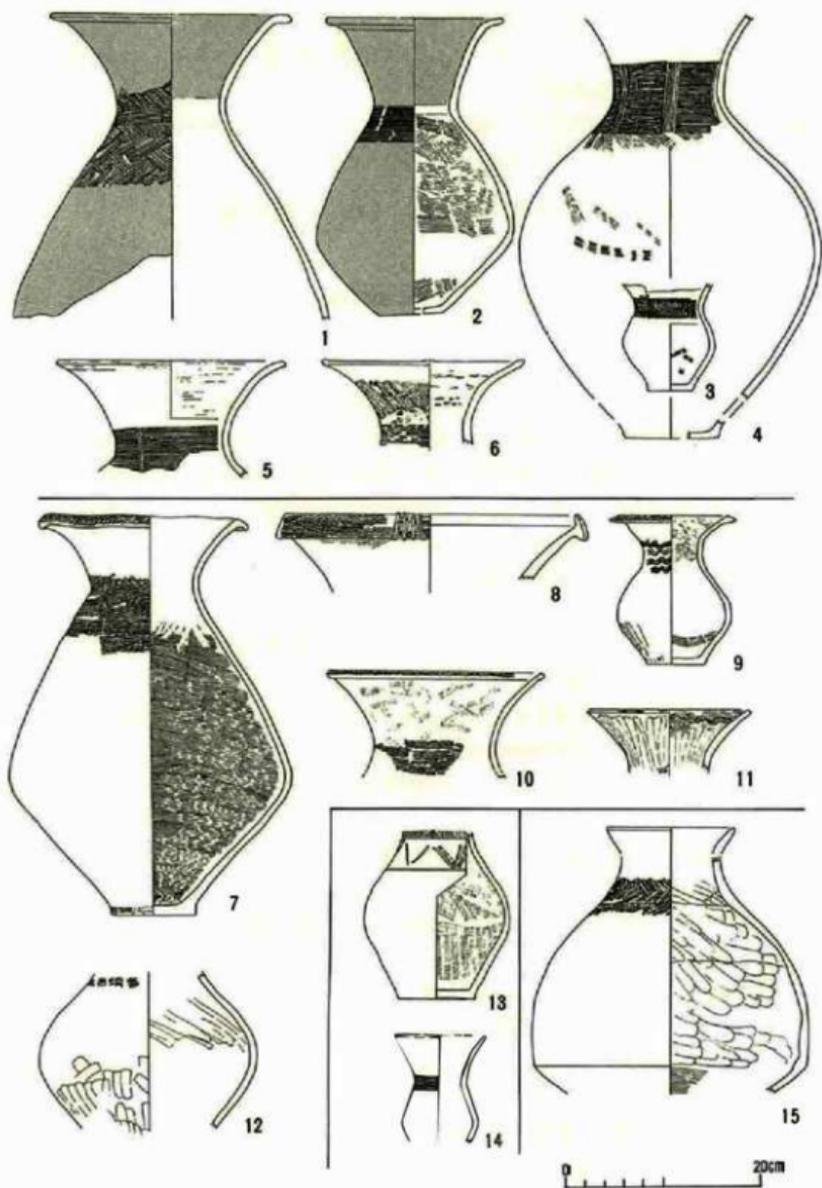
a：頸部簾状文の下に横線をめぐらし、その間を鋸歯状区画に沈線で区画したものである。2類eと近い関係が想定されよう。

b：頸部に簾状文が施文されるだけのものである。

4類：胴部が大きく膨らみ、胴下方部が最大径となって、くの字に折れて底部に達する。口縁は欠損して不明であるが、図示した状態よりも大きく外反するであろう。頸部に櫛状工具で鍍杉状の刺突文を施す。

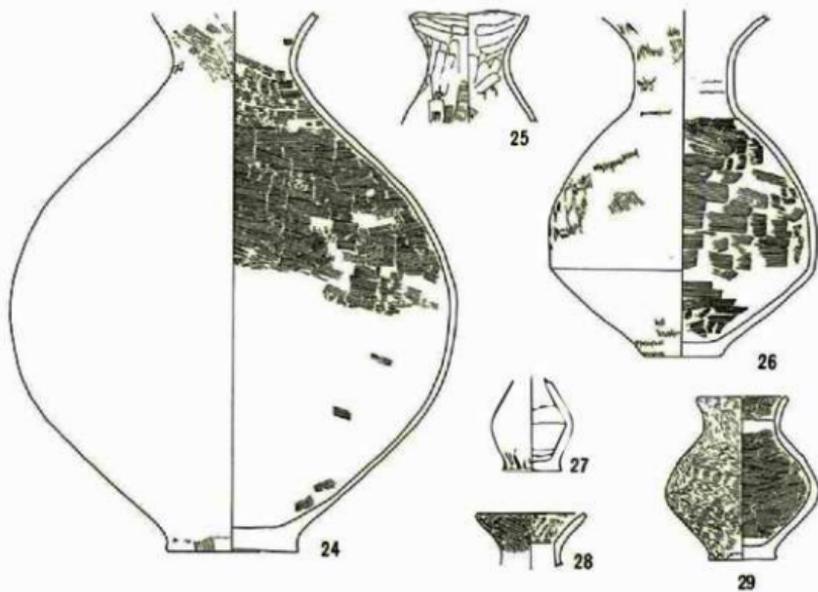
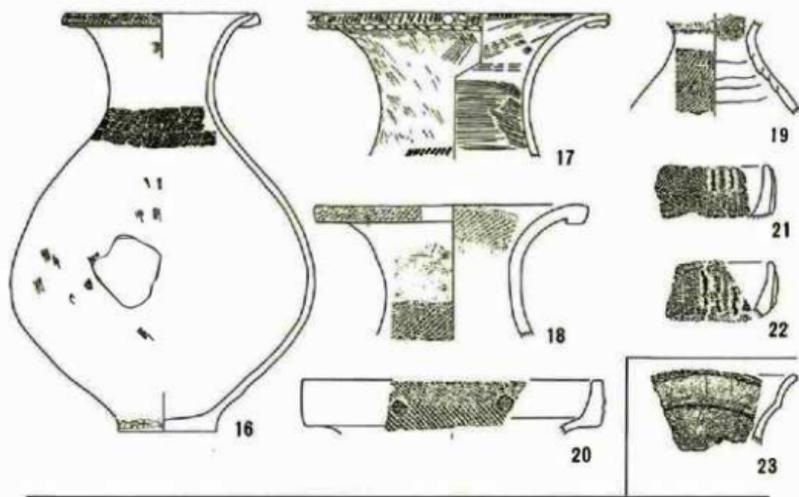
5類 a：16～22で、縄文を施文されたものを一括している。16～18は頸部から半円を描いて外反した口縁の先端は折り返され、その端部及び内面などに縄文が施される。頸部も縄文である。

b：20～22で、直立した口縁外面に縄文が施文され、円形貼付文、棒状貼付文が施されるもの

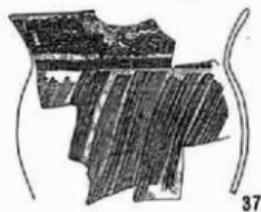
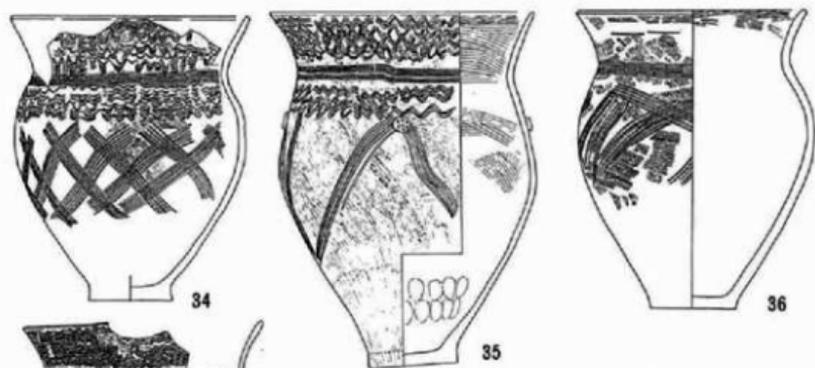
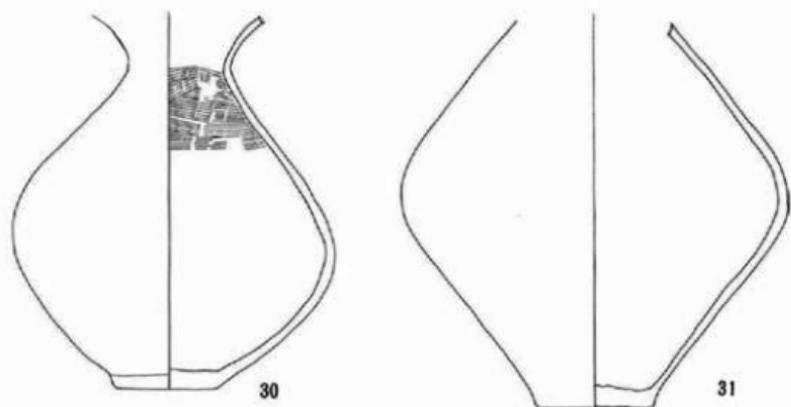


第230圖 弥生土器分類圖(1)

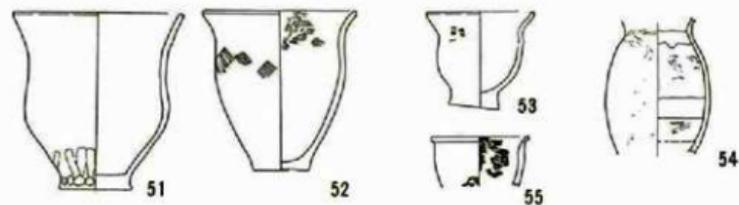
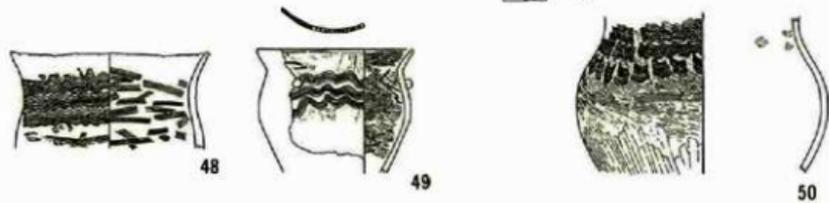
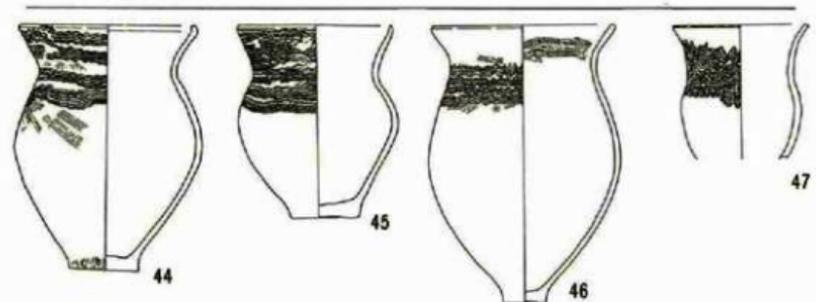
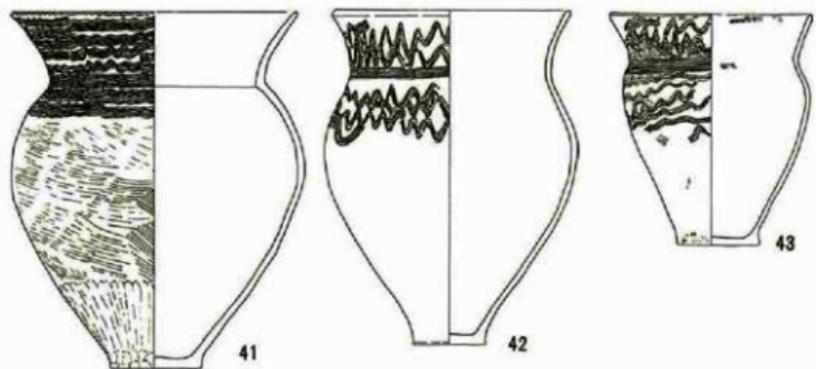
1~6壺1類、7~12壺2類、13、14壺3類、15壺4類



第231图 弥生土器分類図(2)
16~22壺5類、24~33壺6類

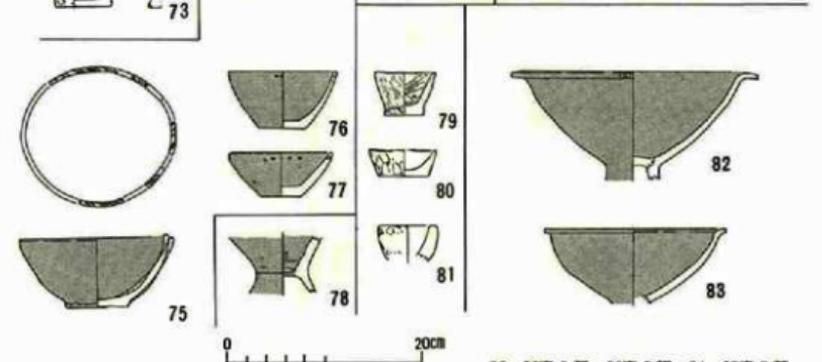
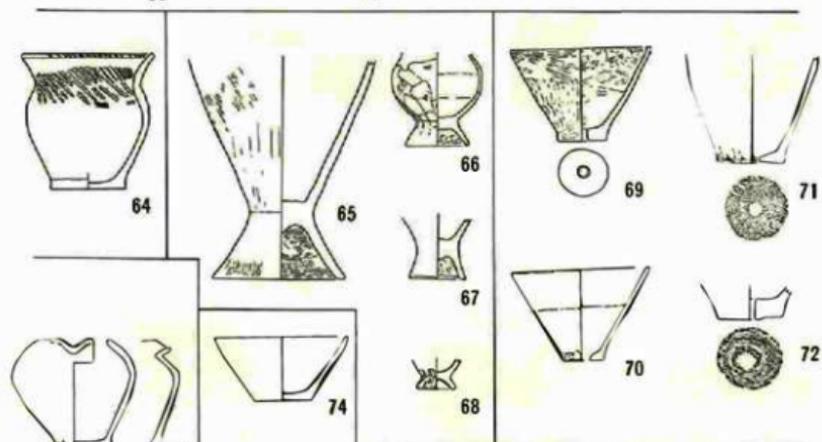
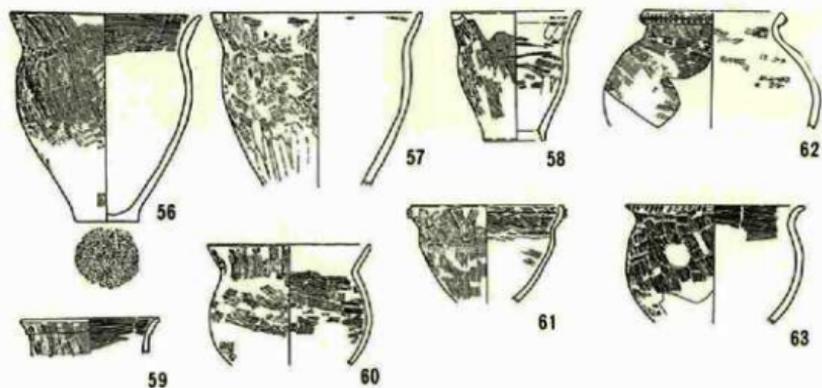


第232圖 弥生土器分類圖(3) 32、33第7類、34~37壺1類、38~43壺2類



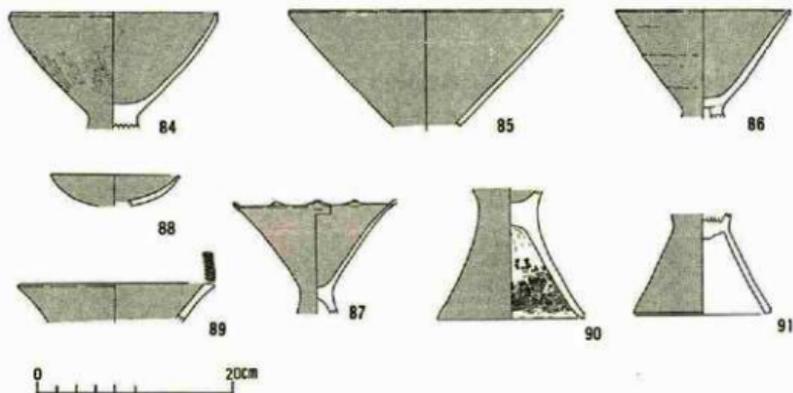
第233图 弥生土器分類图(4)

44~50壺3類、51~55壺4類



第234图 弥生土器分類図(5)

56~62變5類、63變6類、64~67變7類、
68~71瓶、72片口土器、73~76环、鉢、
77器台、78~80手捏土器



第235図 弥生土器分類図(6)

である。これらは球状の胴部となろう。

6類 a: 24~27、30、31で、無文の土器を一括している。刷毛目整形後にへらで磨いて刷毛目をほとんど消している。25はやや整形が荒い。又、24、30は球胴を呈し、26は胴下半に稜をもって屈曲する。31は最大径が胴中央部に位置するものである。

b: 28、29で、内外面に刷毛目が残っているものである。

7類: 32、33で赤色塗彩された壺である。33は胴上半が無いので、ここに含めるかどうか分らない。

壺形土器

壺は大きく8類に分けることができる。

1類: 頸部に簾状文があり、胴部に格子目文かその退化した文様をもつものである。34は口縁と胴部上半に波状文が施される点では35と同じであるが、35は格子目文ではなく斜線が左右交互に施され、円形貼付文が付けられる。36は波状文を持たず、37は口縁のみ波状文が施されるなど、バリエーションがある。

2類: 38~43で、頸部の簾状文をはさみ、口縁部と胴部下半に波状文が施される。これらの波状文は簾状文を境に、口縁部は下から上へ、胴部は上から下へと施文される傾向がある。

3類: 44~50で、波状文が胴部より上半に施文されるものである。46~49は口縁部まで波状文が施文されていないが、47、48、49は、口唇部に刻みがある。50は波状文帯の下に平行単線文が施されるが、こうした文様はあまり多くない。

4類: 無文系の壺を一括している。形は51~53が深鉢形で、54は頸部が明瞭にくびれている。55は浅鉢形であろうか。

5類: 56~62で、刷毛目整形痕が内外面に残るもので、形は深鉢形と推定される。

a: 56~58、縦方向に刷毛目が施され、内面は横に刷毛目整形が行なわれる。深鉢形である。

b: 59は口縁が折り返されている特異な壺で、あまり類例はない。

c: 60～63は胴部が球形を呈する甕であるが、62、63は口唇部に刻み目が付けられるものである。

6類: 64の1点のみで、口唇及び頸部に縄文が施されたものである。

7類: 65～68の台付甕である。完形品はなく、球胴をもつ64と、直線的に広がる63などがあるが、組成上は量が少ない。

甕

a、69、70の鉢形を呈するもの

b、71の深鉢形を呈するものがある。

片口土器

無頸壺形の一部口唇が外に開いた片口土器であり、他にはない。

鉢形土器

赤色塗彩された鉢のうち、口縁部に穴の穿たれたものが76、77である。75は口唇部に刻みが施された楕円形をしている。74は無彩である。

器台形土器

78は高坏のように見えるが、坏と脚の接合部には穴があいており、器台と言えよう。

小型土器

79～81は手捏の小型土器である。

高坏

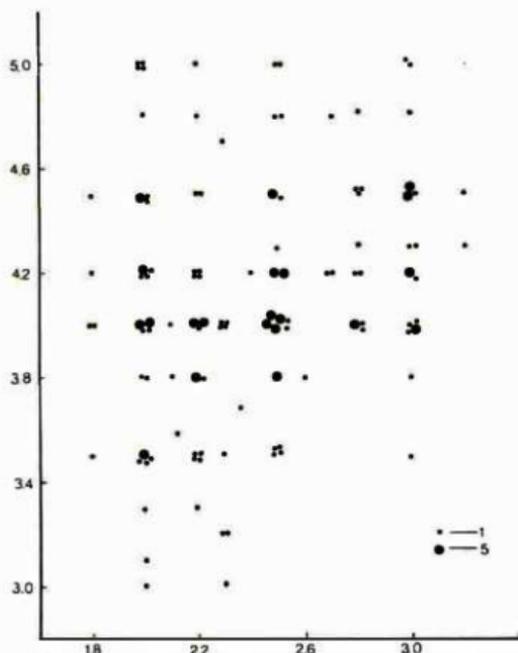
82、83は坏体部が碗形をしており、口唇が外反して水平になる。82は4ヶ所に突起がある。84は碗形坏部の口縁が先端で直立するものである。85、86は直線的に外傾した坏体部をもつもので、87は口唇部に5ヶ所の突起をもつ。88は皿状の坏である。89は口唇部に細かい縄文が見られる。90、91は高坏脚部で、直線的台形を呈している。

これらの土器を見ると、いくつかの特徴を認めることができよう。まず、信州系の土器群とどのような関係にあるかである。壺形土器1類は長野県の北信地方に分布する弥生時代後期中頃の箱清水式土器と共通性の高いもので、壺3類の14も同じである。壺3類13は、箱清水式の前段階の吉田式に比定されよう。壺2類aの口縁は河内地方の第三、Ⅲ様式に見られる口縁部と類似しており、(佐原真編『弥生土器Ⅰ』) この地域からの間接的、直接的影響を想定できる。壺5類aは口縁部に特徴のある土器で、静岡県伊場式、徳光式などに見られる壺口縁と近似する。同5類bは関東南部地域に見られる弥生式土器と類似するものであろう。壺6類は静岡県東部地域に多い目黒身式、尾ノ上式などと近似するものであろうか。長野県岡谷市橋原遺跡の壺B類中に同じようなものがあり、こうした無文の土器は各地で一般的に使用されているかもしれない。7類は箱清水系土器であろう。

甕は1類～3類は箱清水系土器で、4類も同じ系統に含まれるかもしれない。岡谷市橋原遺跡甕E類中にも見られる。甕5類cは、あるいは台付甕の体部であるかもしれない。甕6類は関東系の土器であろうか。甕7類は台付甕であるが、この器種は少ない。信州系の後期土器群にはあまり台付甕が多くないので、この台付甕は駿豆系か関東系かということになろうか。

坏、鉢、高坏等は北信地方の箱清水式の影響を受けたものが多い。

これらの土器の編年的位置は弥生時代後期に含まれると思われる。後期でも中頃に中心を置くもので、壺2類e及び3類a、甕1類は後期前半に多く、壺5類bは、後期後半に位置するであろうから、金の尾遺跡の集落及び周溝墓は、後期中頃に営まれたもので、短期間に居住され、廃絶されたものと推定されよう。



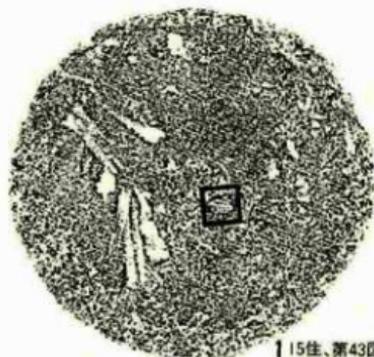
第236図 金の尾遺跡16号住居出土炭化米粒長規模分布図

第4節 16号住居出土炭化米について

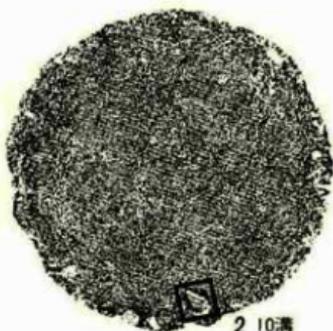
本住居は火災によって住居上屋が崩壊した後、炭化材等が攪乱されることなく人工的に埋め立てられた可能性のあるもので、住居内から完形土器が出土しないこと、炭化米等が出土することから、祭祀儀礼的行事を経て埋没したことが想定される。つまり、不慮の火災による住居廃棄ではなく、土器等を搬出した後に火を放ったものであるが、その目的は不明である。なお近在の住居も火災を受けた様子があるので、移動する為に集落を焼いた可能性もあろう。

さて、本住居出土の炭化米は、住居中央部の炭化材の間に、炭等に混って分布していた。米は灰や炭の小片と混っており、纏まっていたものではないが、分布地域は中央部である。従って、米は壺や袋に入れられて床面上に置かれていたものではなく、皿に少量盛られていたか、袋に少量詰められて、屋根裏等に置かれていたものが、住居上屋の崩壊とともに床に落ちて散らばったものと思われる。この灰の中を分析していないので、米以外の植物遺体があるかどうか不明である。

第236図は、本住居の出土炭化米中200粒を任意に選びその法量を計測したものをまとめた表である。なお次表は長野県岡谷市橋原遺跡出土炭化米と比べてある。



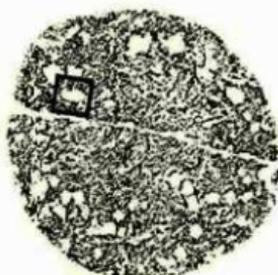
1 15住、第43図No. 3



2 10溝



3 35住



4 17住、第50図No. 6



5 グリッド



6
19住、第57図No. 5



7
25住
第76図
No. 9



8
グリッド
第194図
No. 202



9 グリッド、第194図No. 198



第237図 土器底部モミ圧痕

遺構名	粒数	粒長				平均粒長		(100粒)重さ
		最大長	最大幅	最小長	最小幅	長	幅	
金の尾16号住	200	5.1	3.2	3.0	1.8	4.26	2.44	0.65 g
橋原59号住	1000	5.6	3.5	3.4	1.9	4.58	2.72	
“ 64号住	100	5.4	3.2	3.0	1.9	4.45	2.65	0.66 g
“ 58号住	100	5.3	3.2	3.7	1.8	4.53	2.59	
“ 10号住	100	5.3	3.2	3.7	1.8	4.38	2.54	

橋原59、64号住居は後Ⅰ期、58号住居は後Ⅱ期、10号住居は後Ⅲ期で、平均値の長さ割る幅の比は、金の尾16住居が1.74、橋原59号が1.68、同64号が1.68、同58号は1.75、同10号が1.72である。橋原遺跡では、短粒から長粒へと移行していることが分かるが、金の尾は橋原58とほぼ同じ数値であり、長粒化している。米粒の量で最も集中しているのは、粒長4.0mm、粒幅2.8mmのもので、22個があり、ここを中心に大小のバラツキが見られるが、上記の金の尾平均値は北九州板付遺跡出土炭化米の長、幅の比が1.74であり、弥生時代の代表的米粒に近いものであることが分る。なお第237図に示したようにモミ圧痕が若干検出されている。これらは次のような法量を示している。

- | | |
|---------------|----------------|
| 1. 7mm × 4mm | 2. 8mm × 4mm |
| 3. 6mm × 4mm | 4. 6.5mm × 3mm |
| 5. 7mm × 3mm | 6. 5mm × 3mm |
| 7a. 6mm × 3mm | 7b. 6mm × 4mm |
| 8. 7mm × 4mm | 9. 6mm × 4mm |

これらは炭化米よりも大きいのが、本米の米粒がこの程度あったのであろうか。

第5節 弥生時代住居について

1. 本遺跡は県下で最も大きな弥生時代後期の集落である。しかし33軒の住居は短期間に建てられたと言ってもいくつかの類型に分けられそうである。

1類 (1~3) 住居の規模は小さく、プランも隅丸方形に近い形。住居内施設は、中央部の壁もあまり高くない。

2類 (4,5) 方形プランをもつものである。長軸、短軸比が1:1前後を示す。炉は北側柱穴を結んだ線上に位置するか、上方に突き出す位置にある。

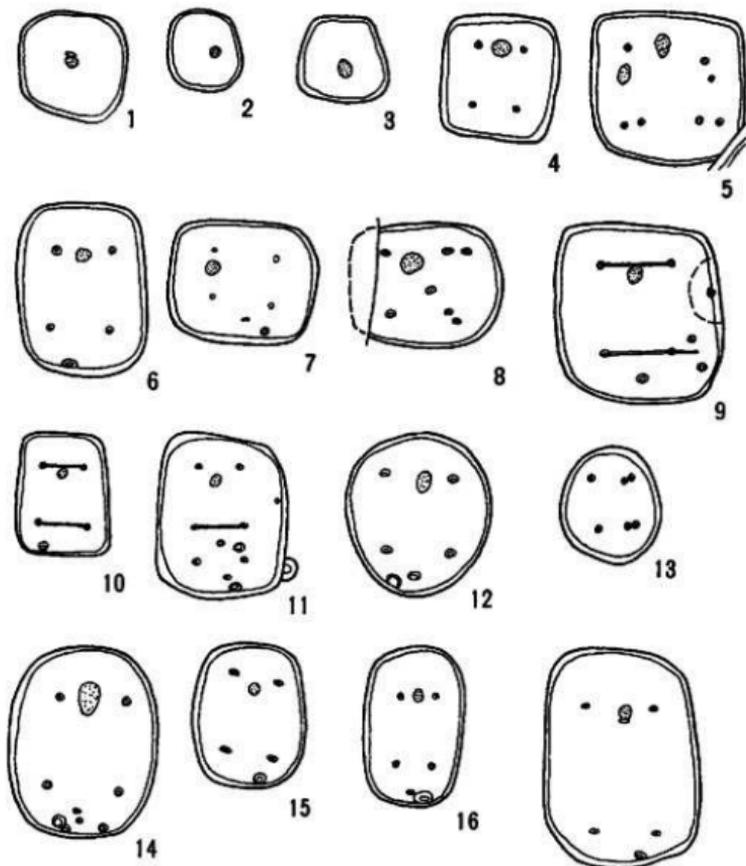
3類 (6~8) 長方形プランをもつもので、長軸、短軸比が1:1.3前後を示す。縦長タイプと横長タイプがあり、横長タイプには、炉が北側と西側にある2タイプがある。柱穴4本で炉は柱穴間線か住居内側に位置する。貯蔵穴、梯子受穴等の有無がある。

4類 (9~11) 3類に近い長方形のプランを持つものが多い。住居内柱穴を結ぶ間仕切溝があるもので、炉は柱穴を結ぶ線より住居内側に位置し、貯蔵穴、梯子受穴をもつものが多い。

5類 (12, 13) 楕円形プランを有するもので、中には不整形形のものがある。

6類 (14, 15) 胴張り隅丸長方形で、炉は柱穴間線上に位置するか、内側にある。貯蔵穴、梯子受穴を持つものも多い。

7類 (16, 17) 隅丸長方形で、胴は張らない。3類の長大なもので、3類を拡張した住居が、これになる場合が多い。長軸、短軸比は1:1.5である。

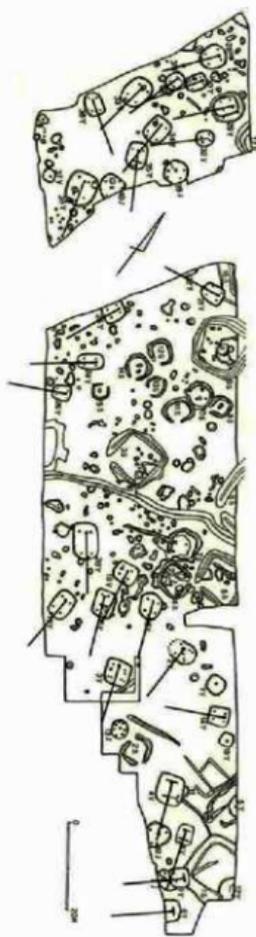


1類(1-3) 2類(4, 5) 3類(6-8) 4類(9-11) 5類(12, 13) 6類(14, 15) 7類(16, 17)

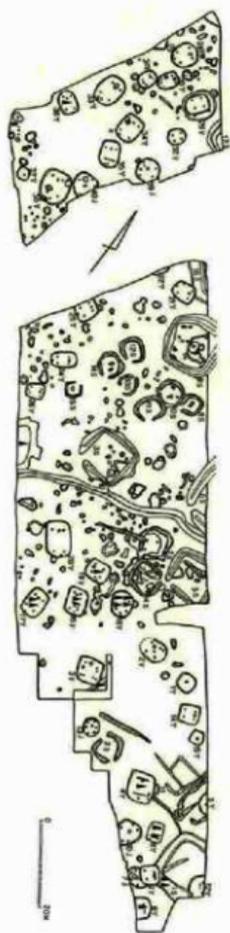
第238図 金の尾遺跡弥生時代住居址分類

金の尾遺跡住居址分類表

種類	住居 No	規 模		柱 主柱穴	炉 位 置			炉 形 態			梯子 受穴	貯蔵 穴	溝
		長軸×短軸	長軸:短軸		柱内	線上	柱外	埋費	石囲	地床			
1	1	4×3.8m	1.05:1							○			
1	15	3.5×3.3	1.06:1							○			
1	37	3.1×2.4	1.29:1							○			
2	3	5.8×5.7	1.02:1	6			○		○				
2	9	4.6×4.1	1.12:1	3		○				○			○
2	14	4.7×4.4	1.07:1	4		○				○			
3	2	5.8×4.2	1.38:1	5	○					○	○		
3	17	6.6×4.8	1.38:1	4		○			○			○	
3	19	5.6×4.6	1.22:1	4		○		○			○	○	
3	25	5.0×3.8	1.32:1	4		○		土器敷			○	○	
3	26	4.4×3.2	1.38:1	4	○			○			○		
3	34	6.2×5.0	1.24:1	4		○				○	○	○	
4	4	6.8×6.0	1.13:1	4	○				○		○		○
4	6	5.2×3.6	1.44:1	2	○					○			○
4	8	4.6×3.1	1.48:1	4	○					○		○	○
4	16	6.2×4.8	1.29:1	旧4 新5	○					○	2組	2組	○
4	36	6.2×4.2	1.48:1	4		○		○			○	○	○
5	5?	不 明		1									
5	12?	不 明											
5	18	6.4×5.0	1.28:1	4		○		○			○	○	
5	21	5.2×4.5	1.16:1	4	○					○	○	○	
5	28	6.2×5.2	1.07:1	4		○				○	○	○	
5	29上	7.3×6.6	1.11:1	4						○	○	○	
5	32	4.4×3.8	1.16:1	4						○			
6	22	不 明											
6	29下	5.4×3.8	1.42:1	4	○			土器敷			○	○	
6	30	5.0×3.4	1.47:1	4	○			○			○	○	
6	31	4.7×3.4	1.38:1	4	○							○	
6	33	7.2×5.0	1.44:1	4		○		土器敷			○	●	
6	36	7.9×6.4	1.23:1	旧4 新4	○			土器敷		○	○	○	○
6	38	5.5×3.9	1.41:1	4	○			土器敷		○		○	
7	20	8.4×5.8	1.45:1	新5 旧4		○		○		○		○	
7	24	6.1×3.5	1.74:1	4				土器敷			○	○	



第239圖 弥生時代住居入口方向



第240圖 磨製石器分布圖



第241圖 横刃型石器分布圖

各住居をこの類型に従って分類すると次表のようになる。

1類は3軒で、ほぼ正方形を呈するものが多く、2類は3軒で、南群集落の南側に分布する。3類は6軒あり、南群集落中に3軒、北群集落中に3軒あるので、一般的なプランと言えよう。4類は5軒中南群が属しており、北群集落には35号住居1軒である。特に南群集落中南に3軒が片寄っており、これらが同一時期に造られた可能性も高い。5類は遺跡の北側、北集落の中に多く、一つの傾向をもつものである。6類は北集落中北群に集中し、北集落の特徴となる住居プランである。7類は南北集落に各1軒づつあるが、長軸対短軸比は6群に近い数値を示す。

2. 住居群の構成

すでに数回述べた事であるが、住居群は中央のV字溝によって南北の2群に分けられることが知られている。第239図に各住居の入口方向を線で示したが、この方向を見ると、各住居が適当な入口方向を示しているのではなく、規則制が認められよう。即ち、V字溝より南の集落では、6、9号住居が南西方向、4、8号住居は南南東方向、3、16、18号住居が南南東方向、17、19号住居が、南方向で一致する。2、14号住居の周辺には、入口方向の不明な1、5号住居があり、各々に1軒づつ伴うのかもしれない。

北群は24、26号住居が西南西に入口をもち、28、29、30、32号住居が南西に向いている。この4軒は中央で2軒づつに分けられるかもしれない。31、33、34号住居の3軒は南に入口があり、35、38号住居の2軒は南東に向く。36、25号住居は24、26号住居の入口方向と合わせて観察すると、右回りの渦巻状に西にふれているので、この4軒は弧状に並ぶ組となるかもしれない。こうした入口部からみた住居の組み合わせは、土器群等の型式分類されたもの及び住居類型と対比することによって更に関係が明らかになるであろう。

こうした点から、2集落はV字溝を間にした、全く生活観の異なる集落であったことが分り20号住居と26号住居は90°以上の入口方向の差がある。南北集落の住居群入口方向が向いているその前方には、何があったのであろうか。南集落の南西側はかつて低湿地であったろうが、現在は砂層しか認められない為、弥生時代以後のある時期に水田等が釜無川の氾濫で流出してしまったものであろう。

おわりに

甲府盆地の低地部に位置する縄文・弥生時代遺跡として代表的な本遺跡は、昭和53年度に調査して以来、実に10年目にしようやく報告書として公表する運びとなった。この間、新たに弥生時代の遺跡として、中巨摩郡甲西町住吉遺跡などが発掘調査されているが、遺跡の一部であって、全体の範囲や集落内容は不明である。こうしたことから、本遺跡は甲府盆地の弥生時代遺跡を知る上で、最も重要な遺跡として評価して良いであろう。

発掘で検出された遺跡は、縄文時代住居8軒、弥生時代住居32軒、弥生時代周溝墓17基、そのほか土壇・特殊遺構・溝などがあり、特に弥生時代集落はV字溝によって南北2群の集落に

分かれている。又、両集落群の間には周溝墓群が存在し、墓域を形成しているなど、集落遺跡としても研究すべき対象であろう。

遺跡のうち、縄文時代では中期中葉の土器群が一括で発見され、同一集落に関係することが想定されるが、弥生時代では、後期後半の土器群が使用上の組成を想定するに十分な資料が発見され、編年上の位置・近隣地域との対比が今後の研究課題として残された。磨製石鏃・打製石包丁・環状石器・ガラス玉・銅製品などの弥生時代の遺物についても、土器の研究と合わせて対比していかなければならないだろう。

本遺跡の発掘調査から整理・報告書作成に至るまで協力を戴いた日本道路公団東京第二建設局・敷島町・双葉町教育委員会、およびこの事業に参加協力された皆様にお礼申し上げます。

金の尾・無名墳(きつね塚)発掘調査、整理事業参加者名簿

調査員

伊藤恒彦 米田明訓 長沢宏昌 小林義典 宮沢公雄

整理員

石田真功 日原喜昭 渡辺儀訓 森幸彦 村木功 山本茂樹 四角啓二
上野一恵 中島弓子 中村由美 滝田幸子 舛見みつる 引地愛 内藤千里
雨宮美紀 岡野明美智 岩間信雄 稲葉さとみ 古屋直美 石川操 若尾悦子
松野和美 内藤真千子 広瀬勝子 古屋満喜子 弦間文代 井上義彦 深味義博
石川等 玄間千鶴 後藤良美 若尾澄子 小笠原睦子 名取洋子 土肥正治

補助員

村木功 森幸彦 渡辺儀訓 日原喜明 青木和明 矢野慎一 清水比呂之
山本直人 多田たきみ 櫻山和枝 本所重子 石川久明 四角啓二

作業員

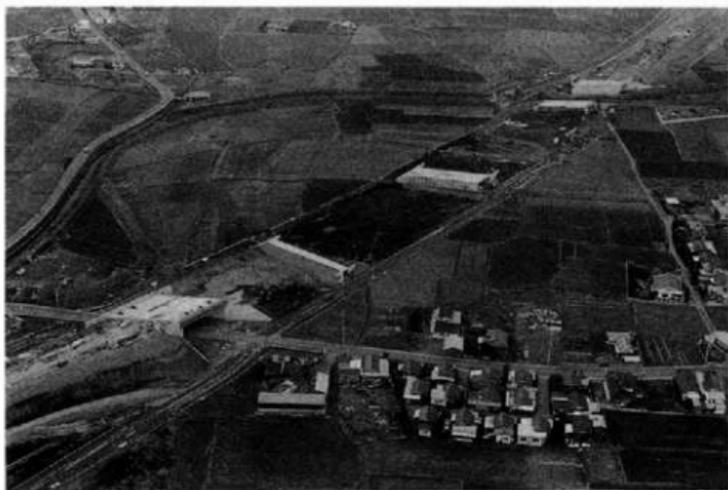
三浦正宏 山田康雄 小林すず代 粟山昭之 大野雪子 長田春江 仲田せい子
湊勉 保坂栄子 飯塚すえじ 堤好子 若尾澄子 強矢あき子 岡田牧子
保坂洋子 長田栄子 長田しげる 高野和恵 秋山つね子 久保田昭一
飯塚しげ子 古松明彦 丸山秀樹 池田敏政 石田真功 矢原慎治 四角啓二
保延清美 保延とし江 保延元枝 石橋とも代 保延福子 榎原寿子 佐藤隆子
臼井たまき 中根君子 小林たつ子 石川けさ代 平塚けさ子 芦沢五月
長田きよ子 三井千恵子 榎屋君子 長田幹江 保坂紀子 飯塚さかえ 大木湧子
小林さよ子 高山さく代 野崎とし子 小林たけ子 長田喜久恵 石川まさみ
小泉きみ江 賀々々美智子 石川君江 栗原和麻代 石川かつよ 阿部はるの
興石みつ子 大木せつ子 大木加つ子 興石かつ代 興石マツエ 大木敬子
大沢紀子 石川多恵子 芦沢好子 芦沢節子 芦沢知都世 赤沢久子 大木米子
栗原悦子 栗原たね子 赤沢やす子 石川和子 宮本俊之 殿岡秀子 清水春雄
荻原敏之 村岡昭彦 大島千秋 門田文裕 横山なな代 高木守夫 津田考範
内藤きみ 飯沼芳子 小泉きよ子 長田きみ子

図版 1 金の尾遺跡発掘調査前全景





① 全景



② 全景



① 全景



② 全景



① 全景



② 全景



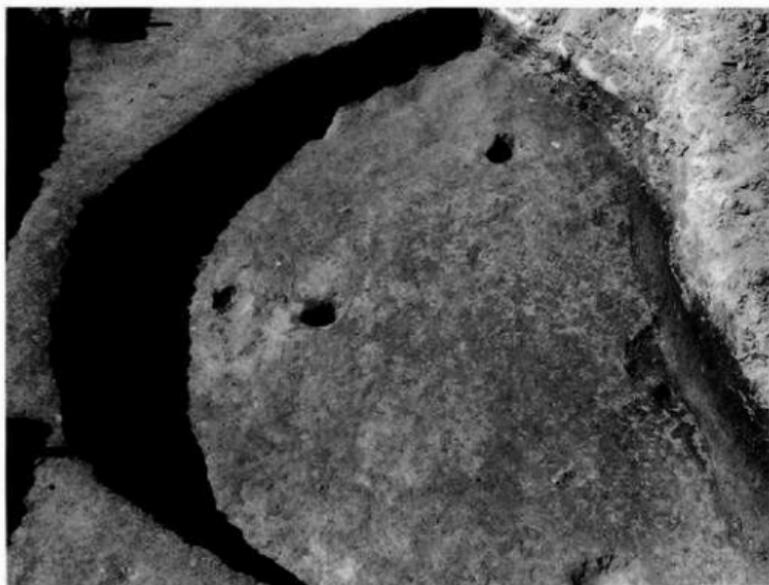
① 1号住居址



② 2号住居址



① 2号住居址土器出土状态



② 2号住居址



① 3号住居址



② 3号住居址土器出土状态



③ 3号住居址炉



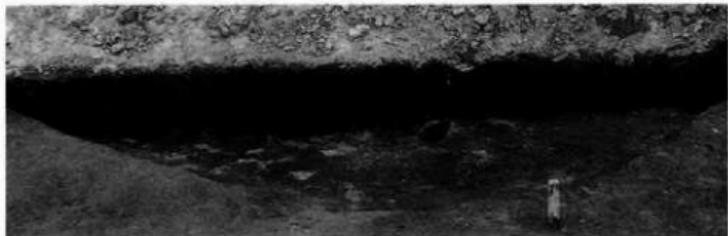
① 4号住居址



② 4号住居址
土器出土状态



③ 4号住居址炉



①
5号住居址



②
6号住居址



③ 6号住居址
出土土器



①7号住居址



②7号
住居址炉



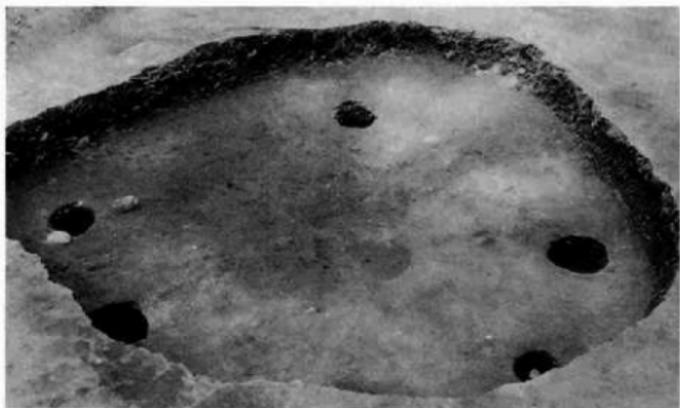
③8号住居址



① 8号住居址炉



② 9号住居址透景



③ 10号住居址



①11号住居址



②12号住居址



③13号住居址



① 13号住居址
土器出土状态



② 13号住居址炉



③ 14号住居址



①15号住居址



②16号住居址



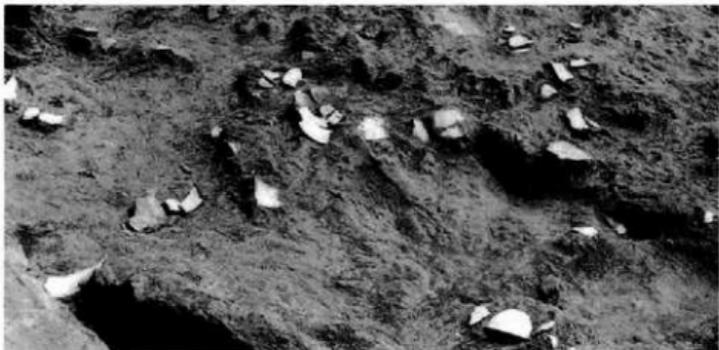
③16号住居址



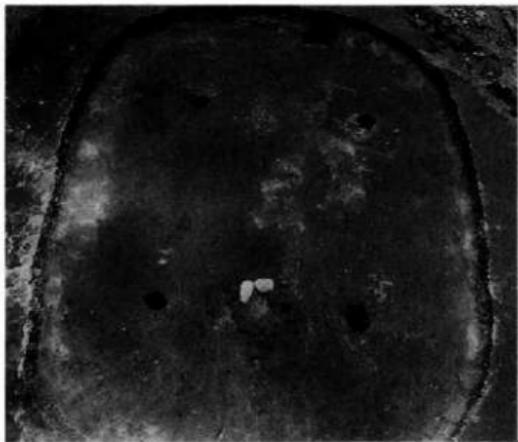
① 16号住居址



② 16号住居址柱根出土状态



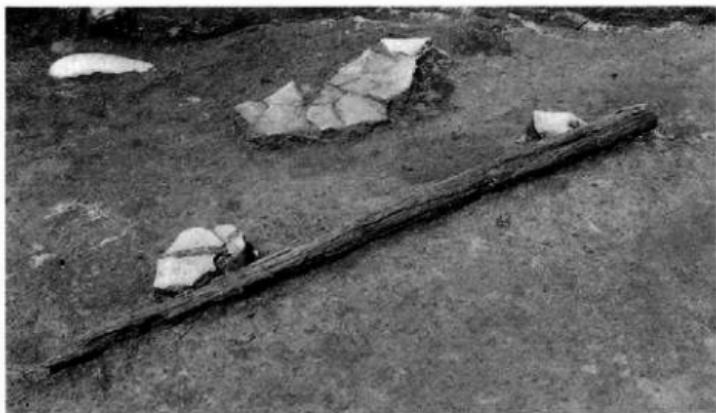
③ 16号住居址土器出土状态



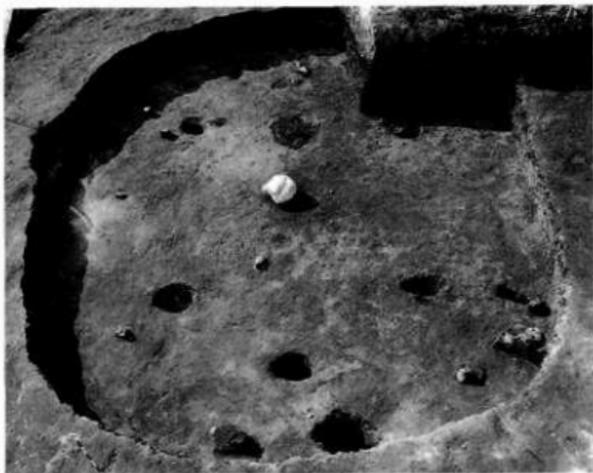
①17号住居址



②17号住居址出土土偶



③17号住居址遺物出土狀態



①18号住居址



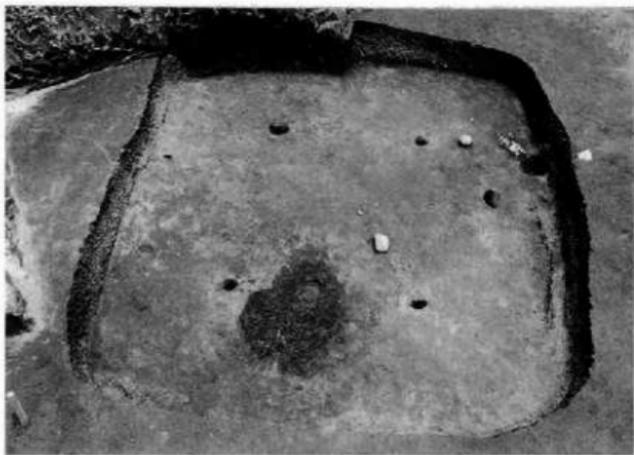
②18号住居址出土土器



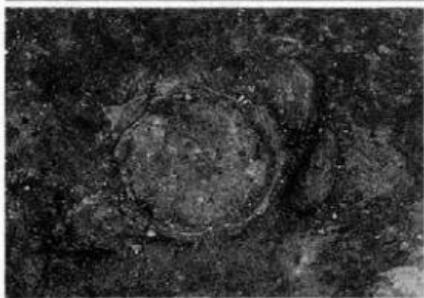
③18号住居址埋葬炉



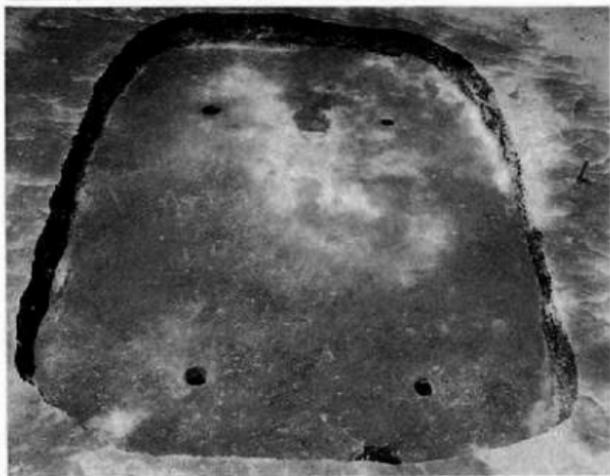
④18号住居址
作業風景



① 19号住居址



② 19号住居址炉



③ 20号住居址



① 20号住居址



②

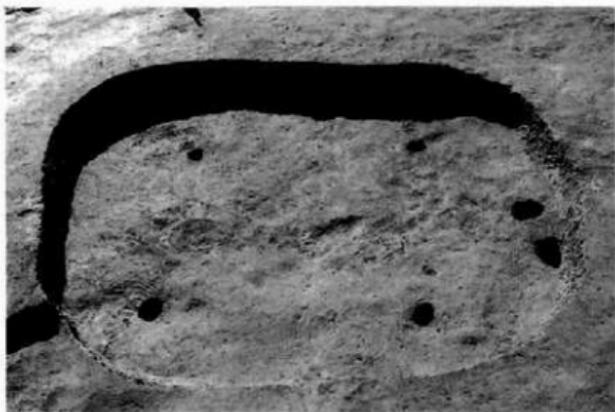


③

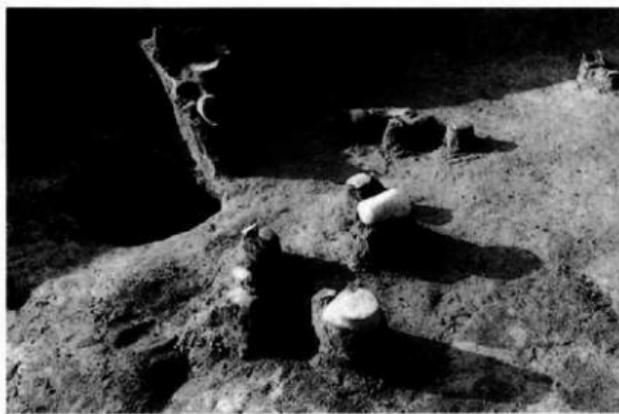
20号住居址柱根遗存状态



④



① 21号住居址



② 21号住居址
土器出土状态



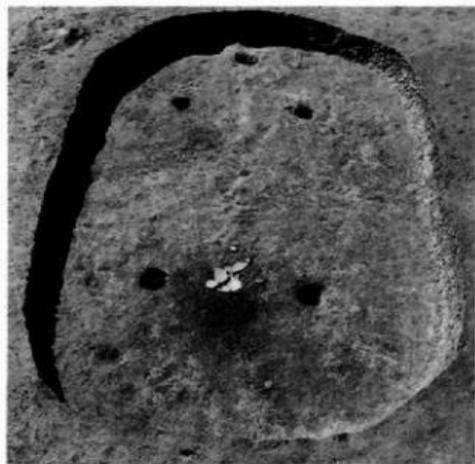
③ 22号住居址



① 23号住居址



② 23号住居址出土土器



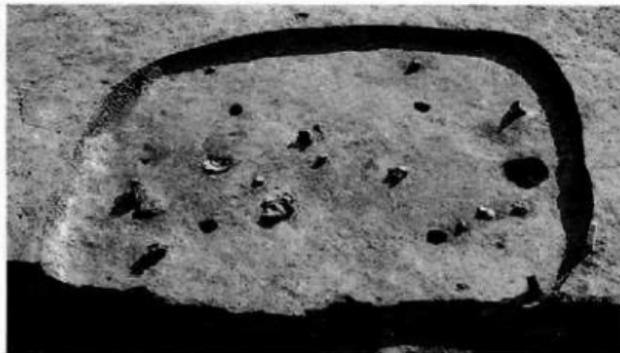
③ 24号住居址



④ 24号住居址出土土器



24号住居址土器出土状态

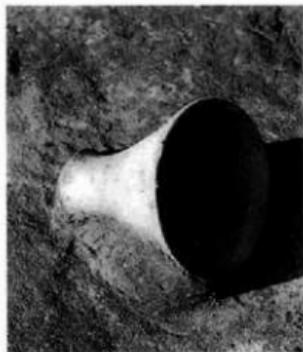


① 25号住居址



③ 25号住居址紡錘車出土狀態

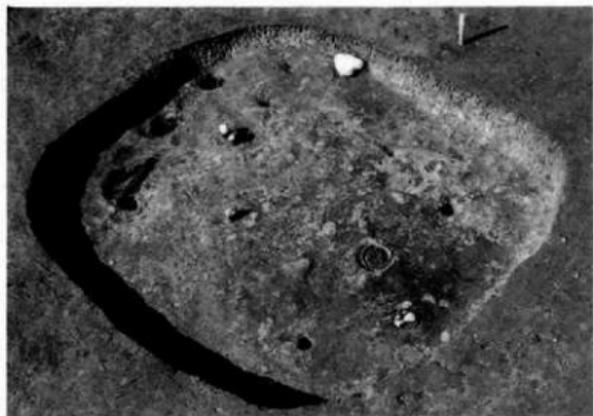
② 25号住居址土器出土狀態



④ 25号住居址
出土土器



⑤ 25号住居址梯子材遺存狀態



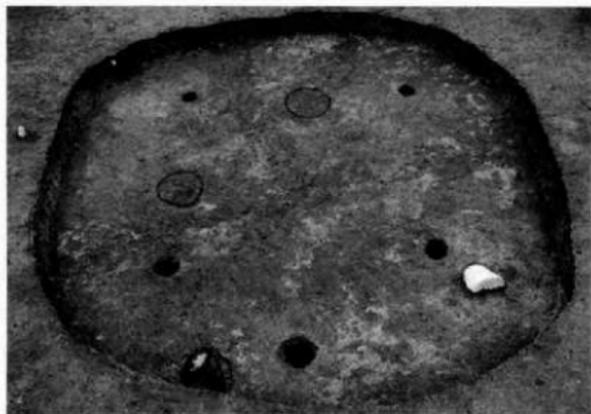
① 26号住居址



② 27号住居址



③ 27号住居址炉



① 28号住居址



② 28号住居址
土器出土状态



③ 28号住居址



④ 29号住居址
(上層)



① 29号住居址
(下層)



② 29号住居址 (床下)



③ 29号住居址
土器出土状态



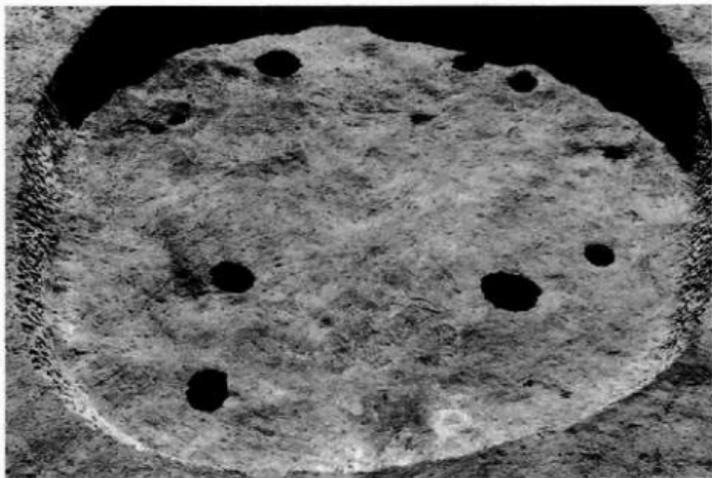
④ 29号住居址出土土器



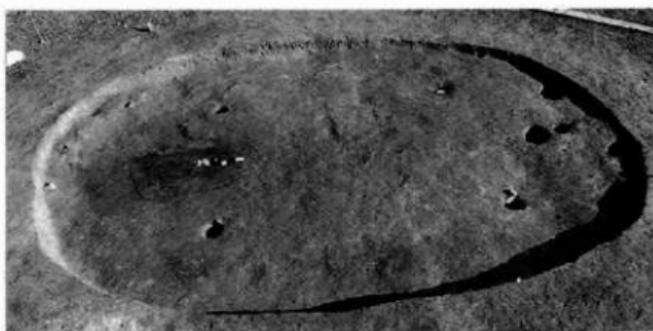
①
30号住居址



②
31号住居址



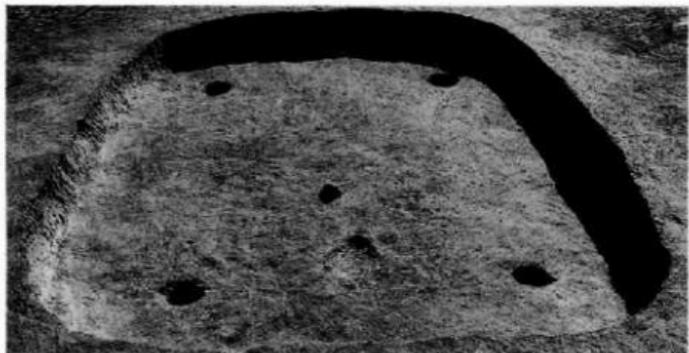
①
32号住居址



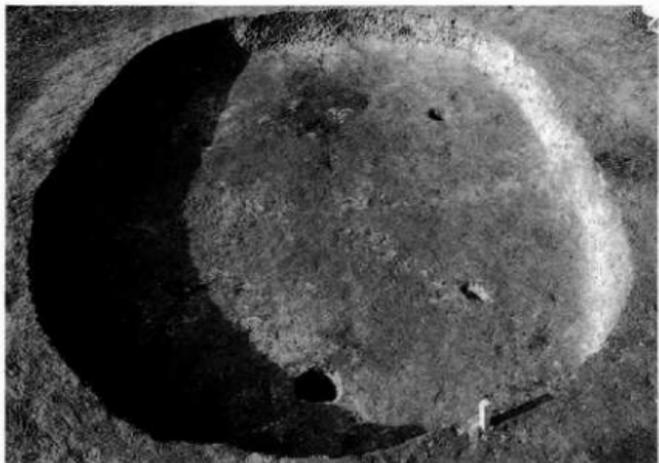
② 33号住居址



③ 33号住居址
土器出土状态



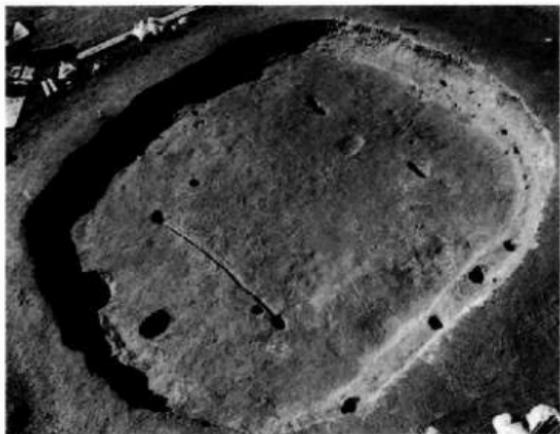
① 34号住居址



② 35号住居址



③ 35号住居址
土器出土状态



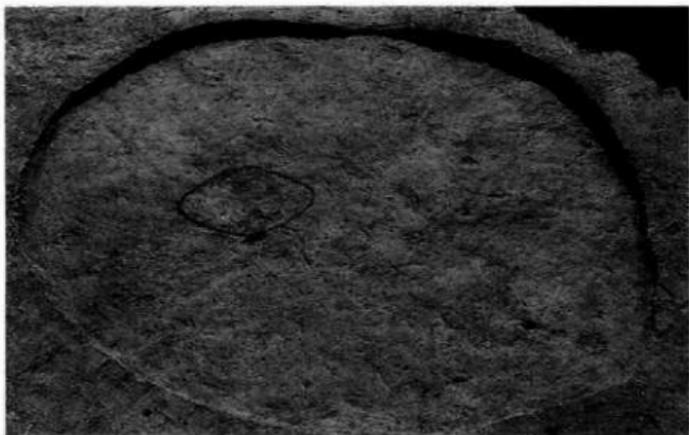
① 35号住居址（下層）



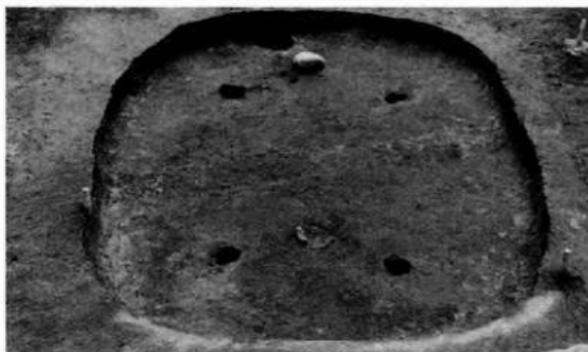
② 36号住居址



③ 36号住居址土器出土状态



① 37号住居址



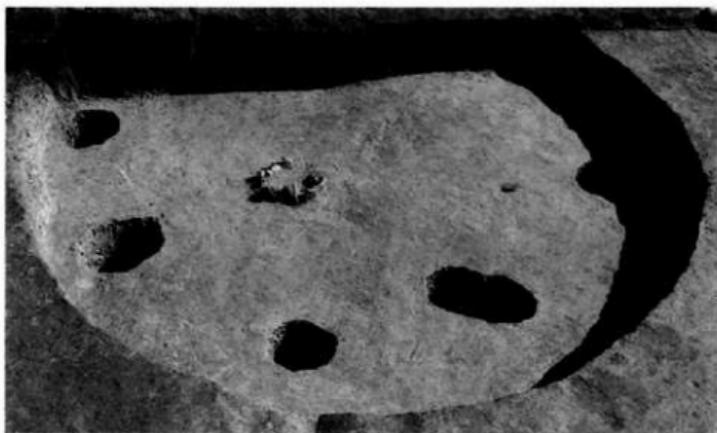
② 38号住居址



③ 39号住居址



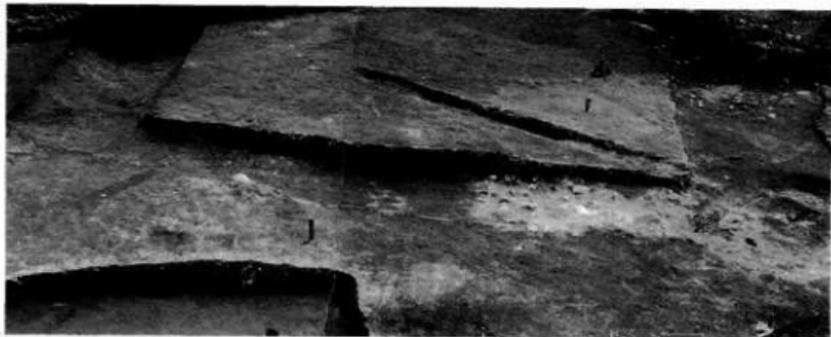
① 39号住居址土器出土状态



② 40号住居址

③ 40号住居址土器出土状态





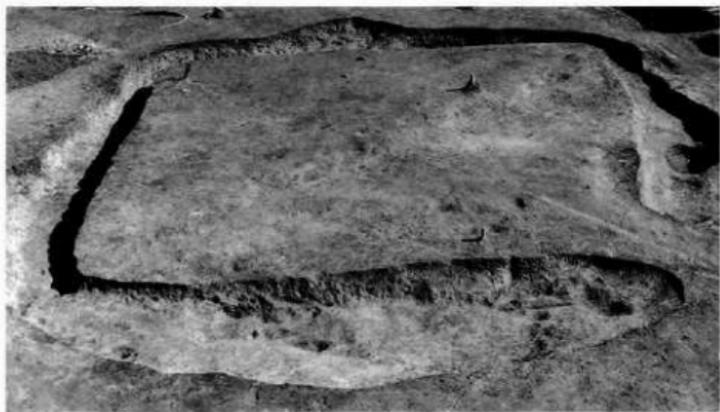
① 1号周溝墓



② 2号周溝墓



③ 2号周溝墓土器出土状态



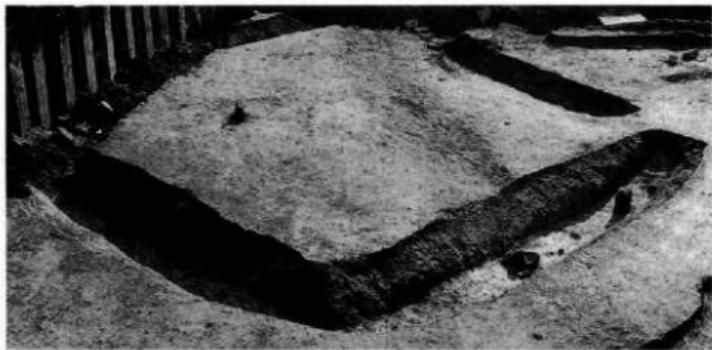
① 3号周满墓



② 4号周满墓



③ 4号周满墓土器出土状态



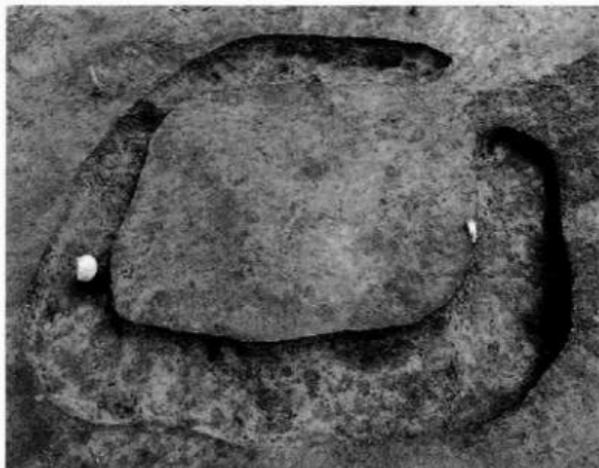
① 5号周冢墓



②
6号周冢墓



③ 7号周冢墓



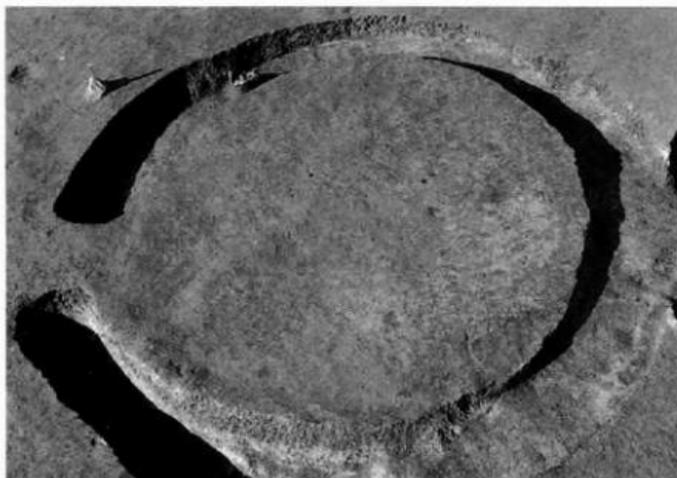
① 8号周溝墓



② 9号周溝墓



③ 9号周溝墓・セクション



① 10号周溝墓



② 11号周溝墓



③ 11号周溝墓土器出土状态



① 12号周冢墓



② 13、14号周冢墓



①14号周溝墓土器出土状态



②15号周溝墓



① 特殊遺構 1 土器出土狀態



② 特殊遺構 2



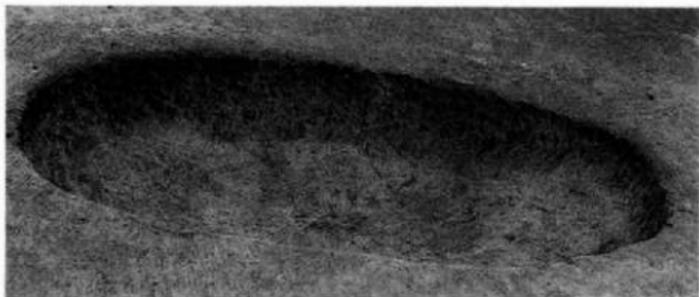
③ 特殊遺構 4



① 特殊遺構 5



② 特殊遺構 6 土器出土状態



③ 特殊遺構 7



① 特殊遺構 8



② 特殊遺構10
土器出土狀態



③ 特殊遺構11



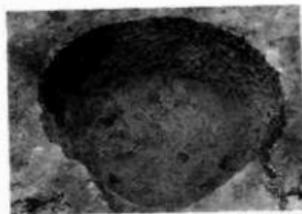
① 特殊遺構12



② 特殊遺構13
土器出土狀態



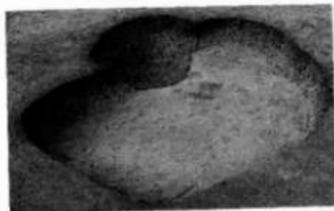
③ 特殊遺構14



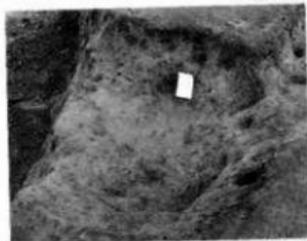
10号土壇



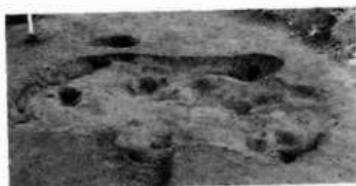
4号土壇



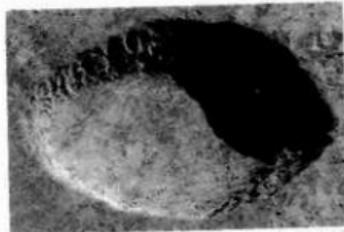
19号土壇



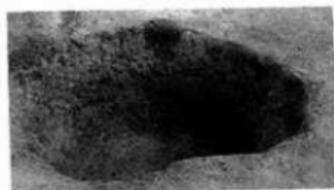
25号土壇



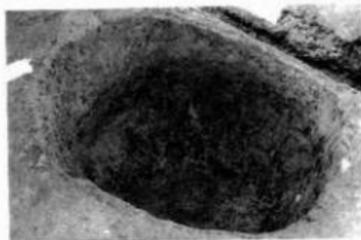
26号土壇



28号土壇



29号土壇

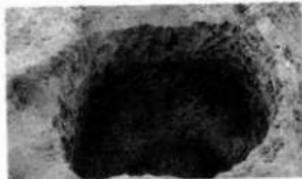


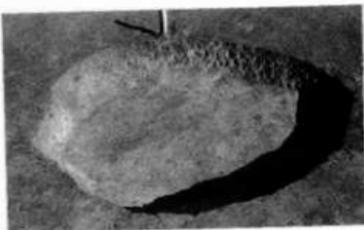
30号土壇



31号土壇

43号土壇





36号土塚



38号土塚



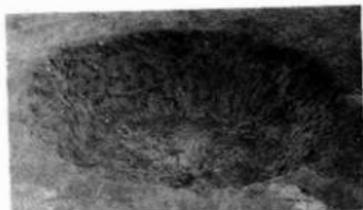
41号土塚



42号土塚



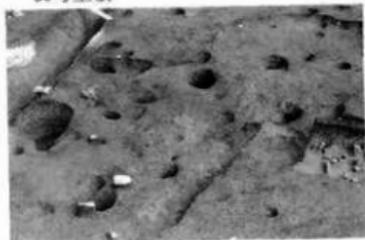
45号土塚



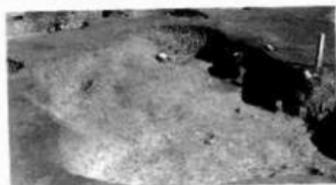
37号土塚



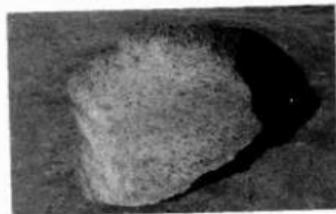
39号土塚



41、53、67号土塚



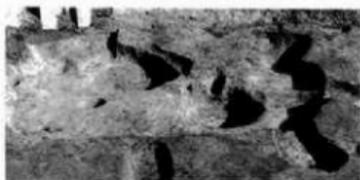
43号土塚



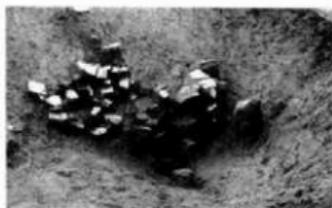
46号土塚



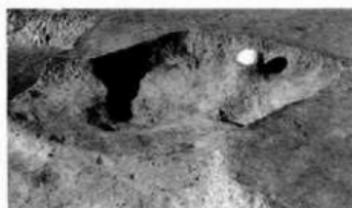
47号土塚



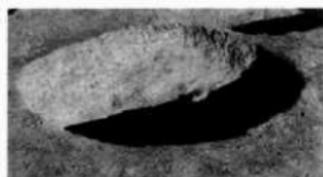
51、72号土塚



54号土塚



57号土塚



59号土塚



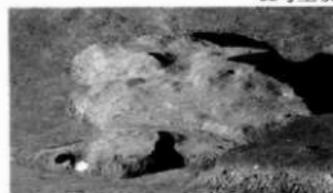
50号土塚



53号土塚



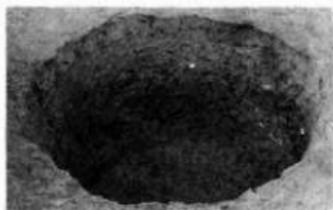
55号土塚



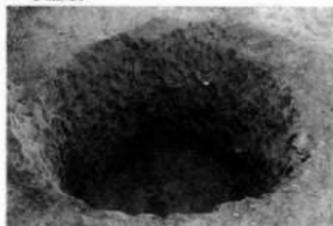
58号土塚

60号土塚

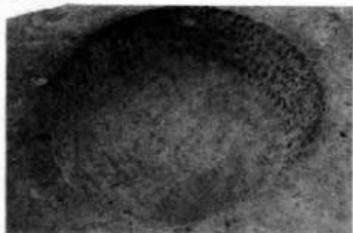




61号土壇



63号土壇



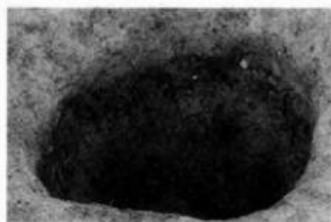
65号土壇



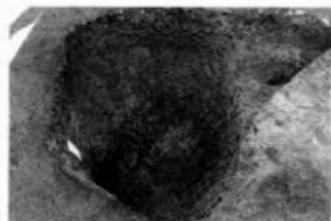
67号土壇



73号土壇



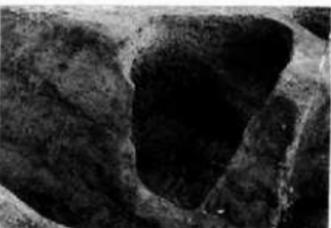
62号土壇



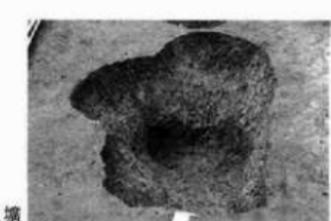
64号土壇



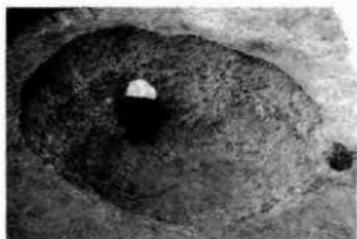
66号土壇



68号土壇



74号土壇



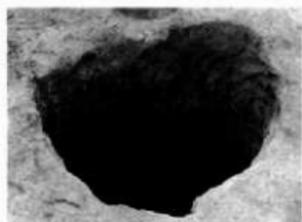
75号土坑



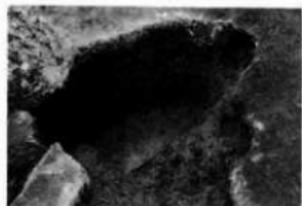
78号土坑



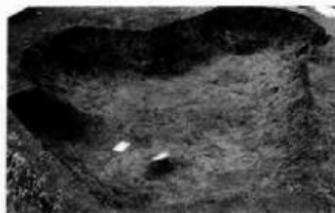
86、90号土坑



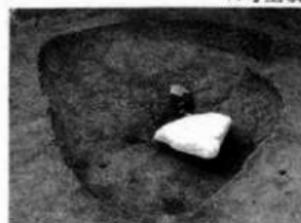
88号土坑



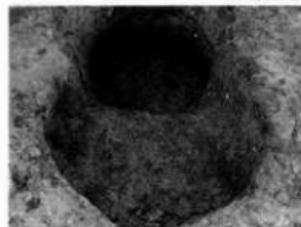
91号土坑



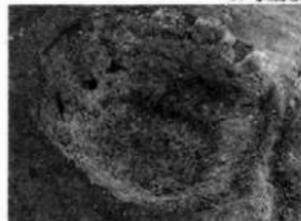
77号土坑



85号土坑



87号土坑



89号土坑



93号土坑



2号住居



3号住居



4号住居



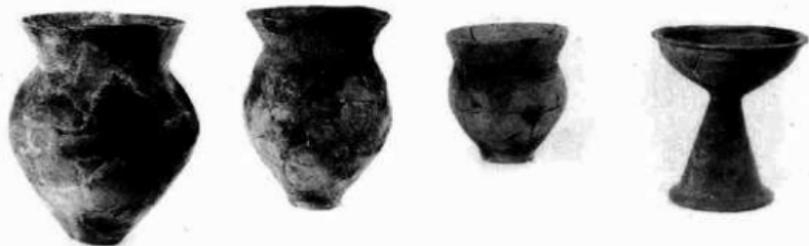
6号住居



7号住居



13号住居

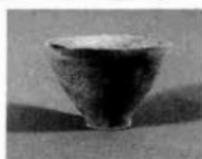


16号住



18号住

20号住



20号住



21号住

23号住

24号住



25号住



26号住



28号住



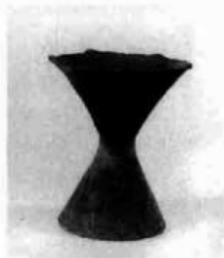
29号住



30号住



31号住



33号住

34号住





35号住



36号住



38号住



39号住



40号住



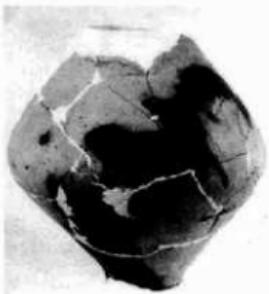
特1号土城



特2号土城



特5号土城



特13号土坑



2周溝

特6号土坑



3周溝



9周溝



9周溝



5周溝



5周溝



7周溝



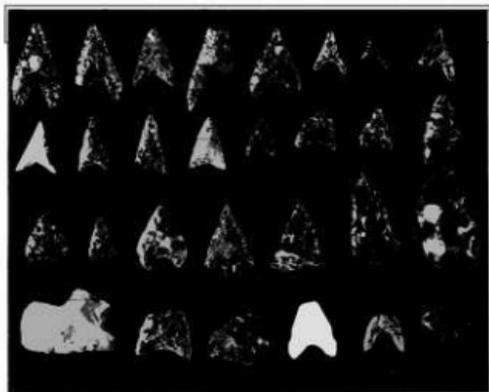
9周溝



11周溝



11周溝



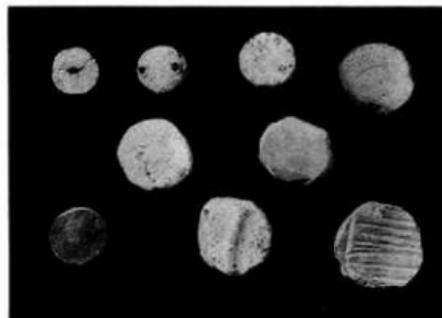
石鏃



土製スプーン



石錘

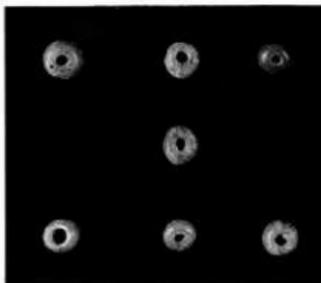


土製円盤

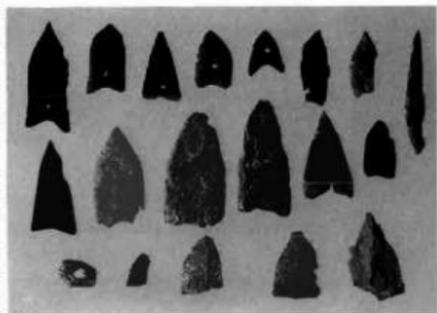


土偶(表)

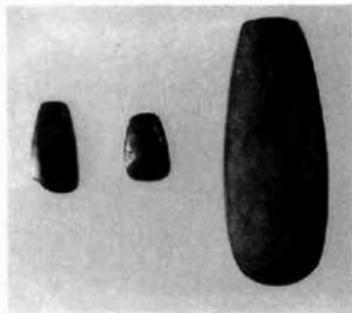
土偶(裏)



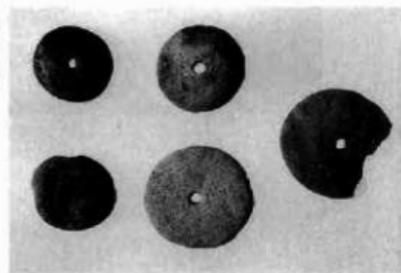
ガラス玉



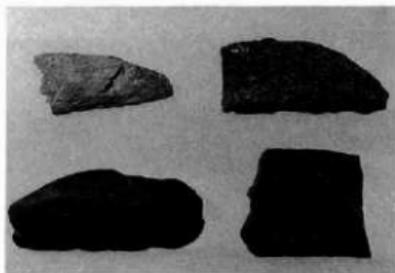
磨製石鏃他



磨製石斧



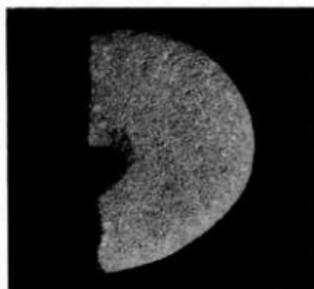
紡錘車



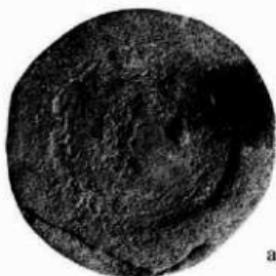
打製石包丁



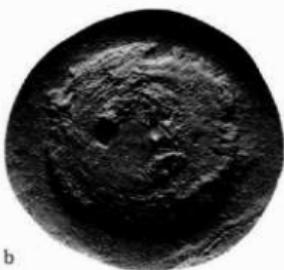
砥石



環狀石器



1



2

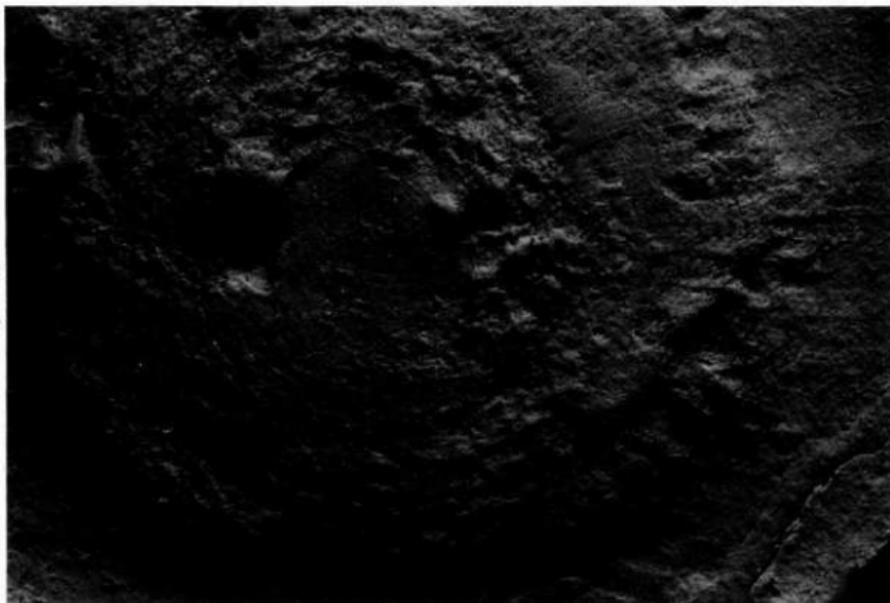


3



0 10cm

図版56 同拡大(部分2倍—上1b・下3b)



無名墳（きつね塚）

第 I 章 調査経過

第 1 節 調査に至る経過

1977. 5. 31 発掘届の提出
1978. 5. 10 道路公団と県教育委員会で契約の締結
1978. 12. 15 発掘着手
1979. 3. 5 発掘終了
1979. 3. 12 遺物発見通知の提出
1979. 3. 20 道路公団に経費精算書を提出
1979. 4. 11 経費精算について了承

第 2 節 調査組織

調査主体 山梨県教育委員会

調査主任 末木 健 県教育庁文化課文化財主事

新津 健 同上

調査員、補助員、作業員、整理員は金の尾遺跡と同じである。

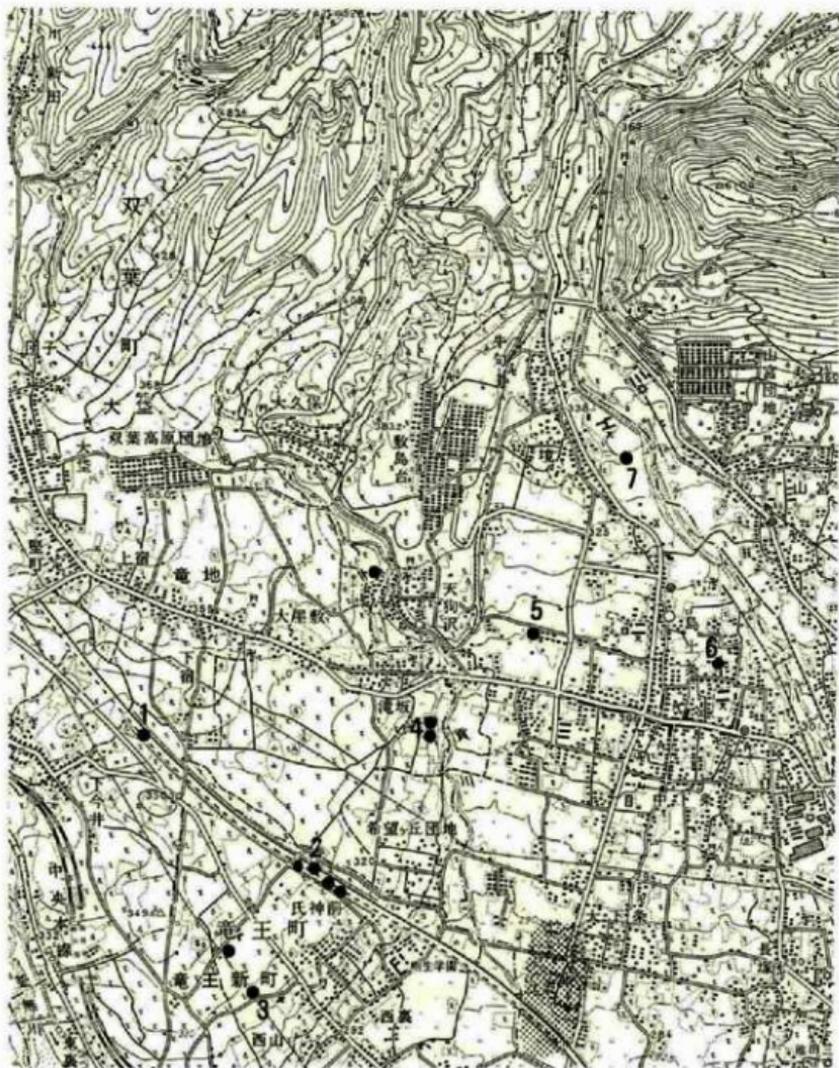
第 II 章 遺跡概要

第 1 節 遺跡位置

甲府盆地北西部、茅ヶ岳から南へ伸びた低位段丘の赤坂台地は、甲府盆地底部より約40～50 m高い緩傾斜の丘陵である。西側は南アルプスやハケ岳の雨水を集めて流れる釜無川に削られて急崖となっており、東から南はゆるやかに盆地へと傾斜している。この台地上の古墳群は、このゆるやかな斜面に分布しており、第1図のような古墳群のうち、3、4などが現存する。本墳は北巨摩郡双葉町下今井に在って、標高330mの小丘頂上に立地している

第 2 節 地理的・歴史的環境

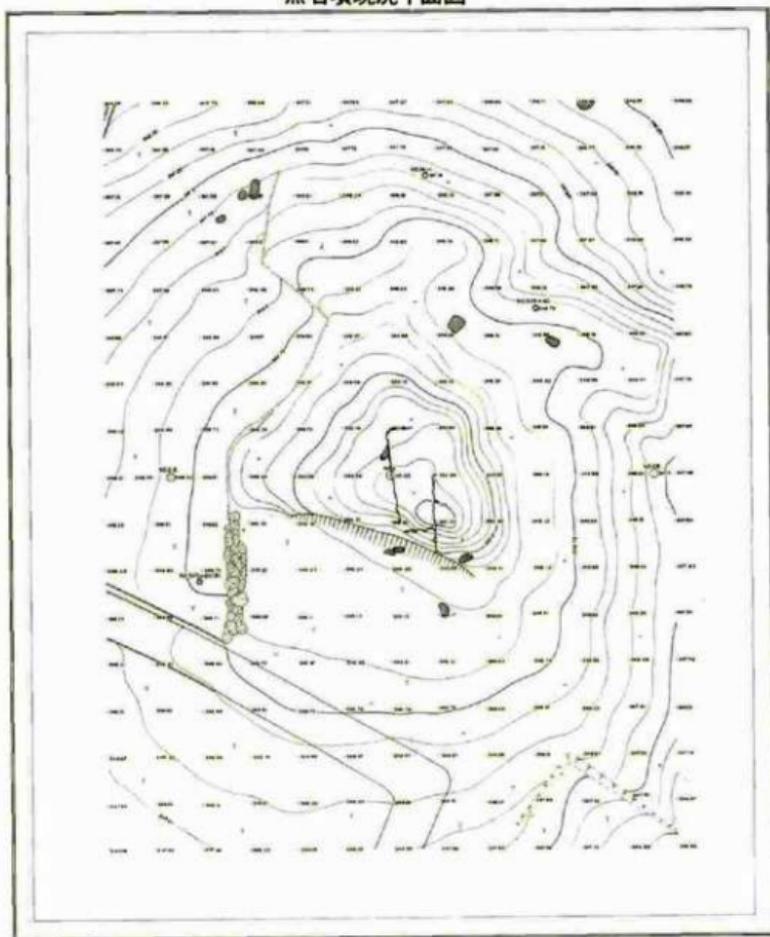
甲府盆地西部には秩父山地西部の水を集めて流れ出す荒川があり、その名が示すとおり、盆地中央部にたびたび水害をもたらした暴れ河川である。この流域には、県下の後期古墳を二分するような、大規模な古墳や古墳群が発達している。特に、甲府市湯村にある万寿森古墳、加牟那塚古墳、敷島町大塚、双葉町二ツ塚などは、石室規模が8 mを超えるなど注目すべき勢力の存在を想定させる。荒川をはさんで二分される古墳群が同一豪族か別なのかは今後の検討材料であるが、特に、すでに発掘調査を実施した二ツ塚古墳群は中央道建設に伴って、馬具、武器など秀逸な遺物が出土している点で、本墳を考える上で重要な資料である。



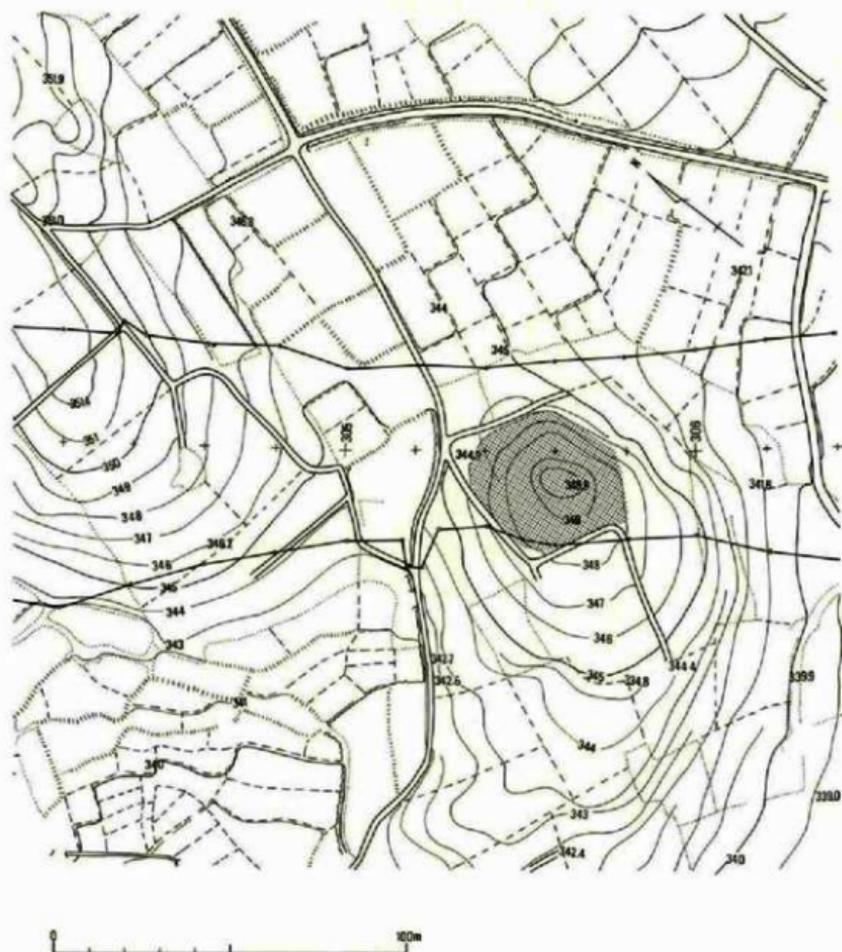
1. 無名墳(きつね塚) 2. ニツ塚古墳群 3. 龍王塚 4. 往生塚 5. 大塚古墳

第1図 無名墳(きつね塚)位置図

無名墳現況平面図



第2図 無名墳(きつね塚)現況図



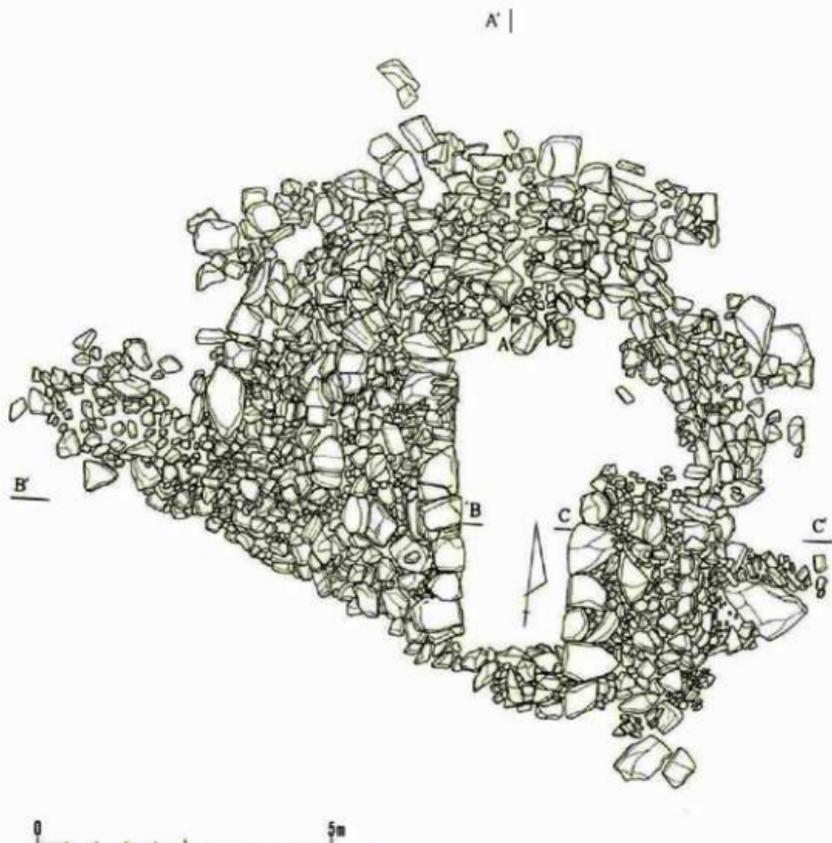
第3図 無名墳（きつね塚古墳）周辺地形図

第三章 古墳の概要

第1節 墳丘

赤坂台上の起伏は、標高の高い350 m～360 mあたりでは、比較的ならかな傾斜であるが、台端部、特に西側の傾斜をもつ面では、小丘が目立ち、凹凸が各所に見られる。本墳の立地する小丘も、直径70～80 m、周囲からの高さ9 mの丘で、更にすぐ西にも細長い丘が並ぶ。

本墳は調査前には雑木や藨の密生した雑種地で、立入りが困難な程であった。地表には舉大か

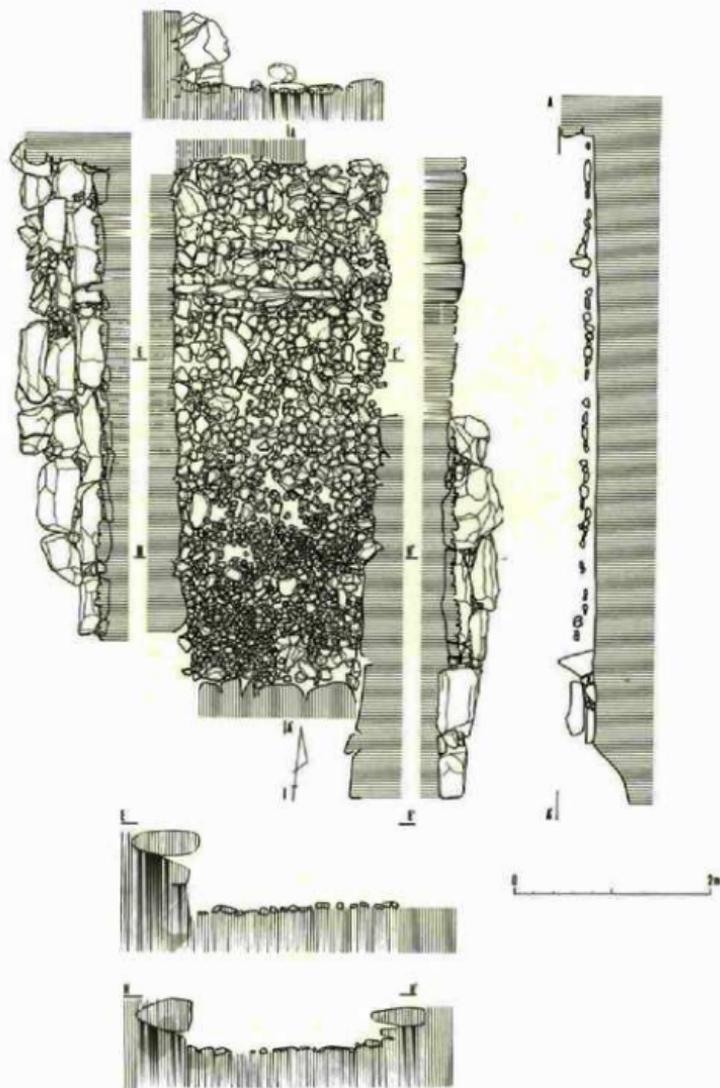


第4図 無名墳(きつね塚)墳丘石積平面図

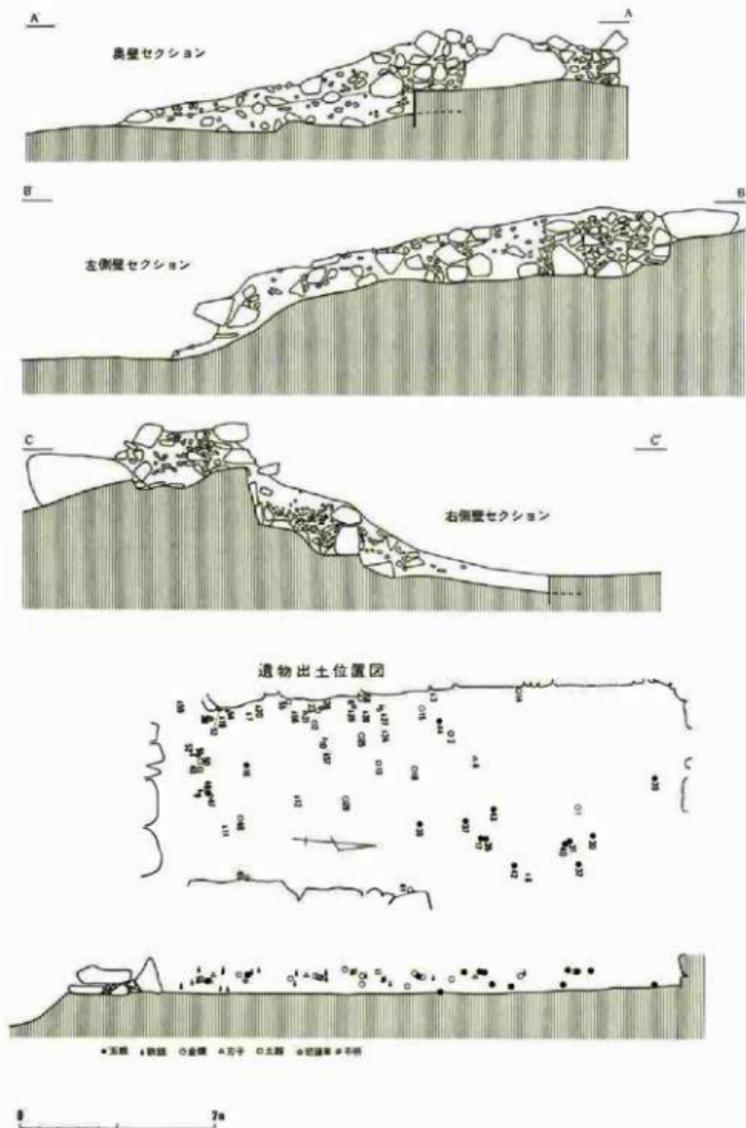
ら人頭大の礫が積み上げられ、あたかも積石塚のような状態であった。この地方の地表は礫よりも岩石の風化したような粘土が表土を形成しており、通常の礫は安山岩の小粒となっているので、それを畑から投げて積んだとしても、これ程の規模には到底ならない。従って、人工的な築造物として認識し、発掘調査対象とした。

墳丘上の礫の範囲は、南北20m、東西30mで、最初の段階では古墳築造時の正確な範囲は把握できなかった。従って、墳丘測量を行う為、上面の不要小礫を除去する作業から着手し、墳丘規模、石室位置の検出に努めた。

この結果、石室はほぼ南北に主軸を持つ、横穴式石室で、前庭部は開墾によって完全に削除されているが、石室閉塞石の一部が残存し、西側側壁の全部、東側側壁の南半分、奥壁の



第5図 無名墳(きつね塚)石室展開図



第6図 無名墳(きつね塚)墳丘断面図・石室内遺物出土位置図

一部が確認された。又、墳丘も土石混合によって盛り上げられ、墳丘保護の為に2段の石積が周囲を巡っている。1段目の石積は墳丘中央より半径3.4mの円で造られ、2段目の石積は半径5mの円を描く。3段目の石積があったかどうかは、断面観察でも判断できなかった。墳丘の基礎は2段目までであろう。しかし、当初の石室高が1.5～2mはあったであろうから、墳丘頂部での盛土厚は3mにもなる。周囲の地形と比べると、直径10mの基礎で3mの墳丘(周辺からは更に高く4～5mとなる)を支えるのは困難である。従って、何らかの形で3段目の墳丘保護施設が存在したものと推定されるが、後世の耕作によって除去されたと思う。

第2節 石室

無袖長方形を呈した石室は完全に残ってはならず、西側側壁は3段目より上の石積と、閉塞石付近より南側が破壊され、東側側壁は2段目以上の側壁と、中央部より北側が除去されている。奥壁はわずかに数個の石が残るだけである。現存した規模及び構築方法は次のとおりである。

西側側壁は南北長4.8m、高さ85cmの範囲に、安山岩割石を横口積で3段に積んでいる。横口面は巾60～80cm、高さ30～40cmの立方体制石を互目積にしている。持ち込りはあまり見られないが、最上部の側石が若干内側に入り込んでいるので、3段目から上が持ち送られていたものであろう。

東側側壁の石は不揃いな大きさで、高さ20cm、巾50cmの立方体のもの、高さ60cm、巾80cmの不整形の石等を組み合わせ造られ、石積は1段ないし2段である。側壁残存長約4mである。この最南端の石は羨門の石と思われるものであるから、本来の石室長は6.5m位であった。石室の幅は、石室中央で2.5m、入口部に近い所で2.25mである。

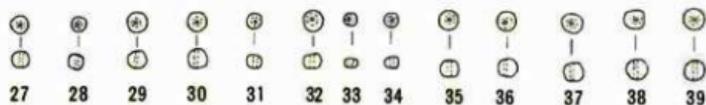
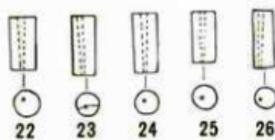
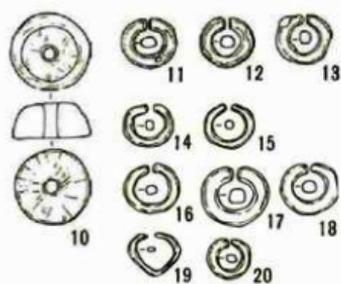
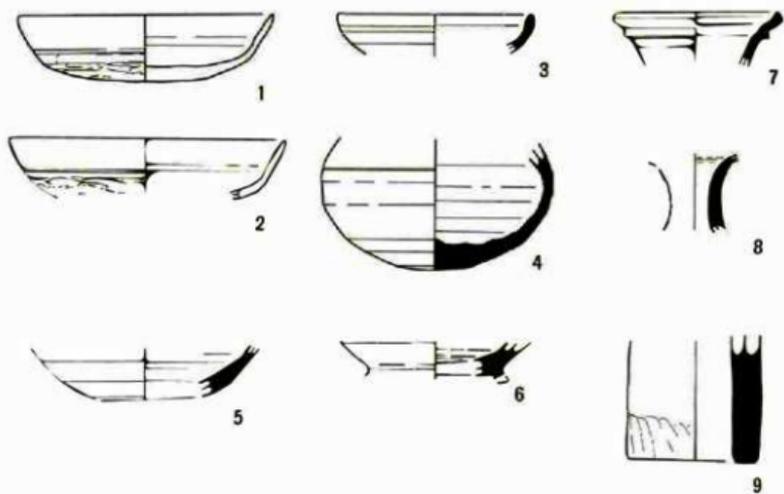
奥壁は礫を積んだもので、板状石の広口面を使用した奥壁とは異なる。石材は不揃いで、30cm位の角礫や60cmの割石角礫を使用している。

このことから、壁面で最も材を吟味したのが西壁で、奥壁は最も簡単に作られている。

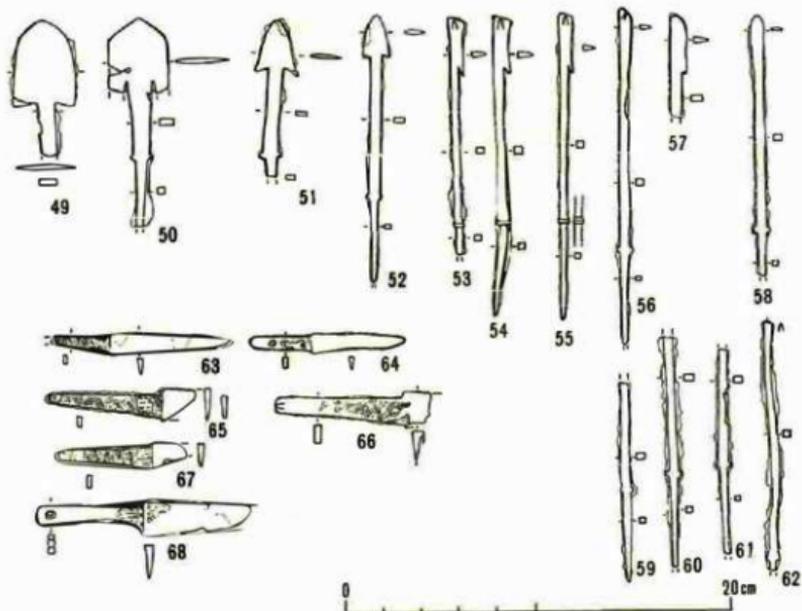
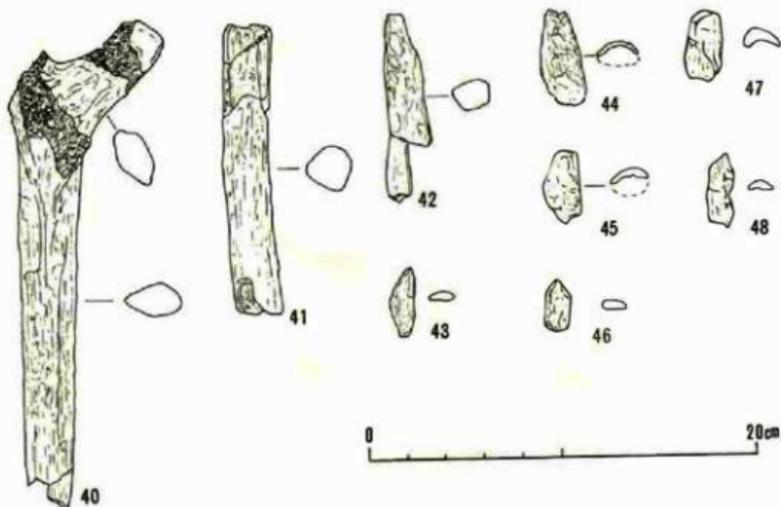
石室床面は小礫が敷き詰められており、閉塞石内側より2m位までは、5～10cmの小礫が多く、更にその内側1.5mの範囲は、10～20cmの角礫、そこから奥壁までは20～30cmの板状角礫が多く用いられる。なお、奥壁から1.5m南には、石室を南北に仕切る石列が並んでいる。この仕切石は巾20cm、長さ40～50cm、高さ20～30cmの板状石を横長に使用しており、石室を二分する区画線を形成している。

この礫床は、地山面よりも若干上層に造られていることから、石室の構築順序を次のように想定することができる。

- ①自然小丘の頂部を平坦に整形する。
- ②西側側壁の基礎施工
- ③東側側壁、奥壁の基礎施工
- ④墳丘保護列石の構築



第7図 無名墳(きつね塚)出土遺物(1)



第8図 無名墳(きつね塚)古墳出土人骨・鉄製品

⑤石室・墳丘の石積

⑥石室内敷石の敷込み

第3節 遺物の出土状況

石室内の出土遺物には鉄鏃、金環、刀子、土器（土師器、須恵器）、玉類、古銭などが出土しているが、ほとんどが礎床上面あるいは礎床中より出土している。このうち玉類は石室北半分に集中しており、14点中12点が北側、2点が入口部より出土した。鉄鏃は石室南半分から大部分が出土している。しかも、西壁および閉塞石に接した所からの出土である。金環10点は石室のはば中央に集中しており、特に中央西壁寄りが多い。刀子は鉄鏃と同様に石室南側3分の2に分布し、土師器、須恵器等は南半分に分布する。このように玉類を除いた他の遺物はほとんど石室中央部から南側で西壁側に分布域がある。仕切石の北側が棺床部であったとすれば、副葬品もこのあたりに多いはずであるが、遺体と副葬品は別々に置かれたということであろうか。

第4節 出土遺物

1、2は内外面に黒色タールの付着した土師器坏で、2点とも小片である。底部外面はヘラ削り後ヘラ磨きで、口縁部は内外面ともに横ナデ整形される。口唇は外傾し、体部中央で段をもつのを特徴とする。内面に黒色タールが多く付着し、器面には剝離が見られることから、燈明皿として使用された可能性がある。

3は須恵器坏であろうか。小片で明確ではなく、坏蓋の可能性もある。4は臑体部で、体部下半は回転ヘラ削り、中央部は横ナデ、上部には沈線が1本巡らされている。5も臑の底部と思われる。6は須恵器の台付壺底部片である。7、8は臑口縁、頸部であろうか。9は灰色の瓦器質胎土をもつ円筒形土器で、あるいは新しい時期のものであるかもしれない。

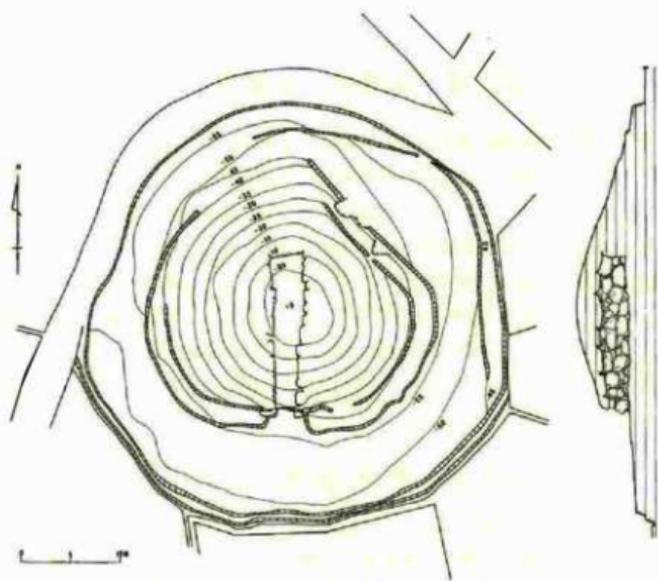
10は滑石製紡錘車である。直径4cm、高さ1.8cmの円錐裁頭形を呈し、上下面には放射状に微細な刻線文が施される。

11～20は金環である。22～26は碧玉製管玉で、片側より穿孔している。長さ3cm前後、直径1cm～1.3cmの太さである。27～39は33、34を除いて土製の練玉で黒色を呈する。

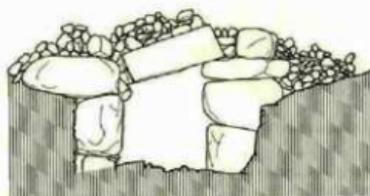
40～48は人骨で、40は大腿骨部であろうか。他は細片で部位は不明である。又、専門家の鑑定も経ていないので性別、部位、年齢等については、今後の課題としておきたい。

49～62は鉄鏃で、分類すると6～7種類に分けられよう。49は広鋒両丸造棘籠被三角形式、50は籠被平造脇扶柳葉式、51、52は広鋒両丸造棘籠脇扶三角形式、53～57は棘籠被片関片刃箭式、58は片丸造棘籠被鬚箭式で、59～62は形式不明である。

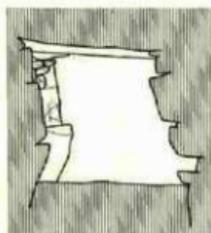
63～68は刀子である。いずれも両関で、68が目釘穴を有する他は、柄部に木質、糸巻跡などが観察される。



加牟那塚古墳墳丘実測図

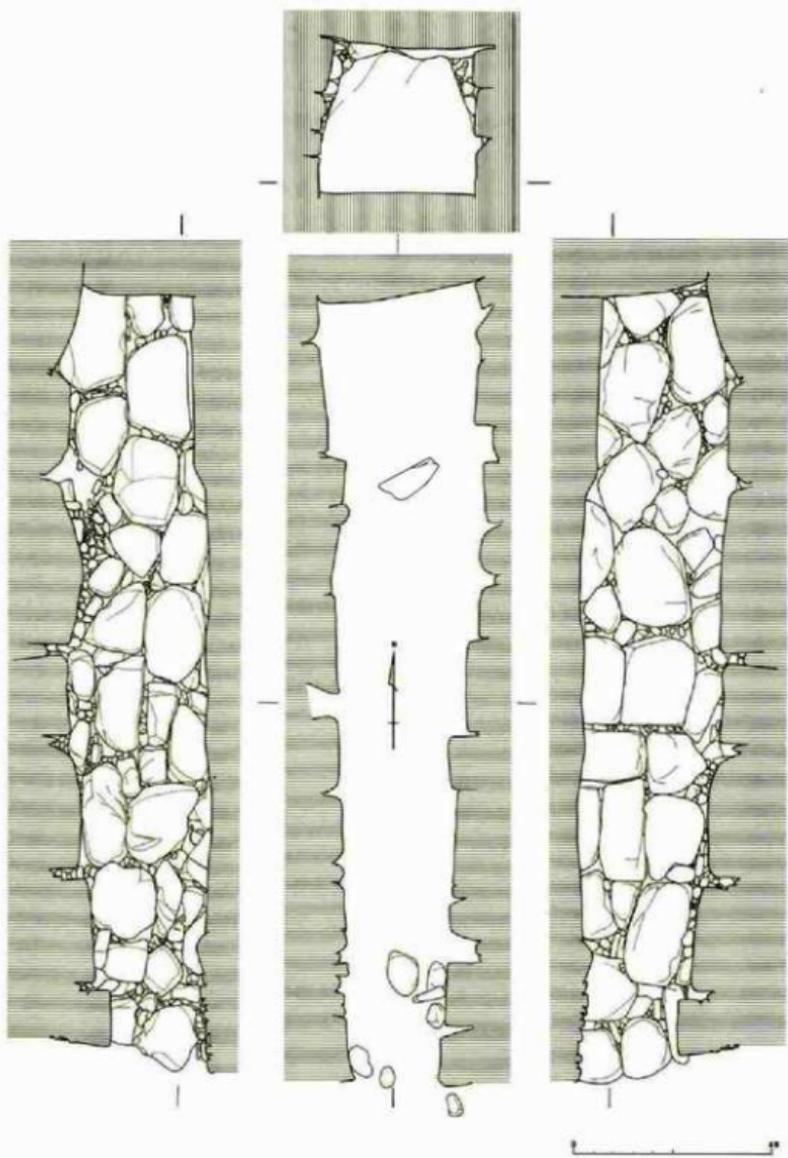


石室入口正面図



袖部断面図

第9図 加牟那塚古墳墳丘実測図、石室実測図



第10圖 加羊那塚古墳石室展開圖

第 IV 章 ま と め

赤坂台古墳群のうち、中央道建設に伴って発掘調査された古墳は、双葉町二ツ塚1号墳、双葉古墳2号墳、竜王1号墳、2号墳などであり、竜王町地内の二ツ塚2号墳はすでに削平されて、周溝も残存しなかった。これらの他に敷島町大塚が、町教育委員会によって昭和57年に部分的発掘調査及び測量、実測が行なわれ、昭和61年には竜王町きつね塚古墳が、町教育委員会山梨学院大学十菱教授によって発掘調査されている。このことによって赤坂台古墳群の様相は大部こまかく理解できるようになってきている。この地方とは若干様相の異なる盆地東部の荒川の左岸、湯村山との間に位置する加牟那塚古墳、万寿森古墳の石室と対比しながら、この様相を述べておこう。

加牟那塚古墳は県下で2番目に大きな規模を有する横穴式石室をもつ古墳で、甲府盆地北西部の荒川左岸の扇状地上、標高295mに位置する。現町名及び所在地は甲府市千塚三丁目7番地である。墳丘の直径は約60mの円形を呈し、高さ約7m、石室全長16.75m、奥壁巾3.3m、羨門巾1.75m、玄室長9.38m、玄室入口巾2.2m、玄室高3.2mの規模があり、石室は右片袖型である。墳丘上からは埴輪(円筒、太刀、橋、馬形、武人)破片が発見され、石室内からは須恵器、丸玉などが出土している。これらの資料から本墳の築造年代は6世紀後半の年代が考えられている(第9、10図)

これに先行すると推定されている万寿森古墳は、加牟那塚古墳よりも東へ約1kmの湯村山南裾に位置している円墳で、南に開口する両袖型横穴式石室をもち、石室長14.2m、玄室長7.9m、奥壁2.44m、高さ3.3mである。奥壁から側壁は河原石の乱石積で構築されている。出土遺物が無いので石室構造から判断して加牟那古墳より右手の年代が想定されている。

これら荒川左岸の大型古墳群に対して、荒川右岸では10mを超える規模の横穴式石室を有する古墳は存在せず、最大の双葉町二ツ塚1号墳でも9.1mである。又、双葉町、竜王町に含まれる赤坂台古墳群は、無袖型長方形の横穴式石室を有するものが多く、加牟那塚古墳や万寿森古墳とは若干性格が異なるかもしれない。しかし、敷島町境の大塚古墳は左片袖型石室と推定され左岸の古墳群と関係が強い可能性がある。本無名墳(きつね塚)はこれらより後出であることが、出土土師器・須恵器の編年観から推定され、7世紀前半代におくことが可能であろう。

いづれにしても、こうした古墳群の石室構造及び出土遺物を詳細に対照して各古墳群の成立基盤を探る必要があろう。特に赤坂台古墳群は消滅した古墳が多いので、現存する古墳の調査と保存が望まれよう。

(参考文献)

山梨県中央道埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書—北巨摩郡双葉町地内1—、1978

山梨県中央道埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書—北巨摩郡双葉町地内2、中巨摩郡竜王町地内 1979

(註)

- (1) 加牟那塚古墳の実測図は昭和45年12月に石室入口部修理に先行して測量したもので、青山学院大学教授吉田章一郎先生の御指導のもとに文化財主事末木健及び明治大学学生が作業を行った。
- (2) 本古墳の報告にかかる図面整理は、宮沢公雄（現山梨文化財研究所第1研究室長）と末木が行った。

無名墳（きつね塚古墳）出土遺物
対照表（第6図遺物出土位置図）

1	金環	16	玉	31	玉	46	土器
2	"	17	"	32	玉	47	刃子
3	鉄	18	金環	33	玉	48	玉
4	刃子	19	鉄	34	鉄	49	土器
5	鉄	20	"	35		50	金環
6		21	刃子	36	玉	51	鉄
7	鉄	22	土器	37	玉	52	"
8		23	"	38	刃子	53	"
9	鉄	24		39	玉	54	"
10	"	25	金環	40	玉	55	土器
11	"	26	鉄	41	鉄環	56	鉄
12	"	27	"	42	玉 2	57	"
13	土器	28	"	43	玉	58	金環
14	金環	29	金環	44	管玉	59	鉄
15	金環	30	玉	45	紡錘車		

図版1 きつね塚古墳遠景、全景



図版2 きつね塚古墳 石室発掘状態



図版3 きつね塚古墳 発掘作業風景、遺物出土状態



山梨県埋蔵文化財センター調査報告 第25集

金の尾遺跡
無名墳(きつね塚古墳)

印刷日 昭和62年3月20日

発行日 昭和62年3月31日

発行所 山梨県教育委員会

印刷所 温故堂株式会社

